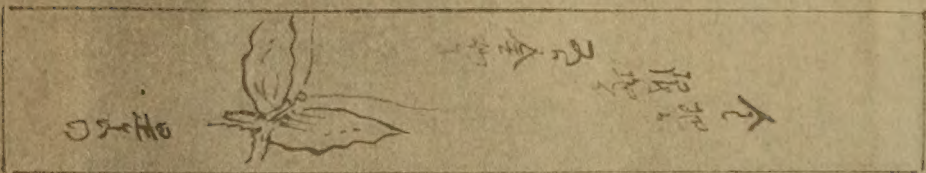
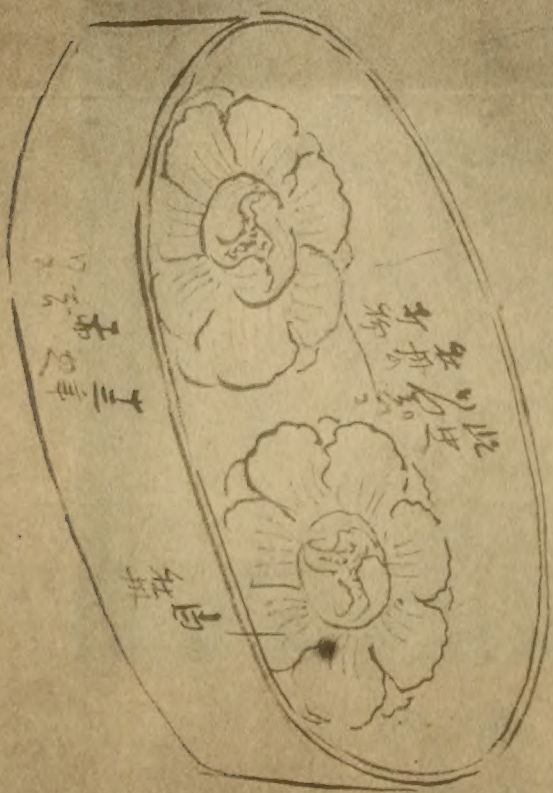
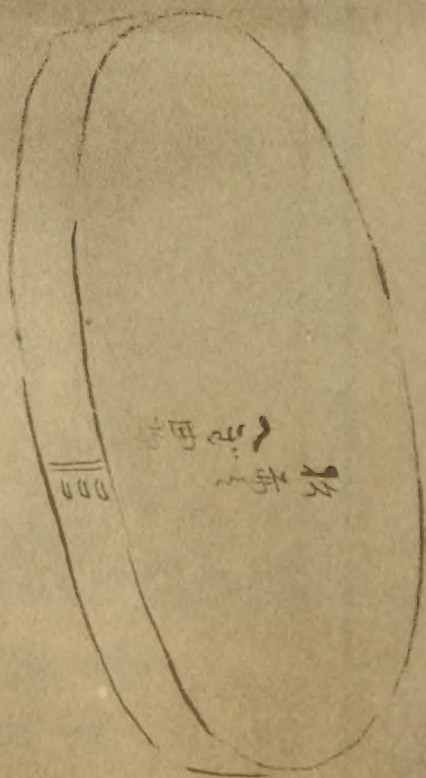
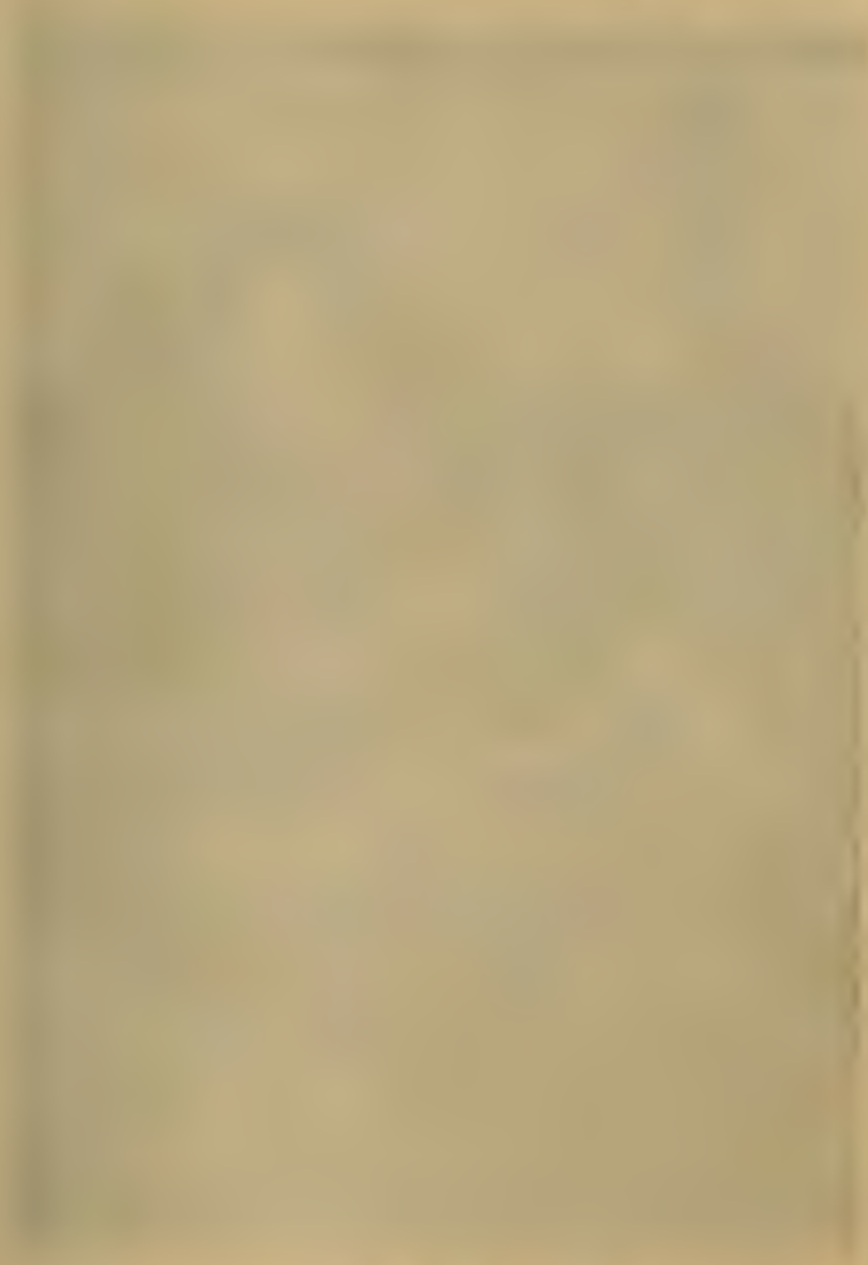
漱石全集

第廿二卷

解説

これは作者が趣向を凝らした時の考案圖である。高島屋の十三回忌といふことが明記されてあるから、先代の名人と言はれた市川小團次の十三回忌法要に際して配り物・の考案を依頼されたものと見える。圖に附した説明によつて見ると、「杉赤み」の「へぎ曲物」でも「杉析でもよろしく」、「此中へいつぱいに牡丹の打物」の菓子を入れる。「白牡丹」にするか「十三年ゆへ赤ではいかゞ」といふのである。それに添へる「戒名年號月日、十三回忌、高島屋」と記すのに工夫を施して、「此中へ短册をいれる」ことゝし、短册は「金地か、銀地か、又は金砂子」にして、柴田「是眞」に蝶々を一羽畫いて貰ふ――といふ趣向のものであつたらしい。これが實際に用ゐられたかどうかは明白でない。先代小團次の十三回忌とすれば、明治十一年頃のことであつたらうと思ふ。

缺皿の仇討　（豊原國周筆）

天目須之助（中村芝翫）　缺皿姫（澤村田之助）　荏柄眞吉（市川九藏）

河竹糸女補修

河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集　第廿二卷

東京　春陽堂刊行

默阿彌全集　第二十二卷目次

挿繪目次

御定連御贔屓楯再出來穐讀切講釋

扨大寄の大敵を小勢で向ふ修羅場の舌戰繰出す備の狂言も及ばぬ智恵の猿冠者が左枝吉野が密通を執成す清洲の城中閑者をいれし山口が企みも遂に水泡と消行く犬清が妻の自殺に門出の曲舞憂目に扇の骨くだく幸内おさみが拷問に屠所の歩みの未の刻此世を卑の七ツ子が助る命に自身の白狀あつぱれなりけり水間が戰死におくれぬ三浦が打死の袖に小萩が涙の雨しのつく降に小平太新助突込む鎗の熟し柿是迄なりと氏基が我手に首をかき落す其實檢の功名に歸參を悅ぶ園生の前敵へ情に春永の恨みも晴れし朝霧とともに手向の權阿彌陀佛死亡をとむらふ此下が大法會に岡島の再會やくす兜の餞別しかも世界は小田館

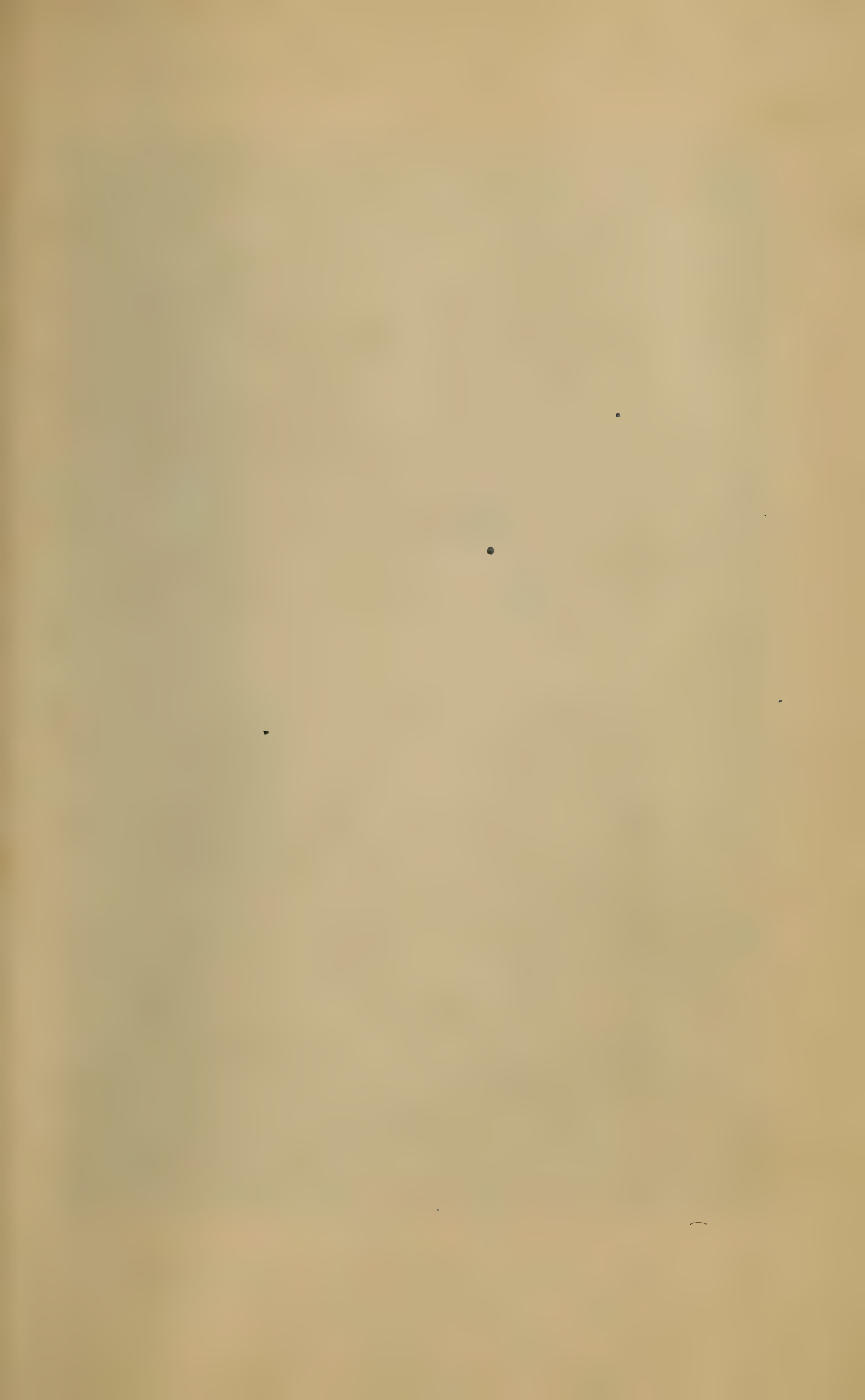
太平諷曙若武者競凱陣之榮

猨間軍記咀海錄

『桶狹間軍記』は明治三年八月守田座に書きおろされた、作者四十九歳の時である。名は桶狹間であつたが、維新の際に於ける上野戰爭を當て込んだもので、その意味に於て時人の喝采を博したといふ。また作中に描かれた能師水間左京之亮一家の悲劇は、上野戰爭の花形とも稱すべき天野八郎を寓したものとして喧傳され、これまた評判になつたといふ。郡幸內の件は五世菊五郎の演技によりて特に好評を得、此の件だけは獨立して屢々復演されてゐる。これも尾張傳內の傳說を取り入れたものであつた。「南岩寺松原の場」は稿下當時にはなかつた場で後年添加されたものである。明治三十四年伊庭想太郎が星亨を刺した時、刺客幸內に寓して演ぜんとしたこともあつた。

書きおろしの時の役割は五世尾上菊五郎(郡幸內、水間左京之亮)、三世澤村田之助(幸內妻おさみ、三浦采女之助義晴)、澤村訥升(左枝犬淸、岡烏五郎三郎正行)、中村芝翫(此下東吉郞)、岩井紫若(腰元吉野、氏基妾朝霧)、市川左團次(小田春永、葛山彈右衞門、郡新助秀次)、中村仲藏(山口九郎次郎、能師三輪左近、蘆久保權阿彌)、澤村其答(園生の前)等であつた。

挿繪にしたのは、豐原國周筆「楳幸百種」の內郡幸內(五世尾上菊五郎)と、繪草紙に描かれた桶狹間合戰の場とである。

梅幸百種之内

狹間軍記鳴海録（桶狹間合戰――六幕）

序幕

清洲城中の場
同能舞臺の場

［役名――小田春永、此下藤吉、左枝犬清、山口九郎次郎、石塚軍藏、林左太郎、百姓大八實は今川の家臣香取小平太、茶道祐甫。奥方園生の前、腰元芳野、同立田、其他。］

（清洲城中の場）――本舞臺後ろ淺黄幕、正面柵矢來、木瓜の紋付きし幕張、上の方に木戸、兩扉を開き、左右の柱に八幡宮と記せし高張二本建て、此の後ろ諸所松の木立、日覆より同じく松の釣枝下手に埒を結び、此内に二本足の高札、是れに「城内へ通行を許し候間八幡宮へ勝手に參詣を致すべきものなり」と記し、上下草土手の高き石垣の張物にて見切り、よきところへ大床几二三脚、毛氈を掛け並べあり、總て清洲城中庭口、八幡祭禮の體。爰に大八、淺黄頭巾やつしなり、手甲脚袢草鞋百姓の拵へ、〇□菖蒲革股立の拵への足輕にて、六尺棒を持つて立ち大八をさゝへ、上手に石塚軍藏、林佐次郎、衣裳上下大小にて、床几に掛り、此の後ろに足輕四人、やはり菖蒲革股立にて、六尺棒を持ち控へ、此の見得早き大拍子にて幕明く。

大八　こりや、なんとなされまする。

○　なんとするとは知れたこと、最前より汝が振舞、心をつけて窺ふところ、此の御城内を幾度か通行いたすのみならず、

□　御要害の詰め〴〵を、落もなく目を付くるは、必定われは紛れ者、詮議がある故、

兩人　とゞめおいた。

大八　是はまた思ひもよらぬお疑ひ、見るから知れた土百姓を、紛れ者とは失禮ながら、あなた方のお目違ひ、かやうな繁華な御城下と事替り、片田舍に育ちました私故、此の結構な御城内を見る物事に珍らしく、在所へ戻つて話すも土産と、幾度となく通行いたし、落ちもなく拜見いたしましたは、それ故のこと、決してうろんな者ではござりませぬ。

ト兩手を突き詫びる、軍藏思入あつて、

軍藏　いかさま、片田舍に育ちし土民、かやうな御場所へ參つたら、こりやさうありさうなことだ。既にわれ〳〵でさへ、初めて都在番に登りし折は、見るものが珍らしく、四五日はうか〳〵と無駄に日を暮らすと同じ道理、そこを思へば高が土民、さして疑ふ程な儀でもあるまい、許してやるがようござらう。

佐太　然しそれとこれとは事の相違、今戰國の世の中故、いかなるものが姿をやつし立入るまいものでもなし、さある時は大事の前の小事、たとひ賤しき者たりとも一應の詮議も遂げざる內、此の儘許し歸せし後にて、小田家に急變出來いたせば、御主君は申すに及ばず、臣下の者はお互ひにわれ〳〵までが身の破滅。

軍藏　でも、みす〳〵土民と知れたる者を。

佐太　さあ、そこがたとへの念に念、殊更もつて此の節柄、昨日の敵はけふの味方、移り變るが人心、たとひ味方の者たりとも、なか〳〵油斷は、

軍藏　や。

佐太　いやさ、油斷大敵、土民とて詮議いたさぬ其の內に、許し歸すは役目の越度、滅多に容赦は仕らぬ。

軍藏　はてさて、御念の入ることだ。

ト大八と顏見合せ思入あつて控へる。

大八　そんなら此の上私に、まだ御詮議がござりまするか。

○　おゝ詮議どころか品によれば、生けてはおけぬ汝の身體、それともその身の素性をあかし、降參

をすることなら、そこはまた御上の御慈悲。

□　虜となつて窮屈でも、三度々々据膳で樂に暮すが死ぬよりましだ、白狀すればその通り、言はぬに於ては、

兩人　拷問しようか。（ト立懸るを、）

大八　まあ〳〵待つて下さりませ、實もちまして土民の私、白狀しろとおつしやつても、身に覺えのない事なら、申上げることもなく、また御城內を見歩きましたは、一向勝手を存じませぬ故、お惡いことならどのやうにも、御詫びことをいたしますれば、どうか早御役人樣、御免なされて下さりませ。

佐太　全く勝手を存ぜぬとあれば、許してくれまいものでもないが、して片田舍に育ちしと申すが、そちやいづれの者ぢや。

大八　へい、私は駿州。（ト立ちかゝるを、）

軍藏　あいや、數萬人がかやうに參詣すれど、他國の者は一人も居らぬ、皆當國の者ばかり、定めてそちも當國の者であらうがな。（ト大八に呑込ませる。）

大八　へえゝ、成程、へい私は、當國の者でござりまする。

佐太　當國はいづれぢや。

大八　へい、當國はおゝそれ、有松の者でござります。

佐太　有松とあれば當國なれど、そちが詞は駿州訛り。

大八　や。

佐太　いよ／＼以て胡散な奴、こりや此の儘には許されまい。

大八　あもし／＼、それは斯樣でござりまする、子供の折駿州へ奉公に行つてをりました故、ついあの國の訛が出ますが、全くは有松の者に違ひござりませぬ。御胡亂に思召すなら、私と御同道なされば分ることでござりまする。

佐太　やあその手は喰はぬ、ところによつては敵の中故、すべよく言ひ拔け此の場を脫れ、途中に於て逐電なさん企みであらうが、かく見出されしを此の上に、包み隱すは卑怯至極、さあ素性を申して罪に服すか。

大八　それぢやと申して、存ぜぬことは。

○　いやこいつ／＼、なか／＼しぶとい奴、一應では申すまい。

□　猶豫いたさず、引ツくゝり、獄屋へ召連れ、

兩人　詮議なさん。（ト立懸るを、軍藏いろ〳〵思入あつて、）

軍藏　いや、その詮議には及ぶまい。

佐太　そりや、又何故。

軍藏　されば、たとひいづれの者であらうと、鑑札なしに城中へ諸人を入れるけふの祭禮、さすればあの者が駿州であらうが、何處であらうが、詮議いたすいはれがない。

佐太　そりや仰せなくとも當國とは限らず、普く日本六十餘州他國の者の入込みあるは知れしこと故、それをかれこれ申すではござらねど、此の者は城中の御要害に心をつけ見歩きしは戰國故、敵の間者も計られぬ、詮議いたすは武門の習ひ、

軍藏　さ、よしや敵の間者にもせよ、それらに恐れて城中へかく諸人が入れられませうか、殊更けふは祭禮の御目出度、たとひ罪ある者にもせよ、人を惱ますは神への恐れ、只何事も穩便に見脱してお遣りなさるがよくござる。

大八　どうかはや、お慈悲を持ちまして、お許しなされて下さるやう、お願ひ申上げまする。

佐太　いゝや、某思ふ仔細もあれば、一應詮議せざる内は許し歸すことまかりならぬ。

軍藏　すりやかやうに拙者が申すを。

佐太　君の御爲、どなたがなんと仰せられようとも、此の儀ばかりは叶ひませぬ。
軍藏　さう言やいつそ。（トちよつと拔きかけるを、佐太郎留めて、）
佐太　すりや、貴殿には、土民の肩を。
軍藏　持ちはせぬが、一旦言ひ出す武士の意地、
佐太　それがしとてもまツ其の如く、
軍藏　互ひの言ひ條、
佐太　刀にかけても、
軍藏　一分立てねば、
兩人　まかりならぬ。（ト双方きつとなる、此の時花道の揚幕にて、）
呼び　我君の御入り。（ト兩人向うへ思入あつて、）
軍藏　思ひがけなき、我君の御入りとあれば、
佐太　此の場の趣意は後してのこと、何は然れ君の警衛。
○□　我々どもはお辻の固め。
大八　殿樣の御入りとござりますれば、見苦しき私は、

軍藏　御目障りになる、立て〳〵。

佐太　いゝや君の御入りでも苦しうない、その者それへ止めおけ。

○□　はツ。片よれ。

　　ト兩人六尺棒にて、大八を圍み、下手へ控へる。軍藏是非なく出迎へる、此の時花道にて、

呼び　御入り。

　　ト是れを誂への賑かなる出の鳴物になり、花道より春永、棒茶筅平絎一本ざしにて、庭下駄を履き小平太上下衣裳にて、春永の刀を持ち、奥方下げ髮、花櫛、裲襠衣裳にて、腰元に手を引かれ、跡に腰元三人附添ひ、祐甫坊主鬘十德茶道の拵へ、侍三人何れも上下、衣裳大小にて附添ひ出て、皆々花道に留り、

春永　春風一度に發すれば、櫻花爛漫として雪に似たりと、四季の眺めを一時に見る心地せる前栽の正八幡も今日は、臨時祭りの賑ひに、賤のありさま見まほしく、且は此の身の心願をかけまく越せし春永が、武運祈りの此の參詣。

小平　そのお供をば蒙りて、神の利益を請太刀の遲れをとらぬ願籠も、及ばぬことゝしらにぎて、小田家のはやり男香取小平太。

園生　君の御社参にわらはまで、今を盛りの櫻花、開く武運にあやかるやう、その御武運の御願ひも女子の口に跡や先、遅れて四方の眺めさへよしや園生が名によれる、心清洲の此の庭先き。

腰元　ほんに奥様の仰せの通り、咲きも残らず散りもせず、盛りの花の見事さは、

二　御屏風や御襖の、繪に見し景色で覺えある、

三　吉野とやらも及びなき、御庭前の御物好き、

四　御殿で見るとは又格別、よい眺めでござりまする。

祐甫　愚僧は又景色より奥女中方の御器量に、うつゝをぬかしうか〱と、お庭石に躓いて、松の枝と鉢合せ、額の瘤でお備へ天窓、内へ歸つてかみさんに何と祐甫はとんだ罰、

侍一　その介抱に掛り合ひ、水で揉むやら印籠の藥もみんな種切らし、けふのお供の氣保養も、それにかゝつて、ちや〱むちやく。

二　身共はそれに取りあはず、神酒頂戴の千鳥足。

三　此の亂國の世の中に、是れが所謂命の洗濯、

四　けふの遊山で長らくの、軍勞れも忘れた心地、

小平　是皆我君の御恩澤、ありがたき仕合せに、

皆々　存じ奉ります。

ト悦びのこなし、佐太郎軍藏兩手を突き、

軍藏　これは〳〵我君樣には、存じよらざる御入らせ、取りあへませず石塚軍藏、

佐太　林佐太郎、これまでお出迎ひ、

兩人　仕つてござりまする。

春永　おゝ、出迎ひ大儀、

佐太　何はしかれ、我君には、

兩人　いざまづ、是れへ。

春永　皆も一緒に。

皆々　まづ、お越し遊ばされませう。

トやはり右の鳴物にて、春永先に此の人數殘らず本舞臺へ來り、春永奥方は床几にかけ、その外は平舞臺へよろしく住ふ。軍藏は上手佐太郎は下手へ住ふ。

軍藏　はゝ、我君始め奥樣には、今日は臨時御祭禮に付き、

佐太　御城中の弓矢の守護神、八幡宮へ、

兩人　御參詣遊ばされましたか。

春永　おゝ、武運長久の祈念に奥諸共、社參いたせしが、平常とは事替つて、今日は園生、よい慰みであつたなあ。

園生　仰せの如く今日は、我君の御許しにて、御城中の者どもは申すに及ばず、町家の者まで參詣いたせば、一方ならぬ路次の賑ひ、物見で遊覽なすとは違ひ、一入興がござりました。

小平　取分けけふは我君の思し立ちにて、貴賤上下の隔てなく、御城内への通路御許しありし故、内珍らしき下々の者、悦び勇んで群集なすは、格別神慮に叶ふ道理と、我々におきましても、大慶至極に存じ奉りまする。

祐甫　いや八幡樣もお悦びであらうが、此の多い參詣では、御賽錢が澤山上れば、誰よりも神主殿が一番のお悦び、愚僧も半口のせて貰うたら、嘸お喜びであらうのに、一人占めとは氣が惡い。

腰一　又しても祐甫殿の株で仇口、是へ參る道すがらもほんにをかしい事ばッかり、それも徒然の時ならよけれど、けふのやうなお供の折は、外珍らしきわらは故、

腰二　いつそ心も浮き〳〵と、歩むを側から祐甫殿が、

腰三　てんがうをしなさんすと、悔しうてなりませぬわいなあ。

祐甫　是は大分風が悪い。
侍二　いやはや女中方、御茶道などゝ申す者は、實に氣樂な者でござる。
侍三　左樣、御供をいたすを、自身の保養と心得るは笑止千萬。
侍四　かゝる戰國の世には無益の輩。
侍一　そのうつゝ他愛もないものには引替へ某などは、お供をいたしてをりながら、かく亂れし世の中故、もしや我君へ對し、狼藉いたす者でもありはせぬかと、八方へ眼を配つてをつたせゐか、どうも目が勞れたやうでござる。
祐甫　殊にあなたはお產れ付、お目が餘程小さいから、一倍お骨が折れませう。
侍一　えゝ、何を申す。
小平　いや、おどけはさておき、實に油斷ならざる故、此の上とも、萬事に心をつけめされ。
侍四人　心得てござる。
○　それにつきましても最前より、此の所に控へ置きましたる、これなる土民、
□　こりやいかゞ計らひませうな。（トいふを冠せて、）
軍藏　えゝこりや〳〵、お尋ねもなきにづか〳〵と、下ざまの身を以て失禮千萬、控へてをらうぞ。

小平　いや〳〵、その儀は彼が申さずとも、最前よりあれに控へし賤の男、心得ずと思ひをりしが、いつたいかれは何者ぢや。

軍藏　八幡宮へ參詣のものにござりまする。

小平　何故彼れは控へさせしぞ。

佐太　その御不審御尤もには候へども、あの者こそ先刻より御城中を、幾度となく通行なし、御要害の詰め〳〵に目を附け歩く怪しき者故、詮議なさんと留め置きましてござりまする。

春永　むゝ、すりや、あの者が。（ト思入。）

軍藏　それ故最前よりおきまして、種々詮議仕りしに、全く彼めは土民に相違ござりませぬ。

小平　いや〳〵、それがし篤と見受けし折、彼が面體その骨柄、どうか一癖ありげな奴、なか〳〵もつて一應や再應の詮議にては知れますまい。

侍一　此の上は某が、日頃覺えの腕前にて、彼奴が節々へし折つても、怪しき身許をほざかして見せ申さん。

近習三人　いでわれ〳〵も、

ト侍一はじめ、近習三人きつとなつて立懸る。

大八　あゝもし〳〵、私は決して左樣な胡亂なものではございませぬ、先程より申しまする通り、有松に居りまする絞り職人にござりまする、どうか御疑ひをお晴らしなされて下さりませ、御慈悲でござりまする。

ト手を合せて拜む、園生の前思入あつて、

園生　むゝ、すりや其の方は職人にて、絞りをいたすものなるか。
大八　左樣にござりまする。
園生　その職にしては、手先が藍に。
大八　えゝ、いえなに、是はかやうに御祭禮見物又は餘所へ參りまする節は、灰汁で手先を洗つて出ます故、此の樣に綺麗でござりまする。
祐甫　ほんに是は奧樣などの御存じないことなれども、手前の親類に紺屋がござりまする故、承つてよく存じて居りまする、此の者の申上げる通り、灰汁で洗へば綺麗に落ちまする。そこでどうか御疑ひの節も、蛇の目を灰汁で洗ふやうに、綺麗さつぱり濟ましておやりなされたら、いかゞでござりませうかと存じまする。
腰一　こりや祐甫殿の申上げる通り、見るから知れた賤しきもの。

腰二　殊に絞りの職とあれば、是れを御縁に御用向き、
腰三　私共も部屋着の浴衣に、なんぞ好んで誂へたいもの、
腰四　並の絞りのその外に、さぞ珍らしいのがいろ〳〵あるで、
四人　あらうなう。
大八　いえもうある段ぢやあござりませぬ、先づつい通りが、らせん鹿の子に養老柳、てつぽう麻の葉、きしやご絞りになまこむきみ。
祐甫　あゝこれ〳〵あさりがあるなら、汁の身に日の字ばかり買ひたいものだ。
大八　御笑談ばかりおつしやりまするわえ。まづそこらがつい通り、その外にお好みでござりますれば何なりと外で出來ぬ絞りでも、私へ仰せつけられますれば、見事に仕上げてさし上げまする。
トいろ〳〵に乘つていふ、春永思入あつて、
春永　こりや其の方は、なか〳〵絞りは名人と相見ゆる。
大八　いやもう、かやうに申上ぐれば、どうか自慢のやうにお聞取りもござりませうが、恐らく有松鳴海をかけ、絞り職人も多い中で、人に出來ぬ絞りをいたすは私一人でござりまする。
春永　左程名譽の汝なら、慥かに存じをる筈故に尋ぬるが、一說に鳴海と申す絞りは、巾にその數極り

あるよし世俗に申すが、ありやいくつ程あるものぢや。

ト大八ぎつくり思入あつて、ぬからぬ體にて、

大八　へい、それは布巾に廣い狹いがござりますれど、數に定りはござりませぬ。

春永　なれども、凡そ何程といふ、數の定めがあらうがな。

大八　さあ、それは。

春永　存ぜぬか。

大八　さあ、職分でありながら、知らぬと申しては濟みませぬが、是が所謂燈臺元暗しとやら、

ト言ひかけるを冠せて、

小平　やあ、その言譯暗いく、おのれが職にありながら、數を知らぬは僞り者。

佐太　正しく敵の間者に疑ひなし、

侍一　もう此の上は、猶豫はならぬ。

○□　いで、引くゝつて詮議なさん。

春永　いゝや、詮議に及ばぬ、許し遣はせ。

佐太　でも、胡亂な曲者故、

春永　はて、おのれが職さへ知らぬ奴、絞りの絲のしめくゝりも、是では必定拔け目勝ち、かやうな者を召遣ふ主人の家も鳴海の果ぞ。

大八　や。

春永　憐れな奴ぢや、許してやれ。

佐太　ぢやと申して、底意の知れぬ。

園生　是はしたり我君が、あのやうに仰せあるは、深い思召しあつての事、それをもどけば忠義が却つて不忠になれば、御意に隨ひあのまゝに、必ず共に氣遣ひない。それ、あの者を、早う戻してやりや。

軍藏　はツ、それお二方樣より御許しが出た、早く此の場を立て〳〵。

大八　左樣なら、もう參つてもよろしうございますか。へい〳〵それはまあ、有難うございまする。

祐甫　ほんに貴樣は命拾ひをしたのだ、此の詫事の口開きは愚僧だから、御手前ものゝ絞りの一反も持つて禮に來るがよい。

大八　いやもう、上げる段ではございませぬ。（ト立ちながら少く下手へ來り）たとへの通り、似たものは夫婦とやら、春永公といひ奧方迄、揃ひに揃つた大器量、御胸の内が。

春永
園生　や。
大八　いや、内で案じて居りませう。どれ、御暇いたしませうか。
　　ト此の内軍藏早く行けといふこなし、大八思入あつて、下手へはひる。
祐甫　やれ〳〵籠を放れた鳥のやうに、嬉し喜んで行きをつた。籠を放れた鳥と申せば今日は八幡宮御臨時祭に放生會、鳥よりは人一人お助けありしは何よりの御功德でござりまする。
園生　その功德より今日は、八幡宮御臨時祭に付き、お庭に於て猿樂のお催しも、家來のものや女子達に見物させ、悦ばせんとある我君の思召し。
春永　お能掛りの奉行は是なる小平太、用意萬端整ひあるか。
小平　手づかへなきやう申し付け、最早御能興行に相成りませう。
腰一　それはまあ有難い思召し、そしてお勤めなさるお方は、
腰元
四人　どなた樣でござりまする。
小平　役者は左枝犬淸殿に、能師三輪左近が二人の娘吉野、立田どのにござりまする。
腰元
四人　こりや見物事でござりませうわいなあ。
侍一　まだ女中衆の悅ぶは、その間の狂言を、某が勤めます。こりや見物事でござらうがな。

腰元四人　少しも見たうはござりませぬ。
侍一　これは御挨拶。
園生　是はしたり、その樣な事は取りおいて、もはや御能の刻限であらうぞよ。
小平　何さま先刻より餘程の暇入り、いざ、我君には設けの御席へ。
春永　おゝ、參るであらう。（ト立ち上らうとするを、）
佐太　あいや我君、暫くお待ち下さりませう。
春永　なんぞ用事か。
佐太　はッ、別儀でもござりませぬ、若輩なる身をもちまして申上ぐるは嗚呼がましうござりますれど今足利天下の威勢次第に衰へ、諸國に干弋暇なきも、皆おのれが武威に伏させ、あはよくば日本を掌握なされん列侯の志し、近くは駿州今川氏基、相模に北條、甲斐に武田、美濃に齋藤、近江に佐々木、弓手馬手に敵を持ち、油斷ならざる戰國なれば、要害堅固になすべき城中へ濫りに諸人の通行を許しあればこそ、只今の如き怪しきものも立入る道理、甚だもつてよろしからず、何卒此の儀を聞しめしわけられて、八幡宮へ參詣をお止めあつて然るべう存じまする。
ト思込んでいふ。春永思入あつて、

春永　そちが申條はさることながら、たとひ城中を見せたりとも恐るゝに足らず、それらのことに心配いたすな。

佐太　ではござりますれど、油斷大敵、御用心に御用心こそ肝要にござりますれば、何卒御許容下さるやう偏に願ひ奉る。

ト是にて春永むつとなし、

春永　やあ、又しても詞を返す無禮もの、再度申すな、聞く耳持たぬぞ。（トいたけ高にいふ。）

園生　その御憤りは御尤もには候へども、何を申すも若輩にて平生の氣質故、忠義一途な心より君を大事と思ひつめ、御心にさはりし事を申上げしは、わらはがお詫びいたしますれば、御免なされて下さりませ。

小平　身不肖ながらそれがしも、共々御詫び仕れば、何卒御心なだめ下しおかれるゝやう。

腰元四人　數なりませぬ、私共に致るまで、

侍四人　一同御詫願ひ上げ、

皆々　奉ります。

春永　奥をはじめ皆の者の詫び故に、今日はさし許すが、重ねてはその分にはさしおかぬぞ。

佐太　たとひ御不興蒙るとも、君の御爲めお諫め申すは臣下の役、まだ此上に何程のお咎め仰せつけらるゝとも、御許容さへ下さらば、いつかな厭ひは仕らぬ。

祐甫　これはしたり林氏、我君がお用ひないとおつしやるを、貴殿のやうに言はるゝと、それではどうか强諫のやうに聞えてよくござらぬ、餘り心安立てが過ぎると、得て常談から駒が出ます、ほんに常談ではない、とても御主人にはかなはぬから、恐入つたと降參してしまはつしやれ。

佐太　えゝ何を申す、汝ら如きが存ぜぬことだ、控へてゐようぞ。（トきつといひ、春永に向ひ）さあ我君御許容下さるか、いかゞでござりまするな。

春永　やあ、まだ〳〵申すか、不屆き奴、目通り叶はぬ、きり〳〵そこを立つてうせよ。

トきつといふ、軍藏しすまし顏にて、

軍藏　我君の御意だ、お立ちなされい。

佐太　いゝや、上意を背く不忠者、立たぬとあればそれがしが。

トきつとなつて立ちかゝる、此の時花道の揚幕にて、

山口九郎　あいや、暫くお待ち下され。

皆々　なんと。

卜訛への鳴物になり、花道より山口九郎次郎、燕手、上下、衣裳大小にて出來り、春永を見て花道へ
平伏し、

皆々　貴殿は山口九郎次郎どの。

春永　予が申附けて、目通りを立たすを、何故あつて止めしぞ、近う參つて仔細を申せ。

九郎　然らば、御免下さりませう。（卜本舞臺へ來り、下手へ住ひ、）先刻より此の場の樣子、あれにて逐一承りしが、我君へ對し是なる佐太郎、御諫言の申上げ、却つて御不興蒙りしも、恐れながら我君には何か御心惡しき折柄、その場合を心得ざるは若輩だけなれども、一旦思ひ詰めたる諫言を御許容なきその內は、たとひ御咎め蒙るとも、若として此の場を去らぬ、大丈夫なるその心體、末頼もしき若者と、感ぜし故に思はず知らず只今の高聲、恐入つてござりまする。（卜始終思入あつて佐太郎に向ひ、）いやなに林氏、其許の申さるゝ所、尤もにはござれども、何を申すも主と臣殊更もつて大器量の我君なれば深き思召しのある事ならん、それを强ひて申さるれば、お身の爲にならぬ故、最早思ひ止られよ。

佐太　ではござりますれど。

九郎　はて、一旦かうと御意あれば、是非を論ぜず御許容なき君の御心御存じながら、再三申すはよろ

しからず、此の場は此のまゝお控へ召され、跡にて拙者が折を見合せ、其許の御心配の儀は御止め申し上ぐるでござらう。

園生　九郎次郎が詞に隨ひ、その方は此の場を立ちや、わらはとてもとも〴〵に、そちが存念立つやうに、御前を執成し遣はす間、猶此の上にも御不興を、蒙らぬうち早く立ちや。

佐太　左様なれば、此のまゝに。

九郎　おゝ、長居は恐れ。

園生　少しも早う、

佐太　はゝあ。

ト是非なく立つて、下手へはひる。祐甫軍藏跡を見送りこなしあつて、

祐甫　さて〳〵生若輩な身を以て、小さし出た青二才め、愚僧が親切に言つて遣すを、汝ら如きが存ぜぬ事、控へてをらうなどゝ御大層な事をぬかしをれど、さういふおのれが何を存じて、ざまを見たがよい、とう〳〵おのれが控へをつた。

軍藏　いや、あの様なものにはお構ひないがよくござる。所謂あれが盲蛇、譜代恩顧の方々も、是に並居るその中で、我一人侍のやうにぬきん出てゝの今の一言、いやはやかたはら痛い儀でござる、

ムヽハヽヽヽヽ。

小平　是はしたり軍藏どの、御前に於て高笑ひ、失禮千萬、ちと嗜みめされ。

軍藏　はツ、恐入つてござりまする。

九郎　殊更もつて忠義一途の林氏、蔑せらるゝはよろしからず、臣たるものゝ常として、御所業に缺けたる事がある時は、命は投げうち、只今の如く御諫言申上ぐるが家來の役、分けて此の度の儀は品によれば我君の御大事とも相成る事故、打捨て置くは不忠の至り、これらの儀はそれがしが申さずとも御合點ながら、諸事君臣の道は林氏が手本なれば、その元始めいづれも方にも、以後御心得あつてよくござらう。

侍一　山口氏の御教訓、われ〳〵が心魂に徹し、

侍四人　忝うござりまする。

ト此の内春永思入あつて、

春永　思へば戰國の習ひとて、諸事家來共の心痛察し入る。それに就き山口、ちと其の方へ申し談ずる一儀あれば、許す、近う。

九郎　はツ。（ト少し前へ進む。）

春永　餘の儀でもないが、噂を聞けば今川氏基上洛あるよし、察するところ今北條と和睦なし、武田とは義を結び、縁者とあれば誰あつて、隣國は皆小身故、兩家と水魚の仲なれば、その武威に怯ぢ恐れ、跡を襲ふ者なきと見、侮つての上洛と此の春永は推察いたした。

九郎　仰せの如く此の程よりその噂區々ながら、それも只風聞とのみ心得まするが、京地まで登るには途中に一國一城の領主あれば、今川勢何程の勇あるとも、たやすく上洛は相成りますまい。

春永　いかにも汝が申す如く、一國なれど武門の習ひ、その儘には通されぬ。

軍藏　なれども人の噂さに承れば、十萬の人數を引率して登るとあれば、迂濶に手出しをいたすより信義を結び、和睦をなさるが上分別かと存じられます。

祐甫　左樣々々、あつちへべつたり、こつちへべつたり流行の世の中でござれば、名を取らうより德とやら、世に連れなければいけませぬ。爰らが、山口殿の仰せを守り、林氏を見習つて、是非とも和睦をなさるゝやう、我君を御諫め申さん。（トちよつと息込む。）

園生　こりや〳〵祐甫、いかゞいたしたものぢや、常とは替り大事の御評議、我君にも御心配のその中へ、茶道の身にてつか〳〵と、仇口も時による、ちと嗜んだがよいぞや。

小平　祐甫は軍事にかゝらぬもの故に、彼はともあれ軍藏事は、武士たる身を持ちながら、卑怯未練な

今の一言、こりや此の分には差しおかれませぬ。

春永　いや〳〵そちが評議、春永一人何程に思へばとて、家來のものゝ心進まぬ事は果して利あらず、こりや和睦と一決いたさうわえ。

小平　すりやおめ〳〵と。

春永　はて勝てぬ戰をいたすは無益、然し和睦をいたすにも、日頃不平の今川方へ、徘徊いたす者なくては。（ト言ひかけるを、）

軍藏　それぞ幸ひ山口殿が。

九郎　あゝいや、なに幸ひ山口、是に伺候仕るに、御和睦の儀一應の御相談もなく、取るに足らざる若侍の申上ぐる事をお採用は、近頃もつてお恨みに存じまする。殊に以て和睦の儀は然るべからず、たとひ氏基何萬の勢にて登るとも、當時武勇他に聞えし我君の御威勢にて、奇計をめぐらすものならば、御勝利あるは疑ひなし、必ず御氣遣ひ遊ばされまするな。

ト ばた〳〵になり、上手より侍一人走り出て、手をつかへ、

侍　はツ申上げまする、最早お能の支度調ひましてござりますれば、御別館へ御入りあつて然るべう存じ奉りまする。

春永　その知らせ待ち兼ねた、直樣立越し氣欝を晴らさん。
園生　殊に今日のお能には、御意に入りの犬喜代がシテとの事。
小平　取りわけ我君には、よいお慰みにござりませう。
侍一　殊に拙者のお狂言は、又格段、
祐甫　それぱかりは見度くない。
腰一　ほんに犬喜代さまのお能ばかりは早く見物。
腰元四人　いたし度う存じます。
小平　左樣ござらば我君には、御別館へ。
春永　山口そちも、共々に。
九郎　拙者めは御跡より、伺候仕るでござりまする。
春永　然らば皆の者、
軍藏　まづ御越し、
皆々　遊ばされませう。

ト唄になり、春永奥方先に、皆々上手木戸の内へはひろ、九郎次郎殘り跡を見送り思入あつて、あ

たりの小石を拾ひ、礫に打ちパッタリ音して、下手より以前の大八窺ひ出來り、九郎次郎を見て、

大八　山口どの。

九郎　こりや、（ト押へる。管絃になり、）今日八幡宮の祭禮によつて、此の城下の者どもに參詣いたさするを幸ひ、今川公へ内通なし、其許を呼び寄せしは、城中の樣子を見せんが爲め。

大八　仰せに隨ひ今朝より、殘る隈なく檢分なし、あらかじめ胸に覺え、詳しく圖面に認めて我君へ差上ぐる所存にて、すみ〴〵まで見物せし故に、最前の若侍に見咎められ、既に詮議に及ぶ所、其許には、かほど智勇兼備の春永を見限りて、何故に我主人氏基公へ隨身めさるな。大器量の小田春永、それと覺つて許されしは、深き所存あることならん。これにつきましても

九郎　その不審尤もながら、兼ねて氏基公へ申せし如く、我主人春永は名將なれども依怙あつて、近頃取立になりし此下東吉、草履つかみの猿面冠者を、二なき者のやうに思ひ、古參なる我はあるに甲斐なく無念の餘り、それがしが心底を打明けて氏基公へ心を寄せ、幸ひ此度上洛のその砌り裏切りなして功を立て、長く今川家の臣下となる我が所存。

大八　何さま君君たらずんば臣又臣たらずと、善惡共に武士の意地、御尤もなる儀でござる。それにつけても其許より、人質替りに送るとある、主人望みの彼の品は。

九郎 何さま、疾くより腹心の軍藏に申しつけ、けふの騷ぎに寶藏より盜み出す兼ての手筈。

ト上手より、軍藏袋入りの寶劔を持ち出て來り、

軍藏 山口どの、是にござりましたか、仰せつけられましたる彼の一品、首尾よく取り得てまゐつてござる。いざ、御受取り下され。（ト山口是を受取り、）

九郎 おゝ出來したく、あたりへ心を。

軍藏 心得ました。

ト あたりを窺ふ。山口は手早く袋の紐を解き、短刀を出し改め見て、

九郎 むゝ、まがふ方なき小田家の寶、蛙丸の短刀。

大八 すりや、あの、それが、

九郎 人質替りに氏基公へ。（ト出すを大八受取り、）

大八 拙者が慥に受取り申した。（ト拵へを見て、）はて、結構さうな金拵へ、定めて中身は。（ト拔きかけると蛙大分鳴く、）や、俄に蛙の鳴立つるは、

九郎 それぞ則ち刃の奇特、

大八 はてさて、不思議な。（トびつしやり納める、蛙の音留る。）

九郎　認め置きたる此の書面、此の一腰と諸共に、氏基公へ差上げて下せえ。

　　ト言ひつゝ懐中より密書を出して渡す。

大八　心得ました。（ト手早く劍を風呂敷に包み、密書を懐中なし、）然らば拙者は、是より直に。

九郎　急がッせえ。

大八　はッ。

　　ト件の風呂敷包を持ち、大八逸散に花道へはひる。九郎次郎跡を見送りにつたり思入あつて、

九郎　先づは是にて十が九つ、大望成就の小口に赴けば、やがて淸洲の此の城を、山口が手も濡らさず一足飛びに國主大名。

軍藏　さうなる時は身共も石取り、立身出世は目のあたり、

九郎　然し、事成就なすまでは、必ずともに覺られぬやう。

軍藏　心得ました。（ト此の内後ろへ以前の祐甫窺ひゐて、）

祐甫　うまいお話しでござりまするが、愚僧もお加へ下さるまいか。

軍藏　や、さう言ふ聲は。

九郎　かねて同意の茶道祐甫、事成就なすその時は、汝とても知行取り、

祐甫　その御褒美は又格別、愚僧もよつぽど肌を拔いでやらねばならぬ。
九郎　そちに賴み置きたる、腰元吉野が返事はどうぢや。
祐甫　いやもう、あなたのお賴み故、是まで間がな隙がな人目を忍び、こま〳〵と山口樣の思ひの丈を私が、辯舌を以て口說いて〳〵口說きぬきましたが、うんと言はぬは外に色がござりまする。
九郎　外に申し交せしものがあるとな。
軍藏　して、それは何者だな。
祐甫　御小姓の左枝犬淸どのでござる。
九郎　すりや、あの犬淸とな。（トむやくしきこなし、）
軍藏　いや、山口殿の御心にかけられたるを、橫番切つた憎い犬淸。とはいふものゝ吉野と犬淸は丁度似合の、よい釣合ひ。
祐甫　三輪左近は犬淸が能の師匠なれば、爰らの緣引でつい出來た仲と見えまする。
九郎　むゝ、して、それには何ぞ慥かな證據があつてか。
祐甫　あるのないのと、歷とした證據ものを、卷き上げておきました。
ト言ひながら、懷中より結び文を出し、

最前樂屋のどさくさ紛れ、計らず拾うた此の艶書、何と慥な證據でござりませうがな。
九郎　どれ。（ト取つて上書を見て、）「犬清様參る、よしのより」むゝ、すりや疾より彼等二人は。
祐甫　水も洩らさぬ仲と見えまする。
軍藏　こりや、そのまゝにはおかれますまい。
九郎　おゝ、此の返報は、今に二人を。
祐甫　罪に取つて落すといふ、何ぞよい、
兩人　御手段が。
九郎　これ。（ト兩人へ囁く。）
兩人　それが手短か。（ト此の時後ろより）
呼び　猿樂の始まり、
九郎　丁度猿樂の始まりとあれば。
祐甫　舞臺に於て、
軍藏　彼等に、
兩人　恥辱を。（ト大きく言ふ。）

九郎 あゝこれ。(ト押へゐを木のかしら、)ひそかに〳〵。

ト祐市軍藏あたりへ思入、九郎次郎件の文を見てきつと思入、此の仕組、中の舞にてよろしく、

ト此の幕網代塀の道具幕にて、管絃にてつなぎ、道具出來次第、此の幕を切つて落す。

幕

(同能舞臺の場)――本舞臺三間の間中足の二重、能舞臺正面一ぱいに松を畫きし板羽目、四方大盡柱檜皮葺の軒口、上下折廻し白木の高欄、緞子の揚幕をかけ、白木の高欄に竹を畫きし襖、下手橋懸り、板羽目の蹴込みよろしく、眞中に白洲階子、上の方網代塀、上下本物の根松を並べ、眞中にふさ〳〵と紅白の咲き分けの牡丹の枝二本立てたる石橋の臺、總て此の道具本行の道具の通り飾り附け、二重正面に囃子方五人、烏帽子素袍にて控へ、よろしく此の道具納まる。と直ぐ次第になり、

〽月の行方もこなたぞと、日の入る國を尋ねん。〽晴れ渡る空ものどけき久方の、天津こやねの二タ柱、三笠の森の松風に、枝もならさぬ景色かな〳〵。

ト此の文句の内、吉野文金の島田着附の上へ水衣、水晶の珠數を持ち出る。跡より立田、同じ拵へにて烏帽子を持ち出來り、

吉野　是は栂の尾の明惠法師にて候、我入唐渡天の志しあるにより、御暇乞ひの爲め春日明神へ參らばやと思ひ立ちて候。

立田　それ故南都に下向遊ばされ、此の傍にやすらひ候て、山々の景色を御覽候へ。

吉野　いや〳〵、早う參らうずるにて候。

〽都の山を後に見て、生野の道も春日なる野邊の草木も心なき、月にならびの岡の松、緣の空も長閑なる奈良の坂越えて、三笠山春日の里に着きにける。

ト兩人よろしく舞臺へ住ふ。

〽神託まさにあらたなる神のまに〳〵とゞまりて、神慮をあがめ居たりける。時しも天地鳴動し、山も崩るゝ如くにて、梢を鳴らす松柏の、木の葉を落す有樣は、凄まじくもまた恐しや、〽龍女が立舞ふ羽雲の袖〳〵、白妙なれや和田の原、拂ふ白玉立つは綠の色も映る海原や、沖行くばかり月の御舟の樣の、川面に浮び出れば三笠の雲にのり、とぶひの森も出て見よや。

ト犬淸好みの拵へ、龍頭を冠りよろしく本行樣の今樣あつて、よき程に下手揚幕より捕手六人袴股立にて、めい〳〵十手を持ち、ばら〳〵と出て、犬淸を取卷き、

捕手六人　動くな。

犬清　こりや何故に拙者めを。

侍一　御法を破りし左枝犬清、さあ尋常に。

六人　腕廻せ。

犬清　いかなる事か存ぜぬが、お能終るそれまでは、暫時御猶豫下されい。

侍二　御諚なれば猶豫はならぬ。

六人　覺悟いたせ。（トかゝるをちよつと立廻つて、）

犬清　拙者も上意で勤めるお能、君より直の仰せなら知らぬこと、さもなき内は此の犬清、いつかな繩にかゝり申さぬ。

六人　何を。

犬清　はやし〳〵。

〽尋ねても〳〵此上あらしの雨に乗りて、龍女は南方飛びさり行けば、龍神は猿澤の池の音波踏み立て〳〵て、その丈千尋の大蛇となり、天にむらがり地にわだかまりて、池水をかへして失せにけり。

トよろしく立廻りになり、犬清眞中に六人左右に別れ、きつと見得、此の時返し前の九郎次郎出て來り、

九郎　やあ、犬清吉野不義の兩人、此の上は某が繩かける、覺悟いたせ。

ト此の内能舞臺の揚幕より、返し前の春永先に、小平太園生、腰元四人、祐甫軍藏付いて出て、

春永　山口待て、いかなる儀か存ぜねども、そちが指圖と覺えし捕手、我意と僞る不屆き至極。

園生　我君の仰せを受け、お能を勤める犬清吉野、たとひいかなる罪あるとも、御遊興の妨げ、繩かけるとは何事ぢや。

小平　御二方の御不審、お答へめされ山口氏。

トきつと言ふ、九郎次郎思入あつて、

九郎　恐れながら、拙者自儘の計らひは仕らず、たとひ御上意下らずとも、不義は武家の堅き戒め、さすれば是れなる兩人の者、密通なせば大罪人、科ある故仰せも待たず、繩にかくるは我君の御爲かと存じまする。（トきつと言ふ。山口に向ひ犬清思入あつて、）

犬清　あいや山口殿、何を仰せらるゝかと思へば、それがしと吉野とが、不義いたせしとは、そりや何事。

吉野　此身にとつて露いさゝか、覺えないを不義者の密通せしなどゝは、お情ないあまりの言ひがけ。
立田　それは年中一緒にゐる、妹の私が慥かな證人、犬清樣と姉樣と猥らな事はなけれど、山口樣こそ姉上へ心をかけて私へ、執持つてくれと常々お賴み。
九郎　やあ、跡方もなきその一言、むゝ、扨は女の淺はかにも姉の罪を脫れさせんと此の山口に言ひがけひろぐな。
園生　いや、そりや言ひがけではあるまい、立田の申す如く、吉野に心をかけるは腰元共が常々噂。
九郎　口さが無きはしたどもが申上ぐるをお用ひあるは、近頃もつて御粗相千萬、それとも又慥かな證據がござりまするか。
園生　さあ、證據があらばそのまゝに、何の許しておくものぞいなあ。
九郎　證據なきは論にならず、憚りながら山口九郎次郎は、惰弱な武士とは違ひ申す。
　　ト犬清へ當て言ひ、肩で笑ひながらそしり顏をしてゐる。
春永　いよ〳〵もつて犬淸吉野、不義働らきしと申すには、何ぞ證據でもあつての事か。
九郎　はッ證據なきを何故に、不義者なりと申さうや、慥かな證據がござればこそ、かくの仕合せにござりまする。（ト懷中より返し前の艶書を出し、）犬淸へ參る吉野が文。

ト皆々へ見せる、吉野はハッと思入。

祐甫　然も嵯峨樣、紛れもなき吉野が手蹟、かゝる慥な證據があれば、よもや存ぜぬとは申されまい。

軍藏　たとひ證據はないにもせよ、たゞ人の噂と違ひ、疾うから知れた二人が素振り、川柳點にもある通り、氣があれば目も口程に物を言ひと、互にいやな目遣ひで、さかりのついた犬清のていたらく、ほんに〳〵癪に觸つて、水でもぶつかけてやりたいやうだ。

何は兎もあれ、かゝる證據のある上は、たとひ誰が贔屓しようと、又どなた樣が肩をお持ちなされうと、不義せし者を此の儘に許す時は、あと〳〵のお爲めにならねば、言はずと知れた二人は曲事、いやはや笑止千萬な儀でござる。

ト嘲笑ふ、小平太氣の毒なる思入にて、犬清のそばへ行き、

小平　いやなに、犬清どの、日頃より物堅き其許、決して不義いたづらなど、いたされし覺えはござるまいなれども、かゝる證據があれば、その申開きなさらぬ内は上の御不審。

立田　姉上にもその通り、あの玉章が峨嵯樣でも、同じ流儀を書くものは世間にはいくらもあること故に、若しやお前の手蹟に似せ、叶はぬ戀の憎しみにて、いやさ、申し憎いことなりとも、我身にはかへられませぬ。

小平　存ぜぬ儀ならば存ぜぬと、

立田　その身のあかり立つやうに、

小平　申し開きを、お二人とも、

立田　少しも早く、

二人　なされませ。

ト小平太は犬淸、立田は吉野へ詰め寄つていふ、犬淸吉野術なきこなし、

犬淸　朋友の誼みとて、拙者を庇ひ左程まで御親切なる御詞は、此の身に取つて何程か、忝なうはござれども、是れ皆主君の御罰にて、かゝる證據の出し上は今更包むに包み難き、我々二人が身の不埒。

吉野　女の口から申すのも、面伏せなる事ながら、ふとした若氣の誤りにて犬淸樣を思ひ初め、跡先見ずの心から、御法を破りお目をかすめ。

皆々　や、

犬淸
吉野　不義をいたしてござりまする。（ト小平太立田顏を見合せる、兩人はぢつとなる。）

小平
立田　すりやあの、いよ〱。

犬清　面目次第も、
兩人　ございませぬ。
ト差し俯く、小平太立田茫然と顏見合せる、九郎次郎祐甫軍藏と顏見合せ、三人しすましたりといふ思入にて、
祐甫　いやなか〳〵し太く、言ふまいと思ひの外早い白狀、然し痛い目をするよりは、その方が德用だ。
軍藏　二人が不義と極る上は、言はずと死罪は知れた事、その太刀取りはそれがしが。
九郎　あいや、我君の思召しを伺はぬその內は、決して私の計らひには相成らぬ。（ト春永へ向ひ）はッ、いよ〳〵不義と極まりし兩人、成敗の儀いかゞ計らひませうや。
春永　されば、女はともあれ犬清は、侍たる身を持ちながら、今戰國の世の中なるに、色に溺れ武士を忘れ掟を破りし憎き奴、跡々の爲めにも相成れば、きつと曲事申し附けねばならぬ。
九郎　何樣、吉野は高が女の事、犬清ばかり御成敗とは、こりや御仁情なる御計ひ。
吉野　いえ〳〵犬清樣と不義せしは、私より言ひかけし事故に、掟を破りし科は此の身、どうぞ御慈悲に犬清樣は、許して上げて下さりませ。

犬清　是はしたり吉野どの、たとひそなたが言ひかけしにもせよ、不義働らくは身の誤り、殊に拙者は男の事、御仕置受くるは此の犬清。

吉野　たとひ何とおつしやつても、元は此の身が悪い故、

犬清　いゝや拙者を、

吉野　わたくしを、

犬清　御仕置なされて、

兩人　下さりませ。（ト争ふ、九郎次郎むやくしきこなし）

九郎　やあ、兩人共無益の爭ひ、左程死にたく思ふなら、不義の科は言はずと同罪、吉野諸共死刑を相待て。此の上は猶豫いたさず、不義の兩人を急ぎ獄屋へ引立てい。

祐甫　心得ました。（ト祐甫は犬清軍藏は吉野へかゝる。）

兩人　きりく立たう。

園生　兩人待ちや。

兩人　でも、山口殿の言附なれば。

園生　すりや家來の山口が申す事は用ひ、妾が言ふことは聞かれぬか。

兩人　全くもちまして、

園生　左なくば妾が申し附け、控へいと申せば、控へをらうぞ。（トきつと言ふ。）

兩人　へイ。（ト是非なく控へる。園生思入あつて）

園生　棘ありと上部は見えぬ茨かな、戀に心の亂れ咲、おのれとあらはす戀慕の闇、いまだ御意の下らぬ內、吉野一人助けんと我意を以て計らふ山口、臣下のもの〻申す儀が、相立ちまする程なれば妾も強ひて犬淸の命乞をいたしまする、殊更以つて若き身に、不義いたづらはま〻ある習ひ、誰が指圖を受けずとも、皆御家來の事なれば、我君さへ御得心なら、否と申すものはない筈、それも武家の掟はあれど、そこは公專らに、妾のお願ひ我君樣、お叶へなされて下さりませ。

腰一　只今奥樣の仰せの通り、まだ若氣なる御二人故、

腰二　跡先の考へなく、御氣の毒にも存じますれば、

腰三　御法を破りしその段は、數なりませねど共々に、

腰四　御詫を申上げますれば、どうぞ御許し下さるやう、

腰一　偏にお願ひ、

四人　申上げまする。（ト春永思入あつて、）

春永　奥を初めそち達が詫びなれど、不義いたせし兩人をそのまゝにいたす時は、自然外々のものまでも猥に相成る儀、必竟これと申すも、こりや奥、その方が取締りあしき故、奥向に於て斯樣な事も出來いたすわ。

園生　恐入りましてござりまする。

春永　此の上は如何やう詫びいたせばとて、以後の見せしめ兩人とも、助けおかれぬ、予が手討にいたす。

園生　えゝ。

トびつくりなす、九郎次郎祐甫軍藏はうなづき合ひ、しめたといふ思入、春永此の體を見て、

春永　然し若年の彼等と申し、殊更今日は臨時とは申しながら、八幡宮の祭禮なれば、生けるを放つ放生會手討を許し慈悲を以て、勘當なるぞ。

九郎　なに、すりや兩人が命お助けあるとな。

春永　切つて捨てるも刀の穢れ。それ、急ぎ兩人とも追放いたせ。

祐甫　畏つてござりまする。(ト下手へ向ひ、)やあ下部共、是れなる兩人追放いたせ。

足輕　はツ。(ト下手より足輕二人割竹を持ち出で來り、犬淸吉野へ立ち懸り、)君の上意、きり〳〵立たう。

犬清　一命助け追放との御仁惠、ありがたう存じますれど、なまなか生恥さらさんより、

吉野　不義働きしわれ〳〵の、申譯には、

犬清　此の場に於て、

二人　さうぢや。

　　ト犬清は刀、吉野は差添を取り、兩人自殺しようとするを、小平太は犬清、立田は吉野を双方より留め、直にばた〳〵になり、花道より東吉、上下衣裳、大小にて、走り出來り、

東吉　兩人とも死ぬるに及ばぬ、暫く待つた。

　　ト言ひながらよろしくあつて舞臺へ來る。九郎次郎補甫軍藏と顏見合せ、惡い奴が來たといふ思入。

小平　貴殿は此下藤吉郎殿、折よい所へようこそ御出仕、何は然れまづ〳〵是れへ。

東吉　此の場の樣子逐一に、あれにて見聞いたせしところ、我君の御計らひ憚りながら東吉郎、恐入つてござりまする。

春永　時節を辨ぬ兩人なれども、手討を許し勘當申附けしぞ。

東吉　はッ御尤もなり不義の彼等、兩人死罪一等は武家の作法、一旦犯せる罪なれど、犬清殿は我君の御愛臣又吉野殿は御臺樣の御祕藏だけ、捨置く時は依怙なりと、そこらあたりの、ヘト九郎次郎を尻目

にかけ、」いやさ、そこらこゝらを思召し、御勘當さへなさるれば、御政道も相立つ道理。又兩人も此の場にて、一命捨つるはほんの犬死に、東吉が所存もあれば、我君の御意に隨ひ、一先此の場を立退れよ。

犬清　貴殿の御目にかゝるさへ、面目もなき此の身の不しだら、それを何のお叱りなく、御親切なる御詞を聞くにつけても恥入る拙者。いかなる天魔の魅入りしか、幼年より御側にて御高恩を蒙りしそのお惠みを忘却なし、申譯なき身のいたづら、いつの世にかは此の御恩、報ずる時節のあるべきか。

吉野　私とても同じこと十四の年より御側にて、取りわけ御恩を受けし身を、勿體ないお目を掠め、忍び逢ふ瀬のいたづらは、妹の手前も恥かしい。

立田　なんの私に恥かしいことがござんせう、その御遠慮も不義なりやこそ、表向きに婚姻して犬清樣のやうな殿御を夫に持てば、お前の身晴れ、また御臺樣の御恩送りは及ばずながら、けふからお前になり替り、妾が御奉公する程に、短氣を出さず世を忍び、御詫の時節をどうぞ待つて下さりませ。

園生　今立田が申す如く、必ず／＼二人とも無分別なことしやると、妾をはじめ東吉が、心も無足にな

る程に、早まつた事しやるな。それに吉野は取りわけて實の兄はあるなれど、幼い時家出なし行方知れずになりしとやら、跡に殘りし姉妹、どちらへなりとよい聟取らせ、安心して終りたいと父の左近が不斷の願ひ、たとひ妹は無事であるとも、そなたに若しもの事あらば、兄の成り行き娘の終り、いかなる因果なものなりと、親に誹りを受けさせるも、又天晴れな聟取りしぞと、褒めさせるもわが身達の心一つにある事故、必ず短氣な心を出さず、御詫の時節もあらう程に、その時こそはこりや吉野。（ト九郎次郎へ思入）けふの恥辱を雪ぎませうぞ。

トきつと山口へ意趣を返せといふ思入、吉野こなしあつて涙を拭ひ、

吉野　不義の罪ある私へ、御心籠めしその御異見、身にとりまして何程か有難いとも勿體ないとも、申さうやうない御情、さら／＼忘れはいたしませねど、何を申すも我々は、御主人方の御罰にて、かゝるうき恥さらす程な、身の上にござりますれば、なか／＼もつて人樣の御顏を見返すなんぞといふ、左樣な事はならねども、それに付いても私は、高が能師の娘故、家の恥辱もいとひませねどお氣の毒なは犬淸樣、系圖正しき御身をば名さへ吉野が仇花の、その戀風に誘はれて梅の實さへも結ばずに、尾羽打枯らす埋れ木の御身になりしも私故、思へば思ひ廻すほど、切ない此の身の心の内、憚りながらもし奧樣、御推量なされて下さりませ。

ト術なきこなしにていふ。園生の前聞いて怺へ兼ね、

園生　あゝ尤もぢや道理ぢやが、これ皆定まる約束にて、浮き沈みは世上の習ひ、又その梅、吉野の花も時節さへ來た事なら、再び咲す此下の、雨露の惠みに園生の手入れ、やがてその身の返り花、見事盛りを見せん程に、短氣な事してその木を枯らさず、何れの土にもその身をば、植直しておく時は、花盗人のさはりもなし。(ト山口へちよつと思入あつて、)心を樂に根を持つて、表向きはならずとも、內證にては妾まで、折あらば庭口から便りをしたがよいぞや。

ト少し憂ひの思入にて言ふ、春永不便だといふ思入あつて、氣を替へ、

春永　やあ、入らぬ事をくど／＼と、勘定いたせば緣なき兩人、便りは愚か我領分へ、足踏みさす事まかりならぬ、かやうな奴に構はずと、そちは早く奥へ參れ。

園生　左樣なれば我君樣。さあ、立田もおじや。

立田　はあゝ。

ト立田是非なく立つて、園生の側へ行く。兩人犬淸吉野に心の殘る思入にて、立上つてうろ／＼なし

春永　犬淸吉野、此のところに置くは我が目障り、少しも早く追放いたせ。

軍藏　畏つてござりまする。それ、追放なせ。

足輕三人　きり〳〵立たう。

ト割竹を叩き立てる。犬淸吉野せり立てる。兩人憂ひの思入にて、

犬淸　そんならこれが、

吉野　今生の、

立田　あれ、いまはしい、

園生　あゝこれ。（ト附廻してちよつと留める。犬淸吉野思入あつて）必ず安否を。

兩人　それ程までに。（ト寄るを足輕へだてゝ）

足輕二人　きり〳〵歩め。

ト三重になり、犬淸吉野是非なく立上る。園生立田腰元四人は能舞臺橋懸りの所へ行き、兩人を見送り犬淸是を見送ると、軍藏肩ひぢいからし見えぬやうにして跡から行く、舞臺花道とも名殘りを惜しむこなしあつて、トヾ双方はツと泣落し、思ひ切つて園生立田腰元四人は能舞臺の揚幕、犬淸吉野は足輕二人と軍藏に跡から追立てられながら、花道へはひる。九郎次郎思入あつて、

九郎　計らざる椿事出來いたせしも、只我君のお爲を存じ、彼等の不義を糺せしは、取りも直さず朋友を讒せし道理、忠あつて義に缺けし某なれば、お咎めなくとも今日より、きつと蟄し罷りあれば

何卒御沙汰下さりませう。
東吉　流石は山口九郎次郎殿、朋友の信を忘れざる天晴の一言、主君の爲めには親をも討つが武道の常
これらの義は些細な事、御遠慮あるにも及ぶまいと、それがしは存じまする。
春永　犬淸のやうなるものを、その儘に置く時は自然とその風儀が移り、我家の亂れとなる、それを見
出せし山口は我が爲めの大忠臣、咎めどころかその方に、唯今褒美を取らするぞ。
九郎　すりやお叱りと存じの外、さしてもない事御賞美あつて御褒美下しおかれんとは、拙者身に取り
何程か、大慶至極にぞんじ奉る。
祐甫　それにつけても詰らぬ者は、此の祐甫、二人が不義を見出した私、これが實に庇を貸して母屋と
やら、誠に詰らぬものになつた。（ト呟く、春永打笑ひ、）
春永　左樣であつたか、然らばそちにも褒美をくれるぞ。
祐甫　わたくしへも、それは〳〵有難い仕合せに存じまする。
春永　こりや小平太、褒美の品を、心得たか。
ト思入、小平太呑込み、
小平　畏つてございまする。（ト橋懸りへはひる、東吉山口に向ひ、）

東吉　さて山口殿、よき折なれば伺ひまするが、此度今川氏基上洛ある由、さある時には武門の意地、これにて喰ひとめ一戰に及ばねばなるまいが、その砌り貴殿には、これまでの御武功と申し、先陣いたされるでござらうな。

九郎　なにがさて、仰せまでもなく、一命掛けてその時は、防戰いたす所存でござる。

東吉　適れなるお心掛け、我君にも嘸かし御滿足、拙者におきましても祝着至極に存じまする。

ト舞臺の揚幕より袱紗のかゝりし服臺を持出て來り、山口の側へ置き、

小平　我君よりの下されもの、有難く頂戴あれ。（ト言ふ、山口兩手を突き、）

九郎　これは〳〵、拙者へ下されもの、有難く頂戴仕つてござりまする。

祐甫　定めて御品はお社祚か、但しは御紋服であらうが、愚僧は矢張り生の方が。

九郎　あゝこれ、控へてをらうぞ。

東吉　その外に、まだ御差添まで下しおかるゝ。

九郎　すりや、此の外に御差添を。あゝ、忠節は盡したいものぢや。

祐甫　それと申すも私が艶書を拾つて上げた故、犬骨折つて鷹の譬へ、御沙汰ばかりでまだ愚僧は。

春永　いや、そちには衣服腰の物より、金子にて取らすつもりぢや。

祐甫　なにお金で下さりますとは、それは、願つたり叶つたり、あゝ忠節は盡したいものぢやなあ。
　ト山口の眞似をする。此の内舞臺揚幕より、小平太三方へ袱紗をかけし短刀を持ち出來り、山口の前に直し、

小平　我君よりの下されもの、有難く頂戴召され。

九郎　これは〳〵重ね〴〵の下されもの、冥加至極、有難く頂戴仕つてござりまする。（ト三方を頂き下に置き、）失禮ながら服臺の上なるは、いかなる品か。

東吉　袱紗を取つて披見めされ。

九郎　どれ。（ト袱紗を取る、水上下、白小袖載せてある。山口見て、）や、御紋服と思ひの外、無紋の小袖水上下。（ト祐甫見て、）

祐甫　こりや、たゞ事ではござらぬわえ。（トふろへ居る。山口きつとなり、）

九郎　何等の故かは存ぜねども、拙者へ是を下されしは。

春永　不義を見出せし、そちへ恩賞。

九郎　や。

東吉　君格別の思召しをもつて、切腹仰せ付けらるゝ、有難く御受け召され。

九郎　そりや、拙者に何科あつて。
東吉　科はその身に覺えある筈、腹切り刀を拜見あれ。
九郎　どれ。（ト袱紗を取り、びつくりなし、）やゝ、此の短刀は。
東吉　小田家の重寶蛙丸、
九郎　さては、これ故。
　　　ト飾市と顏見合せ、露顯せしといふ思入、東吉九郎次郎山口に詰め寄り、
東吉　さあ、かゝる證據のある上は、汝が包む惡事の一々、此場に於て白狀いたせ。
九郎　なに、白狀いたせとは。
春永　やあ愚かや山口、かねて今川氏基へ心を寄せる二タ股武士、東吉が訴へに依つてそれがし疾くより存じをれば、包み隱すは卑怯至極。
小平　猶此の上にもあらがへば、是非に及ばぬ踏み付けて、繩目の恥を受けんより、惡事露顯いたせし上は。
東吉　脫れぬ所と覺悟なし、きり〳〵白狀、
小平　いたしてしまへ。

ト山口の左右より詰め寄つていふ。これにて祐甫こらへ兼れ、うじ〳〵として、

祐甫　こりやもういつそ。

ト白狀しようとするを、山口これと當てこなしあつて、

九郎　むゝはゝゝ、此の身に取つて覺えなき、詮議だの白狀だのと、何を以て何を證據に。

東吉　飽くまで根強きその一言、まだ此の上にあらがふなら、汝が企みの一々を、それがしこれにて申し聞かさん。

ト山口を下に置ききつと思入あつて、誂へ大小の入りし派手なる合方になり、

かねて今川氏基へ心を寄せると風聞ある故、我君と申し合せ八幡の祭りをなし、諸人に參詣許しなば、汝が差添に今川の間者のものを城內へ招き入れるは必竟。我が推量に違はずして紛れ込みたる由良大八、心の儘に城中を見、出口の固め嚴重に一人別に詮議なせしに、御家の重寶蛙丸を所持なし居るは曲者と手酷く拷問いたせしに、もろくも今川氏基の家臣なれど、山口が手引きに依つて來るよし、白狀なせしその上は、則ち短刀汝が密書、我手に入りし上からは、最早脫れぬ九郎次郎、その身の惡事逐一に、これにて白狀いたしてしまへ。

ト件の密書をさし付け、きつと思入、

九郎　たとひ何樣申さうとも、それがしかつて覺えない。

東吉　やあ、覺えないとは卑怯至極。やあ／＼佐太郎、その者是れへ出せ。（ト下手にて、）

佐太　畏つてござりまする。きり／＼歩め。（ト下手より、返し前の佐太郎、大八に繩をかけ出來り、）下にをらう。（ト山口大八を見てびつくりなし、）

九郎　や、そちは大八、さてはいよ／＼、その方が。

大八　さあ金輪奈落言ふまいと、手酷くかゝつた拷問も怺へに怺へてをりましたが、考へて見りやあ馬鹿々々しく、證據の短刀所持なす密書を卷上げられた上からは、どの道取られる命だから、とても死ぬなら道連れと、こなたの企み何もかも、わしが口から白狀しました。

春永　斯樣な確かな證據あるに、それでも知らぬと申し張るか。

九郎　さあ、それは。

東吉　但し汝も拷問しようか。

九郎　さあ、

東吉　白狀いたすか。

九郎　さあ。

三人　さあ〳〵〳〵。

春永
東吉　きり〳〵白狀いたしてしまへ。

ト三人よろしく山口へ詰めよる、是非なく山口差添をぬき、腹へがばと突き立てる。小平太、佐太郎これを見てびつくりなし、

小平
佐太　これは。（トこれより竹笛になり。）

九郎　かくなる上は何をか包まん、いかにもそれがし今川家へ隨身せしは、古參なる我を用ひぬ小田春永、新參なる東吉に世を奪はれしその無念さ、傳手を求めて氏基へ合體なせしも、露顯の上は是非に及ばぬ此の切腹。いざ、首取られよ、此下東吉。

東吉　先非を悔いし九郎次郎、よくぞ切腹いたせしぞ。

春永　佞人滅びる上からは、やがて鳴海の戰ひも、

九郎　裏切なさんと思ひしも、

小平　味方に變心あらざれば、

佐太　御勝利あるに疑ひなし、

東吉　猶此の上の計略にて、

春永　やがて勝鬨、

東吉　御家の榮え。（ト山口よろしく苦しむ、東吉春永こなし、）

春永　はて、さいさきよき。

ト春永短刀を取り上げ押頂く、双方見合せ、木のかしら、

ことぢやなあ。

ト皆々引張りよろしく、カケリにて、

ひやうし　幕

と幕引つけると、エイと太刀音して、とめの木、跡シヤギリ

第二幕目

萱津村左近内の場

同　奥の間の場

〔役名――小田春永、此下東吉、左近、左枝犬淸、宅間信盛、池田勝三郎、林佐太郎、小田の臣、門弟、忍び、中間、勢子、百姓、庄屋。左近娘吉野、腰元立田等。〕

（萱津村左近内の場）――本舞臺三間の間常足の二重を四枚飾り、尤もいつもより前へ出して飾り、

蹴込網代にはじき板の書割、欄間好みのすかし、上手一間の附屋體、障子立切り、眞中更紗の暖簾口、此の上の方白地に金銀の彩色繪、舞扇の地紙の書割、下の方に地袋戸棚、銀張の襖、此の棚の上に本箱側に鞍載せあること、下手建仁寺垣、此前楓の大木、日覆より同じく釣枝をおろし、いつもの所に風雅なる鳥居を建て、片扉の門口、外庭の植込みの張物にて見切り、總て尾張國萱津村、能師住居の模樣、誂への通り飾り付け、平舞臺の上手に門弟打盤を置き、着流し袴なり、扇を持ち拍子を取り庄屋羽織着流し、百姓二人同じ拵へにて居並び、謠の稽古をして居る見得、在郷唄へ合方を冠せし鳴物にて幕明く、と幕の内より門弟扇を打鳴らし、

門弟　さあ繰返してやりませう。

庄屋　あゝやりませうとも〳〵、覺え込むまで何遍でもやりませう、なう二人の衆。

百姓　さうとも〳〵、わしら達も爰へ遊びには來はせぬ、謠ひを習ひに來たのぢやによつて、根限りやらかしまするわ。

百二　窪作殿の言はるゝ通り、おらが腹に染み込むまではやりませう。

門弟　そんならしつかりとやらつしやい。「高砂や、此の浦舟に帆をあげて〳〵。」

兩人　「高砂や、此の浦舟に帆を上げて〳〵。」

百一　そんなら今度は、わしが一人でやつて見せべえ。「高砂や、此の浦舟に帆を下げて〳〵。」

門弟　これさ、帆を下げるといふことはござらぬぞ。

百二　上げた帆ぢやによつて下げねばならぬと思うて、氣を利かせたのぢや。

庄屋　何をいふのぢや。

四人　はゝゝゝ。

ト笑ふ、右の鳴物きつばりとなり、奥より左近更けたる拵へ、紋付きの着流し、煙草盆を提げて出來り、三人を見やり。

左近　これは〳〵各々には、御出精なことでござる。

庄屋　おゝ左近殿、ではない、御師匠様、又上りました。

百一　いつも、われ鐘のやうな聲をして、

百二　がなるので、喧しくござるべい。

左近　いや、喧しいとてこれが業でござるものを。したが今の謠は、誰かと思うたら、庄屋どのでござつたか、なか〳〵よい聲でござるが、もう一調子張り上げて謠はしやれ。

庄屋　それ見さつしやれ、どうでも帆を上げねばならぬのぢや。さうして御師匠様、いつかは聞かう聞

かうと思つてゐましたが、家出をなされたこちの息子殿から、よい便りでもござつたか。

左近　いやもう、あいつめは家出してより音沙汰なし、死んだ事やら生きて居るやら、とんと様子が知れませぬ。

庄屋　はゝあ、それではおまへ死んだと思つてござるのか、大間違ひぢや、その息子殿は無事でゐさつしやるわいの。此の間もわしが池鯉鮒まで用があつて行つたところ、こちの息子殿に逢ひました、それも立派な侍にならしやつて、お戻りやら行くのやら、供も大勢附添ひ行かれたを、どうも見たやうな人ぢやと思ひ出したは、小さい時から知つた仲、何年經つても互ひに忘れず、言葉をかけて名乘り合ひましたが、いやもう、立派な武士になられたが、定めてこなたも知つての事かと思つたに。

左近　ふむ、すりや悴めに、まことお逢ひなされましたか。

庄屋　なんのとほけを言ひませう、今話す通り、立派な侍になられました。

左近　そんなら存生で居りまするか、子供の時から亂舞を嫌ひ、柔術の劍術のと武藝を好み、稽古をしましたが、生兵法大疵の元とやら、友達と口論し出し、相手に深手を負はせし騷動、内にをつては親の難儀にならうと思ひ、その儘家出いたせしが、それより何處へ行つたやら影も形も見せ

ませぬが、最早今年で十年餘り、好きな道とて今お話しになる通り、武士になりしとあるからは
いづれの藩へか仕官いたせしと見えまする。

庄屋　おゝ、それは供の中間が擔いでゐた、具足櫃に駿州今川藩、何とやら書いてあつたが、あとはわ
しに讀み兼ねましたが、何でも今川樣の御家來になられたに違ひない。

百二　なんにせい今川と言つては、當時世界の大大名、北條武田でも、皆今川の附屬同然。

庄屋　それに又その氏基樣が御自身に、大軍を從へ、都へ登らつしやるとの專ら噂。

百二　然もその道々の大小名が、今川樣に隨はぬものは、殘らず攻め亡して六十餘州をひと握りにする
大きな料簡。

百一　先駿遠三と伊豆の四ヶ國は領地故、戰はじめは尾張の清洲小田樣が戰始めといふ事ぢやさうな。

門弟　然し十萬といふ大軍が、わづか清洲一城の小勢と戰つたところが、及ばぬ事と知れてゐる。

左近　いや〳〵たとひ小國小勢といふとも、負けると極つたものでもない、流石名に負ふ此下東吉とい
ふ勝れた智者もあり、又柴田宅間などゝいふ鬼のやうな勇士もあまたある事なれば、負けるとも
こりや極らぬわえ。

庄屋　でも清洲の人數を今川方に較ぶれば、一割に足らぬ無勢。

門弟　所詮負けるは知れてある。
左近　いや〳〵、勝つに相違ない。
三人　いや〳〵、負けるに違ひない。
左近　あゝもし、お手前方は小田家の領地に住みながら、領主の負けるを好まつしやるか、こりや大方今川家へ心を寄せさつしやるのか。
庄屋　これは〳〵皆がとんだ粗相をいひました、共々お下に住みながら、御領主様の不緣起いふは濟まないわけ。
百一　それにけふは御領主春永樣が、鷹野といつて實は戰の駈引きなされん爲め、村々を御巡檢なされ、地理とやら埃とやらを、御覽なさるゝ故、粗相のないやうにしろと、御代官所から言ひつかつた。
百二　その事を隣り村へ觸れるのが遲くなつた、謠の稽古は又明日の事にして、ちつとも早く出かけませう。
門弟　又わしはこれから隣家の、大盡の所へ行つて稽古をしてやらねばならぬ。
左近　おゝ、そんなら庄屋殿。

庄屋　又明日こゝへ同勢揃へ、
百一　攻めかけて、
百二　鬨の聲を、
三人　上げませうぞや。
門弟　なに、鬨の聲、いやもう、戰は眞平御免だ。
庄屋　大間違ひだ、謠のことさ、どれ、忘れぬやうに、謠ひながら行かうではないか。
百一　いや、古編笠に破れ扇ぢやあるまいし。
百二　月落ち烏啼いてが、まだしもましだに。
庄屋　何んでもいゝ、稽古の爲だやらつしやれ。
二人　えゝ、泣く兒と地頭でなくて、庄屋の言附け。
百一　仕方がない、やりませう〳〵。
三人　「高砂や、此の浦舟に帆をあげて〳〵。」

ト謠ひながら三人よろしく花道へはひる。門弟は奥へはひる。跡に左近殘り思入あつて、

左近　實にや月日に關守なく、只一睡の夢の間と、十年跡に家出して、たゞの一度便りもなき故、死せ

しと思ひたる左京之助に逢ひしとて庄屋が話し、無事に長らへ武士となり仕官せしとは悦ばしいが、今小田家とは吳越の今川、ひよんな所へ身を寄せしぞ、今にも兩家確執より戰とならば親子も互ひに敵と敵、刃を交へ血塗らにやならぬ、保元平治の昔より、まゝあるためしといひながら、ま、仕官は切ないものぢやなあ。

トこれより唄になり、よろしくこなしあつて、奥へはひる。跡合方彈流し、調べを冠せ、花道より犬清着附大小好みの拵へにて、雪駄履きにて出來り、ちよつと花道へ留り、

犬清　我身の科に身をかこち、あるに甲斐なき身ながらも、お詫びを願ふその爲に親しき人を訪なへば折節留守に逢へぬとは、本意ない事ではあるよなア。

ト思入、やはり右の鳴物にて、立田文金の振袖なりにて、紺看板の中間附添ひ出て、犬清を呼び留める。

立田　あゝモウシ、それへお出で遊ばすは、犬清殿ではござりませぬか。

トこれにて犬清見遣り、

犬清　おゝ誰かと思うたら、吉野が妹立田殿、けふはお宅へござつたのか。

立田　いえ、けふは奥樣の御代參を勤めまして、御菩提所へお參りいたして戻りがけ、ちよつとお門か

ら皆様の御機嫌を、伺ひませうと存じましたわいなあ。

犬清　それはようござつた、親御をはじめ吉野にも、常に噂をいたしてをつたところ。

立田　それはまあ、お嬉しい事でござりまするわいなあ。

犬清　なんにせい、こゝは道中。

立田　早うお目に懸りたう存じまするわいなあ。

犬清　さあ、同道いたすでござらう。

　ト右の鳴物にて、中間附添ひ本舞臺へ來り、中間へこなしあつて、

立田　わしはこゝへちよつと立寄る程に、そなたはあたりの茶店へなと行て休息して、後方迎ひに來てたも。

中間　へい／＼、畏りました。（ト中間は橋懸りへはひる。犬清門口にて、）

犬清　今戻つたぞ。（トいへども誰もゐぬ故、）吉野はいづれにゐる。立田どのが見えられた。吉野、吉野。（ト言ひながら内へはひる。此の時奥にて、）

吉野　はい／＼、今參りまするわいなあ。

　ト合方にて、吉野世話なりにて奥より出來り、犬清立田を連れ内へはひり、よきところへ住ふ、吉野

思入あつて、
おゝあなたお歸りでござりましたか。（ト言ひながら立田を見やり、）こなたは妹、けふはどうして來やつたぞいなう。

立田　さあ、御代參を幸ひに、是非ともお目にかゝらうと、參りし道で犬清樣にお目に懸り、それ故御一緒に參りましてござりまするわいなあ。

吉野　そりやまあよう訪ねてたもつたなう、わしも久々にてそなたの無事な顏を見て、こんな嬉しい事はない。

立田　もし姉さん。

吉野　おゝ妹、

立田　逢ひたうござんしたわいなあ、逢ひたかつたわいなあ。

犬清　まあこれ、何はさしおき久し振り故、けふは立田どのに好きな物を、澤山馳走して進ぜたがよいぞや。

吉野　なんなりとも、馳走をいたしませうわいなあ。

立田　あゝもし、何も構うて下さりまするな、久しうお目にかゝらぬ故、御無事なお顏を見るのが、何

よりよい御馳走でござりまするわいなあ。

吉野　ほんにまあ、ついした事からつど〳〵に、表向きで逢ふ事ならぬわたしが始末、それ故久々打絶えて、音信さへもえいせぬが、無事かまめかと明け暮れ案じるのみであつたわいなあ。

立田　したがまあ父様といひ犬清樣、姉樣にもお替りなうお出でなされて、お嬉しう存じますわいなあ。

ト兩人よろしくこなし、犬清見やり思入あつて、

犬清　久しう互に逢はぬ事故、兄弟の情愛はさこそと思ひやらるれど、親御も嘸かし逢ひたうあらう程に、ちつとも早く親仁樣へ。（ト言はうとする、此の時奥にて、）

左近　おゝ、それへ參つて逢ひませう。（ト言ひながら、左近奥より出來り、）最前より、どうやら立田の聲とは思つたが、同胞とて姉の聲音も似てゐる故、間違うては異なもの故、遠慮してをりましたが、やつぱり立田が來やつたのぢや。ようまあまめでゐやつたなう。

吉野　父様にも嘸御悦びでござりませう。まあ御覽なされませ、逢はずに過ぎたも一年越し、僅か見ぬ間に見違へる程、よい器量になりましたわいの。

左近　まあ親はなくとも子は育つと、僅か十か九つの時、御館へ上げ宮仕へ、いつの間にやら脊丈も延

び、親の慾目か知らねども十人並にも勝れし上、姉にもおとらぬ取りまはし、つむりの飾り着類まで矢張り御主様の皆お陰、かうして兄弟睦じうして居るのを、ばゞが居たなら悦ぶに、血勞の病ひ煩ひし上、悴が事を氣にかけて遂に果敢なくなつたるも、最早五年、草葉の陰にて案じてるように、見せてやつて安心させたい。あゝこれも全く老いの愚痴、それはともあれつど〳〵に尋ねてやりたうても、二人の者が今の身の上、人の思惑氣で氣を痛め、それ故久しう尋ねもせぬ故、邪險な親と思ふであらうが、許してくりやれ、これ立田。

トほろりとこなし、立田思入あつて、

立田　あゝこれ、父樣となされたことが、そのやうにおつしやらいでも、なんで私が尋ねぬとてお恨み申しませう、唯明け暮れお二人とあなたの事のみお案じ申し、少しも早うお二人の、どうか御勘當の許りるやう、是非にお詫びを願ひたれど、何をいふにも御表へかゝりし事、殊にお心強い殿樣故、よき折あらば執成してお詫びをしてやらうと、お情け深きお詞を力と思うてをりましたが、けふは御代參とは表向き、あの奥樣の御情深い御内意にて。

犬清　むゝ、して奥方の御内意とは。

立田　さあ、お二人樣の御勘氣のお詫びを兼ねて願ひしに、よき折あらばと奥樣の仰せを力に待つ甲斐

も繁き御用のお障りあつて、久々にて殿樣お奧へ御出で遊ばし、いつにない御機嫌故、奧樣はじめ女中方も、お前達二人のお詫び途つて申上げしに有難い殿樣のお詞、二人のものを勘當せしは不便には思へども、不義を犯せし掟故、是非はなけれどさしたる罪にもあらざれば、一つの功を立てしなら、それを廉に勘當ゆるしてやらんとのお詞。

犬清　すりや、何か一つの功だに立つたなら、御勘當御赦免下されんとの御意なりとや。

立田　それ故かねて親しき此下殿へお賴みなされ、お詫の上にお供を願はゞ、一人たり共味方の欲しき時なれば、大方御免にならう故、ともゞゝ執成しやる程に、早うこの事二人へ知らせよと御代參と披露して此のお使ひ、それぢやによつてちつとも早う、東吉樣へお賴みなさるが、何よりの事でござりまするわいなあ。

吉野　不義不忠をいたせし二人を憎しとも思召さず、お情け深いけふの御內意、勿體なうて有難うて嬉し淚がこぼるゝわいなあ。

犬清　臣臣たらずも君君たりと、斯くまで厚き君恩を、いかで忘却申すべき。

左近　身を粉に碎き功を立て、御勘氣ゆりなばともゞゝに、月の村雲晴るゝの道理、

吉野　早う明るき身となつて、恥を淸める御恩報じは、命にかけていたしまする。

犬清 それがしとてもその如く、心に油斷更になく、此の頃世上の噂にもいよ〳〵御家と今川と合戰すでに始まると、聞いてこゝぞと思ひし故、東吉殿の執成にて何卒御供に加はらんと、今朝もけさとて此下の屋敷へ行きしに折節君の御供にて、鷹野と號して地理順檢に他出故、面會遂げず戻りしが、今にも東吉殿に出逢ひなば、御勘氣御免を蒙つて戰の御供の叶ふやう、是非とも賴み申さん存念。

左近 それぞ誠に何より肝腎、猶此の事を日頃念ずる、熱田の宮へ祈願をかけ、

吉野 願ひに願ひし事ならば、思ひよらざるよき事を、聞くも嬉しき此吉左右。

犬清 此の身にとつて最上吉日、我運命も開くる時節、えゝ忝けない。

吉野 こんな嬉しい有難い事は、又とござんせぬ程に、神棚へ御神酒など供へまするわいなあ。

左近 おゝよう氣が附いた。それに久しぶりで寄り合うて目出度い事を聞いた祝ひ、御神酒の殘りを打揃うて開きませうか。

犬清 いかにも、それぞ身の祝ひ、皆も一緒に奥へ行て。

吉野 女子同志は又外に、久しく逢はぬ事故に、積る話しの山々を、

立田 言うたり聞いたりいたしませうわいなあ。

大淸　悲しみあれば悅びの、
吉野　眉もひらくるかほよ花。
立田　ゆかり色めく庭の面。
左近　咲き揃うたる撫子と、
大淸　袖のぬれ葉もひあふぎの、
吉野　暫しは憂を忘れ草、
立田　身にも冥加の花あやめ、
左近　待てば甘露の、
皆々　日和ぢやなあ。

ト唄になり、四人よろしくこなしあつて奥へはひる。跡かすめたる風の音トヒヨになり、花道より相引の鶉田籠を引いて來て、よき所へ消すこと、下手植込の陰へはひりし心。花道より春永、打割羽織、立派なる拵らへ、大小切草鞋、鷹野の拵らへ、跡より信盛ぶつさき半纏、紐附股引、大小草鞋にて附添ひ出來り。ちよつと花道に留り、

春永　予が祕藏の小鷹外れしを、自ら追ひかけ來りしに、何れへか飛び行きしぞ。

信盛　彼處に見ゆる楓木の内へ、正しく入りしを見受けましてござりまする。

春永　ふむ、信盛つゞけ。

ト言ひながら、つか／＼と本舞臺へ來り内へはひる。これにて信盛思入あつて、有合ふ打盤を取つて縦にして出す、春永是れへ腰をかけ、信盛思入あつて、

信盛　誰ぞあらぬか、御領主の御入りなるぞ。（ト此の内春永あたりを見廻しこなしあつて、）

春永　何者の住居なるか、ひなに稀なる奧床しき香の薫、はて、いぶかしき、（ト思入あつて氣をかへ、）こゝいや信盛、白湯を申し附きやれ。

信盛　はッ、こりや／＼家内の者、君の御所望、白湯を持參いたせ。（ト奧にて、）

吉野　畏つてござりまする。

ト是れを合方になり、奧より以前の吉野蓋附き腰高の茶臺に茶碗をのせ、俯いて持ち出來り、下手より及び腰に手をつかへさし出す。春永思入あつて、

春永　苦しうない、近う持て。

吉野　はッ。（トこれには思はず顏を上げ、さし出すを春永見て、）

春永　や、そちは。

吉野　はツ、はツ。(ト手早く本舞臺下手へ平伏するを、信盛見やり、)

信盛　や、正しく吉野。(トいふを春永冠せて、)

春永　あいや、よしあるものゝ住居か知らねど、見も知らぬ賤の女なりや、その方とても知らぬ道理はなけれど、それともに信盛は、存ぜしものと申すか。

信盛　成程左樣に仰せあれば、まあそんなもの、我君が御存じなき者は、信盛に於ても、やはり存ぜぬ賤の女でがなござりませう。

春永　むゝ、左樣であらうがな。

信盛　いやもう左樣、御尤もなる儀でござりまする。

春永　いかにも存ぜぬ、見も知らぬ賤の女が住ひながら、今聞きし香の薫りは餘所ならぬ奥園生が祕藏なせし、延喜の焚きさしと名付けし名香故、いぶかしく思ひをつたるが、斯く鄙にも名香を嗜むものゝあると覺えて、奥床しい。

信盛　何さま、是なる賤の女がこゝにゐるからは、必ずともに御勘氣の、あの犬淸も。

ト言ひかけるを冠せて、

春永　こりや〳〵信盛、何を申す、犬はあとより犬役のものが召連れるであらうわえ。

信盛　成程君の仰せなりや、これも御尤もなる御意でござりまする。何はともあれ、それなるいや知らぬ賤の女、只今これへ君の御拳たる、鷹はそれでは參らぬか。

吉野　いかにも勝れし御鷹のそれしと見えしが、これへ舞うて參りましてござりまする。

春永　して、何れの方へ飛び行きしぞ。（ト此の時下手にて、）

犬清　あいや、その御拳は拙者めが、とゞめおきましてござりまする。

信盛　何と。

ト合方になり、下手柴垣の蔭より、以前の犬清好みの着附袴なりに着換へ、拳に鷹をすゑ出て片手を突き、下に俯く、信盛目早く見て、

や、さてこそ彼は。

トいひかけるを、春永見やり、冠せかけ、

春永　いや〳〵信盛、その方も知らねば、予も知らぬ邊土に住める賤しき者ぢやわえ。

信盛　はて、賤しき奴には逞しきものぢやなあ。（ト信盛こなし、春永は犬清へ思入あつて、）

春永　こりや賤のもの、予が寵愛する稀なる小霞、汝こゝに居らずば何處迄も飛び行かん、捕へおきしは過分々々。

犬清　はゝはツ。

ト平伏する、此の時ばた〳〵になり、花道より池田勝三郎、羽織半纒股引大小草鞋のなり、跡より小田家臣八人、半纒股引の拵らへ、めい〳〵革床几、その外狩座の手道具を持ち、中間四人半纒股引のなり、青竹に雁鳩その外の獲物を結び附け、これを擔ぎ出來り、直に本舞臺へ來て、勝三郎門口より内を見て、

勝三　はゝ、我君様、これに御座あられしか、して御祕藏の小霞は、いかゞなされしぞ。

信盛　いかにも、それ〳〵、御拳はそれに控へし賤の男とやら、しつぽくとやらが取押へたる故、無事に御手に入つてござる。

勝三　すりや御寵愛の御拳は、無事に御手に戻りしか、我君にも嘸かし御滿足に思召されん。

○　われ〳〵どもに至るまで、

□　恐悦至極に、

八人　ござりまする。（ト皆々よろしくあつて、勝三郎思入あつて、）

勝三　して、止めしはこれなる賤の男か、（ト犬清吉野を見て、）やあ、思ひがけない、犬清どの。

○　いつぞや御勘氣蒙つて、

□ 此の地に隱れ、

八人 住はれしか。（ト言ふを春永冠せて、）

春永 こりや〳〵、何をうろたへて申すのぢや、我知らぬ邊土の茅屋、勘當せし左枝が浪宅にあるならば、何とて予が休息いたさうや、粗忽申すな。

八人 はッ恐入りましてござりまする。（ト勝三郎思入あつて、）

勝三 何は然れ、御祕藏の御拳、御鷹役の衆、受取り召されて、餌飼なされい。

○ はッ、畏まつてござりまする。

トこれにて○犬淸の傍へ行く、犬淸思入あつて、○へ拳の鷹を移す事よろしく。○下手へ來り後ろ向きになり、餌を飼ふこなし、春永思入あつて、

春永 予も寵愛せし拳故、驚き外れしを追つ駈け來り、計らず此の家に立入り長途の勞れに暫時の休息、

勝三 さはさりながら翼するどき小霞の、驚き外れて飛び行くを、心早くも取り止め、無事に御手に入つたるは、天晴れ流石は左枝殿、いや、こよなきこれなる賤の男が、一つの手柄と申すもの。

信盛 いやさ信輝殿、貴殿が手柄々々と申されるが氣に喰はぬ。君には一旦御勘氣ありしもの故に、御存じ知らぬ賤の男との仰せは、言はゞ掟の裏、寬仁大度の御慈悲なるを、お目通りもならぬ身を

持ち、出しや張つて御拳は拙者が止め置きましてござりますと、手柄顏に恥を恥とも人を人とも思はぬは、第一君をないがしろ、我々をも盲の扱ひ、よく〳〵人を馬鹿にする奴、此の信盛が居らずば知らず、一家中の見せしめに、懲り〳〵する程恥面かゝせん。さあ二人ともそれへ出をらう。(トきつとなる。犬淸思入あつて、)

犬淸　こは情なき、そのお詞。

信盛　情ないとはよく申した。お情過ぎてちん〳〵鴨、小鍋立してつツつき合ひ、喰つた奴らと思へば小胸に障るわえ。さあ戀の遺恨だ、いやさ、戀故にこそ今此のざま、もう此の上は手短かに、此の信盛が手を下し、二人共に引きずり出して成敗なさん。

トきつとなり、立上るを此の時下手にて、

東吉　あゝいや信盛殿、お控へなされい。

ト言ひながら下手中庭の門の内より、東吉割羽織、好みの鷹野の拵らへ、大小にてつか〳〵と内へはひる。信盛見やり、

信盛　やあ、誰かと思へば此下氏、いつの間にやら。

勝二　よき折柄に、御入來あられい。

信盛　いや、よくも何ともないところへ。

ト東吉構はず、よき所へ佇ひ、春永を見やり思入あつて、

東吉　はッ我君にはこれへお越し遊ばしましたか、某は御拳外れしを見るよりも、跡を追かけ來りしに森の茂みへ飛び入りし故裏手を廻り尋ねしに、これなる賤のものが慥かに取り押へしを見届け申せしうち、計らずも君のお入り、委細の樣子承りしが、御祕藏の小霞、行方知れずと相成るべきを取りとゞめしは、此の家の賤の男が忠節と申すもの、御恩賞もあるべきを、それに何ぞや成敗のと、肩肘張つて申さるゝ、信盛殿のお詞心得申さず。

信盛　それぢやと申して、不義の兩人。

東吉　さればでござる、功あるものへ恩賞なく、殊に罪なきものを成敗などゝは、是が則ち不義非道の有る證據、今日始めて君に御目通りせし賤の者共、罪のあるべき道理がござらぬ、それともござるか。

信盛　さあ、それは。

東吉　あらば一々承はらん。

信盛　さあ、それは。

東吉　さあ、

信盛　さあ、

兩人　さあ〳〵。

東吉　なんとでござる、信盛殿。

信盛　むゝ。（トぎつくり詰る思入。）

東吉　それぢやによつて控へてござれ。（ト言ひながら、犬淸吉野の兩人へ思入あつて）見れば二人の賤のもの、まだ年若き身を持つて邊土の住ひは深き仔細のある事ならん、今御前に於てそのあらましを
な、申し上げい。

犬淸　はゝ、冥加なるそのお詞、御前をも顧みず、此の身の仔細一と通り、申上ぐるでござりまする。
（ト誂への合方になり、）元われ〳〵兩人は、さる御家に仕へしもの、幼き頃より御側を勤め、厚き御惠み蒙りしその君恩を打忘れ、若氣の至りと言ひながら、ついした事から不義徒ら。

吉野　勿體なくも奥樣のお目を掠め、道ならぬ事いたせしが、ついにそれが顯はれて、二人共に長のお暇。

犬淸　既にお手討にもなるべきを、信義の深き朋友の執成といひ、下を憐れむ御主君のお慈悲によつて

命助かり、

吉野　御勘氣受けて浪々の、寄る邊なければ此の家なる、父を便りに佗び住ひ、昨日に變る飛鳥川。

犬清　水の流れと人の行く末、落ちれば同じ谷川の、

吉野　水仕の業や薪樵る、

犬清　賤の手斧を刀にかへ。

吉野　その日を送る淺ましさ、

犬清　御主の罰と身を恨み、

兩人　お詫び申してをります る。

ト兩人よろしくこなしあつて言ふ。春永はこれを聞き、不便なといふ思入。東吉こなしあつて、

東吉　尤もなるその歎き、さはさりながら時節到來いたしなば、仕へし主君の御慈愛にて、御勘氣許さるることもあるべし、運と時節を待たるゝがお爲めであらうぞや。

犬清　忝なきその御教諭、此の頃世上の風說にも、今川氏基此度上洛の道すがら、隨はざるは攻め亡さん心なりと聞き及ぶ、さすれば當國に於いても戰爭あらんは必定、御大事とこそ存ずれば、九牛の一毛ながら君恩を報じ奉る時到れば、何卒御勘氣御赦免あらば、粉骨碎身仕り一つの功を立

てん存念。

東吉　何樣思ひ込んでのその願ひ、いづれの藩かは存ぜねど、我君の領國も、氏基上洛の道筋なれば是非戰爭に及ぶの折柄、一人たりとも味方を招く折なれば、ましてやその許などは衆に勝れし武術の功者、某こそ元の主人の心はいかゞあらうや存ぜねど、我君なればかやうの時にはお許しあらんに。いかに我君、左樣には思召さぬか、此の儀いかゞでござりまする。

春永　おゝ、如何なる罪あるものたりとも、改むるに憚りなしと申せど、予がその者の主人なら、許さぬわえ。（ト信盛へこなしあつていふ。）

東吉　すりや我君にはあの者の、主人の心にならせられ、御勘氣御免はござりませぬか。

春永　おゝ、いかにもならぬ、今日の本に春永を鬼神なりと恐るゝに、色に耽り不義不忠を働きし生くら者を力とせずとも、春永には強勇無双水火の中へも飛び入るべき、精忠の家來を多く持てば、勘當は許さぬと、な、申すであらうわ。

信盛　左樣々々、我君の仰せの如く色に迷つて忠義を忘れ、不義密通を働いて、既に御手討にもなるべきを、御仁慈の厚きお心故命を助け御勘當、恩と恥とを思ひなば、切腹でもいたすべきに、面を並べてのめ〳〵と賣れ残りたる古雛同然、こゝらあたりにさ迷ふは主人の顏へ泥を塗る恩知らず

の罰當り、押しを強く餘所事に立ての御詫はかたはら痛い、喰ふに困つて古編笠、破れ扇で門へ立ち、一文貰ひは今の内、貧乏神を賴まいでも腕前勝れし御家來、柴田をはじめ數萬人、恩顧譜代の忠義のものが、君の御側に附き添ひ居れば、色好みの生くら武士の、力を借りるにや及ばぬ事だわ。

東吉　あいや信盛殿、お詞ではござれども、あながち戰は強いばかりが勝にもあらず、世に強勇は多くあれども、智勇備はるものは少なし、見受けしところ此者は、智勇勝れしあつぱれ若武者、御用に立つべきかと存じられます。

信盛　へゝえ流石は御意に入りの此下殿が、辯舌巧者に言ひ廻し、押しての御詫、これが御免になるならば、それこそ依怙の沙汰とや言はん、あまた國中に心變りの者が出來るであらう。

ト春永へ思入あつて言ふ。これを聞いて春永こなしあつて、

春永　いかにも信盛の詞も道理、我が片腕と思ふ東吉が申す事なれば、聞き入れぬではなけれども、此の詫びばかりは聞き入れぬ、今戰爭の折に望んで、一人は萬人にもかへ難し、重ねて申すな。

東吉　すりや、いかやうに申し上げても。

春永　くどいわ。

東吉　はゝはツ。それと申すも、御側に附添ひ。

信盛　えゝ。

東吉　恐入ツてござりまする。（ト思入、犬淸吉野これを聞き、）

犬淸　すりや、どうあつても、此のお詫びは。

吉野　叶ひませぬ事かいなあ。（ト兩人ぢつと泣伏す。信盛思入あつて、）

信盛　かくいぶせき茅屋に、御長座あつては君の御爲よろしからず、御歸館あつて、

皆々　然るべう存じ奉る。

春永　むゝ、何さま、日も西山へ傾けば歸館いたさん。

東吉　それ、御供の方々。

皆々　はツ。

ト皆々よろしく、門口の外へ居並ぶ。春永は下へ下り、下手へつか〳〵と行きかけ、犬淸吉野へ思入あつて、立寄り見て、不便なといふこなしよろしくあつて、

春永　こりや何樣詫びをいたすとも、十に一つの功だに立つたなら、いやさ、家臣の手前許されぬぞよ。（トきつと言ひ、氣を替へ、）さりながら、予が寵愛の小霞を捕へ置きたるこれなる賤の男、恩賞は東

吉より、よきに計らへ。

東吉　はッ、畏つてござりまする。こりや賤のものども、君の御詞御恩賞は後しての事、な、心得たるか。

犬清　はッ、重々厚き御懇情、

兩人　有難い儀にござりまする。

勝三　あゝ、神明誠を照し給へば、必ず時節を相待たれよ。

信盛　いや、それよりは死ぬのが近道だわ、命惜しみの臆病もの、犬に劣つた左枝犬清、見れば見る程みぢめなざまわえ、むゝはゝゝゝゝ。（ト笑ふ事、犬清吉野きつとこなしあつて、）

犬清　御免なければ何として一命ながらへん。

兩人　これがお顔の、

ト兩人ちつと春永と東吉の顏を見詰める。春永もほろりとこなし、東吉思入あつて、

東吉　あ、いや、短慮功をなさずの譬。それ。お立ち。

と兩人へ呑込ませる。兩人うなづき合ふ事、勝三郎思入あつて、

勝三
皆々　はあゝゝゝ。

ト元の鳴物になり、春永先に東吉、信盛、勝三郎附添ひ、殘らず花道へはひる。犬淸吉野の兩人門口の所にてのび上り、跡を見送りこなしよろしくあつて、

犬淸　これ吉野、

吉野　犬淸樣、

犬淸　あゝ、便りない身に、

兩人　なつたわいなあ。

ト兩人よろしく泣伏す。合方きつぱりとなり、奧より左近立田出來り、

左近　おゝ尤もぢや〳〵、委細の樣子は奧で殘らず聞いてをりました。

立田　思ひよらずも御前の御入り、よい折柄と思ふ內、東吉樣の御執成し故、御免にならうと思ひの外御許しのなき御前の御意、途方に暮れて出る息も出ず、お二人樣の御心をお察し申して私も、共に悲しいわいなあ。（トよろしくこなし、左近思入あつて、）

左近　おゝ、そりや道理なれども、歎いて詮ない事故に、皆も必ず歎くまいぞ、出でゝ再び歸らざる君命とは言ひながら、これが世界にない事か、若いものにはまゝあること、東吉殿の詞を盡し願へども、御承知なきは餘りの片意地、老いの愚痴かは知らねども、御勘氣御免下されて、軍の御供

にお連れなされて下されてもよささうなもの、さりとは聞えぬ春永公。

立田 それといふのも折悪しく、あの意地悪るの信盛殿が御側にゐてとやかう申すそれ故に、御前にもあたりを憚り、御承知ないかも知れませぬ、又私が御殿へ歸り、けふの樣子を奧樣へ申上げ御供のなるやう御執成しを願ひます。殊に最前東吉樣の御詞にも、時節を待てとの事故に、必ずともに短氣な事して下さりまするな。

吉野 そなたまでも此の苦勞、何分ともに奧樣へ、御詫びのなるやうお願ひ申してたもいの。

犬淸 あゝ何にも言はぬ立田殿、そなたの親切忘れはおかぬ、心に拜んでをりますぞや。

立田 あれ勿體ない事おつしやりませ、戻つた上にて必ず吉左右、申上げませうわいなあ。

ト此の時以前の中間、下手より出て、門口へ來て、

中間 お迎ひでござりまする。

立田 おゝ、戻らねばならぬ事かいなあ。久しう逢はでたまさかに、逢うて嬉しく數々の積るはなしも跡や先、またうき事を取り交ぜて、言ひも盡くさず別るゝとは、心に任せぬ宮仕へ、もう御暇乞ひをしまする程に、隨分ともに父上樣、又お二人とも御身を大事に遊ばしませ。

左近 そんなら、もう行きやるか。

立田　あい、行きともなけれど、御殿の掟。
犬清　日も闌け行けば、お上へ恐れ、
吉野　そんなら妹、
立田　姉上さま。
吉野　どうやら、これが。（ト ぢつと顔を見つめる。）
立田　えゝ。（ト ぎつくりとなし、左近側から、）
左近　これ、氣をつけて行きやれ。
立田　合點でござんす。（ト 氣の濟まぬ思入、中間せいて、）
中間　さあ、お急ぎなされませ。
立田　ても忙しないわいなあ。
ト 唄になり、後へ氣の殘る思入あつて、中間附添ひ花道へはひる。左近跡を見送り思入あつて、
左近　折角内へ來は來ても、悦ばす事もなく、却つて憂きを增さすとは、不便な事であるわいの。
吉野　ほんにまあ、幼い時から御奉公、御上は言ふに及ばずお局衆をはじめとして、多くの女中に氣兼ねしての宮仕へ、生優しい事ではないに、たま〳〵内へ戻つても、保養もさせず苦勞さす、姉を

持つとは、嘸ぞ情ないと思ふであらう。

犬清　年に似氣なく利發と言ひ、信義も厚き立田殿の心に恥ぢて犬清は、親御へ對し何面目がござりませう。

左近　あゝこれ、その心遣ひは入らぬ事、まだ此の上にも手を盡さば、御勘氣ゆりぬ事もあるまい、今の恥辱は後日に雪ぎ、やがて世に出て高名なし、家を起せば此の悲しみも、昔語りに笑うて暮らさん、必ず心落されな。おゝそれ、なにか忘れたやうに思うたが、はや晝食も餘程の遲れ、空腹になつたれば、晝食にいたさうではござらぬか。

犬清　いかにも事に取り紛れ、われ〳〵共は兎も角も、嘸空腹でござらうに。

吉野　ほんにさうでござんした。そんならこれから奥へ行き、

犬清　然らばあなたも、

左近　いや、構はずと先へ行かつしやれ。

犬清　左樣なれば、

吉野　御免なされて下さりませ。

ト唄になり、犬清先に吉野ついて奥へはひる。左近後に殘り思入あつて、

左近　あゝ廣い世界に子のない親は、行末の樂しみがないとやら言へど、子を持つ親は罪深く、よい子を持てばよいなりに、病み煩ひに夜の目も合はさず、惡しきを持てば惡しき程、末を思案に苦は絶えず、善惡ともに子は三界の首枷とは、よう言うたものぢやなあ。（ト合方になり、）此の身は人にもよい子持ぢやと、褒められたのも賴みにならず、あの惣領の左京之助は家出してより十年越し便りをせねば死にをつたと思つてゐたにけふの噂、無事に仕官の身と言へど、主君の敵たる今川のその扶持取りと、聞いて殖えたる又苦の種、乙の娘は連添ふ夫との不仕合せ、案じる親の心は千々、もしや御勘氣ゆりぬを本意なく思ひ、若氣の一途に二人とも短氣を出してくれねばよいが。あゝ常に照る日はありながら、子故の闇に。

ト ホロリと思入、懷より疊紙を出して、洟をかむを、道具替りの知らせ、

暮すものぢやなあ。

ト木につき、唄、時の鐘にて、道具廻る。

（同奧の間の場）——本舞臺正面三間、中足の緣付の屋臺、柱四ツ谷丸太、柿屋根本庇附き、裏板木小舞の化粧、庇欄間は角がら窓、此軒面に伊豫簾をおろし、屋臺の上手跡へ下げて本緣を折廻し、

一間のところ丸窓障子立てあり、此の前に井筒、柴垣に夏草の花盛り、石の手水鉢、屋臺向う銀張りの彩色繪の襖、上の方に床の間、これに蒔繪の硯箱を置きある事、惣體茶壁、裾白の腰張り、下手切落し、やはり跡へ下げて網代塀、此の前に松の大木、あやめの下草の土手板、日覆より若楓の釣枝、正面の襖後に引きぬき、庭の遠見よろしく、合方、時の鐘にて道具納まる。と直に床の淨瑠璃になる。

〽ためしにも勇將名士は猶更に深く分け入る戀の山、登ればやがて身の尾張路や、思ひ千草の萱津村、左枝犬清浪居に籠る折折に、隣りを洩るゝ謠ひもの、

ト直に獨吟になり

〽夏果つる扇と袂の白露と何れが先か起伏しの、班女が閨にあらなくに、思ひ詫しき庭の面。

ト床と下座の打合せのメリヤスになり、正面の伊豫簾を卷上げる、こゝに犬清紋附の着流し差添を置き煙草盆を置き、褥に座し思案の思入。

犬清　古へより人々の、色に迷うて身を果すと、知りつゝ我も今の成行き、唯々東吉殿の御詫を力と樂しむ甲斐も情なや、御聞濟みなき君命に山を拔くべき力も挫け、大事の軍の御供なし御馬前に於て高名なし、日頃の恥辱を雪がんと思ひしことも水の泡、消ゆる此の身と覺悟の上は、いつまで生恥さらさんや、殊に最前信盛が一言奇怪故に、切腹なして相果てん。さはさりながら一方なら

ぬ交りの、東吉殿の詞を背く言譯に、せめて一筆書き殘さん。

〽胸に餘りし涙の雨を、こゝに蒔繪の硯箱、思ひつくしてかきつばた、

ト手箱の蓋を取り、硯箱へ水をさし、墨をすり、くり出しの巻紙へ書くことよろしく、

（獨）〽夕の嵐朝の雲、何れか思ひのたねならめ、

トよろしく書くことあつて、筆を止め、

生害なす事吉野が聞けば、日頃の貞心倶に死なんと言ふは必定。これ吉野、必ずわれを惜しまずと、後に長らへ親仁樣へ孝行するが、却つて此の身の供養ぞや。

（獨）〽寂しき夜半の鐘の聲、山に響きて曉の別れにまさる憂さ思ひ、

〽こなたに始終聞きゐる吉野、こらへ兼ねて走り出で、

吉野　聞えませぬ、そりやあなた、お胴慾でござりまするわいなあ、死ぬると御覺悟ある上は、お止め申しはいたしませぬが、なぜに此事一言言うては下さりませぬ、死なうと御覺悟なす樣な、御身にしたも、みんな此の身のなした科、あなたが御自害なさるなら、先へ殺して下さりませ。

〽殺してやいのと取り縋る、

犬清　さゝ、その恨みは道理なれども、そなたがし出せし事ならず、皆これ此身のなしたる業、倶に死

ぬるは易けれど、元より二人は不義故に御勘氣蒙むる身ならずや、それに又二人ともこゝに於て果てなば、情死せりと死後の嘲り受けん事の口惜しく、恨むを知りつゝ言はぬ心のその苦しさ、又二つには一人の親に先立ちなば不孝の第一、それぢやによつて此の道理をよく辨へ、我なき跡の追善供養、いたしてくりやれ、これ吉野。

トいろ〳〵あつて言ふ、吉野ぢつとこなし、

吉野　そりやお情ない、犬清樣、

〽過ぎにし春の花の宴、お庭の中口奥表、隔てはあれどおなじみの、御側仕への折ふしも、殿のお供でお出での時、初の御見のいろ模樣、人目を忍ぶ言の葉に結びし甲斐も情ない。

あなたばかり死なうとは、そりや聞えませぬ犬清樣、なんで長らへゐられませう、どうあつても死にまする。

犬清　いゝや、そなたは殺しはせぬ。

吉野　いゝえ、死にまする。

犬清　殺しはせぬ。

〽もつれて纒ふ蔦のしがらみ、

卜これを獨吟の上げになり、兩人よろしくあつて、

ヘ折からこなたに聲あつて、

東吉　やれおの〳〵、暫し待たれよ。

吉野　やゝ、あの聲は。

犬清　此下氏。

東吉　いかにも、それがしそれへ參つて、申す事あり。

ヘ言ひつゝ立出る此下東吉、見るに左枝は不審顏、

卜東吉上手よき所へ住ふ、犬清見て、

犬清　最前君の御歸館の御供にて、戻られしと思ひしに、どうしてこれへは。

東吉　その不審尤も至極、思ふ仔細のある故に、途中に於て御供の御免を蒙り取つて返し、最前より竊に樣子を窺へば、案に違はず御勘氣御免なきを歎き、生害なさん覺悟の體、吉野殿はじめ左近殿迄、ともに自害と爭ふは貞なり義なり、東吉感心いたしてござる。さはさりながら左枝氏、今暫く一命を捨て給ふな、こりや犬死でござらうがや。

犬清　なに、犬死と仰せあるは。

東吉　今東吉が信義の一言お聞きあれ。（ト合方になり、）いよ〳〵以つて今川氏㐂十萬の兵を引き、上洛なすの道すがら、隨はざるは亡ぼさん下心、さすれば清洲は軍の魁、則ち小田家の小勢を以つて一戰なさんは危ふき事故、一人たりとも味方の欲しき時なれば、御勘當御許しなされたきも兎角に拒むものある故、その人々の心を兼ねられ、御許しなきと察しられたり、それを見限り貴殿には、切腹なさん心底なれど捨つる一命延はりて、明日の合戰に討死あるこそ然るべし、さすれば日頃の汚名も晴れん、それぢやによつて今死ぬるを犬死と申せしぞ、必ず生害とゞまられよ。

〽詞を盡し理を責めて、諫めさとすに犬清は、厚き信義に思はずも、そゞろ涙をおし拭ひ、

ト東吉よろしくこなしあつていふ。犬清これを聞き思入あつて、

犬清　あゝ、かゝる不運の身をうとまず、誠に朋友の信義を盡し、理非を分けたる敎訓は父母にも勝りし御厚情、忝いと思はずも、落涙に及ぶ程、

〽骨身にこたへ胸に沁み、無明の醉ひのさめたる如く、御勘氣御免なき上は、一君に仕へぬ誠心を、

あらはさんとの生害も、貴殿の諫めなき時は、

〽無益の犬死、

萬事は貴殿の意に隨ひ、早や生害はとゞまり申さん。

〽聞いて悦ぶ妻舅、左近は嬉しく奥より立出で、

左近　委細は奥にて承りしが、流石は名に負ふ此下殿が理非明白なる御教訓に、左枝殿にも死をとゞまり、戰地に馳せ向ひ、身命擲ち拔群の働きなして武名を擧げなば、日頃の恥辱を雪ぐの道理。又それがしも役に立たずとも、御供いたすでござりませう。

吉野　又私も武士の妻、夫と共に出陣して、女ながらも潔う末世にその名を殘しまする。

左近　おゝ勇ましき娘が心底、既に無益の生害を遂げんとせしを此下殿のお情にて、こんな悦ばしい事はない。

〽悦ぶ親子犬淸も、愁ひを開き眉をよせ、

犬淸　それがしよく〳〵思慮するに、御勘氣御免なき身を以つて、此の儘戰場へ赴くとも、苦しうはござるまいの。

東吉　おゝ、その儀もそれがし心得たり、君命ゆるしなき時は、如何にも憚りある故に、鷲津丸根の砦には將士少なく心ならねば、貴殿は丸根の主將たる宅間大學へ賴み置けば、彼の手へ加はり鷲津の危ふきその時は、これをも助け忠戰なして高名せられよ。

犬清　重々厚き貴殿の信義、忘却すべき期のあらん。さある時には、丸根の砦へ赴いて、かの手へ加はり、死にもの狂ひに今川勢を皆殺し、屍は戰場にさらすとも、名を後代に殘さんは武士の本意、花々しく討死なさん。

東吉　いや、その討死も貴殿一人を捨殺しにはせぬ、それがしも朋友の信義を守り、一命を君恩に捨て、義を貴殿に守り、倶に討死なさんの所存。

犬清　こりや此下殿の詞とも覺えぬ事、倶に討死いたさんとは近頃もつて心得ず、それがしは罪を得てこゝに及べど、朋友の義を思うての討死なら、それがし却つて恨みに存ずる。貴殿には主君と倶に存亡を謀り給ふが誠忠とこそ申すべきに、朋友の身を思はゞ、又某が不忠となれば此の儀ひたすら御容赦あれ。

〽誠忠こもる一言に、此下につこと打笑みて、

東吉　いゝや、義によつて濫りに討死なすにはあらず、たゞ死を早むるは無謀の至り、たとひ力盡きて敗軍に及ぶとも、君御安泰の上は敵の圍みを切破り、難戰なして死を止まり、君亡命の期に至れば、その時こそは倶に所を替へずして討死せん程に、それがしに先立つて死を早まらば、生々世世此の東吉が恨みに存ずべし。必ずともにそれがしが知らせあるまで、先へ討死いたされな。

〽死を勸めても殺さぬかすがひ、天晴れ勝れし才智の此下、犬淸實にもと感じ入り、

犬淸　殘る方なき貴殿の配慮、早や戰も明日とこそ極れば、支度調へ丸根の砦へ赴かん。

東吉　おゝ、猶豫あつては何かの手後れ、

吉野　とも〴〵奧にて、着込みその外手傳うて、

左近　目出度き戰の門出なれば、祝ひの肴をわしが手料理。

東吉　片時も早く用意めされよ。

犬淸　然らば暫時御免あれ。

〽心勇みて三人は、打ち連れてこそ、

ト三人よろしくあつて奧へはひる。あとに東吉殘り、

〽入相の鐘まで鳴らぬ夏の日の空を見上げる此下が、胸には始終計略の頭をめぐらす折柄に

俄に聞ゆる法螺の音、（ト揚幕にて、竹法螺を吹き立てる、東吉こなしあつて、）

〽此下きつと聞耳立て、（トこなしあつて）

東吉　はて心得ぬあの法螺の音、こゝ、こだまに響くあの人聲は、まさしく人數を集める知せ。はてなあ。

〽向うにきつと眼を配り、まじろぎもせず打守る。

む、次第に近づく法螺の音色を考ふるに、軍事を勤むるものならず、百姓どもの一揆ならんが今しきりに殺伐の音いろを顯はすは、ふむ。

〽暫しためらふ折柄に、ぬつと出でたる怪しの曲者、

忍び　覺悟。

〽打つてかゝるを手練の東吉、飛鳥の如く身をかはし、手早く刀打落され、こりやたまらぬと逃げて行く、

ト東吉忍びの刀を鐵扇にて打落し、きつと見得、忍び下手へ逃げてはひろと、又上下より外の忍び飛んで出て竹槍にて

忍び二人　東吉動くな。

ト突いてかゝる。東吉兩人を相手に立廻りよろしくあつて、トゞ兩人倒れ伏す。

東吉　えゝ手にも足らざる青蠅ども、命冥加な奴ぢやなあ。

〽勢込んだるあなたより、林佐太郎息をばかりに駈け來り、

トばた〳〵になり、佐太郎陣立りゝしき拵へにて、鞭を持ち走り出來り、

佐太　此下殿おはするか、御注進々々々々。

東吉　おゝ、さいふは林佐太郎殿、して〳〵注進の仔細はなんと。

佐太　既に今日今川の先手の軍勢、はや三州の岡崎まで出張いたしてござりまする。

東吉　おゝ、すりや岡崎まで出張せしとか。して〳〵敵の軍勢は。

佐太　はツ。されば候、今川の先手の軍勢凡そ三萬餘騎。

〽富永朝日奈三浦をはじめ、譜代名を得しもの共を、主將となして二手にわけ、氏基自ら本道より、

山手は奥殿、海手は中島、

〽三道より押し寄せ來る有様は、高根颪か逆まく浪の潮にひとしく、丸根鷲津の砦を目がけのツ取らんずその勢ひ、

此下殿には清洲へ早速お歸りあつて、御評議あるやう、君の仰せでござりまする。

〽詞せはしく述ぶるにぞ、

東吉　然らば我等は、直に清洲へ歸城なさん。

佐太　拙者はこれより諸所の砦へ、此の由注進、御免。

〽引返してぞ走り行く。

ト佐太郎花道へ引返してはひる。

東吉　〽さこそあらんと此下は、跡見送つて聲高く、

東吉　やあ犬清殿、用意がよくば、疾く〱發足。（ト奥にて、）

犬清　直樣、これより打立たん。

〽以前に替る武士振りは、末世にその名芳しき梅の花香の左枝犬清、天晴れ勇しきその出立ち。

ト此文句にて、正面の襖一面に引拔くと、向う一面打ちぬき庭の遠見、犬清誂への着込みのなり、手に槍を持ち、左に誂への鎧をかゝへ出來る。これへ以前の忍び三人かゝるを双方見事に投げのけることあつて、

〽双方見合つてにつこと笑み、（ト兩人顏見合せ思入まつて、）

東吉　左枝殿にも味方の注進、定めし奥にて聞かれしならん。

犬清　委細は殘らず承りしが、して又味方の手配りは。

東吉　おゝ敵の先手は多勢を頼みに、小勢なりと侮つて丸根鷲津の砦を目懸け、只一と揉みに押し寄する敵を引受け柵内に立て籠りたる宅間大學、小田彈正、相圖を定め油斷を見濟まし切つて出で、

皆殺しにせん豫ての手筈。

犬清　おゝあつぱれ希代楠が、智略にをさ〳〵劣らぬ軍略。〽潮の如き大敵と戰ひなすとも味方は小勢、なれども忠義に凝りかたまりし巖石の堅きを以て打碎かん、寄手ひるんで敗走の、汐時見すまし柵内さつと押し開き、眞一文字に突いて出で、馬蹄にかけて匇伏せ蹴殺し、追ひ退けんは易けれども、若し敗軍となる時は、約を違へず死を止まり、人數をまとめ繰上げ申さん。（ト犬清よろしくあつて、）

東吉　おゝ潔し〳〵、若し敗軍いたしなば、勝にのつたる今川勢、何處までも追討ちせん。〽さある時には間道より、山手を廻つて不意に押し寄せ、旗本へ無二無三に切入つて、大將一人討取らば、

たとひ十萬二十萬敵勢あるとも崩れたち、味方の勝利疑ひなし、御安堵あれや犬清殿。

ト よろしくあつて、

犬清　おゝ心地よきその計略、われもその時ぬけがけなし、〽元より一命惜しまぬ忠義・雜兵端武者の嫌ひなく、當るを幸ひ切つて捨て、目ざすところは唯一人、

東吉　大將氏基が首討つて、

犬淸　閻魔の廳へ土產にせん。

〽拳合する軍慮の掛引、立出る親子は勇み立ち、

ト これにて奧より左近、白木の三方に土器を載せて持ち、跡より吉野好みのなりに着かへ、銚子を持ち、片手に干肴ののりし三方を持ち出來り。

左近　今雨雄が軍の掛引、味方の手配り、智勇勝れし此下殿の天晴れ軍略、それがしとてもやがて跡より追附き申さん。

犬淸　いざそれがしは丸根の砦へ赴かんが、本道行かば妨けあらん、山手を廻るがこれ屈竟。

東吉　又それがしは間道より、近道なして淸洲へ越さん。

左近　さあ、何はともあれ目出度い出陣。

東吉　軍の門出、吉例の杯。

犬淸　敵に勝栗。

吉野　よろ昆布、

左近　酌をするのはこの親仁、

〽思ひを汲み取る杯も、今ぞ別れと白木の小四方、祝す門出の吉野が胸の十死日、（

吉野　わたしも祝して、

〽言ひさま懐劍咽に立つれば、人々驚き、

ト吉野此の内下へおり、懐劍を抜き咽へ突き立てる。皆々驚き、

犬清　こりや何故の、

東吉
犬清　生害なるぞ。

〽いたはり起せば、手負は苦しき顔を上げ、

ト東吉、左近双方より介抱する、吉野苦痛のこなしにて、

吉野　何故とは、お情ないそのお詞。（ト篠入りの合方になり、）さあ、あなたも此度討死と、お覺悟あつての御出陣、その折供して共々に討死せんと思ひしが、跡でよく〳〵思うて見れば犬清は恥知らず、軍に女を連れしなどゝ、嘲り受けなばお恥辱と思ひ返してどの道に、捨てねばならぬ此の命生害なして門出の血祭り、

〽息もかれ〴〵語るにぞ、さこそと左近は涙を拂ひ、

左近　おゝよう言うた〳〵、長らく居たなら女に心惹かされて、未練な働きいたせしなど、言はれんこ

とを先ぐゝり、死する覺悟の我娘、

犬清 流石は我妻あつぱれ健氣、此の身もやがて討死なし、冥土で逢ふぞよ。

東吉 あゝ貞なり義なり、類ひ稀なる貞女の鑑、

左近 磨く節義は曇りなく、

犬清 眞如の月の影清き、

東吉 彌陀の御國へ赴くも、

吉野 あの世此の世の妻夫。

左近 後れ先立つ老少不定、

犬清 生死流轉の、

四人 浮世ぢやなあ。

〽倶に涙にくれ近き日と諸共に西の空、ときうつ計り胸の浪、寄せては返す如くなり、

〽吉野は苦しき顏を上げ。(ト大おとしの心にて皆々よろしくある。)

〽果しなければ此下は、

東吉 かういふ内に早や夕陽、時刻や移る、いざ打立たん。

左近　跡構はずと、
犬清　片時も早く、
〽歎きを跡に下り立ちて、
倶にこれにて別るゝとも、
東吉　心は一ツ道は二筋、
左近　三世の御主人忠孝の、
吉野　あゝもし、これが此の世の。（ト顔を上げる、此の途端懐剣をばつたり落し合掌する。）
犬清　おゝ。（ト立戻る心あつてこれを見込む、左近は唱名をする。吉野落入る。）
東吉　〽あはれ果敢なく、
ト本釣鐘を打込む。吉野落入る。三重にてよろしく、

幕

三幕目　南岩寺松原の場

〔役名――郡幸内、今川の臣赤間大九郎、庄屋杢兵衛、百姓四人、行列の侍大勢、幸内女房おみつ

「同一子幸松、百姓娘等。」

（南岩寺松原の場）　本舞臺一面の平舞臺、丸物の松並木、日覆より同じく松の釣枝、向う在體の遠見、上下藪疊、總て南岩寺松原の體、こゝに百姓四人鍬と竹箒を持ち立ちかゝり居る、此見得禪の勤めにて幕明く。

百一　當時天下の太守といふと先づ小田原の北條に、甲斐の武田、美濃の齋藤、皆隣國を切從へ、將軍職も同じことだ。

百二　中にも駿河の今川殿は、朝日の昇る勢ひにて、既に今度御上洛、行く道々も敵國故數萬人の御同勢、

百三　前代未聞の宿場の混雜、荷物の助鄕何やかや、夥しく人が入るので、近鄕近在からかり出され、百姓どもは寢る間もなく、

百四　今日はいよ〳〵氏基樣が、此の鳴海をお通り故、塵ツ葉一つないやうに、道の掃除をするやうにと、代官所から嚴しい言附け。

百一　それ故東も白まぬ內から、打連れ立つて掃除に出たが、一里餘りの長丁場、

百二　掃いても〳〵直そばから、繩切れや切草鞋が、溜るも往來が多い故、

百三　とう〳〵けふは一日がゝりで、夜にかゝるまで仕事をしたが、やかましやの下役に叱られる氣で、一服しようか。

百四　どうせやかましやの御代官に、褒められることはないから、休んでから始めよう。

三人　それがいゝ〳〵。

ト捨ゼリフにて捨石へ腰をかけ、火打で煙草を飲み居る。ばた〳〵になり、百姓の娘花道より走り出て直ぐ舞臺へ來り、

娘　大變ぢや〳〵。

百一　大變とは、軍でも始まつたか。

娘　いや〳〵、樣子は知らねど幸内樣の坊ちやまがお侍に捕へられて、あれ〳〵向うからやつて來る、何とか言つて詫び事してやつて下さりませ。

百二　それは成程大變ぢや、どういふ譯か、早う樣子が聞きたいものだ。

ト合方になり、花道より今川の臣赤間、鎧小手臑當、附太刀にて幸内の一子幸松を引ツ捕へ、跡より幸内の女房おみつ着流し、草履履き、その跡より庄屋羽織袴にて附き出來り、花道にて、

みつ　何頑是ない子供故、お許しなされて下さりませ。

赤間　たとひ幼年の者にもせよ、常とは違ふ御上洛、その供先を切つたからは、此のまゝには許されぬ。

庄屋　ではござりませうが、そこを何卒。

みつ　どうぞお許し、

兩人　下さりませ。

赤間　いや〳〵、こいつは許されぬ。さあ〳〵うせう〳〵。

卜幸松を引立て、舞臺へ來る。跡よりおみつ庄屋附添ひ來る。百姓これを見て立ちかゝり、

百一　や、こりや庄屋樣、

四人　何事でござりまする。

庄屋　おゝ、此のぼんちが今川樣の御供先を切つたので、御本陣へ連れて行かれるのだ。

百一　それは氣の毒な事でござるが。

百二　此のお觸の嚴しいのに。

百三　母御は附いて居なかつたか。

百四　飛んだことをしましたな。

みつ　庄屋殿からお觸があれば、よく言ひ附けて參りましたが、見事に咲いた道端の花に見とれてついうか〳〵、お供先を切りました故、引戻さうと思ふ内、お目に止つて捕へられ、申し譯もない事なれば、お前方も共々に、お詫びなされて下さりませ。

庄屋　只今母が申す通り、道端にある花に見とれて、ついお供先を切りましたも、何辨へぬ子供の事、母は元より私共も、とも〴〵お詫をいたしますれば、

百一　どうかお慈悲にぼんちをば、

百二　お許しなされて、

皆々　下さりませ。（ト皆々辭儀をする。）

赤間　その方どもが詫びなすとも、此の小兒を許されぬは、當時天下の勇將と、人も恐るゝ我主君氏基公の御上洛、その道筋の者どもは、蟄して宅に居るべきを、子供などを召し連れて、往來なすは不埒な奴、主君の威光にかゝはれば此の儘には許されぬ。

みつ　御尤もにはござりまするが、今日は此の子の誕生故、うぶすな樣へお參りさせ度く、御通行をも憚らず、召し連れましたは私の不調法故、幾重にも御免なされて下さりませ。

庄屋　子を思ふは親の常、行末祝うてうぶすな樣へ召し連れましたこと、そこの所を思召され。

百一　許してお遣り下さるのが、情を知ると申すもの、御武家様の御計ひ。
百二　偏にお許し下さりますやう、
娘　お願ひ申し、
皆々　上げまする。
赤間　いや／＼、たとひ何様詫びるとも、供先を切つたる奴、此儘許しおく時は、元より愚昧の百姓ども、御通行の路次におき、如何なる無禮をなさんも知れず、以後の見せしめ首打ち落し、掟嚴しき今川家の、威勢の程を見せてくれん。（ト幸松を突放し、刀へ手を掛ける。）
幸松　おゝ、かゝ様怖いわいなう。（トおみつに縋る。庄屋あわてゝ赤間を留め、）
庄屋　御尤もではござりまするが、まあ／＼お待ち下さりませ。（トおみつ、幸松を圍ひ、）
みつ　母が側にをりながら、お供先を切らしましたは、此の悴より我身の誤り、首を切らねば今川様の御威勢にかゝはりますなら、悴の替りに此の母の、首を切つて下さりませ。
赤間　おゝ、誰彼の容赦はない、望みとあらば子の替り、母の首を落して遣らん。
ト立ち掛ける。幸松前へ出て、
幸松　お供を切つたは私故、さあ、首を切つて下さりませ。

みつ　なんでこなたを打たせませうぞ。（ト幸松を引きのけ、）さあ、母を切つて下さりませ。
幸松　いえ〳〵私を。
みつ　いや私を。（ト兩人爭ふ。）
赤間　えゝ、いけ面倒な爭ひ立て、二人共に切つてくれう。（ト刀を拔きかける。庄屋これを留めて、）
庄屋　あゝもし〳〵、先づ〳〵お待ち下さりませ。
赤間　やあ、留め立ていたさば汝まで、生けてはおかぬぞ覺悟なせ。
庄屋　お留め申すは外でもない、あなた樣の御爲め故。
赤間　なに、身共が爲めとは。
庄屋　さあ此の南岩寺の本堂に、安置してある何とやらいふ名僧が、丹精なして彫つた像、不思議は血潮が大嫌ひ、此近鄕近在で人でも殺せば血潮の穢れで、忽ち雷が鳴出して、殺した者を八裂にするのは覿面不動の罪、それを御承知なら親子共、首をお討ちなされませ。
ト これを聞き赤間びつくりなし、
赤間　すりや、此所で血潮をあやせば、不動尊の祟りにて、忽ち雷が鳴出し、殺した者が裂かれるとか、そいつは何より無氣味なこと。（ト赤間恐れる思入、庄屋しめたといふこなしにて、）

庄屋　既に昨年北條家の御武家様が此の繩手で、馬士が慮外をいたしたとやらで、あなた樣のやうに御許しなされぬとあつて、首をぽんと切つたが最後、ぐわら〳〵〳〵と鳴り渡り、直にその場でその武家が、引き裂かれて死にました。

赤間　えゝ何と申す、首をぽんと切るが最後、ぐわら〳〵〳〵と鳴り出したとか、それはうつかり殺されぬ。

庄屋　いやもう、押す事のならぬはあらたかな不動尊、それ故こゝら近所では、剃刀で切つてさへ、直にお詫びをいたしまする。（ト百姓もうなづき合ひ、）

百一　もし〳〵、今切るとおつしやつた故、

百二　向うの方から鳴り出しさうな、

百三　神立雲が出かけました。

百四　こりやうつかりしては居られませぬ。

赤間　まだ切りもせぬその先から、神立雲は眞平だ。

庄屋　不動尊が御機嫌惡く、左樣な祟りがござりまするると、村中が難儀をします。

百一　どうぞ鳴り出さぬその内に、

四人　御料簡下さりませ。（ト赤間思入あつて、）

赤間　血をあやして、雷が鳴ると聞いては身共は嫌ひ故、此儘命は助けてくれる。

みつ　すりや、お助けなされて下さりますとな。

庄屋　それは有難うござりまする。

赤間　然し、せめての見せしめに。（ト幸松を蹴倒す、風の音になる。）

庄屋　やあ、日は暮れかゝるし、大分雲行が悪くなつた。

赤間　どれ、鳴り出さぬうち參らうか。（ト風の音、時の太鼓にて赤間上手へはひる。）

庄屋　やあ、口程にもない臆病者、雷に恐れて逃げて行きをつた。（トおみつ幸松を介抱して、）

みつ　これ幸松、今の侍に蹴られたが、何處か痛みはせぬかいの。

幸松　かゝ樣、こゝが痛いわいなう。（ト肩を押へる、おみつさすりながら、）

みつ　力任せに蹴られた故、嘸痛いことであらうわいなう。

庄屋　少し位痛い目をさつしやらうとも、辛抱さつしやれ、首のないにはましぢやわいの。

百一　いや、それはさうとお庄屋樣、合點の行かぬは今の話し、

百二　去年こゝの松原で、馬士が切られた話しも聞かねば、

百三　又不動樣のお祟りで、血潮をあやせば忽ちに、
百四　雷が鳴ると言はつしやつたが、ありやほんまのことでござりますか。
庄屋　えゝ、ほんまどころか大嘘た。
百一　えゝ、そんなら今の、
四人　話しは嘘か。
庄屋　どうやら見るから臆病さうな侍故に、血をあやなせば雷が、鳴ると僞つたが、まんまと首尾よく脅しに乗つて、首を切らずに行つたは仕合せ。
百一　流石は村の、
四人　庄屋樣。
庄屋　なんと偉い智慧者であらうが。（ト思入、おみつもこなしあつて）
みつ　それではあなたのお計らひで、切らうと言つた侍を、脅してお脱し下さりましたか。
庄屋　いかにも、私が計らひだ。
みつ　親子二人が危い命を助かりましたは、あなたのお蔭、何と御禮を申しませうやら。これ幸松、そなたも御禮を申しやいなう。

幸松　有難うござりまする。（ト兩手を附いて禮を言ふ。）

百一　それにつけても、まだお先觸れの御家來衆が見えないが、此の鹽梅では夜に入つてお着きになるかも知れないわい。

庄屋　此鹽梅では半道位とつぷり夜に入ることであらう、私もこれから宿の方を見廻つて來ねばならぬ。

百二　それでは一緒に、

四人　參りませう。

庄屋　これ御内儀、又もやこゝへ同勢が今に通れば少しも早う、足元の明るい内、此子を連れて歸るがよい。

みつ　戻りまするでござりまする。

庄屋　どれ、道端の檢分せうか。

ト風の音合方にて、庄屋先に百姓四人娘も共に上手へはひる。跡おみつ思入あつて、

みつ　思ひがけない今の難儀を、お庄屋殿のお蔭にて免れましたも信心なす、うぶすな樣の皆お助け、まあ有難いことぢやわいなあ。

ト向うへ向ひ、手を合せて拜む、幸松は腰へ差してゐた扇を出して見て、

幸松　これかゝ樣、明神樣で今貰うた扇が、折れてしまつたわいなう。

ト親骨の折れし、松の繪の扇を出す、おみつ見て、

みつ　明神樣の御別當が、松の千歳を祝うて、そちに下すつた目出度い扇も、今川のさつきの家來に蹴られた時、たしかに折れたに違ひない、今日幸松の誕生は時に取つての幸ひに、夫の望みの叶ふやう、明神樣へお參り申し、幸先祝ふ折も折、敵と思ふ今川家のその侍に親骨を、蹴折られしは心がゝり、もしや願ひも叶はずに、千代と思ふ末廣の、親骨子骨ばら／＼に、（ト心にかゝる思入あつて、）あゝ鶴龜々々。（ト此の時花道の揚幕にて、）

大勢　はいほう、片寄れ／＼。（ト言ふ、幸松向うを見て、）

幸松　あれ／＼、かゝ樣向うから、大勢こゝへ來るわいなう。

みつ　あれこそ慥に今川殿、又もやこゝで見咎められ、捕へられなば身の大事、

幸松　それでは何處へか行かうかえ。

みつ　おゝ、私と一緒に來やいなう。

ト行列三重になり、おみつ思入あつて幸松の手を引き上手へはひる。右の鳴物にて、花道より露拂ひ

二人、細き竹を持ち人を拂ひ出來る。後よりぶつさき羽織、半纏、股引、大小にて侍弓を持ち、大勢出來る、續いて同じぶつさき羽織、紐附、股引、大勢、誂への乘物、これを旅なりの陸尺大勢擔ぎ近習の侍大勢附添ひ出來る。乘物舞臺へ來る。能き程に、蔭にてドンと本鐵砲の音、皆々上下へ忍ぶ、風の音になり、よき程に本釣鐘を打込み、誂へ凄みの合方になり、竹藪を押し分け郡幸内、好みの鬘、黑の着附、大小、浪人の拵へ、鐵砲をかい込み出て、ホッと思入、又本釣鐘になる、侍二人前後より幸内に組附く、幸内拂ひのけて投げる。又二人替つて組附くを立廻つて投げのける、此内凄味の合方、呼子の笛にて、ドン〳〵ばた〳〵にて藪の内へはひる。よき程に藪より捕手逃げて出て來る。幸内拔身にて追ひかけ出て、左右よりかゝるを、激しき立廻りにて切倒し、きつと見得。誂への鳴物になり、これより松の木の間を拔けつ潜りつ捕物の立廻り存分あつて、トゞ捕手袖がらみにて幸内の袖をからみ引き倒す、皆々立廻りかゝる。幸内刎ね返す機に、片袖ちぎれる、そのまゝつか〳〵と花道へ脫れ行く。舞臺は捕手を一人幸内と間違へ押へつける。幸内ホット思入。これを木のかしら袖のもがれしをかくし、ドン〳〵カケリにて、逸散に花道へはひる。これと一緒に、

ひやうし　幕

四幕目　郡幸内詮議の場

〔役名――郡幸内、岡崎正行、葛山彈右衞門、侍關口、同赤間、足輕四人、醫者養仙、繩取、紺屋四郎兵衞、幸内妻おさい、同一子幸松等。〕

（郡幸内詮議の場）――本舞臺三間の間高二重、本庇本緣附、軒口へ今川の紋附けし幕を張り、向う大形の襖、上の方柵矢來、此の所へ六尺棒、袖がらみを飾り附け、下の方跡へ下げて冠木門、左右柵矢來、門出はひりあり、竹柄杓附きの番手桶を三つ積み、靑竹の先へ今川氏本陣といふ高札を立て上下へ別れて關口赤間の兩人床几に懸りゐる、此の見得時の太鼓にて幕明く

關口　只今打ちしは當宿の明大寺の八ツの太鼓、最早葛山彈右衞門殿の御出席に間もあるまい。

赤間　かく御旅中に白洲を立て、御詮議なさるも一昨日、丸山繩手で君を目がけ、鐵砲を打ちかけし狼藉者。

關口　證據になる片袖より、種々探索なせしところ、その曲者は小田家の浪人郡幸内と申す者故妻子迄も召捕つて、昨日より詮議なせど、白狀いたさぬしぶとい奴。

赤間　幸内めは兎も角も、妻子は苦痛に堪えかねて白狀をいたす筈の所を、明かさぬといふは餘程丈夫

な奴等でござる。

關口　それに岡崎五郎三郎殿が、手ぬるい詮議をなさる故、いよ〳〵よいことにして白状せねば、いつその事面倒故、責殺してしまはうと、最前ひそかに拙者へお賴み。

赤間　さすれば我々兩人が、手酷い拷問せずばなるまい。

關口　どうで無慈悲な責をなせば、罰があたる引込めと、言はるゝは當り前。

赤間　覺悟極めてかゝらにやならぬ。（ト奥にて）

彈右　關口赤間は白洲なるか。

關口　あのお聲は、

兩人　彈右衞門殿。

ト合方になり、奥より彈右衞門衣裳、上下、大小、好みの拵へにて出來り。

關口　これは〳〵葛山氏には、

赤間　お早い御出席で、

兩人　ござりまする。

彈右　岡崎氏には、いまだ御出席めされぬかな。

關口　今朝君の御用にて、鳴海表へ出張いたされ。
赤間　まだ御本陣へお歸りありし、御沙汰も我々承りませぬ。
彈右　然らばそれがし一人にて、君を狙ひし小田家の浪人、幸内めを呼出し、心の儘に拷問なさん。
關口　左樣ござらば、
赤間　幸内を。
彈右　おゝ、呼出しめされ。
赤間　はツ。（ト向うへ向ひ、）小田家の浪人郡幸内、急いでこれへ召連れられよ。
　　ト花道の揚幕にて、
足輕　畏つてござります。
　　トこれをきつかけに、床の淨瑠璃になる。
〽世の中はきのふに替る飛鳥川、淵瀬のならひ有明の月は夕に冴ゆれども、配所の苦患幸内が身はいましめに菱繩のからむ遺恨や縲絏の無念にうるむ目の内も、涙の雨に濡れ羽鳥、しを〳〵白洲へ引かれ來る。
ト此の内花道より郡幸内、好みの鬘、劍花菱の紋附の着附、本繩にかゝり浪士のなり、足輕四人筒ッ

ぼ達附一本ざし、繩を取り出來り、花道にて、

下にをらう。

ヘ番卒共はかたへに引据ゑ。(ト幸内を下手よき所へ引据ゑる。)

○　仰せに任せ幸内を、召連れましてござりまする。

關口　大切の囚人取逃さぬやう警固召され。

四人　心得ましてござりまする。(ト四人繩を取り、幸内の後ろへ控へる。)

ヘ左右を圍んで控ゆれば、彈右衛門は席を進め、(ト彈右衛門前へ出る。誂への合方になり、)

彈右　小田家の浪人、郡幸内、(ト幸内彈右衛門を見て思入。)其の方事一昨十五日、主人今川氏基公岡崎宿本陣へ夜に入つて御着の途中、南岩寺の松原で主人を目がけ御乘物へ再度まで鐵砲を打ちかけし曲者故、かく召捕つて禁獄さするに、只存ぜぬとのみ申脱れんとは、卑怯至極、何故速かに白狀いたさぬ。

ヘ尋ねに幸内面を上げ、

幸內　昨日より再應のお尋ねにござれども、幸内身に取り覺えなき故、只存ぜぬと申すより外、御返答はござりませぬ。

彈右　存ぜぬと申せども、既にその夜多人數にて、こゝやかしこ尋ねしところ、南岩寺の林より忍び出でたる者ある故、袖がらみにて引留めしが逃げるを留める機にて、片袖切つて逃行く折しも、月は隱れて暗紛れ、見失ひしが袖がらみに、殘りし袖は此の如く。（ト懷ろより誂の劍花菱の紋附さし片袖を出し、）劍花菱の紋所故、それを證據に詮議なせしも、汝が着する衣服の紋所、寸分違はぬ劍花菱は遁れぬ所だ、白狀いたせ。

幸内　何やらお尋ねなさるゝが、拙者に於ては存じ申さぬ、その曲者の手に掛りたる劍花菱の紋附を、着用せし故疑ひ受け、繩目の恥辱を受けまするが、此の衣服は先達て鎌倉表へ參りし折、彼の地に於て求めし古着、拙者が家の定紋ならず、證據に殘りし片袖は、何人の衣服なるか、劍花菱の紋附は世間にもまゝあれば、外を御詮議下されい。

ト言はせも果てず彈右衞門、

彈右　そりやその方が申さずとも、此の岡崎の市中在々、昨朝より詮議なせしが、劍花菱の定紋を用ゆるもの一人もなし、それ故殘りし片袖を染めし紺屋があらうかと、呼び出して尋ねし所、當所の紺屋四郎兵衞と申すもの、覺えありと申すゆゑ、段々探索いたせしに、その方より劍花菱の紋附きを二枚まで色揚げいたせし事ありと、慥かに申せばその方が定紋に相違ない。

幸内　それは紺屋が心得違ひ、拙者左様な覺えなし、外々よりの註文を、お尋ねが嚴しき故左様な事を申せしならん。
彈右　すりやその方は何事も、覺えないと申すのぢやな。
幸内　一向に覺えござらぬ。
彈右　しかとないか。
幸内　御念に及ばぬ。（ト彈右衞門思入あつて、）
彈右　それ、四郎兵衞を呼出せ。
○　はツ。（ト下手へ向ひ、）それに控へし紺屋四郎兵衞、御用の筋あり急いでこれへ。
ト下手にて、
四郎　畏つてござりまする。
〽はツと答へておづ〳〵と、小腰をかゞめ紺屋四郎兵衞、
ト下手より四郎兵衞羽織着流し、小風呂敷を持ち出來る。
へい、紺屋四郎兵衞まかり出ましてござりまする。
彈右　こりや四郎兵衞、その方それなる幸内より、劍花菱の紋附きし衣類の表を二枚まで、色揚げした

と申したな。

四郎　御意にござりまする。幸内殿より頼まれて、劔花菱の紋所を、その儘に置きまして、然も一枚色揚げをいたしましてござりまする。

幸内　こりや〳〵紺屋四郎兵衞とやら、左樣な品をその方へ、身共頼みし覺えはない。

四郎　あなたは御存じないかは知らぬが、御新造樣がお出でなされ、お頼みなされてござりまする。

幸内　まだ〳〵左樣なことを申すか、身共覺えのないと申すに、言ひがけをいたし居るな。

四郎　いえ、町人の身で御武家樣へ、何しに言ひがけいたしませう、あなたはお忘れなされたか、手前方にはきつとした證據があるでござりまする。

幸内　して、その證據と申すは。

四郎　いえ、その證據は外でもござりませぬ、御註文からお名前を留め置きまする帳面が、則ち證據でござりまする。

〽言ひつゝ風呂敷包より、紺屋は帳面取出し。（ト四郎兵衞風呂敷包より帳面を出し、）

關口　すりや、その帳に記しあるか。

赤間　その證據、早く見せやれ。（ト四郎兵衞帳面を開き、）

四郎　これ御覽下さりませ。黑羽二重劍花菱紋附表一枚、お納戸紬同じ紋附表一枚、右二枚共紋置にて色揚代十五匁田口村郡幸內樣。
幸內　むゝ。（トぎつくり思入。）
四郎　それからあとへ日々に、附込みました此の帳面、これが證據でござりまする。
彈右　かゝる慥な證據があつても、存ぜぬ知らぬと申しをるか。
幸內　さあ。
四郎　なんと言ひがけではござりますまい。
　〽反故にならざる帳面の、證據に幸內是非なくも、（トこれにて幸內是非なき思入あつて、）
幸內　斯く附込みの帳面に、委しく記しあるからは、僞りでもあるまいが、身共は一向存ぜぬ事、衣類は妻が仕末いたせば、定めて彼が賴みしならん。
彈右　それに相違あらざれば、南岩寺の松原で君へ鐵砲打ちかけしは、幸內汝に極つた。
關口　その夜は暗く姿は知れねど、袖がらみにて引きちぎりし、
赤間　袖にあり／＼劍花菱の、紋附きしが證據、さ眞直に、
三人　白狀いたせ。

幸内　何様御詮議なされても、氏基公を狙ひし事、此の身に毛頭覺えなき儀なれば、何ヶ度御尋ねなされても申上げ樣もござりませぬ。

彈右　いや、その樣に陳じても、汝が仕業といふ事を、現在妻が申せしぞ。

幸內　あの、女房が、申せしとな。

彈右　汝が白狀せぬ故に、只今彼處で妻さみを、拷問にかけし所、流石は女苦痛に堪へ兼ね、南岩寺の松原で氏基公を鐵砲で打たんとせしは、夫幸內なりと白狀せしが、それでも汝は知らぬと申すか。

幸內　すりや女房が、申せしとな。

〽はつとばかりに幸內が、（トびつくり思入あつて、氣をかへ、）察する所女の身で、手酷い拷問に堪へがたく、その身に覺え無き事を、白狀せしと覺えたり、たとひ女房が血迷うていかなる事を申さうとも此の幸內は存ぜぬ事故、白狀いたす覺えはない。

彈右　でも女房が白狀せしを、知らぬとは言はさぬぞ、此の上達つて陳ずれば、火水の責はまだなこと罪科も重き石を積み、身をひしいでも白狀さすが、それでも汝は言はざるか。

幸內　目よりも高く石を積まれ、膝は碎けて折れるとも、覺えなき儀は白狀いたさぬ。

トぢつと覺悟の思入。

四郎　まゝ申し幸內樣、いくら知らぬとおつしやつても、劍花菱の紋所が證據となれば目串は拔けぬ、とても死ぬる覺悟なら、餘計に痛いめせぬ內に、白狀なされて御仕置を受けたがよいではござりませぬか。

幸內　默れ町人、いか程此の場で拷問うけ、此の儘一命捨てればとて、白狀せぬは小田家の浪人、獄屋の者の手にはかゝらぬ。身に覺えもない事を白狀なして罪科を受けうや、馬鹿なことだ。

〽惡びれもせぬ幸內が、覺悟の體、

彈右　さりとはしぶとい素浪人、此の上は仕法あり、妻子をこれへ引出せ。

赤間　畏つてござりまする。

〽はツと答へて又九郎、獄屋をさして走り行く。（ト赤間思入あつて花道へ走りはひる。）

四郎　それではこれから女房子を、お責めなされまするとか、見るのも氣の毒　私は、御用濟みにござりますれば、お暇下しおかれませう。

彈右　いや、その方は掛り合ひ、歸す事は罷りならぬ。

四郎　え、まだそれでは歸られませぬか。

關口　此の場にあつて今川家の、依怙なき政道見物いたせ。

四郎　それは迷惑なことでござりまする。

　　　ト花道の揚幕にて、

侍　きり〳〵歩め。

　　〽憐れなるかな幸内の、妻のおさみは拷問に、やつれ果てたるしばり繩、屠所の羊の歩みさへ、蔦の小路のそれならで、腰にまつはる幸松も、血筋の繩に引かれ來る．頑是なき身ぞ涙なれ。

　　ト此の内花道より、おさみ結び髪、無地物の着附、腰繩にて下侍繩を取り、附添ひ出る。跡より幸松紋のある肩入、武家の忰と見えるなり、腰繩にかゝり出來り、赤間此の繩を取り出て來る。花道にてよろしく思入、此の内彈右衛門關口に幸内を上の方へやれといふ思入、關口心得幸内を上の方へやる、花道の人數は平舞臺の下手へ來り、おさみを引据ゑる、幸松これに付居る。

赤間　幸内が妻子のもの、召連れましてござりまする。

彈右　これへ引出せ。

赤間　はッ。

　　〽情容赦も荒けなく、前へ引き出し女房が、夫の顔を見るよりも、

ト赤間おさみを引出す、おさみ幸内を見て、

さみ　や、幸内殿か。

幸松　とゝ樣、逢ひたかつたわいなう。

へ寄らんとなすを無慈悲にも、傍へは叶はぬ退れよと、襟上取つて引倒せば。

ト幸松繩付きの儘、幸内の側へ行かうとするを、赤間むごく投り出す。

さみ　まゝ申し、何頑是もない子供をば、手荒い事して下さりますな。

四郎　何處で打ちはせなんだか、よくまあ坊は泣かなんだ。

ト四郎兵衞起しておさみの側へ連れて來る。幸松おさみに縋り、

幸松　かゝ樣、とゝ樣の側へ行きたいわいの。

さみ　おゝ行きたいのは尤もだが、そなたもわしも繩目に合ひ、捕はれの身となつたれば、自由に側へは行かれぬわいの。

幸松　いや〳〵側へ行きたいわいの。

へ慕ふわやくも恩愛のなさけ容赦もあらけなく、

赤間　えゝ喧しい餓鬼めだな。

〽またもや足で蹴返せば、

四郎　あゝこれ危ない、何にも言はずに、默つてござれ〳〵。（ト四郎兵衛子供を圍ひいたはる。）

〽おさみは夫に打向ひ、（ト誂への合方になり、おさみ前へ出て思入。）

さみ　幸内どの、思はぬ罪の疑ひ受け、昨日からの拷問に、嘸やお前も辛い責苦に、逢はしやつたでござりませうな。

〽尋ぬる詞幸内は、何故大事を明かせしと、思ふ怒りの面色にて、

幸内　責めに逢ふのは覺悟の前、死んでも覺えのないことは、白狀せまいと思つたに、それにおのれは言ひ甲斐なく、何で白狀いたせしぞ、見下げ果てたるうつけ者めが。

トきつと言ふ。おさみ心得ぬ思入あつて、

さみ　えゝ、白狀せしとは。

幸内　あれ程申し聞かせしに、苦痛に堪え兼ね覺えもなき、氏基殿を鐵砲にて狙ひしは夫なりと、よくも白狀いたせしな。

さみ　なんで私が、その樣な事を。

幸内　なに、せぬことがあるものぞ、これにござる彈右衛門殿が、白狀せしと言はれたれば。

さみ　いえ〳〵それは僞り事、わたしも武士の女房故、責め殺されて死すればとて、身に覺えもなきことを、なんで白狀しませうぞ。
幸内　すりや、白狀はいたさぬとか。
さみ　知れたことでござんすわいなあ。
〽言ひ切る詞に幸内は、さてはわれを落さんと、企みしことゝ心を定め、
ト幸内彈右衞門に向ひ、
幸内　只今妻が白狀せぬと申すが、如何でござる彈右衞門殿。
彈右　さあ、妻が落ちしと申すのは、汝に白狀さゝう爲め、僞つたのも一つの計略。
幸内　さりとは卑怯なお役人、議論いたすも無益ながら、女子供を瞞すやうな、左樣な事では誠の武士たる、小田家の浪人郡幸内、存じたことでも白狀いたさぬ。
〽尻目にかけて幸内が、せゝら笑へばくわつと急き立ち、
彈右　白狀せぬとて證據があれば、その儘には致されぬ。卑怯とさみなす彈右衞門、詮議の手並見せてくれう。
幸内　そのお手並は昨日より、度々拜見いたしてござる。

彈右　え〻面憎きその一言、しめ上げて拷問めされ。

關口
赤間　心得ました。

〽いふより早く兩人が、腕を逆にねぢ上げれば、痛さに堪ゆるその有樣、より棒取つて左右より、息をもつかせず續け打ち、妻の見る前わが子の前、未練を見せじと喰ひしばれば、いつか溢る〻血の淚、夫が苦痛うめき聲、

〽そばにおさみは消入る思ひ、見るに忍びず聲を上げ、

ト此の内關口赤間に足輕手傳ひ、幸內を馬つなぎの柱の環へ繩を引上げ、幸內の體をく〻り下げ、關口赤間誂への棒を持ち、左右より幸內を打ちながら、えい〳〵と散々に打つ、おさみこれを見て思入あつて、そばへ行かうとするを、繩取り引つぱる。此の間に幸松つか〳〵と行くを、繩を取つて引戻し、よろしくあつて、

さみ　あいや二人の衆、脾弱い體でござんすから、手荒い事して下さりますな。

〽又もやそばへ匍ひ行くを、繩先取つて引戻し、その手に縋る幸松が、

ト又兩人行かうとするを、足輕引戻す。

關口　主を狙ふ大罪人、手ぬるい詮議がなるものか。

赤間　言はゞ敵も同然故、踏み殺しても大事ない。

兩人　さあぬかせ〳〵、きり〳〵とぬかしをらぬか。（ト又さん〴〵に幸内を打つ。）

さみ　えゝ打たで叶はぬことならば、夫の替りに此の身を打ち、苦痛をゆるめて下さりませ、お慈悲お情でござります。

〽お慈悲〳〵と伏し拜むを、餘所に見上げて振上げるその手に縋る幸松に、流石に鬼も目に淚

トおさみ手を合せ拜む、是れを赤間棒で拂ひのける。關口又棒を振上げる。幸松つか〳〵と行き手に縋り附く、關口振り拂ふ。又その手にすがる。

幸内　こりや〳〵女房、そちも悴も何も言ふな、たとひ歎願なすとても聞入れのない無道人、覺悟いたせば拷問に打殺されて死ぬが本望、誠の武士は命を惜しまぬ。さあ存分に拷問召され。

彈右　おゝ、打殺されるが覺悟なら、身共が拷問いたしてくれう。

〽袴引立て彈右衞門は、庭に下り立ちより棒取上げ、

ト是にて彈右衞門、袴の股立を取り、庭へ下りること、

無敵流の免許皆傳、覺えある彈右衞門が、此の腕ぶしを受けて見よ。

〽息をもつかず、つゞけ打ち、(ト幸内をさん〴〵に打ち、)もう一と打ち打据ゑれば、脊骨が微塵に砕けるぞよ。さあ、打たるゝが苦しくば、まことを白状せよ。

幸内 脊骨を微塵に打ち折られ、此の儘こゝで死するとも何白状をいたさうぞ、存分に打たつせえ。

彈右 おゝ、打たねえでどうするものか。

〽又振り上ぐれば女房子が、右と左りに縋り付き、

ト彈右衞門棒を振上げる、これにておさみ匍ひ寄り、すがり留めるを突き退け、幸松又縋り留め、

さみ どうぞ此の身を替りに打つて、

幸松 とゝ様許して下さりませ。

兩人 もし、お願ひでござりまする。

〽その身を惜しまぬ覺悟の體、

彈右 おゝ、それ程に打たれたくば、望みの通り打つてくれう。

さみ 早く打つて、

兩人 下さりませ。

〽打たるゝ覺悟に彈右衛門、詮議の種と打ちうなづき、

彈右　昨日からの拷問に足腰の立たぬ程打ち据ゑたが、此の上打てば五體も叶はぬは知れたこと、隔てぬ仲の夫婦故、氏基公を狙ひしはよも存ぜぬことはあるまい、速かにそれを言へば、今汝らを打つにも及ばぬ、詮議するのは役目ながら、憎まれたくはないものだ。さあ幸内が打ちかけしと有體に言つてしまへ、さうすれば打ちはせぬ。

さみ　昨日より幾度となく、そのお尋ねでござりまするが、夫は元より私も、存ぜぬこと故申されませぬ。

彈右　何存ぜぬことがあるものか、痛い目せぬ内言つてしまへ。

さみ　たとひ何とおつしやつても、露塵ほども存じませぬ。

彈右　打殺されても、白狀せぬか。

さみ　死んでも存ぜぬ事故に、

彈右　言はぬとあれば是非がない、無慈悲なものと言はゞ言へ、拷問なすも今日の役目、どれ手酷い目に合はしてくれう。

〽いで一打ちと彈右衛門、棒おッ取つて立ちかゝる、其の手に縋り幼兒が、

幸松　堪忍して下さりませ。

彈右　それ、餓鬼めを引据ゑい。

赤間　心得ました。

〽兩手を取つて引倒せば、脊中をはすに一イ二ウと數を重ねて打ちかけるを側に見て居る幸内が我故妻子に此の苦しみ、白狀したさを喰ひしばる、その切なさは打たるゝより、胸も浪打つ一世の瀨戸、子はおろ〳〵とたゞよひて、取りつく島も泣くばかり、

卜此の內赤間關口おさみの兩手を取つて引倒し、おさみの脊中を彈右衞門打ち、おさみ顏を上げ苦しき思入、幸内これを見て切なき思入、幸松うろ〳〵泣く、此の件よろしくあつて、

幸內　こりやおさみ、氣を慥かに持ち、覺えなき事とは言へど、かゝる責苦に合ひながら、よくも白狀いたさぬぞ、それでこそ武士の妻、

さみ　その一言が冥土の土產、早う死にたうござります、どうぞ殺して下さりませ。

彈右　苦痛に勞れし體故、殺すは何の手間暇入らず、まだ〳〵滅多に殺しはせぬ、息のある內責めてくれう。

〽言ふに幸松さかしくも、

幸松　これモウしお役人樣、かゝ樣は昨日から鹽梅が惡い故、どうぞ許して下さりませ。
〽紅葉のやうな手を合せ、拜む心ぞ不愍なれ、これ幸ひと心附き、

彈右　こりやしぶとい夫婦を責めんより、かほそき骨の小忰を責めて白狀させるが近道、いで一と折檻いたしてくれん。
〽首玉むごく引据ゑて、高手小手にいましむれば、

幸內　やあ、何辨へなきその忰、責むるは卑怯至極であらう。

彈右　いゝや卑怯なことはない、親の因果が子に報ふ、みじめなざまを見物しろ。
〽棒おッ取つて打ちければ、

幸松　苦しいわいの、痛いわいなう。

彈右　おゝ苦しいのは尤もだ、おのれの親がしぶといから、その身ばかりか餓鬼めまで、苦痛をさせるも自業自得、これでも白狀いたさぬか。
〽よたけ泣き入る子を責むる親のしもとは此の世から、ぐれんの地獄阿鼻叫喚、打たるゝ子より打見やる、夫婦はしどろ氣も狂亂、
ト彈右衞門幸松を打つ、幸松苦しむ、幸內おさみこれを見て留めたき思ひ入にて行かうとするを、關

口赤間縄を取つて引き戻す、四郎兵衛見兼ねて立たうとするを、足輕棒で制す。

幸內　えゝ、よたけもないその倅、その樣に打たずとも、

さみ　此の身を打つてあの子が命、どうぞ助けて下さりませ。

ト彈右衛門幸松の襟上を取つて幸內の前へ行き、突きつけて、

彈右　然らば命助けてくれうが、その替り白狀なすか。

幸內　さあ、それは。（ト又おさみの前へ突き付け、）

彈右　但しはこゝで、打殺さうか。

さみ　さあ、それは。

彈右　白狀するか。

幸內　さあ。

彈右　ぶち殺さうか。

さみ　さあ、

彈右　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

彈右　御手際の程見物いたさう。
正行　いや、其許は奥へござつて、暫し御休息下されい。
四郎　して私は。
正行　其方は何者ぢや。
四郎　當國岡崎に年久しう住みまする、紺屋四郎兵衛にござりまする。
正行　苦しうない、立て〳〵。
關口　して我々兩人は、
正行　御手前達も、休息めされ。
關口　でもわれ〳〵が、此の場に於て、
赤間　彼等夫婦を、
兩人　拷問いたすに。
正行　はて、それがし自身に拷問いたせば、彈右衛門殿諸共に、
彈右　むゝ、然らば休息いたすでござらう。
〽一つ穴なる野良狐、眷族引き連れ入りにける。

ト時の太鼓になり、彈右衛門先に赤間關口上手へはひる。四郎兵衛は下手へはひる。幸内おさみ拷問に勞れし體、正行見て、

正行 やあ〳〵養仙老、いづれにあるか、早々來れ。

養仙 はあゝ、（ト出來り〕何ぞ御用でござりまする。

正行 幸内夫婦へ、氣つけを與へよ。

養仙 畏つてござりまする。

正行 こりや、其方共は幸内が、小手をゆるして次へ立て。

足輕 はッ。（ト幸内の小手をゆるし、）最早御用はござりませぬか。

正行 用事はない、休息いたせ。

四人 はあゝ。（ト足輕四人下手へはひる、此の内合方にて、養仙幸内を介抱なし、）

養仙 餘程拷問に逢ひしと見え、殊の外身體の勞れ、お上より下さる氣つけ、有難く頂戴めされ。

幸内 死する覺悟の拙者故、服藥は仕らぬ。

養仙 ではござらうが、岡崎樣の御心添へ、服藥召され。

幸内 岡崎氏のお藥なら、頂戴いたすでござらう。

ト養仙錫の器より氣附を取出し、幸内に與へる、幸松手補の水を汲み、幸内のそばへ持つて來て、

幸松　と丶樣、水を上げませう。

養仙　おゝ、よう氣が附いた。賢い〳〵。（ト此の内幸内水を吞み嬉しき思入、養仙おさみを介抱なし、）内儀は取り分け餘計な勞れ、葛山氏の拷問故、手酷い事をなされたと見える。然し、いか程勞れるも脉體がたしか故、氣をしつかりと持たつしやい。

さみ　有難うござりまする。（ト養仙氣附の練藥をやる、幸松又水を汲み來り、）

幸松　母樣、水を上げようわいなう。

さみ　おゝ忝い、嬉しいぞよ。

トおさみ柄杓を取つて水を吞み、むせる故、養仙介抱なす。

幸松　脊中をさすつて上げようわいの。（ト幸松おさみの脊中をさすりながら、）襟に痣が出來ましたは、さぞ痛うござりませうな。

さみ　さあ、わしよりはそなたこそ、嘸體が痛むであらう。

幸松　いえ〳〵、わしは何ともないわいなあ。

幸内　なに、ないことがあるものぞ、われ〳〵より小さな體、骨も碎けにやならぬのに。

さみ　痛い顔もしやらぬは、神様のお助けなるか。

幸內　あゝ御方便なものぢやなあ。

　　へ始終の樣子とつくと見て、（ト兩人の樣子を養仙見て、）

養仙　はッ、五體のなやみに少々は、勞れのやうにも見えまするが、脉體に別條はござりませぬ。

正行　おゝ大儀であつた、用事があらば呼ぶ程に、次へ參つて控へて居よ。

養仙　左樣なら又後刻。（ト立ち懸る。）

幸松　もしお醫者樣、わしにもお藥下さりませ。

養仙　いや、そなたには氣附より、肉桂を持つて來てやりませう。

幸松　たんと持つて來て下さりませ。

養仙　親孝行のお前故、たんと持つて來てやりませう。

　　へ醫は仁術に養仙が落す涙の水藥、袖を濡らして歸りける。

　　ト笛の入りたる床の合方になり、正行あたりへ思入ありて、緣のはしへ出て、

正行　こりや幸內。

幸內　はッ。（ト思入。）

正行　汝は元より妻子迄彈右衛門が拷問にて、嘸身體が勞れしならん、苦痛の程察しやる。

幸内　お情厚きそのお詞、われ〳〵が身に取りまして、何と謝すべき詞とても、口にはたとへ難なし。

正行　はて、その禮には及ばぬこと。今正行が申す事よッく承はれ。（ト合方になり、）存ぜぬ知らぬと申す者を、かく再應の拷問なすも、主人今川氏基公を鐵砲にて打たんとなせし輕からざる大罪故白狀に及ぶそれまでは、妻子迄も諸共に數度拷問にかけねばならぬ、何やう存ぜぬと申しても、袖がらみにて引ッ切つたるその片袖の紋所、劍花菱が慥な證據、また汝が百姓町人ならば脫れもせんが、此の度主君上洛の途中に於て、戰爭なさんとかねて吳越の思ひをなす、小田春永が舊臣故、かゝる大義もあらんも知れず、それ故詮議の遂ぐるのぢや。これが盜賊にてもある事なら主人の恥辱に相成る故白狀せぬも尤もながら、よしや本望とげずとも、當の敵たる氏基を討ち取らんと狙ひしは、故主へ對して大忠臣、今速かに白狀なせば、妻子が命は正行が身にかへても助け得させん。

幸内　理非明白なる正行殿、石を積まれ脊を割られ、氣絶いたす拷問より、遙かに苦しきその仰せ、全く存ぜぬ事故に何ヶ度お尋ねなされても、只存ぜぬと申すより外にはお答へはござりませぬ。

正行　すりや、どうあつても白狀いたさず、まだ此の上に拷問受け、妻は元より頑是なき、それなる悴

幸松に、一命捨てさす所存なるか。

幸内　不便には存じますれど、御疑念晴れず再度の拷問、此の身は元より頑是なき妻や悴に至るまで、責め殺されて死するのも、これ皆その身の因果故と、拙者は覺悟いたしてござる。

正行　本望遂げぬを無念に思ひ、責め殺されても白狀せじと、臍を堅めし心底は、敵ながらも天晴故、寛仁の御沙汰をば某竊に願うたれど、御採用なき上は汝が助命は所詮叶はぬ、せめては悴の助命をいたし、勇士の種を殘したく、それ故に此の裁斷、罪を憎んで人を憎まずと、此の正行が心中を推察なさば速かに白狀なして幸松が、老先長き一命助け、郡の家名たてさすが親たる者の慈悲にあらずや。

幸内　さあ、それは。

正行　但し無慈悲に、責殺すか。

幸内　さあ。

正行　助命さすか。

幸内　さあ、

正行　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

正行　空を翔ける鳥類、地を走る獸まで、子を憐れまぬはなきものを、非業に一命捨てさするは、心得違ひであらうがや。

〽仁惠深き正行が、道を立てたる拷問に、いかゞはせんとつおいつ、思案にくれしがかたへなる立札引拔き、埒竹の竹おつ取つて氏基と、記せし立札突き貫き、

ト此の內幸內おさみ顏見合せ、苦しき思入あつて、幸內立札を見て思入あつて、ずつと立つて、竹をぬき、下へ倒し、埒垣の竹をとり、氏基といふ所を突く、仕掛にて札へ埒竹突立つ、幸內につこりと思入。

今川氏基本陣と、書き記したる此の關札、今埒竹にて貫きしは。

幸內　晉の豫讓がためしにならひ、今川殿を討取らんと、思ひ立つたる念も晴れたり、

さみ　一心凝りしと言ひながら、刃物にあらぬ埒竹にて、此の關札を貫きしは、

正行　それぞ則ち虎と見て、石に立つ矢の一念力、

幸內　これにて拙者が名義も立ち、今は何をか包み申さん。いかにも此の程當國、南岩寺の松原にて、

正行　主君氏基を狙ひしは、

幸内　かくいふ郡幸内なり。

正行　ほゝお、晋の豫讓のためしにならひ、名義を立て白狀せしは、流石に小田家の浪士なり、

〽感心せしと賞すれば、幸内は威儀を改め、（ト誂への合方になり、）

幸内　事新しく申さずとも、御存じのことながら元某は小田家の臣郡新左衞門が忰にて、いまだ主君に仕へし折、朋友山口九郎次郎が讒言によつて不興を受け、身の尾張路を跡になし、知べを當に三州の矢矧邊りに住ひ、水の流れと人の身の浮沈ある浮浪人、いつぞは恨みを返さんと思ひし山口九郎次郎、今川方へ内通せし咎に依つて東吉郎に誅せられ、多年の恨みも返さぬに、せめて一つの功を立てんと思ひ、小田家の爲めに大敵たる今川氏基討取らんと、思ふに幸ひ夜に入つて、岡崎泊りと聞きし故、今や遲しと松原に隱れ忍んで覘ひを定め、只一と打と思ひしも、時めく運に討ち損じ、逃ぐる折柄袖がらみにて片袖を引切られ、劒花菱の紋が證據に斯くからめとられしかど、本望遂げぬ悔しさに命を捨ても白狀せまじと、覺悟なしたる幸内も貴殿の情に包み兼ね、

〽これなる高札引きぬいて、氏基といふ文字を貫き、

日頃の思ひ晴らせし故、包みかくさず白狀なしたり、科は幸内唯一人、御法通りの御仕置に此の身を行ひ下されい。

〽妻や我子を助けたく、死ぬる覺悟で幸內が、白狀なせば妻は泣く〳〵目を押し拭ひ、

ト幸內よろしく、おさみこなしあつて、

さみ　岡崎樣のお情に、夫も包み隱し兼ね、白狀なせし上からは、科は脫れぬ私も夫と共にお仕置に仰せ聞けられ下さりませう。

幸內　こりや女房何を申す、氏基公を鐵砲で討たんと思ひ立つたるは、此の幸內只一人、そちが存じた事でなければ、刑罰受けるは我ばかり、そちは長らへ幸松が成人なすまで附添うて、萬事の世話をいたしてくりやれ。

さみ　幸松が身も案じられ、夫婦は一つ私も同罪、親子三人一緒に死にたうござりまする。

幸內　いや〳〵それは心得違ひ、親子三人相果てなば、跡を弔ふものもなく、一度浪人なしたれど、再び故主へ歸參なさうと、思ひし望みも水の泡、消え行く我に心殘さず、仁心深き正行殿の情を受けて命延はり、成人の後我弟同苗郡新助方へ、頼みて小田家へ歸參なす樣、長らへくれるが夫へ貞節、必ず死なうと思ふなよ。

さみ　いえ〳〵なんと言はしやんしても、頼みに思ふ夫に別れ、生きながらへて居られませう。

〽思ひ切つたる覺悟の體、

幸內　やあ、さりとては聞きわけなし、得心なくば是非に及ばぬ、夫婦の緣も是限り、忰とても離別ちやぞ。

さみ　いえ〳〵、死なねばなりませぬ。

幸內　然らば離別いたさうか。

さみ　それぢやと申して。

幸內　然らば跡へ長らへるか。

さみ　さあ、それは。

幸內　さあ、

さみ　さあ、

幸內　さあ〳〵〳〵。

さみ

幸內　あのこゝな、痴けものめが。

〽難題なんと女房が、夫を恨みて泣伏せば、幸內威儀を改めて、

ト双方よろしくあつて、

たゞ此の上の御願ひは、何卒妻子の身の上を。

正行　氣遣ひあるな、刀にかけて、身共が助命いたさせん。

幸內　それ承つて身共も安堵、最早や思ひおくことなし、御法通りの御仕置に、仰せつけられ下さりませう。

〽身をへりくだり刑罰を、願ふ折柄一間より、邪智いと深き彈右衞門、手槍携へ立出て、

ト此の內下手より、以前の彈右衞門、襷、つまみ股立、手槍を持ち出來り、

彈右　白狀なす上からは、主人を狙ひし大罪人、いで槍玉に上げてくれん。

ト彈右衞門槍をしごいて幸內へ突いてかゝる。幸內身をかはし、埒竹にて是を止める。

正行　やれ卒爾なり彈右衞門殿、たとひ白狀なせばとて、刑罰にも法例あり。

彈右　おゝその法例の逆磔、田樂ざしにいたしてくれう。

〽思ひ白洲の緣先に槍ひつしごき突きかゝるを、こなたはきつと身構へなし、

幸內　大罪犯せし拙者なれど、仁義を知らぬその方が、なんで成敗受けようぞ。

彈右　何を小癪な。

〽又突きかけるを上段下段、呵責に弱りし幸內が、受けつ流しつやゝ暫し、あしらふすきや埒竹に、槍の鹽首はツしと打ち、手練に獲物切折りしは、天晴れ小田家の勇士なり。

ト此の内槍の穗先よき所を、仕掛にて折るを、彈右衞門取らうとするを幸内槍を取りて突き出す、それを彈右衞門刀を拔かうとする。正行つか〳〵と行きて、彈右衞門を止めて、

正行　罪科を糺し我君へ、進達なせし上ならでは、刑罪ならぬ大事の囚人、いらぬ成敗。

彈右　むゝ。（ト正行きつと留め、）

正行　控へてござれ。

〽止むるこなた幸内が、あり合ふ槍を取り直し、むんずと腹へ突立つれば、これはと驚く女房伜、

ト正行彈右衞門を止める、幸内思入あつて、件の槍を取り直し、腹へ突き立てる。おさみ幸松びつくりなし、

さみ　やゝ、こりや夫には自殺ありしか。

幸松　とゝ樣、死なずに居て下さりませ。

〽縋り歎けば吐息をつき、

幸内　南岩寺の松原で、氏基公を討たんとせし、此の身の科を有體に、白狀いたせし上からは、武士の情に岡崎氏、切腹御免下されい。

正行　主人を狙ふ大罪人、切腹は許されねど、今川家の印ある槍にて死するは此方にて、刑罪なすも同じこと、正行是れにて見屆けしぞ。

幸內　ちえ丶忝い。（ト嬉しき思入、おさみ思入あつて、）

さみ　頼みに思ふ夫に別れ、何樂しみに長らへん、幸松そなたも覺悟しや。

〽落ち散る埒竹拾ひ取り、我子とともに死なんとする、樣子窺ふ養仙が、かたへの門より走り出で、

ト此の內おさみ有合ふ埒竹を取つて幸松の胸元へ當てるところへ、下手より以前の養仙出ておさみを留めて、

養仙　わが夫の異見も聞かず、早まつたことさつしやるな。

さみ　すりや、死ぬるにも死なれませぬか。

〽我子と共に泣伏せば、

正行　お丶養仙老よくぞ留めしぞ、幸內白狀いたす上は、妻子の助命は當然なり、かれが身寄りの新助方へ、介抱なして伴ひくれよ。

養仙　その儀は委細承知仕りまする。

彈右　いや大罪人の妻子なれば、助命は叶はぬ覺悟いたせ。
正行　あいや貴殿は添役、入らぬ御差配、
彈右　それぢやと申して。
正行　お控へなされい。
養仙　さゝ、お暇出でし上からは、早く此の場を立たつしやれ。
さみ　とはいへ此まゝ。
幸內　やあ、此の期に及び未練であらう。
〽呵るもなさけ妻や子が、最期をあとに泣く〳〵も、
彈右　思へば〳〵。（ト又立ちかゝるを留めて、）
正行　切腹慥かに見屆けしぞ。
幸內　むゝ。（トうなづき、幸內あり合ふ埒竹を持ち咽へ突立てる。仕掛にて血大分出る、本釣鐘。）
〽淸き最期ぞ、
ト床の三重、本釣鐘にてよろしく、

幕

五幕目

今川家本陣の場
桶狹間合戰の場

〔役名——今川治部太輔氏基、家臣水間左京之助、同岡崎五郎三郎正行、同庵原春太郎、同蘆久保禮阿彌、能師左近、小田上總之助春永、家臣此下東吉、同左枝犬淸、同香取小平太、同郡新助、同軍卒六人、同軍兵大勢、氏基愛妾朝霧、同腰元等。〕

（今川家本陣の場）——本舞臺四間通しの高二重、本緣附、白洲階子、向う金地、子持筋の襖、軒口に今川家の紋附きし白幕を張り、いつものところ陣門、下の方柵矢來、松の立木、日覆より同じく釣枝、總て尾州桶狹間本陣の體。こゝに〇△□◎の軍兵四人陣立のなり、後ろ鉢卷にて槍を持ち、立ちかゝりゐる見得、ドンチャン竹法螺の音にて幕明く。

○　なんといづれも、是迄數度の戰爭なしたるが、今度の戰爭位張合ひのないことはござらぬ。

△　左樣々々高の知れたる淸洲の城主、小田の小勢を相手となし、

□　當時四海に威を揮ひ、飛ぶ鳥落す今川家。

◎ 味方の大軍押し寄せなば、敵は忽ち敗走なさん。
○ 最早勝利の注進が、程なく是へ參るでござらう。
三人 早く樣子が聞きたうござる。

ト此時ドンチヤン烈しく、ばた〳〵になり、花道より庵原春太郎陣立の裝にて走り出來り、花道にて

春太 御注進々々々。（ト皆々これを見て、）
○ 貴殿は庵原春太郎殿、猶豫召されず、
四人 とく〳〵これへ。
春太 はッ。（ト舞臺へ來り、）して我君には。
△ 奥にお出で遊はしまする。
□ 其の注進を御待ち兼ね。
◎ 少しも早く。
四人 申上げん。（ト立ちかゝる。奥にて、）
氏基 いや、知らせに及ばぬ、それへ參つて承らん。
○ あのお聲は、

四人　我君様。

ト管絃になり、正面の襖を左右へ開き、今川氏基、鎧、直垂、差貫、小さ刀の拵へ、朝霧下髪、裲襠姿の拵へ、小姓太刀を持ち、腰元六人附添ひ出てよろしく住ふ。

春太　はツ、我君様へ戦場の様子、御注進申上げまする。

氏基　おゝ、その知せ待ち兼ねたり。

朝霧　委細をそれにて、

腰元皆々　申上げられよ。

春太　はツ。（トドンチヤンをあしらひ、）されば、味方の諸軍勢、隊伍亂さず攻め寄する、寄手は名に負ふ十萬餘騎、敵は僅か一萬にも足らぬ小勢を七手に分け、籠る砦は七ヶ所ながら、丸根鷲津を手初めに鬨を作つて攻めかゝれば、敵にも兼ねて用意にや、弓鐵砲を打ちかけ射かけ、防戰なすを事ともせず、無二無三に攻め入つて、瞬く内に砦を乘つ取り、旣に亂軍になりし故、討取る首級は數知れず、各々手柄のその内にも朝比奈殿は敵の大將笹隼人、千種四郎、二人まで討取つて、勝に乘つて攻めたれば、殘る五ヶ所の砦も今に乘取るは必定、まづ味方の勝利を御知らせ申しに、駈けつけましてござりまする。

トこれにて氏基悦ぶこなしあつて、

氏基　高の知れたる小田春永、敵地の砦を落せしとは、ほゝ潔し／＼。まづ二ヶ所まで敵の砦を落せしとは、ほゝ、勇まし／＼。

朝霧　御味方勝利とあるからは、日ならず都へお上り遊ばし、天が下をしろしめす我君様の御高運。

○　當時日本六十餘州に、今川家の威勢には、

△　肩を並ぶるものなき御武德。

□　君に隨ふ我々まで、

◎　大慶至極に、

皆々　存じ奉りまする。

氏基　我も滿足これに過ぎず、はて心地よきことぢやなあ。

春太　此の儀御注進申上げれば、又候彼の地へ引返し、再度の吉左右申上げん。

氏基　おゝ猶も新手の人數を入替へ、殘る五ヶ所の砦を乘つ取り、淸洲の小城を落城させよ。

春太　はッ、委細承知仕る。

氏基　いそふれ庵原。

春太　はツ。（トどんちやんにて春太郎逸散に花道へ走りはひる。跡を見送り、）

氏基　小田春永を討ち亡せば、齋藤佐々木は取るに足らず、最早天下は氏基が、掌に握りし心地、祝ひの酒宴を催さん、やあ／＼腰元共、銚子土器を持て。

腰元　畏りました。

ト管絃になり、腰元四人長柄の銚子、三方へ土器を載せ、干肴を添へ持ち出てよろしく並べる。

腰一　今日味方御勝利と承り、

腰二　數なりませぬ私共まで、

腰三　此の上もなき身の悦び、

腰四　恐れながら我君樣へ、御祝儀申し、

皆々　上げまする。

氏基　予も滿足に思ふわい。

ト此時かすめて、ドロ／＼樣の誂への幽靈めきし、獨吟の小唄になり。

〽じゆくし柿鳴海の果ぞあはれなり、

トこれを氏基聞き、心にかゝる思入。

朝霧　これ朝霧、あの唄は誰が唄ふのぢや。（ト朝霧知らぬ心にて、）

氏基　なに、唄をうたふとおつしやりまするは。

朝霧　そちにはあれが聞えぬか、熟し柿〳〵鳴海の果ぞあはれなりと、心にかゝるあの唱歌、たれなるか見て參れ。

軍卒四人　はッ、畏つてござりまする。（ト二人づゝ上下へ別ればひる。）

氏基　此の程より誰が唄ふか、予が耳へはあの唄を、度々聞けば。

朝霧　誰がその樣な歌をうたふか、腰元共は聞かざりしか。

腰一　私共もその唄は、

腰二　ついに承り、

皆々　ませぬわいなあ。

氏基　はて怪しきこともあるものだ。（トばた〳〵になり、軍卒四人出來り、）

○　此の邊を隅々迄搜しましたれど、

△　陣所にあり合ふ人々は、

□　持場々々へ出張なし、

◎誰一人、

皆々　居りませぬ。

氏基　天地の内に聲あつて、形なきことがあらうか、今一度尋ねて參れ。

四人　はツ。（ト又四人上下へ別れてはひる。これにて合方止む。）

氏基　勝利を喜ぶ幸先へ、忌はしいあの唱歌、心にかゝつてならぬわい。

朝霧　六十餘州を一と握りに遊ばす君がそれしきの、小事に心かけたまはず、勝軍の御祝儀、目出度く御過し遊ばしませ。

氏基　愁ひを拂ふ玉箒、勝軍の祝酒、目出度く飮まん、なみ〳〵つぎやれ。

朝霧　畏りました。（ト氏基土器を出す、朝霧酌をしにかゝる。此の時花道の揚幕にて、）

正行　あいや、その酒宴、暫らくお待ち下さりませう。（ト聲をかける、氏基きつとなつて、）

氏基　今氏基が取上げし、此の土器を止めしは、

朝霧　御家來ならで此の陣所へ、他より入込むもののなきに、

腰一　待てとお留め、

皆々　なされしは。

正行　則ち岡崎五郎三郎正行、只今それへ參るでござらう。

ト中の舞へかすめてドンチヤンを冠せ、花道より正行、棒茶筅にて袴、大小、踊當、小手好みの拵へにて出來り、花道へ留る。

氏基　やあ、誰かと思へば家の重臣、岡崎五郎三郎正行なるか。

朝霧　何故あつて我君の、御酒宴を、

腰元皆々　お留めありしぞ。

正行　お留め申せしその仔細、それへ參つて申上げん。

ト右の鳴物にて、舞臺下手へ來り控へる。氏基思入あつて、

氏基　して正行には何故に、予が土器を止めしぞ。

正行　お留め申すは外ならず、君の御身が大事故。

氏基　なんと。(ト謎への合方になり、)

正行　改め申すに及ばねど、君は生得大酒にまし〳〵、斯く戰爭の折にさへ御酒宴の御催し、臣下の身として興を妨げ、お止め申すは不敬ながら、此の度君の御上洛は、一天下をしろしめす大切なる御道中、路次を妨ぐるものあらば、討ち亡せとの嚴命に、既に當國清洲の城主、小田春永と此の

戰爭、臣下の者は歩卒迄、一命賭けて出張なし、鎬を削る戰最中、いまだ勝敗わからざるに、總大將たる我君が、女儀を相手に御酒宴あらば、身命抛つ勇士等が苦心を思し召さぬに似て、味方の聞え二つには、世俗に申す油斷大敵、そこを存じて正行が、御酒宴お止め申してござる。

氏基　すりや正行はそれ故に、予が酒宴を止めしとか、氏基臣等が苦心を思はず、遊興の酒宴はせぬ。汝は小田との一戰を大敵の如く恐るれど、高の知れたる清洲の小城、大軍を以て攻め潰すに、何の手間暇かゝらうぞ、既に只今戰場より注進來つて我への知らせ、丸根鷲津の兩砦は味方へ乘つ取り根城となせば、最早勝利に疑ひなし、吉左右祝ふ此の酒宴、土器取りしは誤りか。

正行　如何にも君の仰せの如く、小田は僅かな小勢ながら、大軍よりも侮り難きは城主春永、智勇勝れ、殊に臣下の此下東吉は、夫の楠公に勝るとも劣らぬ獨歩の軍師にて、數度戰場に希代の計策、彼が才智は世の人も、舌を卷いて知る所、それらの事を思召さず、只大軍を賴みとなし、御油斷あるはいと危ふし、只今初度の注進に味方勝利と申せども、丸根鷲津の落ちたるは正しく敵の計略と此の正行は推察なす。既に古語にも申す如く、一旦の利は勝ちにあらず、始終の勝こそ誠の勝なり、その勝敗も分らぬ內、御酒宴あるは君の御油斷、御心に違ふとも御酒宴の儀は、遮つて正行お留め申しまする。

ト氏基これを聞き、心に障りし思入あつて、

氏基　やあ奇怪なり岡崎正行、小田春永は智勇勝れ、小敵と見て侮れずば、此の氏基に智勇なく、愚將なりと言はぬばかり、殊に此下東吉は楠公に勝りし軍師など〻、予が不德にして今川家の臣下の内に、猿冠者に勝りし軍師はないと申すか。

正行　全く以て君をはじめ、味方をさみなす所存はなけれど、只一大事と存ずる故。

氏基　味方勝利の幸先挫く、いらぬ諫言、聞く耳持たぬ。(ト氏基土器を取上げ、)こりや朝霧、祝儀の杯、なみ〳〵つぎやれ。(ト土器をさし出す。)

朝霧　御意をもとくは恐れあれど、君の御爲を思召す、正行どの〻忠義のお諫め。

腰一　何卒御用ひ遊ばしまして、御味方勝利と極るまで、

腰二　此のお目出度い御酒宴を、

腰三　お留まり下さらば、

腰四　お側に隨ふ私共迄、お嬉しう、

皆々　存じ上げまする。

氏基　そち迄が同じ樣に、詞を添へて留むるとも、一旦かうと申出さば、聞かぬ氣質は日頃より、そち

達も存じをらうが。

朝霧　左樣ではござりますれど、

氏基　えゝ、注げと申すに。

朝霧　はあゝ。

ト是にて朝霧是非なく酌をする。氏基杯をぐつと干して、

氏基　はて、心地よき此の酒宴。こりや朝霧、時に取つての肴替り、祝儀に一とさし舞うて見せやれ。

朝霧　我君の御意ながら、此の儀ばかりは。

氏基　ならぬと申すか。

朝霧　さあ、どうも此の場で、

氏基　何を遠慮、支度いたしやれ。（トきつといふ。）

朝霧　はあゝ。（ト朝霧是非なく立たうとするを、）

正行　あいや、その儀は相成りませぬ。

氏基　又してもいらぬ留め立て。やあ、誰かある、あの正行を引立てい。（ト奥にて、）

四人　はゝあ。（ト上下より以前の四人出來り、

軍一　我君の御意をそむき、
軍二　お席を穢す不忠もの、
軍三　臆病未練の岡崎正行、
軍四　君の上意、疾く〳〵此の座を、
四人　お立ちなされ。
正行　滅多にこゝは立ち申さぬ。
四人　でも、君の上意でござる。（ト手を取りにかゝる。）
正行　えゝ控へさつせい。（トこれにて四人控へる、正行二重へ詰めより、きつと思入あつて）えゝ、こなた樣はなあ。（ト誂への合方になり、）此の正行は御先祖より、數代勤むる譜代の臣下、君の御爲めに惡しきことを、などお諫め申さゞらんや。御酒宴お留め申すのを御採用なきのみならず、又も今樣朗詠の舞を御所望なさるゝは、返す〴〵も御不行跡、戰半ばに御遊興は、これぞ味方の亂れ舞ひ、指手引手の計略も、要にしまりあらざれば、君と臣とになぞらへし親骨子骨もばら〳〵に、何時か扇の破れとならん、勝に乘つたる味方の大勢、皆先陣へ繰り出し、賴み少なき御本陣、酒宴亂舞を留めさせられ、たゞ戰場の御要害を專ら願ひ奉る。

ト だん〳〵白洲階子へ詰め寄る、氏基くわつとせき立ち、

氏基　やあ、いふな〳〵たとひ軍勢繰り出し、本陣手薄になればとて、後ろは三州我領分、殊更天下に二を爭ふ關東小田原北條は神文取つて和睦なし、甲斐の武田は緣者となり、後ろに恐るゝ敵なければ、是より都へ上洛なし、萬一路次を遮りて妨げなさば、美濃の齋藤、近江の佐々木、やがて彼れらも討ち亡ぼし、天下を握る今川氏基、高の知れたる淸洲の城主、春永如きに恐怖なし、なに要害の手當が入らうか、馬鹿なことを。

正行　さあ、その美濃の齋藤、近江の佐々木、是らは一國一城の太守と申せど、恐るゝことなし、只今日の一戰こそ、油斷ならざる智勇の春永、御用意なきは危ふし〳〵。

ト 白洲階子へ登りかけていふ。

氏基　やあ、諫言なすも臣下の習ひと、打捨ておけば二度三度、詞を返すのみならず、やゝともすれば味方をあやぶみ、敵を恐るゝ臆病武士、左程小田家が恐ろしくば、最早出陣なすに及ばず、領地へ歸つて蟄してをらう。

正行　いや何しに領地へ立歸らうや、三度諫めて身退くは唐人の敎なれど、お聞濟みなきその内は、いつかな引かぬ大和魂、

朝霧　我君樣の御意ながら、正行殿の御諫言を、お用ひ遊ばすやう、願はしう存じまする。

氏基　えゝ彼に構はず奧へ參つて、是非とも所望いたす。

朝霧　それぢやと申して。

氏基　えゝ、參れと申すに。正行は目通り叶はぬ、立ちをらう。

正行　いつかな此の場は、退きませぬ。

氏基　やあ、まだ〳〵申すか、無禮者め。

正行　すりや、どうあつても。

氏基　汝が諫言用ひぬぞ。

ト氏基立つを、正行留めるを振り拂ひ、鐵扇にて頭を打つ、早舞になり、朝霧附き、腰元殘らず奧へはひる。正行殘り思入、床の淨瑠璃になる。

〽跡にはひとり岡崎が胸を痛めし軍略の、諫めも仇と鳴海潟、天を仰ぎて歎息なし、

正行　あゝ、此の度の御上洛も某きつとお諫め申せど、我強き君のお用ひなく、かく出張はなされしが此の程よりの種々の凶變、勇者の身にて斯程のことを氣に掛くるは、小量なれど誰言ふとなく夜每の小唄、熟し柿〳〵鳴海の果ぞあはれとは、味方に取つて不吉の唱歌、それのみならず、我

君を討たんと狙ひし小田家の浪士、郡幸内と申すもの、御姓名を記したる御本陣の關札を埒竹にて貫きしは、それこれ以つて此の一戰、もしや御身に凶事ばしある前表にはあらざるか、はて、心がゝりなことぢやなあ。

〽又も案内の正行が、安危を計る折柄に、

呼び　今樣の始まり。（ト後ろにて呼ぶ、正行思入あつて、）

正行　さては君には朝霧殿の、諫めを用ひ給はずして、猶も酒宴に耽り給ふか。えゝ臣下の者が斯程まで、心を碎くもうはの空、お用ひなきか、ムヽ。

〽心を碎く奥の間の、襖をもるゝ鼓の調べ、膽にこたへてこなたを見返り、

かく御油斷は變の元、猶豫いたすところにあらず、奥へ參つて命を的にお諫め申さん。

〽奥を目がけて行く折しも、俄に聞ゆる攻太鼓、正行こなたを打ち見やり、

トツカ〳〵と二重へ上り、奥へ行かうとする、此の時揚幕にて遠寄せの太鼓を打込む。正行振返りきつと向うを見て、

やゝ、山手に當つて貝鐘を、不意に打立て攻め寄するは、正しく敵勢裏手へ廻り、襲ひ來ると覺えたり。

〽心ならずも氣を取り直し、駈け行くこなたは舞の曲、行くも行かれず立留り、
ト花道へつか〳〵と行き、向うへ思入、又下座にて舞の鳴物はげしく、正行舞臺へ思入あつて、
かゝる大事も御存じなく、奥は酒宴の亂舞の囃子、取つて返してお諫め申さん。
〽奥も大事と立戻る、折しも近寄る鐘太鼓、胸にこたゆる奥の間は、亂舞の拍子笛の音に、
心も心ならざれば、
ト又舞臺へ立戻る、揚幕にて遠寄せを烈しく打込む。正行びつくりなし、
やゝ、最早猶豫の暇もなし、追々陣所へ近づく貝鐘、斯くとは更に御存じなく、奥は亂舞の囃子ごと、これもつて味方の思惑、かゝる急場は打捨ておかれず、いづれを取りいづれを捨てん、忠勇二つの追分け道、進退こゝに谷まる正行。
ト侍兩人こゝへかゝる、此の時下座にて本行の謠ひになる。
〽ためらふ暇に打立つる、又もや烈しき寄太鼓、猶豫ならねば、氣を取り直し。
奥で唄ふは箙の一とさし、爰は修羅道、刃のひとさし、
〽陣外さして走り行く。
ト早舞になり、ドンチヤンを打込み、逸散に花道へ走りはひる。

〽奥は豊かに謡曲の舞ひの調べの攻鼓、指手引手の太刀音に、酒宴の席も忽ちに修羅の街と鳴海潟、茂る蘆久保權阿彌が軍の樣子知らせんと、眞一文字に駈け來り、

ト此の留り、ばた／＼になり、花道より蘆久保權阿彌坊主鬘、うしろ鉢卷、鎧下、小手、臑當、大小にて陣笠を持ち出で、直ぐに舞臺へ來り、

權阿　我君いづれへ渡らせ給ふ、軍の樣子申し上げんと、蘆久保權阿彌、御注進々々。

〽大音聲に呼はれば、さしも武勇の御大將、油斷ならじと朝霧に六具の用意取り急がせ、奥の一間を出でたまひ、

ト此の内奥より以前の氏基先に、朝霧、軍兵腰元殘らず、兜鎧を持ち附添ひ出來り、

氏基　汝は蘆久保權阿彌、先刻庵原春太郎が、味方勝利と知らせしにその振舞は心得ず、樣子を語れ、な、な、何と。

〽樣子如何にとせき立つれば、

ト是より誂への鳴物になり、

權阿　されば候戰ひも、丸根鷲津の兩砦、なんなく味方へ乘つ取れば、十分味方の勝利なりと、

〽中島はじめ善祥寺三ツの砦へ攻めかけ／＼、敵も味方も入り亂れ、血の雨ふらし血戰なす

ト蘆久保よろしくこなし、此の内氏基鎧を着て、

氏基　おゝ、さこそあらん〳〵。して〳〵、跡の勝負はなんと。

權阿　敵も必死を極めし故、手いたく防戰なせしかど、多勢の味方に攻め立てられ。これまでなりと思ひしにや。

〽櫓へ火をかけ裏手より、丹下の方へ落ち行く敵勢、

すはや味方の勝なりと三ツの砦を攻め落し、丹下の砦へ押し寄せんと揉みに揉んで操り出す向うへ、平場の勝負を決せんと、丹下二ケ所の圍みを開き、打つて出でたる小田家の勇士、

〽柴田佐久間をはじめとして、さか尾淺山森生田五千の兵隊五段に備へ、

敵は小勢と言ひながら、法令正しく掛引なすに、味方は多勢をたのみになし、更に備への定まらねば、

〽僅か五千の敵勢に、討立てられて敗北なしたり、

ト蘆久保よろしく、氏基無念の思入あつて、

氏基　えゝ僅かの勢に敗北なすとは、言ひ甲斐なき味方の奴輩、して〳〵それより如何せしぞ。

トせき立つて言ふ。

權阿　敵に追はれて是非なくも、次第々々に引上ぐる、折しも後ろの山間より、

〽小田春永の腹心たる左枝犬清これにありと、名乘りを上げし若武者が、出立鎧は白銀の雪を欺く白糸おどし、月毛の駒にまたがりて、けふを一世の討死と十死を極めしその形相、討取る首級は、八萬奈落の閻魔の廳へ土產にせんと、荒れに荒れたる働きに、無念や味方の大將たる朝比奈殿をはじめとして、賴みに思ふ味方の勇士、或ひは討たれ、或は落ち行き、さしもの大軍瞬く內、小勢となりし味方の敗軍、此の事お知らせ申さんと、戰場を切りぬけ、立歸つてござります。

〽忠義も厚き權阿彌が、涙ながらの注進に、さすが豪氣の大將も、味方の油斷を後悔なし、

ト氏基きつとなり、無念の思入にて、

氏基　ちえゝ殘念や口惜しや、高の知れたる小田春永、何程の事あらんと、僅かの小勢と侮つて、氏基程の大將が、猿冠者めに計られしか。

〽齒がみをなして無念の形相、怒れる眼身を顫はし、遙かあなたをきつと見て、見よや今に出馬なし、一泡吹かせ目にもの見せん。

トきつとなる。朝霧縋りて、

朝霧　かゝる計略ある事を、正行殿には知つたるか、最前お諫め申せしかど、御用ひなきは我君の日頃に似げなき御誤り、たゞ此の上は大濱へ御本陣を引上げ給へ。

氏基　やあ愚かなるその一言、これまで數度の戰場に敵に後ろを見せざる氏基、春永如きが此の所へたとひ押し寄せ來るとも、物の數とも思はんや。

權阿　その御諚はさることながら、御本陣にあり合す、御旗本の人數は僅か、只今これへ參る途中、鳴海の並木を小楯にとり、百騎に足らぬ人數にて、敵の押へにかためてをれど、小田勢こゝへ押し寄せ來らば、なか／＼防戰なし難し、必ず御油斷なされまするな。

氏基　堅めのものが役に立たずば、氏基自身に出張なし、敵の軍勢押し寄せ來らば、松倉卿と名付けたる家重代の神刀にて、死人の山を築いてくれん。

朝霧　御詞返すに似たれども、大事の御身を輕々しく、自身の御出馬遊ばしまするは、何より危うござりまする。

軍一　先手へ進みし人々も、御本陣の危ふき事、

軍二　お聞きなされたことなれば、

軍三　おひ／＼味方も引返し、

軍四　陣所も堅めて防ぎ申さん。
權阿　先づそれまでは大濱へ、御引上げなされませ。
氏基　やあ、言ふな〳〵、一旦かうと言ひ出して、跡へ引かざる今川氏基、
朝比　すりや、どうあつても、
皆々　我君樣には、
氏基　必ず留めるな、出張いたすわ。
權阿　そこを何卒。
氏基　えゝくどいわえ。（トきつと言ふ。）
〽出でゝ再び返らざる豪氣の大將氏基が、心を察して朝霧が、なげしの長刀おつ取つて、
ト朝霧思入あつてなげしの長刀を取る、腰元しごきにて襷をかける。
朝霧　女中方、妾と一緒に。
腰元　心得ました。
皆々　〽朝霧はじめ侍女達も、上帶しつかと高ばしをり、しごきを取つて玉襷、長刀小脇に搔いこんで、

ト腰元めい〳〵に支度をする。

朝霧　御出馬あるはあやふき故、君に替つて朝霧が寄せ來る敵を防ぎ申さん。

腰一　及ばずながら私共も、

腰二　朝霧樣と諸共に、

腰三　女ながらも日頃のたしなみ、

腰四　寄せ手を引受け一働き、

軍一　女中方ですらあの通り、いでわれ〳〵も出陣なし、

軍二　名ある勇士を引受けて、

軍三　花々しく勝負を決し、

軍四　討死いたす所存でござる。

權阿　おゝ勇まし〳〵、さう聞く上は權阿彌も、朝霧樣の御供いたさん。

氏基　おゝ出來した〳〵。朝霧、權阿彌片時も早く。

朝霧　我君樣。

皆々　おさらば。

〽朝霧はじめ腰元共、勇み進めば權阿彌が、跡押してぞ駈けり行く。

トばた〳〵、小鼓をあしらひ、朝霧長刀をかい込み、腰元皆々附添ひ、軍兵四人も附き、權阿彌跡より附き、皆々花道へはひる。

跡見送つて御大將、勇ましさよと勇みの眉、策をめぐらす軍略の心をはげまし、

氏基　斯波の倍臣小田春永、匹夫下賤の猿冠者の計略に落入りしか、殘念至極、いで一睨みにいたしてくれん。

〽流石に猛き强勇の身を惜しまざる有様は、めざましくこそ見えにける。隙を窺ひ突出す槍先き、(ト氏基二重より向うを見送る。此の時上下より軍兵六人槍を持ち出で、)

軍兵六人　氏基覺悟。

〽おッ取り卷くを事ともせず、踏みのけ刎ねのけ氏基が、はつたと白眼む眼力は、摩利支天の荒れたる如く、

ト此の内皆々下手へ追ひ込む、氏基二重へ上り、欄間へ手をかけきつと睨む。これに恐れて、皆々二重下手へ海老折れになる。

〽猛威の程こそ、

ト此の見得、ドンチャンにて道具廻る。

本舞臺一面後ろ小高き山の張物、諸所に松の立木、丸太の柵矢來、日覆より松の釣枝、總て桶狹間山間の模樣、ドンチャン床の送りにて、道具納まる。

〽烈しける、修羅の街の戰場に、さても左枝が討死の覺悟を死出の道づれに、あまたの軍卒追ひ來り、

ト此の止り、誂への鳴物になり、花道より軍兵大勢、思ひ〲の獲物を持ち逃げて出る。跡より犬清白絲縅し、鎧武者、誂への四半の差物、月毛の駒に乘り、槍をかい込み、勢込んで出來り、後より前幕の左近うしろ鉢卷、身輕なる拵へにて、母衣を風呂敷にして、是れへ大分首を入れしを脊負ひ腰へ網を附け、此の中へ首を入れ、馬の跡に附いて出來り、切首を拾ひ、袋へ入れることよろしく、犬清は馬にて軍兵と立廻りながら舞臺へ追つて來る、軍兵逃げてはひる。

〽群がる敵を追ひちらし、一と息ほつと吐く後ろに、左近は落ちる切首を手に取り上げて打笑ひ、

トよろしくあつて、

左近　いや、どちらを見ても雜兵首、あまり取りばえもせぬ首だが、これが所謂天窓數、軍冥利といふものぢや。

〽呟く聲を見返りて、

犬清　舅殿にはその首級、御持參あつて怪我せぬ內、早々歸宅をいたされよ。

左近　いや〳〵あなたの御先途を、見屆けませぬその內は、滅多に內へは歸りませぬ。

犬清　いや〳〵それはよろしからず、早々宅へお歸りあれ。

左近　いや〳〵、めつたに歸りませぬ。

犬清　はてさて、これは困つたものぢや。

〽爭ふ所に又候や、敵の軍勢押來り、

ト又ドンチヤンになり、上手より鎧武者大勢出來り、

皆々　こやつは小田方、討つて取れ。

犬清
左近　小癪なことを。

ト入り亂れの立廻りとなり、犬清馬上にて皆々を槍にて突き留める。此の內左近は熊手にて加勢をなし皆々を追ひ上手へはひる。犬清これを案じるこなし、

犬清　やれ舅殿歸られよ、長追ひするは不覺の元、必ず深入りし給ふなや、これ、舅殿々々。

〽呼べど影だに見えざれば、（トよろしくこなしあつて、）

此の儘置かば深入りなし、舅の存亡氣遣はし、跡より追附き救ひ申さん。

〽折柄向うに聲あつて、（ト此の內犬清馬上にて、鞭を上げてきつと思入。）

左京　やあ〳〵左枝犬清殿、見參なさん、暫らく。

〽と聲をかけ、

犬清　我名を呼ぶは、何ものなるか。

左京　それへ參つて、見參々々。

〽あをりをあをり一鞭當て、こなたを望み駈け來る、

トこれへ鳴物をあしらひ、花道より水間左京之助、晒しの後ろ鉢卷にて、好みの鎧、陣笠にて勞れし體、馬上にて血に染りし槍をかい込み、出來り花道にて、

左京　音に聞えし小田家の臣、左枝殿と見し故に、敵に取つて不足なし、いで一と勝負仕らん。

ト言ひながら、舞臺へ來て、下手へ控へる。犬清此の體を見て、

犬清　して〳〵御身の姓名は、何人なるか、名乘り候へ。

左京　某事は今川の家臣、水間左京之助と申すもの。
犬淸　我は左枝犬淸なり、
左京　望む所のよき相手、
犬淸　然らばこれにて、
左京　いざ、
犬淸　いざ、
兩人　いざ〳〵〳〵。
　〽双方手綱かい繰りて、いでや勝負と駒乘り寄せ、
　トこれより鳴物をあしらひ、ちよつと槍を遣ひ、左右へ別れてきつと見得、これより誂への鳴物になり立廻りよろしくあつて、トゞ馬上にて槍をからみ合ひ、
左京　果しなければ、此の上は、
犬淸　組んで勝負を決すべし。
左京　言ふにや及ぶ。
　〽槍投げ捨てゝ進みより、馬上ながらにむんずと組み、えい〳〵〳〵と揉み合ひしが、兩馬

が間へ落ちころげ、

ト此の内兩人よろしくあつて、組合ひながら、馬上より落ちる。馬は上下へ逃げてはひる。跡に兩人平舞臺にてよろしく組み打ちの立廻りありて、又ほぐれ、双方太刀を拔いて立廻りながら、犬清が切込む太刀を左京之助受け損じ、襟元へ深手を負ひ、こなしにてどうとなる。

犬清　かく勝負の付く上は、貴殿の首級は申し受くるぞ。〽ひるむ所を附入る犬清、刀振り上げ身構へなし、

左京　やれ待たれよ、犬清殿、元より貴殿へ進ぜる此の首。

犬清　なんと。

左京　我髻に附け置きし、此の札、とくと御覽下され。

犬清　我髻の札を見よとは、どれ。〽不審ながらも立寄りて見れば緣りの墨の跡、（ト左京之助の髻の札を見て、）左枝犬清殿へ、我首進上申すものなり。心得難き貴殿の胸中、我に首級を送らんとある、そも先づ御身は何人なるぞ。

左京　その不審は御尤も、今は何をか包み申さん、我こそ御身が二世迄と言替されし、小田家の侍女吉

野が實の兄でござる。

犬淸　さては貴殿が噂に聞く、左近殿の長男なりしか、知らぬこととて、むゝ。

ト犬淸思入、

左京　へさてはと心得、控ゆれば、こなたは痛手を押し怺へ、

思へば不孝な我が身の上、男の惣領と產れながら、父が能師の業を嫌ひ、何卒武士になりたき一心、幼年の折家出なし諸國遍歷いたせし內、緣あつて今川家の、家臣となつて立身出世、望みは果せど儘ならぬ父は小田家の御扶持を受け、敵と味方に音信不通、なれども武士の表は表絕えて久しき親人の御身の上が案じられ、此の程御樣子伺はんと、父の宅へそれがしの腹心を間者に入れ、委細の樣子を承りしに、妹故に犬淸殿には春永殿の御勘氣を受けたる御身、此度の一戰には討死との御決心、これ皆我妹故、あつたら盛りの武士の命捨てさす殘念さ、殊更此度の合戰は元より味方に勝利なしと疾くよりそれがし察せしは、只大軍を賴みとなし、勇に誇つて智なき大將、たまく思慮ある重臣あつて諫めを入れても用ひぬ御主君、名將の下に弱卒なき小田家とは天地雲泥、小勢といへどもすこぶる大敵、所詮及ばぬ事と察し、生中に生延はり主家の滅亡見るがいやさに、元より死する覺悟のそれがし、とても敵に渡す首なら妹聟の其許へ進上なさん

と最前より、亂軍のその中を切拔け〳〵貴殿の在所を、尋ね求めし甲斐あつて犬死ならで犬清殿に、首級を渡す我本懷、數ならねども我首を討つて命を全うなし、歸參の種にして下され。

〽始め終りの物語、聞く犬清は義に感じ、（トよろしくこなしあつて、）

犬清　はて義心なるその心底、過分なれども我も又、敵味方とは言ひながら、義理ある兄の首を討ち、何で手柄にいたされんや、疾くにも斯くと知るならば、此の勝負は付けまじきに、殘念なことをいたしたり、然し手疵は負はれても、急所にあらねば片時も早く引上げられ、領地へ戻つて養生あれ。

左京　いや〳〵それは望みにあらず、貴殿に討たるゝ覺悟のそれがし、何故こゝを落延びんや、殊更以つて討死はこれ武士の本懷故、始めて逢ひし此の左京が、一世の賴み犬清殿、早や首討つて下されい。

犬清　ぢやと申して、どうまあこれが。

左京　逢つて貴殿が討たれずば、此の場に於て自殺なさうか。

犬清　さあ、それは。

左京　首を上げて下さるか。

犬清　さあ。
左京　さあ。
兩人　さあ〳〵〳〵。
左京　數ならねども此の首を、討つて手柄にして下され。
　〽死を本懷と決したる、勇士の覺悟是非なくも、（ト犬清思入あつて、）
犬清　然らば首級申し受けん。
左京　すりや、お聞屆け下さるとな。
犬清　あゝ是れに付けても武士の、意地程つらきものはなく、義理ある中の兄弟が初見參も戰場にて、互ひに名乘る大身槍。
左京　からむ血筋か血に染る鎧の繊をしめ敵、軍の掟に身寄ほど、猶脫されず討つといふは、その身を攻める攻つゞみ。
犬清　心の鬼を兵と夕の味方今朝の敵、移れば替る旗色も靡く野心の修羅道は、親子兄弟見さかひなく、
左京　子として父に立向へば、親も小筒を狙ひ打ち、

犬清　その有樣はさながらに、兜の下のきり〴〵す、泣く音も哀れ忍び紐。
左京　切れた手綱の繰言も、言はず武道を楯の板、
犬清　身は竹束の恩と義に、
左京　からまれて死す身の終り、
犬清　これを思へば兎に角に、
左京　捨つべきものは、
兩人　弓矢ぢやなあ。
〽うきを語れば山の端に、響く貝鐘攻太鼓、
ト此の留りドンチヤンになる、これにて兩人きつとなり、
左京　あれ〳〵、次第にこれへ寄せ來る軍勢、妨げなき内犬清殿、早首討つて下されい。
犬清　その義はいかにも承知いたすが、幸ひ御親父左近殿、今日我等の跡を追ひ、此の戰場へお越し故、此世の名殘りたゞ一と目、逢うて最期を遂げられよ。
左京　いや、それにては互ひの氣後れ、逢はざる内に少しも早く。
犬清　でも、それにては御親父へ。

左京　やあ、入らぬ御配慮、未練至極。

〽と勵され、はや是迄と立上り、迫る後ろに水間左京、兩眼とぢて控ゆれば、

犬清　いで、介錯。

左京　南無阿彌陀佛々々。

〽思ひ切つてぞ討落す、刃の光り露の身の消えて果敢なくなりにけり、愁ひにしづむ犬清が

あへなき首級を手に取上げ、

犬清　討つ討たるゝは戰場の、習ひと言へど現在の、義理ある兄と敵味方、初めの出合の名乘りさへ、

修羅の街に是非なき次第、せめて舅に名殘りを惜しませ、寺院へ葬り回向なさん。

〽今は詮方なきがらを隱す涙の雨催ひ、晴れぬ心の手向ぞと氣を取り直し立ちあがり、

舅殿にはいづれまで、深入りせしか此首級へ、名殘りの對面致させん。

〽身拵らへするその折柄、かくとも知らず立歸る、左近はそれと見るよりも、

トばたばたになり、上手より以前の左近出來り、此の體を見て、

左近　おゝ左枝殿、これにござつたか。

犬清　や、舅殿であつたるか。

〽はツとばかりに愁傷の、涙に沈む愁ひの體、

左近　何故あつて左枝殿には、かゝる場所にて忌はしき御落涙をなさるゝや、扨は深手を負はれしか。

〽案じる樣子にいとゞ猶、切なき胸を勵まして、

犬淸　あいや手疵は負はざれど、只今これにて其許の御子息水間左京殿と、

左近　えゝ、悴左京を。

犬淸　餘儀なく討取り申してござる。

左近　えゝ。

〽子故の闇に仰天し、つらき思ひに犬淸が差出す首級茫然と、手に取り上げて打守り、

おゝ悴、よく死んだ、よく討たれた、死を本懷とする敎を守り、健氣な討死出來した。これ犬淸殿、最期は淸くいたしたか、未練ではなかりしか。

〽立派に言へど目に涙、泣かぬ顏する老の身の、心を察し犬淸が、

犬淸　かゝる場所でござる故、委しきことは後にて言はん、間者を入れて逐一に故鄕の樣子知つたる故、妹聟の犬淸に首級を渡して勘當の詫びの種にもいたさせんと、これ此の如く髻へ札を結びつけ、深手を負ひ、早首討てと言はれし故、せめて最期に其許へ一目逢はしてと申せしかど、互ひ

の氣おくれ未練なりと、死を急がれしに是非なくも、介錯なせしその跡へ、計らず御身が來られしは、薄き親子の憂き別れ、思はず落涙いたしてござる。

〽語るを聞いて健氣さを褒めてやりたさ悲しさを、怺へる涙押し拭ひ、

ト兩人よろしくあつて、

左近　さては妹の聟殿に手柄をさせん心得にて、討たるゝ覺悟であつたるか、死しても失せぬ幼顏、家出しをつたその時の、まだ俤が目の先へちらつくやうに思はるゝ、それも今では出世して今川家にて一方の大將分になりしと聞き、逢ひたく思ひをつたるに間者を入れて聞くやうなれば、なぜ密々にて便りはせぬ、その片意地が恨めしい。

〽親子の恩愛取り亂し、首に縋りて泣き沈む、やゝあつて氣を取直し、

犬清　いや、不孝な悴に老の愚癡、必ず笑うて下さるな。

御尤もなるそのお歎き、さはさりながら音信をいたす時には敵方へ内通なすと思はれんも、味方の嘲りを憚りて音信せぬは我人とも、武門の習ひ是非もなし、只殘念に思はるゝは、かゝる義心の御子息を、好き大將に仕へさせなば、末代美名も殘らんに。

左近　敵と味方と隔てある、主人へ仕へしばつかりに、親はあつても逢ふ事ならず。

犬清　義理ある仲の兄弟も、それと知らねば渡り合ひ、
左近　討ちし後にて討たれしと、
犬清　名乘りかけたる時鳥、
左近　死出の田長に急ぐとは、
犬清　われも血を吐くうき思ひ、
左近　泣きつくしても盡されず、
犬清　世にあさましき、
兩人　事共ぢやなあ。
〽曇る淚の雨運ぶ、空も俄に雲立てば、
ト此の止り風の音烈しく、雨の音になり、兩人きつとなつて。
犬清　やあ、今まで晴れし晴天も、俄に風雨吹き起り、
左近　早手とおぼしき雲立に。小田家は平家の蝶々雲、
犬清　天下に令す是れ吉兆。
左近　誠に勝利の幸先に、

犬淸　はて心地よき、

兩人　前表ぢやなあ。

〽血汐の雨も打流す、修羅の街ぞいさましき、

ト兩人愁ひをかくしきつとこなし、此の模様雨の音、床の三重にに道具廻る。

（桶狹間田樂窪の場）＝本舞臺三間の間常足の二重、岩組の蹴込み、上下岩山の張物、正面にふりよき松の大樹、此の周りを廻ることあり、枝受けの柱所々に立ち、向う黑幕、日覆より松の釣枝上手に流れ水の浪板、總て桶狹間田樂窪の體、ドンチヤン三重にて送り、幕明く、

〽入相の鐘の音分かぬ夕立に、篠つく雨の降りしきり山より落ち來る水音は、鳴る雷に異ならず、

ト知せに付き、舞臺前一面に本雨を降らし、

〽時しも皐月中旬に、空さへ暗き桶狹間、必死を極めし氏基が敵勢あまた追ひかけ來り、

ト早笛ドンチヤンになり、ばた〳〵花道より陣笠の士卒大勢逃げて出來り、跡より氏基、水入り好みの鬘、鎧袖、草摺綫切れて下り、額へはすに手傷を負ひし油紅を附け、手負の拵へ血に染みし誂への

槍を持ち、皆々を追つて出來り、花道にてちよつと立留り、皆々舞臺へ逃げて來り、一人殘りかゝる
を投げのけ、これへ踏みかけ、槍を突きてきつと見得。これにて又本雨サッと降る。

〽一と息ほつと突く槍によろめく足を踏みしめ〳〵、弱る深手に屈せぬ豪氣、風雨烈しきは
たゝ神、勝負も更に聞えねば、こなたの松樹を小盾に取り、

氏基：ちえゝ折も折とて敵方へ天も力も添へけるにや、俄かの暴風、然も味方へ向つて吹き、弓鐵砲も
聞かざるは、最早絶體絶命なるか。

〽眼血走り髪逆立ち、もの狂はしき有樣にて、寄せ來る敵を突立て〳〵、鬼神の荒れたる如
くなり。

ト此内花道にて氏基無念の思入よろしくあつて、踏へしもの刎返し、打つてかゝるを槍にて追ひかけ
舞臺へ來る。士卒皆々かゝる。淨瑠璃の切より誂への鳴物になり、大樹の松を小盾に遣ひ、面白き立
廻り、此の内本雨を使ひ、トゞ皆々花道へ追ひ込み、ほつと思入、本釣鐘を打込み、息の切れる思入
體へ立ちし矢をぬき、血汐にて咽をうるほす、此の内床の合方、

〽血汐にのんどをうるほす折柄、深手を負ひし春太郎、息をばかりに駈け來り、

トばた〳〵になり、花道より以前の春太郎、手を負ひ拔身にて走り出來り、

春太　我君、これにござりましたか。

氏基　さ言ふは、庵原春太郎か。

春太　はッ、敵の大將小田春永、御本陣まで攻め入つて、名ある味方の勇士等は、殘らず討死仕り、朝霧殿、權阿彌は宅間玄蕃に生捕られ、

〽こゝを先途と防げども、味方手薄に烈しき雷雨、人馬も恐るゝ向ひ風、

我君には此の處を片時も早く落延び給へ、我も御供いたしたけれど、深手に進退叶はねば、御供御免下さるべし。

〽咽を貫き庵原が、果敢なき最期に氏基は、烈火の如くに拳を握り、

ト春太郎咽へ突立てゝ倒れる、氏基無念の思入にて、苦痛を忘れ突立ち上り、

氏基　ちえゝ殘念や口惜しや、そも／＼今川氏基は初陣なせしその折から、敵に後ろを見せたることなく、我が猛勇に怯ぢ恐れ、

〽流石の小田原北條も戰爭なせしが和睦を乞ひ、甲斐の武田は緣を組み、

今は兩家も一族同然、我に敵たふものなき故、上洛なして六十餘州、掌握なさんと思ひしも、猿冠者めが計略にて、賴みに思ふ勇士等も討死なせしか、今は氏基たゞ一人。

〽阿修羅王の荒れたる如く、縱橫無盡に切りたつれど、運盡き弓に矢種は切れ、こゝにて討死なすことも武門の習ひ是非なけれど、春永如きに落命なす無念は冥府の鬼となつて恨みを晴らすぞ思ひ知れ。

〽虛空を睨んで立つたるは物凄くこそ見えにけり、かゝるところへこなたより、窺ひ寄つたる小田の勇士、銳き槍を繰込んで、突いてかゝれば小ざかしと、深手に屈せぬ氏基が、またもや挑み戰ひけり、

ト此の內氏基無念の思入にて、きつと見得、下手より以前の郡新助窺ひ寄りて突いてかゝる、氏基身を開き太刀にて切り拂ひ、ちよつと立廻り、淨瑠璃の切、よき見得より、知せに附き後ろの黑幕切つて落す、向う二重にて桶狹間の遠見、これより床と下座の打合せの合方、鳴物になり、よろしく松の周りを廻り、立廻りあつて、よき程に上手より、小平太陣笠の拵へにて伺ひ、氏基新助の二の腕を切る、これにて新助あつと撓む、氏基立ちかゝり切らうとするを、小平太氏基の左の足を突く、氏基たぢたぢとなり、足の痛き手負ひの立廻り、兩人を相手によろしくあつて、氏基の腰の番を突く、是れにて二重へどうとなり、

〽流石豪氣の氏基も、腰のつがひを貫かれ、身體叶はずどうとなり、

たとひ運命盡きればとて、名もなき匹夫に討たれんや。

小平　やあ、我々を匹夫とは、氏基深手に血迷ひしか、斯く言ふ我は小田家の家臣、香取小平太忠次、

新助　まつたそれがしは今朝より、附け狙ひし郡新助秀詮なるわ。

〽名乘りを上ぐれば、氏基が、

氏基　さては此の程岡崎にて、我を狙ひし幸内が、汝は正しく弟よな。

新助　いかにも御身を討たんと狙ひ、望みを果さず捕虜となり、無念に死したる幸内が、則ち弟同苗新助、こゝで出合ふは天の與へ、首級を手向ける、覺悟なせ。

氏基　やあ、たとひ深手を負ひたりとも、汝に首級を渡さんや。

新助　根強き一言、忠次ぬかるな。

小平　心得ました。

〽手取りにせんと組附けば、たゞ一と摑みと氏基が、手負ながらも豪氣の働き、折しも後ろに聲あつて、

ト新助、小平太槍を投げ捨て、氏基に組附く、此の時上下にて、

春永　やれ待て兩人、今川治部大輔氏基へ、小田上總之介春永、

犬清　左枝犬清利家。

東吉　此下東吉郎秀吉、

三人　見參々々。

氏基　何がなんと。

〽見參々々と双方より、此下左枝をはじめとして、あまたの軍兵立出づれば、

トこれへつッかけを冠せ、上手より春永陣立の拵へ、是へ軍兵大勢附添出る。下手より以前の東吉郎陣笠采配を持ち出る、又犬清以前の陣笠の裝にて、双方より出來り、氏基此の體を見てきつとなり、

氏基　やあ、珍らしや小田春永、汝斯波の陪臣にて、今列侯の列にあれど、申さば斯波家を奪ふ逆賊、それに隨ふ猿面冠者。

春永　愚かや氏基御聞きあれ、何ぞや斯波家を横領なさん。我賤しくも小國なれど、淸洲の城主無名の軍を引率し、暴威を以つて我國をば潰して上洛なさんとなすとも、天誅いかでか脱れんや、今日只今御身が首級、申し受くるは我が本懷。

東吉　まつた斯く言ふ此下秀吉、我が初陣の手柄始めに、敵の大將伊藤日向の首級を上げて實檢せしを拾ひ首とて用ひぬ盲目、愚將なりと見限つて小田家へ仕へ、今日御身の滅亡近きにありと、末路

を見拔きし此下へ、清く首級をお渡しあれ。
犬清　又それがしも今日の勳功により勘當の、赦免を願ふ此の犬清、氏基殿には運拙く、僅か小勢の小田方に味方の大軍切崩され、此の期に及ぶ上からは。
ト新助心を苛立つ思入にて、
新助　今ぞ先日死を遂げし、兄幸内へ手向けとなす、首級を取り得る時節到來。
小平　いで尋常に首を渡すか、但し搔き首いたさうか。
新助　氏基答へは、
兩人　な、な、何と。
〽競ひかゝるを押しとゞめ、
春永　あいや兩人暫らく待て、駿遠三の太守たる名におふ今川氏基殿、粗忽に首級も上げられまじ。
東吉　東海道にてかくれなき今川殿、武運もこゝに盡き弓の、小田の猛勢鳴海潟、これにて郡幸内が、恨みの念も晴るゝの道理。
犬清　いかにも仰せの如く、手柄は郡、香取の兩人、まさり劣りはあらざれど、兄幸内へ手向けとあれば、これ孝道の德により、氏基殿にもその首級、郡新助へ渡されよ。

氏基　いや手向とあれば、汝が介錯受くるまでもなし、我が手に討つて渡すであらう。

小平　すりや、御自身に、

皆々　その首を。

氏基　いざ受取られよ、郡新助。

〽深手に屈せず氏基は、家重代の神刀にて、我と我が手に搔き落す、首級は血汐の熟し柿、身の尾張路に今も猶、石碑に朽ちぬ今川墳、

ト此の内無念の思入にて片足を踏み出し、我手に太刀を首へかけ、きつと思入、東吉これを見て、

東吉　方々勝関々々。

大勢　えい〳〵おゝう。

〽その名は世々に、

トドンチヤン烈しく引張りの見得よろしく、床の三重にて、

幕

大詰　清洲首實檢の場

〔役名――小田春永、此下東吉、左枝犬淸、香取小平太、宅間玄蕃、中條大八、林佐太郎、大名、軍兵、近習、今川の茶道蘆久保權阿彌。春永奥方園生の方、腰元立田、氏基愛妾朝霧、其他。〕

(淸洲城内の場)――本舞臺三間常足の二重、正面左右共子持筋の襖、欄間へ小田の紋附きたる白張の幕を張りて絞り、上下とも柵矢來、是れにも同じ幕を張り、下手に陣門の木戸、總て淸洲坂内陣小屋の體、こゝに軍兵四人何れも鎧下小手臑當、大小にて、銚子杯干肴の臺を並べ、よろしく酒宴の體、時の太鼓にて幕明く、

軍一　何といづれも、勝戰の御祝儀とあつて、我々共に至るまで、御大將より御酒下され、思はず數献頂戴いたしたれば、いつになき酩酊をいたしてござる。

軍二　何さま今日は首實檢の儀式なれば、御肴とても此の通り、敵に勝栗よろ昆布とは、なんと勇ましい儀ではござらぬか。

軍三　それにつけても此度の戰爭、危ふい戰と思ひの外、此下殿の計略にて、鷲津丸根を始めとして、

軍四　七ヶ所の砦を構へ、敵を深みへ引入れたは、不思議の手配りと申すもの。

一　左樣とも〳〵先手をわざと敗走させ、勝に乘つたる今川勢、ひた押しに押しかけ、氏基が本陣手薄となりし機を計り、

二　敵の陣所の裏手から無二無三に攻め入つて、大將氏基を討つて取り、十萬餘騎の大軍を、僅かの小勢で勝ちたるは、孔明楠にも劣らぬ軍法。

一　いづれも必死の覺悟を極め、功名手柄も多い中に、承はれば犬清殿、御勘氣の身でありながら、先手の人數に馳せ加はり、一命捨てゝの働きに、敵の勇士を多く討取り、やがて討死されたる由何んと哀れな儀ではござらぬか。

二　それも矢張り東吉殿が、內々指圖と承はり犬清殿の槍先故、數萬の敵が戰ひ惱み、遂に味方の勝利となり、小田家の運も開くといふもの。

三　其の上氏基が妾の朝霧、茶道權阿彌の兩人は宅間氏中條氏が生捕られたれば、當座の人質、

四　討ち取つたる數多の首は、その權阿彌に一々見せ、敵の姓名が殘らず知れて都合もよく、それ故今日御前に於て、首實檢があるとのこと。

一　手柄次第で、御褒美下さると申すことぢやが、各々方、よい敵の首をお取りなされたか。

二　されば聞きやれ拙者もよき敵を討取らんと、戰の中を驅け廻りしが、幸ひ道の傍にて首二ツ拾ひし故城内に持ち歸り、御褒美にあり附かんと、よく〳〵それを改め見れば、南無三寶首にはあらで、
一　何でござつた。
二　うらなりの唐茄子でござつた。
三　何を仰せらるゝ。
四人　はゝゝゝ。

トやはり調べにて、花道より森口、鎧下小手臑當大小にて出來り、直に舞臺へ來り、

森口　お取り次ぎ下されい。
四人　何事でござる。
森口　生捕りおきし今川家の茶道權阿彌、殘らず首を改め、敵の姓名相知れましたれば、則ち權阿彌を是へ召連れましてござる。此の儀東吉殿へ御取次ぎ下されい。
一　それは御苦勞千萬にござる。幸ひ東吉殿も詰所に於て、御休息なれば、拙者參つて御取次ぎいたすでござらう。（ト軍兵一立ちかゝる、此の時奧にて）

東吉　取次ぎには及ばぬ、只今それへ參るであらう。

ト　やはり調べにて、正面の襖を明け、東吉上下、衣裳、小手脇當、大小にて出て、よろしく二重へ住ふ。

一　此下氏には、早朝よりの御詰合ひ、

皆々　御苦勞千萬に存じまする。

東吉　各々方にも大儀々々。森口氏には權阿彌を召連れられしと、然らばこれへ呼出し召され。

森口　はツ、(ト向うへ向ひ、)蘆久保權阿彌、此處へ召連れい。(ト花道の揚幕にて、)

軍兵　はあゝゝ。

ト　時の太鼓になり、花道より前幕の權阿彌、鎧下好みの拵へ、腰繩にかゝり、軍兵〇、鎧下のなりにて此の繩を取り、外に軍兵二人附添ひ出來り、直に舞臺へ來り、權阿彌よろしく下手へ住ふ。

〇　はツ、生捕りし權阿彌、召し連れましてござりまする。

東吉　それ、繩目を許せ。

〇　はツ。(ト繩を解く。)

東吉　いやなに、權阿彌殿、當城へ引かれてより嘸かしの糺明、まつた討取りし今川方の首級、目利な

せしは大儀々々、此の上は何なりとも望みがあらば此の東吉、主君へ願うて叶へ申さん、斟酌せずと所存の趣き、包まずそれにて申されよ。（ト合方になり、權阿彌思入あつて、）

權阿　御親切なる其のお詞、忝なき事ながら、かく敵中へ捕はれて袋の鼠となりし身が、今更なんの望みがござらう。申すも詮なき事ながら、主君今川氏基公此の度の上洛に、旅のつれ〴〵慰めんと愛妾朝霧の方を伴はるゝ事、世上の聞えと家老の面々再應諫めを入れしかど、一徹短慮の猛將なれば其の諫言も水の泡、遂に朝霧殿を連れ給へば、かゝる茶道のそれがしも旗本の諸軍に加はり、お側去らずに隨ひしが、寢耳に水の桶狹間、不意の戰に御主君の、すは御大事と身支度して獲物をおつとり支へしが、とても叶はぬ味方の運命、たとひ長袖の身の上でも、敵の陣所へ切入つて討死なさんと思ひしが、朝霧殿を落さんと、それに引かれて思はずも、太刀の刃金もなまり、かく生捕となつたる上、氏基公を初めとして、味方の勇士數多の首級、見るにつけても我が命、主君に遲れて一日も生延びるは本意ならず、此の上のお情は片時も早く東吉どの、此の坊主首討つて下されい。

トこれにて東吉感心の思入。

東吉　はて、あつぱれなる其の覺悟、高祿を取る武士とても命は惜しむ習ひなるに、まこと泥中の蓮、

森口　野夫にも功の者ありと見上げたる志し、なんと何れも、感心な儀ではござらぬか。
一　何さま長袖の身でありながら、人に先立ち合戰なし、
二　主人の最期につゞかんとは、武士も及ばぬ志し、なんと何れも、感心な儀ではござらぬか。
皆々　我々感心、
東吉　いたしてござる。
權阿　かゝる忠義のものを、むざ〳〵殺す東吉ならず、御身が命は東吉が、身に替へて助命を願ひ、つゝが
なく駿州へ送り返す所存なれば、左樣心得相待たれよ。
東吉　あゝいや〳〵お詞ではござれども、大恩受けし主人を先立て、なに面目に本國へ生きて再び歸ら
れませう、茶道風情の權阿彌故、定めて命を惜しまんと思さるゝは無理ならねど、なまじ命を助
かりて、生恥をさらさんより、早々首を刎ねて下され。
權阿　尤もなる覺悟ながら、只今御身が命を落さば、氏基殿より預かりし朝霧の方を本國へ、何者が連
れて戻るぞ。
東吉　や。
それとも主人の愛妾を、見殺しにする所存でござるか。

權阿　さあ、それは。

東吉　生きての忠義を思はぬか。

權阿　さあ。

東吉　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

東吉　はて、死は易く生は難し、恥を忍んで存命なし、忠義を立てずばなるまいがな。

ト權阿彌思入あつて、

權阿　すりや、死ぬことも叶はぬか。（ト途方に暮れし思入。）

東吉　そも此の度の合戰は、主君春永公武運を開くの戰、目ざすは敵將氏基のみ、女童の朝霧殿まつた長袖の御身等を、生捕る謂れはあらざるに、佞奸邪智の宅間中條、人々の手柄をそねみ、武功に負けじと思ふより、甲斐なきやからを生捕つて、城内へ引立て來り、武勇に慢ずる愚な料簡、かかる非道の人々に捕へられしは敵ながら、不便の至りと存ぜし故、わが腹心の者に言ひ附け、御身等にも凶事無きやう、竊に警固いたせしは、これ東吉が寸志にて、敵に恥辱を與へぬ計ひ、此の上拙者が所存もあれば、必ず共に死を留まり、わがなすやうを相待たれよ。

ト よろしく呑み込ませる。權阿彌も思入あつて、

權阿　初めて聞きし貴殿の御芳志、もし本國へ歸りなば小田家の慈悲を物語り、後々恨みを呑まぬやう諸軍に諭すが一つの返禮。

東吉　先づそれまでは大切なる、生捕の蘆久保權阿彌、何れも粗略なきやうに次へ召連れ警固召され。

皆々　心得ました。

一　いざ、權阿彌殿。

皆々　お立ちなされい。（ト是にて權阿彌立上り）

權阿　遉は此下東吉殿、かく捕はれし我々に、厚き心の御教訓、

東吉　人を思ふは身を思ふと、情も深き武士の、

權阿　道ある人に助けられ、

東吉　敵味方とは隔たれど、

權阿　落つれば同じ谷川の、

東吉　水は逆には、（ト兩人顏を見合せるを、道具替りの知らせ、）流れぬぞよ。

ト權阿彌忝いといふ思入、東吉は不便なといふこなしよろしく、時の太鼓にて、道具廻る。

（清洲城内廣間の場）＝本舞臺四間通し常足の二重、上下の蹴込み正面折廻し御簾襖、上下同じく襖の出はひり、日覆より御簾附の大欄間をおろし、花道の揚幕へ杉戸を取附け、舞臺花道共一面に薄縁を敷詰め、向う棧敷向う正面とも水引打返し金地の欄間に替り、總て清洲城内大廣間の體、二重眞中に褥を敷き、春永棒茶筅小忌衣、小さ刀、脇息にかゝり、後ろに振袖襷の小姓二人、春永の刀を袱紗にて持ち、下手に園生、裲襠奥方の拵へ、此の側に立田、振袖なりにて控へ、平舞臺上手に宅間玄蕃中條大八、素袍小さ刀にて住ひ、下手に林佐太郎、同じく素袍小さ刀にて住ひ、此の左右大名烏帽子素袍小さ刀にて控へ、此の模樣管絃にて道具留る。

玄蕃　此の度桶狹間の御一戰、氏基上洛の道を遮り、名におふ今川の大敵を、わづか一日に切崩し、御勝利と相成りしは、是れ偏に我君の御開運の御兆。

大八　駿遠三の太守にて、さしも猛威をふるひたる、氏基すら斯くの如く、滅ぼし給ふ御勢ひ、

左太　近國他國の大小名、その威勢に怯ぢ恐れ、軍勢向けて攻めずとも、降參なすは疑ひなし、

○　最早四海に敵なき同然、

△　これぞ全く我君の、

□　天下に輝く御武德故、

◎ 臣等一同、

玄蕃 恐悦申し、

皆々 上げ奉りまする。

春永 これ皆春永一人の功による所ならず、其方どもが抜群の働きなせし故、既に奥を始め女ばらまで危ふき戰と聞き及び、余が出陣を止めしが、計らざる此の勝利、奥にもさぞ悅ぶであらう。

園生 仰せの如く我君の御身を深くお案じ申し、御出陣遊ばしてより、より〳〵の噂故、心も心ならざりしが、かく御安泰に御歸城まし〳〵。

立田 御側勤めの私共まで、曇りし空の晴れたる如く、氣も浮き〳〵といたしまして、お嬉しう存じまする。

玄蕃 何は格別敵の首級、御實檢の御沙汰なれば。

大八 まづ大將氏基より、御實檢に供へられよ。

○ その大將の首級を上げ、

△ 此の戰爭に比類なき、

□ 大手柄をいたされし、

◎　香取郡の御兩所は、

四人　未だ出仕召されぬか。

左太　疾くより次に控へてござる。

玄蕃　お次に居るなら呼出し召され。（ト佐太郎前へ出て）

左太　それなる御次に控へられし新助殿、小平太殿、急いでこれへ。（ト佐太郎下手にて）

小平　畏つてござります。

　　トやはり管絃にて、小平太上下大小にて、首桶を抱へ出來り、下手へ控へ、首桶を前へ置きはツと平伏する、春永これを見て、

春永　おゝ香取小平太か。

小平　はツ。（ト春永あたりを見て）

春永　都新助はいかゞせしぞ。

小平　はツ、新助ことは氏基に槍を附けたる其の砌、敵の爲めに手疵を受け、養生いたしまかりあれば、名代として拙者一人、出仕いたしてござりまする。

春永　疵養生にて出仕せぬとか。

左太　して新助殿のその手疵は、餘程深手でござりますかな。

小平　いえ、さのみ深手にござりませねば、日ならず平癒いたすでござらう。（ト玄蕃思入あつて、）

玄蕃　いやなに小平太殿、先刻よりこなたの出仕を、我々ども待つてゐた。

大八　持參の首を我君へ、疾く〳〵實檢に供へぬか。

小平　はッ、畏つてござりまする。

ト首桶の蓋を取り、誂への切首を春永の前へ直し、元の所へ住ひ、

大將今川氏基の首級、身不肖ながら斯く申す香取小平太、郡新助兩人にて討ち取りましてござりまする。いざ、御實檢下さりませう。

ト春永首をよく〳〵見て、思入あつて、

春永　駿遠三に猛威を揮ひし、今川治部大輔氏基殿、天命盡きて運極り、首級となつての面會は、實に盛衰とはいひながら、痛はしき有樣なり、さりながら討ち討たるゝは武門の習ひ、皆宿業と思ひあきらめ、修羅の忘執晴らされよ。

ト春永首へ向つて、よろしく思入あつて、

鬼と呼ばれし猛將を、若年の身でありながら、討取りしは拔群の手柄なり、末頼もしき二人の

者、恩賞の義は新助が、手疵全快いたせし上、追つて褒美を遣はすぞよ。

小平　はッ、冥加に餘る君の御諚、有難く存じ奉りまする。

左太　只今君の仰せの如く、勇猛の大將を討ち取られし一の御手柄、お羨しき儀でござる。

ト玄蕃大八何をいふといふ思入あつて、

玄蕃　今川治部大輔氏基は、類ひ稀なる勇猛の大將と承はりしが、桶狹間の一戰に、郡殿や香取殿に果敢なく首を取らるゝからは、人の噂は僞りにて、女童も同樣な、ひよろ〳〵武士と相見ゆる。

大八　左樣々々、いか程敗軍なせばとて、御兩所方に討たるゝとは、餘り意氣地の無い話し、大方これは鐵砲か流矢でも受けてゐて、半分死んだことであらう。

トこれを聞き小平太思入あつて、

小平　これは〳〵、御兩所のお詞とも覺えませぬ、いかにも勇猛の今川殿、拙者等如きが手に合ふべき大將にはあらざれど、郡氏は腕前も人に勝れし武術の達人、殊には名智の東吉殿が差圖によつて敵陣の手薄を計つて裏手より不意を討つたる掛引に、及ばぬ小腕のわれ〳〵も、運に叶つて今川殿を計らず討取りましてござる。

玄蕃　いや、さう口巧者に言はれても、是迄貴殿が戰に出て、雜兵首の一つでも取つた話しを承らぬ、

それが何より慥な證據、左樣ではござるまいが、拾ひ首もござるもの。

大八　隱す程現はるゝと、後日に知れたら大きな恥、もう左樣なことならば、誠を明して我君へ、御詫びをなすが其身の爲め。

小平　元より未熟の拙者なれど、君の御威勢頭にいたゞき、忠義を思ふ戰場に、拾ひ首はいたし申さぬ、無禮な一言控へ召され。

玄蕃　やあ、無禮とはおのれが無禮、小田家の重臣宅間玄蕃へ、生若輩な身を以て、人も無げなるその雜言。

大八　今一度言つて見よ、聞き捨てにはいたさぬぞ。（ト兩人きつとなる、左太郎留めて、）

左太　あいや御兩所、先づ待たれよ、君の御感に預かりし小平太殿の手柄を誹謗召さるゝはよろしからず。

玄蕃　やあ御手前迄が同じ樣に、少年の分際で、腕自慢は氣に入らぬ。

大八　此の場に於てわれ〳〵が、相手になつて勝負なすか。

小平　此方よりは好まねど、望みとあれば是非もなし。

左太　拙者とても朋友の、好みにとも〴〵お相手に、

玄蕃 大八　見事なるかよ。
小平 左太　おんでもない事。
四人　なにを。（ト双方刀の柄へ手をかけ、息込むを）
春永　こりや、双方控へい。
四人　ちやと申して。
春永　やあ、戰勝利となつたるに、無益の爭ひ靜まらぬか。
四人　でも、此の儘に、
春永　予が留むるにとゞまらぬか。
大○　我君の上意でござるぞ。
大△　双方ともに、
二人　控へ召されい。
四人　はゝはツ。（ト四人控へる）
園生　最前よりの爭ひも武道を磨く心がけ、さもあるべき事ながら、けふは勝軍の目出度き御祝儀、何事も我君の御詞に隨うて遺恨を殘さず、双方とも、まあ〳〵控へて居やいなう。

玄蕃　はゝ、その勝戰の賀式も忘れ、
小平　君の御前も憚らず、
大八　我々共が不埒の段々、
左太　恐れ入つて、
四人　ござります。
春永　臣下は互ひに睦み合ひ、主の爲を思ふが第一。無益の議論いたさずに、以後は水魚の交りなし、
猶も忠義をはげみくれよ。
四人　はツ。（ト四人平伏なす。ばた／＼にて、近習一人花道に手を突き、）
近習　ハツ、申上げまする。只今此下東吉殿、夥しき首級を持參いたし、御實檢願ひ度しと申し。出仕
仕つてござります。
春永　おゝ東吉が出仕せしとか、是へと申せ。
近習　はツ、畏つてござりまする。
ト引返し花道へはひる。これより床の淨瑠璃になる。
〽程もあらせず入來る、君の愛臣此下東吉、深き心の唐櫃を、近習に荷はせ、入側のこなた

へ住へば御大將、

ト此の内中の舞を冠せ、花道より此下東吉、烏帽子大紋、小さ刀にて出來る。跡より近習二人首桶を澤山入れし唐櫃を手舁きに舁き、跡より近習大勢附添ひ出來り、花道にて春永を見て、下にゐて辭儀をなす。

春永　お丶、待兼し此下東吉、遠慮に及ばぬ、近う〳〵。

東吉　御意に任せ、只今それへ參上いたすでござります る。何れも御免下されい。

〽禮儀正しく靜々と、御前間近く座に着けば、

ト東吉舞臺下手へ住ふ。跡皆々ずつと下手へ控へる。

小平　此下氏には、

左太　只今御出仕、

皆々　召されしか。

東吉　戰場にて討取りし敵の首級姓名分らず、幸ひ宅間氏が生捕られし茶道權阿彌に檢分させ、それ故遲刻いたしてござる。何れにもお早い御出仕、御苦勞千萬に存じまする。

小平　只今大將氏基の、首級を君へそれがしが、御實檢に供へしのみ。

左太　その外誰も御實檢に、供へしものもござらねば、
大○　御遲刻には、
六人　ござりませぬ。
　　〽大將御機嫌麗はしく、
春永　さて此の度の一戰は、全く東吉其の方が、心を盡せし計略にて、計らざる味方の勝利、予も滿足に思ふぞよ。
東吉　こは恐入つたるその御諚、さしもの大敵滅ぼせしは、君の御武德二つには、宅間殿をはじめとしていづれも方の働き故、何は然れ御勝利にて、大慶至極に存じ奉ります。
左太　して此下氏には其手柄の、首級をお持ちなされしか。
東吉　いかにも、持參仕つてござりまする。
玄蕃　定めて敵の大將首、御手柄の程拜見したい。
大八　片時も早く我君の、御實檢に供へられよ。
東吉　畏つてござりまする。それ、首級をこれへ。
近習　はッ。

〽はッと答へて唐櫃より、首桶取つてさし出せば、

ト近習二人唐櫃の蓋をあけ、内より首桶を出す、東吉蓋を取つて、髻に札を附けし切首を出し、春永の前へ置き、

東吉　いざ、御實檢下さりませう。

〽御前へ出せば春永公、古例の如く實檢なし、首に附けたる髻の札に御目を附け給ひ、

ト春永よろしく首を見て、髻へ附けし札へ目をつけ、

春永　なに、「今川家の侍大將水間左京之助首級、閻魔の廳へ土產として、左枝犬淸これを討つ」。

〽思ひがけなき下げ札に、人々これはと驚けば、春永公はうなづき給ひ、

ト皆々合點の行かぬ思入、春永園生の前と顏見合せ、さてはといふ思入。

ムヽ、扨は左枝犬淸が、我が勘當を受けながら、軍を餘所に見過し難く、桶狹間へ駈け附けて一戰に及びしと見ゆる。

園生　ようまあそれでも犬淸が、戰に出ましてござりまする。

東吉　我君の御大事故、御勘氣の身も顧みず、押して戰場へ走り向ひ、討取る敵の首級、彼が名代としてそれがし御披露仕る、思召に叶ひしか、叶はざるかは存ぜねど持參なしたる數多の首級、と

く と御實檢下さらば有難う存じまする。

〽君の御機嫌伺へば、(ト春永思入あつて、)

春永　むゝ、此の實檢心に叶つた。まだあらば、早く見せえ。

東吉　はツ。

〽又も取出す一つの首級、直す間おそしと實檢し給ひ、

ト東吉近習へ思入、心得て又桶を出し、春永の前へ首を出す。春永髻の礼を見て、

春永　「先手の大將杉山新吾首級、閻魔の廳へ土産として左枝犬淸これを討つ」。これも犬淸が討ちしとか。

東吉　まだ此の外にござりまする。

春永　まだ外にあると申すか。

東吉　一ツ宛は御面倒故、二ツ三ツ御覽に入れん。

〽二ツの首を取出せば、

ト又首桶を二つ出し蓋を取る。

春永　それ、姓名を讀み上げい。

近習〇△　はッ。（ト兩人の髻の札を見て、）

同〇「今川の家臣關口大四郎、」

同△「赤間又九郎首級、」

同〇「閻魔王へ土産として、」

同△「左枝犬淸これを討つ。」（ト春永思入あつて、）

春永　これも左枝が打ちたるか。

園生　大そうな手柄をいたしましたが、立田はつながる緣ある故、嬉しいことであらうなう。

立田　はい、奧樣の仰せの通り、あけて申上げられねど、私の身に取りましてお嬉しうございます。

春永　まだ小姓の時分より、人に勝れし腕前なりしが、かくまで敵を討ちたるは、感心な事ぢやわえ。（ト嬉しき思入、左右を見かへり、）どうぢや、犬淸は手柄ぢやの。

大〇　なか〳〵以てわれ〳〵共は、

四人　及ばぬ事でございまする。

春永　東吉もう無いか。

東吉　まだ〳〵ござりまする。（トこれを聞き、玄蕃大八顏見合せ思入あつて、）

春永 なに、まだ外にあると申すか。

玄蕃 どうで、名ある首ではあるまい。

大八 早く御前へお出しなされい。

東吉 お急ぎならば四ッ五ッ、つゞけて御覧に入れませう。

へつゞけて取り出す首級に驚き、(ト又唐櫃より首級五つ取出し並べる、玄蕃びつくりなし、)

玄蕃 や、これも犬淸が討つたか。

大八 どこからこんなに拾つて來たか。

春永 それ、姓名を讀み上げい。

近○「飯田佐五郎、」

同△「熊澤作吾、」

同○「山岸畑右衛門、」

同△「早川杢藏、」

同○「松岡馬九郎、」

同△ いづれも名ある武士にて、

同○「閻魔の廳へ土産として、」
同△「左枝犬清これを討つ」と、書き記して、
兩人　ございまする。
　〽冥土の土産と一々に記しあるに春永公、さては死せしと察し給ひ、
　　ト春永は犬清が討死せしかといふ思入あつて、
春永　唯一人にて斯程迄敵の首級を打つたる拔群の彼れが働き、一々首級に閻魔の廳へ土産と記しある
　からは、正しく討死なしたる樣子。
園生　えゝ、左樣なれば犬清は、討死いたしてござりまするか。
立田　えゝ、情ないことでござりまするなあ。（ト泣く、）
春永　殘念な事をいたしたり。（ト愁ひの思入あつて、）して首級は、これ限りか。
東吉　いえ、まだ半分でござりまする。
春永　なに、半だと申すか。
東吉　嘸我君にも御面倒故、一度に御覽に入れませう。
　〽又々取り出す數多の首級、御前狹しと並ぶれば、

ト唐櫃より首を八つ出し並べる、皆々びつくりなす。

春永　奥見やれ、皆犬淸が討ちしとある、抜群なことではないか。

園生　稀なる手柄をいたしましたな。

春永　皆のもの見たか。

小平　今川勢の其の內にも、名高き勇士をかほど迄、

左太　打取られしは古今の働き、戰爭一の手柄でござる。

大○　驚き入つた、

四人　儀でござる。

東吉　それ、姓名を讀み上げい。

近○　「富士ケ根大膳、同苗小二郎、」

近△　「三保崎松藏、羽衣典平、」

近○　「淸見關右衞門、幾竹若藏、」

近△　「薩埵藤內、荒灘靜馬、」

東吉　則ち十七級、閻魔の廳へ土產として、御勘氣受けし左枝犬淸、討ち取りましてござりまする。

春永　〽披露いたせば春永公、

敵の首唯一ツ討取るさへも容易でなきに、かく數多の首級を討ち取り、比類なき彼れが働き、末世の鑑になるべきものを、殘念な事をいたしたり。

園生　〽殘念な事いたせしと、御不便餘り春永公、落涙なせば奧方は、なほも涙に暮れ給ひ、

東吉はじめ自らも、御勘氣御免を願ひしが、お赦しなき故身を悔み、討死をいたせしか、かゝる忠義の若者を、惜しい事をいたしましたわいなあ。

立田　これといふのも我姉故、犬淸樣には果敢ない御最期、思へば此の程奧樣の御內意受けて參りし折ちよつと御目にかゝりしが、今は別れとなりましたか。

東吉　拙者も氏基討取る折、面會せしが今生の逢ひ納めであつたるか。

左太　誠に惜しき忠臣を、嵐の花に吹きちらし、

大〇　本意無いことを、

皆々　いたしてござる。

〽本意ない最期と人々が、惜しむを宅間がせゝら笑ひ、

ト皆々愁ひの思入、玄蕃、大八思入あつて、

玄蕃　各々方の愁傷は尤もなる事ながら、何も犬淸殿ばかりが忠臣でもござるまい、武門の習ひ、時の運、武士たるものが戰場で、討死なすは珍らしからず、さのみ手柄とも申されまい。

大八　彼奴は君の御不興受け、身の置きどころなき儘に、敵の物の具、槍長刀、分捕りでもなす料簡で大方戰に出たところが、多人數に取りまかれ、とう〳〵命を落したは犬淸ではないこりや犬死。

玄蕃　外に御家來もなきやうに、犬淸々々ともつてうなさるが、承はれば東吉殿、御手前はその以前、猿之助と呼ばれたけな、犬と猿とは仲惡る同志、それに引きかへ猿殿が、犬侍の肩を持つとは身共一向合點が參らぬ。

ト嘲弄なしたる一言に、東吉心の怒りをかくし、

東吉　その御不審は御尤も、然し世上の諺に犬も朋輩と申せば、朋友の好み捨てがたく、三本足らぬ猿智慧にて、かね〴〵主君へ御勘氣の某御詫びをいたしたなれど、更にお許しがござらぬ故、世を見限りて覺悟を極め、必死の働きいたしたは、全く忠義の志し、其の功名を横合からねたむは狐狸に等しき輩。

玄蕃　や。

東吉　同じ獸の名を取つても人の心は千差萬別、はてさま〳〵なものでござる、ム、ハ、、、、。

〽鸚鵡返しに恥しめられ、言句も出ず閉口す、

ト東吉嘲笑ひ、玄番大八口惜しき思入、此の内近習二人は首級を唐櫃の内へ片付ける。氏基と水間の首桶二つ殘し置き、

〽春永公は歎息なし、

春永　あゝ、誤つたり〳〵我愛臣故許しがたく、所存あつて犬清が勘當を許さゞりしは、此の春永の一生の誤り、奥を初め東吉が、詫びなせしを用ひなば、かゝる事にはなるまいもの、今日の今となり誠に後悔いたしたり、汝が手前面目ない、奥も東吉も許してくれよ。

園生　其のお心が今少し早くお解け遊ばしたら、むざ〳〵殺しもせまいもの、今となつては六日のあやめ、十日の菊の根を斷つて、名のみ殘りし落花の一枝。

春永　散りて返らぬ左枝が落命、不便な事をいたしたわえ。

〽さしも勇氣の大將も、惜しむ名殘りに不便やと、暫し涙に暮れ給ふ。樣子見て取る此下東吉、お詫の小口と座を進め、

ト春永涙を拭ひ、後悔せし思入、東吉しめたといふ思入。

東吉　左樣にお心解けたる上は、桶狹間の一戰に盡せし忠義と思召され、今改めて犬清が、御勘氣御免

下さるやう、偏に願ひ奉る。

春永　お丶、何がさて許さいでなんといたさう、せめて彼が位牌へなりと、予が存念を申し傳へよ。

東吉　すりや、御勘氣御免下さりますとか。

春永　其の身の願ひを果さぬ故、たとひ死しても魂魄は定めて中有に迷ひつらん、予が一言を手向けとなし、成佛さすがせめての功德、その方よしなに計らうてよからう。

東吉　はゝ有難きその仰せ、犬淸は申すに及ばず、御詫なしたる拙者が大慶、何は格別御勘氣御免の上からは、改めて左枝犬淸御目通りの儀願ひ上げ奉りまする。

〽心得がたき東吉が、詞に御不審晴れ給はず、（ト春永心得ぬ思入あつて、）

春永　こは東吉とも覺えぬ願ひ、死したるものに面會とは。

園生　もし息災にてはあらざるか。

東吉　御推量の通り、存命にござりまする。

小平　なに、犬淸殿は、

皆々　存命とな。

春永　むゝ、さては討死いたさぬとか、それぞ幸ひこれへ呼出し、勘當許し遣はさん、

東吉　かくあらんと存ぜし故、此の東吉が所存さへ、既に燈火の消えなんとするに、唯一言の油を注ぎ彼が命をつなぎとめ、最前竊にお次迄、召連れましてござります。

〽始めて明かす所存の極意、さてはとばかり御大將、御臺所も諸共に、御悅びぞ限りなき。

ト春永園生嬉しき思入あつて、

春永　いや、存命とは悅ばしい、よくぞ止め置きたるぞ。

園生　いつもながら此下が、才智勝れし取計ひ、

春永　何はともあれ犬清に片時も早く面會したい。

東吉　只今これへ呼出しませう。

春永　少しも早く逢ひたいわえ。

東吉　畏つてござりまする。それ、呼出し召され。

近習　お次に控へし犬清殿、君のお召し急いでこれへ。

〽呼びつぐ聲と諸共に、（ト花道の揚幕にて、）

犬清　お召しによつて左枝犬清、只今參上仕る。

〽實に旱魃に雨を得し園の若木の左枝犬清、疊ざはりもしとやかに、席を下つて平伏す。大

將それと見るよりも、

ト大小を冠せ、花道より左枝犬淸、上下、衣裳、大小にて出來り花道へはッと平伏なす、春永見て、

春永　おゝ犬淸か。（トよく達者でゐたといふ思入。）

犬淸　はッ。（ト辭儀をなす。）

春永　待ち兼ねし、近う〳〵。

東吉　我君の上意なれば、遠慮に及ばぬ犬淸殿。

小平　とく〳〵席を、

皆々　お進みなされい。

犬淸　でも、御勘氣の拙者故。

春永　苦しうない、近う〳〵。

犬淸　然らば、御免下さりませう。

ト並居る諸侯に一禮し、御前間近く打通る。

トやはり右の鳴物にて、犬淸舞臺下手へ來り、平伏なす。

春永　おゝ犬淸か。

犬清　我君様。

春永　よく息災でをつたな。

〽思はず前へ座を進み、愁ひ却つて歡びの、又も涙にくれ給ひ、

ト春永犬清を見て、嬉しき思入よろしくあつて、

さて犬清、その方が勘當も所存あつて許さゞりしが、討死なせしと聞きたる故、殘念に思ひしが存命にて滿足なるぞ。

犬清　御勘氣を蒙りてより、久々にて麗はしき御尊顔を拜し奉り、恐悦至極に存じ奉りまする。御臺樣には御勘氣中、厚き御惠み蒙りまして、御禮は詞に盡しがたし。

園生　何はともあれ戰場で、死せしと思ひし犬清が、替る事なき姿を見て、立田そなたも嘸嬉しからうな。

立田　此のやうな嬉しい事は、ござりませぬわいなあ。

春永　疾にも勘氣許す可きを、所存あつて許さゞりしが、春永が一世の誤り、今日の首實檢東吉が披露によつて、そちが軍功手柄の段々逐一聞けばあつぱれの働き、春永ほとんと感じ入る。此の度の忠義にめで、今日より改めて勘當ゆるし遣はすぞ。

犬清　すりや拙者めが御勘當、只今よりお許し下されんとな。
春永　いかにも不興を許しくれる、以前に替らず忠義を盡せ。
犬清　はツ恐入つたるその御諚、そも勘當を受けしより、今日只今迄生きて再び我が君に、御目通りも叶はずと明暮れ歎きをつたる所、計らずもお召しに預り、寛仁大度の御沙汰を伺ひ、盲龜の浮木を得たるの思ひ、ハヽヽツ、有難く存じ奉りまする。
〽天を拜し地を拜し、悦び勇むぞ道理なり、（ト犬清よろしく嬉しき思入）
園生　それもそなたが忠義から、一命かけて我君のお爲めを思ひし心より、再び花咲くけふの仕儀。
東吉　御勘當御免なきを恨み、あの折自殺召されたら、今日只今我君に此御目見得もなるまじきに。
犬清　これも貴殿の情にて、今ぞ愁ひの眉を開き、日本晴がいたしてござる。
春永　さるにても討死と、覺悟極めし其方が、よくも無事にて戻りしよな。（ト犬清思入あつて、）
犬清　されど君の御不興蒙むり、只管御免を祈れども、お許しなきは武士の身にあるまじき不興の科、潔よく切腹なし、せめて此の身の申譯と、既に覺悟を極めし所、東吉殿に止められ、とても死すべき命なら今度の一戰に花々しく功名して、討死なせよと勸められ、一旦の死を止まり、先手の人數に加はつて、いさゝか敵の首を取り、やがて討死と思ひの外、君の御武德廣大にて、戰は

味方の勝利にて氏基討死いたせしより、敵は忽ち逃げ散つたれば、又も拙者が一命助かり、生延はつてござりまする。

春永　して又汝は何れの場所にて、いかなる戰爭いたせしぞ。

犬淸　丸根の砦の先手に加はり、いさゝか防戰仕る。

東吉　その場のあらまし軍の樣子、委細を是れにて言上召されよ。

犬淸　仰せにはござれども、われ〳〵如きが未熟の戰ひ、お物語りも何とやら。

小平　いや、その斟酌には及ばぬこと。

左太　かく十七級も名だたる武士の、

近〇　首級を打たれし犬淸殿、

近△　その拔群の御働きを、

大〇　われ〳〵共も後學に、

大△　承りたく存じ申す。

皆々　とく〳〵申上げられよ。

犬淸　左樣ござらば仰せに從ひ、其の場の樣子申上げん。

〽申上げんと座を構へ、（ト犬清よろしく思入あつて、）そも此度の合戰は、我君一世の御運と定め、千里の外へ轟す、其の御武德の廣大なること、名に大鳥の翼に等しく、

〽鷲津丸根を始めとして、街道筋に七ケ所の砦を構へし御手配り、斯くとは聞けど犬清が、御供ならぬ身の不埒、東吉殿の情により、曇りおる身の錆鎧、鈍き獲物を携へて、馳せ加はりし丸根の陣所、敵や來ると待つ折柄、

〽音に聞えし今川氏基、威勢にはびこる上洛に路次の警固は目に餘る大軍潮の如くにて、早くも砦の四方を取卷き、鬨を作つて攻めかくれば、かねて期したる味方の陣中、暫し矢玉に防ぎし所、

〽かくては果てじと備へを立て、一の木戸口押開き、夏野の芒と突出す槍先き、折も皐月の中空に一聲早く魁に、名のりかけたる時鳥。

〽小田春永の身内に於て、さるものありと呼ばれたる、左枝犬清これにあり、けふ討死の晴れ軍、閻魔の廳へ道づれに、首を渡せと呼はり／＼、

〽敵を引き受け／＼戰ふ内に、東吉殿の計略にて、

敗走なせし體と見せ、十町ばかりも引退く、

〽折しも一天かき曇り、俄に雨は車軸を流し、身をうるほせば最屈竟、

寄せ來る敵を追ひかへし、從橫無盡に切りたて薙ぎ立て、追ひ詰め〳〵追ひまくり、總て拙者が

討ち取りし今川家の侍分、名高き勇士十七人、その外端者は數知れず、

〽屍は積んで山をなし、流るゝ血潮の紅に夏まだ早き草紅葉、

其の餘の士卒は川風に、飛交ふ螢の散る如く。

〽むう〳〵と逃げちりて、

相手になるものあらざれば、死を極めたるそれがしも生きて凱陣仕る。戰のあらまし斯くの通り、

〽かくの通りと犬淸が、ありし次第を物語れば、

ト犬淸白扇をつかひ、物語りよろしくあつて、納まる。春永感心の思入あつて、

春永　ほゝお、あつぱれなる其の働き、目に餘る大軍を、切崩せしのみならず、十七級まで敵の首打取つたる汝が功名、此の上は春永が翼となつて忠義を勵み、猶英勇の名を上げよ。

犬淸　はゝツ、不肖のそれがし御賞美にあづかり、恐れ入つてござりまする。

トこれを聞き、玄蕃大八思入あつて、

玄蕃　いや、その丸根の砦にて敵を引受け防ぎなせば、小田彈正殿を始めとして、討死なせし勇士の面
　面、これがまことの手柄でござる。
大八　我一人働きしやうに申せど見ぬ戰場、犬といふ名に股へ尾を挾んで逃げたか知れぬくせに、嗚呼
　がましい物語り、かたはら痛いことでござる。
小平　あいや御兩所の仰せながら、犬淸殿の防戰は、かくいふわれ〳〵先手故、
左太　共に戰爭いたせし故、衆に勝れし働きは、慥に見聞いたしてござる。
玄蕃　いや、御手前達も犬同樣、尻尾をはさんだ仲間でござらう、入らぬ口出しさつしやるな。
　ト言ひ爭へば春永公、
春永　やあ又しても〳〵、人の手柄をさみなす雜言、無益の爭ひ控へて居よ。
玄蕃　でも、僞りを申す故。
春永　まだ〳〵申すか。
玄蕃　はッ。
小平　君の上意。（ト園生思入あつて、）
園生　かく犬淸が御勘氣を御免なりし上からは、吉野とても同じ科故、勘氣を許し女夫になし、望みを

叶へて遣りたいわいの。

立田　さうなりましたら姉事も、嘸悦ぶでござりませう。

園生　吉野は一緒に伴うたか。

犬清　さあ、そのお尋ねの吉野ことは。〈ト思入にて言ふ。〉

園生　替りし事でもありはせぬか。

犬清　さあ、それは。

園生　案じられる、そなたの詞。

立田　姉はどうぞしましたか。

〽尋ねに浮む涙をのみ込み、

犬清　仔細あつてなき人の、数に入つてござりまする。

春永　なに、吉野は此の世にあらざるとか。

立田　そりやまあ、どういふ譯あつて。

園生　仔細を言うて聞かしやいなう。

〽問はれてそれと言ひ兼ぬれば、〈ト東吉思入あつて〉

東吉　その仔細はそれがしが逐一承知仕る、申すも便なきことながら、犬清殿出陣の砌り、もしも心の惹かされて、未練な働きいたしなば、末代までの恥辱ぞと、夫を思ふ吉野が貞節、跡へ心の殘らぬやうと、首途を祝して自殺なし、健氣な最期いたしたり。（ト立田びつくりなし）

立田　えゝ、そんなら姉は自害して、果敢ない最期を遂げしとか、ハア、、、。

〽はッとばかりに泣き沈めば、心を察し園生の方、

園生　おゝ尤もぢや〳〵、みづからも幼年より召仕うたる吉野故、他人のやうには思ぬわいなう。これに附けても御勘氣を早くお許しなされたら、あへない最期はさせまいもの、みづからでさへ此の樣に涙にむせびるるものを、立田が歎きは無理ならず。

〽不便のものやと奥方も、貰ひ涙にくれたまへば、立田は始終正體なく、

立田　かういふ事とは露知らず、今の今迄姉上の便りを待つて居りましたに、悲しい事になりましたわいなあ。

犬清　其の愁傷は理ながら、まだ〳〵そちが歎きの種、見せねばならぬ品こそあり、

〽君が御前へ供へたる、水間の首級をとり出し、

ト犬清以前の首桶から、水間の切首を出し、立田の前へ置き、

さあ、此の首級に、見覺えありや。

〽さし出せば合點行かず、

立田　して、此の首は、誰人なるぞ。

犬清　それぞ御身等同胞が惣領の兄にして、幼少の折家出なし、今川方へ養子となりし、水間左京之助と言へるもの。

立田　えゝ、そんならこれが別れ程經し、兄上でござりまするか。

犬清　いかにも、そなたが實の兄、吉野故に犬清が御勘氣受けしと承り、此度の合戰に、我に手柄をさせんずと、それその如く髻へ犬清殿へ進上と、札をつけたる覺悟の體、義によつて命を捨て討死なして果てたるぞ。

立田　幼い時にお別れ申し、お顏もろくに知らざりしが、かうして果敢ないお姿でお目にかゝるは情ない、たつた一言妹と、

〽言うて下され兄上と、果敢なき首に取り縋り、口說き歎くぞ道理なり、

ト立田切首を抱へ泣く。

春永　さてはそれなる左京之助は、吉野立田が兄なりしか、我も最前のその首級實檢の折、髻に不審を

打ちたるが、これにて樣子相知れたり。

園生　敵ながらあつぱれな左京之助がその最期、して又親の左近には、別條なかりしか。

犬清　舅左近はそれがしと共に戰に出たれども、吉野といひ左京といひ、果敢なく一命捨てし故、賴み少なき老の身に無常を感じ世を見限り髻切つて出家となり、立田がことは犬清によろしく賴むと言ひ捨て、同胞二人が菩提の爲め、高野へ登つてござります。

立田　えゝ姉上や兄上に死別れたるその上に。たつた一人の父樣まで高野へお登りなされしか、跡に殘りし此の立田は、便りない身の孤兒同然。

〽どうせうぞいなとかき口說き、わッとばかりに泣き伏せば、東吉不便と打見やり、

東吉　その歎きは理ながら、かね〴〵そちが御臺樣のお側で御用を蒙る身の上、思召しもあらう程に必ず氣遣ふことなかれ。

園生　東吉が言やる通り、幼い折から召使ひ不便に思ふ立田が事、親同胞に殘されて便りない身の上故姉の吉野が身替りに、自らが媒して、犬清そちに遣はす程に、立田を妻に持つてくりやれ。

犬清　すりや、立田殿を拙者めに。

園生　吉野と思うて末長う、不便を加へてやりやいなう。

犬清　こは有難きそのお詞。

立田　そんなら此の身は犬清殿と。

園生　友白髪まで二人とも、添ひとげてくりやいなう。

犬清　冥加に餘る御媒ち。

立田　なんと御禮を申さうやら、

二人　はゝ、有難う存じます。

〽悦ぶ内にも嬉しさと、又恥かしさに、立田は流石恥ぢ紅葉、顏に照り添ふばかりなり、又も宅間が横合より、（ト立田恥しき思入。）

玄蕃　はて、世の中は樣々にて、御不興受けし犬清殿が、風が替つて御首尾がよく、春と秋との時候の間違ひ、花の吉野が身替りに、紅葉の色氣たつぷりな立田を妻に下さるとは。

二人　返すゞゝも。

東吉　又しても無益の口出し、御前でござるぞ。

兩人　むゝ。

東吉　控へ召されい。

〽鋭き詞に是非なくも、控へる折柄近習が立ち出で、

トばた〳〵になり、花道より近習◎走り出來り、

◎はッ、申上げます。桶狹間の合戰に氏基討死と承はり、鳴海大高を固めたる、後詰めの人數殘らず引取り、總て靜穩に納まりましてござりまする。

〽申上ぐれば御大將。

春永　おゝ根を絶てばおのづから枝葉は枯るゝ自然の道理、桶狹間の合戰は目に餘る大軍故、迚も勝利は思ひもよらずと覺悟いたし居つたるに、東吉汝が軍略にて勝利となりし余が悅び。軍功にめで褒美とらせん、何なりとその方が、望みの品を遣はさん、さゝ望め〳〵。

東吉　はゝ冥加に餘る其の御諚、御褒美の御沙汰とあれば、仰せに任せ東吉が、望みの品がござりまする。

春永　して、汝が望みの品は。

東吉　御實檢相濟みし、敵の大將氏基の首級、これを頂戴いたしたい。

春永　なに、氏基の首級をくれとか。

左太　はて、此下氏には異なものゝ、

小平　お好みでござりますな。

玄蕃　敵の頭を所望召さるは、大方頭痛のまじなひか。

大八　まさか半助同様に、葱と入れて喰ひもせまい。

春永　して氏基が首級を望むは、

〽東吉威儀を改めて、（ト誂への合方になり、）

東吉　首級を望むは外ならず、氏基戰死いたせども、名に負ふ太守の今川家に、子息氏胤大國とて、猶殘黨をかり集め、弔ひ戰の手配りなし、寄せ來らん事必定なり、今此の首級を駿州へ送り追善供養いたさせなば、それにて小田家の情も知れ、弔ひ戰の鋒先鈍らん、これ攻めずして降參さす寛仁大度の謀計、駿州へ送り遣はしたく、それ故にこそ氏基の首級を頂戴いたしたい。

ト春永感心の思入あつて、

春永　むゝ、流石は東吉希代の計略、攻めずして降參さすは、いつもながら感心いたす。

犬淸　成程これはよき計略、然し敵地の駿州へ、持參いたすその者は。

東吉　その便りは當城へ、生捕りになりまかりある氏基が妾朝霧、まつた同朋權阿彌、此の兩人の命を助け、首を警固いたさせて本國駿州へ歸し申さん。

トこれを聞き玄蕃大八むつとなし、

玄蕃　やあ、その朝霧と權阿彌は、かく申す我々が武勇を以て生捕る兩人、

大八　東吉殿の我儘に、本國へ歸すなどゝはかたはら痛いその一言。

玄蕃　今にも首を打落し、刀の銹となすべき奴、助けることは。

兩人　まかりならぬわ。

春永　はて、汝が生捕りしは予も聞いて存じ居れど、高の知れたる妾と茶道、たとひ助けて歸すとも、さのみ味方の害にもなるまい。

兩人　でも生捕りし兩人。

春永　打捨て置けと申すに。

兩人　へゝえゝ。（ト控へる。）

春永　こりや東吉、少しも早くその兩人、召連れて參れ。

東吉　畏つてござりまする。（ト向うへ向ひ、）やあ〳〵、警固の人々生捕の兩人召連れ參れ。（ト揚幕にて、）

三人　はあゝ。

へ無慚なるかな朝霧よ、哀れ胡國に捕はれし王照君が浮思ひ、そばに附添ふ權阿彌も共にし

ほるゝ姿にて、警固の武士に取り巻かれ、しを／＼と歩み來る。

ト此内花道より前幕の朝霧、着流し、以前の權阿彌跡に附き、しを／＼として、幕明きの軍兵二、三、四附添ひ出來り、花道にてちよつと思入あつて、直に舞臺へ來り、

軍二　君の御前、

三人　下にをれ。

〽言はれて朝霧春永を恨めしげに打守れば、

ト朝霧權阿彌下に居る、朝霧春永を見て恨めしき思入。

春永　御身は今川氏基の愛妾朝霧殿、まつた茶道權阿彌敵の中へ生捕られ、嘸かし窮命、春永深く察し入る、せめて心を慰める爲め、御身に取らする品がある。それ、東吉。

東吉　はツ。

〽はツと心得此下東吉、首桶携へ二人に向ひ、

ト東吉以前の氏基の首桶を出し、朝霧權阿彌の前へ置き、

我君より下し給はる御賜、篤と拜見いたされよ。

〽拜見せよと差し出せば、それと白木の蓋取りのけ、朝霧見るよりびつくりなし、

ト此の内兩人首桶の蓋を取りびつくりなし、

朝霧　や、こりや我君の御しるし。

權阿　ても、淺ましいお姿に、

朝霧　あなたはお成り、

兩人　なされたなあ。

〽あへなき首級に取縋り、前後正體泣きければ、さすが不便と御大將、御臺を始め人々もともに袖をばぬらしける、朝霧やう〳〵涙をはらひ、

ト此の内朝霧首に縋り泣く、權阿彌介抱なし、皆々愁ひの思入、こなし、

朝霧　勝つも負けるも武士の、戰の習ひといひながら、

〽思へばあへない此の有樣、かういふ事とは露知らず、昨日桶狹間の御旅館で、御慰みの今樣に、

幾萬代を壽ぎて、

〽祝ひしことも仇となり、野末の露のつかのまに、

消えて果敢なき御運の末、

〽御痛はしやと掻き口說き、又も涙に暮れければ、權阿彌は介抱なし、

ト此の內朝霧は悲しき思入、

權阿　その悲しみは無理ならねど、御身ばかりぢやござらぬぞ、此の權阿彌も年頃の御恩は同じ御主君樣、その御最期を餘所になし、かくむざ〳〵と生捕られ、生きてゐる氣はなけれども、最前も語りし如く、東吉殿の詞に隨ひ、死ぬにも死なれぬ恩義のせつぱ。

朝霧　よしや情は受くるとも恨みは晴れぬ五月雨に、濡れて乾かぬうき涙。

權阿　しめり勝ちなるとらはれに、冥土へ急ぐ時鳥

朝霧　せめて一聲名乘りかけ、（ト朝霧立懸るを權阿彌留めて）

權阿　そこを暫らく音を忍び、

朝霧　さあ、忍びがたなき恨みのたけを、

權阿　はて、血を吐く思ひで待たつしやりませ。

〽せくを止むる權阿彌が、心ありげな詞を察し、

ト朝霧立ちかゝらうとするを、權阿彌留める。春永思入あつて、

春永　此度の合戰に不肖春永運に叶ひ、氏基殿の首級を見て、戰に勝ちしは味方の幸ひ、我悅びは敵の

歎きと、子息氏胤殿を始め、家臣の心いかばかり、その無念を思ひ遣り、それなる首級を今川家へ送り屆けんと思へども、持參なすべき其の人なし、よつて御身等兩人が命を助けとらせる程に

これより直に首級を携へ、早本國へ歸られよ。

〽仁義に厚き大將の詞に二人は顏見合せ、（ト朝霧權阿彌思入あつて）

朝霧　すりや、我々が命を助け、

權阿　國へ歸れとおつしやるか。

園生　仁義を守る我君の、

立田　仰せに從ひその首級を、

小平　本國駿州へ持歸り、

犬淸　小田家の寸志を諸軍に語り、

東吉　追善供養が肝要なるぞ。

〽原き情に朝霧も、今は恨みの念も晴れ、

朝霧　今の今まで春永公を主人の敵と恨みしが、そのお詞を聞く上は、情に向ふ刃はなし。

權阿　仇とは言へど身に餘る寬仁大度の御計ひ、是れといふのも情ある此下氏の取りなし故、

朝霧　御禮は詞に、
兩人　盡されませぬ。
　　〽忝なしとばかりにて、嬉し涙に暮れにける。宅間は佛頂面、
　　　ト此の内朝霧權阿彌春永東吉忝ないといふ思入、
玄蕃　はて仕合せな奴もあればある、正しく敵の一類故、生けておかれぬ二人が體、此の玄蕃が申し受け新身の刀ためさんと、思ひし事も水の泡。
大八　此儘國へ歸すとは、命冥加なやつぢやなあ。
　　〽惡口なすを耳にもかけず、
朝霧　月は草木を照せども、心ゆがみし村雲の、
權阿　又も障りのなき內に、
朝霧　お暇いたすでござりませう、
　　〽立たんとするを、
東吉　あいや兩人、暫らく待たれよ、最早、戰は鎭まれど、街道筋は穩かならず、
小平　池鯉鮒鳴海のあたりには、

大○　旅人を惱ます山賊野武士、
大△　徘徊なすと承はる。
東吉　供をも連れず只二人、道を行かんは危ふい〱。
〽詞に實にもとためらふ兩人、聞くより犬淸すゝみ出で、（ト犬淸前へ出て、）
犬淸　いや、その儀は必ず氣遣ひ召さるな。（トのりになり、）此の兩人は御主君より氏胤殿へ大事の進物
御使者の役目は犬淸が、御勘氣御免の奉公はじめ、路次の案内心を附け、今川領まで送り申さん
必ず御安堵下されたし。
〽御安堵あれと勇ましき、名におふ勇士の犬淸が、踏出す足のあとならで、譽れは梅のかん
ばしく、（ト犬淸よろしくあつて、床の淨瑠璃納まる。）
春永　おゝ、よくこそ心附きたるぞ、そちが參れば氣遣ひなし、淸洲に泊めし首級の珍客氏基殿の出立
に別れの杯一献致さん、誰そあるか、土器もて。
立田　畏りました。（ト後ろにある土器を載せし三方の長柄の銚子を持來る。）
春永　東吉、肴いたせ。
東吉　はッ。

ト扇を構へる。これをきつかけに下座へとり、誂への謠、笛の入りし鳴物になり、春永土器を取り立田酌をして春永呑んで、立田取次ぎ、朝霧の側にある首の所へ持つて行く、朝霧土器を取る、立田酌をする、權阿彌手傳ひ朝霧切首の口へ呑ませ、權阿彌と顏見合せ、果敢ない事だといふ思入あつて、首桶の蓋をして、わつと泣く。犬淸兩人に向ひ、立てといふ思入。是れにて權阿彌首桶を持ち、朝霧先に犬淸附いて花道へ行く。玄蕃、大八刀を持ち立ちかゝるを、東吉兩人を留め、ちよいと立廻りあつてまゝと留め、

春永　駿州三の太守たる、氏基殿が歸國の道中、

東吉　凶事なさぬやうに氣を附けられよ。

犬淸　委細畏つてござりまする。

玄蕃　思へば〳〵。

ト立ちかゝるを東吉留める、朝霧權阿彌、ムゝと息込み、立歸らうとするを犬淸留める。

春永　目出度く出立。

三人　はッ。

ト段切の謠になり、花道の三人辭儀をなす。東吉は兩人の立上るをまづと留める。春永延上つて見送

ろ、此見得よろしく、右の鳴物にて、　　幕

ト幕引きつけろと、犬淸こなしあつて、兩人に行けといふ思入、これにて三人立上り、太撥の時の太鼓になり、朝霧權阿彌愁ひのこなし、犬淸後より不便なといふ思入にて、よろしく花道へはひる。知せに附き。

跡　シヤギリ

桶狹間合戰（終り）

洞峯の荒宮に山神の道行
淀川の蘆原に長刀の月影
船橋の隱家に忠孝の身替

『左近太郎』は慶應元年十月、市村座に稿下された。作者五十歳の時である。本來は『蘆屋道滿大內鑑』(葛の葉)の中へ増補されたものであつて、上演當時も大內鑑の名題の中に含まれてゐた。語りは「戀しくば尋ね來て見よいづみなる信田の森と葛の葉が障子へ殘す狐別の其口文字も鳥居數名人上手の勤めし跡未熟な業に及ばぬ故辭退なせしも御ひいきより御進めうけて取あへず拙き筆に二幕三幕顏見世めきしだんまりの雪の世話場を書加へ是を一座の花町に歸り花咲く小春狂言」といふのであつた。當本の名題は「妖魔ヶ嶽の古宮に矢猛心の武士が思入月弓張(おもひいるつきのゆみはり)」であつた。

役割は先代坂東彥三郎(左近太郎照綱)、尾上菊次郎(左近太郎妻花町)、中村仲藏(洞ヶ峰の阿修羅王、岩倉治郎太夫)、市村家橘(柏木衞門之助、船頭浪六)、澤村訥舛(安倍保名)、市村竹松(瀧口靱負之助、好古の息女六の君)、市川新車(六の君侍女筑波根)、坂東三津五郎(畑作娘楓)、市川桃太郎(石川惡右衞門)、嵐冠五郎(早舟主稅)、市川團八(ジヤクマク法印)、等であつた。此分の題字は作者の筆ではない。

挿繪にしたのは牧方堤に於けるダンマリの場で、稿下當時の繪草紙に據る。

左近太郎雪辻能（二幕）

上の巻

河内國洞ヶ嶽の場
同　牧方堤の場

富本連中

〔役名――辻能師柏木左近實は左近太郎、柏木衞門之助、船頭浪六、安倍保名、洞ヶ嶽阿修羅王、瀧口靫負之助實は阿修羅王、早舟主税、乾平馬、ジヤクマク法印、百姓〇△□、仕丁一二三。左近太郎妻花町。鼓師畑作娘楓、六の君の侍女呉羽等。〕

（洞ヶ嶽の場）――本舞臺三間、後ろ山幕、上手藪疊、諸所に松の立木、日覆より同じく釣枝、上の方に杉の梢を見せし小高き岩組の張物を出し、幕の内より兩方の窓ぶたをおろし、すべて深山夜の模様。山おろしにて幕あく。と上手にて百姓〇△□の三人にて迷子を呼びゐる。

三人　迷子の〳〵楓やアイ〳〵。

ト蓑笠百姓なりにて、松明を持ち、鉦太鼓を叩き呼びながら出來り、

百〇なんと二人の衆、このやうに尋ねても楓殿の行方の知れぬといふは、あんまり不思議な事だが、若しや神隱しにでもなりはせまいか。

△されば、サ、色男が連出したといふ噂だが、そんな事があれば一つ村のわし等がこと、ちつとは噂にでも聞かねばならぬ筈ぢや。

□して見れば神隱しに違ひない、それを尋ねるのは無駄な事だ。不人情なやうなものだが、もう尋ねるのは止めにしようではないか。

〇然しながら秘藏娘の事だから、畑作作が氣違ひのやうになつてゐるから、可愛さうだ。無駄としてもう一遍尋ねてやらう。

△何にしろ宵から步き詰めで、がつかり草臥れた。爰で一服やつてから、出掛けるとしよう。

□それもよからう。サア〳〵煙草の火なら、たんとつけなさい〳〵。

ト松明を出す。三人捨ゼリフにて煙草を喫んでゐる。此の內花道の揚幕にて、

仕丁　迷子の〳〵、六の君樣やアイ〳〵。

トやはり山おろしにて、花道より一、二、三仕丁の拵へにて、松明を持ち、鉦太鼓を叩き、呼びながら出で舞臺へ來る。

百〇　モシ〳〵、お前様方はそのやうなりで。
百姓三人　何をお尋ねなされますな。
仕一　我々はかう見えても、親王様の仕丁だが、小野の好故様の御息女にて、その親王様の思ひ者の六の君様といふお方が、今夜奥御殿から何れへお出でなされたやら、とんと今にお行方が知れぬ。
仕二　所が其のお方の腹には、名におふ親王様のお胤を宿しておいでなされば、到つて御大切なお身の上。
仕三　それ故御殿は上を下への大騒動、我々までがかうやつて、鉦太鼓を叩きたて、草を分けて八方へお行方を尋ねに出たのだ。
百〇　それは似た事もあるものでございます。
百姓三人　私共も迷子を尋ねに出たのでござります。
仕一　そして貴様達の迷子は何だ。
百〇　私共の方の迷子は、同村にをりまする鼓師の畑作と申す者の娘にて、名を楓と申しまするが、宵に誰か呼びに参り出て行つたぎり、これもいまだに行方が知れませぬ。
百△　もう年頃の娘ゆゑ、情人でもあつて逃げたと思ひ、あたり近所の心當りを尋ねた所、そんな事も

ない樣子。

百□　それにつきまして、此の洞ヶ嶽の山神樣が此頃中荒れ出して、方々の娘が神隱しになると、專ら風聞がありますから、その穴の君樣とやらも、こちの楓殿も、こりや神隱しに逢うたに違ひござりませぬ。

仕一　シテその山神の宮といふは、何處にあるのだ。

百○　丁度此崖の下でござりまするが、神體は何でござりまするか、時折御機嫌の惡い時には山が荒れ出して、まことに私共が難儀致しまする。

百□　その時にはきつと一人づゝ、何處かの娘がなくなりまする。

百△　どうかあなた方は、その山神の宮を御詮議なされるなら、私共の方の娘もをりましたら、どうか親王樣の御威光をもちまして、お序に取返して來て下さりませ。

仕一　とんだ事を申すものだ。假令親王樣の言附でも、そんな荒い神を詮議どころか、甚だ難儀だ。

仕二　兎角さはらぬ神に祟りなし、早く麓の方へ參るとしよう。

仕三　それとも其方達が山神の宮を搜すなら、こちらの迷子も序に賴みたい。

百△　イヤ、ずるい事をおつしやりまするわえ。

百〇 然し、なんぼ山神でも神の御末の親王樣の思ひものとあれば、祟りをしよう譯がない。

百□ さうとも〳〵、さういふ尊いお方なら、こちとらも冥加の爲め、どうぞ娘を搜して歩く序だから見當つたら早速に、

百姓三人 お連れ申してまゐりませう。

仕一 それは奇特な事だ。然しいよ〳〵知れぬ時は、其方達へも人歩を當て、穿鑿なさるに相違なければ、必ずともに粗略なきやう、公用と思ひ勤めたがよい。

百姓三人 へイ〳〵、畏りましてござりまする。

仕二 則ち是に六の君樣の、お年からお姿を記せし書物、是を貴樣達に渡して置くほどに、勿體ないから粗末にせぬやう致して、公用を勤めたがよい。

ト淨瑠璃の觸書を百姓〇に渡す。

百〇 左樣なら是がお人相書でござりまするか。ちよつと拜見致してもよろしうござりませうかな。

仕二 よいとも〳〵。とつくりと拜見致すがよい。

百〇 それは有難う存じまする。然しあなた方のお心當りでは、この迷子樣の方角は、どちらだと思召しまする。

仕一　されば、南でなし、北でなし、

二三　東西々々。（ト百姓〇淨瑠璃の觸れ書を開き、）

百〇　淨瑠璃名題——。（ト替る〴〵に淨瑠璃觸れを讀む事あつて、）オヤ〳〵、こりやア何だかをかしな人相書だ。

百△　モシ、此太夫といふのは、いつたいこれは何でござります。

仕一　それはたしか、お公家樣の名だ。

百□　三味線といふのは、是れは何でござりまする。

仕二　其方共がその人相書を粗末にすると、撥が當るといふ事だ。

三人百姓　とんだ茶番だ。

仕三　コリヤ〳〵、常談ではない。必らず唯今申した、公用を忘れるな。

百〇　ほんにさうだ。いよ〳〵此所淨瑠璃始まり、そのため公用左樣。

仕丁三人　何を申す。

百姓三人　ハヽヽヽ。

トやはり山おろしにて、双方鉦太鼓を叩きながら、上下へ分れてはひる。後薄き山おろし、衒の入り

し合方になり、花道より乾平馬、袴股立、大小にて、錦の袋入りの寶劍を持ち、片手に松明を持ちて先に立ち、後よりジヤクマク法印、毬栗鼠の衣のつゆをとり、荒繩にて腹を卷き、修驗者荒行の拵へにて出來り、花道に留り、

平馬　最早爰は洞ケ嶽、かねて早舟殿と牒し合せ、此處にて面會なせば、貴僧を伴ひ來れとある指圖に隨ひ參りしなれど、晝と違つて物凄く、音なふ物は猿の聲、谷の水音ならずして、外に音なき此の深山。かゝる所へ夜陰の步行、嘸はや御大儀にござらう。

法印　なんの〳〵、少しも大儀には存じませぬ。それと申すも愚僧などは、かく法力を積むまでは、あらゆる高山絕所を踏み、種々の荒行なせしゆゑ、かばかりの山道位、少しも苦には存じ申さぬ。

平馬　その仰せにて拙者も安堵、何は兎もあれ爰は崖道、幸ひあれなる平地にて、主稅殿の參るのを待合さうではござらぬか。

法印　何樣、あれへ參つて休息致さう。

平馬　サヽ、お越しなされい。

トやはり右の合方、時の鐘にて、平馬先に法印舞臺へ出來り、捨ゼリフにて、有合ふ岩臺へ腰をかけ法印思入あつて、

法印　今鳴る鐘はありや九つ。早舟殿には、最早見えられさうなものぢやが。

平馬　もし仕損じは致すまいかと思ふにつき、難題がましき事ながら、かねて元方卿の御企て、六の君をひそかに連れ出すその密法といふは、金烏玉兎の一巻にあるゆゑ、ひそかに加茂の後室を語らひ、件の密書を盗み出し、蘆屋道滿に其法を行はせんと、元方卿の嚴命なれば、物堅き道滿、いつかな承引せざるゆゑ、貴僧を賴み此程より、三七日が間の勤行、既に今宵は滿願なれども、なんと首尾よく參らうか。いかゞでござらうな。

法印　その心配必らず御無用。このジヤクマク法印が、三七日がその間、わが法力の丹精をぬきんで、あらゆる魔王を祈りしならば驗あるに疑ひなし。御覽なされい、今に主稅殿が首尾よく仕果せ、爰へ參るに違ひござらぬ。

平馬　行法積みしお手前が申す事、よもや違ひもあるまいが、餘りといへばこの暇取。

法印　そこが譬の待たるゝ身より待つ身とやら、いらぬ心配なさるに及ばぬ。愚僧などの心持では、最早手の内に入つたやうに存じてをる。

平馬　これがまた首尾よく參れば、元方卿より恩賞は心の儘。

法印　愚僧とても俄に立身。

平馬　互ひに有りつく金のつる。
法印　それにつけても主稅殿。
平馬　早く安否を。
兩人　聞きたいものだ。
トばた〳〵、早き合方になり、花道より早舟主稅、袴股立大小にて、誂への唐櫃を背負ひ出來り、花道に止り、
主稅　ヤレ〳〵山道でがつかりと草臥れた。もう爰まで來れば大丈夫、追手のかゝる氣遣ひない、それにしても法力といふものは爭へないものだ。よもやと思つた六の君が、ひよつくり出たゆゑ手も濡らさず、此方の思ふ壺に行き、こんな間のよかつた事はねえ。（トいひながら舞臺を見て）おゝ向うに見える松明は、慥に二人が待合はしてゐる樣子。ドレ、彼處へ行つて何かの相談、さうちや〳〵。（ト舞臺へ來り、兩人を見て）そこにござるは、ジヤクマク法印、平馬殿ではござらぬか。
ト兩人主稅をすかし見て、
平馬　さういはるゝは、早舟主稅殿か。
主稅　おゝ身共でござる〳〵。

法印　主稅殿か、待兼ねをつた〱。
平馬　して〱、首尾は。
兩人　どうでござるな〱。
主稅　さあ悅ばつしやれ。首尾は大極上首尾。まんまと盜んで此通り、唐櫃へ入れて背負うて參つた。
平馬　それはお手柄な事でござつた。何はしかれ、もう氣遣ひもござるまい。暫くこれへ下しては如何でござる。
主稅　假令殺すまでも、大事な代物、然らばそつとおろして下さい。
　　ト平馬手傳ひ、主稅の背負ひし唐櫃を下す。此内法印思入あつて、
法印　なんと御兩所、愚僧が法力は如何でござるな。
主稅　イヤ實に貴僧の法力は、なか〱以て凡人業とは思はれず。
平馬　かくまで行法積んだるお手前、一味に入れしは龍に翼の强みといふもの。
主稅　誠に驚き、
兩人　入つてござる。（ト此聲を聞き法印少しく高くとまり、）
法印　まだ〱此位の事は法力のいゝゝいろはでござる。いざ、さらばといつて我が丹精をぬきんで、一心に

祈念なせば、忽ち天地も覆すは、何の造作もなき事だが、それでも多くの者の難儀になるゆゑ不便と思うて行はぬが、まだそればかりでなく樣々な、行通自在な不思議をば、御兩所にお目に掛けたい。

主税　いやもう、貴僧の行力不思議なる事は、誰知らぬ者もなけれど、よもこれ程にはあるまいと、思ひの外なる今日の奇特、首尾よくこれを仕果せたれば、元方卿よりして褒美は貴僧の望み次第。

平馬　さすれば言はずと我々も、元方卿の推擧にて、一足飛びの立身出世。

主税　榮耀榮華のしたいがい、てかけ妾の女狂ひ、此奴はうまく、

兩人　なつて參つた。（ト兩人悦ぶこなし。法印もこなしあつて、）

法印　サア、それといふも此のジヤクマクが法力ゆゑ、なか〳〵お身達の力では行かぬ。何故と言はつしやれ、苟且ならぬ親王の思ひもの、かしづき數多の六の君、門前まで釣り出すは、愚僧でなければ行かぬ仕事、シテ見れば其許達の立身も、わが働きと申すもの。

平馬　成程尤も、これ皆貴僧の働きゆゑ、立身さへする時は、我々よりも其許へ、恩賞は知れた事。

主税　然し此場の樣子では、蟻の穴より、

法印　や。

主税　いやなに、有りやうは元方卿よりジヤクマクへ、遣はせとある褒美の金、某これに所持致してゐる。

法印　ナニ、すりや御褒美の金、主税殿が所持とな。

主税　いかにも。

法印　それは〳〵忝ない。さういふ事なら善は急げと、少しも早く渡して下さい。

主税　ずつとこれへ進まつしやい。

法印　いや〳〵、そんな事なら、何處までも參る。（ト主税の側へ行くを、）

主税　ソレ受取らつせえ。（ト拔打に斬り附ける。法印肩先をしたゝかに切られて苦しみ、ドツカリとなる。）

法印　こりや何で愚僧を。

主税　おゝ褒美といふは、この金だ。

法税　扨は我を此處へおびき寄せて、殺さんといふ二人の者の言合せよな。

平馬　いや言合せではなけれども、察する處主税殿には、後日を思つて此の殺生、それに違ひはござるまい。

主税　いかにも貴殿の言はるゝ通り、かゝる企みに荷擔なす心よからぬジヤクマク法印、その密法を行

はせ、六の君を奪ひし上は、此世に用のない賣僧、生かして置かば後日の妨げ、かうしてしまへば後腹痛めず。（ト是を聞き法印口惜しき思入。）

法印　エヽ言はうやうない恩知らず、三七日がその間、我に密法修行させ、事成就せし恩賞を與れぬのみか剩へ、殺すといふは人非人。かゝる深傷を負はざれば、生け置く奴ではなけれども、五體利かねば修法もかなはず、やみ／＼おのれの手にかゝるか。ちえゝ、口惜しい。（トキッと思入。）

主税　こま事言はずと、くたばつてしまへ。

ト立ちかゝるを、法印下手へ逃げにかゝるを平馬捉へ、主税の方へ突きやる。是にて主税またしたゝかに斬り下げる。法印苦しみ倒るゝを、主税とゞめを刺し、直に死骸を上手の切穴へ蹴込み、こちらへ來り、

先づ、これで一方は片附いたといふもの。

平馬　此上は殘りの一儀を、ぬからぬやうに。

主税　何樣、六の君を殺害なし、淀川へ沈めにかゝれば、先づ我々が大望も過半成就せしといふもの。

平馬　まだその大望になくてならぬ八束穗の寶劍、それも身共が働きにて、いつぞや祇園社にて盗み取つて置いたれば、我が所持なすも危ふいものと土中へ埋め祕め置いたが、最早詮議も弛みし上は

此劍を持參なし、元方卿へ差上げて、御褒美にあづからん。
主税　重ね〴〵の今夜の上首尾。
平馬　然らば是より、貴殿とも〴〵。
主税　拙者が主人のお館へ。
兩人　御同道仕らう。
ト主税手早く件の唐櫃を背負ひ、平馬先に松明を持ち、上手へ行きかゝる。此の時下手藪の蔭より、六の君の侍女呉羽刀を差し窺ひゐて、此時前へ出て、
呉羽　あいや、兩人待ちやれ。（ト是にて兩人びつくりなして立留り、）
主税　や、待てといふのは、女の聲。
平馬　どうやら覺えの、（ト松明にて呉羽の顏を見て、）や、われは六の君のかしづき呉羽よな。扨は今の。
兩人　樣子をば。
呉羽　おゝ、物蔭にて殘らず聞いた。
兩人　なんと。
呉羽　惡事の一々言ふに及ばず、主税が背負ひし櫃の內こそ、疑ひもなき六の君、まつた平馬が所持の

主税　八束穂の寶劍、きり〳〵妾に渡してしまや。（トキッと詰寄る、兩人あざ笑ひ、）

主税　い〻や知らねえ、覺えはねえといふ處だが、知つたとあれば隱すも未練だから、何もかも言つて聞かせてやらう、なう、平馬殿。

平馬　どうで此奴も殺すのだから、冥土の土産に言つて聞かせてやるがよい。

呉羽　やあ、妾を殺害なさんなど〻、小賢しきその一言、姫君寶劍渡さねば、その分には許さぬぞ。

ト柄に手をかけ、立ちか〻るを主税キッと留め、

主税　そんな脅しで行くものか、じたばたせずと。

ト呉羽を突放し、岩臺へ腰を掛ける。呉羽きつと思入。

よく聞けよ。（ト合方になり、）東宮櫻木親王の御息所は、わが主人左大將元方卿の御息女、まつた小野好古が娘六の君は、親王とわりなき仲。いまだ肝腎の御息所御懷胎もなき内に、六の君にははや懷妊、それゆゑ生かして置く時は、御息所の妨げなれば、是から淀川へ背負つて行き、石を重りに川中の、深みへ沈めにかけるのだ。

呉羽　あくまで根強きその一言、勿體なや親王樣の御胤を宿せし六の君樣を、亡きものにせん惡企み、どうしたら腹が癒ようぞ。（ト又立ちか〻るを平馬止め、）

平馬　これさ〳〵、まだそればかりではない、身共が所持する此の寶劍は、汝等に罪を着せようと、いつぞや祇園で盜み取つたのだ。かう何もかも企みの次第、殘らず爰で聞かせたからは、命はねえから覺悟しろ。

吳羽　ヤア、女ながらも忠義の一心。おのれ等如きに討たれんや。（トキッと身構へする。）

主稅　えゝ面倒な。早くばらしてしまはつせえ。

平馬　爰は身共が引受ければ、貴殿は跡にかまはずと、大事の役目、ちつとも早く。

主稅　おゝ、そんなら後を賴んだぞ。（ト立上る。）

吳羽　おのれはやらぬ。

平馬　何を。

ト吳羽に斬つてかゝる。平馬吳羽ちよつと立廻りの內、主稅逸散に上手へ走りはひる。吳羽きつと思入あつて、

吳羽　最早姬君奪はれし上は、せめてもの申譯、その寶劍をきり〳〵渡しやｃ

平馬　我が手に入つたら金輪際、うぬらに渡してよいものか。

吳羽　いゝや、寶劍取らいでおかうか。

平馬　小癪な事を。

　　ト是より兩人、寶劍を奪ひ合ひの立廻りの内、過つて寶劍を上手の切穴へ落す。兩人びつくりなし、

ヤヽヽ、こりや寶劍を谷底へ。

吳羽　下へ廻つて。（と行きかゝるを、）

平馬　女め、覺悟。

　　ト斬つてかゝろ、吳羽是非なく拔合せちよつと立廻つて見得につき、是より鳴物になり、兩人よろしく立廻りの内、双方相討になり手負ひの立廻りちよつとあつて、トヾ互ひに差違へ兩人バツタリ倒れる。消幕にて兩人の死骸を消し、よき程に、知せにつき、後ろの山幕切つて落す。

　　（山神の宮の場）――本舞臺三間の間一面の岩組。上手に注進を張りし誂への杉の大樹。ずつと上手杉林、床の前面、藁葺き狐格子の古宮、出這入りあり。是より舞臺へ岩組の段、よき所に丸木の鳥居。下手小高き芒原、此傍に杉の立木、此枝に、前の寶劍かゝりある。下の方淨瑠璃臺。岩組の打返し、日覆より杉の釣枝、すべて河内の國洞ケ嶽山神古宮の體。山おろしにて道具留る。とよき程に山おろし打上げ、下手の張物打かへし、爰に富本連中居並び、大薩摩がゝりの淨瑠璃になる。

大薩摩〽それ北斗の光りかう〳〵と、映る流れも岩にせき、こだまに響く水の音、猿の聲も涸れは

て、

浄瑠璃〽名草もいつか色失せし、冬の山路に早咲の、梅の莟のふたりづれ。

ト本釣鐘、衒の入りし合方になり、花道より瀧口靱負之助實は阿修羅王、若衆鬘、前茶筅、袴大小富士なりの編笠を持ち出で來る。後より楓、中形の振袖世話娘の拵へにて、附添ひ、出來り、花道へ留り、

〽年も二八か憎からぬ、姿に思ひかけ橋や、見る目もこはき谷川に、手に手は取れど初々しく、たがひに心置く霜の、足に冷たき小笹原、つまづく石も縁ぞと、迷ひし道にまた迷ひ峠間近く來りける。（ト兩人振あつて舞臺へ來り、矢張り衒入りの合方にて、）

靱負　コレ娘、歩きにくい山道で草臥れたであらうから、爰で少し休んだがよい。

楓　イエ私よりあなたこそ、よしない者をお連れなされ、嘸御迷惑でござりませうわいなア。

靱負　どうで宿所へ歸る道、別して迷惑な事もないが、さうしてこなたは何處へ行かうとて、此山路で迷うたのぢや。

楓　牧方の在所まで用事があつて參りましたが、どこで道を間違へましたか、ついに通らぬ此の樣な山道へ出ましてござりますが、爰は何と申す處でござりますぞいなア。

靱負　爰は山城と河内の境、普賢寺越えといふ處ぢや。シテそなたの宿所は何處なるぞ。

楓　ハイ、何をお隱し申しませう。私は舟橋村の鼓師の娘、楓と申します者でござりますわいなァ。

靱負　スリヤ聞及ぶ鼓師の名人畑作殿の娘御なるか。嘸案じてゐようから送り屆けて進ぜたいが、是非ない譯は此わしが、宿所はこれなる山向う、普賢寺村の鄕士にて、瀧口伊織が悴靱負之助と申す者、今朝母の用事にて、河内まで參りし歸り、舟橋村まで其方を送らば、宿所へ歸りが遲うなるゆゑ、母の案じは如何ばかり、とあつて一人は歸されず、ハテ困つたものぢやなァ。

楓　押の強いと思召すは辨へぬではなけれども、是から一人夜道をば、女子の身では歸られませねば誠に甘へた事ながら、どうかあなたのお家へ一夜、お泊めなされて下さりませぬか。

靱負　我もさうは思ひしが、年の若いといひ見目よき其方、故なく泊めるも氣遣ひゆゑ。

楓　見ず知らずの私ゆゑ、お疑ひは無理ならねど、氣遣ひな者ではござりませぬわいなう。

靱負　サア、わしが氣遣ひというたのは、定めて主ある身の上ゆゑ。

楓　イエ〳〵不束な私ゆゑ、主の何のといふ者が、何でござりませうぞいなァ。

ト靱負思入あつて、

靱負　イヤ〳〵それは嘘ぢや〳〵。このやうな美しい者を、誰が一人でおく者ぞ。今言うた牧方まで行

つたといふも、情人の所へ大方行つたのであらうぞいの。

楓　イエ〳〵そのやうな事はござりませぬが、さうおつしやるあなたこそ、定めて御新造様がござりませうから、見る影もない私でも、女子は女子でござりますから、そのやうな事おつしやつて、お泊めなされて下さりませぬのぢやなア。

靫負　その疑ひも無理ならねど、恥しながらまだ獨り身。

楓　エヽまア、そんな嘘ばつかり。（ト靫負をつめる。）

靫負　あいたゝゝゝ。

楓　ソレ、逢ひたいとおつしやるくせに。

靫負　なんの逢ひたいものがあらうぞ。

楓　そりやまア、ほんまでござんすかいなア。

靫負　ハテ、女子の味は知らぬわいなう。
〽鄙にはあれど武士の、家に生れて幼きより、弓矢の数へ受けしゆゑ、空飛ぶ鳥は射て落せど、まだ色戀は白羽の矢、弓弦は引けど袖褄を引いた事なき堅藏に、女子を落すその術が、なんで此身にあるものぞ。

ト靫負扇を取つて、振よろしくあつて納まる。楓嬉しき思入あつて、

楓　今おつしやつたのがほんまなら、私や嬉しうござんすわいなア。

靫負　なに、嬉しいとは。

楓　最前逢うた其時から。

靫負　おゝ、その時から。

楓　私やあなたに。

靫負　や。（ト楓恥しき思入にて、）

楓　惚れましたわいなア。

〽惚れたといふも恥かしく、顏も照葉に色增して、匂ひまつはりし蔦かづら。

ト楓靫負之助に取付き思入。

靫負　そなたがさういふ心なら、何を隱さうこのわしも、心あつて麓から爰まで連れて來たのぢやわいなア。（ト物凄くいふ。）

楓　そんならあなたも。

靫負　眞底そなたに。（トきつといふ。）

楓　えツ。

〽わりなく語る時しもあれ、一吹き落す山風に、ありし若衆は消え失せて、後に怪しき妖魔の姿。

ト靫負之助思入あつて立上り、ドロ〳〵になり、杉の大木へ身を寄せる。掛焰硝ドロ〳〵田樂にて、靫負之助消え、後へ阿修羅王異形なる山神の拵へにて出で、楓へ思入あつて、

阿修　惚れたわいなア。

〽娘は心奪はれて、靭負と思ひ取縋り、（ト楓の目には靫負と見ゆる思入にて、阿修羅王に縋り、）

楓　えゝ嬉しうござんすわいなア。（ト阿修羅王手を取り、）

阿修　嬉しいとは、眞實なるか。

楓　アイナア。（トくどきになる。）

〽ほんに思へば山越しに、迷うて問ひし枝道が、緣となつて森の蔭、木々の雫に濡るゝさへ惚れたこの身の嬉しうて、宵のこはさもどこへやら、ならう事なら夜も明けず、里へも出でず、いつまでも、これこのやうに手を取つて、ゐたいわいなと寄添へば、流石魔王も目をなくし、

ト楓阿修羅王を捉へ口說きの振よろしくあつて、

阿修　左程に我を思ふなら、今より爰に留め置き、

楓　此世は愚か二世かけて。

阿修　そちが命のあらん限り。

楓　比翼連理の、

阿修　契りを結ばん。

〽妖魔の術に情なや、心亂れて危ふくも、身を汚されんとなす折から、〽主人は誰とも白羽の矢に、のぶかに射られのけざまに、あツと倒るゝ魔王を見て、われにかへりし娘が驚き、〽宮居の内よりますらをが、社頭に納めし弓携へ、現れ出れば魔王は苛立ち、

ト此内薄ドロ〱にて、阿修羅王楓を捉へ、頰摺りをなし、ぢつと寄添ふ。此時古宮の内にてエイと掛聲あつて、差金の白羽の矢阿修羅王の肩へ立つ。是にてアツといつて倒れる。楓心附きし思入にて阿修羅王を見てびつくりなし、アレエ――とうつぶせになる。山おろしにて、宮の内より、柏木衛門之助、五十日鬘後ろ茶筅たツつけ大小、風呂敷包みを斜に背負ひ、奉納の弓矢を持ち出で平舞臺へ窺ひ下りて來る、阿修羅王立上り、きつとなつて、

阿修　ヤア、何奴なれば矢を射かけ、わが戀の妨げなすぞ。

衞門　オヽ、何者でもない。それがしは、大日本を經歴する柏木衞門之助といふ、武者修行の者だ。泊りおくれてこの山越えに、かゝる魔所とも知らぬゆゑ、あれなる社で夜を明かし、最前からの樣子を見るに、正しくおのれは人間ならず、惡鬼妖魔の類ならん、本性顯はし、早立ち去るまいか。

阿修　ムヽハヽヽヽ、いかにもわれが推量の通り、元は年經る野猪なりしが、千年を經て魔道に入り、通力自在に姿を變へ、みめよき女を誘ひ出し、夜な〳〵慰む淫樂の妨げなせし武者修行、不便やおのれも一裂きに、引裂きくれるぞ覺悟なせ。

衞門　假令如何なる術ありとも、不動の梵字をきり入れし、わが魂にて切拂はゞ、立寄る事は叶はぬぞ。

阿修　不動も元は親身の魔王、いかで梵字に恐れんや。

衞門　何をこしやくな。

〽唯一討と斬りつければ、妖魔の術に飛鳥の如く、爰に現はれ彼處に隱れ、目當はそれと切落す、杉の小枝にかゝりし寶劍、手早く取り上げ茅原より、窺ひ出でしみやび男が、なかを隔てゝいどみ合ひ、五體もすくむ行通に、携ふ寶劍拔き放せば、威德に恐れ妖魔王搔き消す

如く失せにけり。

ト是れへドロ〳〵、誂への鳴物を誣せ、衞門之助刀を拔き切つてかゝる。阿修羅王身をかはし立廻りになり、衞門之助切らうとする。阿修羅王立ちかゝると、五體すくむ思入。爰へ楓割つてはひる。阿修羅王楓に心を惹かれて、衞門之助五體自由になり、立廻りの内寶劍のかゝりし杉の小枝を切る。寶劍蘆原の内へ落ちる。よき程に蘆原を分けて安倍の保名、着流し一本差しにて寶劍を持ち出で、此中へはひり、四人立廻りあつて、保名寶劍を拔く。此威德に恐れ、大ドロ〳〵にて、阿修羅王スッポンにて消える。

〽後は霜夜の霧深く、左右へ分つてためらへば、賤が夜業も田舍節。

ト後三人ちよつと立廻つて、三方へ別れ、きつと見得。これより竹笛入りの靜かな田舍節になり、

〽宵の時雨もさら〳〵さつと、窓の板戸へあたりを忍び、濡れに出雲の神々かけて結ぶ緣の緣の帶を、誰が解いたかしよんがいな〳〵。

ト此内寶劍をかせに三人立廻りよろしくあつて、寶劍衞門之助の手へはひる。三人きつと留り、

〽またも山谷鳴動なし、砂石を降らし岩頭に現はれ出でし妖魔王。

ト大ドロ〳〵になり、後ろの岩組胴折れに打返し、後ろ奥深に遠山の書割り、岩の上に阿修羅王立身

にて、きつと見得。是にて三人たぢ〳〵として、ドウとなる。阿修羅王これを見て、

阿修　ムヽハヽヽヽ。

ト笑ふ。衞門之助寶劍を拔く。ドロ〳〵にて阿修羅王恐れる。保名楓も立上り、衞門之助足を踏み出し寶劍を差附け、保名は弓を取り上げ、楓を引付ける。双方見合つて、木の頭。

〽あやし恐ろし。

ト大ドロ〳〵、誂らへの鳴物にて、皆々引張りよろしく、三重へかまはず、

ひやうし　幕

ト山おろしにてつなぎ、直に引返す。

(牧方堤の場)——本舞臺一面の蘆原、二段に飾り、後ろ黑幕打寄せの波手摺り。上の方平舞臺に、一間古板にて拵へし船頭の小家。繪ごゝろに後ろを見せ、軒口に竹笠、櫂を立てかけ、下、手摺の内に、丸物の苫舟。上下に杉の立木。日覆より同じく釣枝。すべて牧方堤の體。時の鐘、波の音にて幕明く、と矢張り時の鐘波の音、ばた〳〵にて、花道より前の早舟主税、唐櫃を背負ひ出來り、

主税　今打ちしは九つだな、都より淀川まで餘程の道程だが、夜の長さ、僅か二た時餘りに來た、宵の時雨も寒さゆゑ、後には雪になりさうだ。降らねえ内にちつとも早く、さうだ〳〵。

ト主税本舞臺へ來り、唐櫃をおろし思入あつて、

最早九つ過ぎゆゑか、渡しを越ゆる者もなく、往來の途絶えはこれ幸ひ、六の君を入れし此の唐櫃へ石を詰め、此川の深みへ沈めにかけん。（ト言ひかけ四邊へ思入あつて）イヤ、壁に耳ある浮世の中、滅多な事は言はれぬわい。然し此の役目を仕果せれば、御息所は御安泰、六の君がない後は親王樣へ一人で持ちかけ、お胤でも宿す日にやア、元方卿は親同然。今にもあれ親王樣が一天萬上の君となれば、主人が威勢は龍に雲、好古めを押籠めて、政事を預かる關白職。さうなる時には執權の岩淵樣はいふに及ばず、我々までも立身出世、主人の威光を鼻にかけ、世間へ出ても肩身が廣く、猶々背丈が高くならう。然し此の上伸びた日にやア二反でなくては着物が出來ぬ諸式の高いに此背丈が、賣られる物なら金になるに、あゝこれがほんの寶の持腐れだ。ハヽヽ

ト此時下座二人にて謠になる。

〽あら不思議や、海上を見れば、西國にて亡びし平家の公達。（と主税思入あつて）

ハテ心得ぬ、あの聲はどこだ知らん。（トあたりを見て）

聲あつて形なきは、慥に我をたぶらかす、狐狸の仕業なるか。

〽おの／＼浮み出でたるぞや。

左近太郎

トドロ〳〵のやうに波の音、太鼓入りの本行の鳴物になり、正面の蘆原より、柏木左近、鍬形の附きし立烏帽子、白地波の模樣の法被半切にて、白柄の長刀を持ち、つか〳〵と出て、主稅を長刀にて掬ひ、ポンと投げてきつと見得。

左近　そも〳〵是は桓武天皇九代の後胤、平の知盛の幽靈なり。

ト本行の振あつて、主稅起上り、

主稅　扨はおのれは、幽靈か。

左近　アラ珍しや、いかに義經。

主稅　えゝ、怪しい奴め。

〽思ひも寄らぬ浦波の、聲をしるべに出船の〳〵。

ト是れへ鳴物をかぶせ、左近長刀にて主稅を相手に立廻り、主稅左近に追はれ、たぢ〳〵として上手の小屋へ打ッつかる。是にて小屋バラ〳〵と壞れ、內より左近妻花町世話なりの上へ織物の壺折、片肌脫ぎ、鼓を持ち、ツカ〳〵と出て、主稅に抱きつくを振拂ひ、三人ちよつと立廻つて、主稅タヂタヂと後退りをする。左近長刀の柄にて足をかく。主稅川へ落ちる。ドンと水の音、水の花パット立つ兩人是を見て、顏を見合せ、

花町　こちの人。

左近　コレ。（トあたりへ思入。時の鐘、誂への合方になり、）

花町　宵の時雨に此の小屋で、雨宿りして思はずも、姫君樣の樣子を聞き、

左近　勘當お詫びのよい手蔓に、辻能へ出た衣裳を幸ひ、知盛となり首尾よくも、お助け申せし六の君樣。

花町　シテ、姫君樣には。

左近　沈めにかけんと惡人共が、唐櫃にて連れ出し、この中にお出でなさるわ。

花町　そんなら此の儘、少しも早う。

左近　わが隱れ家へお連れ申さん。（ト下座の謠になり、）

へ辨慶舟子に力を合せ、御舟を漕ぎのけ汀に寄すれば、猶惡靈は慕ひ來るを、追拂ひ祈りのけ、

ト此内花町手傳ひ、件の唐櫃を背負ふ、此時苫船の苫をはねのけ、船頭浪六、腹掛手甲、あつし裝、船頭の拵へにて出で、兩人を窺ふ。花町左近これを見てうなづき合ひ、下手へ行きかゝるを、浪六ツカツカと左近を引留めるを振拂ふ。是れにて浪六花町に組みつく、アレといふ聲に左近長刀にて拂ひの

ける。浪六入替つて軒口の櫂を取り打つてかゝる。よき見得にて知らせにつき、後ろの黒幕切つて落す。向う奥深に牧方堤、淀川夜の遠見。誂への鳴物になり、三人ダンマリの立廻りよろしくあつて、よき程に蘆原より、以前の主税出て此中へはひり、浪六主税に組付く、主税振拂つて投げのける。この内花町先に左近花道へ行き、花町バツタリ轉ぶ、左近ア、コレと花町を引起す、舞臺は浪六主税を投げのけ、肩へ踏みかけるを木の頭。浪六向うを見返る。波音、カケリにて、

ひやうし　幕

ト花道の左近花町を起し、入替つて、

花町　又もや障りのない内に。

左近　少しも早く。（ト唐櫃を揺り上げる。）

花町　嘸重うござんせうな。

左近　なに、これしきに。

ト長刀をトンと突き、きつと思入。是れをキッカケに、誂への大小入りの鳴物になり、左近長刀を掻込み、六法にて行きかける。後より花町同じやうに眞似して行きかけ、よき處にて、

花町　モシ、歌舞伎狂言を見るやうに、力んで行かずとようござんす。

左近　いかさま、草臥れ足に、いらぬ事だな。

ト此時鳴物次第に消し、雪おろしになる。日覆より雪降るを見て、

花町　おや、いつの間にかチラ／＼と、白く降つて來ましたよ。

左近　宵の時雨が、雪になつたか。

花町　積らぬ内に早く歸り。

左近　一つ布團で暖まらうか。（ト花町の手を取るを振拂ひ）

花町　アヽモシ、櫃の中に。（ト唐櫃へ指をさす。）

左近　エヘン。（と左近眞面目になり、謠にて）〽平の知盛の幽靈なり。

と本行の鳴物へ通り神樂を冠せ、左近摺足にて揚幕へはひる。花町後を追ひて揚幕へはひろ。知らせにつき、シヤギリ。

下の巻

河内國船橋村の場

〔役名――左近太郎照國、鼓師畑作、柏木衞門之助、岩倉治郎太夫、石川惡右衞門、奴、獵師、百姓。
左近太郎妻花町、好古の息女六の君、六の君侍女筑波根、畑作娘楓等。〕

左近太郎

（左近住居の場）――本舞臺三間の間中足の二重、本緣附、向う更紗の暖簾口。上手一間の押入戸棚、上能の番組で張りし襖、下杉戸錠前の下りる仕掛。下手鼓、同じく箱など戴せし棚の書割。上の方一間障子屋體、いつもの所門口。これに柏木左近といふ表札、此下雪の積りし藪疊。後へ下げて下家の前側、下手よき處に雪の積りし臺幹、莟の梅、花道、舞臺下手、一面に雪布を敷き、すべて河內の國船舟村左近侘住居の體。爰に前幕の百姓○△□疊んだ弓張提灯、鉦太鼓を傍へ置き、煙草をのみゐる。下手に獵師一、二手網たッつけ鐵砲を持ち、同じく煙草をのみゐる。雪おろし在鄕唄にて幕あく。

獵○　初雪といふものは二三寸しか降らねえものだが、十月からこんなに降るは、來年も豐年と見える。
百○　そりやア此方でいふ事だ。是からはこなた衆の世界。えてぼうでも擊つたら振舞はつせえ。
獵一　それぢやあ酒と交易にしよう。
獵二　そりやアさうと、とゝつちの娘は、どこへ行つたか知れねえか。
百○　サア昨夜から村中が、手分けをして出掛けたが、見かけたといふ人もない。
百△　不斷お洒落者なれば、男でも拵へて逃げたかと思ひますが、そんな事のない娘御。
百□　てつきりこれは洞ケ嶽の、山神樣に見染められ、連れて行かれたと見えます。
獵一　成程こりやアさうかも知れぬ。去年から此の近邊で幾人見えなくなつたか知れぬ。

獵二　いつたいあの山神様は阿修羅王といふ大魔王で、美しい娘をば誘ひ出して連れて行き、腹さんざん慰さんだ上、生血を吸ふといふ事だ。

獵一　何しろいゝ娘を持つた人は、家へ置かず、早く緣付けてしまふがいゝ。

百〇　かう美しい娘達が近邊に失くなつたら、餓じい時のまづいものなしと、おらが娘なぞも險呑だ。

百△　然しこなたの所の娘ばかりは、山神様が下戸なら知らず、牡丹餅顏だから大丈夫だ。

百□　それ〳〵、黄粉つけたらうまいか知らんが、見たばかりでも胸が惡い。

獵一　さう貴様達はいふけれど、抱いて寢てさへ替りがなくば、連れて行かれるかも知れん。

獵二　これが男を連れて行かれるのだと、おれ達は險呑だ。

獵一　こんな丈夫な事はねえ。

ト合方になり、奧より前幕の花町やつしなりにて出來り、

花町　これは皆さん、まだござんしたかいなア。

百〇　もう歸らうと思つた處へ、此衆が來た所から、

百△　しまつた煙管を又出して、煙草入の粉までのみ、

百□　思ひがけない長居をしました。

花町　昨夜から御親切に、捜しに出て下さんしたに、何一つあげもせず、堪忍して下さんせいなア。
百〇　イヤもう、お世話をするのもお世話になるも、一つ村の誼なれば、
三人　必らず心配さつしやりまするな。
獵一　イヤ申しお家さん、村の衆に聞きましたが、どんな事でござりましたな。
獵二　昨夜聞いたら、わしらも共々に捜しに出ませうもの。
花町　有難うござんすわいなア。それに昨日は辻能から歸りが遲くなつたゆゑ、邊り近所の皆さんに、大きにお世話になりましたわいなア。
獵一　ほんに昨夜はお二人とも、お歸りが遲うござりましたな。
花町　道でちよつと手間をとり、丁度歸りは九つの。イヤサ、爰の村へはひつた時、四つの鐘を打ちましたわいなア。
獵一　そりやアお早うござりましたな。牧方堤でお二人を、ちよつとお見かけ申したが、ナア星毛よ。
獵二　さうよ、念華寺の九つを打つた後だと思つたが、それぢやア四つであつたか知らぬ。
ト花町ギックリ思入あつて、
花町　すりや、お前方は牧方堤で、二人を見かけなさんしたとか。

獵一　旦那のおなりが眞白だから。
獵二　慥にお見かけ申しました。
百△　モシ、旦那といへば左近樣は。
花町　今朝まだ夜の明けぬ内から、父さんと二人して、妹を搜しに行かれましたわいなア。
百姓三人　ハヽ、さうでござつたかいなう。
獵一　昨夜旦那が背負つてござつた、白木造りの半櫃は、ありや何でござりまする。
花町　ありやア辻能の衣裳を入れる、唐櫃でござりますわいなア。
獵二　大層重さうでございましたが、何がはひつてをりますな。
花町　エヽ。（ト思入あつて、）サア、あの中には、衣裳ばかり。
花二　へエ、左樣でござりまするか。
獵一　旦那がお家においでなすつたら、ちつとお聞き申したい事がござりますが、
獵二　お留守と聞いちやア仕方がねえ。また出直してまゐりませう。（ト兩人立上る。）
百〇　こなた衆が歸るなら、わしらも一緒に行きませう。
花町　そんなら、もうお歸りでござりまするか。

百姓三人　また、晩に參りませう。

花町　御苦勞でござりましたわいなア。（ト皆々門口へ出て、草鞋を穿きながら、）

獵一　ときに、此雪を肴に白馬でも切合ひませうか。

百○　ナニ、切合ひがあつた。そりやア何處だ。

獵二　エヽ分らねえ。出しッこで一杯やらうといふのだ。

百△　イヤ、御馳走なら、知らねえ事。

百□　錢を出しちやア眞平だ。

一二　イヤ、しみつたれな手合だなア。

ト雪おろし、在郷唄にて皆々下手へはひる。花町後を見送り、門口を閉め、

花町　昨夜思はず姫君を、お助け申してこちの家へ、お連れ申して來たけれど、人目があつてまだ今朝から、御機嫌を伺はなんだ。百姓衆も、獵人衆も晩までは來ぬ樣子、此間にちよつとお出し申して。さうぢや〳〵。

ト門口へ掛金をかけ、合方にて、帶の間より鍵を出し、錠を明け、戸棚の戸を明ける。內に六の君、白綸子の廣振袖、姫君の拵へにて、紅絹の布にて眼を拭ひゐる。花町手を取り上手へ坐らせ、

嘸御窮屈にゐらせられませう。

六の　主從つきぬ緣とて、思ひがけない其方達に危ふい處を助けられ、いかいお世話になりますわいなう。

花町　そのお世話さへろく〳〵に出來ぬも人目がござりますゆゑ、ほんに思へば三年後、不義の科にて御勘氣受け、かゝる暮しをしてをりますも、お主樣のお慈悲ゆゑ、どうか御恩が送りたいと明暮思ひし念が屆き、俄の時雨にしばしの内、牧方堤の舟小屋で雨止みなしてをります處へ、早舟上税があなた樣を唐櫃へ入れ背負ひ來て、川の深みへ沈めにかけると、問はず語りを承り、爰ぞ御恩の送り處と、能裝束のあつたを幸ひ、姿をかへて奪ひ取り、お伴ひ申しましたが、折惡しくも妹が神隱しに逢ひまして、何處へ行つたやら行方知れず、その取込でろく〳〵に御機嫌さへも伺ひませず、御免なされて下さりませ。

六の　あれに隱れてゐる内に、あら〳〵樣子は聞きましたが、いかなる神に誘はれしか、今の此身につまされて、いとしい事であるわいなう。

花町　何れへ連れて行かれましたか、三日の内には必らず歸ると、博士の敎へでござりまするが、歸りますればようござりまするが。

六の　畑作や左近が歸らば、妹の行方も知れようわいなア。（ト六の君眼を拭ふ。花町これを見て、）

花町　夜前からの混雜で、とんと心がつきませなんだが、あなたはお目が惡うござりまするか。
六の　おゝ此程より眼病にて、見てはさのみにないやうなれど、底翳とやらになる下地で、三尺先にある物は、文色が慥と分らぬわいなア。
花町　それはお困り遊ばしませう。定めて御典藥のお醫師よりお藥も上げませうが、唯ならぬ御身ゆゑ早くお治りなされまする、よいお藥はござりませぬかいなア。
六の　サア所詮常の藥では、全快なすは難いとやら、是を治す良藥とて法眼より遣はせし良藥は所持なせど、男女二人の命を斷ち、その血潮を用ひねば、その驗なしとやら、假令この目は盲ひるとも、萬物の靈たる人の命を、何で取られうぞいなう。
花町　御尤もではござりまするが、得難い品で得易いもの。どうかしたならその血潮も。（ト思入あつて）イヤ、お目の惡いにお姫樣には、お髪が大分亂れました。ちよつと取上げてあげませう。
ト下手から鏡臺を出す。
六の　取上げて貰ひたいが、人目を忍ぶ身なれば、明日の事にしてくりやいなう。
花町　畏りましてござりまする。何時でもあなた樣のよい時に、おつしやつて下さりませ。
六の　先づそれよりはお過ぎなされし母樣の御命日、形見に賜はる富士の名香、これを手向けて御回向

申さん。コレ花町、香爐を貸してたもひなう。

花町　香道具も何處へやら、お恥しうござりますが、これでお間にお合せ下さりませ。

ト上の戸棚より小机を出し、此上へ香爐を載せ出す。六の君懐より香包みを出し、

六の　オヽ、これはよい嗜みぢやわいなう。

ト誂への合方になり、花町香爐へ火を入れて出す。六の君香を炷き、手を合せ回向の思入。花町も共に手を合せ拜む。此内花道より侍女筑波根、着流し端折り御所女中の拵へ、蓑笠を着、跣足にて出來り、花道にて、

筑波　花に嵐の障りとて、六の君樣には先月より、親王樣のお胤を宿し、此上もないお目出たに、お上を始め下々まで、悦びあれば悲しみと、昨夜よりお行方知れず。お庭の御門が開いてをつたが、誰がお連れ申したか、お附の者の越度ゆゑ、諸所方々とお尋ね申せど、今に手掛りとてもなく、折も折とて此雪に、一倍道に疲れたれば、向うの家へ無心をいひ、しばし休んで行きませう。

ト舞臺へ來り、香の薫りをきゝ思入あつて、

ハテ心得ぬ、この薫は、一というて二となき、富士と名付けし名香なるが、姫君より外此の香を所持なす者はなき筈ぢやが、此の家で樣子を尋ねて見ん。（ト筑波根門口に來り、）チトお願ひ申し

ます。

ト此聲にびつくりなし、

花町　表へ誰やら參りし樣子、見咎められては御身の大事、

六の　おゝ、此身ばかりか、そちにも難儀が。

花町　先づ御窮屈でも、また爰へ。

ト花町六の君を戸棚へ入れ、錠を下す。後へ香包みを殘し置く事。

筑波　往來の者でござりまするが、チトお賴み申しまする。

花町　ハイ〳〵、何處からお出でなされました。（ト花町門口を明ける。）

筑波　私は都から、夜をかけて參りました者。（トいひながら顔を見合せ。）

花町　ヤ、お前は筑波根殿ぢやござんせぬか。

筑波　おゝさういはしやんすは、花町殿。

花町　思ひがけない、どうして爰へ。

筑波　お前が爰にゐようとも、

花町　知らずに門へござんしたも、

筑波　盡きせぬ縁で、
兩人　ござんしたなア。
花町　サアノ〵、爰へ通らしやんせいなア。（ト合方になり、兩人二重へ上り、）
筑波　爰はお前の家でござんすか。
花町　サア、三年後にお館を出てから、親の在所ゆゑ此の村へ、來てゐましたわいなア。
筑波　それでは、左近樣と御一緒に。
花町　アイ、願ひ通り左近樣と女夫になりましたれど、お目にかゝるも恥しい、こんな姿でござんすわいなア。
筑波　假令貧しい暮しでも、思ひ思うた殿御と一緒に、暮らすといふはお樂しみ、お羨しうござんすわいなア。
花町　なんの羨しい事があらうぞいなア。
ト花町この內煙草盆茶などを出し、
筑波　早速ながら花町殿、今門口へ彳めば、世にも稀なる香の薫、ありや此方でござりませうな。
花町　アイ〵今こちで炷いたのぢやわいなア。

筑波　ヤレ〱嬉しや。それでは尋ねる姫君は、こちらにおいでなされましたか。

ト此内下手より以前の獵師一、二出て、門口を明け窺ふ。花町これを見てギックリ思入あつて、

花町　エ、姫君といはしやんすは。（ト態と知らぬ思入）

筑波　夜前お館を出で給ひし、好古樣の御息女、六の君樣をお匿ひ申してござりませうがな。

花町　これは〱思ひも寄らぬ、六の君樣をお匿ひ申せしとは、何を證據にいはしやんすか、こつちに覺えはござんせぬわいなア。

筑波　大事の御身ゆゑ幾重にもお隱しなさるは無理ならねど、人にこそよれ古朋輩、姫君附きのこの私に、何でお隱しなされまする。

花町　そりやもうお匿ひ申した事なら、何しにお隱し申しませう。ほんに覺えのない事ゆゑ。

筑波　覺えないとはおつしやれど、今の薫りは富士と名附けし世にも稀なる銘木にて、母君よりの御形見、この廣い世に姫君より、外に持つ人のない名香。

花町　いえ〱あれは御所にゐた時、御臺樣より頂戴せし、柴舟といふ香なるを、富士ときいたはき違ひ、お前の粗相でござんすぞえ。

筑波　假令何と言はしやんしても、富士といふには證據がござんす。

花町　ナニ、證據があるとは。（ト筑波根机の上にある香包みを取つて、）

筑波　モシ、此香包みは、誰のでござんす。

花町　え。

筑波　御母上より御形見にお貰ひなされし六の君樣、富士を畫きし香包みは、慥な證據でござんすが、
これでも知らぬといはしやんすか。

花町　サア、それは。

筑波　お匿ひ申してござりませうが。

花町　サア。

筑波　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

筑波　何故隱しては下さんす。（トきつといふ。花町思入あつて、）

花町　何を隱さう此の香包みは、辻能からの歸りがけ、昨夜九つ時の頃、牧方堤で思はずも、主君の姫君六の君樣が御所持なされし御形見、行合はせしを幸ひと、私ら二人が拾うて來たのぢや。

トかくまつてあるといふ思入。

サア、おかくまひ申してあるならば、古朋輩の筑波根殿、何でお前に隱さうぞ。（ト以前の鏡臺の鏡を取り、）女子の魂鏡にかけて、嘘僞りは言はぬわいなア。

ト門口の兩人の顏を、鏡に寫して見せる。筑波根これを見てうなづき、

筑波　成程、おかくまひ申さぬは、女子の魂此の鏡で、とつくり承知しましたわいなア。

花町　これで疑ひが晴れましたらうが。

筑波　いかにも、晴れましたわいなア。（ト思入あつて、）

花町　その疑ひが晴れましたれば、久し振りでの筑波根殿、今宵はこちへ泊らしやんせ。

筑波　有難うござんすが、連の者が此宿で待合はす約束なれば、又出直してまゐりませう。

花町　さういふ事なら仕方もないが、まだいろ／＼と話もあれば。

筑波　私も聞きたい事あれば。

花町　今宵は夜と共ゆつくりと。

筑波　出直して來て、

花町　話しませう。

ト此内門口の獄師一、二は囁き合ひ、下手へはひる。筑波根思入あつて門口へ出て、邊りを見て、

筑波　言ふまでもないけれど、昨夜拾うてござんした、その香包みの名香は、世にも稀なる大事の品、必らず粗相のないやうに、しまうておいて下さんせ。

花町　今も言うた鏡にかけ、御奉公せし御恩送り、大事にしまうておくわいなア。

筑波　それで安堵しましたわいなア。

ト門口を締める。唄になり筑波根笠をかざし行きかけしが、思入あつて下手へはひる。花町は件の香包みを頂き、鏡臺の抽出へいれる。此唄を借り、花道より岩倉治部太夫、ゐんでん、野袴、ぶつさき大小爪皮の下駄がけ、蛇の目の傘をさし、奴△赤合羽、饅頭笠、紺看板、一本差し、中間のなりにて附添ひ出て、花道へ留り、

治部　世に小春とて神無月は、春に劣らず暖氣にて、梅櫻はいふに及ばず、歸り花の咲く時分、今年は氣候の早いとて昨日の時雨も初雪と、降りかはりたる今日の寒氣、まだ散り殘る紅葉に、眞白に積る雪景色、ハテ風情ある詠めぢやなア。こりや熊平、左近が宅はあれなるか。

奴△　ハツ、御意にござりまする。

治部　案内致せ。

奴△　畏つてござりまする。（ト兩人舞臺へ來り、奴△門口へ來り、）頼まう〳〵。

花町　ハイ〳〵、どなた樣でござりまする。
奴△　左大將橘の元方卿の執權職、岩倉治部太夫樣のお出でなるぞ。
花町　ナニ、岩倉樣のお出でとな。（ト門口をあけ、）これはまあ、思ひがけない、何と思うて此家へは。
治部　おゝ仔細あつて、參つたのぢや。
花町　いかなる事か存じませぬが、先づ〳〵あれへ。
治部　許しやれ。（ト合方になり、二重上手へ住ふ。花町思入あつて、）
花町　シテ、岩倉樣には、何御用ござりまして。
治部　主君元方卿の嚴命を受け、それがし此家へ參りしは、詮議のあつて參つたのぢや。
花町　その御詮議と申しまするは。
治部　詮議の筋は外ならず、親王のお胤を宿しながら、密夫あつて逐電せし好古が娘六の君、此家の内にかくまひある由、詮議致して首討てと、嚴命受けて參りしが、シテ主人左近太郎は。
花町　今朝より用事あつて、他出致してござりまする。
治部　然らば留守を預かる其方、匿ひ置きし六の君、包み隱さず是へ出せ。
花町　これは〳〵思ひも寄らぬそのお尋ね。御存じの通り私共は、不義の科にて御勘氣受け、三年此方

治部　山家の住居、お出入さへ致しませねば、何しにお匿ひ申しませう。

花町　そりや音信不通にせよ、根が大恩ある主人の事、匿はぬとは言はれまい。包み隱さず有體に、申さば以前の誼を以て、かくまひし罪は赦しくれう。

治部　假令如何やうおつしやりましても、覺えなければ申されませぬ。

花町　ムヽ、スリヤしかと存ぜぬか。

治部　御念には及びませぬ。

奴△　覺えないとあれば、ソレ、熊平。

石川　ハツ。（ト門口へ出て下手へ向ひ、）それにござる石川氏。親仁をこれへお連れなされい。（ト下手にて）

畏つてござりまする。

ト時の太鼓になり、下手より石川惡右衞門、袴大小、下駄がけ、脊蓑をかけ、竹笠をかざし、後より鼓師畑作、白髮かづら、羽織着流し、低き下駄がけ、是を奴○赤合羽紺看板、中間のなりにて引立て出て來る。續いて以前の獵師一、二附添ひ出て、

奴○　仰せに任せ鼓師畑作、召連れましてござりまする。

老ぼれ親仁め、下にをらう。（ト引据ゑる。花町見て、）

花町　ヤ、お前は父さん、どうなさんしたのでござんすぞいなア。
畑作　娘を捜しに出た歸り、詮議があるとおつしやつて、石川樣に捕はれ、爰へ曳かれて來たのぢや。
花町　父さんに御詮議とは、何の御詮議でござりまする。
治部　今其方に尋ねたる、六の君の詮議をなすのぢや。
花町　その詮議なら存ぜぬ事。お赦しなされて下さりませ。
石川　イヽヤ知らぬとは拔けさせぬ。此家の內へ六の君を竊にかくまひ置いた事は、わが領分の彼等から、慥に聞いておいた事だ。
畑作　スリヤ覺えもない事を、こなた衆は告げたるとか。
獵一　いゝや覺えねえとは言はせねえ、昨夜白木の唐櫃を擔いで來たを牧方から。
獵二　後になり先になり、內まで附込み見ておいたのだ。
奴○　かういふ慥な證據があつちやア、目串は拔けねえ、往生して、
奴△　隱した姫を出してしまへ。
花町　すりや衣裳櫃の中にお姫樣でも、入れてあつたとお前方の當推量そでもない事をいうたのぢやな。
獵一　そでもない事いふものか、さつき此家へ尋ねて來た、筑波根とかいふ御所女中。

獵二　香を知るべに內へ入り、六の君よりその外に持ち人のない名香と、言つたが慥な證據ゆゑ。

兩人　石川樣へ注進したのだ。

石川　サア、かゝる慥な證據があつても、存ぜぬ知らぬと強情張るか。

花町　その證據とおつしやりますは、此の香包みでござりますが。（ト以前の香包みを出し、）これは昨夜拾うた品。

石川　まだぬけ〳〵とそのやうな、噓僞りをぬかすのか。

治部　白狀せずばせぬまでだ。其方には聞かぬ親仁めを、拷問なして白狀させるわ。

ト石川惡右衞門畑作の胸倉を取り、

石川　サア老ぼれ、娘が白狀せぬゆゑに、六の君をかくまひしと、われが白狀してしまへ。

畑作　これは〳〵思ひもよらぬその御詮議、人樣をかくまふ處か、昨夜からこちの娘が神隱しに遭ひまして、今朝も疾うから聟殿と、その行方を尋ねに出て、家の事は存じませぬ。

石川　イヤ〳〵間所狹き此家の內、知らぬといふ筈はない。言はずば此の場で拷問なすぞ。

奴△　痛い目せぬうち言つてしまへ。

畑作　そりやもう、どんな拷問にあひませうとも、存ぜぬ事は申されませぬ。どうぞお許しなされて下

さりませ。

治部　親子ともしぶとい奴。所詮唯では白狀せまい、息の根止めるほど親を責めたら娘がいふか、身の苦しさに親が言ふか。ソレ兩人の者、打据ゑい。

奴△　畏つてござりまする。親仁め覺悟。

ト兩人畑作の手を取り、引きつけるを、花町留めて、

花町　アヽモシ、待つて下さりませ。打たでならぬ事ならば、私を打つて下さんせ。お年寄られし父さんが、お前方に打たれたら、體がたまるものぢやない。どうぞ許して下さんせいなァ。

石川　イヤ〱、そちを打つても役に立たぬ。親仁を打たねば、詮議にならぬ。

ト石川花町を引据ゑる。

奴○△　サア、きり〱とぬかさぬか。

ト兩人腰に差したる木刀を取つて、畑作を喰はす。花町これを見て留めようとする。石川引付けゐる。畑作苦しき思入。

畑作　ムヽ、こりやァ岩倉樣にはその以前、好古樣に娘がゐた時、女房にくれと言はしやつたを、遣らぬというた遺恨により、詮議に事寄せわしを打擲さつしやるのだな。

治部　成程そちが言ふ通り、以前身共が望みし時、呉れゝば娘が縁につれ、よしやかういふ事あつても
そこは主人へ執成して、助けやるまいものでもないが、今更言つても甲斐ない事。人我に辛けれ
ば、我又人に辛しの譬。（ト花町へ思入あつて、）それしきの事を根に持つて、責めさいなむなどゝ
いふ、小さな心はなけれども、年寄りし身に不便なといたはつてやる心はないわ。
石川　坊主が憎けりや袈裟までと、こゝらが意趣の返し處、手酷く拷問したがよい。
奴△○　畏まりました。
奴○　コレ、二人の者も、手を貸しやれ。
一二　合點だ。
ト獵師一、二畑作の手を左右より引張りゐる、奴○△後ろへ廻り、畑作を喰はし、
奴△○　サア、これでも言はぬかく。
獵一　四十四の痩骨がぽきくと、
一二　折れるぞよ。
ト喰はす。花町これを見てあせるを、石川引付けゐる。治部煙草をのみ見てゐる。畑作口惜しき思入。）
花町　その苦しみを見る上は。（ト立ちかゝるを、立廻つて石川引附ける。畑作思入あつて、）

畑作　コレ〳〵娘、何をうろたへるのぢや。もう、六十の坂越して五十年の峠から十年餘り生延びて、とまりの知れた俺の體、生先長いそち達が不義の科にて二年後、危ふい命を助かつた、大恩のあるお主樣。サア、そのお主樣の姫君を、かくまうたといふ疑ひで、よしや此儘殺されても、お主樣の事なれば、俺は命は惜しうない。そちも武士の娘でないか。必らず未練な心を出すな。

花町　それぢやといふて此の責苦を。

治部　ムヽ、見てをられずば、白狀しやれ。

花町　サア、それは。

獵一　但し親仁を拷問せうか。

花町　サア。

敵役
みな　サア、

皆々　サア〳〵〳〵。

石川　エヽ面倒な。（ト花町を引きのけ、戸棚へ立ちかゝる。）

花町　アヽ申し待つて下さりませ。かうなる上は是非がない。いかにもおかくまひ申しましたわいなア。

皆々　扨こそな。（ト皆々思入。畑作皆々を拂ひのけ、花町を引倒し、きつとなり、）

畑作　エヽ、おのれはなア〳〵。（ト合方替つて、）言はうやうなき恩知らずめが。そち達ばかりか此親まで、御恩になつた好古樣、今改めて言はずとも、そちも話を聞いてゐようが、元この俺は近江の國堅田の里の鄕士にて、打續いての不仕合せに、活計に迫つてそちが兄、謙太郎といふ悴をば、育てかねて五つの時、瀨田の橋の西詰へ捨て、乳呑のそちを連れ、こゝやかしことさまようて、渡月橋より身を投げて死なんとせしを好古樣に助けられ、お惠み受けて知邊を求め、爰へ立越え生業に鼓を造つて世を渡り、妹を產んだ女房が、御恩送りにお乳を上げ、その姬君の侍女に、又もやそちを差上げて、御恩に御恩を受けたる主君好古樣の姬君を、御恩を思つてかくまはゞ、そちが命を取らるゝとも、明すといふがあるものか。言はうやうなき人でなしめが。

　ト畑作突放す。これを治部太夫聞いて、合點の行かぬ思入。

花町　そりや、お前が言はずとも、命がなくばいざ知らず、言ふまいとは思うたれど、戶棚の內を明けられては、包むに詮ない事ゆゑに、おかくまひ申せしと有體にいうたのは、暫しの御猶豫願ふ心（ト治部に向ひ、）最前の誼を思召し、夫左近が歸りますまで、暫しの御猶豫下されますやう、偏にお願ひ申上げます。（ト治部思入あつて、）

治部　猶豫ならざる處なれども、健氣なそちが白狀ゆゑ、左近太郎が歸るまで、暫時の猶豫致してくれ

う。

花町　えゝ、有難うござりまするわいなア。（トうれしき思入。）

石川　あいや岩倉氏、暫しの猶豫致すうち、左近太郎が歸り來り、若しや裏からこつそりと。

治部　いゝやその儀は氣遣ひめさるな。此家の廻りは人歩を以て取圍ませおいたれば、空をかけるか地を潜るか、外に逃げ行く道はござらぬ。いやなに花町、最前の誼に暫時の猶豫、願ひに任せ致しくれる。左近太郎が歸りなば、六の君が首を討ち、我が受取りに來るを待て。暮六つを合圖にまゐるであらう。

花町　畏りましてござりまする。

石川　シテ、これなる親仁めは。

治部　首討つて渡すまで、人質に連れ行かん。

畑作　スリヤ、此上にまだわしを。

石川　首討つまでの人質だ。繩打つて引立てい。

奴△○　畏つてござりまする。（ト奴○畑作に繩をかける。治部立上り、）

治部　コリヤ花町、左近太郎が歸りなば、元方卿の嚴命ゆゑ、未練残さず首になせ。假令桃李の粧ひあ

ろとも、死相は必らず替るものだぞ。確と見覺えのある姫の顏、鷲に烏の身代り首、益なき事を致さぬやう、心を据ゑて首討てと、立歸らば申し聞けい。

花町　ハイ、仰せの趣き逐一に、申聞けるでござりませう。

石川　然らば是より、暮六つまで、拙者が宅にて御休息。

治部　何樣いまだ八つ下り、暮六つまではまだ二時、貴殿方にて相待ち申さん。

石川　ソレ、親仁めを引立てい。

花町　そんなら、どうでも。

獵△○　親仁は人質。

畑作　娘よ後を。（と立ちかけようとするを、）

石川　アヽコレ。（ト中を隔てる。）

治部　然らば花町。

花町　岩倉樣。

治部　きつと詞を番うたぞ。

ト時の太鼓になり、治部太夫先に石川、畑作、奴○繩を取り、奴△獵師一、二附添ひ、花道へはひる、

花町後を見送り、

花町　このまあ、こちの人は何處まで尋ねに行かしやんしたか、早う戻つて下さんすりやよいに。暮六つとても僅かの間、世に間の惡いといふものは、姫君樣に妹の顏の似たのが幸ひゆゑ、內にゐたなら言ひ聞かせ、お主と親のその爲にお身代りにせようもの。昨夜からして行方の知れぬは、何の因果でこのやうに、かくも鵙になるものかいなア。

ト花町泣伏す。寺鐘。床の淨瑠璃になる。

〽憂き事の積る軒とも白雪に、衞門之助に馴れ染めて、楓は心いそ〳〵と、比翼の契り嬉しくも、塒へ急ぐ二人づれ。

ト雪おろしにて、花道より前幕の衞門之助、加賀簑菅笠をかざし、楓裾を端折り、案山子簑を着て、竹笠をかざし、竹の弓を杖にして出來り、花道にて、

衞門　昨夜は思はぬ雪ゆゑに、人里遠き辻堂で、夜を明かし參つたれど、今朝は止まうと思ひの外。

楓　降り續けゆゑ道捗らず、大層手間を取りましたわいなア。

衞門　嘸かし宿にて案じてをらう。身共は雨具の用意はなせど、

楓　私や案山子の簑笠で、爰まで凌いでまゐりましたわいなア。

衛門　して、こなたの家といふは。

楓　つい向うでござりますわいなア。

衛門　向うとあらば、少しも早う。

楓　どれ、御案内致しませう。

〽深山おろしの風よりも、身にしみ〴〵と戀風の、寒さ厭うて歩み寄り、

ト兩人平舞臺へ來り、門口にて、

〽姉さん、今歸りましたわいなア。

花町　オヽ妹か、よう歸つたわいなう。

〽聲にびつくり、飛立つ嬉しさ。（ト花町起上り、楓を見て嬉しき思入。）

楓　モシ姉さん、嘸お案じなさつたでござんせうなア。

花町　案じたとも〳〵、どの位案じたか知れぬが、何は兎もあれよい處へ、よう歸つてくりやつたなう。

（ト衛門之助を見て、）コレ妹、表にどなたかおいでぢやないか。

楓　アイ、表においでなされまするは、私を助けて下されました、お侍樣でござりますわいなア。

花町　なに、そなたをお助け下されたお方樣とか、何故お通し申さぬのぢや。

楓　アイ〳〵。あなたこちらへお通りなされませいなア。

衛門　アイヤ火急の事ゆゑお助け申し、是れまでは同道なせど、宿所へ屆けし上は、最早拙者はお暇申さん。

楓　イエ〳〵、それでは心が濟みませぬ。ちよつとなりとも、どうぞ此方へ。

衛門　見受けし處女儀のお住居。まげてお暇申すであらう。

〽情は知れど武士の、袖打拂ひ出でゝ行く、後打見やり花町が。

ト雪おろしにて、衛門之助花道へ行く。花町門口へ出て行き、向うへ思入あつて、

花町　ナウ〳〵旅のお侍樣、暫くお待ち下されませ。かゝる伏屋に候へども、少し雪の小止むまで、お茶一つ參らせん。

〽程近なれど降る雪に、やう〳〵耳に通じてや。（ト衛門之助思入あつて、）

衛門　呼びかけられしは、身共よな。

花町　おむづかしくも、どうぞ是れまで。

衛門　あいや、身共も急ぐ旅にしあれば。

花町　長うお足も止めませねば、どうぞ是れへ。

衛門　然らば推參致すでござらう。

〽見るまに積る雪道を、踏分けてこそ立歸る。（ト雪おろしにて平舞臺へ來る。）

花町　ようまあ、お戻りなされて下さりましたわいなア。

衛門　其許のお心入れ、無足になさんも本意なければ、詞に隨ひ暫時の間、宿りを借りるも一樹の蔭。

花町　それは雨の小蔭にて、

衛門　これは雪の軒ふりて、

花町　何はなくとも、まあこれへ、

衛門　然らば女性御免下されい。

〽禮儀亂さず內へ入り、草鞋の紐とく〳〵と、足を拭うて座に通れば、お茶よ煙草ともてなすにぞ。

ト衛門之助草鞋を脫ぎ、二重へ住ふ。楓煙草盆を、花町盆へ茶を汲みて出す。

衛門　アヽコレ、必ずかまうて下さるな。（ト誂への合方になり、）

花町　さうしてまあ妹には、昨夜から家を出て、何處へ行つてゐたのぢやぞいなう。

楓　サア、昨日日暮れに家を出て、洞ケ嶽の山神樣に連れて行かれてすでの事、辱しめに逢ふ處を、

あなた樣に助けられ、無事に歸つて來ましたから、ようお禮をいうて下さんせいなア。

花町　それは〳〵危ふい處を、ようお助け下されました。何と御禮を申さうやら、有難うござりますわいなア。（ト花町手をつき禮をいふ。）

衛門　イヤ、そのやうに言はれては、却つて此方迷惑致す。しかし拙者がをらぬ時は、憂目に逢はうも知れぬ。危ふい事でござつた。

花町　シテまあそなたは、どういふ氣で、洞ヶ嶽まで行つたのぢやぞいなう。

楓　私や何だか夢現、行くともなしに行たわいなア。

衛門　何樣妖魔に心奪はれ、娘御は存ぜぬ筈。その場の樣子それがしが覺えしだけを話し申さん。

花町　どうぞお聞かせなされて下さりませ。

〽いふにこなたは座を進め、

衛門　拙者は日本六十餘州、武術修行に歩く者、昨夜宿を取りはぐれ、峠を越えて宿せんと、普賢寺越えにかゝりしところ。

〽折しも月なき宵暗に、木の間を洩るゝ星かげを、便りに登る九十九折、七八町も行きし頃、俄の時雨に是非なくも、魔所とも知らず山神の、社に一夜を明かさんと、

暫し休らふその處に、是れなる娘と諸共に、手に手を取つて麓より、登り來るは年の頃、十七八
とも思しき若者、わりなく語らふその内に、
〽一吹きさつと落し來る、風諸共に若者の姿は消えて髣髴と、跡に怪しき妖魔神。
手籠になさんとなす體に、忍びがたなく奉納の、弓矢のありしを幸ひに。
〽惡魔降伏蟇目の射術、切つて放せばあやまたず、妖魔の肩先はつしと射、
驚く隙を附込んで、疊みかけて斬つたれど、
〽こゝに現はれ彼處に隱れ、姿は雲か霧隱れ、遂に消え失せ行方知れず、
直に娘御伴うて下山なせしが雪降りに、是非なく途中に一夜を明かし、
〽それ故延引致せしと、ありし次第を物語るに、姉はいよ〳〵打驚き、

花町 扨は最前村の衆が、噂になせしに違ひなく、妹は妖魔に誘はれしか。思ひがけないあなた樣のお助け受けて折よくも、爰へ歸つて來るといふは、神々樣のお惠みゆゑ。

楓 危ふい命を助かりましたも、あなた樣のお助けなれば、

花町 お禮は詞に、

兩人 盡くされませぬわいなア。

〽代る〴〵に禮なして、悦び合ふぞ道理なり。（ト兩人よろしく、心々に嬉しき思入あつて）

楓　モシ姉さん、何ぞあなたへ御馳走に。

花町　オヽ、そりや心附かぬではなけれども、折惡しくお菓子とても。

衛門　あいや必ずおかまひ下されな。拙者への御馳走なれば、雪中の寒さ凌ぎ、焚火に上越す物はござらぬ。

花町　その焚火も折惡しく、けふ此雪の降るとも知らず、山より薪を取寄せねば、今御馳走に何をがな。

ト傍にある鉈を取つて花町立上る。

〽鉈押取つて庭に下り、傍に差出し梅の枝、雪打ち拂へば冬ながら、春待ち顏の莟枝。

ト花町庭へおり、梅の木の雪をふるひ切らうとして、御身代りに若木を切るといふ思入あつて、

今この花を見るにつけ、思ひ出すは我夫、世にありし其時には、梅は諸木の魁とて、梅を多く集められしが、かやうな態に衰へて、言はれぬ貧の花好みと、皆人にまるらせて、今はやう〳〵一木の梅、別けて夫の祕藏なれども、お客樣の饗應に、薪となしてあてまるらせん。

〽切らんとなすを、客人押止め、

衛門　あいや女中、暫らく。いまだ冬至も過ぎざるに、莟を持ちしは早咲なるか。花咲く枝を此儘に咲

かせで切るは殺生なり。

花町　デモ雪中のお饗應に、サア蕾の枝も春待たで、切らねばならぬ、今宵の仕儀。

衞門　それぢやと申して、あたら若木を。

花町　いゝや。

〽とても此身は埋れ木の、いつの盛りにいつの花、いつの時をか待つべきぞ。

ト衞門之助止めるを振拂ひ、梅の元へ立寄るを、

衞門　そこを切らずと此儘に、花咲く春の眺めにおしやれ。

花町　サア、その眺めをば打捨てゝ。

〽かくこそあらめ我も身を、捨つべき爲の梅の枝、切るとてもよしや惜しからじ、雪打拂ひ見れば面白や、いかにせん先づ冬木より咲初むる室の梅の北面は、雪とけしてさむきにも、先づ先立つ梅を切りやそむべき、惜しや不便と切り兼ねしが、思ひ切つたる蕾の枝。

まツこのやうに。

衞門　あ、惜しき蕾を。

花町　切るは身替り薪の替り。

左近太郎

衞門　然らば女儀の御芳志受けて、

花町　これを焚いて參らせん。さ、こなたにてあたりたまへ。

〽あたりたまへと申しけり。客人は打悦び、（ト花町枝を圍爐裏へ入れ焚く事。）

衞門　あゝ忝き志し、何よりの馳走にござる。

花町　して、あなた樣はどれからどれへ、お通りでござりまする。

衞門　拙者は武者修行の爲め、六十餘州を歩きまするゆゑ、どれからどれと當はなけれど、若冠の折別れたる兄の行方が知れざる故、此程より五畿内を遊歷して歩きまする。

衞門　さる堂上方に仕へしが、浪人なして唯今にては、此近邊にゐるとの事。

花町　心當りはござりまするが、シテお名前は、何とおつしやりまする。

衞門　一樹の蔭一河の流れ、袖ふり合ふも他生の緣、今は何をか包み申さん。拙者は武術修行の壯士、柏木衞門之助と申すもの、また我が兄は參議小野好古卿の家來にて、左近太郎と申すもの。

花町
楓　えゝ。（トびつくりなす。）

楓　そんならあなたは、左近樣の弟御でござんしたか。

衞門　すりや、左近太郎は御知人よな。

楓　知らいでならうか、私の兄さん。

衛門　や、扨は此家は兄上の、

花町　あゝ名乗り合ふのも面目ないが、わらはは此家の主人鼓師の畑作が娘にて、左近殿と言ひ交す、花町といふは私でござんすわいなア。

衛門　スリヤ、噂に聞きし姉上なりしか。

花町　弟御でござんしたか。

楓　思ひがけない、

三人　この出逢ひ。

〽これはしたりと三人が、名乗り合ふのは初雪ながら、早や打解ける兄弟仲。

ト三人よろしく思入あつて、

衛門　して〳〵、兄上左近殿には、御在宿でござるかな。

花町　夫はこれなる妹の行方を尋ねに今朝より出て、まだ歸つてゞござんせぬ。

衛門　然らば兄上お歸りまで、何卒拙者をお置き下され。

花町　御兄弟と知らぬ先から、お泊め申す心なれば。

衞門　すりや、一夜をお明かし下されまするか。

楓　一夜は愚か幾萬年も、お泊りなされて下さりませいなア。

衞門　御造作になるでござらう。

花町　何は兎もあれ爰は端近、奥へお連れ申しやいなう。

楓　ほんにあなたも昨夜から、嘸お疲れでござりませう。穢苦しくとも奥の間で、御休息なされませ。

衞門　いかさま、兄上のお歸りまで、休息なしてお待ち申さん。

花町　それがよろしうござります。

衞門　左樣なれば、姉者人。

花町　衞門之助樣。

楓　ドレ、御案内申しませう。

〽楓が案内に衞門之助、打連れ奥に入りにける。後見送りて吐息をつき、

ト楓先に、衞門之助上手屋體へはひる。花町思入あつて、

花町　あゝ、嬉しや〳〵、よい處へ妹が歸つて來たは天の與へ。假令後にて知れるとも、お身替りにて一旦此の場を脫れ姫君を、何れへなりとも御供なさん。それにしても左近殿、早う歸つてくれ

ればよいが、暮六つとてもまう僅か、エヽ案じられる事ぢやなァ。
〽案じ煩ふ奥の間より、妹の楓が立出でゝ、（ト上手より楓出て、）

楓　モシ姉さん、何をお案じなされますぞいなァ。

花町　サア私が案じるといふたは、あゝそれ〳〵、こちの人の歸りの遲さ、案じられてならぬわいなァ。

楓　ほんに思へば私ゆゑ、どこまで搜しにござんしたか、お氣の毒でござんすわいなァ。

花町　シテ、今の弟御は。

楓　昨夜からの疲れにて、ちと休みたいとおつしやるゆゑ、お寢かし申して參りました。

花町　おゝさうであつたかいなう。（ト花町楓の髪を見て、）大分髪が亂れたが、幸ひ爰に櫛笥もあり、結うてやらうかいの。

楓　有難うはござんすが、唯さへ用の多い日暮れ、明日結うて下さんせいなァ。

花町　さうであらうが身だしなみ、よい殿御が泊つてなれば、お姫樣とも見ゆるやう、結ひ直したがよいわいなう。

楓　イエ〳〵、結直すには及ばぬから、ちよつと撫でつけて下さんせ。

花町　アヽ、結ひ直せばよい事を。どれ、撫付けてやりませうか。

ト誂への獨吟になり、楓有合ふ鏡臺を出し、鏡をかけ、これへ向ふ。花町後ろへ立ちかゝり、髪を撫でつけながら、今身代りに殺すは不便なといふ思入あつて、涙を拭ふ。これが鏡に寫る思入にて、楓心得ぬこなしにて振返り、顏見合せ、また撫付けにかゝる。花町泣かうとして、袖にて口を押へる。獨吟の切れにて、

楓　もウし姉さん、何で泣かしやんすえ。

花町　これが泣かずにをられうかいなう。（ト獨吟の上げにて、花町ハッと泣き伏す。）

楓　これが泣かずにをられぬとは、どういふ譯でござんすえ。

花町　これ妹、一生にない此姉が頼みがあるが、聞いてくりやるか。

楓　姉さんとした事が、此身にかなうた事ならば、聞かいで何とせうぞいなア。

〽言ふに花町涙を拭ひ、（ト床の合方になり、）

花町　そなたに頼みは外でもない。世には似た事のあるもので、好古様の姫君たる六の君様がそなたのやうに鬼神妖魔の業なるか、うか〳〵お一人御門外へお出でありしを惡人が、唐櫃へ押入れて、川へ沈めにかけるところ、折よくその場へ行合せ、夫と二人でお助け申し、あれなる戸棚のその内へ、おかくまひ申しておいた處、密夫があつてお館を、脱け出で給ふと讒言なし、心好からぬ

左大將元方が執權岩倉が、首受取りの役目にて、暮六つまでに渡せよと、退引ならぬ手詰の場所、頼みといふは爰の事、父様は言ふに及ばず、母様はじめ私ら夫婦、御恩になつたお主様、お助け申さにやならぬゆゑ、お姫様の面差に似たこそ幸ひ今宵の切羽、お身替りになつてくりやいなう。

楓　えゝ。

〽聞いてびつくり、打驚き、

花町　さゝその驚きは尤もながら、親の替りに死ぬと思ひ、無理な事ぢやが諦めて、命を捨てゝくりやいなう。

楓　そりやもうお前が言はしやんせずとも、父様が活計に迫り、身を投げて死ぬところを、お助けなされて下されし、命の親の好古様、この姫君のお身替りに、立つのは親の御恩送り、言ふに言はれぬ事なれど、私や死なれぬ譯あつて、今というては死にともない。

花町　おゝ、さうであらう〳〵。春待つ梅の蕾のそなた、死にともないは尤もぢやが、今そなたが厭と言ふと、大恩あるお主様のお姫様のお命がない。こちらにお出でなければ知らず、此儘御最期させましては、私は兎もあれ父様が、おめ〳〵生きてをられねば、爰の道理を聞分けて、どうぞ得心してくりやいなう。

楓　事を分けてのお前のお賴み。厭と言はれぬ譯なれど、これはかりはモシ姉さん、堪忍して下さんせいなア。

〽はツとばかりに泣伏せば、姉も無理とは思はねど、心弱くて叶はじと、用意の一腰取出し、と楓泣伏す。花町思入あつて、戸棚より脇差を出し、

花町　あゝさりとては聞分けのない。事を分けて賴むのに、たつて厭ぢやと言ふに於ては、手籠にしても御主の爲、命を貰はにやならぬぞよ。

楓　假令何と言はしやんしても、私には親のある身、お前の自由にはならぬわいなう。

花町　すりや、どうあつても聞入れぬとな。

楓　サア、聞かれぬ譯があるゆゑ。

〽昨夜妖魔に誘はれて、恥かしい目に逢ふところ、衞門之助樣に助けられ、歸る途中の村時雨、濡るゝよすがに辻堂で、一夜を明かすそのうちに、積る話も雪となり、解けて嬉しいお情うけ、

父樣にもお話し申し。

〽女夫になつて千代八千代、とも白髮まで添ふ心、これが昨日であつたなら、お身替りにも

ならうもの、いとしい殿御に此儘別れ、死ぬのが厭でござんすゆゑ。

死なで叶はぬ事ならば、

〽お前死んでとばかりにて、譯も涙に暮れければ、姉も實にもと思へども、

ト此内楓よろしく思入あつて、泣伏す。花町も思入あつて、

花町　サアわしがならるゝ位なら、何でそなたを頼まうぞ。十歳から年の違ふ身が、どうお身替りになられうぞ。これそなたばかり殺しはせぬ。わしもとも〴〵死ぬほどに、どうぞ心を取直し、命を捨てゝくりやいなう。

楓　いえ〳〵何と言はしやんしても、衞門之助樣に別れるのが、私や厭でござんすゆゑ、どうぞ許して下さんせいなア。

花町　これほどまでに頼むのに、聞入れねば是非がない。手籠になしても殺さにやおかぬ。

楓　何で手籠にならうぞいなア。

花町　命は貰うた、覺悟しや。

〽傍なる一腰拔くより早く、切つてかゝれば身を躱し、有合ふ調度を打ちつけ投げつけ、拔けつ潜りつ逃げ行くを、切らんとなせど不便なと、思ふ心に切りかねる、をりから立出る衞

門之助、二人が中へ割つて入り、支へ止めるを邪魔すなと、切込む姉をしんの當、うんとばかりに倒るゝにぞ。

ト此内花町切つてかゝる。楓有合ふ鏡臺の道具を取つて投げつけ逃げるを追かけ切りかける。立廻りよき程に、上手屋體より以前の衞門之助、着流し大小にて此中へはひり、ちよつと立廻つて、花町をあてる。花町どうとなる。

楓　ヤ、こりや姉さんを。(ト寄らうとするを、)

衞門　あゝこれ。(と押へる。)

〽これと押へて耳に口、囁き合ふこそ、

ト衞門之助楓に囁く。三重雪おろしにて、此の見得よろしく道具廻る。

(裏手の場)――本舞臺三間の間前の屋體の裏手。眞中一間二枚戸、臺所の入口。上中窓下板羽目。下手鼠壁、同じく下板羽目、上の方雪の岩山の張物。下の方一面の竹藪、ずつと上に杉の立木、日覆より同じく釣枝。舞臺花道とも一面に雪布を敷き、すべて前の屋體裏手の模樣。雪おろし、三重にて道具とまる。

〽入相の鐘に塒へ立歸る、雀色時小暗きも雪にあかるき我家の裏手、左近太郎は忍び出で、

ト雪おろし、日覆より雪頻りに降り、花道より左近太郎、たッつけ大小、塗笠加賀蓑にて出來り、花道にて思入あつて、

左近 今朝未明より妹の行方を尋ねに出でしゆゑ、後の樣子は聞かざりしが、舟橋村の出口にて、人歩の固めは心得ず、噂を聞けば昨夜よりおかくまひ申したる、六の君樣の詮議嚴しく、暮六つまでに御首級を、討ち奉れと元方卿より、使者に來たる岩倉が、契約なして行きしと聞きしが、村里ながら表より立歸らば、目に立つゆゑ、山越えに忍んで來たが、どうか首尾よく姫君をお助け申したいものだ。

〽雪に音せぬ畔道を、拔足差足瀨戸の口、內の樣子を窺ふところへ、あたりにひそむ山獵師それと見るより窺ひ寄り、

ト左近太郎思入あつて舞臺へ來り、中窓より內を窺ふ。此時上下より以前の獵師の一、二窺ひ出で、

獵一 ヤア、おのれは左近太郎だな。

獵二 詮議がある、腕まはせ。

〽むんずと組むを振ほどき、足を返してづでんどう、どつこいさうはと前後より、また組附

くを身を躱し、小手を返して投げ退くれば、はずみを打つてころ〳〵〳〵、雪はあたりへ散亂なし、塒放るゝむら鳥と、共に竹藪押分けて、始終窺ふ筑波根が、一腰さすが奥勤め女ながらも烈しき働きお主の爲と兩人が、右と左りへ切つて捨て、

ト此内雪おろし、床の合方にて、左近太郎兩人を相手に立廻りあつて、下手の藪を押分け、以前の筑波根これを窺ひ、ツカ〳〵と出て、獵師一と立廻り、左近太郎は獵師二と立廻り、双方よろしく一腰を拔き、左右へ切り倒し、顏を見合せ、

左近　筑波根殿か。

筑波　左近殿か。

左近　これ。

〽あたり憚り照綱が、六の君をば助くる手段、互ひにうなづき一腰の、血糊を拭うて、

ト左近太郎、六の君を奪はんといふ思入。筑波根心得、うなづき合ひ、上下へ思入あつて血糊を拭ふ。

此の見得、時の鐘、雪おろしにて、此の道具元へ戻る。

本舞臺元の世話場の道具。爰に以前の花町、一腰を持ち心附きし思入にてゐる。雪おろし、三重にて

道具とまる。

〽行く空の雪は頻りに降りしきり、散るや吹雪の花町が、思案に暮るゝ暮六つの、胸に鐘つく思ひにて、

ト花町息を吹きかへせし思入。やはり床の合方。

花町　親の難儀もかまはずに、御身替りを聞き入れねば、妹は元より妨げなす、衛門之助も諸共に、殺害なして身替り立て、まだその上に姫君の御眼病を治すには、男女二人の血潮が入用。殺害なして藥となさん。

〽小褄引上げ一間の内、見れば二人の顔さへ見えず。（ト上手屋體を明け、内を見てびつくりなし、）

ヤヽヽヽ、こりや二人とも一間に居ず、暫し氣絶のその内に、此家を立退き逃げ失せしか。ちえゝ口惜しやなア。

〽齒嚙みをなして駈出す、途端に告ぐる六つの鐘。

ト花町後を追ひかける心にて、ツカ〳〵と段を下りようとする。此時本釣鐘の六つを打つ。花町ギツクリなし、

ヤヽ、あの鐘は最早暮六つ。治部の太夫が來らぬ内、姫を伴ひ落ち延びて、叶はぬ時には主從諸

共、死ぬより外に手段はない。
〽心せはしく戸棚の戸、明くれば後ろの壁切破り、内に姫君在さねば、花町はまたびつくり、
ト花町戸棚の錠を明け、戸を明けると、向うの壁を切破りあり、内に六の君居ぬゆゑびつくりなし、
ヤヽヽヽ、こりや後ろの壁をこぼち、姫君樣を盗み出せしか。えゝゝゝゝ。
〽あまりの事に途を失ひ、尻邊にどうとなる鐘を、打切らぬ間に表より、岩倉先に石川が、家來引連れ入り來り、
ト花町びつくりしてどうとなる、爰へ時の太鼓を打込み、黑四天の捕手二人、子持筋の弓張提灯を持ちて先に立ち、以前の岩倉治部太夫先に石川惡右衞門首桶を持ち、奴〇、△、黑四天の捕手二人弓張提灯を持ち出來り、直に舞臺へ來り内へはひり、上手へ通り、
治部　コリヤ花町、今打ちしは約束の暮六つ、六の君が首討ちしか。
花町　ハツ、その六の君樣は戸棚の内へ入れ參らせしに何者なるか壁をこぼち、盗み出して行きましたわいなア。
〽聞くに惡右衞門、花町が衿上取つて引倒し、（ト石川花町を引付け、）
石川　アノこゝな橫着者めが。間處狹き此家の内、壁をこぼちて盗み出すを、知らぬといふがあるもの

か。

奴○　慥にこれは相ずりあつて。

奴△　落したに相違ない。

石川　何れへやりしか、白狀なせ。

花町　サア、何者が盜みしやら、主は誰とも知らざれど、合點行かぬは妹を伴ひ來りし武者修行、行方の知れぬが一つの不審。

奴○　其奴が仕業か知れざれば。

奴　後追かけて一詮議。

〽二人の奴が立ちかゝる、折しも表に聲あつて、

ト此時下手より以前の衞門之助、着流し大小にて、誂への切首を風呂敷に包み、持ち出來り。

衞門　イヤ、お騷ぎあるな何れも方、六の君が首級お渡し申さん。

治部　なんと。

衞門　イザ、御實檢下されませう。

〽言ひつゝはひる衞門之助、それと見るより花町が、

ト衞門之助思入あつて内へはひり下手へ住ふ。

花町　ヤヽ、扨はおのれは壁をこぼち、姫君樣を奪ひしか、何の遺恨で、首を打つたぞ。

衞門　別に遺恨はなけれども、浪々の身の活計に迫り御恩賞にあづからんと、慾に耽つて打つたのだ。

花町　えゝ、言はうやうない、おのれはなア。

奴〇　無禮者め。

奴△　控へをらう。（ト花町を引据ゑる。）

治部　スリヤ、其許は此家へ泊りし、武者修行の英士とな。

衞門　いかにも、諸國を遍歴なす、武術修行の者でござる。

石川　誰にもせよ、六の君の首打つたるは大手柄。

治部　その首級、これへ。

石川　ハツ。

〽心得顏に首桶へ、首級を載せて差出せば、胸に一物善惡も、口に岩倉治部太夫、ためつすがめつ打見やり、

ト石川惡衞門衞門之助の持つてゐる首を取つて、岩倉治部太夫の前へ出す。治部太夫思入あつて、篤

と見て憂ひの思入あつて、ちよつと衛門之助と顔見合せ、氣をかへ、

治部　ほゝう、よく打つた、參議小野好古が娘六の君に相違ない。

花町　ハアヽー。（と花町泣伏す。）

石川　相違ござりませぬか。

治部　相違ないとも〳〵、細面にして鼻筋通り、かくまで姫に。（ト思入。）

石川　や。（ト岩倉の顔を見る。治部太夫氣をかへて、）

治部　イヤサ、姫の首級、慥に受取つた。

〽實檢なして蓋すれば、衛門之助は吐息をつき、

ト岩倉思入あつて首桶へ蓋をする。衛門之助思入あつて、

衛門　シテ、拙者めに、御恩賞は。

石川　當家の鄕士惡右衛門、わが屋敷にて沙汰に及ばん。

衛門　有難う存じまする。

石川　して、此家の親仁めは、如何致しませうな。

治部　かくまひし科はあれど、首尾よく首級手に入つたれば、繩目は赦して遣はされい。

石川　畏つてござりまする。
奴〇　イヤ、お慈悲深いお裁きで、
奴△　危ふい命が助かる親仁、有難いと、
兩人　三拜致せ。（卜治部太夫思入あつて、）
治部　さるにても此の首級、御浪士にはよく打たれた。片時も早く持參なし、元方卿へ御覽に入れん。
石川　左樣ござらば、岩倉氏。
治部　惡右衛門殿。
石川　イザ先づ、お先へ。
治部　御同道仕らん。
〽權威をかさに首受け取り、岩倉はじめ石川が、肩肱張つてぞ立歸る。
卜是へ時の太鼓をかぶせ、岩倉先に石川首桶を持ち、皆々附添ひ花道へはひる。
〽後を見送り衛門之助、隙を窺ひ花町が、長押にかけし槍押取り、
卜衛門之助伸び上り、後を見送りゐる。花町長押の槍を取り、
花町　お主の敵、覺悟しや。

衞門　〽突出す槍を丁と受け、(ト花町突いてかゝるを身を躱し、肩にて受止め、)

花町　コハ何故に、この狼狽。

衞門　何故とは愚かな事。六の君樣を討つたる其方、夫左近が弟にせよ、生けてはおかぬ覺悟しや。

花町　小癪な事を。

〽押へし槍先はねのければ、女も手利の花町、繰戻して打しごき、胸板目がけ突きかくるを扇を持つて上段下段、受けつ流しつあしらふも、急所の深手にたじ〳〵、苦痛こらゆる體を見て、

ト此内大小を冠せ、衞門之助花町槍の立廻りよろしくあつて、衞門之助手を負ひし思入にて、ドウと坐し、扇にて槍を押へ、肩で息をするを、花町見て、合點の行かぬ思入。

花町　最前より見るところ、眼中濁みて五音の調子、呼吸の息の合はざるは、正しく深手を負うたる樣子。

〽黒星さゝれて莞爾と笑み、

衞門　流石姉上、察しの如く、疾より切腹かくの通り。

〽諸肌脫げば腹帶に、滲む血汐の唐紅。

ト衛門之助肌を脱ぐ・襦袢の上へ白布の腹帯、これへ血汐にじみあり、

花町　ヤ、コリヤ何故にこの切腹。

衛門　親兄弟への言譯に、切腹なしたる衛門之助。

花町　それは如何なる譯あつて。

衛門　こなたの妹楓をば、わが手にかけて討つた故。

花町　エヽヽヽヽ、そんならもしや、今の首級は。

衛門　面差し似たるを幸ひに、御身替りになしたるぞよ。

花町　扨は壁を切破り、姫君を奪ひしは、こなたにてはなかりしか。（ト上手屋體にて、）

左近　その盗賊は、これにあり。

花町　何と。

ヘ一と間の障子押開き、内には夫左近太郎、侍女筑波根と諸共に六の君を守護なしをれば、

花町またも打驚き、

ト上手屋體の障子を引抜く。と爰に六の君を眞中に、上手に筑波根、下手に左近太郎、袴大小にて控へてゐる。花町びつくりなし、

扨はお前は、姫君を。

左近　いかにも裏より忍び入り、壁をこはして姫君を、盗み出せし左近太郎。

〽聞くに花町膝を進め、

花町　そりや何故にこのわしに、隱して姫君を盜まれしぞ。

左近　されば、最前斯くとも知らず立歸りしが、噂を聞きて南無三寶、姫君の御身の上と宙を駈け、

〽立歸りしが、いや〱〱、表口には人目あり、裏より忍ぶが屈竟と、

山越えなして、立歸りしところ、

筑波　思ひは同じこの筑波根。

〽御身の上が氣遣はしく、降り積む雪も厭へばこそ、竹藪越して來りしに、

左近殿に出逢うて、

左近　姫君お助け申さんと、喋し合して瀬戸口より。

〽はひる折しも暮六つに、岩倉來らぬその先にと、

其方に言ふ間も心せかれ、壁をこぼつて盜み出し、

筑波　衾の風もお厭ひある、

〽姫君樣をあられもない、雪の中での御介抱。

衞門　またそれがしは兄嫁の、苦心を察し測ずも、二世の契りを交したる、楓に姫の身替りすゝめ、

〽我も諸共死出三途、一つ蓮に暮さんと、

言聞かすれば打笑みて、首差延べし健氣さに、我もその場で直樣切腹、形見に殘せし楓が片袖、武士も及ばぬ立派な最期、これ。

〽可惜若木の楓をば、切つて捨てしもお主へ忠義。（ト衞門之助楓の片袖を出し、）逆樣ながら姉者人、褒めてやつて下されい。

〽これまで屈せぬ武士も、愛にひかるゝ悲歎の涙、聞く花町もむせかへり、

花町　そんなら妹は潔う、健氣な最期でござりましたか。かねて覺悟はしながらも、切るに切られぬ血筋の緣、可愛い事をしましたわいなア。

〽かつぱと伏して泣き沈む。

左近　兄弟盡きぬ緣にて、思はずその場へ出逢うて、喋し合せし今宵の仕儀。

〽かはる／＼に物語れば、姫も涙を拭ひたまひ、

六の　かく人々の艱難辛苦も、

〽皆みづからが身の上ゆゑ、可惜若木の兩人を、莟の儘に散らすといふは、不便なものとばかりにて、かこち給へば花町が、（ト此内皆々よろしく思入あつて、）

花町　かゝる事とは知らざるゆゑ、思はぬ苦勞なしたれど、御身の上の恙く、これに越したる事はなし。言うて返らぬ事ながら、親兄弟への義理ならば、腹切らずともよい事を。

〽言ふに手負ひは打消して、

衛門　いや、それがしが切腹は、親への言譯、楓へ心中、また一つには姫君の、御眼病を治さんため。

花町　スリヤ、最前の血汐の話を。

衛門　つぶさに聞いて、この切腹。

左近　楓が血汐の此壺へ、弟が血汐をしぼり込み、良藥混じて差上げよ。

〽壺差出せば衛門之助、疵口解いて迸る、血汐を受ければ花町が、姫が所持なす良藥を、混じ合して進むれば、暫し悶絶したまひしが、不思議や眼病平癒なし、

ト此内左近太郎傍にある小さな壺を出す。花町取つて出す。衛門之助腹帯を解き、此内へ血汐を絞る。此の内筑波根六の君が持つてゐる藥包みを出す。花町手早く藥を入れ、筑波根と兩人にて六の君に無理に呑ませる。薄ドロ〲にて、六の君ウンとのる。三人介抱なして六の君心づき、

六の　やゝ、こりや雲霧の晴れたるやうに。
花町　あなたはお目が見えますするか。
六の　何處までも見ゆるわいなう。
左近　それぞ、良藥、
筑波　血汐の利目。
皆々　ちえゝ忝い。
〽思はず一度に手を合せ、悅び合ふぞ道理なる。
ト皆々嬉しき思入にて、
左近　さるにても、合點の行かぬは、心よからぬ岩倉が、何故贋首を受取りしか。
筑波　何樣これぞ、
花町　一つの不審。
〽言ふより門に窺ふ岩倉、（ト此内下手より、以前の岩倉畑作を伴ひ出來り、門口に窺ひゐて、）
治部　不審に及ばぬ、その仔細、それへ參つて演舌なさん。
〽畑作伴ひ入り來れば、（ト岩倉畑作の兩人內へはひる。）

左近　絶えて久しき岩倉殿。
花町　父さんを伴はれしは。
治部　これにも仔細あつての事。姫君御免下されい。
〽禮儀正しく座に直り、(ト平舞臺眞中へ住ひ、)
最前僞りと知りながら、首級を受取り歸りしは、我も繋がる縁者ゆゑ。
左近　何と言はるゝ。
治部　何をか包まんそれがしは、花町そちが兄なるわ。
花町　エヽヽ、そんならお前は。
畑作　常々そちにも話せしが、今を去る事四十年、貧苦に迫つて此親が瀬田橋の西詰へ、捨てたる悴の鎌太郎。
花町　スリヤ、兄さんでござんしたか。
治部　妹にてあつたるか。
〽面目なやと先非を悔い、(ト岩倉思入あつて誂への合方になり、)思へば最前親仁さまが、昔語りをなさらずば、親兄弟が高恩受けし、好古卿の息女たる姫が首級を給はるところ、測らず親

子と知つたるゆゑ、爰ぞ御恩の送りどころ、何卒お命助けんと、暮六つまでと期を延ばし、人質なりと親人を連れ歸つてひそかに名乘り、よもや姫の首級は討つまじ、身替りにても立てるかと裏手へ廻つて窺ひしに、我より先に左近殿、忍び入つて助けしゆゑ、これ幸ひと取つて返し、首級受取りに行つたれど、衞門殿が討ちしと聞き、もしやと思ひ首級を見れば、その面差しは似たれども、贋首ゆゑに安堵なし、六の君に相違ないと、目利をなして都へ送り、後に殘つて一詮議と、惡右衞門を僞りしも、身の言譯をなさん爲、過ぎゆく事は何事も、許して下され何れも方。

〽惡に強きは善にも強く、身をへりくだり詫びければ、親畑作も前へ出て、

ト岩倉よろしく思入、畑作前へ出で、

畑作　親子の奇緣盡きずして、唯一言がよすがとなり、五つの年に別れたる、わが子に思はずめぐり逢ひ、名乘り合うたるばツかりに。

〽神の御末の御胤を、宿し給ひし姫君を、事なくお助け申せしが、

名乘り合はずば姫君ばかりか、我々までも諸共に、命捨てねばならぬのに、悴が變心なしたる故危ふい命助かりし、その悦びに引替へて、衞門之助殿楓が最期、

〽忠義ゆゑとは言ひながら、

思へば不便な身の終り。

〽老の繰言くり返し、咽び入つて泣きけるにぞ、人々實にもと顔見合せ、共に袖をぞしぼりける。

治部　そのお歎きは無理ならねど、二人が死なずば姫君の、お命助ける手立はなし。天晴人の鑑となるかゝる忠義な子を持ちしは、親兄弟の身の譽れ、お歎きあるな親仁様。

〽力を添ゆる岩倉が、詞について左近太郎、（ト左近太郎思入あつて、）

左近　イデ此上は姫君の、御供なして都へ登り、これを一つの功となし、不義の御勘氣御免を願はん。

六のお　その事ならば自らが父上様へお願ひ申し、此身にかへて執成し得させん。

花町　そのお詞を力に頼み、出口々々の固めが引かば、

筑波　時を移さず少しも早く、都へ登り御主君へ、御勘氣御免を願はれよ。

〽言ふに手負ひも、打ちうなづき、

衞門　おゝその家苞は思はずも、昨夜手に入る此の寶劍。兄者人へのわが餞別。

〽差出す一腰押頂き、

ト衞門之助傍にある、袋入りの寶劍を出す。左近太郎取つて押頂き、

左近　ハヽ、有難や忝や。〈トのりになり、〉
〽此寶劍は小鍛冶が作、しかもその名は八束穗とて、天下泰平國家安穩五穀成就の祈念には
なくてならざる此の一口、再び戻る豐年の、
幸先もよき貢の雪。
〽勇み立つれば人々も、〈ト左近太郎よろしくあつて、〉
六の　雪にすゝぐの聲あれば、
花町　わが身に積る罪科も、
筑波　晴れて朝日の雪解けに
畑作　流れ寄つたる親子兄弟、
治部　善惡二つの道をかへ、
左近　都へ門出の我々に、
衛門　冥土へ門出の二人づれ、
花町　目出度い。
筑波　悲しい、

皆々　此の別れ。

〽はや近附きし知死期時、(ト本釣鐘を打込み、)

衛門　あの世へ土産、扇の一手。

左近　言ふにや及ぶ。

〽扇をさして立上れば、花町筑波根心得て、皷押取り拍子をすゝめ、

ト左近太郎扇を持つて立上る。花町大小の鼓を取つて、筑波根に渡し、兩人にて鼓を打つ。

左近　敵と見えしは、群れゐる鷗。

衛門　鬨の聲と聞えしは、(ト苦痛の思入にて謠ふ。爰へ奴○、△抜身にて切つてかゝり、)

奴○△　觀念。(ト下座へ取り、)

〽浦風なりける高松の、浦風なりける高松の、朝嵐とぞ、

ト左近太郎へかゝるを、舞ひながら扇にて附廻す。これを、畑作は奴○、岩倉は奴△を捕へ、ちよと立廻りあつて、引付ける。衛門之助は腹帶を解き、がつくりとなる。花町、筑波根はハア、と言はうとするを、左近太郎是れを抑へる。

〽なりにける。

ト左近太郎愁ひをかくし、段切れを踏む、皆々引張りにて、よろしく

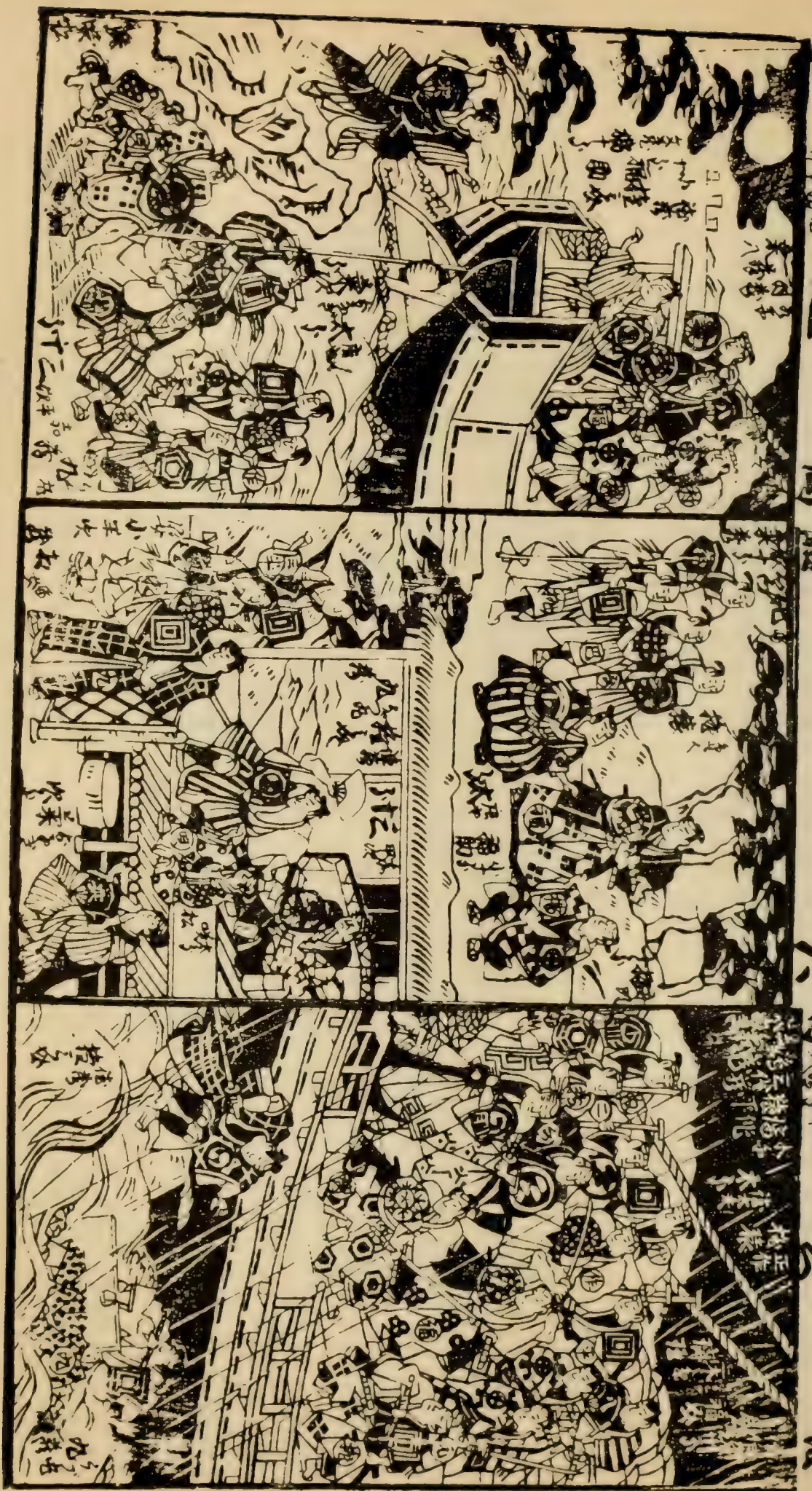
ひやうし　幕

左近太郎（終り）

第一番目より二番目へ續く趣向の發端は一夜明石に朝霧の其名笛を盜まんと船へ入込む座頭の浪市手引なしたる角左衛門はたくみも淺原三木之進に衒と見出され飛込みし海もはやてに徳太夫が老の命を捨錠扨徳藏は北條家のむかひの船に是非なくなく煩ふ親の嘉平次や妻のおなぎに別れの 船出

『桑名屋德藏』は明治三年二月市村座に稿下された、作者五十五歳の時であつた。春狂言のことで、曾我の世界も混じてをり、生島新五郎及び音羽丹七などを絡ませたものになつてゐたから、寶萊曾我云々の名題になつてゐた。八丈島の風俗、俗語等は、幕末に遠島に處せられ、維新の特赦に逢つて歸來した者の實驗談を基礎にしたものであつたといふ。後の九世團十郎事權之助の扮した德藏も、亦後の團藏である九藏の渦丸も好評であつたことが傳へられてゐる。

書きおろしの時の役割は河原崎權之助(桑名屋德藏)、市川九藏(海賊鳴戸の渦丸)、尾上菊次郎(德藏女房おなぎ)、關三十郎(德藏舅嘉平次)、坂東太郎(島の庄屋太次兵衞、桑名屋德太夫)、市川團藏(德藏母おみさ)、坂東橘十郎(桑名屋船頭文藏)、中村福助(岩上角左衞門、淺原小十郎)等であつた。

挿繪にしたのは、稿下當時の繪草紙である。

寶萊曾我島物語（島の徳藏――五幕）

序幕

鎌倉八幡宮の場

〔役名――諸士甲　同乙、中間熊平、中間五人。奥女中濱、田舍の娘等。〕

（鶴ヶ岡八幡宮の場）――本舞臺三間の間、眞中廻廊の書割、上手石の鳥居、下手植込み、梅の立木日覆より同じく釣枝、總て鶴ヶ岡八幡の體。爰に○△□の中間三人、竹箒手桶を持ち、立ちかゝり居る見得、大拍子にて幕明く。

○ときに可内、今日はめつぽういゝ天氣ぢやあねえか。

△春早くから雪が多かつたから、暖かになるのも早く、けふは梅の眞ッ盛りだ。

□そりやあいゝが、人は梅見だの何のと浮かれて居るが、春先紺看板一ッてんで、箒と手桶の首ッ引きも、あんまり智慧がねえぢやあねえか。

○その智慧のねえのは、どうで二合半のこちとらだから仕方もねえが、此の鶴ヶ岡の八幡樣へ北條

の親玉が、名器とか寶物とかを取りに嚴島へ渡海をするので、海上安全の爲め參詣に來た三人の侍。

△　さうだ〳〵、自分の役はそこ〳〵で、むづかしい事ばかり言やあがつて、奥山の女にじやらくらして、いやらしい事ばかり言やあがつて、あれがほんの無駄を知らねえといふものだ。

□　違えねえ、其通り、けふは奥山の茶屋の女はこつぺいといふものだ、今しがた花屋敷へ、見物に行くといつて出掛けたが、大方茶でも呑みたふして居るだらう。

○　何にしろ爰へさつきの侍が來ると、何のかのとやかましい事をいふから、てえげえに掃除なしてしまつたら、下部屋へ行つて、白馬でもやらうぢやあねえか。

△□　そのこと〳〵。（ト花道の揚幕にて、）

中間兩人　うしやアがれ〳〵。

○　そりや、また何か彼奴らが、尻尾を見附けてぐづるのだ。

△　聖人危ふきに近寄らずだ。

□　部屋へ行かうぢやあねえか。

三人　さあ〳〵、行かう〳〵。

ト三人下手へはひる、大拍子になり、花道より諸士甲、乙先に、跡より中間兩人、田舍娘一人を引立て來り、花道にて、

中間　さあ〳〵、きり〳〵と歩びやァがれ。

娘　どうぞ御勘辨なされて下さりませ、何にも存ぜぬ田舍者、どうぞお許しなされて下さりませ。

甲　えゝ。ぐづ〳〵申すことはない、御主人の御祈念の場所へ、女の身にて立寄りしは、胡散な者。

乙　殊に神への穢れといひ、屋敷へ引立て成敗なすぞ。

甲　さあ〳〵、きり〳〵。

兩人　うせう〳〵。

中間兩人　えゝ、歩びやァがれ。（ト中間むごく田舍娘を引立てる、甲、乙こなしあつて舞臺へ來り、）

乙　女をそれへ引据ゑい。

中間兩人　はッ、さあ下に居らう。（ト田舍娘を引きすゑる。）

娘　何も胡散な者ではござりませぬ、御料簡なされて下さりませ。

甲　いや、罷りならぬ、今治まる御代とはいひながら、木曾の殘黨平家の餘類、諸々に徘徊いたすとあれば。

乙　少しも油斷ならざる時節、殊に此度賴朝公、富士の裾野に御狩の催し。

甲　それに列なる諸大名、役目首尾よく勤めるやうにと、鎌倉殿の嚴命にて、近く當社の神前にて、舞樂を奏す晴れの催し。

乙　右に附き時政公、名ある樂器の其うちにも、奇品を選ばん其爲に、此度嚴島へ渡海をなすも、小松の內府重盛が、辨財天へ寄附ありし、朝霧と名附けし篳篥。

甲　其名器を御懇望につき、御出入りの船頭桑名屋德藏親子のものに言ひつけ、近々出帆と事極まる。

乙　それゆゑ海上安全の爲、奉幣祈念の大事の場所へ、うせたる女め。

甲　一癖あるに相違はない。

兩人　きり〳〵屋敷へ引立て參れ。

中間兩人　はツ。（ト兩人立ちかゝり、）女め、きり〳〵うしやあがれ。（トむごく引立てる、田舍娘其手に縋り、）

娘　まあ〳〵、お待ち下さりませ。

乙　待てとは何ぞ、言譯あるか。

甲　あるなら此の場で、疾く〳〵申せ。

娘　はい〳〵、申しまする〳〵。さあ、うろんな者ではござりませぬ。申譯ではござりませぬが、此

身の不運一通り、お聞きなされて下さりませ。（ト合方になり、）只今申し上げまする通り、田舍育ちの無骨ゆゑ、さういふことゝは露知らず、此場へ參りし身の不承、そりやもうあなた樣のお屋敷へ、お連れなされて御折檻は、さら〳〵御無理とは存じませねど、私にはたつた一人の母親がござりまするが、その母親が長の煩ひ、今では藥の價も盡果てゝ、是非もなく〳〵暮すうち、ふと思ひ出して此の八幡樣へ願掛けいたしましたが、其の御利益で全快いたしましたゆゑ、御禮まゐりに圖らずも、降つて湧いたる此場の事を、母樣が聞かしやんしたら、嘸や歎き悲しみ、又も病がぶり返しましたらば、看病いたす者もなく、それやこれやを思召し、不便なものと何れもさま、どうぞお許しなされて下さりませ。

トよろしく泣き伏す。

甲　いや其手ぢやいかぬ、いくら哀れな話しをしても、今までに其の手はまゝあること。

乙　左樣でござる、たとひ詫びても笑つても一拷問いたさねば、われ〳〵共が役目の越度、引立て參るも何かと面倒。

甲　うさんな女の成敗を、

乙　此場において、

兩人　いたしてくれう。（ト刀の柄へ手を掛ける。此時鳥居の內にて、）
渚　あいや、何れもさま、暫くお待ちなされて下さりませ。
兩人　や、あの聲は。（ト大拍子になり、奥女中渚、中間附いて出來り、）
甲　誰かと思へば、渚どのには、無禮ものゝ成敗を、
乙　何で留め立て、
兩人　召さるゝぞ。（トきつといふ。）
渚　お前さん方のお爲を存じて。
兩人　何と。
渚　さあ、あなた方も大人氣ない、木曾の餘類の何のというて、年端もゆかぬ女を捉へ、大事の御用の其先で罪あるものと名を附けて、繩附をお出しなされては、當社の神慮に叶ひますまい、ましてあなたの御主人岩上どのも、重き役目の渡海をなさるとのこと、非道なことをなされますればいつか思ひの廻り來て海上に變あらば、大きな不忠ではござりませぬか。
兩人　むゝ。（ト詰る。）
渚　それを思うて、お止め申しまする。

甲　何さま、祐經樣の奧勤めをする程あつて、お口まめな此の場のお捌き。

乙　然しわれ〳〵が言出せしを、此儘にいたすも殘念。

渚　さあ、其の御無念もあなた方の、お主のお爲でござりまする。（トちよつと睨めていふ。）これ、そこな娘、及ばずながら此わしが、附添ひ參詣いたしなば、左衞門祐經樣の、其の奧方の代參ゆゑ、指さすものはないわいなう。（ト思入あつていふ、三人口惜しき思入、娘嬉しきこなしあつて、）

娘　段々とのお情にて、危ふきところをお助け下され、有難う存じまする。

渚　何の其禮に及ぶものかいなう、此の場に長居は惡しければ、そなたと共に。

甲　左樣ござらば、渚どの。

乙　後刻お目に、

四人　掛りませう。

甲　とはいへ娘の。

渚　はて、忠義の二字は破れますまい。

ト兩人むゝと息込むを、渚きつと云ふ。唄になり、渚先きに田舍娘附添ひ、上手へはひる。跡に甲、乙兩人殘り思入あつて、

甲　折角うまく／＼やつた所へ、とんだ邪魔が飛込んで、遣りそこなふとは、腹の立つことだ。

乙　いかにも貴殿の言はるゝ通り、罪なき彼れに難癖附け、屋敷へ連れると言ひ立てゝ、何處ぞそこらでそゝのかさうと思ひの外、あの渚が利口走つた口先で、言廻されて此の場は到頭ちやアふう。

甲　これが譬にいふ通り、物には障りのあるものだ。

乙　左様でござる。

甲　最前も貴殿へ申す如く、御主人岩上角左衛門様にも、嚴島辨天へ渡海の相役は淺原造酒之進殿、主人には首尾よく名器の受取り濟めば、道中守護は淺原殿。

乙　油斷を見すまし渦丸に夫の篳篥を盗ませるこつちの魂膽、さうなる時には御主人には、上見ぬ鷲の御家老職。

甲　さうなる時にはわれ／＼も、共に出世の小口と云ひ、それに附けても下郎の熊平、最早歸宅いたしさうなもの、あゝ待たるゝより待つ身とは、爰の事でござらうわえ。

乙　左様でござる。（ト此時花道より、中間熊平出來り、花道にて）

熊平　お旦那角左衛門様に頼まれて、大事の使ひを受負うたも、今はこんな中間だが、去年の春まで海賊の渦丸親分の子分であつたが、あんまりとんまを働くので、異見をいはれて足を洗ひ、今ぢや

あ堅氣の素人になり、上總部屋の中間奉公、此の春旦那の振舞で、以前の身の上を話したばかりで、役に立つたる今度の仕事、これも世にいふ禍も三年目とは、此事だわえ。（トよろしくあつて舞臺へ來り、兩人見て）何れも樣、これにおいでなされましたか。

兩人　さゝ、熊平近う〳〵。

熊平　左樣なら、御免なされて下さりませ。（トよろしく下手に住ひ、思入あつて）

甲　いや熊平、早速ながら彼の首尾は如何いたした。

熊平　もし何れも樣、そりやあお案じなされまするな、御主人と頼みたる旦那樣のお頼みゆゑ、こつそり密書は渦丸へ、慥に手渡しいたしました。

甲　して、渦丸は得心いたしたか。

熊平　得心の段ぢやあござりませぬ、昨夜南鄕の濱邊にて仲間の奴等に逢ひまして、それから直に小船で乘出し、三崎のはなにかゝつて居る渦丸親分の元船へ首尾よくわつちが乘込んで、直に應對を遣つたれば、流石は親分すつぱりと、受合つたれば大丈夫でござりまする。

兩人　それ承はつて安堵いたした。

甲　何といづれも、首尾の話しを承はるその幸先に緣起祝ひ、熊平諸共一献汲まん。

乙　御主人にも最早これへお出であれば、竊に此由申し上げん。

甲　先づそれまでは神前にて、

乙　猶もぬからず手立を廻らし、然らば是れより、

甲　熊平來やれ。

熊平　はツ。（ト皆々よろしく鳥居内へはひる。是れと入替つて以前の田舍娘出來り）

娘　てもまあ恐ろしい今の企みごと、それに附けてもおいとしいは淺原樣、以前はわたしの母樣があの小太郎樣にお乳を上げてお育て申し、其折母樣が親旦那樣から厚き御恩を受けたとのお話し、それを思へば此事は聞捨てならぬ今の段々、どうぞ此事淺原樣へお知らせ申したいものぢやなあ。（ト此時熊平が落したる密書を見て取上げ、）こりやこれ、最前熊平とやらが、渦丸とかいふ海賊へ送りしといふ密書なるか、こりやよいものが手に入つたわいなあ。

トきつと云ふ、此時以前の熊平、鳥居の内よりきよろ／＼と手紙を搜しながら出來り、是れを見て、

熊平　南無三大事の。（ト取りにかゝるを、娘さゝへて、）

娘　こりや、何となさんすぞえ。

熊平　何とするもねえものだ、おれが落した大事の密書。いやさ、大抵搜したその手紙、落したと云つ

て、何と旦那へ言譯があるものか、おぬし達が持つて居ても、役にも立たぬ品だ、早くこつちへ返してくりやれ。

娘　いや、こりやめつたにはお手渡しはいたしませぬ、以前の御主人淺原樣へ、お屆け申す心ぢやわいなあ。

熊平　いや、こいつが〳〵、甘く出りやあ附上りのした其の阿魔、渡さにやおれが斯うして取るわ。

ト引掘ゑ、無慚に取りにかゝるを娘逃廻りながら奪ひ合ふ。此時に以前の渚出來り、此體を見て熊平を突廻して當てろ、是れにてムヽと倒れる、娘は渚を見て、

娘　や、あなたはさつきの御女中さま。

渚　何やら怪しい密書とやら、ちよと是れへ見せやいなう。

娘　則ち密書は、是れでござんす。（ト渚に渡す。）

渚　「岩上角左衞門樣へ密書渦丸。」（ト封を切り、）何々、「そこ元樣よりお頼みの一條、委細承知仕り候、我等儀早速彼の地へ罷り越し、御着船相待ち居り候、其節尊君樣の御計略にて、御歸船の砌にはお召し連れなされ候上は、手前が手段を廻らし首尾よく篳篥を奪ひ取り、竊にお手渡し仕り候以上。」すりや北條殿の家臣たる、岩上殿より海賊の渦丸とやらへ、竊に送りしこの密書。

ト思入あつていふ、熊平心附きたる思入にて起き上り、

熊平　それを遣つちやあ。（ト取りにかゝるを捻ち上げ、）

渚　こりや面白さうな手紙の文言。

娘　わたしの手より、淺原樣へ。

渚　渡すは忠義、こやつは不忠。

熊平　何を。（ト振解き、渚にかゝるをちよつと留める、此時鳥居の内より中間二人出來り、是れを見て、）

兩人　熊平、われが此體は。

熊平　いゝ所へ二人のもの、加勢だ〳〵。

兩人　合點だ。（ト是れより神樂になり、渚に打つて掛る、熊平は田舍娘にかゝり立廻りあつてきつとなり、）

渚　少しも早う、此の密書を。（ト密書を田舍娘に渡す、）淺原樣へお目に掛けや。

娘　何から何までお心添へ、有難う存じます、お禮は重ねて。

ト花道へつか〳〵と行きかゝる、熊平振りほどき、

熊平　われを遣つちやあ。

ト行きかゝるを、渚引附けてきつと留める、田舍娘は花道へ躓く、是れを木の頭、双方よろしく

ひやうし幕

明石浦難船の場

二幕目

〔役名――浅原造酒之進、岩上角左衛門、桑名屋徳藏、親仁徳太夫、若黨正作、同伴作、琵琶法師浪市實は海賊鳴戸の渦丸、船頭、海賊の手下、水主等。〕

（濱邊の場）――本舞臺一面の平舞臺、うしろに高き浪手摺、向う黒幕、爰に一、二、三の漁師實は海賊の手下、櫂にて雜物をかつぎ立掛り居る見得、浪の音にて幕明く。

一　これ浪藏、手めえ昨夜は何處へ仕掛けた。

二　淡路島へ金毘羅船が風待をしてかゝつて居るゆゑ、路用の金をしてやらうと、商人船へ姿を替へ入込んで見たところ、田舍道者ばかりで、まぶな仕事にもならなんだ。

三　おいらは五作や六藏と言合せて、湯船をこしらへ兵庫の港へ押掛けたが、それもやつぱりはした仕事。

一　其中ぢやあまだおらあ仕合せだ、おれが嚊あを玉に遣ひ酒船へ船饅頭で押上り、一日さづけて居

る中に、百兩ばかりどめて來た。

二　そいつァうまい仕事をしたなあ、何でも女を相手にしにやあ、たんまりとした事は出來ねえ。

三　それぢやあうめえ仕事をしたなあ、そりやさうと、こつちの頭も西國から鎌倉へ下る武家の船へ乘込んで、大きな山があると聞いたが、便りでもあつたかな。

一　む丶、今朝頭から手紙が來たが、この風待を幸ひに明石の浦で仕事をするから、烏帽子岩まで迎ひに來いといふ言附けであつた。

三　それぢやあ盜んだ雜物を、元船へ持込んで、飯でも喰つて出かけよう。

二　今朝の仕事は大きな仕事で、一番これが目と出りやあ、こちとまで褒美の分けめえ、しつかりになるさうだ。

一　其替りまた遣り損なへば、相手は侍命づく、何でも湯船へ乘込んで、それといつたら法螺を合圖に、頭の船へ仕掛けよう。

二　然し頭の事だから、案じることはなからうが、たゞけんのんなのは船頭が、桑名屋の親子とやら。

三　德藏だらうが杢藏だらうが、水の上ぢやあ海鱸も同然、年中海で働くこちとら。

一　もしも叶はぬ其時は、水底を潛つて碇綱を切拂ひ、船底をくり拔いたら、骨も折れずに皆殺し。

三 それぢやお是れから飯でも喰ひ、思ひ〳〵に姿を替へ、

二 商人船や湯船と見せ、西國船の前後を取巻き、

一 頭の知らせがあつたらば、不意のことゆゑ勝利は必定。

二 ちつとも早く、支度をなし、明石の浦へ。

三人 出掛けようか。

ト浪の音にて三人上手へはひる。是れにてよろしく黑幕切つて落す。

(明石浦風待の場)――本舞臺一杯に誂への丸物の菱垣船、上下三つ鱗の紋附きし幕を張り、後に帆柱船道具よろしく、後舞臺前とも誂への上げ下げ仕掛の浪手摺、向う打拔き淡路島夜の遠見、日覆より月をおろし、總て明石浦の體、船の眞中に毛氈を敷き、爰に岩上角左衞門、野袴ぶつさき大小、下手に淺原造酒之進、同じく野袴、ぶつさき羽織、大小にて住ひ、ずつと下手に桑名屋德太夫、白髪かつら、筒袖の上に大縞の褞袍、船頭のこしらへ、後に若黨伴作、袴一本差しにて、正作同じく若黨にてよろしく控へ居る、浪の音にて道具納まる。と誂への合方になり、

造酒 こりや德太夫、改め申すに及ばねど、此度われ〳〵主人時政公の仰せを蒙り、はる〳〵安藝の國

へ赴きしは、安元二年の頃小松の內府重盛公、安藝の國嚴島へ奉納ありし平家の重寶朝霧の篳篥懇望あつて、斯くいふ淺原造酒之進、これなる岩上角左衞門殿兩人使者に罷り立ち、彼の地の別當に面談なし、金子千兩を寄進いたし、望み受けたる篳篥、かゝる品を守護なせば、首尾よく鎌倉へ着船までは、大事の渡海と申すもの。

角左　それと申すも今年皐月下旬の頃、右大將賴朝公富士の裕野に御狩の催し、猶も武運長久の爲鶴ヶ岡の寶前にて、時政公は申すに及ばず、工藤、秩父、和田の面々舞樂の調べをなし、神慮をいさめ奉らんと、かねぐ沙汰あること、斯かる晴れの舞樂なれば、朝霧の篳篥を其時奏して主人には、われぐが立歸るを、定めしお待兼ねあるは必定。

造酒　一刻も早く鎌倉へ着船を願ふ所、これなる明石の海上へ參ると其儘碇をおろし、心ならざる船繫り。

角左　難風なれば是非もなけれど、かゝる疊を敷きたる如く、浪靜かなる今宵の日和。

伴作　夜中とは申しながら、これが世にいふ日本晴れ。

正作　誠に海は穩かなるに、出船がならぬと申すは、

兩人　如何いたしたことでござる。

徳太　御尤もなるお尋ねながら、内海や入江と違ひ大海を乗つ切るには風がなくては越されませぬ、今宵のやうな風のない時は、帆はきかず汐に引かれ、得て鯨が浮き難儀に逢ふは往々あること、然しそれも明朝まで、夜明けか遅くも五つ時には、追手に風が變りまする、私親子がお出入りの北條樣の御用船、粗相があつてはならぬゆゑ、大事を取つたこの風待ち、悪いやうにはいたしませぬ、それゆゑ今宵は明石の浦へ、船繫りをいたしました。幸ひ月もござりますれば、濱邊の景色を御覽あつて、御休息遊ばしませ。

造酒　成程由井ヶ濱の廻船問屋で、指を折らるゝ桑名屋徳太夫が船の掛引、われ〳〵が批判いたすは、下世話に申す疊水練、明朝追手に替るとあれば、今宵はそちが詞に任せ、打ちくつろいで休息なさん。

徳太　それがよろしうござりまする。（ト此内造酒之進濱邊を眺める思入あつて、）

造酒　いや、岩上氏御覽なされい、鎌倉表と事替り、名におふ播州一の名所、折柄月影に一目に見渡す須磨明石、よい眺めではござらぬか。

角左　何さま、歌俳諧を御熱心の其許などにはよい慰み、拙者などの不風流の目から見ては、左のみには存じませぬて。

造酒　何さま文武兩道は譬にもいふ車の兩輪と申せども、當節がらでは武道が第一、文の道は入らぬこと〻仰せあるお人もござれど、他家は知らず當家にては御前樣が御熱心ゆゑ、お側勤めいたすものは御指南うけて誰々も、詩歌の道を學びまするが、彼の古今の序にも記せし如く、目に見えぬ鬼神を退治、猛き武士の心を和らぐるは、こりや敷島の道の德、深くはいらぬものなれど、腰折一首位は心掛けござつても、よろしからうかと存じまする。

角左　身共と違つて其許は、日頃主君に媚び諂ひ、お髭の塵を取らる〻ゆゑ、詩歌の道まで御指南うけ人に勝れて上手とやら、お羨しいことでござる。

德太　いや淺原樣の仰せの通り、年中渡海をいたしまする船頭の私にさへ、須磨明石の景色には實に見あきがござりませぬ。

正作　何さま中國一の名所、されば式部が源氏にも、須磨明石は一段と手柄があると申すこと。

伴作　こりや〳〵正作、そりや貴樣の覺え違ひだ、賴朝公がこれまでに別けて武功を顯はしたまふ、源氏の手柄と申すのは、須磨明石ではない八島壇の浦だ。

正作　また伴作が何を言やる、この身共が申す源氏とは、淸和源氏のことではない、石山寺で紫式部が書綴りたる五十四帖。

伴作　またまたそんな横外をいふか、身共だからよけれども、脇でそんな事を言はぬがよい、お館の外聞だ、これ石橋山で頼朝公が御旗上げの其折は、則ち源氏の白旗だ、なに紫のことがあるものか、そしてやうやう五萬か七萬、五十四萬などゝいふお味方があるものか、まだ其節はさうは勢ひが出ぬ筈、後學の爲だ聞かつしやれ、源氏は白平家は赤、馬は栗毛牛は黑、象は鼠の濃いのだわ。

正作　いやさ、その源氏とはこつちの源氏は。

造酒　こりやこりや正作控へぬか、源氏の講釋は無駄なことぢや。

正作　それぢやと申して。

造酒　はて、石山硯の牛經文、控へて居よ。

正作　はツ。（卜正作是非なく控へる、角左衞門思入あつて、）

角左　主が主なら家來の正作までが、源氏の講釋聞くも大儀ぢや、拙者めは廬へ參つて一睡いたさん。

卜角左衞門立上る、造酒之進思入、德太夫留めて、

德太　こりや岩上樣、暫くお待ち下さりませ。

角左　むゝ、何ぞ用か。

徳太　悴徳藏が御兩所樣へ、御酒一献差上げたいと肴をこしらへて居りますれば、どうか是れにおいで下さりませ。

角左　酒は身共大好物ゆゑ、志しとあらば、是れにて馳走になるであらう。

徳太　それは有難うござりまする。こりや水主のもの、支度がよくば御酒を早く。（ト此時下手にて、）

皆々　畏りました。

船頭兩人　旦那方、眞平御免下さりませ。（ト船頭は造酒之進角左衞門の前へ廣蓋を出す。）

徳太　船中の事なれば、ほんの悴が摑み料理、何の風情もござりませぬが、取り立ての魚ゆゑに、新らしいのが御馳走でござりまする。

造酒　これは〳〵丁寧なる馳走、どれも〳〵鮮魚のみ、定めて厚味なことであらう。

角左　取分けて濱燒は、鳴戸越しの鯛であらう、これは見事なことでござる。

伴作　然し兎も角も鎌倉と事替り、不自由なるこの船中、味淋や醬油が惡いゆゑ、煮たものはどうでござらうか。

○　いえもう、味淋醬油の類ひまで、皆品を選んで鎌倉から、積み込んで參りましたれば、

□　手際は惡うござりますれど、味に替りはござりますまい、まあ召上つて御覽下さいまし。

造酒　なか／＼以て鎌倉の料理方など、及びもなき徳藏が庖丁、賞翫いたすであらう。いざ、岩上氏お開きなされい。

角左　然らば御免を蒙つて、大杯で開きませう。（ト大きな杯を取上げ、）伴作、酌いたせ。

伴作　はツ。（ト伴作酌をする、角左衞門呑んで、）

角左　淺原氏、お先へ頂戴いたしたれば、いざ、御順杯仕つる。（ト杯を出す。）

造酒　然しこれはあまり大杯。

角左　なに、上る口でありながら、上るどころではないであらう、はゝゝゝ。

ト造酒之進杯を取る、正作酌をする、此時琴の音聞ゆるに伴作思入あつて、

伴作　もし旦那樣、海上に珍らしい琴の音がいたしまする。殊に美音でござりまする。

正作　露のひぬ間と申す文句は、慥朝顏と申す端唄でござりまするな。

角左　徳太夫、何れで彈くのぢや。

徳太　隣りの船で、十七八の娘が彈いて居ります。

角左　むゝ、負けぬやうに此方でも、何ぞ彈かせたいものぢやが。

伴作　旦那樣、浪市に琵琶を彈かせては、如何でござります。

角左　おゝ、さつぱりと忘れて居つた、彼れを呼出し何ぞ彈かせい。

伴作　畏りました。（ト伴作下手幕張りの内へはひる。）

造酒　岩上氏、浪市とは何者でござるな。

角左　鎌倉在の產れにて、浪市と申す座頭、嚴島逗留の節療治させしが緣となり、故鄕へ便船いたしくれと賴むに、幸ひ拙者が持病、鍼治をよくいたすゆゑ、召連れてござる。

造酒　船中醫者に乏しければ、よく其者をお連れなされた、拙者も療治を賴むでござらう。

ト浪の音、合方にて、下手より伴作袋に入りし琵琶を持ち、跡より琵琶法師浪市、實は海賊鳴戸の渦丸、好みの頭巾袴なり座頭のこしらへ、右の琵琶を受取り、探り〳〵出來り、

伴作　浪市めを召連れましてござります。

渦丸　どなた樣も、眞平御免下さりませ。（トよき所へ住ふ。）

角左　こりや浪市、是れにござるは身共が相役、淺原造酒之進殿、今宵風待ちの徒然に只今一獻催す所此場の興にそちが琵琶を承はりたい、何と一曲彈いて聞かしやれ。

渦丸　いやめつさうなことおつしやりませ、なか〳〵以てあなた方へお聞きに入れるやうな腕前ではござりませぬ、琵琶を持つて步きまするは、療治のない時の小遣ひ取り、瞽女節にも劣りますれば

御免なされて下さりませ。

伴作　いや〳〵それはいらぬ遠慮、あれあの通り隣りの船でも琴を彈けば、こちらでも何ぞ彈きたいものぢや。

正作　拙き業も時の興、辭退いたさず彈いたがよい。

徳太　旦那方があのやうにお好みなされば、座頭どん、何ぞ一つ彈かつしやれ。

渦丸　其やうにおつしやるもの、勿體附けるは却て失禮、ほんの此場のお慰み、てんぼの皮とやりませう。

徳太　さあ〳〵早く。

皆々　所望だ〳〵。（ト是れより渦丸の浪市、袋の内より琵琶を出しよろしく彈いて、平家を語りしまひて、）

渦丸　是れで御免下さりませ。

角左　いや、面白い事であつた。

渦丸　面白いか面白くないか、びつしより汗になりました。（ト浪市汗を拭く思入あろ。）

正左　何と造酒之進殿、よい慰みではござらぬか。

造酒　いやもう、船中に面白き琵琶を調べ、ほとんと感心いたしました、然し盲人の音聲は、自然と五

音譜子が替るものなれど、今浪市が一曲に、少しも五音の替りなきは。

渦丸　え〻。（トぎつくり思入、造酒之進浪市へ目を附け、）

造酒　そちは、兩眼見ゆるであらうな。

渦丸　いえ、皆目見えませぬ。

造酒　見えぬと申すか、はてなあ。（ト造酒之進思入、角左衞門こなしあつて、）

角左　こりや〳〵浪市、最早其方に用はない、次へ立て〳〵。

渦丸　は〻、左樣なら御免下さりませ。

ト浪市の渦丸立上り行きかける、造酒之進正作へ目配せする、これにて正作浪市の足許へ杯臺を出す、浪市これをよけて行くを、

造酒　こりや〳〵、待て〳〵。

渦丸　はい、何ぞ御用でござりまするか。

造酒　ちと尋ねたいことがある、これへ〳〵。

渦丸　すりや私めに。

造酒　如何にも。（ト浪市ぢつと思入、誂への合方になり、よき所へ住ふ。）こりや浪市、その方は鎌倉の者ぢ

渦丸　やと申すが、何者の忰なるぞ。

造酒　へい、私は鎌倉在今津村の百姓孫右衛門の忰にござりまする。

渦丸　して其方は何歳になるぞ。

造酒　當年十九歳になりまする。

渦丸　兩親は未だ達者で罷り在るか。

造酒　七歳の時父に別れ、只今にては母一人、外に頼るべき者もござりませぬ。

角左　はてさてそれは不便なことぢやな。

造酒　拙者宮島逗留中、彼れが身の上を承はりしが、世にも哀れな事のみゆゑ、不便と存じ鎌倉まで送り屆け遣さんと、便船いたさせ參つてござる。

渦丸　流石は岩上角左衛門殿、五體不具なる彼れを憐み仁心厚きなされ方、人は斯くこそありたきもの。して、浪市には如何なる仔細で、はる〴〵と旅行はいたせしぞ。

申し上げるも面目なき、此の浪市が身の不幸、お聞きなされて下さりませ。（ト合方になり、）五ツの年に疳の蟲にて終には兩眼とも潰れ、それを苦にして親仁が三年あまり大病を煩ひ、田地までも苦代なし、高い藥を呑ませましたが、それさへきかず果敢ない最期、野邊の送りもそこ〳〵に

烟りも細き親と子が生計に迫り母親は、爰やかしこへ雇ひに出で、また私は療治を覺え十の年から出ますれど、年も行かざる小腕には一日歩いて五十か六十、百とまとまるお錢も取れねば一人の母も過されず、年々足らぬ身代に溜るものは埃と借り、微塵積つて山のたとへ、返す手立も詮方盡き、鍼の師匠が京都にて檢挍になつてござるゆゑ、これへ賴つて無心を言ひ、金子を借りて國へ歸り母の苦勞を助けんと、京まで參る道々も療治をしたり琵琶を彈いたり、僅な錢を路用となし、はる〴〵參りし甲斐もなく、尋ねて行つた其日が恰度師匠が死んだ七日の逮夜、是非もなく回向なし、望みも叶はず本意なき思ひ、せめては藝州嚴島の辨財天へ參詣なし、神の助けを願はんと、旅から旅へ一筋に杖を力にやう〳〵と宮島まで辿り着き、神前にお籠りなし琵琶の修行に信心こめ、又は旅人の療治をして逗留いたし居たるうち、岩上樣のお療治を計らずいたしたが御緣となり、御便船をお許し下され、一錢いらず鎌倉へ歸られまする嬉しさは、どのやうでござりませう、憚りながら旦那樣、御推量なされて下さりませ。（ト涙市よろしく思入あつていふ。）

造酒　段々と身の上を聞けば聞くほど哀れな話し、目の不自由も厭はずに、母の苦勞を助けんと、世にも稀なる孝行者、造酒之進感心いたした。

德太　子を持つた身は取分けて、我が子が斯ういふ身の上なら、どうであらうと思ひやられて、座頭ど

んが不便でござる。

伴作　それに又氣の毒なは、師匠を尋ねてはる〴〵と、京まで行つた甲斐もなく。

正作　望みの金子が手に入らねば、故郷へ歸つて母親に、そちが土産がないといふもの。

渦丸　一ツ叶へば又二ツ、御便船を願ひまして、思はず歸るは嬉しけれど、望みの金子が手に入らねば
　それが悲しうござりまする。（ト造酒之進思入あつて、）

造酒　いや其歎きには及ばぬぞ、そちが母への土産の金は、身共が合力いたしてくれる。

渦丸　すりや私へ御合力を、えゝ、有難うござりまする。

角左　それは〳〵お氣の毒な、定めて彼れへの御合力は、包み金でござらうな。

造酒　いや、延金でござる。浪市近う。

渦丸　はツ。（ト浪市造酒之進の傍へ澁々寄る。）

造酒　心をこめし身共が合力。（ト刀をすらりと拔き、浪市の前へ突附ける。）辭退いたさず納めてよからう。
　ト浪市びつくりし、目をそつと開き刀を見る。徳太夫これを見て、

徳太　扨こそ座頭は。

渦丸　えゝ。（ト目をふさぐ。）

德太　兩眼見ゆる上からは、正しくおのれは紛れもの。

ト浪市目を開き、以前の琵琶仕掛物にて、其の仕込みを拔き造酒之進へ立寄る、造酒之進刀にてちよつと立廻り、仕込みを打落す、是れにて德太夫浪市の襟上を取り引附ける、角左衞門立掛る、造酒之進きつと留める、

こりや桑名屋親子が揖を取る、此の船中へ乘込んだ大膽不敵の盜人め、五十年來海上を家とする德太夫、ついぞ是れまでこんな目に出逢うたことのねえおれだ、終り初もの生けては返さぬ、殺した跡では年寄りだけ念佛位は唱へてやるから、其の本名を名乘つておけ。

正作　但し言はずばそれがしが、拷問なしても言はせるぞ。

水主皆々　其彌次馬はおいら達。

德太　さあきり／＼と、

皆々　名乘つてしまへ。

渦丸　えゝやかましい、靜かにしねえか、そんなに大きな聲をせずと、もう斯うなつたら隱しはしねえ慾に目のねえ座頭は僞り、頭巾を取りやあ海賊だ。

ト浪市の渦丸頭巾を取り、投げると好みの鬘、みな／＼見て、

皆々　扨こそなあ。

渦丸　其名も音に聞いたらうが、兵庫裏から須磨明石、四國九州西國の渡海をあての鳴戸の渦丸、商人船へ忍び込み盗んだ金も何萬兩、色と酒とに遣ひ捨て、一文たりとも身に附けぬ恵みで脱れし天の網、それも時節でかゝつたら、もう是れまでのおれが命、二抱ある帆柱も颶風を喰やあ折れる道理、毛綱をかけて縛るとも石を抱かして責めるとも、死ぬと碇をおろしたからは、逃げも隠れもしやあしねえ。（ト渦丸きつと見得、角左衞門思入あつて、）

角左　やあ、かゝる賊とは露知らず、親孝行な座頭と思ひ便船させしが我が誤り、こりや伴作、渦丸めを逃さぬやう、胴の間へ引据ゑおけ、身共が成敗いたしてくれん。

伴作　すりや渦丸を、胴の間へ、

角左　必らず逃すな。

伴作　心得ました。（ト伴作立掛るを、）

造酒　こりや、伴作待ちやれ。

伴作　はツ。

造酒　岩上氏へ御苦勞を、掛けるまでのことはない、此の成敗は身共がいたす。

角左　でも、それでは拙者めが。

造酒　はて、お構ひなくとも、お控へ下され。

角左　む﹅。（ト角左衞門渦丸と顏見合せ控へる、造酒之進きつとなつて、渦丸に向ひ、）

造酒　こりや渦丸とやら、一命賭けて其方が、此船へ入込みしは、金銀衣類の類をば、よも盗みにはまゐるまい。

渦丸　何と。

造酒　嚴島より北條家へ、望みかけたる天下に類なき夫の名器、朝霧の篳篥を盗む所存であらうがな。

ト此内造酒之進、懷より錦の袋に入りし篳篥を出し見せる、渦丸これを見て、

渦丸　流石は淺原造酒之進、よくもおれが心を察した、如何にもその篳篥を盗みに船へ入込んだのだ。

造酒　世にも稀なる名器ながら、海賊などが奪ひ取り何の益なきこの篳篥、何者に頼まれて盗みに是れへ參りしぞ。

渦丸　高金になる品と聞き、金が欲しさに盗みに來たのだ、誰も頼んだ者はねえ。

ト角左衞門思入あつて、

造酒　いや、無いとは申されまい、其頼み人は爰らあたりに。

角左　や。
造酒　さあ、有體に白狀なせ。
渦丸　いゝや、知らねえ、覺えはねえ。
正作　言はずば拙者が、拷問なして。（ト正作立掛る、德太夫留めて、）
德太　いや、この御詮議は船主の、わしにお任せ下さりませ。（ト德太夫渦丸の襟上を取つて引据ゑる、渦丸振放さうとして放れぬ思入、）さあ、動かれるなら動いて見ろ、年は取つても揖柄を握る覺えの力瘤何者に賴まれたか有體に言へばよし、言はねば息の根止めてくれるぞ。さあぬかせ〳〵。えゝ、ぬかしやあがれ。（ト德太夫渦丸をこづく、渦丸思入あつて、）
渦丸　あいたゝゝゝ、最う斯うなつたら仕方がねえ、何もかも言つてしまふから、とつさん此手を弛めてくんねえ。
德太　さあ、ぬかすなら弛めてくれるわ。（ト德太夫手を放す。渦丸痛き思入、）
造酒　して、盜みくれよと、
兩人　賴みしは。
渦丸　外でもねえ、岩上角左衞門樣。

皆々　やあ。

角左　こりや〳〵何を申す、身共が左樣な事を。

渦丸　さあ覺えのねえは知れたこと、ばれたらおめえの頼みだと言つてくれろと頼まれた。

造酒 正作　して、其頼み人は。

渦丸　いかにも、淺原造酒之進樣だ。

造酒　何と申す。

渦丸　若し詮議になつたらば、岩上樣に頼まれたと言つてくれろと言はれたが、何科のねえ其人へ、なんぼおれが盗人でも、どう言ひがけがなるものか。

角左　すりやそれがしへ無實の言懸け、いたしくれよと頼みしとか、見下げ果てたる造酒之進殿、扨はこなたが彼れを頼み、その篳篥を盗みとらせ、隱しおかん所存よな。

造酒　こりや其許とも存ぜぬお詞、拙者が預かる篳篥を盗み取らん所存ならば、何とて彼れを頼みませうぞ。

角左　いや〳〵左にあらず、我が手に盗まば命がござらぬ、盗賊入りて盗まれなば命に別條ござらぬわ。

造酒　貴殿は左樣に言はるゝが、大切なる此の篳篥、たとひ盗賊に盗まるゝとも、命捨てねば役目の越

度申譯は相立たぬ、死するを承知で賊を頼み、何故あつて盗ませませうぞ。

角左　む丶。(トつまる。)

造酒　斯程の事は其許も御推量あるべき筈、よも御疑念はござるまいな。

角左　む丶、疑ひは晴れ申した。

造酒　然らば彼れが申懸け、重々憎き鳴戸の渦丸、此場で成敗いたしくれん。

角左　いや、其の成敗は拙者めが。(ト立掛るを留めて、)

造酒　いや貴殿は頼まぬ、お控へ召され。

渦丸　さあ切るなら早く切りなせえ、尾鰭はけちな小鯛だが、鳴戸を越しやあ骨がこはい、三ツ骨かけてすつぱりと、うしほになるやう切らつしやい。

造酒　言ふにや及ぶ。(ト造酒之進立掛ろ、此時下手にて、)

徳藏　あいや、其の御成敗、暫くお待ち下さりませ。

造酒　や、あの聲は、

皆々　正しく徳藏。

ト誂への合方になり、下手幕張りの内より、桑名屋徳藏、柿の筒ッぽ、脚絆好みの着附、船頭のこし

らへにて出來り、下手に住ひ、

德藏　最前よりの一部始終、殘らず承はりましてござりまする、先づ〱お待ち下さりませ。

造酒　やあ大切なる篳篥を、盗み取らんとなすのみならず、我に無實の言懸けなせし海賊鳴戸の渦丸を成敗なすをなぜ留めしぞ。

德藏　御尤もではござりまするが、大切なる篳篥を御所持あつての御渡海なれば、船中にて人を害し、若し血汐の穢れにて龍神の祟りを受け、海上に凶事あらば、あなたばかりか御家の瑕瑾、鎌倉表へ御着まで船中無事を祈りますれば、只此儘に彼れが命、德藏に下さりますやう、偏にお願ひ申し上げまする。

造酒　何さま血汐をあやなさば、龍神の祟りと聞いては大事の渡海、助けがたき奴なれど、德藏そちが詞に免じ、彼れが一命助けくれん。

德藏　すりや德藏が命乞ひ、お聞濟み下さりますとか、え丶、有難うござりまする。

德太　然し此儘助けおかば、西國通路の船へ入込み、盗みをなせば渡海の妨げ。

正作　血汐の穢れを厭ふなら、以後の見せしめ簀巻きにして、此の荒海へ打込まん。

○船頭　成程これはよい御思案。

船頭 皆々 どれ、われ〳〵が。（ト船頭みな〳〵立掛るを、德藏留めて、）

德藏 あこれ〳〵、それも益なき殺生だ、是れが寶を奪はれたら、假令龍神の祟りあるとも、助けおけぬ奴なれど、只入込みしといふばかり、寶に恙あらざれば、助けてやるが寬仁大度。

ト德藏思入あつてきつと言ふ。

船頭 皆々 それだと言つて。

德藏 船の大事を思はぬか。（ト是れにて皆々控へる。）

角左 流石は德藏よく留めた、身共も左樣存ずれど、斯かる賊とも知らずして便船させし誤りある故、口を噤んで罷りありしが、大切なる篳篥を守護なしての渡海なれば、只穩便にしくはござらぬ。

造酒 これといふのも情ある、德藏が詞ゆゑ、旣に切られて死ぬ所、危ふい命を拾うたな。

ト渦丸思入あつて。

渦丸 是れまで度々捕まつて危ふい命を脫れたが、算へて見れば今夜で七度、これが別れと思ひの外不思議に又も助かつたは德藏親方が蔭ゆゑ、命を元手に海賊も死にたくねえのが世の人情、助けられたる此御恩は、一生忘れはいたしません。

德藏 見りやあこなたもまだ年若、老先き長い身の上で、盜みをせずとも此世の中、渡られねえことも

あるめえ、阿波の鳴戸の大灘も渡れば渡る人の一心、向後心を入替へて、同じ海上働くなら、海賊よりも船乘り渡世、そりやあたゞ取る錢程に榮耀榮華は出來めえが、日和仕事で一拍子ひやうしがよけりやあ一夜の內に、百里の海も乘ッ切る船乘り、浪より荒い錢にもなりやあ、危ふい船を乘替て、惡いことは言はねえから、堅氣になつて辛抱しねえ。

渦丸　命乞ひの其上に親身も及ばぬその異見、こゝらで心を入替へにやあ、入替る時がねえ、是れまで積る惡業は攝津灘へ流してしまひ、明日から堅氣の船乘り渡世。

德藏　そんならいよ〳〵心を入替へ。

渦丸　眞人間になりませう。

德藏　それで助けた甲斐もある、少しも早く我が家へ。然し艀の船がなくちやあ。

渦丸　なに、明石までは一里あまり、泳いで行つても行かれます。（ト渦丸立上り向うを見て思入）やあ俄に西へ雲立ちしは、あれぞ正しく颶風のしるし。

皆々　なに颶風とは。（ト皆々思入あつて、此透きを窺ひ、渦丸有合ふ篳篥を奪ひ、）

渦丸　忝ない。（ト口に啣へ海へ飛込む、烈しき水音、水の花ぱつと立つ、皆々びつくりなし、）

角左　やゝ、こりや篳篥を。

皆々　渦丸が。

造酒　奪ひ取りしか、ほゝほい。

ト造酒之進びつくりなす、此時渦丸懐より密書を落し行きしを、德藏上書を見て懐へ入れる。

德太　それ水主のもの、飛込んで逃さぬやうに追つかけろ。

船頭皆々　合點だ。(ト船頭みな〳〵海へ飛込まうとするを、)

德藏　やあうろたへて怪我するな、水練得たる海賊渦丸、水底潜つて逃行けば何れへ行きしか行方は知れぬ。

皆々　それだと言つて。

德藏　はて此德藏が料簡あれば、おれに任して控へて居やれ。(ト德藏皆々を留める。)

角左　いやなに造酒之進殿、此度主君の命に依り、彼の篳篥を受取りの使者に立ちしは兩人なれど、道中守護は貴殿の役目、それををめ〳〵奪ひ取られ、殿へ言譯いかゞ召さる。

造酒　はツ、先刻も申す通り奪ひ取られし身の越度、きつと詮議し知れざる時は、切腹なして果てるより、上へ對して言譯ござらぬ。

角左　然らば上への言譯に、此場に於て切腹召され、朋友の誼それがしが介錯いたし申さう。

ト我が差して居る七首を扇へ載せ、造酒之進の前へ置く、

正作　すりや旦那樣には申譯に、此場に於て御切腹とな。

伴作　今も立派に言はれしからは、卑怯にいやとも言はれまい。

造酒　いや、卑怯未練な心はないが、いまだ切腹は仕らぬ。

角左　あの只今も申譯に、切腹なすより外はないと、言はれし口も乾かぬうち、命が惜しうなられしか

造酒　命は上へ捧げしもの、さら〳〵惜しうはござらぬが、切腹いたす謂れがござらぬ。

角左　やあ大切なる篳篥を盜賊に奪はれながら、切腹いたす謂れがないとは、如何なる仔細か承はらん。

造酒　別に仔細もござらぬが、其の預かりの篳篥に、別條ござらぬゆゑ。

角左　あのたつた今渦丸が奪ひ取りし篳篥に、別條がないとは、そりや如何に。

造酒　則ち篳篥は、肌身放さず是れにござる。

ト造酒之進懷中より、袋に入りし篳篥を出して見せる、角左衞門びつくりして、

角左　そんなら今の篳篥は。

造酒　斯かる事もあらんかと、豫てこしらへ置きたる、ありや贋物。

角左　えゝ、さうとは知らず。（ト角左衞門殘念なる思入、造酒之進角左衞門を尻目にかけ）

造酒 盗んで行きし渦丸は、たはけた奴ではござらぬか、はゝゝゝ。

ト造酒之進あざ笑ふ、角左衛門口惜しき思入、徳太夫こなしあつて、

徳太 扨は疾より座頭をば、怪しき者と御存じあつて。

造酒 そも乗船の砌より、斯かる企みもあらんかと竊にこしらへ置きたる篳篥、此の計略の軍師といふはそちの忰の徳藏なるわ。

徳太 そんなら忰も海賊と、疾うから知つて居つたるか。

徳藏 謀事は密なるをよしと旦那様と只二人、竊に贋物をこしらへ置き、企みの裏をかきしゆゑ、大切なる篳篥に恙のなきは天の加護、磁石の針の眞直ぐな心でなければ大灘の、此の荒海は脱れませぬ。

正作 仔細存ぜぬ拙者などは、どうなる事かと案じたに、徳藏どのゝ働きにて、無事に納まる此場の一埒。

伴作 納りがたきは此の差添、折角勸めた切腹も、今では無駄となつたるか。

徳藏 いや、それは無駄にはなりますまい。

角左 なに、是れが無駄にはならぬとは。

徳藏　失禮ながら岩上樣、あなたが此場で御切腹なされずばなりますまい。

角左　やあ慮外なる桑名屋徳藏、我に向つて切腹なせとは。

徳藏　鎌倉へお取寄せの大切なる篳篥、鳴戸の渦丸を語らひ、奪ひ取らんとなしたる大罪、造酒之進樣の思慮深く恙なければこそよけれ、若し海賊に盜まれなば、北條樣のお家の瑕瑾、數代御扶助を受けながら、お主へ對して不義不忠、申譯には岩上樣お腹を召さずばなりますまい。

角左　やあ、海賊を語らひ篳篥を奪ひ取らせんなんぞとは、此身に聊か覺えのないこと、言掛けひろぐ憎くき奴。

伴作　但しは主人が頼みしといふ、何ぞ證據でもあつての事か。

角左　さあ證據があらばそれを見せよ。

伴作　よもや證據はあるまいが。

徳藏　慥に證據がござりまする。

兩人　して、其證據は。

徳藏　則ちこれでござりまする。（ト以前拾ひし密書を出し見せる、角左衞門ぎつくり思入、）造酒之進樣、これ御覧下さりませ。（ト造酒之進に渡す、取上げて見て、）

造酒　なに、「鳴戸の渦丸どのへ、岩上角左衞門より。」

角左　どうしてそれを。（ト取りに掛るを拂ひのけ、密書をさつと開き、造酒之進讀み終つて、）

造酒　やゝこりや、篳篥を盜みくれよと、海賊渦丸へ頼みし一書、疑ひもなき貴殿の自筆。

角左　や。

造酒　かゝる密書の證據あつても、貴殿は知らぬと言はるゝか。

角左　さあ、それは、

造酒　お頼みあつたでござりませうな。

角左　さあ、

造酒　但し知らぬと言はるゝか。

角左　さあ、

兩人　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。

徳藏　斯う顯れたら岩上樣、いざ御切腹なされませ。

ト徳藏以前の扇に載せし短刀を、角左衞門の前へ出す。

角左　むゝ。（ト詰る思入）
造酒　朋友の誼それがしが、介錯仕らん。（ト角左衛門口惜き思入）
角左　もう、此上は。
伴作　造酒之進、覺悟。
　　ト伴作造酒之進に切つて掛る、造酒之進身をかはし、ちよつと立廻つて徳藏伴作を引附け、
徳藏　こいつをせごせば惡事の一々。
伴作　南無三それでは。
　　ト伴作振拂ひ逃げるを角左衛門拔打ちに切倒す、是れにて浪の音はげしく皆々思入
正作　やゝ、こりや岩上樣には。
皆々　何故に。
角左　伴作を手に掛けたは、血汐の穢れに水神の祟りをうけて此の船を、覆さん我が手立。
造酒　扨は其身の惡事ゆゑ、血汐の穢れに海神の力を借りて我々を、此海底の藻屑となさん、おのれが
　企みであつたるか。
角左　如何にも惡事露顯の上は、一命捨てる角左衛門が、今此際に名乗つて聞かせる、元われこそは平

家の陣代山下判官が家臣にて、戰ひ破れ假に降參なせしかど、故主の讐たる北條時政、その國家をば横領せんと、寄り〳〵一味徒黨を集め、企みに邪魔な淺原兄弟罪に取つて落す時は、近きに大望成就、此度の役目を幸ひ箄篥を奪ひ取らせ、それを越度に造酒之進を切腹させん我が手立、それも叶はず其上に共に冥土の道連れに今この船を覆へし、おのれを始め德藏親子片ツ端から皆殺し、それで此身の腹を癒るのだ。

造酒　すりや汝は平家の殘黨にて、御家に讐なす極重悪人、斯くなる上は一人でも百人切つても龍神の祟りは同じ血汐の穢れ、生けては置けぬ覺悟なせ。

角左　何を小癪な

ト角左衞門羽織をぬぎ捨て切つてかゝる、造酒之進も支度をなし兩人立廻り、此時浪の音はげしくなり、舞臺の前後の浪板仕掛にて浮く、造酒之進空を見て思入、

德藏　それ、颶風だぞ。

皆々　合點だ。

ト浪の音、大小の鳴物にて、角左衞門造酒之進立廻り、德太夫は上荷を海へ投げ込む、德藏身ごしらへして、德太夫と兩人して身構へ、帆柱を斧にて切折る、船頭皆々水垢をかへる心にて船底へはひる

船頭は大わらはになり働く、船は廻りながら、角左衞門造酒之進よろしく立廻りて、トヾ脇腹へ突通し刳る、角左衞門立身にてきつとなる。此内船は一杯に納まること。

造酒　主人へ敵たふ天の罰、今こそ思ひ知つたるか。

ト造酒之進刀をぬく、角左衞門がつくりとなる、直に角左衞門の首を打落す、是れにて風の音はげしく、船仕掛にて動く、皆々思入あつて、

德藏　やゝ俄に船のあれ出すは、これぞ正しく、血汐の穢れ。

德太　いや海神の祟りではない、海荒るゝは時の變、今朝明け方にたゞならぬ日の出の色に風と知り、この沖にかゝりしが、かほどの事ではあるまいと見過したは我が誤り、あれ見よ悴、辰巳に當つて一點の雲あらはれしは、人も恐るゝ蝶々雲、半時待たず今の間に覆す高浪が來やうから、覺悟をなして待つて居よ。

ト是れを聞き造酒之進びつくり思入、德藏惡いことを言ふといふ思入にて、

德藏　然し風が眞西ゆゑ、横へなぐれて行くだらう、案じる程のこともあるめえ。

德太　いや／＼五十年來この海を、渡つて暮らす德太夫、これまで數度の難風も宵から知つて脱れたが、今日この雲の出ることを今の今まで知らなんだは、おれも箍がゆるんだわえ。あれ／＼段々雲が

廣がれば、とても岸まで逃げられぬ、是れより先は天運次第、旦那様のお供ゆゑ、大事に大事を取りながら此大難に出逢うたか。

造酒 すりや徳太夫が詞では今をも知れぬこの乘船、陸と違つて海上は何時知れぬ颶風の難風、それを恐れては西海の渡海はならぬことながら、常と變つて大事のお使ひ、命を捨つるも主人の爲さらさら厭ひはいたさねど、大切なる篳篥を此身と共に海底の藻屑となすが殘念至極、徳藏思案はあらざるか。

徳藏 左程の暴風もあるまいと存ずるなれど天變ゆゑ、もしも此船危ふくならば、其篳篥は私が肌身放さず守護なして、板子を力に泳ぎぬけ、命にかけて鎌倉へ、きつとお屆け申しますから、必ずお案じなされまするな。（ト是れを聞き徳太夫嬉しき思入にて、）

徳太 おゝ悴出來した〳〵、海の上はおれよりも、われの方が勝つたやうに水主のものはいふけれど、おれが目からはまだ子供、乳臭えやうに思はれて、もう十年若かつたらおれがと思つて居た所、よくお受合ひ申した、おゝ出來した〳〵。

徳藏 あの篳篥が難船で行方の知れぬ其時は、旦那樣の忠義も立たず、殊にお家の瑕瑾ゆゑ、爰ぞ御恩の送りどころとお受合ひ申したが、一つよければ又一つと、是れまで長の養育うけし親を捨てね

ばならぬゆゑ、それが悲しうござりまする。

徳太　えゝ、それだからまだ子供、乳くせえといふのだ、平地と違つて海上は、いつ何時難風で死なうも知れぬ船乗り生業、出る度毎に今日が別れと思うて居たも五十七年、生き延びたはおれが仕合せ、海上を乘る船頭が船で死ぬのは、武家の戰場、親に心が引かれるやうなそんな未練な根性で此大役が勤まるものか、年は取つても德太夫、おれが代つて勤めるわ。

德藏　其腹立ちは尤もだが、子として親を捨てるのは本意でないも生業づく、おめえがさういふ心なら未練残さず親を捨て、命に賭けて德藏が、此の大役を勤めるから、どうぞわしにさして下せえ。

德太　そんならおれに心引れず、見事われが勤めるか。

德藏　此德藏が篳篥を旦那樣とも、とつさんとも思つてしつかり肌に附け、泳ぎ拔けたら難風でも、そこが血氣の腕限り、仕果せますでござりませう。

造酒　は、賴もしき親子の心底、今一命を捨るともこの篳篥さへ無事なれば造酒之進の役目は立つ、高浪の來ぬ其内に德藏そちに預け置くぞ。（ト造酒之進篳篥を德藏へ渡す。）

德藏　慥にお預り申しました。

ト德藏造酒之進の扱帶を借り、これに篳篥を包み腹へ結び、造酒之進これを見て、

造酒　是れにてやう〳〵安堵いたした。
徳太　いや御安堵はなりませぬ、最前居つたは明石浦、浪にゆられ汐に引かれ楫はきかねば次第に流され、爰は須磨の汐境。
造酒　やゝ最早鳴戸の大灘とか。（ト此時向う遠見打消し鳴戸浦渦の卷きし浪、颶風の黒雲物凄き書割となり、）今一命を捨るのも是れ皆前世の約束ならん、正作そちも覺悟いたせ。
ト兩人肌を脫ぎ、刀を腹へ突立てる。
正作　はゝ、冥土の御供仕つる。（トばた〳〵になり、柿の筒ツぽ外の水主大勢出來り、）
船頭　親方、所詮今夜は。
皆々　叶ひませぬぞ。
徳藏　えゝ、やかましい靜かにしろ、餓鬼の折から海上で、たゝき込んだ徳藏が、一期の働きお目に掛けん。
ト是れにて浪の音、早笛、誂への鳴物になり、浪手摺を上げ下げし、船ゆれながら毀れる仕掛。
徳太　それ高浪だ。（ト船は次第に廻りながら縮心になり、矢張り烈しき鳴物にて徳藏舳の端へ出て、）
徳藏　あれ〳〵、二丈に餘る高浪を、拔けつ潜りつ凌ぎしが、脫れがたなき鳴戸口、一世一度の。（ト向

うを見ろ、此の時風の音はげしく、舳の端より、徳蔵風に吹き倒されし心にて、たぢ〳〵と跡へ下り、どうとなり、直に起上り、手を合せるを木の頭〕大難ぢやなあ。

ト向うをきつと見込みし見得、また早笛、はげしき鳴物にてよろしく

ひやうし　幕

ト此幕誂へ一面に荒浪の道具幕にて、よき程に引栓にて切つて落す。

〔難船の場〕‖本舞臺向う奥深に闇ぼかし荒浪の遠見、此の前舞臺端とも三段の浪手摺、下手に大きなる岩臺、やはり早笛、右の鳴物にて道具納まる。と上手より、以前の徳蔵好みのこしらへ、板子を抱へ泳ぎながら出來り、汐に流される思入よろしくあつて、下手の岩臺へ攀ぢ登り、ほつと思入あつて、水を吐きなど、いろ〳〵あつて、着物を絞り、疲れたる思入にて、

徳蔵　今の颶風で鳴戸の小島つゞら岩へ吹き上げられ、船は碎けてあはやといふ呼吸の息もつけぬ間に浪に引かれてちり〳〵ばら〳〵。旦那樣もとつさんも、所詮命はありやあしめえ、水主のものもどうしたか、水練得ても難風に一通りでは泳がれぬ。どうでおれも助かるめえ、此の話しをば聞いたなら、おれがお袋、あいらが妻子、泣きの涙で歎くであらう、これに附けても運強く、名に

負ふ鳴戸の汐境、渦にまかれた其時は再び娑婆へ歸られぬ、其の大難は脫れたが、どちらを見ても船はなし泳ぎ附かうといふ岸は、十里に餘る西海灘、鳥さへ翅のきかぬ難風、此の篳篥も徳藏と共に世界へ出でざるか、我は匹夫下賤ながら、北條家を守りたまふ、神も佛もあらざるか。

ト此内徳藏よろしく思入あつて、詮方盡きしこなしにてどうとなる。此時上手より小船一艘流れ來るを、鳴戸の渦丸は泳ぎながら船を押し來て、やう〳〵船へ手を掛け、漸く渦丸船へ乘り、疲れたる思入にて倒れ居る。此船岩臺の傍へ來るを徳藏板子にて搔き寄せ〳〵、やう〳〵の事にて船へ飛び乘りて渦丸を見て、

浪にもまれて氣を失ひしか。（ト抱き起して、徳藏渦丸の背中を叩きながら、）これ、心を慥に持たつせえ。

渦丸　む〻。（ト息を吹返し水を吐く、此時渦丸の顏を見て、）

徳藏　や、わりや海賊の渦丸か。（ト此聲を聞き、渦丸心附き、徳藏を見てびつくりなし、）

渦丸　さういふおめえは、徳藏どの。

徳藏　そんならわれも、明石から。

渦丸　今の颶風に吹き流され。

德藏　果しも知れぬ大海の、
渦丸　この沖中で思はずも、
德藏　出逢ふといふは、
兩人　とんだ事だなあ。（ト渦丸思入あつて、誂への鳴物になり）
渦丸　これ德藏どの、二度と再びおめえにやあ顏向けがならねえ此の渦丸、さつきあれ程親切に言つてくれたも空吹く風、寶を盜んで海へ飛込み手下の船へ泳ぎつき、上ると間もなく今の颶風、盜んだ寶も流してしまひ、船も二三度ひつくり返り、櫓櫂もきかず流れ次第、死ぬる覺悟で高浪にゆられて氣をば失つたを、すりやおめえに助けられ、面目もねえおれが體、死ぬと覺悟をしたならば、おめえにおらあ殺されてえ、只一ぶちに打殺し、さつきの遺恨を晴らしてくんねえ。
德太　いや、其の命は貰ひたくねえ、手めえを殺す位なら、さつき明石で留めはしねえ、生れ附いて蟲螻蛄でも命を取るが大嫌ひ、後生願ひの桑名屋德藏、命ばかりは欲しくねえ。
渦丸　それぢやあさつきの遺恨もなく。
德藏　はて意趣も遺恨も常のこと、捨てた命を不思議に拾ひ、此の難風に助かつたは、言はゞ冥土で逢うたも同然、何の遺恨があるものか。

渦丸　流石は千石二千石の菱垣船を廻す德藏どの、遺恨がねえとは大きな料簡。
德藏　たゞ何事も此海へさつぱり流す其代り、おらア手めえに賴みがある。
渦丸　どんな賴みか知らねえが、おめえの事なら命をきりに。
德藏　外でもねえが陸までは十里あまりの此の海上、風に逆らひ乘つ切るには、手めえの力も借りてえのだ。
渦丸　そりやあおめえが言はずとも、此の腕節の續くだけ。
德藏　二人で出したら乘つ切れよう。
渦丸　それも叶はず流されたら、
德藏　いづれ何處のはなれ島、
渦丸　どんな所へ行かうとも、
德藏　互ひに力になり合うて、
渦丸　草を喰つても命を繫ぎ、
德藏　この篳篥を、
渦丸　え。（ト思入、德藏氣を替へ、）

徳藏　いやさ、七生までも附合ひまするぞ。
渦丸　え〻、忝けない。（ト渦丸片肌ぬぎ、櫓を押しにか〻るを見て、）
徳藏　あ、地獄にも。（ト浪の頭を打込み、）知る人ちやなあ。
ト浪の音早笛になり、徳藏板子にて水をかき、渦丸は櫓を押す、双方顔見合せよろしく、
ひやうし　幕
ト「是れより十年相立ち候狂言に御座候也」と記せし切を幕外へおろす。

三幕目

鬼界ヶ島の場

〔役名――桑名屋徳藏、淺原小十郎、島人渦丸、庄屋太治兵衞、船頭文藏、島人、若黨等。〕
（鬼界ヶ島の場）――本舞臺三間の間平舞臺、眞中上手に島山の岩組、此前に丸太柱、藁葺きの小屋、この脇に振りよき磯馴の松、日覆より同じく釣枝、眞中より下手浪手摺、總て九州沖離れ島の體、爰に○、□、△、◎何れも島人好みのなりにて、傍に海藻の入りし籠を置き、皆々煙草を吞み居る、この見得、浪の音、誂への島唄にて幕明く。

○これ田五七、こなたは島に久しく居るから、何もかも知つて居やうが、おれなどは去年の秋遠州灘で颶風を喰ひ吹き流されて來たが、島の人のいふことは、何だかさつぱり分らねえ。

□さうだらう〳〵、日本人とはいふが半分唐人だ、それでも近年方々から吹き流されて人が來るので、おらが五作の來た時分よりやあ、よつぽどこれでも分つて來たのだ。

△田五七と此島へ吹き流されてござつた時、先づのつけに分らねえのが、こなた衆はよわりやあねえか〳〵と云ふから、あんまり強くもねえが弱くもねえと言つたら、島人があきれた顏をして、やあこいつあ孫六だと言つた。

◎なに孫六だと言つた、そいつァ何の事だの。

△おゝ、こなたは新參だから分るめえ、よわりやあねえかといふのは、腹が減つちやあ居ねえかといふのだ、そこでおれが弱くもねえ強くもねえと言つたものだから、孫六ぢやあねえかと言つたのは、馬鹿ぢやあねえかと言つたのだ。

◎はゝあ、それぢやあ孫六といふのは、馬鹿といふことかえ。

□まだ〳〵そんな事ぢやあねえ、此島で產れた人はあいといふのをおゝと云ひ、お前といふのをお身と云ひ、女房のことをこせといふが、をかしいのは亭主のことをぐてへといふわ。

○ぐてへとはおつな名だな、ぼつけと云ふは何だつけな。
△ぼつけいふなあ、大きいこと、小さいことをねこけと云ふのよ。
◎若い女は何といふえ。
□若い女はなめらへ、年増のことをうなとしといふから、一から十までみんな是れだ、どうで爰へ流れて來たら歸ることは出來ねえから、島詞を覺えねえぢやあ、何處へ行つても話しが出來ねえ。
◎それぢやあ爰へ流れて來たら、一生國へ歸られねえかえ。
□なに歸られねえといふこともねえが、何をいふにも浪が荒く、日本の船の渡海がねえから、爰に居るといふ事を、國へ知らせることが出來ねえ。
△どうかして無難に來た漂流船の歸る時、頼んでやるより其外は、便りの出來ねえ離れ島、地獄へ落ちたも同じことだ。
□おいらが來てからも何十人、年々暴風のある度に吹き流されて來るけれど、皆破船して其船で歸る事が出來ねえから、一年増しに人が殖え、今ぢやあ凡そ三百人諸國の者が來て居るが、御領主から迎ひが來て歸つたものが十四五人、まあそれだから一生歸られないと思ふがいゝ。
○其の歸られねえと思つたも、どういふ風の吹き廻しで、迎ひの船が來ようも知れぬ、草を喰つて

も命を繋ぎ、故郷へ歸つて死にてえものだ。

△同じ漂流して來ても、渦丸のやうな盜人もあるし、又おらがやうな博奕打もあるし、どうで難風に逢ふ程の者だから、ろくな奴はねえけれど、其うち別なのは菱垣船の船頭桑名屋德藏どのだ

□違えねえ、あの人も十年跡に爰へ來て、島人の嘉平治どのゝ世話になつて居た所、讀書き算用應對まで人に勝れた器量ゆゑ、娘のおなぎが惚れこんで到頭嘉平治どのゝ聟となり、今では太郞といふ子まで出來て島人同然、あんな正直なよい人が、何で漂流して來たか、氣の毒な事だなあ。

○其替り島長はじめ誰にも彼れにも受けがよく、今に神佛のお助けで、迎ひの船が來るだらう、どうぞおいらもあやかつて、一緒に歸りてえものだ。

◎漂流人が寄合ふと、いつでも替らぬ迎ひの話し、錢のねえ居殘り同樣、いつ歸られるか知れやあしねえ。

□いやさつきから長話しで、海藻を取るのが遲くなつた、また庄屋の意地惡が小言を言ひに來るだらう。

△あいつが小言も聞き飽きた、なんぼ日本の地を離れ、世界を知らねえ島人だつて、あんまりな因業だ。

○　小なりの癖として、人を目の下に見やあがつて、年中苦蟲を喰つたやうな澁面ばかりして居やあがる。

◎　そのくせ女にかゝると、くど〳〵と分りもしねえ詞で、情人になつてくれの戀になつてくれのと面にも恥ぢねえことを言ふとよ。

□　德藏の女房などにも、豪氣に惚れて居るさうだが、無駄を知らねえ奴よなう。

ト此時以前より後へ島の庄屋太治兵衞、羽織着流しにて出來り、これを聞いて居て腹の立つ思入、

△　あの古狸の、大睪丸め。（ト此時庄屋ずつと前へ出ろ、島人△びつくりして、）や、お庄屋樣か。

庄屋　こりや、さつきからおしろへけておみらがえいのをけえてえたが、よくおらが店卸しイせたな、初めなう忘れたから、最うえつぺんえつてけかせろ。

□　なに、おめえ樣の事を申したのではござりませぬ、仲間の者の事でござります。

庄屋　えいかげんな事を言へ、おみらが仲間に大睪丸とえはれる者があるものか。

□　へえ〳〵。（ト天窓をかく。）

庄屋　あるなら爰へ、出して見ろ。

△　そりやあ名代の大睪丸、八丈に續くものはござりませぬ。

庄屋　そんなら大睾丸とえつたは、おらが事だな。

□　いえ、お前様ぢやあござりません。

庄屋　おらでなくつて、外にあるか。

三人　さあ。

庄屋　よもや外には、あろまいが。

　ト庄屋きつといふ、此時島人○は、海藻を入れし畚へ柿の半纏を冠せ、股ぐらから出し、

○　其の大睾丸はわしでごんす。（ト庄屋見てびつくりなし、）

庄屋　やあ、おらに續くものはあろまいと、思ひの外な大睾丸、こりあ魂消たこんだなあ。

○　おめえは八丈の大睾丸、おらあ戸塚の大睾丸だ。（ト庄屋の前へ出す。）

庄屋　えゝ、尾籠千萬な。（ト島人○を突く、是れにて○籠を落す。）

○　やあ、こりや大變、きん玉がおつこちた。

庄屋　よくもおらを欺くらかしたな、お身どうするか見をれ。

　ト庄屋有合ふ天秤棒を取つて打つて掛る、四人逃げるを追廻す、やはり島唄浪の音にて、花道より鳴戸の渦丸、好みのこしらへにて薊を繩にて結び、是れを提げて出來り、直に舞臺へ來る、庄屋渦丸へ

打つてかゝる、渦丸天秤棒を引ッたくり庄屋を突倒す。

あいたゝゝゝゝ。（ト皆々渦丸を見て、）

□　や、こなたは鳴戸の、

皆々　渦丸どの。（ト庄屋起上り、）

庄屋　あいたゝゝゝ。うぬ何でおれを投げやあがつた。

渦丸　もし〳〵庄屋様、何でおめえ様を投げませう、どういふ事か知りませぬが、わつちやア爰へ出合頭、この天秤棒でおめえ様が無暗にわつちを打ちなさるから、留めるはずみに、それ、其の石へ蹴躓いて轉んだのだ。

庄屋　えや〳〵さうぢやあねえ、お身が投げたのだ〳〵、總別お身らが役ゥせる此庄屋を孫六に仕をる。これ漂流して爰へけてもおらが情があればこそ、お身らを爰へ置いてやるのだ、それを投げて濟まうと思ふか。

渦丸　もし〳〵そりやあ御無理といふものだ、今もわつちが言ふ通り、石に躓き轉んだのだ、おめえ様よりわつちこそ天秤棒で打たれたけれど、御恩になる庄屋様、何にも言やあしませんぜ、これが上と下でなけりやあ、こつちから言分を言はにやあならぬ筋合だ。

庄屋　なに、そつちらがえゝぶんをえはにやあならぬ筋合だ、おばい事を吐かす奴だ、うぬはえつたい海賊で徳藏とえつしよに漂流してけた奴だが、根が盗人のわる根性、十年この方島の者とえぐど喧嘩を仕をつたか、ほだをはめられた事ア知りやあしめえ、おらにせえ其やうなえゝがけをするから、外のもんにやどのやうなおばい事をえふか知れねえ。

渦丸　成程おめえ樣のいふ通り、ほだをかけられた事は忘れはしねえ、わつちも産れ故郷を放れて、こんな所へ來て居るから喧嘩も仕度くねえけれど、唐人近い島ツぽう分らねえ奴にこめられちやあ、わつちやあ我慢をして居ても、腹の蟲がきゝやせん、死ぬまで喧嘩をしやすから、さう思つて居てくんねえ。

庄屋　うぬ唐人近いとは誰がこんだ、此の庄屋も島産れだが、譯の分らぬ事はえはぬ、えまもえまとてこへつらが事を惡くえふもうぬがやうな極道が此島にえるからだ、簀卷きにせて海へほつこみ跡の示しにせてくれる、さあおらとえつしよにうしやあがれ。（下庄屋立掛るを四人留めて、）

□　もし／＼庄屋樣、私共も見て居りましたが、出合頭のほんの間違ひ。

△　お腹も立ちませうが、此儘に御料簡なされて下さりませ。

庄屋　えや／＼料簡ならぬ／＼、島の政事が亂れては、庄屋の役目が勤まらぬ。

○　そりやあさうでもございませうが、元をたゞしやあ渦丸どんより、おめえ様が悪いのだ。

庄屋　まだ〳〵そんな事をぬかすか、うぬらもえつしよに簀まけにするぞ。

◎　いえさ、お前の御無理は御尤もだ。

四人　御料簡なせえ〳〵。

庄屋　えゝやかましい、退きやあがれ。（ト四人を突きのけ、渦丸を引立て、）さあ渦丸、おれとえつしよにうしやあがれ。

渦丸　どこの果でも一緒に行くから、見ツともねえ、放しやあがれ。（ト振り放すを、）

庄屋　うぬ、逃してなるものか。

ト浪の音、島唄にて、庄屋渦丸を引立て花道へ掛る、四人も是れを留めながら附いて行く、此時花道より桑名屋徳藏、筒つぽ脚絆島人のこしらへ、皮草履櫂の先へ磯草を結附け、是れを擔ぎ出來り花道にて行き逢ひ、

徳藏　これは庄屋樣、何事でござりまする。

庄屋　おゝ、お身は徳藏。

徳藏　見れば渦丸初め皆の衆、何事かは存じませぬが、先づ〳〵あれへ御出で下さりませ。

庄屋　えゝ〳〵料簡ならぬ事だ、留めてくれな〳〵。
徳藏　いや、わしが目に掛りましては、お留め申さにやなりませぬ。
庄屋　それだとえつて。
徳藏　はてまあ、お出でなされませ。
　ト右の鳴物にて、徳藏庄屋を留めながら舞臺へ來り、皆々よろしく、下手に庄屋眞中に徳藏、下手に渦丸、皆々捨ゼリフにてよろしく居並び、
渦丸　してまあ、こりやあどういふ譯でござりまする。
渦丸　もし兄貴、斯ういふ譯だ聞いてくんねえ、此の庄屋の事を惡く言つたとか言つて、火の玉のやうになつて怒つて居るところへ、うつかりわつちが出會すと打てかゝるから、留める拍子に、おのが手に石に躓づいて轉んだのを、わつちが投げたと言ひがゝり、總別不斷が惡いから、簀卷にして流すといつて役所へ引摺つて行くとこよ。
庄屋　あれ〳〵あんなちんてえべいを吐かし居る、おらを投げたは違えねえ、漂流人の身を以て、島の束ねをする庄屋をばつけな目に逢はしたから、簀まけにして流さにやあ島の掟が立たぬわえ。
徳藏　そりや御尤もでござります、假令どんな事があらうとも、庄屋樣を投げるなどゝ大それた事でご

ざりまする。

□　いや／＼徳藏どの、おら達も見て居たが、庄屋樣がぶつたから、渦丸どのも投げたのだ。いやさ投げたのぢやあねえ、石に蹴躓いて轉んだのだ。

徳藏　何であらうと庄屋樣、わしを初めお前方、誰でもお世話になるお方、渦丸も惡いが、お前方も惡く言つては濟まねえ譯だ。

△　それだといつて、罌粟ほども褒める所のねえ人だ、惡く言ふにやあ七日七夜、言ひ通しても言ひ盡されねえ。

庄屋　あれ、あのやうな事をえひ居るわえ。

○　言はなくつてどうするものか、以前は嘘もついたけれど、今は斯うした島住居。

◎　眞人間になつたからは、嘘のうの字も吐きやあしねえ、正のことを、

四人　正で言ふのだ。

庄屋　えゝ正のことを七日七夜、惡くえはれて堪るものか、これだから徳藏、腹が煮えて／＼ならぬわえ。

徳藏　いやお腹の立つは御尤も、わしでさへ默つては居られませぬ。これお前方もどうしたものだ、庄

屋様は島の束ね、御支配を受ける身で今のやうな事を言つて濟むものか、今日の所は德藏がお詫びをして進ぜるから、渦丸はじめお前方も、以後をきつと愼しみなさい。いやもし庄屋樣、定めしお腹も立ちませうが、取るに足らぬ者ばかり、以後はきつと申附けますから、今日の所は私にお免じ下さりまして、御料簡なされて下さりませ。（ト庄屋思入あつて、）

庄屋　外の者のえゝさつなら料簡ならぬ所なれど、庄屋はすれど無筆ゆゑ、書物頼む德藏が、まさか顏も潰されぬ、そつくり德藏ごせに、えや、後日をきつと愼むなら今日の所はお身に免じ料簡のしてくれる。

德藏　左樣なら私の詞を立つて、成り難い御勘辨をなされて下さりますとか、それは〳〵有難うござりまする。

庄屋　然し此の庄屋を孫六にした皆のもの、どたまを砂に摺附けて、御免なせえと誤まらせろ。

德藏　そりや如何やうにもお詫びを申させます。さあお前方が始めだから、爰へ來て庄屋樣へよくお詫びをするがいゝ。

□　そりや德藏どのゝ詞だが、何もわしらが、

四人　あやまる譯が。

徳藏　はて、譯があらうがあるめえが、譬の通り泣く子と地頭。
庄屋　何だと。
徳藏　いやさ、長い短かい言ふには及ばぬ、爰へ來てあやまつしやい。
△　これ、徳藏どのがあゝいふから、あやまつてしまはうぢやあねえか。
○　仕方がねえ、あやまるべえ。（ト四人前へ出て手を突き、）
□　へい〳〵、結構なお庄屋樣を、惡く申したのは、私共の不調法、
四人　眞平御免下さりませ。
庄屋　徳藏が詫びゆゑ、許してくれるぞ。
四人　有難うござります。（ト四人こちらへ來る。）
庄屋　やい渦丸、爰へけてあやまれ。
渦丸　この衆達はちつとでも、惡く言つたからあやまらうが、わつちやあ何もあやまる筋が。
徳藏　これ渦丸、あの衆さへあやまつたに、手めえがあやまらぬといふがあるものか、爰へ來てあやまれ。
渦丸　なんぼおめえがさう言つても、こればかりは。

徳藏　これ、おれがこんなに口を利くのも、手めえの爲を思つていふのだが、あやまる事が出來ねえのか。

渦丸　出來ねえ譯もねえけれど。

徳藏　そんなら早く手を突いてあやまるがいゝぢやあねえか。

渦丸　それだといつて、以前なら。

徳藏　はて、それを言つちやあものがねえ、鄕に入つたら鄕に從へだ。(ト渦丸思入あつて前へ出で、)

渦丸　むゝ、ようござります、あやまります。もし庄屋樣、眞平御免下さりませ。

庄屋　えゝこれ、どたまが高い、もつと下げろ〳〵。

渦丸　もう是れよりやあ。(ト天窓を下げぬゆゑ、)

徳藏　これ、かうするのだ。(ト徳藏渦丸の襟へ手を掛け、無理に天窓を下げさせる。)

庄屋　もうえい〳〵、われもえぜんは手下のある海賊であつたさうだが、島へけたら島の掟、おらに天窓は上らぬぞ、どえつもこえつも此の後蔭口でも利くが最後、片ツ端から簀まけにせて、此の荒海へ投り込むぞ。

四人　いやもう、以後はきつと愼みまする。

庄屋　おらがえこうはどんなものだ。（ト此時花道の揚幕にて法螺の音聞ゆる。）

德藏　や、あの法螺の音は。

庄屋　渡海のあつた船の知らせ。

□　もしやおいら達の、

四人　迎ひぢやあねえか。

庄屋　何は兎もあれ、此島へ、船が着いたら、行かねばならぬ。

△　どれ、わしも一緒に、

四人　安否を聞かうか。

德藏　左樣なれば、庄屋樣。

庄屋　德藏晩げに行くぞよ。

ト浪の音、島唄になり、庄屋先きへ四人附いて花道へはひる、德藏渦丸殘り、面目なき思入あつて、

渦丸　兄貴、また厄介を掛けたぜ。

德藏　なに、厄介は構はねえが、氣の早い事をしねえがいゝ、外の者なら構はねえが、意地の惡いあの庄屋に憎まれちやあ、こつちの損、それでおれが詫びをして、皆にもあやまらせるのだ。

トかすめて浪の音、誂への合方になり、思入あつて、

渦丸　ほんに、どういふ縁かして、明石浦で出逢つた時、おめえの異見を反古にして贋物と知らず篳篥を、さらつて海へ飛込んだも、思ひ掛けねえ難風に再び顔の合されねえ、おめえに又も出會し、濟まねえ譯もおたげえに拾つた命を水にして、力になりあひやう／＼に此の島へ流れ着き、仕馴れもしねえ百姓や漁師の眞似で其日を送り、米といつたら一年に盆と暮とに喰ふばかり。（ト以前の草を取り、）こんな名もねえ草を喰つて、哀れに命を繋いだも、算へて見れば最う十年、昔たつ其うちも外に便る人もなけりやあ、おめえを親とも兄貴とも、力に思つて斯うして居るが、いつ故郷へ歸られるかと、それを思ふとこんな氣でも、しみつたれだがほろりとする。

ト愁ひの思入。徳藏思入あつて、

徳藏　以前は手めえも海賊ゆゑ、四國九州海上ぢやあ惡い事もしたらうが、おれと一緒に此島へ流れて來てから打つて替り、手慰みさへしねえ位、たゞ疵なのは短氣だが、其の癇癪も辛抱して譯も分らぬあの庄屋に、あやまる手めえの心の内、察してゐるが仕方がねえ。一日でも此の島に斯うして居りやあ上と下、悔しからうが辛抱しろ、其のうちにやあ故郷から、迎ひの船が來やうから、それを樂しみに待つて居ろ。

渦丸　いや、おめえは故郷に歴然とした家があるから迎ひも來やうが、おらア今ぢやあ親兄弟も何もねえ一本立ち、迎ひが來る當がねえ、生涯粟や海藻で世を送る位なら、死んだ方がましだ。

德藏　これ、詰らねえ事をいふな、此間の漂流船へ手紙を賴んでやつたから、屆きせえすりやあ北條家から、おれを迎ひに船が來やう、其時は手前も一緖に便船を願ふ氣だ、もし又それが叶はずば、おれが歸つて故鄕から、直に迎ひをよこすから、命を大事にするがいゝ。

渦丸　西を見ても東を見ても他人の中、それ程までに言つてくれるはおめえばかりだ、死んでも忘れやしねえ。

德藏　えゝ又死ぬといふか、緣起でもねえ。（ト此時また花道の揚幕にて、大きな法螺の音聞える。）

渦丸　兄貴法螺の音が近くなつたが、船が着いたに違えねえぜ。

德藏　成程、あれは着いた知せ、誰を迎ひの船が來たか。

渦丸　もしもおめえを北條家から、迎ひの船ぢやアあるめえか。

德藏　なに、さういふ夢見もなかつたから、よもやおれではあるめえよ。

渦丸　何にしろ氣掛りだ、濱へ行つて聞いて來ようか。

德藏　今に誰か知らせて來よう。

渦丸　斯うして居る間に行つて來よう。

德藏　それぢやあ行くか。

渦丸　兄貴待つて居ねえよ。

ト浪の音、合方になり、渦丸尻を端折りながら早足に花道へはひる。德藏跡に殘り、思入あつて、

德藏　月日の經つのは早いもので、明石浦の難船から、造酒之進樣から預かりし、朝霧の篳篥を所持なした儘吹き流され、この島へ來てもう十年、一方ならぬ名器ゆゑ、定めて鎌倉北條家では、海の底まで御詮議ならん、その篳篥は無事ながらお屆け申すことは扨置き、お知らせ申すことさへも叶はぬ邊土のはなれ島、是れが七里か八里なら泳いでも行くけれど、何をいふにも百里餘り、翅なけりやあ行かれぬ大海、どうか便りの出來るやうに、神や佛に願つたる、しるしか先月漂流して爰へ來た相撲船、大した船の損じもなく、間もなく歸るを幸ひに、北條樣へ手紙を出したが、もしやそれで此の島に、居るのが知れて德藏を、迎ひの船ではあるまいか。（トぶる／＼として、）あゝ何だかぞく／＼胸騷ぎ、早く安否を聞きたいものだ。

トやはり誂への合方、德藏向うへ思入、浪の音を冠せ、ばた／＼になり、以前の渦丸走り出來り、

渦丸　兄貴、そこに居たか。（トせい／＼息の切れる思入。）

德藏　渦丸、どうだつた〳〵。（ト胸をたゝき思入あつて、）

渦丸　目出てえ〳〵、船は迎ひだ〳〵。

德藏　そりや誰を。

渦丸　おめえを迎ひに北條樣から、小十郎樣といふお方がござつた。

德藏　えゝ、そんならおれを。（トどうとへたり、嬉しくて足の立たぬ思入）

渦丸　今濱邊で、庄屋に言渡しを聞いて來たのだ。

德藏　それぢやあおらァ故鄕へ歸れるか。

渦丸　兄貴目出てえな〳〵。

德藏　えゝ、忝ない〳〵。

トひよろ〳〵して、嬉しき思入にて手を合せ拜む。時の太鼓になり、花道より淺原小十郎、ぶつさき羽織、野袴、大小、旅なり、若黨兩人半纏股引にて、船頭文藏更けたるこしらへにて附添ひ出來り、是れを渦丸指さし敎へる、德藏思入あつて、下手蘆原へ小隱れする、皆々舞臺へ來り小十郎床几へ掛る。

小十　こりや庄屋、只今も申す通り、身共は鎌倉北條家の藩中、淺原小十郎と申す者、十ヶ年以前漂流

なし、此島に罷り居る、由井ヶ濱の菱垣船の船頭徳藏を迎ひに參つた。して、只今にては何れに居るな。

庄屋　へい、當島五ヶ村の其のふとつ、えぜんは濱田村只今にては濱野村とえゝまして、あの向うの山を越してふだりの方へえつ丁ばかりめえりますと、ほつけな椎の木がござります。

文藏　これ〳〵、そんなに委しく言ふには及ばぬ、たゞ何處に居ると云へばよい。

庄屋　それでも、道が知れますめえ。

小十　いや、身共それへ參るのではない、尋ね問ふべき仔細あれば、これへ參るやう其方申附けてくりやれ。（ト此時下手より德藏おづ〳〵出來り、）

德藏　へい、その德藏は、是れに居ります。

庄屋　おゝ、そこに居たか、丁度幸ひ。これ德藏悦べ、手めえをお迎ひにござつたのだ。

德藏　失禮ながら、只今あれにて委細承はりましてござります。

小十　こりや德藏見忘れたか、身共は淺原造酒之進の弟、同苗小十郎ぢやわ。

德藏　まことにあなたは小十郎樣、お國でお目に掛りましたが、まだ其時はお前髪ゆゑ、ついお見違へ申しました。

小十　先は其方も、無事にて。
徳藏　あなた樣にも御機嫌よろしく、御目出度う存じまする。（ト船頭文藏前へ出て、）
文藏　これ徳藏どの、よう達者で居て下されたな。
徳藏　おゝ文藏か、懷しかつた〳〵、おれも姿が替つたらうが、十年見ねえ其内に、大層年が寄つたなあ。
　　ト徳藏手を取り、泣く。
文藏　いやもう、何から話しをしませうか、こなたの無事な顏を見て、嬉しいので胸が一杯、急には口へ出ませぬわえ。
徳藏　おれも聞きてえこと、言ひてえことが山々なれど、また跡で。
文藏　ゆつくりと話しませう。
徳藏　扨小十郎樣には遠路の波濤、御渡海の御船中、嘸かし御難儀にござりましたらう。
小十　いや、仕合せと追手にて、さのみ難儀もいたさなんだ。
徳藏　それは何よりでござりました。（ト合方替つて、）
小十　徳藏儀も其後便りなきゆゑ存じまいが、明石浦の難船にて我が兄造酒之進、そちが親の徳太夫、

水主のものも相果てしよし、一人船の毀れに取附き、豐後浦へ吹き寄せられし其者より具さに聞きしが、そちも正しく海底の藻屑となりしとのみ思ひ、其日を忌日にお上にて非業に死したるものゝ爲め大法會を行はれ、追善供養あらせられしが大切なる夫の篳篥は何れへ流れ行きけるか、さる博士に占はせしに、恙なきよし申すに附き合點行かず、其後も幾度となく占はせしに、易の表はいつも同じこと、果して此程當島へ漂流なせし其船へ、そちが頼みし書翰にて始めて無事を知つたる悅び、直に迎ひに參れよと時政公の嚴命うけ、波濤を越して參りしそれがし、して、夫の品は無事にてあらうな。

德藏　あの砌より今日までも、大切に所持いたして居りまする、其の品ゆゑに此樣に思ひがけなきお迎ひうけ、再び故鄕へ歸れまする德藏が身の悅び、是れも偏に寶のお蔭ゆゑ、有難うござりまする。

小十　おゝさこそあらん、國表なるわれ〳〵すら、其方がこれに居ると聞いた時は、思はず落涙いたす程であつた。

德藏　その悅びに引替へて殘念なのは造酒之進樣、親仁は老後のことゆゑに、最早先きの短かい體、且那樣は盛りのお年齡、惜しいことでござりました、船も碎ける難風ゆゑ所詮御存命はござりますまいと、あの日を直に御命日に、朝夕御回向申しましたも、それとも若しや御存命でいらせられ

ますこともやと思ひましたが、只今の仰せで力が落ちました。これ文藏、親仁は死んださうだが
お袋は變りもないか。

文藏　さあ德太夫どのが死なれてから、生死の知れぬお前の體、十のものなら九分九厘死んだと聞いて
十年この方、言ひ出しては泣き語り出しては泣き、遂にはそれが病となり三年この方足腰たゝず
明日をも知れぬ身の上ながら、わが身の後生は願ひはせず、たゞ德藏が〳〵と明暮おまへの事ば
かり、故郷へ歸つて無事な顏を見せたら、どんなに悅ぶだらう、思ひやられて涙が出る。

ト文藏涙を拭ふ。

德藏　そんならお袋は煩つて居るとか、定めて長のこの年月、手めえの世話になつたであらう、禮は詞
に盡されねえ。

文藏　何のわしに禮がいるものか、他人がましい事を言はつしやるな。（ト小十郎思ひ入あつて、）

小十　いやなに德藏、最前庄屋に承はりしが、只今にては妻子もあるよし、明朝未明に出帆いたせば
今宵は宿所へ立歸り、暇を告げて未明まで、篳篥を持參なし、旅宿まで參るやう。

德藏　すりや、明朝直に御出帆でござりまするか。

小十　さあ四五日も猶豫いたしたけれど、海上の事なれば、猶豫はならぬ。

庄屋　えつ刻も早いがよろしうござります。此間からの風雲が出ますゆゑ、しめえは暴風でござります。
小十　此風の變らぬうち、出帆いたせば、左様相心得よ。
徳藏　畏つてござりまする。（ト此時下手より渦丸出で、）
渦丸　それぢやあ兄貴、おめえは明日行きなさるか。
徳藏　おゝ猶豫ならぬお上の仰せ、お供をして行かねばならぬ。
渦丸　どうかおれもおめえと一緒に。
徳藏　そりやあおれが呑込んで居る。（ト小十郎に向ひ、）小十郎様へお願ひがござります、是れに居りまするは、私と一緒に漂流いたしまして、此島へ參りましても、兄弟同様にいたしまするもの、一緒に連れて參りたうござりますれば、どうか御同船をお許し下さりまするやう、お願ひ申し上げまする、
小十　其方が兄弟同様にいたすものとあれば、召連れて遣り度いものなれども、私ならぬお上の御用、一人たりとも餘のものは同船させては上への恐れ、身共が役目の越度となれば、近頃氣の毒千萬ぢやが、此儀はかりは罷りならぬ。
徳藏　すりや私のその外は、御同船は叶ひませぬか。

小十　召連れ歸るは其方一人、妻子たりとも相成らぬ。
渦丸　それぢやあわつちやあ歸られねえか。
德藏　是非がない。あきらめくれ。
渦丸　なにおめえに別れりやあそれまでだ、もう此島に生きて居る氣はねえ。
德藏　またそんな短氣をいふか、今叶はずばおれが歸つて、お願ひ申して別段に、迎ひ船を寄越すから
　短氣を出さずに待つて居てくれ。
小十　左程までに思ふもの、許して遣り度きものなれど、何を申すも上への恐れ。
庄屋　えや、お連れなさらぬがよろしうござりまする、あれは鳴戸の渦丸といふ海賊でござりまするか
　ら、故郷へ歸らば持つたが病、またおばい事をしますべいから、爰へ置いた方が人の爲でござり
　ませう。
小十　すりやあの者が聞き及ぶ、渦丸といふ海賊なるか。
德藏　既に角左衛門樣に賴まれて、篳篥を盜んで一旦惡事に與なしましたが、惡にも強きは善にもと只
　今にては誠の人。
渦丸　いくら魂入替へても、以前が以前に人樣のお疑ひがござりますから、一生人には返れませぬ。

庄屋　えや、かやうなもんにお構ひなくと、小十郎様には法樂寺を御旅宿にいたしましたれば、あれへお出でなされ、御休息をなされませ。

小十　何さま渡海の船疲れ、旅宿へ參つて休息なさん。

庄屋　さあ徳藏、お身は早く家へ歸つて、親仁やおなぎに話して暇乞なうするがえゝ。

徳藏　豫て覺悟といひながら、斯ういふ事を聞いたなら、嘸や歎くでござりませう。就いては親仁の永煩ひ今わしが居りませなんだら。

庄屋　跡は決して案じぬがえゝ、おなぎはおらが、えゝや、おらが引受けて世話をさせるから困るやうな事はせねえ、はて、島のもんのえけ立たぬを世話をせるが庄屋の役だ。

渦丸　へん、うまく言やあがらあ。

庄屋　何だと。

徳藏　いえさ、何分共に跡々を、よろしうお願ひ申しまする。

小十　萬事の話しはまた明日、未明までに夫の品をば、旅宿へ持參いたすやう。

徳藏　畏つてござりまする。

文藏　そんなら徳藏どの、母御からの傳言も。

德藏　それは明日聞きませう。

小十　然らば德藏、

德藏　小十郎樣、

小十　何かは明日、

庄屋　先づ御旅宿へ、

小十　庄屋案內。（ト時の太鼓になり、庄屋先に小十郎文藏若黨附いて上手へはひる。跡に兩人殘り思入。）

德藏　これ渦丸手めえを一緒にと思つたが、今聞く通り小十郎樣が、役目の越度と言はつしやるから、逹てとも言はれぬ仕儀、氣の毒だが堪忍してくれ。

渦丸　なあに、おらあどうでもいゝ、是れから故鄕へ歸つたとて、親兄弟もねえ體、誰に逢ひてえものもねえ、たゞ行きてえとおれがいふのは、おめえに別れるがいやだから。

ト顏を背けて泣く、是れを見て德藏も淚を拭ひ、

德藏　手めえでさへも其通り、おれに別れを惜しむもの、是れから歸つて此の事を親仁や女房に話したら、假りにも十年夫婦になり子まで出來た二人が仲、姿形は變れども、親子夫婦の情合は、浮世離れた島守りでも、別に替つた事がなけりやあ、二人の歎きはどのやうだらう。

渦丸　兄貴、實にこりやあ大變だぜ。
徳藏　それが今から胸づかへ。
渦丸　是れを思やあ世の譬。
徳藏　悅びあれば。（ト顏を見合せ思入するを、木の頭、悲しみだなあ。
　ト徳藏上手に立身、渦丸下手下に居て、兩人顏を背けて泣く。キザミにてよろしく
幕

四幕目　　徳藏内の場

〔役名――桑名屋徳藏、親仁嘉平次、鳴戶の渦丸、庄屋太治兵衞、船頭文藏。島の女、女房おなぎ、一子太郎等。〕

（徳藏内の場――本舞臺三間の間常足の二重、丸太柱、藁葺きの屋根、向う鼠壁、上手白木の箱の釣佛檀、内に白木の位牌德利に花を挿し、茶碗に水向してあり、下手に神棚、續いて膳棚、臺所道具よろしく、二重の居爐裏へ罐子を掛けてあり、下の方葺きおろしの下家、此内に土竈水桶などあり、下座の前蘆原、總て島人住居の體、二重上手に莚屛風を建廻し、帆木綿をはぎ附けたる蒲團の上に

親仁嘉平次、老けたる島人好みのこしらへにて煩つて居る體、平舞臺上手に島の女甲、乙雜器の膳碗にて飯を喰つて居る、下手に徳藏女房おなぎ、好みのこしらへにて、側に飯櫃を置き給仕をして居るよき所に肴の上に籠提灯を置き、此傍に一子太郎、やつしなりにて、玉の入りし指輪へ紐を附け遊び居る、この見得、島唄にて幕明く。

なぎ　これ與太郎のごせ、何も馳走はねえけれど、たんと喰べてくれさつせえ。

島女甲　お辭儀なしに喰べたんで、えら腹をぼつけにした。

島女乙　米の飯ィ炊いて祝ふなあ、何ぞ悅びでもあつてかえ。

なぎ　今日はぐてへの產れ日だから、それで米の飯ィ炊いたのさ。

甲　そいざあ、徳藏どんの產れ日かえ。

乙　えら御馳走だつたな。

嘉平　おらが家の帆柱だから、この產れ日を祝ふべいと、獻上殘りの新米を一斗ばかり買つて置いたから、ぼつけに喰つてくれさつせえ。

甲　ほんに去年も呼ばれたツけが、まがうに忘れてしまうたかの。

乙　やあ忘れるとえやあ、とつさんお身の病はどうだえ。

嘉平　おらが病めるのは年病めだから、よくなるべいとは思はねえ。

甲　お身は達者な人だつたけが、ぽつけに病めるこんだなあ。

乙　まだ〳〵はつぷす年でもねえから、氣いしつかりせにや行かねえぜ。

嘉平　これまでおらあ我ばかりでおつ通して來たけれど、德藏を聟にしてこんなあつぱまで出來て、最うえゝと思つたら、去年から病めてなんねえ。

甲　何にせえ、あつぱが出來て仕合せなこんだなあ。

乙　德太郎よ、何してえるぞ。

太郎　おらあ、これ持つて遊んでえるのだ。（ト玉の入りし指輪を見せる。）

甲　やあ、えら綺麗な指輪だな。

なぎ　とんだもんが氣に入つて、阿蘭陀船の船頭が水を貰ひに來た時に、まいてくれた指輪だが、仕事せるに丁度えゝからふとつはおらが指ィはめ、玉のあるのを太郎にやつたら、えらあれが氣に入つて、うつぷすにも放さねえ。（トなぎ指へはめて指輪を見せる。）

甲　おらもこのめえ、ふらんす船が薪を貰ひに來た時に、此の指輪をくれて行つた。

乙　これも其時貰つたのだが、此島の女子は、指輪を持たねえもんはねえ。（ト兩人指輪を見せる。）

甲　それにまた此の島へ來た漂流人をぐていに持ち、別れる時に指輪をやるのが、昔からの習ひだて。
乙　漂流人もほつけにあるが、これの德藏どんのやうなえゝぶとは又とねえとて、めならへ達が目へかけてえるから、取られぬやうに氣ィ附けたがえゝ。
なぎ　そんでえに言はれると嬉しいやうで案じられて、ひよつと誰ぞに取られべいかと、濱へ行つても野良へ行つても、家へ歸つて來るまでは、氣めえが揉めてなんねえて。
甲　おらがやうな孫六なぐてへを持つても、寢取られりやあ、あんまり氣もさあようござんねえ。
嘉平　ほんに聞けばお身がぐてへは、太郎助がごせと間男なうしたさうだな。
甲　これとつさん聞いてくれさつせえ、盆踊りがおへてから濱小屋へ引込んで、毎晩はつぶすと聞いたゆゑ、業が沸えて〳〵、此のおれんごせ、お汐ごせ頼んではつぶして居る所へ、ふん込んでひたり共に片小鬢なう剃り落して遣つたがなう。（ト袂より男女の片鬢の毛を出して見せる。）
なぎ　そりやあはあ、思ひ切つたことをしなせえたなあ。
乙　誰でも彼れでも間男せりやあ、片小鬢剃り落すが此島の習へだから、どうも仕方がござんねえ。
嘉平　あの男も孫六な、若い時から間男をえどくするが、げどうな奴だ。
甲　あれでも人に取られりやあ、えゝ心持ちはござんねえ。

乙　猶更これの德藏どんは、えゝぶんのねえぐてへだから。
兩人　取られぬやうにせたがえゝ。
なぎ　ほんにお前方がさうえゝば、えつも最う戻る時分だに、何で遲い事ぢや知らん。
嘉平　今日は德藏が產れ日ゆゑ、氏神さまのお宮へでも、まゐりにえつたこんだらう。
甲　それとも何處ぞのごせのところへ。
乙　えり込んでえるかもしんねえ。
なぎ　男の心と秋の空、變るべいかも知れやあせねえ。
甲　えまに家へ戻つたら、よう吟味せて見たがえゝ。
乙　うつかりしちやあなんねえぜ。
なぎ　おゝ、きつと吟味をしますべい。
甲　これ吉助ごせ、もうえかうではねえか。
乙　それよかつぺい。
甲　さてはア、今日はえら馳走に、
兩人　なりました。

嘉平　そんなら歸るか。

乙　えや、男が大事でござるから、もう歸りますべい。

甲　とつさん、大事に、

兩人　さつせえよ。(ト島唄になり、兩人下手へはひる。)

嘉平　與太郎ごせはえゝ年だが、えつもがら〳〵と孫六な奴だな。これ太郎、野良へでもえつて遊んで來ぬか。

太郎　うらア、とつさんの歸るまで家にえるよ。

嘉平　えゝ又土産を貰ふべいと思つて。

なぎ　ほんにやれ此太郎のやうに、父親を慕ふもんはねえ、夜さりもおらとははつぶさねえが、こんなに太郎の慕ふのは、ひよつときふに別れるこんでもなけりやあえゝがと苦勞だて。

嘉平　何で〳〵そんな事があんべい、によこと違つて太郎の方は、何處でも父を慕ふもんだ。

なぎ　これに附けても歸りの遲さ、道でどうかしはせねえか。

嘉平　歸りの遲いはどこぞのによこに、うつぱりでもしたんべい。

なぎ　えゝとつさんまでが、そんげな事を、氣めえが揉めてなんねえのに。

トおなぎ門口へ來て、外を見て案じる思入れ、ばた〳〵になり、花道より以前の庄屋太治兵衞走り出來り、

庄屋　これおなぎごせ、徳藏はまだ歸らぬか。

なぎ　おゝ、まだ歸りませぬがな。（ト太郎家へはひりながら、）

庄屋　そんなら、あんにも樣子を知らずか。

なぎ　何ぞ案じるこんでもあつてかね。

庄屋　えゝ、案じるこんではねえ、目出てえこんだ。

嘉平　目出てえこんとは、悦ばしい。

なぎ　どんなこんでござるの。

庄屋　これ、鎌倉の北條樣から、徳藏に歸れとて、迎ひの船が濱へけたわ。

兩人　やあ。（トびつくりする。）

なぎ　え、あの徳藏どのを、北條樣から。

庄屋　おゝ淺原小十郎樣とえゝおふとが、お迎ひにござつたがな、徳藏にも逢はつせえて此の日並のええうちに出船をするとて、明日すぐにうけるといやい。

なぎ　え、そんなら直に徳藏どんは、明日直に船に乘らつせえるとか、こりやまあちんていべいなこんだなあ。（トおなぎ泣く。）

嘉平　あゝそんでは目出てえこんだが、今徳藏にけえられては、おら達の身の難儀、もう四五年若けりやあえゝが、一年增しに取る年、徳藏といふ力が出來、もうえゝと心が弛み、ついにねえおらが煩ひ、あゝ折の惡いこんだなあ。

なぎ　徳藏どのが濱へ出たり、おらが絲を取つたりして、やう／＼暮す身代に、跡はどして暮すべい、えゝ困つたこんが出來たなあ。

庄屋　あゝこれ／＼、決して跡は案じるな、氣めえ揉むにやあ及ばねえ、知つての通りおらがごせは去年おつ死んで今は一人身、ちつくり年は不釣合だが、その代り子があると親のあるのを合點して上の口も下の口も不自由はさゝぬから、落着いてえたがよい。（トおなぎの袖を引く、）

なぎ　えゝもう、えゝ氣なことをえはつせえ、それ所ぢやあござんねえ。

庄屋　なに、それ所ぢやあねえことがあんべい。これ、よく物を思つて見い、漂流してけたればこそ、こんな島にもえるけれど、國へ歸つてしまつたら振向いても見るこんぢやあねえ、明日別れたらそれ限り、徳藏が國へ行き、えゝ女房を持つてあらう、そんげにこつちも亭主を持つがえゝぢや

あねえか、なあ嘉平次。

嘉平　そりやあそんげなもんだけれど、たゞなんねえ夫婦仲・徳藏が歸つたとて、直に亭主持つといふ譯にも、こりやあいきますめえ。

庄屋　これ〳〵、そりやあ惡い料簡だ、國へ歸つてせまつたら便りもするこんぢやあねえ、そんな奴に義理張らずと身の片附をせたがえゝ、お身は斯うして寢てえるし、泣き喰ふといふ子はあるし、五日や十日の其内はそりやあどうでもなるべいが、長の月日は送られねえ、憚りながら五ヶ村の束ねえせる此の庄屋、おらがごぜになる時は嘉平次は庄屋のえん居、裏の庭へ離れへこしらへ一生安樂にしてやるべい、お身もこんななりはさせぬ、蘇枋染の帶でもさせて、びらしやらとして置くは、徳藏が歸るは親子の運が向いてけたのだ、明日國へ歸つたら、まみなこんだが其のあくる日から、庄屋のごぜとえはしたい、あゝちんてへべいなこんだなあ。

ト庄屋おなぎに寄添ふを振拂ひ、

なぎ　えゝ、そんな話しは聞きたうもござんねえ、徳藏どのが歸つてから相談なうしましたら、どうか跡もなりますべい、二度のものを一度喰べても、おらア亭主はもう持たぬ、後家立てゝ暮すから必ず構うてくれさつしやるな。

庄屋　えや構ふなとえつても構はにやならぬ、村のもんの難儀を救うてやるが庄屋の役、こんてえに親切におらが言ふのを惡く思ひ、えゝ事をきかぬ日にはかはえさ餘つて憎さが百倍、これ、おらは庄屋、お身らは組下、上と下ぢやぞよ、おらが心ふとつで此島にもえられぬやうにならうも知れぬ、同じこんだら樂をして、暮す方がよかつぺいに、ようとつくりと思案せえ。

ト庄屋憎體にいふ、嘉平次思入あつて、

嘉平　えや、組下を憐んで御親切なお志し、あんで惡く思ひますべい、有難うござります。あんにせえ徳藏がえまに戻つて來ませうから、そしたらとつくり相談せて、お願ひ申しに出ますべい。

なぎ　これ／＼とつさん、おらあそんげな事は。

嘉平　はて何事もおらが承知、惡いやうにはせねえから、親に任せて置くがえい。

庄屋　おゝさうだ／＼、あんでも親のえゝ事を應々ときくのが孝行、嘉平次を思ふなら、おらがごせになるがえゝ。もう徳藏が歸る時分、おらは是れから御旅宿へ行つて、御機嫌でも伺ふべい。

ト庄屋立上る。

嘉平　そんだら、もうけへらしやりますか、あゝ茶さへ進ぜませなんだ。

庄屋　あゝこれ、これから毎日來るから、決して構うてくれぬがえゝ、たゞおなぎにせえ構はれゝばえ

えのだ。

トおなぎの手を取るを振拂ひ、

なぎ　誰がお身に構ふべい。

庄屋　そんげな事をえはぬもんだ。（トまた立掛るを太郎留めて、）

太郎　これ、あんでおつかあをえぢめるのだ。

庄屋　えぢめるものか、かえゝがるのだ。

太郎　えゝ、此の庄屋の孫六爺め。

庄屋　これそんげな事をえゝもんぢやあねえ、えきにとつさんになるのだ、はゝゝゝゝ。（ト門口へ出て、）これ今もえう通り、おらが心に隨はねば、それだけの返報はけつとするからさう思へ、またうんとえゝて隨へば直に引取り樂をさせるわ、地獄へえくも極樂へえくも、お身らが心次第、迷はぬやうにせたがえい。（ト島唄になり、庄屋思入あつて、花道へはひる、跡兩人思入あつて、）

なぎ　これとつさん、德藏どのを迎ひに來たとは、まがうな事であるべいかなう。

ト嘉平次思入あつて、

嘉平　おゝまがうなこんだ〳〵、さつき村の歩きが來て、おらに知らせてえつたれど、われにえつたら

歎くであらう、一時でも遲い方がよかつぺいと、それでえま迄えはなんだ、さつきからの胸の痛みは、此話しをけえたゆゑだ。

なぎ　そんだら急に德藏どのは、國へ歸るのでござるかいなう。こりやどうすい〳〵。

嘉平　おゝ、尤もだ〳〵、其歎きがえやだから、それでおらあえはなんだ。

太郞　これおつかあ、なんで泣くのだ。

なぎ　これが泣かずにえられべいか。

トおなぎ泣伏す、太郞これに縋り居る、嘉平次これを見て不便といふ思入、時の鐘、床の淨瑠璃になる。

〽秋の日のつまにもいとゞ短きは、今宵限りに親と子や、二世の夫にはなれ島、わが家へ歸る德藏が、思ひは胸に滿汐の、磯端づたひ步み來て。

ト此內かすめて浪の音、花道より以前の德藏、思案の思入にて打凋れ出來り、花道にて、

德藏　此島へ流れて來て假にも十年こつちに馴染、明日の立ちゆゑ暇乞にあすこや爰へ顏を出し、思ひの外遲くなつた、つい門口からと思つたもちよと祝ひに箸を取れ、これをまゐれと勸められ、知らぬものまで目出度いと悅びを言はれる度、妻子の別れが胸に浮び、こつちで泣けば向うでも泣

いて別れて歸つて來たが、是れから家へ歸つたら、又一倍に泣かずばなるまい。

〽空は晴れても汐曇り、照す影さへ薄き緣、はなれ片戶のとぼそに佇み。

ト德藏思入あつて門口へ來り、どうせうといふ思入あつて、門口を明け、

おなぎ、今歸つた。

〽言ふ聲聞いて夫かと、見れば物をも得言はずに、わつとばかりに泣伏せば。

ト德藏の內へ入るを、おなぎ顏を見て泣伏す、德藏思入あつて、

顏を見ると物をも言はず、おなぎがわッと泣伏したは、扨はわしが身の上を。

嘉平　おゝ北條樣から迎ひが來て、國へけえるとえゝ事は、委しくけえてえるわいなう。

德藏　すりや私が歸國の樣子を、お聞きなされてゞござりましたか。

嘉平　あんにしても迎ひがきては、此上もねえ目出てえこんだ。（ト誂への合方になり、德藏眞中に住ひ、）

德藏　御存じの上からは、申さずともの事ながら、北條家より御重役の淺原小十郞樣といふお方が、殿樣の御意を受け、此の德藏を迎ひの爲め、波濤を越してお出で下され、有難い仰せを受け計らず故鄕へ歸ります次第にはなりましたれど、是れまで長い其の間お世話になりし親仁樣、また女房や忰にも別れませねばならぬ仕儀、たゞ是れのみが心掛り。

嘉平　おゝさうであらう〳〵、別れともねえのはお身よりも、おらが方が百倍だ、さつき此事をけえてから、只せえ痛めてふさがる胸、板のやうになつたわやい。

德藏　其歎きが思ひ遣られ、もう晝過ぎゆゑ歸らうと、汐路村の五右衛門樣へちよと暇乞ひに寄つたれば、家中が待つて居て、やれ德藏か仕合せな、國から迎ひが來たさうな、昔から此の島へ漂流したものが故鄕へ歸るは十分一、其中で歸るといふは、煎豆に花とやら、さあ小豆粥を炊いて置いた、それを祝つて行つてくれと、勸められても喉へ通らず、ほんの箸を持つたばかり、もう德藏にも逢はれぬかと、家中に泣き立てられ、淚ながらに暇乞ひ、それから山の小助どの、また石崎の吉藏どのと方々廻つて參りましたが、何處でも粥や飯を炊き、祝うてくれると泣かれるので、大きに遲うなりました。

嘉平　えや、これがならずもんなら誰も惜しみはせぬけれど、人に勝れたお身ゆゑに、他人でせえもそんでえに泣いて別れを惜しむもの、まして親子夫婦となつたおらが心はどうだんべい、產れてこの方一粒の淚あこぼさぬ嘉平次だが、今日ばつかりは泣かにやあなんねえ。

ト手拭口に嘉平次が、むせび入つて泣き入るにぞ、德藏は介抱なし。

ト嘉平次手拭を口にあてせき入る。

徳藏　おゝ御尤もでござります〱。これ〱おなぎ、湯があらう持つて來い。

なぎ　あい〱。（ト此内おなぎ泣き居て、）

〽心と共に榾の火も、消えて鑵子の湯は水と、なれどもあつい子の世話に。

とおなぎ鑵子の湯を茶碗に汲み持ち來り、嘉平次に呑ませる、徳藏は脊中を擦りゐる。

嘉平　おゝもうえゝ〱、つい咳上げて苦しかつた。

徳藏　此お歎きも徳藏ゆゑ、いつそ迎ひが參らずば、斯かる御苦勞は掛けまいもの。

〽歎くも側で知らぬが佛。

太郎　これとつさん、あんぞ土産をくんねえよ。

徳藏　おゝ、われに遣らうと、小助の所から貰つて來た物がある。

ト袂より薩摩芋を出して遣る、太郎取つて、

太郎　やあ、こりやえゝ芋だ、また明日貰つて來てくんねえよ。

徳藏　おゝ貰つて來てやらうとも、もつとぼつけなのを貰つて來て遣らう。

太郎　そいつア嬉しい〱。

なぎ　やい太郎、わりやあんにも知らぬけれど、最う明日からとつさんは土産を持つてはござらぬぞ。

太郎　そりやあんでな。

なぎ　お國から迎ひがけて、遠い所へ行かつしやるぞ。

太郎　行くならおらも一緒に行くべい。

なぎ　えつしよにえかれる位なら、此泣きはせねえけれど、えく事はなんねえわ。

太郎　おらあやだ〳〵、あんでもとつさんとえつしよにえくのだ。

〽足摺りなして泣き入るにぞ、徳藏背を撫でさすり。（ト徳藏太郎をだまし）

徳藏　これ〳〵泣くな〳〵、とつさんは何處へも行きはしねえ、今に一緒に寢てやるから、もう泣くな泣くな。おゝ泣き止んだか、おとなしい〳〵。

〽だまし賺して吐息をつき。（ト徳藏太郎をすかし思入あつて、）

これおなぎ、十年跡に此島へ漂流して來た時、緣でがな親仁樣のお世話になつて夫婦になり、子まで出來たりや一生涯この島に居る心なりしが、計らず北條樣からお迎ひにござつて、一度は故郷へ行かねばならぬといふ其譯は、常々からもおぬしにも話しておいたおれがお袋が永の病氣、それゆゑ今度のお迎ひと一緒に國へ行つて來るから、暫くのうち待つて居てくれ、然し大海の事なれば半月や一月で、歸るといふ譯にも行くまい、今年の暮か來年の春までには歸つて來るから

親仁様の介抱小僧が世話、面倒を見てくりやれ。

〽いふにおなぎは夫の顔、うらめしげに打見やり。

なぎ 是れまで迎ひの船がけて、けえる時にやあどの人も、そんげな事をえゝけれど、ひたゝびけえつてけたことのねえのは邊僻な放れ島、けえらぬのも無理ではねえ、漂流人の話しにけえたが、おめえの在所もえゝ所で、家もほつけだとえうこんだから、國へえつたら美くしいえゝごせへ呼ばつしやつて睦まじうさつしやるべい、そりよを振捨てゝおらがやうなこんな孫六と不自由な島へけえつて暮らされべいか、嘘でおめえがさう言やあ、おらあまがうに思ふから、今年はけえるか〳〵とけえらぬふとを待つ悲しさ、嘘ならそんな事を言はずと、明日別れたら是れ限り、最う逢はれぬとえゝ切つて、あきらめさしてくれさつせえ、なまじ情を掛けられるが、おらあ恨めしうござるわえ。

〽歎きくどくも島訛り、五音通ぜぬ片言に、結句誠のあらはれて、徳藏も泣く目を拭ひ。

徳藏 其疑ひも無理ならねど、人は兎もあれ此おれは歸らにやならぬ大恩あるゆゑ、誰便りもない離れ島、漂流して來た其時から、十年この方此命を繫いだは誰が蔭、親仁様とそなたゆゑ、言はゞ二人は命の親どう此儘に捨てられませう。とさあ、左程に思ふ位なら假令迎ひが來やうとも、歸ら

ずともに爰に居よといふであらうが、歸らねばならぬといふは今日が日まで、包み隱せし譯あつて。

嘉平　親女房に、この年月。

なぎ　包み隱せし譯といふは。

德藏　外でもない、是れでござります。

〽粮米櫃を足代に、梁に結びし竹筒の、他家に類なき篳篥を、うや／＼しく取出し。

ト德藏米櫃を足代に、屋根裏より竹筒を取出し、中より袋入りの篳篥を出し、

守りと僞り此の年月、梁に結びし竹筒の中に祕め置く此品は、平家の重寶にて、朝霧といふ希代の篳篥。

嘉平　をんだらそれが平家の寶、篳篥とやらいふものか。

なぎ　何で大事にさつしやるのだ。

德藏　それにも深き譯あること、一通りお聞き下され。

〽德藏はどつかと坐し。（ト德藏眞中へ住ひ、）

未だ平家盛んの時、小松の內府重盛卿嚴島へ參籠したまひ、辨財天へ奉納ありし此の朝霧の篳篥

を、北條殿聞き傳へ、御家臣淺原造酒之進殿嚴島へ使者に立ち、金子千兩奉納なし、此篳篥を乞
ひ求め、鎌倉へ歸路の船中。

〽頃は八月半のこと、九州一の大灘たる渦まく鳴戸の沖を越し、一夜明石に船繋り。
須磨の浦浪穩かなりしも、冴え行く月に叢雲の海賊入つて騷動なす。

〽折しも一天かき曇り、颶風の暴風吹き來り、數丈の浪に鳴戸まで、見る間に船を搖り流さ
れ。

〽岩に船底打碎かれ、ぱつと立つたる汐煙り、是れまでなりと人々も死する覺悟に淺原殿、
帆柱は折れ、揖はきかず。
主人が望みの此の篳篥、何卒無事に北條家へ屆けくれよとお頼みゆゑ、腹へしつかと結附くる。

〽間もなく船はばら〳〵、親の最期も跡白浪、浮きつ沈みつ板子を頼りに、艀の小舟へ
泳ぎ着き。
神の助けを力となし、流れ次第に此島へ流れ附いて命助かり、今日まで暮す其内も、北條家へ篳
篥を、差上げたく思へども、通路叶はぬ離れ島。

〽あだに月日を過せしに。

漂流船に便りをなし、此の篳篥のみ差上げんと思ふに測らず我までも、連れ參れよと北條家の殿命ある其上に、産みの母の九死一生、是非なく故鄕へ行かねばならぬ、殿樣の仰せもなく母の病氣もない事なら、此の歎きを餘所に見て、鬼でも故鄕へ歸られうか、かゝる仕儀ゆゑ許して下され。

ヘ過越し方の物語り、事を分けたる德藏が詞に親の嘉平次も、いなと言はねど女房は、流石女の愚痴になり。

ト此内德藏篳篥を使ひ、物語り模樣のこなしよろしく、嘉平次おなぎも思入あつて、

なぎ　そんげな譯なら仕方もねえが、おめえは國へ歸つたら久しく逢はねえ親に逢ひ、懇意にした人達とやれ珍らしい悅ばしいと、うから／＼と月日も過ぎ半年や一年は現の樣に過ぎますべい、おらあ爰に殘つてえて、人に悔みを言はれるばかりもこらへられたもんぢやあねえ、假令この島へ歸つて來るとえつたつて、病氣の親御を振捨てゝ誰がけえして寄越すべい、おめえがえくならおらもえつしよに行きたうても、此とつさんを打捨てゝえかれぬと同じこんで、親御を捨てゝ來られべいか、一年どつか三年でけえつて來るか五年でけえるか、なげえ月日の其内を今日か明日かと待つてえる、おらが心はどうだんべい、是れがふとり身のこんだらば、身でも投げておつ死ぬけ

れど、おめえが居にやあ親と子をおらが手で過さにやあなんねえ、これ徳藏どの、おらが心の苦しさを、思ひ遣つてくれさつせえ。

〽常は利發のやうなれど緣の切れ目に取り亂し、縋り歎くに徳藏も、今更何と詞さへ泣くより外の事ぞなき、始終見兼ねて嘉平次が。

ト此内おなぎ徳藏に縋り泣く、太郎嘉平次の側へ行つて寢ろ、嘉平次始終胸の痛む思入にて、

嘉平　こりや〱おなぎ、どうしたもんだ、われがやうにえつてはな、徳藏が困るわえ、漂流人を亭主に持てば此島にえる事が知れて迎ひが來れば、えつ何時でもそれが限り、別れることはせえしよから承知で夫婦になつたぢやあねえか、それにけさやあ大切な寶物といひ親御の病氣、どうでも歸らにやあなんねえ徳藏、此悲しみやあわればかりぢやあねえ、濱岸のおとらや山下のおくねもみんな亭主に別れたもんだ、三日でも徳藏と夫婦になつたはわれが仕合せだに、十年えつしよにはッ臥したは一生の徳といふもんだ、そんげに附いても徳藏をこんな邊鄙で果さすが氣遣えと思つたに、迎ひのけたは幸ひだ、こんな目出てえこんはねえ。泣くなよ〱、どんげに跡で難儀せうとも、おらが事もわが事も、ちつくりとも思はねど。

〽むけつちねえは此小僧、斯うなるせえかお身を慕ひ。

夜さりも一緒にはツ臥したが、明日から誰とはツ臥すべい、そんけが悲しいく〳〵わい。

ト此内嘉平次おなぎ、太郎へ思入あつて泣く、徳藏切なき思入、

徳藏　此の歎きを見ましては、一人國へは參られませぬ、小十郎樣へお願ひ申し、親子四人共々に同船して參りませう、故鄕に定まる女房もなければ、おなぎを直に女房となし、これまでの御恩送りは、國へ行つていたしませう。たゞ一つの難儀といふは、陸と違つて海上は秋の西風の風強く、浪に搖られた事ならば障るは知れた此の大病、もしもの事のあつた時は、あゝ徳藏が連れて行かずば、こんな事もあるまいと、跡で人に言はれるのが心苦しうござりまする。

嘉平　おゝそんけにえうは忝ねえが、瘦世帶でもこの濱でおらで七代續いた家、位牌所を潰すのも是れも先祖へ濟まねえ譯だ、就いては庄屋が意地惡るだから此島で產れた者ァ、他國へ出さねえなどとえつて、ぶつ留めるに違えねえ。

なぎ　とりわけておらが身は、夢にせえ見たことのねえ花とえはるゝ都へ行き、おめえとえつしよに添ふのだもの。

〽それは嬉しうござれども、眉毛も剃らぬ島人の變る姿に詞まで、都の人が聞いたなら嘸や
をかしうござるべい。
おらが人に笑はるゝは、そりやあさら〳〵えとはねど。
〽世界に女子もねえやうに、あんな者を連れて來てと、愛しいおめえが人様に、笑はれるの
が氣もしねえ。
今別れるもえやなれど。
〽行くのもえやでござるぞと、夫の耻を思ひわび、又さめ〴〵と泣きにける。

徳藏　人は眉目よりたゞ心と假令詞がをかしからうと、それは厭ひはせぬけれど、七代續いた位碑所を潰させては濟まぬ義理、達者であれば二人を連れ、親仁どのを殘して行けど、それも叶はぬ長の病氣、どうあつてもおれ一人國へ行かねばならぬから、どうぞ辛抱して居てくれ。

なぎ　それ程までいうてくれる、おめえの心が嬉しさに思ひ切つて待ちますべい、おめえも常からえつてえる庄屋どのがさつきも來て、えゝ事をきけばよし、えやだとえやあそんだけの返報せると、えはつせえたが、是れがふとつの氣掛りだ。

徳藏　其苦勞をさせめえと、おれが一緒に連れて行けば、位牌所を潰さにやあならぬ。

嘉平　おらが達者であるならば、假令庄屋であらうとも、無理はきかねど此の煩ひ。
なぎ　跡は女の手一つに、人の世話にならにやあならず。
徳藏　其難儀をば振捨てゝ、行かにやあならぬ故鄕の迎ひ。
嘉平　就いちやあ親御の病氣ゆゑ。
なぎ　留めてえ袖も留められぬ。
徳藏　是非も渚に打寄する、
嘉平　浪はけえれど、けえりさへ、
なぎ　えつを限りと夕浪の、
徳藏　果てなき海へ乘り出せば、
嘉平　是れが名殘りになるべいやら、
徳藏　思へば果敢ない、
三人　身の上ぢやなあ。
〽濱の眞砂の數よりも、盡きぬ名殘りの親と子が、名殘り小島のむら衛、共に啼く音ぞ哀れなる。（ト三人よろしく思入、此時下手蘆原の蔭にて）

島女
甲乙　はあゝゝゝゝ。（ト大きな聲して泣く。）
德藏　やあ、あの泣く聲は。
　〽見やるこなたの蘆原より、淚片手に以前の女。
　　ト蘆原の蔭より、以前の島の女甲、乙泣きながら出來り、內へはひり、
甲　これ德藏ごせ尤もだ、えとまゝ乙に出掛けて樣子は殘らずけえてえた、おらが先の亭主も漂流人であつたが、別れる時にやあ辛かつた、おめえやられて悲しうござる、別れともねえのは尤もだ〳〵わあゝゝゝ。
乙　これ〳〵そんげな短けえ泣きやうぢやあ、悲しいやうでござんねえ、わあ――わあ――。
　　ト乙の島女息を長く泣く。
甲　泣くのぢやあ村一番、あんでわれに負けべいぞ、わあ――、わあ――。
兩人　わあ――、わあ――。（ト兩人息を長く泣く。）
なぎ　おゝ、こりや二人の衆、よく泣きに來てくれさつしやつた。
兩人　これが泣かずにえられべいか、わあ――、わあ――。
嘉平　此島ぢやあ昔から泣く事があると近附に泣きに來るのが附合だが、もうえゝ加減に泣いたらば、

まみに歸つてくれさつせえ。

甲　これとつさん、人のこんよりおめえこそ、まみにはッ臥して仕舞つたらえゝ。

嘉平　えゝお身らも孫六な、日も暮れぬのにはッ臥せとは、あんの事だ。

甲　あんのことがあるものか、德藏どのがけえるたつて、何時けえるか知れやあせねえ。

乙　今から別れにしつぼりと、はッ臥させて遣つたがえゝ、おめえも若い時分にやあ、覺えがあるこんだらう。

嘉平　おゝこりやおれがけが附かなんだ、明日とえゝば今夜ぎり、さあ／＼まみにはッ臥したがえゝ。

德藏　いやまだ七ツにもなりますめえ、今から寢るにも及びますめえ。

甲　えゝそりやあんの事た、今からはッ臥せにやあ、もう明日の夜ははッ臥せねえ。

乙　これとつさん、そつちい向いてえねえのか。

嘉平　おゝ合點だ／＼。

〽二人の女が取出す、蒲團も薄き緣にて、今宵名殘りの島木綿、その藍縞や横道より、爰へ息せき生木綿の、庄屋の跡から渦丸が。

ト此内甲乙の女蒲團を出し兩人に寢ろといふ思入、嘉平次二枚打を前へ建てる、花道より以前の庄屋

太治兵衛先に、船頭文藏、渦丸足早に出來り、花道にて、

渦丸　もし〳〵庄屋さん、それぢやあ兄貴は急になつたかえ。

庄屋　おゝ夜明とえゝが今夜になつて、それでおらが迎ひにえくのだ。

渦丸　そいつあ、おれも行かにやあならねえ。

〽打連れ立ちて門口を、明ける間遲しと太治兵衛が。

ト三人舞臺へ來る、庄屋門口をはひりながら、

庄屋　これ〳〵徳藏、明日は風が變るべいから、今夜の汐に出帆せるゆゑ、徳藏を連れて來いと淺原樣のえゝ附けだ、さあ〳〵まみに支度さつせえ。

徳藏　すりや明朝とおつしやつたが、今晩になりましたか。

文藏　されば急ぎの御用ゆゑ殊の外お急ぎ、丁度風が追手ゆゑ、今夜爰を立つ積り。

徳藏　それはさつきふになつて來たな。

庄屋　いやほつけに急いでござるのだ。（ト文藏思入あつて、）

文藏　これ〳〵徳藏どの、あれにござるのが親御で、こちらのが御内儀かな。

徳藏　おゝ永々のうち世話になつたから、よく禮を言つて下せえ。（ト是れにて文藏前へ出て、）

文藏　これは〳〵始めましてお目に掛ります、私は文藏と申しまして、德藏が家の譜代の船頭、今夜迎ひの船へ乘つて參りましてござりまする。扨德藏どのが漂流して、永々のうちお二人樣の厚いお世話になりまして、何とお禮を申しませうやら、有難うござりまする。

嘉平　はい〳〵そんだらおめえが德藏の家の番頭どんか、やれよくござらつせえた、まあ〳〵こちらへござれ〳〵。

なぎ　今日は主の產れ日ゆゑ、米の飯イ焚きましたが、よばれさつしやつちやあどうだね。

文藏　有難うはござりますが今支度をいたしました、何を申すも今日來て今日立つので、お土產さへ忘れました。

渦丸　何にしろあんまり急だ、一日位は御猶豫を、して下さつてもいゝ事を。

庄屋　所が、えち日はおろか、えッ時でも待たれねえのだ。

甲　これ〳〵庄屋どん、今二人をはッ臥さして島の名殘りをせえる所だ、お身も女が好きぢやあねえか、ちつくり察してやらつしやい。

乙　日が暮れてからえつたとて、遲い事はあんべいから、目こぼしせてやらつしやいな。

庄屋　あんで〳〵、外の事ならちつくり位は容赦をしてやるべいが、はッ臥すこんだら待たれねえ、是

れから船へ乘る體、穢れがあつてはなんねえ〳〵、さあ〳〵まみに支度せい〳〵。

徳藏　只今支度をいたしますから、暫くお待ち下されませ。

へ徳藏は衣服を改め、嘉平次が前に手をつかへ。

徳藏　さて親仁樣、只今までは不思議な御縁で十ケ年の其間、長々命を繫ぎましたも全くお前樣のお蔭ゆゑ、其御恩を送りもせず、俄の迎ひに餘儀なくも、御病氣を見捨てましてお別れ申す不孝の段濟まぬ事ではござりまするが、北條樣の仰せゆゑ、是非なき事とおあきらめ下さりませ、徳藏めが命さへござりますれば、此の御恩きつとお返し申しまする。

嘉平　あんの〳〵其えゝわけには及ばぬ、成程漂流してけた其時は、ちつくり世話もせたけれど、そんげからあこなたの稼ぎ、おらが方で恩になつたのだ。あんにせえ百里から海を隔てた離れ島、ちつくり來ることア叶はねえから、忘れもんのねえやうに。

徳藏　いやもう着のみ着のまゝ參つた私、先刻ちよと暇乞に石崎の吉藏どのへ寄りましたら、此樣な晴着を餞別にお貰ひ申しました、これを晴着にいたしまして、此守りさへ持ちますれば、外に何にもござりませぬ。（トト篳篥の入りし竹筒を首へ掛ける、此内おなぎ泣いて居る。）これ、おなぎ。

なぎ　あい〳〵。(トやう〳〵顔を上げる。)
德藏　是れまで二人して稼いで居たが、明日からは親仁樣が煩つてござれば、纎弱い手めえの手一つで三人口を過さにやならねえ、大儀だらうが夜業をかけ、二人前の稼ぎをして、親仁樣の御介抱、小僧に怪我をさせぬやう、面倒を見てくれ。
なぎ　あい〳〵。(トしく〳〵泣き居る。)
德藏　これ渦丸、手めえに賴むは跡のこと、兄弟同樣にした誼、力になつてやつてくれ、其代り手めえの體はおれが呑込んで居る。
渦丸　そりやあ言はずとも跡の事は案じなさんな、是れまでおめえの世話になつた爰が恩の返し所、命にかけて世話をします。
庄屋　えや〳〵跡は庄屋のおらが役、手めえなんぞにさせるものか、指でもさすときくこつちやあねえぞ。
渦丸　なに、きかねえも凄まじい、うぬ等のやうなびりにこだはり世話をするのたあ譯が違はあ、兄弟が居にやあ一本立ち、地頭だらうが庄屋だらうが、命を捨てりやあ怖かあねえ、下手な事を吐かしやあがると、地獄へ一緒に抱いて行くぞ。

庄屋　うぬ、そんけな事を吐かしをつて。

渦丸　言つたがどうする、助兵衞庄屋め。

德藏　これ〳〵どうしたものだ、それぢやあ跡が賴めねえ、どんな腹の立つ事があつても辛抱して蟲を殺して居てくれにやあ、賴んだおれが安心ならねえ。

渦丸　さあ、いふめえとは思ふけれど、つい彼奴が面を見ると。

甲　これさ〳〵渦丸どん、德藏どんが氣い揉むから、

乙　孫六庄屋に構はつせるな。

渦丸　なに構ふ氣はねえが、あの面で家の姉御に。（ト言ひかけるを、）

庄屋　あこれ〳〵お船頭、大分風が出て來たぜ。

文藏　島からは追手ゆゑ、變らぬうちに出帆したい。これ德藏どの、せり立てるのも氣の毒ながら支度がよくば出掛けませう。

德藏　おゝ、もういゝから一緒に行かう。（ト嘉平次思入あつて、）

嘉平　支度がよくばえつたがえゝ、今日もお身の產れ日ゆゑ米の飯ィ炊いたれば、えちぜんえはつてえつてくれ。

徳藏　有難うはござりますが、今もお話し申したが、喉へつかへて通りませぬ。
嘉平　そんなら冷めたが、おめえの分に供へておいた此の膳部、箸ばかりでも取つて下せえ。
〽差出す膳部徳藏が、押しいたゞいて下に置き。
トおなぎ神棚の前にある膳を持つて來て、徳藏の前に置く、徳藏取つて戴き直に脇へ置き、
徳藏　左樣なれば親仁樣。
嘉平　おゝ兎に角風の荒い時分、怪我のねえやう信心して、無難に國へへえつてくれ。
徳藏　いえ、鳴戸浦の大難をのがれました此の徳藏、それも偏に守りの威德、是れを所持して居ります
れば、氣遣ひはござりませぬ。そんならおなぎ、もう行くぞよ。
なぎ　えゝもう行かつせへるのか。（トおなぎ徳藏を留めて、）徳藏どの、太郎にちつくり暇乞を。
徳藏　よく寢て居るからさうしておきやれ、結句起きたら跡を慕ひ、おれが行くのに困るだらう。
嘉平　おゝさうだ〳〵、どうで跡から見送りに行けば、其時逢はせてやつたがえゝ。
なぎ　それだといつて、むけつちねえ。
文藏　これ〳〵徳藏どの、御内儀さんがあゝ言はれるから、ちよつと逢つて行きなさい。
徳藏　それぢやあ寢顏でも見て行かう。

〽言ふにおなぎは抱起し。（トおなぎ寐てゐる太郎を抱きあげ、）

なぎ　これ太郎、目え覺さねえか、えつも目敏う起きるのに、今日に限つて、なぜ覺めぬのだ。

ト搖り起しても覺めぬゆゑ、此の時德藏ぢつと顏を見て、

德藏　今別れるのも知らずに、何か面白い夢でも見るかにこ〳〵と、まだ佛様だなあ。（トぢつと思入。）

庄屋　えゝ、えつまでぐづ〳〵せてえるのだ、淺原様のお待兼ね、さあ〳〵まみにえかぬかい。

〽せり立てられて是非なく〳〵、涙ながらに立上り。

ト庄屋德藏の手を取り引立てる、是れにて德藏立上り、

德藏　あゝ何時まで言つても、名殘りは盡きぬ。

嘉平　そんだら德藏、

德藏　親仁様、

渦丸　兄貴、

德藏　頼むぞ。（ト言ひ捨て行掛けるを、）

なぎ　もし。（ト袖を引くを、德藏振拂ひ、）

德藏　達者で居ろよ。

〽言ふを名殘りに立出れば、庄屋を先に文藏も、目には涙の滿汐や、袖に干潟も泣き別れ、見送り見返り別れ行く。

ト此内薄く浪の音を冠せ、德藏思ひきつてつか〳〵と門口へ出る。跡より庄屋文藏島の女甲乙附添ひ花道へかゝる、おなぎ渦丸見送る、德藏花道より振返り見ようとするを、庄屋邪魔をする。甲　乙袖を引き泣く思入、此仕組よろしく、德藏トヾ思ひ切つて花道へはひる。是れまでおなぎ延上り見て居て、此時わつと泣伏す。

渦丸　さあ〳〵姉御、泣いて居ちやあいかねえ、是れから見送りに行かにやあならねえ。さあ〳〵支度しねえ〳〵。

なぎ　あい〳〵。（ト嘉平次思入あつて、）

嘉平　そんだら德藏は、もうえつたか。

ト庭屛風へ手を掛け、延上り向うを見ようとして、屛風ひつくりかへり嘉平次どうと轉ぶ。

渦丸　あゝ危ねえ、どうしたのだ。（トびつくりして抱起す、おなぎも側へ來り、）

なぎ　何處ぞ打ちやあせねえか。（ト嘉平次起上り思入あつて、）

嘉平　此身に怪我はなけれども、案じらるゝは。（ト嘉平次以前の膳を取つて、）

なぎ　え。
渦丸　蔭膳を据ゑてやりやれ。
嘉平　〽跡を案じる親心、惠みは深きわだつみの、汐に引かるゝ
ト嘉平次咳入るを渦丸介抱なす、おなぎは膳を持ち、向うへ思入よろしく、三重浪の音にて、

幕

ト浪の音にてつなぎ、直に引返す。

大詰　夕日ヶ岡船別の場

〔役名――桑名屋德藏、親嘉平次、鳴戸の渦丸、淺原小十郎、庄屋太治兵衞、船頭文藏、水主、若黨。女房おなぎ、一子太郎。〕

（海岸船別の場）――本舞臺後一面浪幕、此前小高き濱手の地がすり、上下とも蘆原、下手磯馴松、日覆より釣枝、總て小島海岸の體、爰に水主四人何れも柿の筒ッぽう脚絆三尺のこしらへ、莚を敷き、此上にて煙草を呑み居る、この見得浪の音にて幕明く。

一　これ〳〵みんな遊んぢやあ居られねえ、俄に今夜出帆と極つたぜ。

二　今朝から東南風が吹いて居るゆゑ、今夜はどうで此の島に、風待ちかと思つて居た。

三　然し爰に遊んでゐても、樣子の替つた放れ島、喰物のねえには困るよなあ。

四　其上女郎を買ふこともならず、是れぢやあちつとも早く出帆をするがよからう。

一　何にしろ文藏が暮合から變ると言つたが、そろ／＼南になつて來たぜ。

二　腕づくぢやあ負けねえが、日和を見るのは年の功、文藏にやあかなはねえ。

三　是れから鎌倉へ百里あるが、南で受けりやあ一走り、明日の晩は港入りだ。

四　來るにも都合がよかつたから、行くにもいゝに違えねえ。

一　海の上は風次第、拍子がよけりやあ骨も折れず、長い錢が取れるけれど。

二　一ツ拍子惡い日にやあ積込んだ物ばかりか、命まで捨てにやあならねえ。

三　この德藏親方なども、鳴戸浦で旣に命を捨てる所だつたが。

四　斯うして故鄕へ戻るのは、なんたる運のいゝことか。

四人　こんな目出てえ事はねえ。（ト此時法螺の音する）

一　や、あの法螺は出船の知らせ、帆の支度でもしておかざあ、又文藏が小言をいふぜ。

二　違えねえ、あの親仁位口やかましい奴はねえ。

三　何にしろ船へ行つて綱調べでもして、一杯やらう。

四　その事〳〵、酒と聞いちやあ早いがいゝ。

一　さあ、みんな來さつし。

ト浪の音になり、四人上手へはひる。浪の音打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽打寄する磯邊の松に琴の音も、通ふ筑紫の船出の、岩に碎くる浪よりも、思ひも深き德藏が、伴ふ淺原小十郎、庄屋の案内に歩み來て。

ト時の太鼓になり、花道より以前の庄屋小腰を屈めて先に立ち、淺原小十郎、德藏、文藏、若黨二人附添ひ出來り、直に舞臺へ來り、

庄屋　お出での趣き船中へ、申入れます其間、暫くお待ち下さりませ。

小十　如何にも、休息いたすでござらう。（ト誂への合方になり、文藏床几を直す、小十郎是れに掛かる。）いやなに德藏、さて其方は幸運な事ぢや、十年跡鳴戸浦にて死去いたせし事とのみ皆思ひ居つたるに、此島にて露命を繫ぎ、此度故鄕へ歸るといふは、再生なしたも同じ事ぢや。

德藏　假令一命ござりましても、北條樣の御意がなければ、此島にて果敢なくも相果てませねばなりませぬ、計らずお迎ひを受けまして、十年振りにて故鄕へ歸り、母に對面いたしまするのも、全く

北條樣の御蔭ゆゑ、有難い儀にござりまする。

小十　いや其方も悦ばしからうが、此方とても亡き物と思ひし名器の篳篥、再びお家の手に入りて賴朝公へ差上げれば、此上もなき北條家の譽れ、是れと申すも其方が大灘を泳ぎぬき竊に守護なし居つたるゆゑ、嘸かし殿にも御滿足、歸國あらば御褒美のあらん。

德藏　恐れ入つたる其のお詞、冥加至極にござりまする。

庄屋　あゝ近くば庄屋も御褒美の、分前を貰ふべいに。

文藏　慾張つたことを言はつしやるな。

庄屋　いやなに船頭、最早御乘船召さるゝが、船中の用意はえゝかな。

文藏　今朝出船なす所風の工合にて大きに延引、夜明に受ける積りゆゑ、用意は整ひ居りまする、私めが參りまして、御案内いたしまする。

庄屋　おゝ、それがえゝ、まみにさつせえ。

文藏　畏りました。

〽畏まつたと船頭が、船場をさして行く折しも。(ト文藏上手へはひる。)

〽おなぎは我が子を背におぶひ、力と賴む渦丸を杖に親仁の嘉平次が、よろぼひ來るを德藏

見やり。

ト此内浪の音を冠せ、花道より以前のおなぎ太郎を背負ひ、嘉平次以前のなり、鉢卷をして杖に縋りよろぼひながら、出來り、跡より渦丸風呂敷包みを背負ひ、小さき竹へ籠提灯を結び附けて是れを持ち、嘉平次をいたはりながら出來り、直ぐ舞臺へ來り、

渦丸　や、おめえは兄貴。

嘉平　おゝ、徳藏か。

太郎　とつさんや〳〵。

なぎ　徳藏どの。(トおなぎ縋る。)

皆々　逢ひたかつた〳〵。

〽縋り附かれて徳藏は、何といらへも胸一杯、怪我はなきかといたはれば、扨はうからと察する淺原、庄屋は側から目に角立て。

ト徳藏嘉平次を介抱する、おなぎ太郎をおろし、徳藏に縋り附く。小十郎不便と思ふこなし、庄屋側へ寄り、おなぎを突きのけ、

庄屋　やい〳〵さつきも名殘りをせたでねえか、又もや是れへうせ居つて、御乘船の邪魔アせるか、淺

原樣の御前なるぞ、置くことなんねえ歸りをらう。

〽おなぎを突きのけ嘉平次を、足蹴にかければこらへぬ渦丸、これを止むる德藏を見兼ねて

淺原聲を掛け。

ト庄屋おなぎを突きのけ、嘉平次を蹴倒す。渦丸うぬと立掛るを、德藏留める。小十郎思入あつて、

小十　こりや〳〵庄屋、德藏が家族とあらば苦しうない、其儘にいたせ。

庄屋　でも、是れへ置きましては。

小十　はて、身共が許す、控へて居よ。

庄屋　へゝい。（ト庄屋控へる。）

小十　これ德藏、それなるは家族のものか。

德藏　御意にござりまする。

小十　定めし見送りに來りしならん、遠慮に及ばぬ名殘りを惜しめ。

嘉平　へい〳〵、お慈悲深い旦那樣、德藏に暇げえを、

なぎ　お許し下せえまして、

兩人　有難うござります。

小十 おゝ、心置きなくゆつくりと、暇乞いたしたがよい。

〽言ふにいそ〳〵磯端へ取り出す包み渦丸が、氣轉さかして敷物も、船の莚を一二枚、三人四人打寄りて、

ト此時おなぎ包みを出し、どうせうといふ思入、渦丸以前の莚を敷き、小十郎へ辭儀をなし此上へ住ふ、此内庄屋思入、

なぎ これ徳藏どの、跡で太郎が目を覺し、おめえに逢ひてえと泣いて困つたがな。

渦丸 それ、とつさんに抱いて貰へ。（ト太郎を徳藏の傍へやる。）

太郎 とつさん、抱いてくんねえよ。

徳藏 おゝ抱いてやらうとも〳〵、ようおとなしうして來たな。（ト太郎を抱き、）いや、よくと申せば親仁樣、どうして爰までござりました。

嘉平 さあさつきえとま乞をせたゆゑに、おらあ來めえと思つたが、お身が目出たく國へえくに杯をせるを忘れたから、渦丸どのゝ肩にかゝり、杖エ便りに爰まで來たは、もうえつぺんえひてえからだ。

徳藏 そりやあよく來て下さりました、爰まで來るも山坂道、嘸渦丸が困つたであらう。

渦丸　なに、とつさんも逢ひてえのだから、思ひの外歩けたよ。

ト此内おなぎ風呂敷包みより、重箱、徳利、杯を出し、

なぎ　これとつさん、もうお日様が落ちかゝつた、杯ぢやあどうだね。

嘉平　おゝさうだ〳〵、暮れぬ内にしますべい。もし旦那様、許さつせえまし。

〽挨拶なして取り上ぐる、昔蒔絵の缺け杯、徳利にひゞも入相の、かねてたしなむ放れ重、肴ばかりぞ新らしき。

ト此内床の合方にて、おなぎ重の蓋を明け、嘉平次杯を取上げる。おなぎ心得、徳利を取りつぐ、嘉平次呑んで徳蔵にさし、

徳蔵、目出度くさします。

徳蔵　有難うござります。

嘉平　おなぎ、ついでやりやれ。

なぎ　あい。（トおなぎ酌をする、嘉平次思入あつて、

嘉平　あゝおめえ出せば十年跡、これのおなぎの婚禮に取交した杯も、今この別れの杯に替りはねえが替り果てたるおらが身の上、年の上の大病に力と思ふお身に別れ、がつかりさせた事なれば、所

詮おらあ助かんねえ、これが別れになるべいよ。（と徳藏杯を下に置き、）

徳藏　えゝ詰らねえ事を言はつしやりませ、人の命はみんな定業、いくら死にたいと思つても、命數盡きぬ其うちは死ぬ事は出來ませぬ。あゝそんな氣の弱い事をいふお人ぢやあなかつたが、どうぞわしが歸つて來るまで、氣をしつかりと親仁樣、達者で居て下さりませ。

嘉平　えや／＼定業とえへどふとつは養生、疾うからおらあごねる氣で、念佛えつぺん唱へぬもんが、これ見てくれ、此やうに珠數ゥ手へ掛けて念佛ばかり申してえらあ。

なぎ　氣の強えとつさんが、打つて替つてあんねえにごねると言はつせるが、おめえといふ便りがあるゆゑ心細くもなかつたが、便りに思ふおめえに別れ、又とつさんに別れたら、おらあどうしますべい。

渦丸　此とつさんが達者なら、おれが引受けどこまでも命にかけて世話するが、もしもの事がある時ァ男一人、女一人、姉御もおれも若い身に幾ら世話がしたくつても、人目がありやあ出來もせず。

嘉平　それにやあそこらにえる人が、あんのかんのと言ふであらう、そりやあきかずばどのやうな慘えことをせようも知れぬ、あゝそれえ思へば死にたうもなし、生きて居たら猶厄介、どうしたらよかろべい。

〽子ゆゑに迷ひ兎や角と、思ふも心にふさがる胸。（ト嘉平次胸を押へ苦しき思入。）

なぎ　これとつさん、どうさしつた。

嘉平　また胸へ差込んでけた。

渦丸　あんまり氣をば揉むからだ、しつかりと氣を落着けたがえゝ。どうだ〳〵。

ト兩人して背中をさする、此内德藏杯を下に置きぢつと思入。

嘉平　あゝ、もうえゝ〳〵。これ德藏、えつまで杯ィ下に置くんだ、まみにおなぎへやらぬかい。

德藏　はい、遣りますでござりまする。（トぐつと呑んで、）さあ、おなぎ。（トさす、おなぎ取上げ、）

なぎ　そんだら、是れが。（ト親仁が案じるといふ思入あつて、）目出度うござる。（ト呑んで咽せる。）

〽これが別れの杯と、思へば胸もせき上げて。

太郎　おつかあ、おらも呑みてえ。

德藏　おゝ遣るとも〳〵、それその杯を遣つてくれ。

なぎ　あい〳〵。こぼすなよ。（トおなぎ太郎に杯を持たせ、ついでやろ、太郎呑んで、）

太郎　あい、とつさん。（ト德藏にさす。）

德藏　おゝ、おれにくれるか。（ト呑む眞似をして、）不思議な緣でこれまでは、兄弟同樣にしたが、これ

が別れの杯だ。（ト渦丸にさす、おなぎ酌をする。）

渦丸 兄貴、言ひてえ事は幾らもあるが、言やあ餘計に涙の種、おらあ何にも言はねえよ。

（流石男の無一克、言はぬは言ふに彌増して、心のうちぞ哀れなる。（ト渦丸ぐつと呑んで、）

目出度く納めてくんねえ。）

〽始終を見て居る太治兵衞が、怺へかねて大聲揚げ。

ト渦丸徳藏へ杯をさす、兩人顔見合せて氣味合の思入、庄屋つか〳〵と出來り、

庄屋 やい〳〵、えつまで言つても同じこと、別れの杯ィ濟んだらば、まみに家へ歸つたがえゝ。めろめろと吠面かはいて、祝ひにえはふ御出船、涙は不吉だ歸らぬか。

なぎ これさ、徳藏どのが船へえくまで、爰へ置いてくれさつせえ。

庄屋 えゝ置くことはなんねえ、えけと言つたらえかぬかえ。

小十 これ〳〵庄屋、一生の別れなれば、彼れ等が心の殘らぬやう、出船まで置いてやれ。

庄屋 へい。

渦丸 今度は一番凹まされたな。

庄屋 何だと。

渦丸　ざまあ見やあがれ。（ト浪の音になり、以前の文藏上手より出來り、）
文藏　最早入日になりますれば、御乘船なされませ。
小十　おゝ承知いたした。德藏、支度がよくば共々に
德藏　畏りました。（ト嘉平次の側へ來て、）左樣なれば親仁樣、最早お船が出ますから、是れでお別れ申しまする。
嘉平　そんだら、もういかつせえるか。（ト德藏の手を取り、）あゝ、所詮この世ぢやあもう逢はれめえ、冥土の土產にお身が顏、とつくり見せてくれさつせえ。
德藏　またそんな事を言はつしやりますか、なに逢はれねえ事がありませう。それぢやあ手めえも達者で。
渦丸　おゝ跡の事は案じなさんな、命にかけておれがするから。
德藏　然し短氣な事をして、體をしまはねえやうにしてくれ。
渦丸　なに、けんのんな事はしねえ。
德藏　必ず迎ひを待つて居てくれ。（ト是れにて渦丸は名殘りを惜しむ思入あつて、）
渦丸　おい兄貴。

徳藏　何だ。

渦丸　達者で行きねえよ。

徳藏　おゝ手めえも煩はねえやうにしろ。

渦丸　おい兄貴、

徳藏　何だ。

渦丸　達者で行つてくんねえよ。

〽泣かぬ顏して渦丸が、涙呑み込み苦しさの、思ひは同じ徳藏が。

ト渦丸涙を呑み込み泣く思入、徳藏切なき思入あつて泣き居て、おなぎの傍へ行き

徳藏　これおなぎ、おらあもう行くから、暮れねえうちに早く歸れ。

なぎ　そんだらもう乘らつせるか、別れる積りでけえ卷や地染の袷持つて來たが、今となつちやあ別れともねえ、どうぞとつさんを見送るまで、爰に居てくれさつせえ、とてもの事に快く往生させて進ぜてえ、今この儘でおめえに別れ、跡で死んだらとつさんは行くところへ行かれめえ、無理な事だが居て下せえ、別れる心で見送りに爰まで來たが、今となつちやあ、どうも此儘別れともねえ。

德藏　尤もだ〳〵、私ならぬお上のお召し、是非とも行かねばならぬ德藏、あれ程さつき聞きわけて、待つて居ると言つたではないか。

なぎ　そりやあどうでもおめえに別れ、とつさんに別れたら、跡に殘つたおらと太郎は、どうしますべいどうしますべい。

〽譯も涙にかき口說かれ、尤もなとは思へども、小十郎が手前を恥ぢ、德藏態と聲荒らげ。

トおなぎ德藏に縋り泣く、德藏困る思入にて、小十郎と顏見合せ思入あつて、

德藏　左程未練な根性とも思はなんだが、見下げ果てた。さあさら〳〵無理とは思はねど、いやさ、淺原樣の手前といひ、德藏づれの女房とてあんまりな未練な奴、命を捨てる戰場へ武士の出る時は待てと留められようか。えゝ放せ〳〵、放せといふに。（ト德藏おなぎを振拂ひ、）いざ、御同船仕りませう。

〽言ふを小耳に德藏の、袖に縋りて幼子が。（ト德藏立掛るを、太郎袖にすがり、）

太郎　とつさん、一緒にえくべいよ〳〵。

德藏　あこれ、手めえは跡に殘つて、おつかあと一緒に居るのだ。

太郎　おらあいやだ〳〵、一緒にえくべい〳〵。

徳藏　えゝ聞きわけのねえ、抓りあげるぞ。
太郎　抓られてもえゝから、一緒に行くべいよ。
徳藏　えゝ、連れて行かれねえといふに。
太郎　行くべいよ〳〵。

〽放れがたなき幼子を、心を鬼に突き放せば、また取縋り泣き立てられ、切るに切られぬ恩愛の、絆にその身を締め搦まれ、うんとばかりに親女房癪に苦しむ介抱も、我が手一ツに渦丸が、共に苦しむ憂き思ひ、側の見る目も哀れなり。

ト此内徳藏思ひ切つて太郎を突倒す、わつと泣きながら起き上つて縋り泣く、これを見て嘉平次苦しむ、渦丸介抱する内おなぎうんと倒るゝ、渦丸これを抱き起すと、又嘉平次倒れる、渦丸困る思入、小十郎扇にて顔を隠し涙を拭ふ、是れを見て徳藏行かうとする、前より太郎縋る、徳藏苦しき思入、太郎をいたはり小十郎に向ひ、

徳藏　淺原樣へ徳藏が、一つのお願ひがござりまする。
小十　なに、願ひとは何事なるぞ。
徳藏　外の儀ではござりませぬが、只今御覽なさるゝ如く、十ケ年が其間世話になつたる嘉平次が、明

日をも知れぬ大病に、女房おなぎが癪氣の惱み、その介抱も渦丸の手一つにて困るといひ、また頑是なき悴めが袖に縋りて跡を追ひ、三方四方見捨てがたく、腑甲斐ない料簡と思召もござりませうが、大切なる篳篥をあなた樣にお渡し申せば、別に用なきこの德藏、何卒この儘此島へお置きなされて下さるやう、お願ひ申しまする。

〽事を分けたる德藏が、願ひも聞くに聞かれぬは、主命ゆゑに小十郎共に其身も憂き思ひ、

ト德藏よろしく思入、小十郎これを聞き、せつなき思入あつて、

小十　願ひの趣き此儘許してやりたきものなれども、殿の嚴命蒙りて迎ひに參りし小十郎、無慈悲な者とも思はうが、主命はもだし難し、不便には存ずれども、此の願ひは叶はぬぞ。

德藏　左樣なれば德藏は、島で死んだと仰せあつて。

〽言ふを文藏半分聞いて。

文藏　これ親方、そりやあ何を言はつしやる、淺原樣のお口から死んだと言つたら一生涯、お上へ對してこなさんは、もう故鄕へは歸られぬ、こちらの親の恩もあらうが、實の親にも恩があらう。德太夫どのゝ死なれてから便りない身の母親が十年この方長煩ひ、明暮息子は〳〵と寐た間も忘れぬ親心、こなたが死んだといつたらば、直にこれも死なつしやらう、大恩ある産みの親を見殺し

にさつしやるか。（ト嘉平次これを聞き思入あつて、）

嘉平　これおなぎあれを聞いたか、德藏がけえらねば十年この方煩つてえる、親御が死ぬと言はつしやる、國へ遣らにやあ義理が濟まぬ、たつてと言えばあれが體二ツにせねばならぬゆゑ、定めて別れにくからうが、思ひけつて別れてしまへ。

なぎ　さあ。

文藏　それとも母御を見殺しにしても、此島へ殘る心でござりまするか。

德藏　さあ。

嘉平　此儘留めて置く時は、島人ゆゑに義理を知らぬと、おらまでもお身は笑はすか。

なぎ　さあ。

文藏　思ひ切つて國へござるか。

德藏　さあ。

嘉平　どうあつても別れられぬか。

なぎ　さあ。

嘉平
文藏　さあ、

四人　さあ〳〵。
嘉平　ふッつりとおめえ切り、
文藏　國へ行かねば、今日の、
嘉平　天道樣へ、
文藏 嘉平　濟むまいが。
德藏　む丶。
なぎ　はあ丶丶丶丶。

〽義理ある親と產の親、恩は二瀨の汐境、海は百里を隔つれど、隔てぬ心德藏おなぎ、胸に浪打つせつなさを、側の見る目もいぢらしく、我身に汲んで藻汐草、煙りもたゆるばかりにて、淚果てしも長汐の、桶にあふる丶如くなり。

ト此內德藏おなぎ切なきこなし、嘉平次文藏尤もだといふ思入、渦丸小十郞、愁ひのこなし、おなぎ思ひ切つたる思入にて、

これとつさん、おらあおめえ切りました。

〽わつとばかりに、

嘉平　おゝよく思ひけつた、出來した〳〵。さあ德藏、おなぎは思えけつたといふから、跡構はずとえかつせえ。

德藏　左樣なら暫くのうち、どうぞお暇下さりませ。（ト此内庄屋思入あつて、）

庄屋　えゝほんに〳〵孫六な奴ばかり、行かうとえゝなら、さつさとやつてせまえばえゝ事を、明日から喰ふに困るも知らず、親仁がごねたらあんとする、えやでも應でも此庄屋が、言えことをけかずばなるめえ。

〽言ふに又もや癪の種、金は藥と知りながら、手當に困るを見て取る淺原。

トこれを聞き、おなぎ嘉平次顏見合せ、是れには困るといふ思入、德藏も金を遣りたきこなし、小十郎思入、

小十　おゝこりや〳〵德藏、最前より其方へ遣はさうと存じ居つた旅の用意の此の金子、些少なれども我が寸志、受納いたしてくれ。

ト懷中より包み金を出して遣る、德藏取上げ、

德藏　すりや、此の金子を。

小十　漂流なして十ケ年、命繋ぎし大恩の嘉平次親子の者共が、跡の難儀のないやうに置土產にいたし

て行きやれ。

徳藏　はゝ、有難うござりまする。旦那樣のお志し、ようお禮を申して下され。（ト金を嘉平次に渡す。）

嘉平　只何事も皆金づく。

渦丸　これさへあれば跡々に。

なぎ　何の苦勞もござりませぬ。

三人　えゝ有難うござりまする。（ト三人小十郎へ辭儀をなす、此時寺鐘を打込む、）

徳藏　ありや法樂寺の、暮の鐘。

小十　最早黄昏、片時も早く。

文藏　風も追手になりますれば、

小十　直に乘船仕らん。

庄屋嘉平　左樣なれば淺原樣。

なぎ渦丸　御機嫌よろしう。

小十　おゝ達者で居やれ。

〽物の哀れも身に知りて、情も深き淺原は、船の內へぞ入りにける。

ト浪の音を冠せ、小十郎先に文藏若黨附いて上手へはひる、皆々跡を伏し拜み、

〽跡に無慈悲な太治兵衞が。

庄屋　さあ〳〵德藏、まみに行かぬか、小十郎樣がござつたに、何をぐづ〳〵せてえるのだ。

德藏　へい、此小僧を欺しまして。

庄屋　えゝ、太郎などはどうでもえゝわえ。

〽襟上取つて引き退くるを。

嘉平　えゝこれ、そんげな手荒いことを。

〽寄るを立蹴に蹴倒せば、こらへぬ氣早の渦丸が。

ト庄屋嘉平次を蹴倒す。おなき抱き起す、德藏庄屋を留める、渦丸割つて出で、

渦丸　うぬ、さつきから此手がむづ〳〵して、こたへられねえ、どうするか見やがれ。

ト片肌ぬぎて立掛るを、德藏留める、

德藏　これ其短氣を出してくれちやあ、おれが賴んだ甲斐がねえ。

渦丸　それだといつて。（ト悔しき思入。）

庄屋　さあどうともせろ〳〵、漂流人が分際で、此島の束ねえせる庄屋に、拳を當てたらば人殺しも同

じこんだ、丸いゝほだァおッぱめて、轂留めえして干殺すぞ。

渦丸　殺されるなら殺して見ろ、おればかり死ぬものか、うぬも一緒に連れて行くぞ。

庄屋　えゝ、又そんげな事を吐かし居るか。

〽摑みかゝるを渦丸が、留めるもきかぬ滅多打ち、眉間に當つて流るゝ血汐、見るより庄屋はびつくり仰天。

や、おのれ此庄屋に疵附けたな、えゝ血が出るわえ〳〵、ふとい目に合せ居つたな。

〽命から〴〵。（ト庄屋花道へ行く。）

えゝ血が出るわ〳〵、おのれ今にどうするか覺えてえろよ。

渦丸　何だと。

庄屋　いや、何みろちやあ。

〽えゝゝゝゝ。（ト庄屋花道へはひる。）

渦丸　うぬ、待ちやあがれ。（ト跡を追ひ行かうとするを、）

德藏　是れほどおれが留めるのに、何で疵を附けたのだ。

渦丸　それだと言つて、因業だから。

徳藏　それが惡い料簡だ。
〽留める折柄文藏が、提灯提げて船より出で。
ト此時上手より、文藏提灯を持ち出來り、
文藏　これ〳〵息子どの、旦那樣がお待兼ね、さあ〳〵早く乘らつしやい。
嘉平　これ〳〵おなぎ、もう船へ乘るさうだから、持つて來たもん渡すがえゝ。
なぎ　あい〳〵、ちつくり待つてくれさつせえ。
〽包みとく〳〵取出し。（ト着物と搔卷木綿の反物を出し、）
洗つて置いた着物と、けえ卷い持つて來た。こりやあ年の尾の米にすべえと織つて置いたお國縞
親御に土産にせて下せえ。
徳藏　船は寒いから、搔卷と着物は貰つて行かうけれど、こりやあ置いて大晦日の、米にしたがいゝぢやあねえか。
なぎ　さつき貰つたお金もあるし、こりやあおらが志し、どうぞ持つて行つてくれさつせえ。おゝまだ〳〵大事のこんがあつた、昔から別れの時は、指輪を遣るが島の習へ、邪魔でもあらうが指へはめて國へ歸つた其後も、これを見ておらが事を、忘れねえやうにしてくれさつせえ。

〽島の習ひに眞鍮の指輪を、二世の固めぞと、渡せば取つて指へはめ。

　トおなぎ指輪を取つて德藏へ渡す、德藏取つて藥指へはめ、

德藏　おゝこれを朝夕そなたと思ひ、百里の道は隔つとも一緒に居る心だぞ。

なぎ　えゝ、嬉しうござる。（ト是れを聞き、太郎見て居て）

太郎　とつさん、おらも遣らう。

〽指輪を取つて差出せば。

德藏　こりやあ手めえが好きなもちやそび、ちやんはいゝから持つて居ろ。

太郎　いや〳〵、こりやあおめえの指へはめ、おらだと思つてくれさつせえ。

德藏　おゝ。（ト德藏太郎を引附け）なに頑是ねえ子心にも、神が言はすか。

〽不便なものやと抱き締め、咽び入りてぞ泣きければ、見る人々も胸つぶれ、またもやしめる汐曇り、果てしなければ文藏が。

　ト德藏指輪を小指へはめ、太郎を抱きしめ泣く、嘉平次、おなぎ、渦丸、太郎へ指さしをして泣く、文藏涙を拭ひながら、思入あつて、

文藏　あゝ此悲しみを引分けるは、鬼のやうだがさつきから、旦那樣がお待兼ね、早う船へ行つて下さ

れ。
嘉平　おゝさうだ〳〵、えつまで言つても名残りは盡きねえ。
なぎ　もう思えけつて留めねえから、まみに行つてくれさつせえ。
德藏　おゝ、おれも行くから、みんなも早く。
文藏　然しこれから暗いのに。
渦丸　歸りはどうで暮れやうと、提灯を持つて來た。（ト言ひながら以前の籠提灯を出し、燈火を附けて、）
〽ともし火かりて竹の先、これが別れの印ぞと、籠提灯を差上げれば、それと見るより悦ぶ幼子。（ト渦丸以前の竹へ提灯を結び附け差上げる、太郎是れを見て悦ぶ。）
太郎　やあ、こりや面白い〳〵。
渦丸　さあ〳〵、これを持つて遊ばう〳〵。
太郎　おらにくんねえ〳〵。（ト是れを取らうとする、渦丸思入あつて、）
渦丸　これ兄貴、此間に早く。
德藏　おゝ合點だ。
〽心強くも立上れば、是れをと妻が差出す、契りも薄きかい巻や、地染袷の裏表、放れとも

なき砂際へ、さし來る汐に是非なくも、引き別れてぞ別れ行く。

ト文藏先に德藏立上る、おなぎ搔卷を出す、德藏取つて文藏に渡す、文藏肩へ掛けて上手へはひる、おなぎ袷を取つて出す、德藏取らうとする、おなぎこれを引合ひ、名殘を惜しむ、よき程に浪の頭を打込む、これにておなぎびつくりなして手を放す、德藏袷を抱へつか〳〵と上手へはひる。おなぎ泣き伏す。嘉平次跡を見送る。渦丸こなしあつて、

渦丸　そんならもう船が出るのか、とつさんや姉御に別れ、兄貴は嘸ぞ跡へ心が殘るだらう。

なぎ　其思ひはおらも同じこと、こんな事のある端か、日頃太郎がとつさん〳〵と側を離れず、德藏どのに引つ附いてばかりえた、明日からあつぱの中で遊んでも、とゝうのねえ者と言はれ・慘い目に逢ふであらうと思へば、それが不便でござるわいなう。

渦丸　これ姉御どうしたものだ、さう泣いてばかり居ちやあ出船の祈禱にならねえ、兄貴が怪我のねえやうに、さあ是れから內へ歸つて、神棚へ御神酒でも上げたがいゝぢやあねえか。（ト浪の音になり雨落より浪手摺を引き上げる、）さあ〳〵、大變だ〳〵、汐が來た〳〵。

嘉平　おゝ爰にはゐられぬ、肩ァかしてくれ。

なぎ　あい〳〵。（ト是れにて出語り臺の霞幕を切つて落し、四人の出語りになり、）

〽折しも秋の夕汐に、追はれ〳〵て思はずも、心残れど別れ行く、老の足元磯端の石につまづきばつたりと、轉ぶ途端に出る船の。

ト此内おなぎ嘉平次を肩へかけ、振返り〳〵行く、渦丸は太郎を背負ひ提灯を持ち、徳藏に見せる心にて上へあげ、花道へ行く。嘉平次轉ぶ、浪の音を打込み、後の浪幕を切つて落す。向う羽目通り一杯海原の遠見、灯入り誂への月、これと一緒に向う正面を打返し、遠山の切出しになり、舞臺眞中に誂への親船、帆柱を立て、帆を揚げようといふ模樣、徳藏小縁へ手を掛け、向うを見込んでゐる見得、船ぢり〳〵と廻る。

〽四鳥の別れ徳藏が、小縁に手をかけ伸び上り、親や妻子の呼ぶ聲に、飛び立つ思ひこなたにも。（ト淨瑠璃に冠せ、双方にて呼ぶこと、）

徳藏　親仁樣ァい、おなぎやァい、太郎やァい――。

嘉平　徳藏やァい――。

なぎ　徳藏どのい――。

徳藏　待つて居ろよゥい――。

渦丸　兄貴やァい――。

太郎　とつさんやアい――。

ト浪の音を冠せ、花道の人数は段々跡へ下がる。是れにて仕掛にて、花道へ段々浪布を引出し、海に居る心にて、舞臺は船頭帆を巻きあげる、德藏艫へ出る、皆々は揚幕近くへ來る。

〽互ひに聲を掛け合うて、惜しむ名殘りも風に連れ、次第々々に遠くなる海の音に紛れて、かすかなる火影をよすがに親と子が、夫の行方を見送れば、樹々の梢に隔てられ、見えつ隱れつぢり〳〵と、秋の螢の哀れにも、光りは消えて胸の闇。

ト此内德藏伸上り、見送り、双方とも聲を掛け合うてトヾ四人花道へはひる。是れにて德藏どうとへたるを、木の頭。

〽跡白浪と。

ト浪の音、好みの鳴物を冠せ、三重にてよろしく

幕

島の德藏（終り）

栗原山の竹中が閑居をさぐる藤吉郎それと千束が白粥に夜寒をもてなす居爐裏の許世界の議論大澤と倶にいざなふ味方の元帥智あり仁ある勇士集り十分整ふ小田の實穐

艶山錦木下

『竹中問答』は明治六年十月、中村座に書きおろされた。作者五十八歳の時である。「三舛（權之助卽ち九世團十郎）村山座より掛持にて出勤し、中幕に木下藤吉郎を勤め仲藏の竹中と問答の所受けよし」と『續々歌舞伎年代記』にはある。團十郎の演じた活歴劇式の時代物中では最も初期に屬するものである。竹中半兵衛を勤めた仲藏もセリフ廻しの自由自在な人であり、團十郎も活殺自在のセリフ廻しであつた。二人の問答が科白劇としての妙味を發揮したことは言ふまでもなかつたであらう。然しいつたいに寂しいものであつたから、今日まで復演はされてゐない。

役割は河原崎三舛（木下藤吉郎）、中村仲藏（竹中半兵衛重治）、中村芝翫（小田上總之助信長）、岩井半四郎（半兵衛娘千束）、中村鶴助（大澤次郎左衛門）等であつた。

挿繪にしたのは稿下當時の繪草紙である。

艶山錦木下（竹中問答――一幕）

序幕

濃州栗原山閑居の場

〔役名――木下藤吉郎秀吉、竹中半兵衞重治、大澤治郎左衞門、齋藤の臣大垣太郎、同郎黨半藏、百姓出來作、里の子峰松、重治娘千束等。〕

（竹中閑居の場）――本舞臺三間の間中足の二重、雪の積りし藁葺の本緣附、栗丸太の本緣、正面上手床の間、好みの掛物、渾天儀を飾り、眞中襖二枚の出はひりあり、下手地袋戸棚、此上本箱を並べ上の方あとへ下げて丸窓のある屋體の前側、下手前後雪山、谷川の流れの書割り、いつもの所藁葺丸太の枝折門、花道の附際より舞臺へ斜に土橋、流れの波板、上の方に登り木の松の立木、日覆より同じく釣枝、下手より花道へかけ一面に雪布を敷き、二重眞中に誂への居爐裏、自在竹に罐子を掛け、傍に柴を入れし籠、雜木の盆に茶碗を載せ、總て濃州栗原山竹中閑居の體、爰に峰松やつしなり、里の子のこしらへにて、柴を鉈で切り、大きな栗を手玉に取つて居る、出來作門口に、やつし、百姓のこしらへ、蓑笠にて鍬をかつぎ立掛り居る、此見得、合方雪おろしにて幕明く。

出來　これ、そこな子や、こちらの家へ麓村の十作どのは、來なかつたかな。
峰松　いえ、そんな名の人は來ませぬ。
出來　それでは直にお寄り申さず、山から家へ歸つたか、こちらの家へ寄つてくれと言つたゆゑ、廻つて來たが無駄をしたか。
峰松　けふは朝から雪が降るので、いつも山から遊びに來る、猿さへ遊びにまだ來ませぬ。
出來　雪の降るのに珍らしい、どうして栗を持つて居るのだ。
峰松　これは家にいけてあつたを、お師匠さまのお慰みに持つて來たのを、又五ツ六ツお貰ひ申して置いたから、燒いてたべようと思ふのだ。
出來　燒栗はうまいものだな。（ト思入あつて內を見廻し、）いや、わしはけふ始めて來たが、爰においでなさるは、此間まで菩提の城にお出でなすつた、美濃の軍師竹中半兵衞重治樣ぢやの。
峰松　あい、竹中樣は、こゝの家だ。
出來　旦那樣は、奧にござるか。
峰松　いや、旦那樣は晝過ぎから、山へ雪見にお出でなされた。
出來　なに、雪見にお出でなされた。いや軍師でもなさるお人は、又格別なものぢやな、わしらならば

地大根を風呂ふきにでもこしらへて、どぶろく酒であつたまり、圍爐裏のはたへ寐るのが何より
此寒いのに雪見などゝは、頼まれてもいやなことだ。

峰松　それ程いやな雪ならば、早く家へ歸りなさい。

出來　十作どのがこゝに居らずば、凍らぬうちに歸りませう。

峰松　橋の上がすべるから、氣を附けて行きなさい。

出來　あい〳〵忝い。（ト鍬をかつぎ、）大きに世話になりました。

ト合方雪おろしにて、出來作思入あつて花道へはひる。峰松跡を見送り。

峰松　つひに見た事のない人だが、何だか家をきよろ〳〵と、あちらこちらを見廻して、氣味の惡い人だな。どれ、お歸りのないうちに、居爐裏で栗を燒いてたべよう。

ト合方雪おろしにて、峰松二重の圍爐裏の中へ栗を入れる、此内花道より大垣太郎、背割り羽織、野袴、大小、爪掛けの足駄、澁蛇の目の傘をさし、伴藏袴股立、大小、紙合羽、竹笠を冠り出來り、花道へ留り。

太郎　こりや伴藏、竹中が閑居は向うの家か。

伴藏　昨日うかゞひ置きましたが、向うに違ひござりませぬ。

太郎　然らば參つて、案内いたせ。

伴藏　はッ、畏つてござりまする。（ト右の鳴物にて兩人舞臺へ來り、伴藏門口へ來り、）頼まう〱。

ト峰松出て、

峰松　何ぞ御用でござりまするか。

伴藏　竹中氏のお宅は、是れでござるか。

峰松　あい、こちらでござりまする。

太郎　重治殿のお宅とあれば、それへ參つてお目に掛らん。

ト合方にて、傘を伴藏へ渡し、袴の雪を拂ひ、内へはひる。

峰松　どれからお出でなされましたか、旦那樣はお留守でござりまする。

太郎　なに、竹中氏には御他出とか。

伴藏　お留守とあれば旦那樣には、一先づお歸りなされまするか。

太郎　いや、是れにてお待ち申すであらう。　ト伴藏草鞋合羽をぬぎ、内へはひる、峰松思入あつて奥へ向ひ、）

峰松　もしお孃さま、どなたかお出でなされました。（ト奥にて、）

千束　なに、此の大雪にお客人とや。（ト誂への合方になり、奥より千束嶋田鬘、振袖、好みのこしらへに

て出來り、太郎を見て、）これは〱、どなたかと存じましたら、大垣さまでござりまするか。

太郎　久々お目に掛らぬが、御息女千束どのでござるか。

千束　見苦しき此の山家へ、ようこそ御出でなされました、何は兎もあれ先々これへ。

　　　ト二重下手へ來り、上手へ思入あつて、

太郎　然らば仰せに任すでござる。

　　　ト合方きつぱりとなり、太郎二重上手へ住ふ、千束茶を汲み　茶臺にて出し、

千束　少し溫みましてござりまする。

太郎　いや、お構ひ下さるな。（ト茶碗を取り、）竹中殿にお目に掛り、お頼み申す仔細あつて、今日それがし參つてござるが、承れば何れへか、御他出なされしと申すことだが、左樣でござるかな。

千束　折惡しく晝後から、さり難き用事にて、他出いたしてござりまする。

太郎　近頃殘念至極でござるが、急速御歸宅でござるかな。

千束　いつ歸宅いたしませうか、勤めなき身に出まするると、歸りの程は知りませぬ。

太郎　又出直してまゐるにも、一里餘りの栗原山、殊には雪に路次の難儀。はてさて困つた事でござる。

千束　何御用かは存じませぬが、仰せおかれてよろしくば、不束ながら私へ仰せ聞けられて下さりま

せ。

太郎　御他出とあるからは、千束どのへ申し置かん。伴藏心を附けい。

伴藏　心得ました。（ト門口より外を窺ふ。）

千束　して、御用の趣きは。

太郎　只今演舌いたすでござる。（ト誂への合方になり、）用事と申すは別儀でござらぬ、竹中殿には先達新加納の合戰より、世を賴みなく思はれてか、武門を捨て退身なし栗原山へ引籠り、閑を樂しみござるゆゑ、主人を始め臣下一統士卒の者に至るまで、闇夜に燈火を失ひし如く、歎かぬ者一人もなし、何卒再び御歸城あつて龍興公の補佐をなし、以前の如く釆配採つて味方を指揮なし下さるやう、主人を始め臣等が賴み、衆に代つてそれがしが今日態々參つてござる。重治殿御歸宅あらば、千束どのよりよきやうに、御執成し賴み存ずる。（トよろしく思入。）

千束　何の御用と存じましたに、再び父に出仕せよとの御勸めにござりまするか、今日お出での趣きは父へ委しく申しませうが、とても再び出仕の儀は、あなたへお受けをいたしますまい。

太郎　假令退身召さるゝとも、元は主人の龍興公、何ゆゑお受けがいたされぬな。

千束　剃髮こそいたしませねど、出家になりし心にて、今は浮世の塵を捨て、此の山中へ身退き閑居い

たして居りますれば、再び出仕はいたしますまい。

太郎　これまで再度龍興公へ諫言ありし重治殿、用ひられぬを遺憾に思ひ、退身ありし事なれば、御尤もにはござれども、そこを何卒思ひ返され、使ひに參りしそれがしが面の立つやうお勸め下され。

千束　折角のお頼みながら、一旦武門を捨てまして、山籠りせし上からは、何やう仰せられましても再び仕官はいたしますまい、それを達つてお勸めあらば、陸奥か筑紫の果てへ立退きますと申すより、外に御返事はござりますまい。（ト是れにて太郎むつとせし思入にて、）

太郎　すりや重治殿には、たつてと申せば陸奥か筑紫の果てへ立退かるゝといふ外、返事はないと言はるゝか。

千束　左樣にござりまする。

太郎　ではござらうが、餘人は知らず、身共はそれでは歸り申さぬ、所詮得心あるまいと朋輩どもが申せしを、押して是れまで參りしからは、再應お勸め申した上得心ござらずば、假令義經正成に勝りし智謀の重治殿でも、力にならねばあつて益なし、御得心ござらずば刺し違へて一命を、捨てる心で參つたそれがし、重治殿の御歸宅を、お待ち申して面談なし、否やの御返事承はらん。

千束　左程までに思召す大垣樣の御志し、今にも父が歸りなば、委しく申し聞せまして、此方より御返

事いたしますれば、今日はお歸り下さりませ。
太郎　いや〳〵一命賭けて參りしからは、否やの御返事聞かぬうちは、身共はいッかな歸り申さぬ。
千束　左樣ではござりませうが、いつ歸宅いたしませうやら計りがたない父の他出、是非ともお歸り下さりませ。
伴藏　いや、口出しするは失敬ながら、竹中氏のお歸りより他出といふが計りがたない、拙者が存じまするには、此の大雪に御息女一人、山家へ置いて他出はなき筈、察する所面會なし、兎やかういふが面倒さに、奧に隱れてござるであらう。
太郎　むゝ、こりや伴藏が申す通り、他出と申すも僞り、上から知れぬ人心、奧へ參つて改めまゐれ。
伴藏　はッ、心得ました。（トつか〳〵と二重へ上り、奧へ行かうとする、千束留めて、）
千束　他出といふを疑うて、許しもなき奧の間へ、みだりに入るは無禮であらうぞ。（トきつと言ふ。）
太郎　誠に他出に相違なくば、跡で無禮を咎めさつせえ。
千束　假令何とおつしやつても、父の留守ゆゑ奧の間へは。
伴藏　留立てなすは、いよ〳〵怪しい。
太郎　それ踏んごんで改めい。

伴藏　心得ました。

ト伴藏振拂つて行かうとするを、千束留め、ちよつと立廻り、此うちよき程に圍爐裏の内より掛煙硝ぱつと立ち、ぽん〳〵と本鐵砲の音續いてする。太郎この音にびつくりなす、伴藏は鐵砲に打たれし心にて、二重よりころがり落ちる、千束は灰神樂を袖にて拂ふ、

太郎　はて心得ぬ今の筒音、圍爐裏の内より發せしは、流石軍師の竹中半兵衞重治、地雷火でも仕込みあつたか。（ト刀を持ちきつとなる、伴藏は起上り、胸をさすり見て、）

伴藏　正しく胸を打拔かれしと、思ひの外に疵もなく、はてさて合點の行かぬことだ。（ト不思議なる思入。）

峰松　おゝ、そりや疵の附かぬ筈だ。

伴藏　なに、附かぬ筈とは。

峰松　今ぽん〳〵と音のしたは、さつきおれが圍爐裏へ入れた、栗が燒けてはねたのだ。

太郎　扨は砲發と思ひしは、

伴藏　おきやアがれ、燒栗か。（ト此うち栗を拾ひ、）

峰松　剡ねた栗は、こゝにあります。（ト栗を見せる、太郎思入あつて、）

太郎　思はぬ音でびつくりなし、せりふをとんと失念いたして、此の場の拍子が拔けてしまつた。

千束　何は兎もあれ今日は、此儘お歸り下さりませ、何れ明日こなたより御返事いたすでござりませう。

太郎　すりや、明日までに否やの返事を、身共方までいたさるゝとか。

伴藏　こりや御直談より明日まで、待てとあるならお待ちなされて、千束どのよりお話しのあつた方が御得心なされませうかと存じまする。

太郎　如何さま、それにも一理あり、然らばけふは此儘に、御息女に任して立歸らう。

千束　左樣なれば此の儘に、けふはお歸り下さりまするか。

太郎　如何にも歸宅いたす程に、今にも父御が戻られたら、何分ともによきやうに。

千束　けふのお出での趣きは、具に父に傳へ私から、申しまするでござりまする。

太郎　御得心下されて、再び歸城ある時は、使ひに立ちし身共が手柄。

伴藏　萬事は側の太鼓が肝腎。

千束　何れ明日此方より。

太郎　否やの御返事、お待ち申す。（ト門口へ行く。）

千束　左樣なれば、大垣さま。

太郎　千束どの。（ト門口へ出て、）失敬御免下されい。

ト太郎傘をひらく、伴藏門口をしめる。唄になり、兩人は花道へ行く。太郎伴藏に囁く。伴藏うなづきそつと下手へ忍ぶ、太郎は花道へはひる。峰松跡を見送り、

峰松　もしお孃さま、圍爐裏へいけた栗が刎ねて、よい氣味でございましたな。

千束　おゝ、臆病者ゆゑ音に驚き、刺違へて死ぬなどゝ、強いことをいうたれど、拍子が拔けて歸つたは、そなたが手柄であつたわいな。

峰松　又大そう降つて來ましたが、水を汲んで來ませうか。

千束　水も澤山汲んであれば、暮れぬうち早う歸りや。

峰松　もう歸つてもようござりますか。

千束　あした早う來てくりや。

峰松　あい／＼。（ト門口へ出て竹笠を冠り、）大さむ小さむ、山から小僧が泣いて來た。

ト雪おろし、日覆より雪降る。峰松逸散に花道へ駈けてはひる、千束跡を見送り、

千束　以前の恩を忘れずに、乳母が悴をよこすので、使ひに事を缺かぬわいの。（ト門口をしめ二重へ來り時の鐘、）もう父上のお歸りに間もあるまいゆゑ、お寒さ凌ぎにお粥の支度をしておきませうか。

ト時の鐘、床の淨瑠璃になり。

〽降りしきる雪に山家の風荒く、軒端に近きなよ竹の、撓みし枝の雪落ちて、塒をはなれ飛び廻る雀色時暮近く、爰へ來かゝる旅人が、暫し小蔭に佇みて。（

ト雪おろし、谺の合方になり、花道より秀吉、達附、大小、草鞋、菅笠、本蓑を着て出來り、花道へ留り思入あつて、

秀吉　春の花には暮れるを惜しみ、秋の月には明けるを忘れ、詩歌に心ある者は、あかぬ眺めともてはやせど、それにも勝る深山の雪、山又山も白妙に外の色なき銀世界、はて風情ある景色ぢやなあ。

〽笠傾けて打眺め、扉間近く差寄りて。（ト秀吉思入あつて舞臺へ來り、門口より內を窺ひ、）

ちと、お頼み申しまする。

〽おとなふ聲に、千束は立出で。（ト千束門口へ來り開き見て、）

千束　何御用でござりまする。

秀吉　御覽の如くそれがしは、旅の者にござりまするが、此の大雪に道を失ひ、しかのみならず暮に及び難儀の餘り、麓へ下るも餘程の道、何卒今宵一夜の宿りを、お貸しなされて下さりませ。

千束　それは／＼此の雪に嘸御難儀でござりませう、宿と違うて宿かす旅籠屋とてもあらざれば、お泊め申して上げたけれど、折惡しく只今父が宿に居らねば私が、どうもお泊め申されませぬ。

秀吉　すりや御主人が御他出ゆゑ、泊められぬとのお斷り、御尤もにはござれども、仰せの如く旅店とてもなければ、木部屋にても苦しからず、どうかお泊め下さるまいか。

千束　父さへ居れば何よりかお安い事でござりまするが、留守ゆゑ女子の私が、お宿はお貸し申されませぬ。（ト秀吉思入あつて、）

秀吉　總じて男女七歳より、同席なさぬが敎の道、出家でさへも江口にて西行法師を泊めざりし、假の宿りの贈答あり、御息女一人とあるからは强てお願ひ申されず、是れより麓へ歸りませう。

ト本意なき思入。

千束　今宵のお宿はいたさずとも、せめては雪のお寒さ凌ぎ、お湯なと一つ差上げませう。

秀吉　御芳志は忝なければ、最早黃昏近ければ、暮れざるうちに下山いたさん。

千束　此の大雪に御難儀と、知りつゝお泊め申さぬも。

秀吉　女儀の事なら、是非もなし。

千束　本意なくお歸し申しますれど。

秀吉　御緣もござらば、

千束　また重ねて、

秀吉　左樣ござらば、此家の御息女、

千束　旅のお方、

秀吉　これにてお別れ申すでござる。

〽一禮なして旅人は、吹雪に笠を取られじと、雪踏み分けて急ぎ行く、千束は跡を見送りて。

ト雪おろしにこだまを冠せ、秀吉笠を冠り、花道へはひる。千束門口より跡を見送り、

千束　いづれのお方か知らねども、容形といひ物言ひざし、見るから智勇勝れし武士、世に賴もしきゆゑお泊め申して上げたけれど、男ならざる女の悲しさ、最早暮れるに程近ければ、麓へ遠き栗原山、常さへ難所にこの大雪、嘸御難儀な事であらう。

〽門の戸さして傍なる、圍爐裏へ粗朶を折りくべて、父の歸りを待つ折柄、山坂道も苦にならで、降り積む雪をざつくざく、我家へ歸る竹中重治。

ト此うち千束門口をしめ、圍爐裏の粗朶を入れ火を焚き居る。よき程より、雪おろし、山鳩の笛を冠せ、日覆より雪しきりに降る、花道より重治好みの鬘、着流し誂への被布、一本ざし、下駄にて、大きな檜笠をかざし出來り、花道へ留り、

重治　雪は鵞毛に似て飛んで散亂しと、かの謠曲の鉢の木に、樂天が詩を假用せしが、佐野の渡りを思

ひ遣る、袖打拂ふ影もなき栗原山の雪景色、眺めにあかず歸るを忘れ、嘸や娘が待ちつらん。

〽獨り言して靜々と、足に積りし雪打ち拂ひ。（ト重治舞臺へ來り門の外にて笠の雪を拂ひ、）

娘、今戻りしぞ。

千束　これは〳〵、お歸りでござりましたか、嘸お寒うござりましたらう。

重治　腰に附けたる吸筒の、酒の助けで雪中の、寒さをとんと知らなんだ。

千束　それはよろしうござりましたわいなあ。

〽雪に殘りし行く客の、跡を見送りうなづきて。

ト重治千束へ笠を渡し、内へはひらうとして、門の外の足跡を見て、

重治　外面に草鞋の跡があるが、誰ぞ留守へ參つたか。

千束　はい、只今これへ行き暮れし、旅の御方が雪に困り、一夜の宿りを貸してくれと、賴みましてござりまするが、お留守ゆゑに斷りを、申して返しましたわいなあ。

重治　一里塚の枝道より、左りへ行きし者ありしが、宿りを求めし者であらん。しかと姿も認めざりしが、侍なるか、平民なるか。

千束　賴みし者は侍にて、武張りし姿に似もやらず、物柔かに禮儀厚く父が留守ゆゑ泊められぬと申し

ましたら二言といはず、江口の里で西行が雨の宿りの譬を引き、元來し道へ行かれましたが、嘸
難儀して居られませう。（ト重治思入あつて、）

重治　それは優しき志し、何れの者か存ぜねど、武士は相身互ひゆゑ、宿に居らば其者に一夜の宿りを貸さうもの。

千束　雪道とはいひながら、最早餘程のおくれゆゑ、麓の方へ行かれしならん。

〽言ひつゝ門に延びあがり、遙かの向うを見渡して。

ト此うち千束門口へ來り、延び上り向うを見て、

もうし父上樣、旅のお人は此先の松の木蔭にたゝずみて、雪に困りて居らるゝ樣子。

重治　所詮是れから麓まで、明るいうちには行き難し、呼返して一夜の宿を、貸して遣り度いものなるが、聲をかけても聞えまい。

千束　餘程の道ではござりますれど、外に音なき雪降りゆゑ、聞えぬ事もござりますまい。

重治　然らば早う呼返しや。

千束　はッ。心得ました。

〽千束は門邊に立出でゝ、笠をかざして聲張りあげ。

ト千束下駄をはき、檜笠をかざし、花道の附際へ行き、

なう〳〵最前の旅の御方、只今父が歸りしゆゑ、今宵のお宿いたしませう。おゝい〳〵。

〽おゝい〳〵と打ち招けば。（ト千束笠にて招く。）

重治　どうぢや娘、聞えたか。

千束　谺に響いて聞えしか、悦ぶ體にて雪道を急いで是れへ參られます。

重治　扨は信義が屆きしか。

〽待つ間ほどなく旅人は、雪を踏みたて馳せ來り。

ト雪おろしを冠せ、花道より以前の秀吉出て、直に舞臺へ來る。

秀吉　御息女、御主人にはお歸りでござりまするか。

千束　只今歸りましたゆゑ、お出での趣き父へ話し、お呼び申してござりまする。

秀吉　それは千萬忝うござりまする。

千束　もう御遠慮には及びませぬ、是れへお通りなされませ。

秀吉　然らば、御免下さりませ。

〽小腰屈めて打ち通れば。

ト秀吉草鞋を脱ぎ内へはひる。合方になり、千束曲物へ藤蔓の手の附きし手桶を出し、

千束　是れにておすゝぎなされませ。

秀吉　必ずお構ひ下さるな。（ト合方にて足を洗ふ、重治秀吉を見て、）

重治　道に迷ひし旅客といふは、其許でござるか。（ト秀吉足を洗ひながら、）

秀吉　はッ、如何にも拙者にござりまする。御覽の通りの大雪に、暮に及びて甚だ難澁、何卒一夜の宿りをば、お貸しなされて下さりませ。

重治　それは何より安けれど、見らるゝ如く山家の不自由、いまだ剃髪いたさねど、うき世をのがれし閑居の身の上、客をもてなすまうけなけれど、それを厭ひたまはずば、一夜の宿をお貸し申さん。

秀吉　こは御念頃なその仰せ、拙者も武士の形はなせど、流水浮雲に身を任せ、諸國を修行いたしますれば、何しにそれらを厭ひませうぞ。

重治　其の御不自由をお厭ひなくば、足を延してゆつくりと。

千束　圍爐裏へ柴を折りくべて。

重治　今宵は夜と共お話し申さん。

秀吉　斯く情ある御方に、一夜の宿りをお借り申すも。

重治　これも所謂一樹の蔭、

千束　一河の流れ、

秀吉　他生の奇緣。

重治　いざ客人には、爐邊へ近う。

秀吉　御免なされて下さりませ。

〽禮儀正しく客人が、圍爐裏の許へ差寄れば、主人は娘を見返りて。

ト此うち秀吉二重へ上り、圍爐裏の下手へ住ふ、重治思入あつて、

重治　これ娘、何はなくとも雪中の寒さ凌ぎに客人へ、粥でも炊いて上げたがよい。

千束　最前乳母の所より、圍ひ栗を貰ひしゆゑ、お歸りあらば上げませうと、栗を入れて白粥を、これへ仕掛けておきました。

重治　それはよくぞ仕掛けておいた、栗を入れしは珍らしい、それらが山家の馳走であらう。

千束　お客人にもお寒さ凌ぎ。

秀吉　拙者も栗は大好物、頂戴いたすでござりまする。

千束　どれ、お加減を見ませうか。

〽手馴れぬ事も習ふより、自然と馴れて白粥を、すくふ杓子も茶の手前、昔床しき蒔繪椀、折目正しく差出せば。
ト此うち千束くり盆へ蒔繪の椀を乘せ出し茶の手前にて粥を盛り、秀吉と重治の前へ出す。

重治　いざ客人にも參られよ。
秀吉　御馳走頂戴いたしまする。（ト合方にて兩人粥を喰ふ思入。）
重治　これ娘、そちもこれにて、御相伴いたせ。
千束　いえ、私は奧へ參り、お跡で頂戴いたしませう。
秀吉　然しそれでは、冷めませうに。
千束　熱いものは下さりませねば、お跡でよろしうござりまする。
重治　然らばそちが勝手にいたせ。（ト其うち粥を喰ひしまひ。）
秀吉　思ひがけなき醍醐味で、雪の寒さを忘れてござる。
重治　もう一椀おかへ下され。
秀吉　先刻支度いたしましたれば、最早十分にござりまする。
千束　あなたは如何でござりまする。

重治　いや、おれも一椀で澤山ぢや。
千束　左樣なれば私も、
重治　奧へ參つて冷めぬうち、
秀吉　少しも早う、
千束　どれ、お相伴いたしませう。
〽會釋こぼして奧の間へ、鍋携へて入りにける。
ト千束は兩人の膳を片附け、辭儀をなし、鍋をさげて奧へはひる。
重治　いざ此上の馳走には、折焚く柴より外はござらぬ。
〽跡に二人は、爐邊へ打寄り。
秀吉　雪には何よりそれが御馳走。
重治　さゝ、折りくべてあたりめされい。
〽側なる柴を折りくべ〳〵、木下四邊を見廻して。（ト合方になり、秀吉思入あつて、）
秀吉　最前見受けし所、天下に名を得し君程あつて、丸太造りの好事の御住居も、山家に稀な結構振り、
まことに恐れ入つてござる。

重治　さしてもあらぬ住居をば、客人のお褒めに預かり、近頃赤面の至りでござる。して、其許には武術修業に諸國を經歷めさるゝかな。

秀吉　如何にも兵法武術をば修業なさんと經歷いたせど、此身に運の來らぬか、未だ良師に出逢はず、愚眼ながら先生をそれがしつら〱閲するに、正しく文武兩道とも勝れしこと疑ひなし、拙者を弟子となし下され御教導下さらば、此上もなき身の悅び大慶至極に存じまする。

重治　それがし浮世の塵を厭ひ、此の山中に閑居なせば、何とて文武に達すべき、元より師となる器量なければ、弟子といふもの取りたる事なし、是れは御身の目違ひなり。

秀吉　いや拙者の目違ひならず、お隱しあれど先生は、天下に稀なる大元帥と存ずるゆゑに、それがしが押してお願ひ申してござる。

重治　なか〱以て左にあらず、天下に稀な器量あれば、かゝる山家に世をのがれ、閑居いたす謂れなし。いや、それは兎もあれ御身には、何ゆゑあつて良師を選み、文武を修業召さるゝぞ。

秀吉　さればそれがし良師を選び、文武を修業なしたきは、智仁勇の三德を兼備の主君に仕へん爲め。

重治　それは近頃愚なり、良主は自ら選みて知るべし、學は自ら勤めて成るべし、他人の教示を受くるに及ばず。（ト秀吉思入あつて、）

秀吉　誠や、賢者の一言は、これ千金にも代へがたし、今先生の御教訓、心魂に徹し忝けなし。それに就いて伺ひ度きは、應仁この方世の中大いに亂れ、萬民塗炭の苦に落ちて安き心更になし、智謀勝れし軍師ありて、寛仁大度の主將を助け、不仁不義を誅伐せば、天下泰平なるべきに、何故あつて先生にはかゝる山家に引籠り、世の成行きを見たまはぬぞ、諸國に一國一城の主將多き時節なれば、天下を治め萬民に安堵をさすべき良將のなき事はよもあるべからず、それを求めず閑居召さるゝは、憚りながら大丈夫に似合はしからぬと存じまする。

重治　それがし丈夫の心あらねば、強ひて求めるにも及ばず、天下を治め萬民を安堵さすべき良將は六十餘州に誰なるか、閑居の我等は知りがたし、御身は諸國を經歴あれば、定めて承知いたされん。

秀吉　なか〳〵以てそれがしなどは、短才愚蒙の小人ゆゑ、たゞ〳〵天下泰平に枕を安く寢ねる時を、待ちわづらふより外他念なけれど、此程世俗の噂を聞くに、尾張の國主信長は、智勇兼備の良將にて、士卒を愛し民を憐み、無道を懲らして天下を補佐し、必定四海を治むべき器なりといふ者多し、美濃と尾張の隣國ゆゑ、其言ふ所虚か實か、先生には御存じならん。

〽詞巧みに言ひ掛くれば、竹中早くも間者と悟り、面色替つて聲あらゝげ。

ト重治居直り、きつとなつて、

重治　最前より御身の樣子、心得難く思ひしが、扨こそ小田家の犬にして、猿面冠者と名を呼ばるゝ、正しく木下藤吉郎、良主をわれに尋ぬる體にて、天下を治むる器量あるは信長なりと評說なし、この竹中半兵衛が鐵石心を動かさんと、智辯を以て計るとも、わが大丈夫の志し、御身等如きに動かされんや、文王劉備再生して、招かるゝとも此の閑居再び出でんことを思はず、ましてや小田は美濃の敵なり、など敵國に靡くべきや、無益の事を言はんより、疾く〳〵此の家を歸り召され。

〽と賢者の詞。

秀吉　如何にも拙者は其許の察しの如く、小田家の臣木下藤吉郎と申す者、天下無双の賢者たる竹中殿の德を慕ひ、旅客となつて宿りを乞ひ、最前より爐邊にてお物語りいたせしが、噂に勝る重治殿、實に驚き入つてござるが、只今小田を當國の敵なりと仰せありしは、愚昧の拙者その意を得ず、元當國は何人の領せしと思召さるゝや。

重治　何と言はるゝ。

秀吉　美濃は土岐家の領地にして、則ち累代の守護たれば、信長土岐家に遺恨はなけれど、我が舅道三

殿を義龍殿弑せしゆゑ、齋藤家を仇とせり、然るに貴殿小田を指して國の敵と言はるゝは、退身なせし主家の爲に、忠義を盡す御所存なるか。

重治　むゝ。

秀吉　抑々齋藤龍興殿を良主なりと思はるゝか、無道なりと思はるゝか、良主なりと思はれなば、なぜ其主を補佐せず爰に閑居召さるゝぞ、まつた無道と思はれなば諫めて主を助くるが、是れぞ臣下の道、然るに貴殿さはなくして、國の滅亡餘所になし、民の困苦を顧みざるは、忠臣義士とは言ひ難し、國は先祖累代より相傳なせし所なれば、近き道三義龍の好みを以て言ふべからず、今齋藤家と諸共に、貴殿の美名を滅せんこと、それがし殘念至極ゆゑ、憚かることを顧みず、我が所存を申したり、失敬は御免下されい。

失敬御免と木下が道理を盡す一言に、竹中も稍暫し、猶豫なせしが詞を改め。
ト秀吉よろしく敬ふ思入、重治も思入あつて、

重治　かねて噂に聞きつるが、才智勝れし木下殿、よくこそ左様に理を附けたるぞ、いかさま愚鈍の輩は其辯舌に欺かれんが、鐵石心の竹中半兵衛、何とて心を動かすべきや、既に屢々それがしが龍興殿を諫めしかど、用ひられぬを知りながら諫むるも又愚の至り、年頃積りし惡逆に則ち天の誅

を蒙り、運極りて齋藤の亡ぶる時の至るを知りて、此の山中に世をのがれ、國家の存亡一つになし忠義の道に背くとも、仁義の道を立つる所存、凡そ人間の一生は盛衰の定まりありて、盈つれば缺くる天然なるを、今更それを恨まんや、重治心決せし上は、利害の說得無用なり。

〽怒りを含みて言ひ放てば、藤吉郞はあざ笑ひ、（ト秀吉重治を見て嘲笑ひながら、）

秀吉　いや竹中半兵衞重治殿は、天下無双の賢者と聞きしが、今目前に見參なし、其の心腹を承はりしが、扨黑白の相違にて、取るに足らざる小人なり。

重治　やあ、我に向つて木下には、分に過ぎたる今の廣言、取るに足らざる小人とは、近頃以て無禮なるぞ。

〽刀引き寄せ詰めよれば、木下圍爐裏の灰かきならし。

ト重治刀を取つてきつとなる、秀吉これを見て、態と圍爐裏の灰を火箸にて搔きならしながら、

秀吉　賢者と言はるゝ竹中殿が、これしきの理に迷ひたまふか。

重治　何と。（ト刀を突ききつとなる、竹笛入りの合方になり、秀吉思入あつて、）

秀吉　元來御身は齋藤家數代の幕下なるゆゑに、其義を守ると言はるゝは、是れ第一の僻言なり、龍興の祖父道三は元臣下にして緣なき者なり、主人の國家を橫領なし、齋藤の家を冒すこと誰か是れ

を憎まざらん、御身譜代の忠臣ならば、先づ道三を征伐して一族を以て取り立つべきに、さはなく却つて彼れに隨ひ不義士になづむは何事ぞ。又其子義龍父を害し齋藤の家督を奪ふ、其の逆罪の人と知りつゝそれを補佐なしたまふは、忠にもあらず義にもあらず、匹夫の勇者が所業ゆゑ、取るに足らずと申したり。

重治　むゝ。（ト重治ぎつくり思入。）

秀吉　道ならざれば義龍は、天誅を蒙むり早世なし、其子龍興愚昧にして、惡政を繼ぎたるゆゑ、遂に國民背き放れ、家の滅亡近きにあり、それを知りつゝ諫めを入れず、此の山林へ退きて、義なりと言はるゝ心は如何に。

重治　むゝ。

秀吉　假令道三龍興等、實に齋藤の血脈たりとも、家運傾き國政亂れ、今滅亡の時に臨み、これと存亡を共にするを、誰かよしと賞讃いたさうぞ。

重治　むゝ。

秀吉　齋藤家とて初めより、美濃の國守といふにもあらず、土岐遠山の兩家衰へ、遂に齋藤の領地となるも、國守の器量ある故ぞ。

重治　む〻。

秀吉　其の旗下たる老臣諸士、土岐、遠山の家を捨て、齋藤家に隨ふも、是れ泰平を思ふがゆゑなり。

重治　む〻。（ト秀吉火箸にて圍爐裏の椽を叩き詰寄ろ、重治ぢつと思入、是れより秀吉きつとなつて、）

秀吉　今齋藤家衰へて義龍惡逆にて早世なし、龍興頑愚にして政事を紊せり、民其の惡政を悲しむ、かの諺にいふ如く一夫恨みを含む時は百日必ず雨降らず、況んや國中の農民等幾萬人の恨みなるか此悲しみを救ふべき泰平を計られず、僅におのが意地を立てんと天下の正路を捨てたまふは、これ大丈夫の所行にあらず、智謀武勇もこの人の行ふ所によりてこそ、末世の龜鑑と賞美もせん智勇衆に勝れながら、天下諸民の爲にせず、空しく一家の節を守り、末世に笑はれたまふこと、近頃笑止千萬なり、む〻は〻〻〻〻。

〽木下わざと竹中を、誹謗なしてぞ打笑ふ。

ト此時焚火ぱつと燃え、罐子の湯こぼれし心にて、掛け煙硝ぱつと立つ。重治罐子を取りのけきつと思入、秀吉扇で灰を煽ぎながら笑ひ、よろしくあつて、

斯く亂世に產れしからは身に及ばぬまでも實義を以て、四海靜謐を計りなば天意に叶ふ道理なり、天意に叶ふは是れ則ち地の道なり人の道なり、御身の如き智勇勝れ天下を治むる器量あつて、是

れを用ひたまはぬは、天に背き人に違へり、今それがしが申す事、分に過ぎしと思されんが皆天意にして聊かも我意を用ゆる所なし、願はくは重治殿にも、篤と分別いたされよ。

へ詞淀まず滔々と理非明白に說き附くれば、竹中胸をさかるゝ如く、默然たりしが吐息つき。

ト秀吉よろしく思入あつて言ふ、重治思入あつて、

重治 われ此の山中に蟄居せしは、所存あつての事なれども、御身の爲に說破られ、押して答ふる詞なし、道三齋藤の氏族ならぬを、其の道三に隨ふこと不義士なりと言はるゝは、理に似て理ならずわれのみなるか美濃武士は總て道三の下知を受けしも、御身も存ぜらるゝ如く義龍は元土岐の胤賴藝が一子なるゆゑ是れを家督になさん爲なり。又道三を討ちたるは、勇士等がせしことなれども、父を討ちしと惡名取り遂に早世なしたるは、是れ義龍の不幸にこそ、ましてや龍興政事に疎く、諸士の器量を見ること難きは、國家滅亡の基なり、子房、孔明補佐なすともいかでか惡政正しくならん、其滅亡を見るに忍びず、此の山林へ隱遁せしも國家の治亂はそれがしの預かる所にあらざれば、別に悲しむ事もなし、既に今日齋藤亡び明日新たに國主替り、その新主民をあはれみ國を靜謐になさしむるは、隱遁なせし我が身に取りても、此上もなき悅びにて、憎む所存はござらぬぞ。

へ流石賢者の竹中が、仁義を守る一言に、木下はツと座を下り。
ト重治思入にていふ、秀吉是れを聞き、はツと跡へ下り、手を突き辭儀をなし、合方替つて、

秀吉　はゝ、賢者の一言忝なし、竹中殿の心中に其の志しのある上は、是れ一國の民の幸ひ、一旦亂れし世を見限り、退身あれど願くば、再び閑居を出でたまひ、蓄へたまふ智を以て世を泰平に萬民の、塗炭の苦しみを救はせたまへ、我が主人信長は、元より國の狹きゆゑ、家臣とても少なけれど、天に代りて四海を鎭め、世を泰平になさんずと、大願を起せども、主人を補佐なす良臣乏しく、計議の謀士あらざれば四方にこれを求めんと、日夜心を碎くの餘り、貴殿の器量勝れしを、主人頻りに懇望ゆゑ、某使者に參りしなり、何卒暫し小田家に來りて、軍法計略授けたまひ、敵を平らげ世を治め民の苦艱を救はれなば、信長の滿足如何ばかり、此儀御承引下さらば、使ひに立ちし拙者が手柄、何卒御助力下さるやう、主人に代りお願ひ申す。
ト秀吉手を突き賴む、重治思入あつて、
へ禮儀を厚く木下が、詞を盡して勸むれど、竹中隨ふ氣色なく。

重治　御身の詞一々に、天理に叶ひ尤もなれど、それがし一旦世をのがれ、此の山中に閑居せし身を、再び小田家に仕へなば、强きを慕ひ弱きを捨つると世の嘲りまぬがれ難し、させる功なき重治を

左ほどまでに懇望ある、信長殿の志し忝くはござれども、仕へん心あらざれば、重ねてお勸め下さるな。

秀吉　ではござらうが天下の爲め、貴殿一人の釆配にて、萬民塗炭の苦を救へば、何卒思ひ返されて再び智謀を施したまへ。

重治　何樣詞を盡されても、閑居を出じと重治が、臍を極めし上からは。

秀吉　すりや、かほどまでに申しても。

重治　むゝ。

〽傍に撓む竹の枝、有合ふ柴を打附くれば、ぱつと散りたる竹の雪。

ト重治上手の竹の枝へ、籠の中の柴を取つて打附ける、仕掛にて雪ぱつと散る●

見らるゝ通り撓むほど、積りし雪も一度散れば、再び枝へ返らぬ如く。

秀吉　や。

重治　閑屋に消える我が所存。

秀吉　はて、是非に及ばぬ。（ト兩人氣味合の思入、時の鐘、重治思入あつて、）

重治　今宵もいたく更けたる樣子、我も臥處で一睡なせば、御身も爐邊でまどろみたまへ。

秀吉　左樣ござれば、竹中氏。

重治　木下氏。

秀吉　又もや明朝。

兩人　御意得申さう。

〽雪に撓まぬ竹中が、深き心の奥の間へ、引き別れてぞ入りにける。

ト時の鐘雪おろしを冠せ、重治思入あつて奥へはひる。

〽跡に木下手をこまぬき、思案に暮るゝ門口へ、木蔭に窺ふ大澤が、枝折を明けて聲潜め。

ト時の鐘、雪おろし、下手の藪蔭より指金の雀ぱつと立つ、藪の蔭より大澤治郎左衛門、逹附大小草鞋・本蓑竹笠をかざし出て、四邊を窺ひ、門口を明け、

治郎　木下氏。

秀吉　大澤殿か。

〽奥を窺ひ木下が、庭へ下りれば側へ寄り。

ト秀吉奥へ思入あつて、本舞臺へ下ろ、治郎左衛門内へはひる。

最前よりの此の場の樣子、御邊も木蔭で聞かれしか。

治郎　勝手知つたる伯父の家、裏より忍んで一部始終、承はつてござりまする。

秀吉　此の藤吉が及ぶだけ道理をせめて勸めしかど、いつかな動かぬ大磐石、最早身共の力に及ばぬ。

治郎　竹中得心いたさぬ上は、君へ一つの功立たねば、御疑念うけし申譯に、それがし切腹いたすでござる。

　　へ諸肌脫いで差添へ掛くるその手を押留め。

　　ト治郎左衞門肌をぬぎ、差添を拔かうとするを、秀吉留めて、

秀吉　やれ待たれよ大澤殿、御身を主君へ推擧なせしは、斯くいふ木下藤吉郎、御疑念うけて切腹めさるを餘所に見なして居られうか、先づ切腹を止まりて、推擧なしたる某が此首討つて此場より、何れへなりとも落ちられよ。

治郎　御志しは忝なけれど、命惜しさに人を討ち、逃げ隱れしといはれては、武士たるものゝ恥辱ゆゑ、此場に於て切腹いたさん。

秀吉　いや、切腹思ひ止まりて、此の藤吉が首を討たれよ。

治郎　何故あつて信義厚き、御身の首が討たれうぞ。

秀吉　討たねば身共も、切腹させじ。

治郎　いゝや、お留め下さるな。

〽止める木下振拂ひ、差添拔かんとなす折柄、一間の内より駈出る千束、それと見るより縋り留め。

ト治郎左衞門差添を拔かうとする、秀吉是れを留める、ばた／＼になり、奥より以前の千束出來り、治郎左衞門を留め、

千束　あゝ申し重時殿、早まつた事なされまするな。

秀吉　さいふは御息女。

治郎　千束どの。

千束　樣子はあら／＼奥で承りましてござりまする、御切腹をなされまする程の事を、なぜ父上へ詳しくお話しなされませぬぞ。

治郎　疾より參つて此の仔細、重治殿へ申さんと存ぜしかども、此の一條身共が何やう申すとも、聞入れられぬ伯父の氣質、それゆゑ仔細は申さぬのだ。

千束　お聞き入れあるかないかは知らねども、御切腹をなされる程の大事をお話しなされませぬのは、そりや御無念ではござりませぬか、及ばずながらお取次を、いたしませうから、仔細お聞かせ下

さりませ。

へいふに大澤刀を置き。（ト治郎左衞門差添を下に置き、誂への合方になり）

治郎　仔細といふは外ならず、龍興公の隋弱より、國政次第に亂れしゆゑ、數次それがし諫めしかど用ひられぬのみなるか、竊に此身を害せんと無道の計らひ聞きしゆゑ、世を頼みなく思ふ折柄、小田家へ仕官いたしたる弟主水尋ね來り、信長殿は仁義厚く、天下を治する君なれば、小田家へ來れと勸むるゆゑ、一先づ威風を窺はんと主水と共に墨又の城中へいつて見聞せしに、聞きしに勝る萬事の行ひ何さま我も仕へんと、是れなる木下藤吉殿へ、此の身の推擧頼みしところ。

秀吉　如何なる事にか主人には大澤殿を疑念なし、切腹させよと嚴しき上意、執成しなして今日まで言ひ延ばせしも何卒して、大澤殿を助けたく一つの手段を設けしは、日頃主人が御親父の竹中殿を懇望ゆゑ、縁のあるこそ是れ幸ひ、味方に招かば一つの功、勸められよと申せしかど、なか〳〵以て某が何やう詞を盡すとも所詮隨ふことあらじと、言はるゝゆゑにそれがしが旅客となつて先刻より、重治殿を勸めしも、大澤殿が助けたさ。

治郎　信義厚き木下殿の志しも無駄となり、一つの功の立たざるゆゑ、切腹なすは重時が疑ひうけし身の潔白、恩はあれども龍興公は非義非道の事のみなれば、とても天誅のがるべからず、亡ぶる

國に犬死せんより、伯父にも小田家の旗下に靡き、疑惑をうけし某が汚名を雪ぎ下さらば、此上なき身の幸ひ、此の事伯父へ傳へて下され。

千束　血筋の緣の伯父と甥、命に拘はる大事をば詳しくお話し申したなら、又父上のお心にて、無事に納まる計らひの、あるまいものでもござりませねば、暫くお待ちなされませ。

秀吉　何分ともに、今一應、

治郎　伯父へ執成し頼むは御身。

千束　少しも早く、父上へ。

〽申し上げんと立ち上れば、こなたの一間に聲あつて。

ト此うち上手丸窓を明け、重治窺ひ居て、よき程に障子をしめ奥にて、

重治　告ぐるに及ばぬ、大澤の切腹の儀聞き屆けた。

〽言ひつゝこなたへ立ち出れば。（ト奥より以前の重治出來る。）

治郎　こりや、伯父ぢや人には、此の場の樣子を。

重治　むゝ、逐一一間で承知した。（ト合方になり、よき所に住ひ。）

千束　お聞きなされしとあるからは、大澤殿の御身の納まり、御思案なされて下さりませ。

重治　別に思案いたすに及ばぬ、疑惑をうけたは其の身の不承、切腹なして汚名を晴らせ。

千束　えゝ。（ト重治秀吉に向ひ、）

重治　此の切腹は木下殿、御身の策でござらうな。

秀吉　むゝ。（トぎつくり思入、）

重治　最前も申せし如く、此の山林へ隱遁なし弓矢の道を捨てたれば、何ゆゑ再び仕官なさうぞ。

千束　それでは甥御の大澤殿が、命を捨てねばなりませぬ。

重治　おゝ勝手に命を捨てるがよい。傾く運の齋藤家を、捨て小田家へ隨身なし、其身の立身出世を思ひ、此の重治を欺かんとは、憎き所存の大澤重時。

〽いふに大澤詰寄つて、

治郎　こは情なき其の一言、何ゆゑ伯父を欺いて、此の身の出世を願はうぞ、それがし小田へ降參せしも、天誅のがれぬ龍興公、今にも家國滅亡なすとも、其の血脈にて幽にも家名の立たんことを思ひ、よしや不忠と言はるゝとも後の忠義を思ふそれがし、如何なる此身の不運にや小田公といひ伯父といひ、斯く疑ひをうけるのみ、一命捨てる時至りしか、片時も早く、おゝさうだ。

〽既に斷うよと見えければ、（と治郎左衞門腹切らうとするを千束留め、）

千束　そのお歎きは然る事ながら、死ぬのはいつでも死なれます、まあ〳〵お待ちなされませ。

治郎　一命捨てねば我のみか、恩ある木下藤吉殿まで、伯父の疑ひ晴れざれば。

千束　御尤もではござりますが、今暫しのうち御生害を。

治郎　猶豫いたさば此の身の恥辱。

〽止むる千束を拂ひのけ、ぐつと突き込む左りの脇腹。

ト治郎左衞門千束を突きのけ、差添を腹へ突き立てる。

千束　早まつた事なされましたなあ。（ト重治これをぢろりと見て）

重治　ほゝお、それでこそ誠の武士、この重治が疑念も晴れた。

〽いふに苦しき息をつき。（ト竹笛入り、床の合方になり）

治郎　御疑念晴れなば重時が、一世の願ひ小田殿へ、隨身なして下されい。

重治　なに、隨身なせとは。

治郎　今それがしが申せし如く古主の血脈絕えんこと歎かはしさに某が、降參なせしも其場に至らず、疑念をうけて死する無念さ、何卒小田家へ隨身なして、此の重時が一念を、お晴らし下され伯父ぢや人。

〽頼みまするといふ息も、苦しさ見兼ね秀吉が。

秀吉　大澤殿の今際の頼み、御承引下されて、小田家へ隨身下さらば、天命盡きて龍興殿、滅亡あるとも血脈にて、齋藤の家絶えざるやう、此の秀吉が取り計はん、まツた武門の義によつて一命捨てし重時殿、跡に殘りし一子次郎三郎を守り立て、幼年ながら家督させ、永く小田家で扶助なさん、これ等を思うて竹中殿、何卒御承引下されい。

〽事を分けたる秀吉が、詞に竹中醉るが如く、思案に暮れしが詞を改め。

ト重治思入あつて、

重治　武門を捨て此の山へ隱遁せし上からは、再び出でじと誓ひしも、血筋の甥の大澤が一命捨てゝの頼みといひ、智勇勝れし木下殿が、仁義も厚き今の詞。

〽いかでか是れをもどかれうぞ。

たゞそれがしが恥づる所は、祿を貪り義に背く、族なりと言はるゝが、口惜しく思ひしが、小田家へ降參するにもあらず、信長殿に見ゆるのみにて、大澤の家名も殘り、主家滅亡の其時に、血脈を以て齋藤の家相續相違なくば、一旦誓ひし閑居を出て。

〽けふまで張りし弓取りの。

意地をば捨てゝ、參向なさん。

秀吉　すりや竹中殿には承引あつて、墨又城へ來り、我が計策を補ひ下さるとや。

治郎　これにて拙者が、切腹も、

秀吉　犬死ならぬ一つの忠義、

治郎　ちえゝ忝ない。

〽實に嚴冬に張詰めし谷間の氷春風に、解けし如くに兩人は、悦ぶ中に娘の千束。

ト重治、治郎左衞門悦ぶ、千束思入あつて、

千束　とても事に父上の、早うお心解けたらば、大澤殿に暗々と、此の御最期をばさせまいもの、跡に殘りし次郎三郎、僅か五ツか六ツにて。

〽七日々々の追善も、施主に立つ身の不便やと、わつとばかりに伏し沈めば、秀吉心勵まして。

秀吉　おゝ其のお歎きも理ながら。（トノリになり、）一命捨てしゆゑにこそ、竹中殿の心も解け、小田家へ參向ある上は。

〽軍法智謀の奇計をうけ。

ト此以前上手松の木へ、伴藏窺ひ居るを秀吉手裏劍を打つ、伴藏飛び下り直にかゝる、
〽隣國他國を攻め亡ぼし、やがて天下も泰平に、必定小田の世となるも。
ト此うち秀吉扇にて立廻りあつて、伴藏を投げる。

治郎　これぞ小田家へそれがしが、忠義始めの忠義の仕納め。大澤殿の一つの手柄。
〽いふ息さへも四苦八苦。（ト治郎左衛門苦しき思入、この時伴藏起き上り）
伴藏　秀吉覺悟。（ト又掛るを引附ける、千束見て、）
千束　おのれは最前大垣の、供をなしたる家來の者。
秀吉　大事を聞きし上からは。
重治　命を取るも殺生ながら。
伴藏　何を。（ト振り解いて掛るを投げのける。治郎左衛門引附け）
治郎　此の大澤が冥土の道連れ。（ト伴藏の咽を貫く、本釣鐘、鷄笛）
重治　最早鷄鳴。
千束　東がしらむ、

秀吉　引明け時。

ト治左衞門此うち咽を貫き落入る、此時下手より、以前の太郎、逹附大小にて先に立ち、赤合羽供廻り大勢出て、

太郎　はッ、お迎ひ。

秀吉　おゝ、雪中大儀。

太郎　はッ。

重治　一度閑居に枯れ果てしも、

秀吉　時に幸ひ、此の雪に、

千束　再び花咲く、

三人　六ッの花。

〽龍虎に比する智者賢者、譽れは世々に。

ト此うち秀吉平舞臺へおりる、太郎背割羽織を着せる。重治は被布を脱ぎ、千束に渡しながら治郎左衞門の死骸を見て、兩人愁ひの思入、秀吉と顏見合せ、氣を替へきつとなり、秀吉は顏を背け羽織の紐を結ぶ、此の模樣よろしく、三重雪おろしカケリにて、

ト雪おろしにてつなぎ、直に引返す。

幕

序幕返し

清洲城大廣間の場

〔役名――小田上總介信長、木下藤吉郎秀吉、竹中半兵衛重治、小田家臣八人、大澤一子治郎三郎、茶道杢阿彌、小姓。〕

（小田家廣間の場）――本舞臺四間通し常足の二重、襷欄間、塗り框、上段の蹴込み、正面木瓜の紋散らし金襖、上下花道の揚幕共、同じ襖の出はひり、日覆より同じ紋散らしの大欄間をおろし、兩桟敷打返し、同じ紋散らしの欄間に替る、舞臺花道とも一面に薄縁を敷き、總て小田家大廣間の體、爰に一、二、三、四、五、六、七、八の諸士、何れも衣裳上下大小にて控へ、此の見得管絃にて幕明く。

一　如何に方々、今日木下藤吉殿の說得によつて入城せし、竹中半兵衛重治殿

二　主人と賴む齋藤龍興、父義龍の無道を繼ぎ、次第に國政亂れしゆゑ。

三　しば〳〵諫言いたせしかど、元より頑愚の龍興ゆゑ、更にこれを用ゐざれば。

四　かの三度諫めて身退く例に習ひ、先達て家來に殘らず暇を遣はし、
五　世を見限りて山林へ、息女と二人閑居なし、弓矢を捨てし竹中殿。
六　天下無双の軍師をば、埋め置くのが殘念と、明け暮れこれを惜しみたまひ。
七　何卒して味方に招き、智謀勝れし木下殿と、計議を合す其時は、
八　たとひ日本全國一手となり、押寄せても、軍配とつて指揮なさば、
一　龍に翼を得たる如く、如何なる敵が向ふとも、
二　奇計を廻らし戰はゞ、小田家はます／＼大磐石、
三　然し隱遁なせし上は、再び仕官は覺束なしと、
四　思ひの外に木下殿が、智辯を以て說き勸め、
五　栗原山より重治殿を、今日同道召さるよし、
六　先刻注進ありしゆゑ、君にも入來を御待兼ね、
七　何にもいたせ、智謀勝れし味方の殖えるは、是れ吉事、
八　最早木下藤吉郎殿、竹中殿を召し連れられん。

トばた／＼になり、花道より近習一人、袴一本ざしにて出來り、花道にて、

近習　はッ、申し上げます。

一　何事なるぞ。

近習　只今木下藤吉郎殿、美濃の降人竹中半兵衛殿を、同道召されてござります。

一　先刻より我君にも、

二　木下殿をお待兼ね。

近習　此の由御披露下さりませう。

三　承知いたした。（ト是れにて近習引返し、花道へはひる。）

四　いで我が君へ、

八人　申し上げん。（ト下手より茶道一人出で、）

茶道　いや、其のお知らせには及びませぬ、我が君には只今是れへ、入らせられまするやうにござります。

一　すりや、只今是れへ。

皆々　御出席とな。

茶道　はッ。（ト下手へ控へろ。是れにて床の淨瑠璃になり、諸士上下へ控へろ。）

〽天が下治める胸の廣書院、目立つ金地の襖より威勢輝く小田信長、設けの席へ立ち出れば詰め居る諸臣平伏なし。

ト是れへかすめて管絃を冠せ、奥より信長好みの鬘、小忌衣、小さ刀、信長のこしらへ、跡より後茶筅、振袖、袴一本差し、小姓のこしらへにて袱紗にて刀を持ち出る、續いて同じこしらへの小姓、煙草盆手箱など持ち出る、是れにて諸士平伏なし、信長二重の眞中へ住ひ、小姓後に並居ることよろしくあつて、

一　かね〴〵我君御懇望ある、

二　齋藤家の軍師竹中重治、

三　今日味方に參るよし、

四　君にも嘸かし御滿足、

五　恐悦申し上げ、

皆々　奉りまする。

信長　主人齋藤龍興が愚昧を歎じて山林へ、閑居なせし竹中半兵衛、計らず我が手に入りたるは、龍の腮の玉同然、智謀勝れし木下が、手引に寄つて重治が、幕下に來るは我が高運。

一　仰せの如く我君の、
二　御運は旭の登る如く、
三　四海に輝く御勢ひ、
四　されば四方の國々にも、
五　小田の武名におぢ恐れ、
六　敵たるものは更になく、
七　忠臣賢者招かずして、
八　日々幕下へ來るといふは、
一　偏に君の、
皆々　御武德ゆゑ。
信長　いや武德といふも信長が、只一人の武德にあらず、木下初め臣下の者が、皆誠忠を盡すゆゑ、臣下は國の寶なるぞ。
一　御懇の御意を蒙りまして、
二　大慶至極に、

皆々　存じ奉りまする。

へ折から傳ふ奏者の聲。（ト花道の揚幕にて、）

呼び　木下出仕。

四　なに、木下殿が、

皆々　出仕とや。

へこなたの襖押開き、禮儀亂さぬ木下が、上下捌き爽に、はるか下つて手をつかへ。

トこれへ中の舞の冠せ、花道より以前の秀吉、上下大小にて出來り、舞臺を見て花道のよき所へ下に居る。

秀吉　これは〳〵我が君には、是れにお渡り遊ばせしか。

信長　先刻より汝が出仕を、是れにて相待ち居つたるぞ。

秀吉　遲刻の段は幾重にも、御宥免下さりませう。

信長　何は兎もあれ、近う參れ。

秀吉　はッ。

一　君のお召し、

皆々　お進みなされい。

秀吉　はッ。

〽はッとばかりに秀吉が、御前間近く座に附けば。（ト秀吉舞臺下手へ來り、）

信長　かね〴〵予が懇望なしたる、美濃の軍師竹中重治、よくぞ隨身いたさせしぞ。

秀吉　先達て美濃の降人大澤次郎左衛門、君の御目見得お差止めにて御意に叶はぬ事あつてか、切腹させよとの嚴しき仰せ、御意を守りて切腹させなば、此の後美濃武士誰あつて當家の幕下に附くものなし、是れによつて拙者が計らひ君へ一つの功を立て、切腹御免を願はんと、次郎左衛門が縁者を幸ひ、隱遁なせし竹中重治御味方に招きしは、次郎左衛門が手柄ゆゑ、これを規模に御赦免あつて、御旗下に召さるゝやう、偏に願ひ奉る。

信長　おゝ流石は木下藤吉郎、予が心中を探り得て、よくも大澤を用ひしぞ、此程切腹申し附けしは予が所存あつてのことなり、其非道を恨みもせず、心を勞し竹中を小田の味方に招きしは、次郎左衛門が大功ゆゑ、美濃の國の舊地に於て、本領安堵いたさすべし。

秀吉　はゝ、御免を蒙るのみならず本領安堵仰せ附けられ、大慶至極に存じまする。

信長　切腹許す上からは、次郎左衛門に目通りさせい。

秀吉　はッ、畏つてござりまする。（ト下手へ向ひ、）それに控へし大澤次郎左衞門、急いで是れへ。
　　ト下手にて、
次郎　はあゝ。
　　〽召しに應じて同朋が伴ひ出る次郎三郎は案に相違の幼兒に、並居る諸士も不審に思ひ。
　　ト下手より子役芥子坊主の鬘、上下無腰にて茶道附添ひ出來り、下の方にて辭儀をなす。
一　やゝ、こりや美濃の降人、
二　大澤氏と思ひの外、
三　まだ幼き。
皆々　此の小兒は。
秀吉　これぞ降人次郎左衞門が一子次郎三郎、今日よりして家名を繼ぎ、則ち大澤次郎左衞門。
信長　して、親次郎左衞門は、如何せしぞ。
　　〽御諚に木下さし打向き、
秀吉　昨夜急病さし起り、竹中が閑居に於て、相果てましてござりまする。
三　なに、大澤殿には、

皆々　病死とや。

秀吉　如何にも、病死いたしてござる。

〽愁ひに沈む木下が、五音を悟る叡智の信長。（ト秀吉愁ひの思入、信長思入あつて、）

信長　病死と申す木下が、五音に愁ひを含みしは、扨は大澤次郎左衛門は、切腹して相果てたか。

秀吉　はツ。

信長　竹中味方に參りし上は、一つの功が立ちながら、何故切腹なしたるぞ。

秀吉　今日二代の次郎左衛門、本領安堵なすと云ひ、まつた竹中半兵衛が御目見得いたす目出度き折、仔細は後して申し上げん。

信長　可惜勇士に一命捨てさせ、殘念な事いたしたり。

秀吉　只此上は二代の悴を、お目かけられて下さりませ。

信長　おゝ明日より手廻りにて、予が小姓に召仕はん。

秀吉　はツ、有難う存じ奉りまする。それ、御禮を申し上げい。

次郎　はツ、有難うござりまする。

秀吉　君のお目見得相濟む上は、御次へ參つて控へ居よ。

次郎　はッ。

茶道　いざ、御案内いたしませう。

〽茶道が案内に次郎三郎、一禮なして入りにける。（ト茶道附いて下手へはひる。）

信長　して、竹中半兵衛は。

秀吉　只今御目見得仕りまする。それ杢阿彌、呼出し召され。

茶道　はッ。（ト向うへむかひ、）それに御控へなされし、竹中半兵衛重治殿、急いで是れへ。（ト向うにて）

重治　はあゝ。

〽疊ざはりもしとやかに、威あつて猛き竹中が、案内に附いて靜々と、遙か下つてひれ伏せば。

ト此うち花道より以前の重治、上下大小にて、跡へ近習の侍一人附添ひ出來り、花道にて信長を見て、はツと下に居て辭儀をする。

秀吉　竹中氏には御遠慮なく、君の御前へお越しなされい。

重治　秀吉殿の仰せながら、御前近くは失禮ゆゑ。

信長　予が待ち詫びし竹中重治、遠慮に及ばぬ、疾く〳〵是れへ。

一　君のお召し、

皆々　お進みなされい。

重治　然らば御免下さりませう。

〽禮儀正しく座を進めば、信長公は悦びたまひ。

ト重治刀を持ち、俯きながら下手へ來り、よき所へ住ひ辭儀をなす、信長思入あつて、

信長　美濃の竹中重治は天下無双の軍師なりと、其令名は疾より聞く、予が朝暮懇望なす心を悟りて、藤吉郎次郎左衛門が媒介にて、計らず今日對面なすは、盲龜の浮木に異ならず、信長一期の悦びなるぞ。

〽仰せにはつと手をつかへ。

重治　身不肖なるそれがしへ御懇の御意は有難けれど、何の功なき身に取りては、汗顏の至りにて誠に恐縮仕る。

秀吉　御身の智謀勝れしは、只今主人の申す如く、諸葛臥龍、楠正成、それにも勝る軍法智略、凡そ日本六十餘州に、御身に並ぶ者はなし。

信長　今より是れなる藤吉郎が、計策足らざる所をば、其方よろしく補ひくりやれ。

重治　はッ恐れ入つたる其の御諚、拙者是れまで齋藤家にて、聊か計議を施せしも外にさせる軍師なきゆゑ、愚名も人の噂となり、斯くお招きに預かれど、見ると聞くとの相違ありて當時叡名天下に轟く木下殿の計策には、所詮及ばぬ儀でござる。

秀吉　能ある鷹は爪を隱すと、世の諺に申す如く、其身を卑下なす竹中殿、智謀勝れし其證據は、これまで數度の軍功を算へ擧げれば計り難し。

信長　おゝ秀吉が申す如く、先づ近き頃尾濃の戰ひに、

〽しかも所は新加納、芋島あたりへ屯なす。

我が小田方の先陣は、

〽柴田佐久間を始めとして、續いて二陣に森池田、三千餘騎にて出張なす。

秀吉　齋藤方には先手の大將牧村、野木の兩人が。

〽射掛ける矢先きは雨霰、味方は槍をおつ取つて、爰を先途と戰つたり。

されども敵は大勢ゆゑ、防ぎ兼ねてぞ見えたりける。

重治　小勢なれども小田方は、何れも聞ゆる猛將ゆゑ。

〽縱橫無盡に切り散らされ、牧村野木の兩人も、しどろもどろに崩れ立ち。

信長　山手の方へと逃げ散つたり。

計議ありとも知らずして、逃ぐるを追うて深々と。

〽深入なせし林の內、是れをいぶかり、あなたを見れば敵はいづ地へ逃げたりけん、百歩ばかりも隔てし間に。

秀吉　龍興の旗馬印、風に隨ひ翩翻たり。

柴田は見るより勇み立ち、かしこぞ目指す敵陣なるぞ、すはや掛れと進めれど、先きに道なく後の方は。

〽雲霞の如き敵の大勢、絕所を犇と斷ち切つて。

餘さず小田勢討ち取れと、勢ひこんで犇いたり。

信長　柴田佐久間は死物狂ひ。

〽敵陣破つて通らんと、どつと返せば左右なる、山の上より伏勢が。

秀吉　どつとおめいて木の間より。

〽續け打ちなる鐵砲に、防ぎ兼ねてぞ討死と、旣に覺悟せし折柄。

信長　二陣に控へし森池田が、助けの兵にのがれしかど。

秀吉　柴田佐久間が斯程まで、不覺を取りしも御身の計略。

信長　この信長も舌を巻きたり。

重治　その時木下藤吉殿、思ひも寄らぬ隨龍寺の裏手の山の絶頂に。

〽五色の旗を數百旗、松の嵐に吹き靡かせ、其手の軍勢幾百萬。

稻葉山の搦手へ攻め入る如く見えければ、味方の軍勢あわてふためき。

〽裏崩れして散亂なす、其の計略の鋭きこと。

なか〳〵以てそれがしが及びもつかぬ事でござる。

〽互ひに劣らぬ智者と智者、奥床しくぞ見えにける。

ト此うち信長、秀吉、重治三人よろしくこなしあつて納る。

〽折から運ぶ熨斗土器、長柄の銚子品々を、君の御前へ差出せば。

ト是れへ管絃を冠せ、下手より茶道三人熨斗を載せし三方、土器を載せし三方、長柄の銚子を持ち出來り、眞中へ置く。

信長　日頃懇望なしたる竹中、長く因みを結ぶやう、杯なさん、近う。

重治　はあゝ。（ト誂への合方、鼓のあしらひにて信長土器を取上げる。小姓酌をなす、信長呑んで、）

信長　千代を祝うて目出度く一獻。（ト出す、茶道三方を取次ぎ、重治前へすり出て土器を取上げ、）

重治　有難く頂戴仕りまする。（ト茶道酌をする、重治頂いて呑む思入。）

信長　土器是れへ。

重治　でも、御返杯は。

信長　苦しうない。

重治　はッ。

ト鼻紙で拭ひ、三方へ載せる、茶道信長の前へ出す、また信長呑む、此うち外の茶道二人白臺へ誂への太刀、錦の巻物を載せ、持ち出て、重治の前へ置く、

秀吉　此の品々は我君より、竹中氏へ下さりまするぞ。

重治　思ひがけなき御賜、有難く頂戴仕りまする。

秀吉　粗末なれども別殿にて、御飯を下し置かれますれば、書院へお越し下されい。

重治　重ね〳〵のお持成冥加に餘る御惠み。

秀吉　何れも方にも御一緒に。

一　竹中氏の御相伴、

二　有難く存じ、

皆々　奉りまする。（ト重治此うち思入あつて、）

重治　聞きしにまさる尾州公、臣下を用ふる御仁惠、これでは人も。

信長　や。

重治　恐入つてござりまする。（ト辭儀をなす。）

秀吉　左樣ござれば、竹中氏。

重治　御前よろしう。

皆々　いざ、別殿へ。

重治　御案內下されい。

〽仁惠厚き信長が、心を感じ竹中は、打ち連れてこそ。

ト重治よろしく感心の思入あつて先に立ち、跡へ諸士八人茶道白臺の賜物を持ち、皆々花道へはひる。
信長秀吉跡を見送り、兩人顏見合せにつたり思入あつて、是れより時代を世話にいふ心にて、

信長　藤吉近う。

秀吉　はツ。

信長　苦しうない、づッと是れへ。

秀吉　はッ。（ト誂へ、琴の入りし、やはらかな合方になり、）

信長　さて／＼、汝が才智の程、今に始めぬ事ながら、信長實に此度は感心いたした。

秀吉　左樣にお褒め下されては、此の雪中に汗が出ます。

信長　これが褒めずに居られやうか、よもやと思つた竹中が、幕下に來るは汝が働き、手を突いて禮を申す。（ト信長手を下げ禮をいふ思入、）

秀吉　それでは誠に恐れ入りまする。然し竹中半兵衞は、目の上の瘤でござりましたが、彼奴を味方に附くる上は。

信長　最早敵の齋藤方に、恐るゝ者はあるまいな。

秀吉　一人もござりませねば、近々美濃へ攻め入つて、先づ龍興から討ち滅ぼし。

信長　其虛に乘つて隣國を、切り隨へてしまふ時は。

秀吉　御前は木性か存じませぬが、今年は有卦に入りました。

信長　なに、有卦に入りしとは。

秀吉　やがて日本六十餘州、あなたのお手に入りませう。（ト信長につこり思入あつて、極くくだけ、）

信長　藤吉、さう行かうかな。

秀吉　私、お請合ひ申しまする。（ト思入、）

信長　むゝ、誠に汝は。（ト信長二の腕を叩くを木の頭、）片腕ぢやわえ。

ト兩人氣味合の思入、早めたる琴の合方にて、

ひやうし　幕

竹中問答（終り）

岡目八目御最屓の御助言受て取敢ず綴り兼る岩代川の水底へ潜る妙手の水練又と有海の川原に於て名をば鳥井が命の捨石圍碁に掛は數度敵に勝類ほどの勇將も四め殺しの天目山切手も盡て無慚の討死玆へ隣國武藏より急に急て馳附し忠臣小宮が百計も今は中手に落延びて再び圍む義兵の籏上

三番續き

御最屓樣の御助言に辭退もいかゞと又一番目隣で圍む天目山のだめを拾うて打ちつゞく鷲窪村に内膳が四鳥にかゝる手詰の腹切親兄弟も黒白の心分からぬ敵味方に打ちつ打たれつ討死の盤面うつす物語てうど忠義もたがひせんなる秋山民部がなさけに見のがす其のいちもくに義兵の籏上げ

再會一番

碁風土記戰國手形

『後風土記』(碁風土記魁舛形)は明治四年正月、市村、守田の兩座に分けて演ぜられたものである。作者五十六歳のことであつた。兩座に分けて上演せられたのは、後の九世團十郎である河原崎權之助の掛持出勤のせゐで、珍らしい事と言つてよい。四幕になつてゐる内、始めの三幕が市村座で、終りの一幕が守田座で上演せられた。けれども、是れは獨立したものと見て見られぬこともないから、鑑賞上にはさして影響はなかつたであらう。「中幕後風土記の小宮内膳大出來にて權チヤンもどうやら座頭の貫目備はりたりと評判たかく、此頃より技藝に一歩を進め例の活歴劇の芽を吹き出したるなり……訥舛の勝頼天目山の討死と倶に評判殊によし」と『續々歌舞伎年代記』にもある。鳥居强右衞門の件は屢々上演せられる。

稿下當時の役割は河原崎權之助(小宮内膳知之)、中村翫雀(内膳妻しがらみ)、澤村訥舛(武田四郎勝頼)、中村芝翫(鳥井常右衞門)、市村羽左衞門(武田の臣大谷東藏)、坂東三津五郎(武田の奥方白妙)、澤村其答(常右衞門女房小笹)、市村家橘(長篠小八郎)、中村仲藏(小宮丹後正知)、市川左團次(内膳弟又七郎)等であつた。

挿繪にしたのは、五世尾上菊五郎の似顏による鳥井强右衞門である。題扉の「語り」右方は市村座の分であり、左方は守田座の分である。

梅幸百種之内
豊原國周筆

碁風土記魁艸形（後風土記＝四幕）

序幕

長篠城内の場
同　常右衞門内の場

〔役名＝鳥井常右衞門、奥平小八郎正貞、松蔭與一郎、甲賀八右衞門、長篠方の郎黨大勢、長家子供○△、常右衞門一子梅松、小姓。常右衞門女房小笹、家中女房お筋等。〕

（長篠城内の場）＝本舞臺通しの二重。向う金襖、幕の内より軍兵一、二、三、四、五、何れもずゝゝゝゝぼんまんてろの拵へにて藁人形に衣裳を着せ、眞中に置き、すべて三河國長篠城中大廣間の體、打込にて幕あく。

軍一　なんといづれも、武田方の家來にても馬場山縣を始めとして、名ある勇士は討死なし、今は長坂鳩部のたぐひ、智慧ある奴はないと見えます。

二　左樣でござる。今朝城の狹間より此の藁人形に烏帽子直垂を着せ、舞を舞はせて見せたるところ憎き敵の振舞なりと、寄手の内で人を選みて射たりしが、よく〳〵見れば此の人形ゆゑ、恥辱を

取つて歸りましたが、勝頼大きに立腹なし、その恥辱を雪がんと、今宵あたりは人數を催し、夜討をかけようも知れぬゆゑ、必ず御油斷なさるゝな。（ト此時奥より、八右衞門同じくずばんのなりにて出て、）

皆々　左樣でござる。

八右　何れも方には高聲御無用、唯今君の御出座でござる。

ト時の太鼓になり、奥平正貞若殿のなり、後より與一郞若侍の拵へにて出る、皆々平伏する。正貞褥の上に住ふ。

三　我君樣には此程より晝夜軍慮をめぐらし給ひ、嘸御心痛と思ひの外、更にお勞れの氣色もなく、麗しき尊顏を拜し、大慶至極に、

皆々　存じまする。

正貞　我等に於ても滿足せり。既に合戰屢々なりしが、味方僅かの人數にて、敵の大軍を取ひしぎ、塀一箇所も損ぜざるは、全く我軍慮にあらず、臣下の面々一致なし、身命を擲つて防ぎ戰ふゆゑにこそ、是まで保つ此の籠城。それゆゑ臣下の面々を招きしは外ならず、その一禮を述べたる上、此の政貞は生害なし、臣下の者を助けん心。

八右　こは何故に我君には、御自害遊ばす、御所存は。

政貞 されば此程物見より敵の樣子を窺ひしに、味方の鋒先鋭くして寄手の損耗多きゆゑ、勝頼ほどの愚將なれども、味方の要害薄きを計り、唯遠卷に城を圍み時日を送るは、これ全く兵糧責めになす樣子。早くもそれと悟りしゆゑ、兵糧方へ申附け、糧米しかと調べさせしに、情なきはこの正貞、小身にして貯へなく、殊に火急の籠城にて軍用手當あらざるゆゑ、最早半月籠城なし、後四五日もたつ時は、兵糧盡きて手當なし。さすれば、かゝる忠志の家來を持ちながら、餓死させねばならざるゆゑ、けふまで我に忠心盡し、働きくれし返禮には、此の正貞が自殺を遂げ、首級を家來に遣はすゆゑ、是を武田へ渡せし後、心々に城を開き命全う致されよ。我は此場で生害なさん。(ト正貞腹を切らうとするを、皆々留めて、)

與一 こは御短慮なり、我君樣、假令兵糧盡きればとて、まだ四五日の間もござれば、敵の油斷を押量り、

軍一 岡崎表へ馳せ參じ、後詰の加勢と兵糧を送りもらはゞ敵方を、前と後に挾み討。

八右 まづお留まり遊ばしませう。

正貞 イヤ〳〵それは僻事なり。その計略も此程より、樣々心を苦しむれど、城のまはりは敵嚴重に取圍み、岡崎表へ立越える道には難所の岩代川、たゞさへ早き急流に、鳴子をつけし網を張り、張

番致す者あつて、假令水練心得たりとも、なか〳〵たやすく越えがたしと、間者の者が我への注進、それゆゑ無益に家來をば、討死させぬその先に、生害なして。

ト又切らうとする。此時下手にて鳥井常右衞門聲をかけ、

常右　我君、暫くお止まり下されませう。（トいひながら足輕のなりにて出て、）ハア、。

ト皆々是を見て思入。

八右　誰かと思へば、鳥井常右衞門。

與一　君の生害止めしは、仔細あつてか。

皆々　いかに〳〵。

常右　ハア、かく賤しき身分にて、かくお歷々のその中へ推參致すは失禮なれど、今日の評定如何あらんかと、お次にて承りて取敢へず、殿樣の御生害お止め申せしその仔細は、唯今仰せの岩代川、その越えがたき早川を、無難に越えて岡崎へ立越えまして、殿樣はじめいづれも樣の、此の御籠城が救ひたく、一命かけて此のお願ひ、お聞濟み下さりませうなれば、有難う存じまする。

ト此時軍兵の一、二常右衞門を見て、

一　シテ又敵の圍みを破り、怪しき者と見咎められしその砌り、如何致して切拔けるや。

二　手並の程を此の場にて。

ト兩人鐵扇にて常右衞門に打つてかゝる。常右衞門傍の藁人形を手早く取つて受止め、

常右　假令番士數十人、我を目がけて組みつくとも、それ此如く一束に、藁で束ねし藁人形、まッこの如く。

ト兩人を左右へ見事に投げて、

失禮は御免下さりませう。

ト皆々是にて感心のこなし。正貞思入あつて、

正貞　かゝる手練の其方を、僅かの祿にて召遣ひ、惠みも薄き我をうとまず、大事の役目を命にかけ、勤めたいとはあつぱれ忠臣。當座の褒美遣はさん、それ。

ト傍の陣羽織を八右衞門持ち常右衞門の前へ置く。

常右　こは有難き我君より冥加に餘る御賜物、有難く拜領仕つてござりまする。

正貞　今改めて其方へ、門途を祝ふ杯くれう。銚子土器これへ持て。

四五　ハアゝ。

ト軍兵四、五銚子土器を持ち、正貞の前へ置く。正貞取つて呑みほし、

正貞　ソレ、常右衞門へ。

四　ハア、。

　ト軍兵の四杯を常右衞門の前へ持ち行く。常右衞門頂き呑みほして、正貞の方を向き、落涙の思入。正貞此體を見て、

正貞　コリヤ常右衞門、何故落涙致せしぞ。（ト言はれて常右衞門思入あつて、）

常右　お目立ちまする上からは、何をか包みまゐらせん。かゝる陪臣づれが、淺からぬ君の御顏を拜し奉るも、此御使を仕損じなば、是れ今生の御暇乞と、思ひますれば常右衞門、思はず落涙仕つてござりまする。

正貞　我も惜しき忠臣ゆゑ、かゝる危き敵の中へ、使に遣るは殘念なれど、許してくれい常右衞門。

　ト是にて正貞、常右衞門も皆々愁ひの思入あつて、八右衞門前へ進み出て、

八右　かゝる目出度き出立に、涙は不覺でござりませう。（トいはれて常右衞門氣をかへ、）

常右　こは我ながら後れたり、左樣ござらば、我君始めいづれも樣には、常右衞門が敵の陣所を切拔け、岡崎表へ罷越し、岡崎公の御味方あらば、神保峠の絕頂にて合圖の烽火を揚げ申さん。

正貞　シテ／＼小田の御親子とも、都合三家の味方あらば。

常右　その時こそは三本の烽火を揚げて合圖をなし、やがて吉左右お知らせ申さん。長居は恐れ、これより直に。

ト氣をかへて、バタ〳〵とよき所まで行くを、

正貞　待て〳〵。

常右　ハアヽ。（トよき所へ坐る。正貞もいろ〳〵思入あつて、）

正貞　必らず吉左右、相待ちをるぞよ。

常右　ハアヽ、

正貞　行け〳〵。

常右　ハアヽ。

ト常右衞門きつとなり、凜々しく揚幕へはひる。正貞皆々後を見送つてよろしく思入あつて、

正貞　あつぱれ健氣な、若者ぢやなア。

ト脇息へ兩肱をつき、感心の思入よろしく。此の模様道具まはる。

（常右衞門内の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に暖簾口、上の方押入、まひら戸、下の方赤壁、

反故の腰張り、上手折廻しの障子屋體。但し反故にて張り、いつもの所に門口、下手藪、後に一本竹を切る事あり。幕の內より、梅松子役のなりにて、長家の子供三人○△□と共に調練の稽古をしてゐる。すべて長篠城內常右衞門內の體。調練のはやしにて道具留る。

梅松　總隊進め〳〵。

　　ト いろ〳〵調練の事ある。此時下手より、お筋長家女房のなりにて出來り、

お筋　おゝ、皆調練の稽古が出來ますの。

梅松　お前は隣りのをばさん、何ぞ用かえ。

お筋　別に用事はないが、母さんは家にかえ。

梅松　アイ奧にをられまする。呼んで來うかえ。

お筋　デモマァ利口なことわいなう。折角稽古してゐるのに、このをばが來て邪魔しますなう。

梅松　イエ〳〵、もうしまふ所であつたわいなう。

○　わしらも家へ行て、飯食つて來うかえ。

△　さうしよう〳〵。

○　そんなら梅松さん。

兩人　また明日え。（ト子供みな〳〵下手へはひる。）

梅松　モシ母樣、隣のをばさんが見えました。（ト是にて小笹女房のなりにて出て、）

小笹　オヽこれはお筋さん、ようござんしたなア。

お筋　時に小笹さんえ、こちらの常右衛門さんは、戾つてゞはござんせぬかえ。

小笹　はい、主はまだ下つてゞはござんせぬ。いつにない下りが遲いゆゑ、私も案じてをりまする。

お筋　イヤモウ、高い聲ではいはれませぬが、此の城中には兵糧が、四五日限りで切れるとやらで、每日々々一家中はその事のみの大評定。留守に一人でつくねんと、考へをるも心細くなつたゆゑそれで是へ相談に來ましたわいなア。

梅松　コレ母樣、飯が食ひたいわいなう。

小笹　ほんに此子としたことが、父樣のお歸りまで我慢をしや。
〽口にはいへど心には、不便と歎く母親の、心を傍に汲取つて、

お筋　ほんに子供衆のあるお家は、餘計に苦勞でござんせう。どれ〳〵私が、常右衛門さんの歸りを、そこらまで行つて見て來ませう。
〽詞をしほに歸りゆく、小笹は門口締めさして、

小笹　コレ梅松、わが身は父さまのお歸りまで、その調練の太鼓でも叩いて遊びやや。

梅松　ハイ〳〵。

小笹　ほんにおとなしい子ではある。ドレ、わしは針仕事にでもかゝりませうか。

〽押入の仕事取出す女房の、緣の糸すぢもつれ氣の、程なく主人常右衞門、御前を下りしほしほと、我家へ戻る道すがら、藪の茂みへきつと目をつけ、これ屈竟の息つぎ竹、

ト常右衞門花道より出來り、直ぐ舞臺へ來り、下手の藪へ目をつけ思入あつて、藪の側へ行く。

常右　さうぢや〳〵。

〽さうぢや〳〵と立寄りて、はつしと切つたる青竹を、四五尺ばかり切折つて、節をぬく音梅松は、父の歸りを待ち侘びて、目早く見付け、

梅松　や、父樣か、

〽悅ぶ聲に母親も、

小笹　おゝこちの人、お前の戻りが遲いゆゑ、この梅松も待ち侘びてゐました。

〽言へど心に常右衞門、わけても言はれぬ節竹を、傍に置いて座につけば、何も知らぬ腕白盛りの子心に、

梅松　ソリヤもう、飯ぢや。
〽喜ぶ梅松、女房は側より、
小笹　ほんにお前が歸らしやんすと、一緒に御膳を食べるといつて、梅松が待つてゐたゆゑ、ドレ、飯拵へしてあげませう。
〽立上るを、
常右　イヤ、俺は欲しうない。梅松が待つてゐるなら、俺にかまはず食べさせてやるがいゝわ。
小笹　ハイ〳〵、そんならさうしませう。
〽妻は納戸へ入りにける、後見送りて常右衞門、梅松が傍へすりよつて、
常右　コリヤ梅松よ、けふまではこの父も三度の食を二度に延し、そちにも餓い思ひをさせたが、殿樣のお使ひにて、父はこれから留守になれば、そちは父二人前、たんと御膳を食べるのぢや。その代りには此父と二人前の働きして、その調練の太鼓を叩き、まさかの時は殿樣のお馬先にて御用を勤め、功名手柄をするのぢやぞよ。
〽言ひ含むれば子心に、頑是なければ嬉しげに、
梅松　そんなら今日から父樣と、二人前の御膳を食べ、太鼓叩いて軍に出るのかえ。早う軍に出たいわ

いなう。
〽死にゝ行く身と修羅道の、巷へ出るを樂しみにする心こそあはれなり。母は手鍋の白粥を膳立なして納戸を立出で、
小笹　サア〳〵お粥が出來たれば、そなたは爰で食べやいなう。
〽いふにいそ〳〵梅松が、
梅松　うれしい〳〵。
〽悅ぶ傍に夫の顏、物思はしく見えければ、
小笹　もし、こちの人、お前どうぞしやしやんしたかえ。
常右　いや〳〵、どうもしはせぬが、急にこれから岡崎まで、お使ひに行かねばならぬ。
小笹　そりや又、何の御用で。
常右　さあ、その譯といふは、今日評定の御席に於て、殿樣から直々に仰せ付かりし屈竟のお使、今宵の内に出立なし、夜半にまぎれて敵方の、圍みを破り岡崎へ、行かねばならぬ一世の大役、何と目出たい事ではないか。
小　そりやもう輕い身分でその大役を勤めなさんすは、どうやら目出たいやうなれど、お城のまはり

は十重二十重、敵の人數が手配りして取卷いてゐるとの事。それをどうしてお前には。
常右　サアそこを行くのが一かばちか。岡崎表へ行く道に、渡らにやならぬ岩代川、唯さへ早き急流に鳴子をつけて網を張り、晝夜張番してゐれば、なか〱たやすく切拔けて、行く事ならぬ敵の中、そこを首尾よく仕果せなば、この常右衛門が手柄となれど、もし又敵に見咎められ、捕虜となりしその時は、生きて再び歸らぬお使。
小笹　そんならお前、死ぬ覺悟で。
常右　命を捨てるは覺悟の前、爰が御主人へ忠義ぢやわやい。
〽切つて放せし夫の詞、子はそれぞとも白粥を、一膳食べて、
梅松　母さん、お替り。
〽かへる我子に引代へて、歸らぬ旅へ行く夫、思へば悲しくすがりより、
小笹　いかに忠義の爲ぢやとて、私はともあれこのやうに、頑是なき子を振捨てゝ、行くとは胴慾ぢやわいなア。
〽妻の小笹がかきくどく、心根不便と思へども、かくては果てじと常右衛門、側にあり合ふ女房が、繕ひ置きし鎖の肌着、これ幸ひと手に取上げ、

常右　時刻移らば役目の怠り、いで出立の用意せん。
　　〽その身は身輕く出立つとも、重き主君の拜領物陣刀もつて立上れば、側に見てゐる梅松が、
梅松　ヤア、コリヤいゝ刀ぢやナ。父さんお前のかえ。
常右　オヽこれこそ殿より拜領物。今にそちが大きうなれば、此刀を讓つてやるぞよ。
小笹　どうぞその刀を、此の梅松に讓るやうに、お前が無事で此城へ戻ればよいがなア。
　　〽女房が又も涙に暮六つの、鐘に驚く常右衞門、
常右　ヤヽ、アリヤもう暮六つ。これより直に。
小笹　そんならどうでも。
常右　行かねばならぬ大事のお使ひ、留立致すな。
　　〽陣太刀を背中に負ひ、竹押取つて立上れば、
梅松　父さん、さうして此の竹はえ。
常右　これはな、川へ沈んでゐる内、この竹から息をするのぢや。
小笹　えゝもう、何ぼ忠義ぢやとて、そのやうな事がならうかいなア。
　　〽泣くを側から梅松が、

梅松 母さん、お前は何で泣くのぢや。
小笹 父様が死にゝ行かしやるもの、これが泣かずにゐられうぞいなう。
梅松 えゝ侍が軍に行けば、死ぬのは當り前ぢやわいなう。
〽頑是なければ死ぬ事を、苦勞にせぬ程いぢらしく、
小笹 あれもう、何にも辨へなく、よい氣な事を言ふわいなう。
〽歎く小笹を叱りつけ、
常右 エヽ梅松でさへ泣かぬものを、不吉な泣顏致すとは、未練者めが。
〽口にはいへど胸迫り、ほろりとこぼす一雫、子は目早くも見て取りて、
梅松 父さん、お前も泣いてゐるくせに、この未練者めが。
〽叱る子供の心なし、親はおのれでおのれを咎め、
常右 エヽ我ながらおくれたり、未練殘さず、おゝさうぢや。
〽立出る折しも降り出す、雨は五月の空癖に、
小笹 テモ折の惡いこの大雨、これなと冠つて行かしやんせ。
〽妻が差出す竹の子笠、

常右　イヤ〳〵何の笠が入るものぞ。岩代川の水底を、潜りて敵の陣所をば破る大事のお使に、濡れる位は厭ひはせぬ。時にとつてのこの雨は、こつちの爲には却て屈竟。天より授かる賜なり。

〽名殘を惜しむ女房を、後に鳥井の常右衞門、城外さしてぞ出でゝ行く。

小笹　これなう、待つて下さんせいなア、こちの人。

〽これなう待つてといふ母と、共に見送る梅松が、

梅松　アレ母さん、父樣の影が見えぬ、ま一度見せて下されいなう。

〽せがむ子鳥に親鳥も、塒はなれし風情にて、

小笹　サア、梅松おじや。

〽と手を取つて、跡を慕うて、

ト小笹梅松の手を取り、花道へよろしく行く、三重にて、

幕

二幕目

岩代川陣所の場

三州神保峠の場

〔役名――武田勝頼、鳩部大炊之助、田原彌九郎、鳩部の臣烏戸九郎次、武田の郎黨、番卒、軍兵、譽田七郎、烏井常右衞門。常右衞門女房小笹、同一子梅松。〕

〔武田陣所の場〕――本舞臺一面の平舞臺、正面眞中に關所、兩脇上手共丸柱の柵木杭、是に四つ菱の幕を張り、前通り二重にして砂の蹴込、下手の附際岩の鼻、上手より花道へかけて一面の浪布、花道揚幕の所浪の半遠見、よき程まで大きなる岩臺を出し、右川の眞中に鳴子つけある。幕の内より番卒小頭、外に番卒四人、何れも番卒のなりにて前に酒樽と皮包を出しゐる。すべて岩代川武田の陣所の體。水の音、雨車、時の太鼓に本釣鐘の合方にて幕あく。

小頭 いかに者共、敵方より此川を越させまじきその爲に、唯さへ早き急流の流れの中へ網を張り、鳴子をつけて合圖を定め、寄手の人數を手分けして、晝夜四度の番替りも、今宵はかゝる大雨ゆゑいかほど水練得らるゝとも、此程よりの時化降りにて、水嵩増したる事なれば、陣所破りはよもあるまい。我主人よりそち達に一杯呑まして遣はせと、酒が一桝まるつてをれば、頂戴致して今晩は、骨休めを致すがよい。

番一 何とおつしやる。左樣ならばあなた樣の御主人鳩部樣より、アノお手當を下されしとか。それは近頃有難い、お心づいたるなされ方。

二　鳩部樣には萬事の事にお氣がつけど、それに引きかへ田原樣や內藤樣のお番の時は、叱言ばかりおつしやつて、何にもお手當の出た事がない。
三　さうだ〳〵。あれがほんの譬の通り、金持と灰吹は溜るほど汚く、段々慾が張つて來るのだらう。
四　イヤ〳〵、金も持つてはゐるまい。大方金が內藤樣だらう。
一　サア、お許しが出たからは、あの番小屋で、四人してゆつくり呑まう。
小頭　コリヤ〳〵者共、先づ待て。醉ふ爲の酒なれば少しは呑んでもよろしいが、たんと酒をば呑み過し、口論などをしては相成らぬぞ。
一　イヤもうそれは大丈夫、笑ひ上戶に泣き上戶、この門助が寢上戶に番助が踊り上戶で、いろ〳〵上戶もござりまするが、腹立上戶はござりませぬ。
小頭　然らば隨分神妙に、お手當を頂戴致しやれ。身共は是より詰所へまゐり、主人の相手で一杯過さん。
皆々　左樣ならば烏戶樣。
小頭　よく番致せ。
　へ引別れてぞ入りにける。

ト雨車はげしく、小頭烏戸九郎次は上手、番の者四人は酒樽を持ちて門の内へはひる。

〽降りしきる雨も小止みに兼てより、樣子如何と身を潛め、窺ひ忍ぶ常右衛門、時分はよしと芦原を、押分け出でゝ岩代の、川邊に一人前後を見廻し、

常右 今宵の雨に番卒共、心を許し引取りしか、川原に番の者も見えず、あたりもひつそと靜まりしは川を越ゆるにこれ屈竟。

〽いでや入らんと身支度なし、既にかうよと見えたりしが、分別しかへて心に目算、然し油斷の體に見せ、不意を打つて搦め捕る、敵に手立のあらうも知れず、番人あるかあらざるか、おゝさうだ。

〽試すに何ぞと見廻せば、川原に立ちし朽木の棒杭、えいやと引拔き川中へ、ざんぶと打込む其の途端、千筋に張つたる鳴子繩、一度に動いてがら〳〵〳〵、こなたは又も芦原の、蔭へ忍んで窺ひゐる。こなたの岸の番小屋より酒に醉うたる番卒が、慌てふためき走り出で、

一 さてこの鳴子が鳴つたるは、陣所を破る者あつて、此水中に飛込んだる敵の間者。イデ詮議なさん。ソレ松明々々。

皆々 合點だ。

〽わな〳〵震うてゐたりける。やう〳〵にして松明へ、灯をつけて川の中、爰よかしこと見廻せど、更に人影あらざれば、こは不思議やと呟く內、はるかあなたの川上より、流れ寄つたる榜示杭、四人の番卒これを見つけ、

一　成程これで分つたわえ。此程からの長時化に取分け今夜の大降りにて、向うの岸の土手が崩れて、この棒杭が川上から流れて綱へ引掛り、鳴子が鳴つたを敵方の間者だと思ひ違ひ、

二　折角呑んだ酒を醒まし、思へば俺が引受けた、猪口も一番川流れ、此棒杭の箆棒め。

一　さあ〳〵、小屋へ行つて又呑み直さうか。

〽口で立派に心には、事のないのがまづ安心。

皆々　さあ〳〵行かう〳〵。

〽番卒は小屋の中へぞはひりける。朽木を流し番人の、油斷を試し常右衞門、あたり窺ひぬつと出で、

常右　雨に此の川越す者の、なきと思ひ敵方の、油斷は此身へ天の加護。主人を救ふ忠心を、諸天善神守らせ給ふか、あら有難や尊やな。

〽禮拜なし、かねて所持なす青竹を小脇に搔込み水中へ、ざんぶと飛込み一生懸命、拔手を

切つて十間あまり、泳ぐと見えしが水中へ、八重に張つたる鳴子繩、足にからんでがら〳〵がら、音にびつくり常右衞門、見咎められては一大事、爰ぞ用意と息つぎの竹携へて水底に身を沈めてぞ窺ひゐる。こなたは又も番卒が、鳴子の音に打驚き、

一　そりやこそ今度のがら〳〵は、何でも間者に違ひない、それ松明々々。

二　エヽ門助め、又棒杭ではないかよ。

一　いや〳〵何でも鳴子が鳴つたからは、詮議をするはこつちの役、搜せ〳〵。

〽松明てんでに携へて、爰かしこと川の岸をば尋ねても、別段怪しき事もなし。

二　コリヤ番助、かう見渡した所では、何にも流れては來ぬが、どうして鳴子が鳴つたか知らん。

四　何しろ今夜のやうに、度々鳴子に瞞されては、呑んだ酒が身にならねえ。

三　鳴子の音の聞えぬやうに、ちつと陽氣に騷がうぢやァねえか。

皆々　成程、そいつァよからう〳〵。

〽雨間を幸ひ川邊にて、唄ふもあれば舞ふもあり、踊り狂うてゐたりしが、中に寢上戶の門助が、呑みくたびれて樽を枕に打臥しける。番卒共はほろ醉に、

二　さあ〳〵、これから小屋へ行つて、一休みとやらかさう。

三　こりや門助、起きないか〳〵。爰は川端だ。

四　さあ起きな〳〵。

二　これ〳〵うつちやつておけ。醉が醒めりやァ起きて來るから、おいらは小屋へ行つて殘りの酒にせう。さあ來い〳〵。

〽その儘にして三人は、小屋へ入りつゝ殘りし酒を呑みつくし、前後を忘れ寢入りばな、しすましたりと水底より、再び出づる常右衛門、青竹小脇に拔手をきり、越ゆるも辛き網の目を、のがれて上るこなたの岸、一と息ほつとつく鐘も、水に響きてかう〳〵と、更けゆく雨夜に番卒も、心許せし川岸を、見れば一人の番卒が、酒に他愛も長々と、倒れ伏せしはこれ幸ひ、天の助けと悅んで、陣笠とつて打冠り、衣類を剝げば目を覺まし、

ト文句の通りよろしくあつて、

一　エヽ、何をする。もう呑まねえ〳〵。

〽言ひつゝふつと心づき、

ヤア、胡散な奴め。

〽と門助が武者振りつくを常右衛門、南無三寶と身をかはし、小手を拂つて眞の當、もんど

り打たせて投げのくれば、ぱつと立つたる水鳥の、羽音と共に鳥井のなにがし、後白浪とぞ、

ト是にて水鳥立つ。常右衞門よろしく思入あつて、此の見得よろしく

ひやうし　幕

（神保峠の場）――本舞臺一面の遠山。花道の兩脇山のうれ。眞中に大きなる杉の立木。大きなる松の大木、所々に松の立木あり、日覆より同じく釣枝、上下共山の張物にて見切り、すべて三州神保峠の體。鳴物にてよろしく幕あく。と上手より杣○、△出來り、

○　時に五郎藏、此間から長篠と武田の軍が始つて、ろく／＼杣も出來ねえが、何ぞ錢儲けはあるまいか。

△　おゝあるとも／＼。今度の軍にどの位儲けた者があるか知れぬ。その儲けた譯といふは、おぬしも知つてゐる通り、軍も久しく中入で、兵糧責になつたところ、三萬からの武田の人數が毎日遊んでゐるものだから、先づ煙草、餅、團子、又三度の兵糧に菜のものまでよく賣れるわ。俺が隣りの上さんなどは、洗濯物をかこつけて、ちよつとお伽をする所から、めつぽうけいな金儲けだ。

○　成程そりやア氣がつかなんだ。不自由がちの陣屋ゆゑ、こいつア賣れるに違えねえが、何を賣る

も元手はなし、ちよいとお伽と言つた處で、野郎ぢやァ仕方がねえ。何ぞ元手のいらねえ事で錢儲けはあるめえか。

△さうよ、元手いらずに儲ける事なら、今度軍が始まつたら首を拾ひに出るがいゝ。ひよつといゝ首でも拾つた日にやァ、一足飛びの立身出世だ。その代り間が惡いと流矢か外れ玉で命をしまふも知れねえから、どうでも元手のいらねえ事ぢやァ、矢張り仕馴れた杣がよからう。ハヽヽ。このやうな事いふより、一と仕事やらかさう。

○さあ〳〵、行かう〳〵。

〽軍ばなしも山の中、山上指して登りゆく、その日も丁度常右衞門が、岩代川を打越えてより二日過ぎ、此程よりの降り續く、つゆの雨さへ長篠の、討死近き籠城も、けふは晴れ行く胸の雲、敵地を越えて岡崎へ、使に立ちし常右衞門、再び歸る山中を、

ト遠ぜめ、合方にて、常右衞門先に、譽田、軍兵附添ひ出て、

〽送りの兵士に一禮述べ、

常右　これは〳〵譽田樣には御丁寧に、かゝる難所を御苦勞千萬、最早これまで參りますれば、案内知れし山道ゆゑ、お見送りには及び申さぬ。是にてお別れ申しまする。

〽いふに譽田は押止め、

譽田　然しこれより敵の中、石を抱いて淵の譬、くどくも申すやうなれど、主人を始め小田御親子、御加勢とあるからは、後詰の人數諸共に、御歸城あるがよいではござらぬか。

常右　アイヤその儀も、昨日何れも方が再應仰せ下されしかど、岡崎樣と小田樣にてお願ひ申せし後詰の御加勢、お聞濟み下されなば、此の神保峠に於て知らせの烽火を揚げる約定、合圖を致さぬその時は、後詰の御加勢なきと心得、討死あらんも計られず。それゆゑ平にお暇申す、これまで參りし常右衛門、路次の兇變なきやうにと、かくお見送り下されて、千萬忝う存じまする。

譽田　御尤もなる事ゆゑに、是までお送り申せども、最早これより敵陣なれば、妨げなきうち御約定の烽火を早くお揚げなされ。

常右　いかにも、合圖を致さん。

〽送りの士卒に持たせたる、かはどり取つて常右衛門、用意の烽火を取出し、三所へ分けて立並べ、火繩を移せば筒音高く炎々と、空にたなびく合圖の烽火、遙かあなたの山越に、

聲　エイ／＼オウ。

〽人聲の夥しくぞ聞ゆれば、譽田の七郎聞耳立て、

譽田　ハテ心得ぬ、遙かに遠き山越に、鯨波の聲をあげたるは、

〽不審立つれば常右衛門、

常右　あれぞ正しく城中にて、合圖の知らせを悦ぶ人聲、

譽田　さてはこなたに響きしは、合圖を悦ぶ人聲なるか。然らば是にて其許のお役目濟みし上からは、岡崎表へお歸りあつて、後詰の兵士と諸共にお出であつて、敵を退け御歸城あるが然るべし。

〽勸めに隨ひ岡崎へ、引返しなば常右衛門、その身の難はあらざれども、流石恩愛妻や子に一と目も早く逢ひたさに、

常右　忝うはござれども、弓矢神の加護あつて、參る折にも易々と、敵の圍みを拔けたれば、勝手知つたる岩代川、水底潜つて歸城致し、岡崎城小田樣の後詰の御加勢ある事を、主君へ直に申上げ、お悦びあるそのお顏が拜したうござりますれば、是にてお暇致したうござりまする。

〽餘儀なき詞に譽田の七郎、

譽田　何樣それも御尤も、然らば是にてお別れ申さん。隨分路次に氣をつけて、御歸城めされい。

〽送りの兵士家來引連れ目禮なし、元來し道へ引返す、後見送つて常右衛門。

ト譽田の七郎家來を引連れ。上手へはひる。常右衛門思入あつて、

常右　先づはこれにて一つの安堵。匿し置いたるわが出立、さうぢや〳〵。

〽こなたなる年經る杉の大洞へ、匿し置いたる番卒の、陣笠衣類取出し、着込の上へ着用なし、

ト此内常右衛門大杉の洞より、番卒の着附陣笠を取出し、着込の上より着る事よろしくあつて、

是より敵の人夫と僞り、岩代川の水底を潜るは覺えのわが水練、少しも早く、おゝさうぢや。

〽立上る後に窺ふ以前の杣、怪しき奴と組みつくを、もんどり打たせ投げのけて、飛ぶが如くに走りゆく。

ト此内以前の杣出て窺ふ事あつて、よき時分に左右より組付くを、立廻りよろしくあつて兩人を投げのけ、常右衛門上手へはひる。杣二人も追つてはひる。是にて此道具打返す。

（岩代川の場）――本舞臺元の岩代川の陣所になり、やはり遠寄せにて道具納まる。爰に鳩部大炊之助、陣立の拵へにて上手床几にかゝりゐる。次に鳩部の臣烏戸丸郎次、同じく陣立の拵へにて控へ、以前の番卒四人居並びゐる見得。眞中に大炊之助よろしくあつて、

大炊　唯今裏手の山に當り三筋の烽火立昇りしは、何ともつて心得ず、敵にいかなる計略あつての事

か知れざれば、陣所々々へ告げ知らせ、必らず油斷致すな。

九郎　仰せの如く此程より、油斷ならざる敵の振舞、既にもつて一昨夜、水中の網を切拔け、川を越したる者あつて、翌朝見れば川端に足跡がござつたゆゑ、番卒共に申付け、詮議致せど今もつて實情が知れませぬ。

番一　いやもう、何かの足跡なるか、あの夜は御酒を頂戴致し、既に十分醉ひましたが、隨分共に油斷なくいつも三度廻る所を四五度づゝも廻りまして、嚴しく番を致せしが、どうして網を切られしやら、一向に分りませぬ。

二　然もあの夜は大雨で、私などは夜通し廻り、着物をずツぷり濡らしまして、いまだに借着をしてゐます。

九郎　コリヤ、この事ぱつと致す時は、旦那樣の御恥辱ゆゑ、ひそかに網の破れを繕ひ、臭い物に蓋をして、そつくり致して置くといへども、かくす事ほど顯はれ易く、外に洩れては一大事。此場の事は此の場限り、必らず口外致さぬやう、合點か。

皆々　ハア、。

九郎　イザ御主人樣、先づ〳〵。

〽喋し合せて主從は、右と左りに別れ行く。

ト大炊之助に九郎次、番卒附いて、上手門の内へはひる。

〽日もはや西へ入相時、姿やつして蘆原を、忍び出でたる常右衛門、陣屋を窺ひかねてより用意なしたる息つぎの、杖を搔込み川端へ、足を忍んで行く折しも、後ろに窺ふ鳩部大炊、胡散な奴と呼び止め、

ト此内常右衛門番卒の拵へにて息つぎの竹を持ち、上手の蘆原より忍び出て、ツカ〱と下手の川端へ行きかゝる。門の内より以前の大炊之助先に九郎次番卒出來り、大炊之助は上手へ皆々下手へ行き、常右衛門を圍み、

大炊　コリヤ〱、其方は何者なるぞ。

〽咎むれば、胸にぎつくり常右衛門、（ト常右衛門ちよつと躊躇ひ思入あつて、）

常右　へイ、私は内藤家の番の者でござります。チト急用がござりますれば、眞平御免下さりませ。

〽と足早に、行かんとなすを立塞がり、（ト是にて番卒皆々行く手に立塞がり、）

皆々　動くな。

〽動くなやらじと番卒ども、こゝかしこより現れ出で、

大炊　ヤア内藤の家來なりと、僞りを言ふ胡散な奴。
九郎　内藤殿の組下に、かやうな奴は覺えなし。シテ又名前は何と言ふ。
〽不意に聞かれて息つまれど、そこはさそくの常右衞門。
常右　へイ、アノ芝平と申しまして、やう〳〵此頃内藤家へ召抱へられし番卒ゆゑ、御存じなきは御尤も、新參者でござりますれば、以後はお見知り下さりませ。
〽聞いて九郎は進み出で、（ト九郎次前へ出て、）
九郎　新參者とあるならば、それはそれにしてやらうが、さうして味方の人足なれば、皆めい〳〵に渡し置く、陣所の切手がある筈。印鑑すわりし鑑札を所持してゐるか。
常右　ハイ、その鑑札は則ち是に。
〽差出す鑑札、門助は見てびつくり、（ト常右衞門腰より鑑札を出す。門助見て、）
二　ヤア、コリヤ一昨日の夜川原にて、此の門助が取られた鑑札。さては着てゐる着物にも見覺えのある此の着物。
常右　南無三、それを知られては。
〽逃げんとするを前後より、組付く番卒左右には、鳩部主從諸共に、切つてかゝるを事とも

せず、必死を極めし常右衛門、火花を散して戦ふにぞ、持餘したる鳩部の主從、馳せ來る武田の臣田原彌太郎、熊手を持つて立向ひ、しばしが間戰ひしが、

ト此内常右衛門組付く番卒を相手に立廻りよろしくあつて、トヾ大炊之助九郎次かゝり、危くなる。此時門内より田原彌太郎凛々しき形にて熊手を持ち出來り、常右衛門といろ〳〵立廻りありて、トヾ手取の立廻りになり、常右衛門彌太郎に組敷かれる。番卒幕綱を持ち來り繩にかける。

田原が爲に組伏せられ、忽ちその身は縛り繩、無念の顏色見るよりも鳩部はえせ笑ひ。

ト彌太郎は上手へ控へる。

大炊　かゝる嚴き此の陣所を、切拔けんとは身の上知らぬ、アノ莫迦侍。ほんの汝が猪武者だ。

へ惡口なすを田原押止め、

彌太　かく嚴重なる固めの中へ、一命かけて忍び入り、陣所の密事を探らんとは、敵ながらもあつぱれあつぱれ。シテ其方は敵方にて、いかなる身分の者なるぞ。事の仔細を白狀致せ。

へ言ふを側から鳩部大炊。

大炊　あいや、なか〳〵そんな事では白狀せまい。骨を挫いで拷問せん。

へと立上る鳩部を常右衛門、繩つきながらきつと睨み、

ト大炊之助立上らんとするを、常右衞門見て、

常右　ヤアその拷問には及ばぬ事。仔細殘らず言ひ聞かさん。そも此度の戰ひは味方僅かの小勢にて、長篠城に立籠り、度々寄せ手を惱ますにぞ、持餘したる兵糧攻、それがし君の命を受け、雨を幸ひ一昨夜水底潛つて陣所を破り岡崎へ立越え、後詰の加勢を賴んだれば、岡崎小田の兩家の大軍最早出陣なせり。かくいふ我は長篠に身分も輕き徒士若黨、その名も鳥井常右衞門、一世の大役、勝賴はじめ首を洗つて待つてをれ。

〽飽くまで罵る雜言に、鳩部は怺へず立ちかゝる、後ろの方に聲あつて、

ト大炊之助急ぎ立つ、此の時上手門の內にて、

勝賴　暫く待て。

ト勝賴大將陣立の拵へにて、采配を持ち出る。郎黨大勢附いて出る。

〽大將勝賴出で給ひ、(トよろしく勝賴出來り、上手床几にかゝる。郎黨後へ並ぶ、)始終の樣子はあれにて聞く、それなる常右衞門とやら、僅かな扶持の取り前に、かゝる身分であつぱれ忠臣、無益に殺すは本意ならず、今より心飜し、我に隨身致しなば、大祿與へ召遣はん此儀はいかに返答致せ。

常右　こは有難き君の仰せ。いかにも隨身仕り、忠勤の盡しまする。

〽誠しやかに述べければ、勝賴機嫌斜ならず、（ト勝賴悦ばしき思入あつて、）

勝賴　然らば我への奉公始め、繩付の儘敵城の物見の下へ至り申さうには、岡崎表へ使ひの途中、まツ此如く生捕られ、後詰の合圖を致せしも武田方の計略にて、最早後詰はあらざると、長篠方の勇氣を挫き、その虛につつて落城させん。

〽仰せに鳩部は感服なし、

大炊　あつぱれ君の御賢慮、いやはや感心仕つてござりまする。

〽喜ぶ折しも向うの川岸、子供をつれし一人の女、こけつ轉びつ駈け來り、

ト此内揚幕より、小笹梅松を引連れ出て來り、花道の岩臺の所まで來り、

小笹　物見の衆の注進には、こちの人が敵方へ捕虜になりしと聞いたゆゑ、爰まで來は來れども、見切れぬほどのこの大川、向うに見える一群の中に夫はあらざるか。

ト舞臺の方を見て氣を揉むこなし。

〽いふに側から梅松が、

梅松　母樣、呼んで見ようわいなう。

小笹　オヽ、そなた呼んで見や。

梅松　アイ〳〵。コレ父様いなう〳〵。

〽聲を限りに呼ぶ聲の、川へ響けば聞耳立て、繩付ながら常右衛門、岩に登りて伸び上り、

ト梅松よろしく呼立てる。常右衛門これにて聞耳を聳て、下手の岩へ登り見て、

常右　コリヤ女房、かく繩目は受けたれど、大事のお使は。

〽言はんとするを烏戸慌てゝ引おろし、

ト常右衛門後を言はうとするを、九郎次驚き慌てゝ岩より引下ろし、

九郎　コリヤ常右衛門、迂濶な事を申すと、命がないぞよ。

大炊　唯今君の仰せあつた通りに申せば、その分にして妻子にも逢はしてやるわ。

九郎　それともたつて敵方へ、此事を申告げるとあらば、汝がからだは一寸試し五分試し、是でもうぬは長篠へ此事知らすか。

常右　サア、それは。

大炊　但しは君の仰せあつた通り、岡崎両家は承引ないと申すか。

常右　サア、それは。

九郎　拷問せうか。
常右　サア、それは。
大炊　敵を計るか。
常右　サア、それは。
大炊
九郎　サア、
三人　サア〳〵〳〵。
大炊　常右衛門、返事は。
二人　ど、ど、どうぢや。

〽詰めかけられて常右衛門、何と詮方あら縄に、くゝしつけられ力なく、やう〳〵に心を定め、

ト兩人に言詰められ、常右衛門思入あつて、

常右　成程長篠方を謀りませう。
大炊
九郎　何と。
常右　唯今君の仰せあつた通り、岡崎兩家は承引なく、先程揚げし烽火も敵の計略と申しませう。

トよろしく思入あつていふ。

〽言ふに鳩部も勇み立ち、

大炊　出來した常右衞門、サヽ、早く女房に承引ないと申してやれ。

〽繩付ながら川の岸へと連れ行きしが、常右衞門は心を定め、女房の方へ打向ひ、

ト是にて九郎次常右衞門の繩尻を取り、下手の岩臺の處へ行き、向うへ思入あつて、

常右　コリヤ女房、梅松ヤアイ。

〽水に響きて夫の聲、手に取るやうに聞ゆれば、

ト是にて女房舞臺の方を見、常右衞門を見て、

小笹　おゝこちの人、大事ないお使を、お前は首尾よく勤めしやんしたかえ。

常右　おゝ氣遣ひ致すな。首尾よく使ひは仕果せて、後詰の勢は瞬く內、岡崎と小田の人數で十萬騎の御加勢あれば、此事を早く味方へ注進せよ。

〽言ふを聞いて驚く人々、烏戸は慌てながら、

九郎　それ言はれては。

〽組付くを膝に引据ゑ、（ト常右衞門隙を窺ひ言ふ。九郎次驚きて組付くを膝へ敷き、）

常右　コリヤ女房、それにゐては命危し、少しも早く城内へ注進致せ。

小笹　そんなら私は是より直に。

〽夫の詞に是非なくも、心殘して走り行く。

ト小笹梅松をつれ、心を殘して揚幕へはひる。

〽勝頼怒りの髪逆立て、

勝頼　我をたばかる憎き下郎、その返報には城内より、遠目に見ゆる此の川原で、おのれを刑罰致してくれん。（ト勝頼怒りのこなしよろしくある。）

〽松の立木へ括りつけ、鳩部烏戸左右に別れ、槍をしごいて、

ト此内番卒常右衞門を松の立木へ括りつける。その間に九郎次山の内より大身槍を二本持ち來りて、一本を鳩部に渡し上下へ別れて、

大炊　敵への見せしめ、まッ此通り。

〽憎さも憎しと貫く槍先、常右衞門は聲をかけ、

ト是にて兩人左右より一槍づゝ突き、引拔いて二本目を突立てようとする。常右衞門とめて、

常右　二本目の槍、暫く待て。辭世浮んだ聞いてくれ。

〽苦痛をこらへ、につこと笑み、（ト常右衛門苦しきこなしあつて、につこり笑ひ、）「我君の命にかはる玉の緒を、何といふべき武士の道。」敵の大將勝頼を思ふ儘に欺きたるは、（此身の本懐、あら心地よや、嬉しやなア。（ト苦痛の内に喜びのこなし。勝頼怒りて、）

勝頼　え丶憎さも憎し、ソレ兩人。

大炊　九郎　ハア丶。

〽又も突き出す槍數を、恐れぬ強氣の常右衛門、類稀なる忠臣と、末の世までも。

ト大炊之助九郎次又も突立てる。常右衛門苦しみ息切れる。勝頼此體を見て心よき思入。

勝頼　ム丶ハ丶丶丶丶。

ト笑ふ。常右衛門落入る。双方よろしく此の仕組三重にて、

幕

三幕目

天目山中腹の場

同勝頼討死の場

〔役名――武田四郎勝頼、小宮内膳友之、土屋藤藏勝久、小原丹藏、山下杢之助、丹羽作藏、烏戸九郎次、駒谷笹藏、貫名新六、百姓九郎右衛門、捕手大勢。白妙御前、乳母岩橋、腰元笹尾等。〕

本舞臺一面の淺黃幕、遠寄せ、ドンチャンにて幕あく。と下手より、山下杢之助、烏戸九郎次、兩人戰ひながら出て、

杢之　ヤア鳩部が家來の烏戸九郎次、厚恩忘れし人非人。イザ立寄つて勝負なせ。

五郎　オヽ猪武者の勝頼を見限り、春永公へ降參なし、主人鳩部と山田殿、心を合せ勝頼を天目山まで釣出せしは、かねての手筈と知らざるか。

杢之　ヤア不忠者の汝等主從、冥土の道連れ覺悟なせ。

九郎　何を小癪な。（ト是にて鳴物になり、兩人立廻つて九郎次花道へ逃げてゆく。）

杢之　ウヌ、何處までも。

〽麓の方へと追つて行く。

ト杢之助揚幕へ走りはひろ。知らせに付き淺黃幕切つて落す。

（天目山半腹一つ家の場）――本舞臺三間の間中足の二重。上手障子屋體。藁屋根附き、いつもの所

に納戸口。下手寄に自在竹、つる鍋かけあり。下手落間、袖山出し、よき所にかけ樋をかけ、上げ簀戸。日覆より松の釣枝、上下とも櫻の立木を置き、向う押入れ赤壁、幕の内より百姓九郎兵衞、自在の前に火を焚いてゐる。すべて天目山中腹一つ家の體。淨瑠璃にて此の道具納まる。

〽追うて行く爰は名に負ふ甲斐の國天目山と聞えしは、近國無双の險山にて、峰より落つる瀧津瀬は、谺にひゞく鶯の聲さへわたる春の空、此山の半腹に、木樵半分百姓業、正直親仁の九郎右衞門、竈の下を焚きつけながら、

九郎　ヤイ／＼燻るぞ／＼。薪を干す間もあらばこそ、生木をくべたせゐか、燻つて／＼涙ばかり出るわえ。ほんに涙が出るといへば、御領主の勝賴樣ぢや。時世とはいひながら昨日に變る今日の成行。御武家樣でも此方づれでも、衿元につく浮世とやらで、下り坂になると大恩受けた人々までが、世のよい方へ退き、この甲府の城は段々と攻取られ、あれほどの大盡樣が、身の置所にお迷ひなさるといふは、アヽお氣の毒ぢやなア。

〽ひとり言いふその折柄、麓に聞ゆる貝鐘太鼓。（ト向う揚幕にて貝鐘太鼓の音聞える。）

又麓で軍が始まつたと見ゆる。落武者がござるであらう。粥など炊いておきませう。

〽又焚きつける釜の下、折柄爰へ武田の家臣、駒谷笹藏貫名新六、後より山下杢之助、息を

切つて駈け來り。
ト九郎右衞門釜の下を焚付ける。揚幕より駒谷笹藏、貫名新六、山下杢之助駈けて出來り、直ぐ舞臺へ來て、

笹藏　コリヤ〳〵老人、水を一杯所望が致したい。（九郎右衞門笹藏を見て、）

九郎　これは〳〵、どなた樣もお働きと見えまする。御苦勞樣でござりまする。水はそれにかけ樋がござりまする、御自由に召上つて下さりませ。

へ言ふに各々水を注ぎたし、暫く爰に休らひけるが、山下は老人に打向ひ、
ト是にて三人、水を呑む事あつて、杢之助九郎右衞門に向ひ、

杢之　コリヤ〳〵老人、唯今の先これへ緋縅の鎧を着したるお方と、女中づれを三四人お見かけ申しは致さぬか。

九郎　イエ〳〵、いまだ左樣なお方樣は、お見受け申しませぬ。

杢之　然らばいまだ麓の方にて、防戰なされてござると見ゆる。

新六　しかし氣遣しきは御臺所、かつは乳人や若君、いかゞなされし事なるか。

杢之　何に致せ駒谷氏、これより麓へ取つて返し、君の御先途見屆けん。

笹藏　我はこれより山手へ登り、敵の樣子を物見なし、後より直樣追付き申さん。

杢之 新六　然らば駒谷氏。

笹藏　御兩所お先へ。

へ詞交して三人は、右と左りへ別れ行く。後見送つて九郎右衞門。

ト是にて新六、杢之助は花道へはひる。笹藏は下手へはひる。九郎右衞門思入あつて、

九郎　アヽどなたもお若いとはいひながら、お勇しいことぢやなア。

へ又も勝手へ差寄つて、釜の下へさしかゝる。折柄爰へ入り來るは、勝頼の御臺白妙御前が
腰元乳母を伴ひて、やう／＼爰へ歩み來る。九郎右衞門は打見やり、

ト此内九郎右衞門は又釜の下を焚いてゐる。花道より御臺白妙御前、腰元笹尾、乳母岩橋附添ひ出來
りすぐ舞臺へ來り、下手に佇みゐるを、九郎右衞門見て、

これは／＼、あなた樣方は御城内のお方とお見かけ申しまする。山道で嘸御難儀でござりませう。
サア／＼、穢くともこちらへお掛け遊ばしませ。

笹尾　いかにもそなたの察しの通り、やんごとなき御方なれど、御持病の御惱にて殘ない御難儀、

岩橋　然らば爰を借り受けますぞや。御臺樣、あれへお通りなされませ。

九郎　さあ〳〵、御遠慮なく是へお上りなされませ。

ト是にて白妙二重の下手へ住ふ。笹尾岩橋は二重の下手へ、九郎右衛門も下手へよろしく住ふ。白妙思入あつて、

白妙　見れば賤しい賤の老人、親切なる志し忝いぞや。

九郎　御勿體ないそのお詞、實に涙がこぼれまする。私も年久しう御領地にをりましたゆゑ、御恩返しと申したとて、別に致しやうもござりませぬが、かゝる亂軍でござりますれば、御殿様の御同勢の方々に、白粥の一膳づゝも差上げませうと、此近所の人々は皆逃げ失せましてござりますれど私一人爰に殘り、皆樣のおいでをお待ち申してをりました。

笹尾　それは〳〵奇特な事、年寄りの身の逃げもせず、味方の者を待ち受けをつたとは。

岩橋　頼もしい者でござりますわいなア。

白妙　それにつけても我君様は、いかゞ遊ばしました事ぢややら。

笹尾　何は兎もあれ私が、麓へ下つて御安否を。

ト笹尾立たんとするを、九郎右衛門留めて、

九郎　アゝ申し〳〵御女中樣、いんまの先御家來衆と見えまして、お三人連れで爰へお出でなされまし

て、かういふ姿のお女中連れは見えぬか、又緋縅の鎧を召した御大將は見えぬかとお聞きなされまだお見えなされませぬと申しましたら、お二人樣は麓へお行方を尋ねにお出でなされ、又お一人は山手の方へお出でなされましたゆゑ、今にお戻りでござりませう。もう少しお待ちなされませ。ドレ澁茶など差上げませう。(卜九郎右衞門正面納戸口へはひる。)

〽ますらをの檜垣に影もあらはると、古歌に二月の中空や、心も武田勝頼が、多くの敵に惱まされ、危急をのがれ紅の、血汐染めなす緋縅の、鎧の袖に風を追ふ、股肱の家來兩人を、伴ひ山路に差掛る。

卜是にて花道より、武田勝頼陣立の拵へ、手負ひの體にて土屋藤藏勝久、小原丹藏の兩人やはり陣立の拵へにて附添ひ出來り、花道よき所に留り、

土屋　我君樣には此間よりの戰爭に、嘸お勞れにござりませう。

丹藏　小田の先手を切崩し、信濃口まで追ひ返したれば、暫時寄せ來る氣遣ひなし。

土屋　幸ひあれなる小家にて、御休息あつて、

丹藏土屋　然るべう存じまする。

勝頼　何樣左樣致さう。

〽家來引連れ悠然と、小家のもとへ差掛る。御臺見るより走りより、

ト此內勝賴土屋藤藏舞臺へ來る。白妙勝賴を見て、二重より走り下りて勝賴に取縋り、

白妙　ヤア我君樣、御無事でお出でなされましたかいなア。

〽と縋り歎けば勝賴も、（ト白妙歎く事、勝賴思入あつて、）

勝賴　そちも無事で重疊々々、既に最前笹子にて敵の多勢に取卷かれ、危ふき所へ土屋小太郎、二人の者が殿して、やう／＼是まで落ち延びたり。何は格別汝に別狀なかりしは、何よりの予が祝着。

ト笹尾抱子を勝賴に見せて、

笹尾　御覽じませ、よう御寢なつてゞござりまする。

勝賴　ナニ寢てゐるか。かゝる難所の苦心も知らず、寢入りをるとは、ハテ幼子は佛ぢやなア。

笹尾　あれ又、御前樣が恐ろしい。佛などゝ戰場では詞のぎえんを申すとやら、お祝ひ直し遊ばしませ。

勝賴　やくたいもなきそちが詞。ハテ女は愚癡なものぢやなア。

〽必死の中にも御大將、笑ひ催すその折柄、主人の老人立出でゝ、

ト此內勝賴よろしくある。九郎右衞門納戶口より來り、勝賴を見て、

九郎　ヘイ／＼、お殿樣でござりまするか。此中からのお働きで、お勞れでござりませう。

〽言ふに大將不審の顏色。（ト勝賴不審なる思入あつて、）

勝賴　シテ此者は、何者なるぞ。

白妙　此の老人こそ此家の主人、運命傾く我々へ家來も及ばぬ厚い親切、お詞下し置かれませう。

勝賴　奥が介抱供人まで、何かといかい世話であつた。いつの世にかは恩賞なさん、過分々々。

九郎　御勿體ないそのお詞、御治世の頃であらうなら、お顏を見上げる事もならぬに、かゝる時節なればこそ、お側近う見上げまするも勿體ない、穢苦しくとも御休息なされて下さりませ。

〽いふに近臣兩手をつき、

土屋　何はしかれ我君には、嘸御空腹でござりませう。コリヤ〳〵老人、何ぞ召上る物はなきや。

九郎　ハイ〳〵かゝる邊土でござりますれば、差上げる物もござりませぬが、あの麥の白粥を炊いて置きましてござりまするが、どうで召上られる物ぢやござりませぬが、ひだるい時の何とやら申しますれば、それなと少々差上げましてはどうでござりませう。

丹藏　それは何より厚味であらう。一椀所望致さうわい。

九郎　左樣なら召上つて下さりまするか。モシいづれも樣、お殿樣をあちらへお進め申して下さりませ。扨粥を差上げまするに、器が穢うござりまして、お氣の毒でござりますわえ。

土屋　コリヤ〳〵老人、かゝる折に、そのやうな心配は無用に致せ。
九郎　左様なら失禮ながら、私の此椀で差上げませう。
〽いひつゝ立つてまめやかに、かけばんならで缺椀も、時に會津の塗模様、剝げても生地の親切は、繕はぬほど頼もしき、
ト九郎右衛門この内、缺椀を取出し、粥をよそつて、
さてはや、お粗末な物でござりまする。
〽冷めたる麥の白粥も、あつき情と感じ入り、
ト是にて勝頼粥を啜る事ありて、皆々に向ひ、
勝頼　算へて見れば今日にて、三日食事に附かざりしが、老人の心添にて食する粥は此身の醍醐味、その方達も相伴致せ。
丹藏　有難き君のお流れ。
土屋　頂戴致すでござりまする。
丹藏　〽一汁五菜の配膳より、心よげに喰み給ふを、御臺所は見やり給ひ、
と白妙、勝頼の食するを見て、

白妙　昨日の淵は今日の瀨と替るが習ひの浮世なれど、お情ない事でござりまする。

土屋　これと申すも佞人めら、敵へ荷擔をなした故。

白妙　思へば果敢ない、

皆々　成行ぢやなア。

〽悔み歎くぞ道理なり。大將は氣を取直し、（ト皆々愁ひの思入よろしく、勝賴は氣をかへ）

勝賴　さな言はれそ白妙、ありし世の珍味より遙かに勝りし白粥の一椀、これにて渴を凌ぎしなり。

土屋　我々どもは老人の情にて、思はず力を得し上は、これより直に麓へ下り、味方を助け一と働き仕らん。

土屋
丹藏　我君御免。

〽兩人は飛ぶが如くにかけり行く。御臺は跡を打見やり、

ト是にて土屋勝久、小原丹藏の兩人花道へ駈けてはひる。白妙はその後を見送りて、

白妙　御恩を受けし者も、或ひは立退き變心なし、危き場所をのがるゝ者數多あるその中に、君の御先途見屆けんと、身命抛ち忠義の兩人、賴もしいものでござりまする。

勝賴　實に忠臣は家の寶、よき家來は持つべきもの。これについてもかくまでに實意を盡す老人は、百

姓體に相見ゆるが、あたりの人家は皆立退き、一人だにあらざるに、何故爰に止まりて、我が人夫の助けを致すぞ。

九郎　へイ多年の御恩を報ぜんため。

勝頼　ムヽ多年の恩を報ぜんとは、して汝は何者なるぞ。

九郎　へイお尋ねにあづかりましてお話し申すも恐れながら、お聞きなされて下さりませ。何をおかくし申しませう。元わたくしは君の御不興蒙りし、小宮内膳樣に仕へましたる九郎右衞門と申しまする、若黨でござりまする。

勝頼　ムヽ、すりや小宮が家來の者か。

九郎　へイ、御主人樣には御改易、家來の者もちり〴〵ばら〳〵、思ひ〳〵に退散を致しましたが、私はそれより上州邊へ參りまして久しう暮し、その内に此の天目山の麓に以前の知邊がござりまして、昨年の春より百姓を致してをりまする。

勝頼　扨は小宮が家來であつたか。シテ内膳は、いかゞ致して暮しをるぞ。

九郎　へイ、唯今にては武藏國御嶽山の麓なる、鷲窪村と申す所に、御閑居なされてゞござりまする。御親子兄弟諸共に、仕馴れぬ事の百姓業、お氣の毒な事でござりまするわえ。

勝頼　スリヤ二君に仕へずして。

九郎　左樣にござりまする。諸所方々から仕官をせい、主取りせいと勸める者もござりますれど、なかなかお聞入れはござりませず、唯朝夕におつしやりまするは、若し我君樣に御大事といふ時あらば直ぐに駈けつけ、命を限りに多年の御恩を報ぜにやならぬと、不斷おつしやつてござりまする。イヽヤモウ家來の私が口から申上げるも異なものでござりまするが、あのお方などが誠の武士とやらでござりませうわえ。

勝頼　スリヤ、勘當せし主も恨まず、

白妙　危急を救ひに參らんとは、精神全き小宮が心。

勝頼　かゝる忠義の武士を、佞人の詞を用ゐ勘當なせしは我が誤り、殘念な事致せしよなア。

〽御身を悔み勝頼公、御臺所と顏見合せ、先非を悔いし折柄に、敵を切拔け小原丹藏、山路を指して馳せ登る、勝頼見るより。

ト勝頼白妙と顏見合せ思入よろしく、花道より小原丹藏出來る。勝頼丹藏を見て、

小原丹藏、戰の樣子は何と〳〵。

丹藏　ハツ。

〽はッと心を取直し、

さん候、土屋殿と二手に分れ、笹子峠の絶所を幸ひ、雲霞の如き敵勢を。

〽切立て薙立て戦ふ内、敵は新手を入れかへ取替へ、

今朝より数ヶ度の戦争、味方残らず斬死なし、土屋殿を始めとし、残るは僅か以上七人、小田の先手へ切入つて、火花を散らして戦へども、僅かの味方詮方なく、此事お知らせ申さんため、無念ながらも立帰つて候。

〽息つぎ敢へず言上す。(ト丹藏よろしく物語りあつて控へる。)

勝頼　さては小田勢勢強く、味方七騎となつたりしか。

〽無念の拳握りつめ、途方なんだに暮れけるが、猶も丹藏心を焦ち、

ト勝頼無念の思入よろしく、丹藏心の焦つこなしにて、

丹藏　君にはこれより山越に、敵勢此地へ廻らぬ内、上州へ落延び給ひ、笹田殿をお頼みあつて、最後の戦争遊ばされよ、我はこれより取つて返し、土屋殿を救ひ申さん。早やおさらば。

〽麓を指して引返す。九郎右衛門進み出で、(ト丹藏花道へ駈けてはひる。九郎右衛門前へ出て。)

九郎　へイ〳〵、お殿様へ申上げます。唯今の御注進の様子では、何ぢややら危ふいやうにも存ぜられ

ます。此處にあつては、又もや敵勢押來るは定のもの、山つゞきに此親仁が御案内申しまするほどに、信州路から上州へ、一と先づお越しなされませ。

勝頼　その志しは過分なれど、落行く先も敵の中、とても悲運の予が身の上、名もなき者の手にかゝらんより、潔く生害なさん。白妙は若を伴ひ小田原へ落延びて、兄北條を力と頼み若を守り立て此の勝頼が菩提を問ふこそ肝要なれ。少しも早く落延びよ。

白妙　イエ〳〵それはお情ない。君の大事を餘所に見て、どうまあ爰が落ちられませう。若諸共に自殺なし、君の御供致す覺悟でござります。

〽思ひ切つたる覺悟にて、此場の果しつかざれば、九郎右衞門は御臺に向ひ、

ト御臺覺悟の思入、九郎右衞門見兼れて白妙に向ひ、

九郎　ア丶申し〳〵御臺樣、かほどまで思込み遊ばしたお殿樣、押して物をおつしやりましては、却て御不興でござりまする。お名殘は惜しくとも、一先づ爰を落延びなされませ。道の程は年寄つても、この親仁が御案內申しませう。

白妙　それぢやというて。

勝頼　予が詞を用ゐずば、勝頼是にて生害せうか。

皆々　あゝ申し、それでは。
勝頼　然らば落ちるか。
白妙　サア、それは。
勝頼　生害せうか。
白妙　サア。
勝頼　サア〳〵、早く此場を落ちよと申すに。
白妙　ハア――、そんなら爰を落ちませう。
勝頼　おゝ得心なせば予も滿足。コリヤ九郎右衞門とやら、道の介抱頼むぞや。
九郎　お氣遣ひござりませぬ。しつかりとお供致しまする。サヽ、ちつとも早く。
　　〽せり立てられて、力なく〳〵立上り、
　　ト是にて白妙是非なき思入。九郎右衞門は急き立てる。
笹尾　左樣なれば、御前樣。
岩橋　隨分御健勝にて。
白妙　これが別れに。

勝頼　エヽ未練な事を。

〽口にはいへど妹背の切目、引別れてぞ入りにける。

ト勝頼キツといふ。白妙是非なく愁ひの思入あつて、乳母岩橋腰元笹尾附添ひ、九郎右衛門先に立ちよろしく花道へはひる。

〽勝頼跡を打見やる、後ろに窺ふ烏戸九郎次、多勢を引連れ押取り巻き、

ト是にて勝頼皆々の後を見送り心遣ひの思入。下手より烏戸九郎次、軍兵大勢引連れ窺ひ出で、よき時分に、勝頼を召捕れといふ思入にて、

九郎　ソリヤ。

軍兵皆々　ハアヽ。勝頼、覺悟。

〽と押取り巻く、勝頼は打笑ひ、

ト是にて軍兵皆々勝頼を取巻く、勝頼見て打笑ひ、

勝頼　指にも足らぬ木の葉武者、最後の道づれ、覺悟なせ。

皆々　何を小癪な。

ト皆々勝頼にかゝり、きつとなる、是より鳴物に笛入りのしんみりしたる合方にて、いろ〳〵立廻り

あつて、此の見得よろしく、淺黃幕を振落す。

（天目山裏山の場）＝本舞臺通しの高二重、山の蹴込、後に此の二重大ぜりにせり上げる誂へ。向う杉の梢を見せ、右二重の上に杉の大木あり。上下とも袖山を出し日覆より同じく釣枝。總て天目山裏山の體。遠寄せ、三重の淨瑠璃にて道具納まる。

〽追うて行く頃は如月中空に、たそがるゝ日も夕陽に傾きし、武田の御臺白妙御前、君の行方を尋ね侘び、氣をおく露の山道づたひ、後先見廻し吐息つき。

ト花道より、以前の白妙出來り、直ぐ舞臺へ來て合方になり、

白妙　木々吹く風にも怖ぢ恐るゝ、落人の身のやるせなく、山又山を越すうちに、乳母や案内を見はぐりて、命全う落延びしが、唯氣にかゝるは若が事、どうぞ早う逢ひたいものぢやなア。

〽案じ煩ふ折柄に、又もや敵の雜人輩。

ト白妙案じるこなし。上下より軍兵窺ひ出てかゝる。

軍兵皆々　覺悟致せ。

〽脫さじやらじと取巻くを、難なく敵を追ひ散らし、一と息ほつとつく折柄、多くの敵を打

惱まし、險岨を傳ひ來かゝる勝頼、御臺はそれと見るよりも、

ト是にて花道より勝頼出來る。白妙勝頼を見て、

白妙　ヤヽあなたは我君樣。

勝頼　オヽ白妙。ヤヽそちは傷を負ひしか。シテ〳〵若は何れにをるぞ。

白妙　若は乳母に預けましたれど、敵の多勢に取卷かれ、相手となして戰ひしが、その内乳母も腰元も見失ひましてござりまする。

勝頼　シテ案內の老人は、

白妙　それとても其場より。

勝頼　見失ひしか。何はしかれ、爰にあつては又もや敵の來るは必定。はや〳〵此の場を立退いて、若の行方を求めよかし。早う〳〵。

〽勵ます折柄敵を切拔け、血汐に染みし土屋藤藏、小原丹藏、息を切つて駈け來り、

ト是にて四人出る。山下杢之助若君を抱いて出ること。

土屋　ヤヽ、我君樣。

丹藏　御臺樣。

四人　これにお渡り遊ばせしか。（ト勝頼御臺右の四人を見て、）

勝頼　土屋藤藏小原丹藏。

白妙　山下杢之助、丹羽作兵衛。

勝頼
白妙　コリヤ傷を負ひしか。

ヘ御大將も白妙も、はッとばかりに當惑の、手負はなほも氣をはやめ、
ト勝頼白妙當惑の思入。土屋思入あつて、

土屋　假令深手を負うたりとも、君の御先途見屆くるそれまでは、めつたに死には仕らぬ。

丹藏　御覽の如く四人とも、數ヶ所の手疵蒙る上は、最早殿り致しがたし。

杢之　戰場にて討死と存ぜしかど、乳母や腰元笹尾殿は討死なし、萬千代君を我々へ頼むといふが此世の名殘り。

作兵　ひと先づ君に御對顏なしたる上と、惜しからぬ命を存へ、

土屋　是非なく此所へ立戻つて、

四人　ござりまする。（ト四人無念のこなしよろしく、白妙は驚き、）

白妙　ナニ、スリヤアノ乳母も討死しやつたとや、ハア、、（トちよつと泣沈み、氣を取直し、）さうして若

に疵はなかりしかや。

李之　お氣遣ひなされまするな、若君は御安泰でござりまする。

勝頼　其方達が忠心過分々々。かくなる上は悔んで詮なし。武運に盡きしわが家名、此の天目山を最期の場所と定め、潔く切腹なさん。

白妙　嬉しや爰で自害なせば、我君樣と冥土へ御供。

土屋　臣等四人も死出三途、

勝頼　修羅の巷の戰場を、

丹藏　のがれて又も修羅の道。

李之　此世からなる劍の山。

作兵　阿鼻叫喚の苦しみも、

勝頼　進退爰に谷まつて、天命期するといひながら、わが存念を果さずして、武田の家名も今日限り。

土屋　命は芥と思へども、

丹藏　敵に圍まれのがれがたく。

李之　此地に一命捨てるとは、

作兵　思へば無念の此の有様。

土屋　我君樣。

勝頼　チエ、。

皆々　殘念やなア。

〽敵地を睨みしその有様、怒りは面に現はれたり。（ト皆々無念のこなしよろしくある事。）

勝頼　いでや最期の支度をなさん。此世の名殘りに何をがな。

〽見廻し給へばこなたには、年古びたる杉の大樹、勝頼は目をつけ給ひ、

ト是にて勝頼思入あつて、あたりを見廻し、杉の大木に目をつけて、

ムヽ、幸ひ。

〽腰の矢立を手に取上げ、杉の立木にさら〳〵と、辭世の一首ぞ殘しける、人々はとくと見て、

ト是にて勝頼腰より矢立を取出し、杉の立木へ辭世を書く事ある。家來皆々して、

土屋　何々、「甲斐なくも山路の霞消えにけり。」是こそ君の御辭世。

勝頼　甲斐なくも山路の霞、

皆々　消えにけり。
勝頼　親子は一世。
白妙　夫婦は二世。
勝頼　アヽ主從は、
四人　三世の緣。
皆々　南無阿彌陀佛。
　へ西へ向つて合掌なし、最期の支度もそれ〴〵に、既にかうよと見えける處へ。
　ト勝頼はじめ白妙四人、愁ひのこなしあつて死支度をなし、各々自害せんとする時、向うに聲あつて、
內膳　アヽイヤ、御生害暫く、御殉死暫くお止まり下さりませう。
　へ聲をかけて立出づる。
　ト花道より小宮內膳出來り、花道よき所へ留る。
　へ勝頼遠目に御覽ぜられ、（ト勝頼內膳を見て、）
勝頼　我が最期を止めしは、何者なるぞ。
土屋　殉死を留めしは、いづれの者。

丹藏　何とも以て心得がたし。

勝賴　何者なるか、見聞致せ。

土屋　ハッ。

〽はッと答へて藤藏駈け向ひ、（ト是にて土屋舞臺下手へ來り）

內膳　お見忘れ給ひしか土屋殿、君の御勘氣蒙つたる、小宮內膳友之でござります。

御主君始め我々が、最期を留めし其許は、何人なるぞ。

ト是にて土屋心づきしこなしあつて、

土屋　誠に貴殿は內膳殿、おゝ、小宮殿でござつたか。

內膳　先づは其許樣にも、御健勝にて。

土屋　貴殿にも御無事で。

二人　重疊々々。

〽絕えて久しき朋友の、悅び合ふこそ道理なり。藤藏重ねて、（ト兩人悅ぶこなしあつて、）

土屋　何は格別、かゝる亂軍のその中を、如何にして此地へ參られしぞ。

〽尋ぬる小宮頭を上げ、

内膳　サア土屋殿お聞き下され。それがし事は武藏國御嶽山の麓なる鷲窪村に閑居なせしが、此度君の御大事と聞くより取るものも取敢へず、駈付けては候ひしが、本街道は敵の軍勢雲霞の如く充滿ちて、たやすく通路もなりがたし。木樵の通ふ裏道より、此の天目山へ登山なし、木の根岩角攀ぢ登り、道なき所を來りしゆゑ、思はず遲刻致してござりまする。

土屋　ナニ、スリヤ内膳殿、君の大事と聞くよりも、武藏の國よりはる〲と、危急を助けにお出でありしか。

内膳　何は格別貴殿をはじめ、御近臣の方々も、嘸かしの御心勞と、内膳お察し申すでござる。

〽その身の勞も打忘れ、主君の危急に身もくづをれ、しばし歎きに沈みしを、勝頼はるかに御覽じ給ひ、

勝頼　コリヤ〱藤藏、唯今是にて見聞せしに、内膳にてはあらざるや。(ト土屋こちらへ來り、)

土屋　仰せの如く、君の御不興蒙りし、小宮内膳でござりまする。

勝頼　内膳なるか。

内膳　ハア、、御勘氣蒙りし身にござりますれど、君の御大事と承り、駈けつけましてござりまする。

白妙　何と言やる。御運拙き我君を、見返る者の多き中に、君の御先途見屆けんと、駈けつけし小宮内

膳。

丹藏　かゝる時節にござりますれば、何卒御賢慮めぐらされ、

杢之　忠臣小宮が御勘氣を。

作兵　何卒お許し下されなば、臣等が大慶これに過ぎず。

土屋　此儀偏に願はしう

皆々　存じまする。

勝頼　オヽその願ひ尤も至極。かゝる時節に遠慮やあらん。内膳を是へと申せ。

〽はッと答へて土屋藤藏。（ト是にて土屋下手へ來り）

土屋　イヤナニ小宮氏、貴殿の忠節顯はれて、君の御勘氣御赦免なるぞ。急いで是へ。

內膳　スリヤ、御勘氣御免とな。

勝頼　オヽ勘氣は許すぞ。近う〳〵。

內膳　ハアヽ、然らば御免下さりませう。

〽絶えて久しき面會に、互ひに物は言はねども心の內の嬉し淚、流石に武士の心根は、さこそ猶もあはれなり。御臺は前へ進み出で、

ト是にて内膳本舞臺の下手へ來り、勝頼と顏見合せて互に愁に沈みし思入よろしく、白妙前へ出て、

内膳　我君はじめ御臺樣の今生の御尊顏を拜し、何程か恐悅に存じ奉りまする。則ち唯今御勘氣御免なし下され、此上の大慶や候はず。

白妙　コリヤ内膳、かゝる落目を見捨てもせず、ようまあ尋ねて給つたなう。

〽申上ぐれば御大將。（ト内膳悅びの思入にていふ。）

勝頼　コリヤ内膳、そちが退去なしてより、何年に相成るぞ。

内膳　ハッ、最早五年に相成りまする。

勝頼　はや五年に相成るとや。アヽ思へば我不肖たるにより老臣共の諫を用ゐず、鳩部、長坂、小山田なんどが佞辯に騙され、忠心無二の其方に改易申付けたるは、勝頼が生涯の誤り。今日の今となり、家臣ながらも其方に面を合すも面目ない。許してくりやれよ、小宮内膳。

内膳　こは勿體ないそのお詞、何故あつて我君をお恨み申すべき。唯某が身を悔み、力なく〳〵退去なせしが、君の御高恩忘却致さぬ それがしが心底。しかし心得ざるは我君を警衞なせし御人歩は、此所には僅か二三騎、御同勢の方々は、いまだ決戰なされてゞござるかな。

土屋　お聞き下され、此程よりのけはしき戰爭、日々に討死なす者多く、今朝までは三十五騎にて、君

を守護なし奉れど、その人數さへ討死なし、僅か今では四五騎のみ。

内膳　シテ家老たる長坂長閑等は、討死でも召されしか。

勝頼　内膳承れ、不忠者の長坂長閑、七日以前に陣所を立退き、敵へ降參なしたる様子、言語に絶えたる奴ぢやわえ。

内膳　スリヤ長閑は立退きしとな。シテ／＼老臣鳩部大炊は。

丹藏　これも同じく五日以前、小田家へ降參致せし様子。

内膳　シテ又舊臣秋山攝津は。

杢之　彼も則ち七日以前、小松口にて逃げ延びたり。

内膳　左様ござらば小山田親子は。

勝頼　これも信州諏訪の口にて、敵へ降參致したわえ。

内膳　スリヤ厚恩を蒙りし、武田恩顧の故老の者まで。

勝頼　かゝる不忠者の多きは、これぞ家名の滅する時節、推量致せ、コリヤ内膳。

内膳　ハヽツ、是非もなき御家の成行、是まで君の大恩蒙り、安泰なせしを打忘れ、返す／＼も憎き奴なア。

〽言ふに御臺は猶悲しく。（ト白妙無念の思入。白妙悲しきこなしにて、）

白妙　かゝる憂目に逢ふことも、不忠の小山田鳩部が業、味氣なき世の有樣ぢやなア。

〽かゝる折柄麓の方、貝鐘太鼓打立つれば、内膳きつと打見やり、

ト白妙愁ひのこなし。此時麓の方にて、遠寄せを打込む。内膳向うへキッと心をつけ、

内膳　次第に近づくあの遠寄せ、敵勢寄すると覺えたり。もし攻め來らば新手のそれがし、花々しく一戰なさん。君には御臺諸共に、お心靜かに御用意あれ。いづれもにもお立の御用意々々々。

〽天晴れゆゝしきその勢、勝頼内膳に向ひ、

ト是にて内膳勇み立つこなし。勝頼内膳に向ひ、

勝頼　その志しは過分なれど、今其方が此場にて、假令寄手を惱ますとも、目に餘つたる敵の大軍。一度爰をのがれても、所詮運命開くにあらず。何卒一子萬千代を其方に預ける間、ひそかに爰を落延びて、上州笹田が領地へ伴ひ、若が行末相頼む。成人の後其方が後見とも相成つて、武田恩顧の者を語らひ、再び家名を引興すは、死するに增したる大功なるぞ。

内膳　ハヽア、いかやうに仰せ下されても、死ぬると覺悟を極めしそれがし。此儀ばかりは御高免、偏に願ひ奉る。

勝頼　然らば承引致さぬか。

内膳　此儀ばかりは。

勝頼　是非に及ばぬ、奥も覺悟。

白妙　承引なくばかねての覺悟。若を此場で刺殺し、妾も共に此場で自殺。

土屋　さある時には武田の血筋も絶ゆるの道理。若君樣の御養育、我々一同。

四人　お頼み申す。（ト皆々言へど内膳默然としてゐる。）

勝頼　返答なきは不得心と相見ゆる、是非に及ばぬ、われ討死の魁なさん。（と抱子をかゝへ。）

〽御佩刀に手をかけ給へば、（ト勝頼刀に手をかける。皆々驚いて）

内膳　早まり給ふな、我君樣。

勝頼　然らば若を伴ひくれるか。

内膳　サア、それは。

勝頼　此場に於て刺殺さうか。

内膳　サア、それは。

皆々　サア〳〵〳〵。

土屋　主人の家名を相立てるも。
丹藏　此儘血筋を絶やさんも。
白妙　唯そなたの心一つ。
勝頼　忠義を立てよ。小宮内膳。
〽四鳥にからむ詞づめ、何と詮方内膳も、暫時は默してゐたりしが、やゝあつて氣を取直し、
ト是にて内膳皆々に言はれて、困る思入よろしくあつて、トゞ氣をかへ
内膳　いかにも、お伴ひ申しませう。
勝頼　然らば承引致してくれるか。
内膳　お氣遣ひ遊ばすな、一命かけて若君は小宮がお育て申しまする、何れもには此場にて、お別れ申すが此世の名殘り。
勝頼　内膳さらば。
内膳　何れもさらば。
皆々　おさらば。
〽さらば〳〵の聲の下、別れを告げて内膳は名殘り盡きじと麓の方、こなたは最期の修羅の

道、別れてこそは。

ト内膳是非なく抱子を抱へ、勝頼はじめ皆々と別れを惜しむこなしよろしくあつて、花道へはひる。

後に勝頼外思入あつて、

勝頼　南無阿彌陀佛。

皆々　南無阿彌陀佛。

ト勝頼腹へ刀を突立てるを、木の頭。皆々落ち行く。此の見得よろしく、

ひやうし　幕

大詰

大菩薩峠關門の場

武藏國鷲窪村の場

〔役名＝＝小宮内膳友之、小宮又七友久、秋山民部實は齋藤主膳行房、岩上八藏、森林藏、柚斧藏、小宮丹後正知、番卒。内膳妻柵、又七妻漣等。〕

（大菩薩峠關門の場）＝＝本舞臺通しの高二重、前山の蹴込、下手にかけ上りの段付、右二重の上の方に關門あり。兩脇とも丸柱の塀。小田の定紋附きの幕張、同じく定紋附の高張二本、門の前に立て、

幕の内より番卒二三人、門外に劒鐵砲を持ち見張つてゐる。すべて大菩薩峠小田原關門の體。（時の太鼓にて幕明く。

○なんと大月氏、此頃は敵勢が殘らず討死致したかして、あまりけはしき戰爭もござらぬてなう。

△いやもう左樣で、武田勝頼には天目山にて討死との事なれば、最早戰爭もござりますまい。

○左樣でござる、それがしとても早く國許へ立歸り、妻子の顏が見たうござる。

△ハテ御未練千萬。戰爭へ赴く時は、妻子を忘るゝは武士の習ひ。そのやうな事申して、又お頭の岩上殿のお耳へ入つたら、又お目玉でござるぞ。

○オツト閉口々々、つい里心が出たのでござる。ハヽヽヽ。ドリヤ御番を怠らぬやうに致しませう。

△左樣仕らう。

〽嚴しく守る關門へ、幼子抱きし一人の男子、さしかゝりしが立留り、

ト此淨瑠璃にて、内膳杣のなりにて抱子をかゝへ、揚幕より出て、花道よき所にて立留り、思入あつて、

内膳　天目山より君命受け、此の若君を守護なして、木樵の通ふ山路へかゝりし所、彼處に早くも小田

家の人數まはり落人詮議の屯あるゆゑ、山獵師と姿をやつし人目を忍び爰までは、首尾よく落延び來れども、又もや向うに小田家の番卒、思ひ廻せばその昔、義經殿が陸奥へ落ちさせ給ひし艱難も、かくやと思ふ今の身の上、片時も早く鷲窪村なる我が隱れ家へ立越したいが、ゆく先々へ俄の新關、ハテ、どうがな。

〽かこちつゝ心ならずも差しかゝれば、番卒共は目に角立て、

ト是にて内膳本舞臺へ來る。番卒見つけて、

○ コリヤ〳〵旅人暫く待て、此新關をいづくと思ふぞ。無禮者めが。

〽聲立て喚けば、（ト番卒威猛高にいふ。内膳はわざと、）

内膳 ヘイ〳〵。

〽後じさりせし折柄に、門内より岩上八藏罷り出で、

ト内膳ためらひゐる。門の内より岩上八藏出來り

八藏 コリヤ〳〵、門前にて騷がしい、何事ぢや。

△ ヘイ、是なる旅人めが、かゝる關を打越さうと致すゆゑ。

○ 唯今咎めをります所でござりまする。

〽言ふに岩上旅人に向ひ、

八藏　コリヤヤイ、此度甲州天目山にて、武田勝頼討死なし、あらかたは討取つたれど、その殘黨餘類の者を詮議の爲めの此の新關。汝は何れの者なるか、關を固めの我々へ言聞かせよ。

〽と罵れば、こなたはわざと平伏なし、

内膳　火急の使に心せくまゝ、行過せしは失敬至極、何卒御容赦下さりませう。

〽姿に似合はぬ詞尻、岩上は聞咎め、

八藏　賤しき姿でありながら、詞は正しく侍詞、旁々もつて怪しき奴、誠の姓名名乘ればよし、この上包みかくすに於ては、詮議致さにや相成らぬ。

〽立上るこなたの懐に、子供が衣服定紋。

ト八藏内膳に近寄る。此時内膳の抱きし抱子の衣類の紋を見つけ、

八藏　ヤヽ、此の幼子の紋所は、ムヽ、扨こそ武田の殘黨なり。者共參れ。（ト門内にて）

番卒大勢　ハア――。

〽はつと答へて番卒共、小宮を一度に取卷いたり。

ト是にて門内より、番卒大勢出來り、内膳を取卷く。内膳きつとなつて、

内膳　ヤア是非に及ばぬ、假令小田家の新關なりとも、踏破つて通つてくれん。
八藏　ソレ。
大勢　ハア。

ト皆々突棒刺又いろ〳〵持つて内膳にかゝる。是にて内膳きつとなつて見得、是より鳴物になり、いろ〳〵立廻りの内に八藏内膳が懐の抱子を取り、門内へ逃げてはひる。是にてびつくりして、それをやつてはと引たくるを番卒支へる。いろ〳〵大立廻りあつて、トヾ皆々を門内へ追込む、追ひかけてから行かうとする處へ、秋山民部門内より出て、内膳を突廻しキッとなる。双方顔見合せて、

内膳　ヤヽ、貴殿は齋藤氏。
秋山　こなたは武田の家臣たる、小宮殿にはあらざるか。

〽絶えて久しき對面に、暫時は呆れて見えけるが、

ト兩人顔見合して、呆れしこなし、内膳思入あつて、

内膳　扨は貴殿は小田方へ、疾より隨身召されしか。
秋山　いかにも武田勝頼が佞人共の詞を用ゐ、我は不興を受けしを幸ひ、運命傾く武田を見限り、今は小田家の幕下となり、秋山民部と名を改め、既に今度の合戰にも先手に加はり手柄なし、猶も殘

黨餘類を詮議のために、此關をばそれがし預かり、固めをなすわ。

〽聞いてさてはと齒がみをなし、（ト秋山言ふを内膳口惜しき思入あつて、）

内膳　扨は士卒がそれがしを搦め捕らんと致せしは、齋藤汝が指圖であつたよな。

秋山　イヽヤ指圖は致さねども、我が預かりの關に於て、狼藉なさば役目の表、誰彼なしに討つて取らん。

内膳　スリヤ朋友の誼もなく、現在故主の若君を。

〽言はんとなすを打消して、（ト秋山冠せて、）

秋山　ヤア愚なり小宮内膳、その若君を奪ひしも、深き所存の、イヤサ、深き因の古朋輩、命は助け遣はさん。

〽言ひ諭せども耳には入らず、（ト秋山思入にて言ふ。内膳呑込めず、）

内膳　ヤア奇怪なるその一言。大事の若君奪ひ取られ、おめ／＼命を存へんや。此の内膳があの世の道連れ、汝が首を討取らん。

〽切つてかゝれば是非なくも、槍取直し戰ふ内、最前よりの働きに、手疵を負ひし内膳が、よろめく足許踏み辷り、傍の蔭より谷底へ、眞逆に落入れば、

ト此淨瑠璃の内兩人よろしく立廻りあつて、内膳前の切穴へ落ちる。秋山思入あつて下を見下ろす思入あつて、

秋山　古朋輩の誼ゆゑ、小宮が命助けんと、あしらふ内に早まつて、遙かの谷へ落入つたれば、命の程も覺束なし。不便な事を致せしぞ。

〽秋山民部心に驚き、

〽見下ろす折しも門内より、岩上八藏幼子抱き馳せ出で、

ト秋山谷底を見下ろし、よろしく不便な事をしたといふ思入。此時門内より以前の八藏抱子を抱き出來り、

八藏　内膳めが鋭き働き、お怪我をなされは致しませぬか。

秋山　イヤ／＼怪我は致さねども、當の敵の内膳を討ち洩らせしは殘念至極。

八藏　あいや、假令お手にかけられずとも、數丈ある此の谷底へ落ちたるからは五體微塵、殊に奪ひし小童こそ、正しく武田の忘れ形見。

秋山　ドレ、その童を。

八藏　ハツ。

〽出すを手早く受取りて、脾腹を打つて眞の當。

ト八藏抱子を秋山に渡す。秋山受取り手早く八藏に當身をくれる。八藏よろしく苦しみ倒れる。（秋山抱子の顔を見て、

秋山　誠にこれぞ勝頼公に瓜を二つのよく似た面差。我手に若君入つたるこそ、武田の武運盡きざる所、

〽かたへに苦しむ八藏を、遙かの谷へひそかに蹴込み、門の内にぞ、

ト秋山八藏の死體を谷へ蹴込み、抱子を抱へ、よろしく思入。これにて淺黄幕をかぶせる。

（谷底の場）――本舞臺向う黒幕、藪疊上下ともに置き、諸所に松杉の木などの根元、眞中に水の流れ。日覆より松の釣枝。右舞臺前に小笹澤山植込み、幕の内より内膳眞中に倒れゐる。すべて大菩薩峠谷底の體。一聲合方にて道具納まる。と内膳心附いたる思入にて、あたりを見てきつとすると、しんみりした合方になり、

内膳　ハア――、天に風雨の愁あれば人に不時の災難ありと、我武田家に仕へし折、讒者の爲に浪人なし、艱難辛苦に及べども、片時忘れぬ故主の大恩。時がなあらばと思ふ内、此度の合戰に勝頼公の御身危ふく、爰ぞ多年の御恩報じと天目山にかけつけて、共に討死致さんと土屋殿まで言入れ

しに、直ぐに御勘當御免にて、よくぞ駈付けまゐりしと、君にも御機嫌斜ならず、共に討死なさんとは天晴健氣な心底ながら、死する命を存へて、上州笹田へ我着し、萬千代丸を送り屆け、再び武田の義兵を揚げ、家名を起しくれるやう、くれ〴〵頼むと御諚ゆゑ、是非もなく〳〵御最期を餘所に見なして落延びしが、大菩薩の關門にて、多勢と戰ひ若君を奪ひ取られしその上に、此谷底に落ちたるは、よく〳〵武運に盡きたる内膳。殘念ながら此場にて、腹掻き切つて相果てん
おゝさうぢや〳〵。

ト是にて竹笛入り、しんみりとした合方に替り、内膳切腹の思入。此時後ろに岩上八藏窺つてゐる。
内膳腹を切らうとして又心附き、こなしあつて、

内膳 イヤ〳〵今此處で死するよりも、一と先閑居に立歸り、父上始め弟に此身の恥辱を物語り、奪ひ取られし若君の、詮議を弟に頼み置き、それから死すとも遲からじ、是れより直ぐに鷲窪へ。

ト此時後ろへ八藏出て、

八藏 内膳覺悟。(ト切つてかゝるを、よろしく留めて顏を見て、)

内膳 やゝ、おのれは最前若君を、奪ひ取つたる民部が家來め。

八藏 何を。

ト又かゝるを、引外して、八藏一太刀浴びせられる。

内膳　當の敵思ひ知れやい。

ト刀を拔く。八藏見事にポンと返る。此の見得よろしく、此の道具廻る。

（閑居の場）――本舞臺三間の間上手障子屋體。下手落間、藪疊、いつもの所に門口。向う納戸口、上の方押入まひら戸、赤壁、幕の内より漣糸を紡いでゐる。すべて武藏國鷲窪村の體。隣り柿の木の唄にて幕明く。

〽鷲窪村の閑居には、弟嫁の漣が、娘盛りもなみ〳〵の、かんぼ窶して糸車、廻りかねたる世渡りを、貢ぐといふはむき心、白刃の斧藏が、粗朶一束ね手にさゝげて門口から、

ト此淨瑠璃の内、漣糸を紡ぎ糸車にて糸を引いてゐる。花道より斧藏、粗朶を持ち出來り、直ぐ舞臺へ來り、

斧藏　手頃な粗朶があつたゆゑ、焚付に持つて來やした。

漣　それは何より嬉しうござんす。丁度薪が切目ゆゑ。

〽と優しき詞の尾につく斧藏が、

斧藏　イヤモウ大概焚付の切れる時分と思つたから、わざ／＼かうして持つて來るも、お前といふ當が
あるゆゑ。山の清水を汲む序に、少しはわしが心をば、汲んでくれてもよさゝうなものぢやなア。

〽しなだれかゝるを振拂ひ、

ト是にて斧藏漣にしなだれかゝるゆゑ、漣それを振拂ひ、

漣　人目がないと私を捉へ、聞きたうもないてんごう口、知らぬわいなア。

〽はねつけられて斧藏は、

斧藏　何ぢや、知らぬわいなアとは胴慾な、産れたその子は死んだれど、産の味まで知つたるお前、
ちよつと一と口、それ、乳を。

漣　えゝ知らぬわいなア。

斧藏　そこをちよつと、これぢや／＼。

〽彼方此方へ追廻し、思はず一と間へ踏込めば、づでんどうと、投げつけられて斧藏は、

ト是にて斧藏漣を追廻す事いろ／＼あつて、漣トヾ一と間へはひる。續いて斧藏はひるを投付けら
れる、斧藏起上りて、

アヽ痛い／＼。箆棒な目に逢はしたなア。

して、

ト いひ〳〵、上手障子屋體の内を見る。親丹後脇息にかゝり、病氣の體にてゐる。斧藏見てびつくり

ヤア、そんなら今のづでんどうは、アノこなたか。

〽驚く顔に眼怒らし、

ト是にて斧藏は驚くこなし。丹後はきつとなり、

丹後　浪人なせど武士の居間へ、何故泥脛踏込みしぞ。

〽言はれてぎつくり詰り、（ト言はれて斧藏詰り）

斧藏　サア、この踏込んだは、

丹後　いかゞ致した。

斧藏　サア、それはアノ、オヽさうだ、此内へ踏込んだは、代官所から火急のお觸れ。武田の殘黨が逃げて來ようも知れぬゆゑ、捕へて役所へ出す時は、褒美の金になる事ゆゑ、致へに來ましたが、こなたがさうむづかしい顔してござるによつて、又あす來ませう。

〽そこ〳〵に表へ立出で一と思案、傍の藪へ忍び入る、後は二人の嫁舅、

ト斧藏はそこ〳〵に表へ出て思入あつて、下手の藪へ忍ぶ。丹後思入あつて、

丹後　あの斧藏といふ奴は、我々親子が武田家の家臣といふを知つたる様子。何にも致せ、又七が實否を糺しに參りしが、早く安否が聞きたいものだ。

〽流石恩愛武士の、覺悟はしても子を思ふ、心の奥の一間より、内膳が妻柵が、夫に据ゑる蔭膳の、精進物を取添ゆる、甲斐々々しげに表の方、息せき戻る又七が、内へ入る間も待ち侘びて、

　　ト是にて奥の間より、内膳妻柵出てよろしくある。花道より又七息せき切つて出來り、直ぐ舞臺へ來てはひるを漣見て、

漣　オヽ、そなたはほんに又七殿。

柵　父上樣にも殊すら御案じ、

丹後　軍の樣子は如何なるぞ。

柵　内膳殿には御無事なかえ。

　〽詰寄る三人又七は、（ト是にて三人氣遣はしげに又七へ詰寄る。）

又七　さればサ、今朝未明より軍の樣子糺さんと、大菩薩まで參りし所、早くも彼處に新關立て、小田方の勢屯なすゆゑ、裏道傳ひに黑川まで參つて樣子を承はりしに、武田の御家滅亡の時來れるか

鳩部長坂小山田等、皆小田方へ降參なし、味方の裏を搔きしゆゑ、要害堅固の本城より郡內領へ引上げる途中に敵の伏勢あつて、是非なく登る天目山、元より矢玉は盡き果てゝ、遂に防戰なしがたく、無慘や主從枕を並べ討死ありしと申す事、旣に大將勝賴公の首級も、敵に取られしと、專ら街の噂とりぐ\にござりまするわい。

〽殘念至極と述べければ、親子兄弟顏見合せ、中に柵涙ぐみ、

ト是にて又七殘念なる思入。皆々顏見合せる。柵思入あつて、

柵　扨は我夫內膳殿も、世になきお方となつたるか。ハア――。

〽歎きに沈む柵を、（ト柵泣伏すを。）

漣　姉樣、お道理でござりまする。

〽御道理樣やと妹も、共に涙の漣や、額に皺の親丹後、二人の娘に力をつけ、

ト柵泣きゐるを漣よろしく慰め、共に涙に暮れる。丹後は二人に向ひ、

丹後　武士の習ひとて國を出る時家を捨て、家を出る時妻子を忘れ、軍の場所へ赴かば討死するは武士の本懷、歎くは愚痴の至り、涙は佛の爲ならず、イデ此上は佛間にて回向を致して遣はさん。

〽嫁と悴を力草、一と間の內へ入る後に、ひとり柵かこち言、

柵　ト又七と漣丹後を介抱して奥へはひる。柵思入あつて、

君の御先途見屆けんと、討死なさる覺悟にて、お出でなされし事ゆゑに、お歸りないとは知つたれど、萬に一つに御運強く、武田方の勝利となり、お歸りなさる事もやと、三度々々に供へたるその蔭膳の精進物、直ぐに手向の繕となる、是が知らせであつたるか。おもへば夢の浮世ぢやなア。

〽無常を悟る入相の、鐘も涙に暮れ果てゝ、灯す灯影も細道の、間道傳ひ立歸る、小宮が後を見えがくれ、附き來る兵士の心得ず、後見返れば身を忍び、元來し道へ引返す、内膳街に佇みて、

ト 柵よろしく愁ひに沈み居る。此内花道より内膳出て來る。後より小田方の兵士附いて來る。内膳思はず振返る。兵士身を忍んで引返す。先膳心附かず花道よき所に留まり、

内膳　御嶽山のこなたより附き來る兵士の心得がたく、わざと裏手の間道へ、廻れば同じく裏手へ廻りわが茅屋へ歸るまで、忍ぶに如かじと打捨て置きしが、もしや最前出逢ひたる、齋藤主膳が家來の者か、油斷ならざる此の時節、それは兎もあれ茅屋へ、立歸つて何とや言はゝん、心苦しき事ぢやなア。

〽我家へ足も進みかね、門より内を差覗けば妻はびつくり、
ト是にて内膳思入あつて舞臺下手へ來り、門口より内をのぞく、柵は見て驚き、

柵　ヤア、我夫か。
〽立寄るを力なく〳〵内に入る。夫の姿打亂れ、顏の色さへ常ならねば、世になき人と思ふにぞ、
ト是にて柵内膳の側へ立寄る。内膳力なく内へはひる。柵顏をつく〴〵見て死人と思ひ込み、
戰の樣子氣遣しく、又七殿が黑川にて樣子は聞いてござりしゆゑ、世に亡き人になつたのは、疾より知つてをります。よう顏見せて下さりました。嬉しうござりまするわいなア。
〽怖さも忘れ寄添へば、（と柵側へ寄添ふ。）

内膳　コリヤ〳〵女房、何を言ふ。世に亡き人の數に入り、わが家へ再び歸られうか。扨はそれがし討死なし、迷うて我が家へ立歸りしと思ひ違ひを致せしな。

柵　さうおつしやつて氣がつけば、今の今まで亡き方と、怪しう思ひし形容、常に變らぬわが夫、何故お歸りなされしぞ。
〽問はれて暫時口籠り、内膳は心を定め、（ト柵に問はれてちよつと口籠り思入あつて、）

内膳　主人の御最期餘所に見て、立歸りし段々と、深き仔細の。
〽言はんとせしが一大事、他聞を憚り門口を、見れば以前の武士が、窺ふ樣子に素知らぬ顏、
ト内膳言はうとして心附き、門口を見る。此の以前より間者窺ひゐて此時又小隱れする。内膳はわざと、
深い仔細といふは僞り、誠はそちに心が殘り、立歸つたわやい。

柵　えゝえつ。（ト驚く。）

内膳　サア我討死をなす時は、まだ年若きおぬしをば、後家にするのが殘念さに、命から〲戻つたわやい。
〽言へば呆れて夫の顏、物をも言はず打ちまもり、
ト柵是にて呆れて、内膳の顏を見て、

柵　そりや情ないこちの人、御主人樣をお助け申し、とも〲お歸りなされたら、その嬉しさはどのやうぞ。それにはあらで女房に心惹かされ戻つたとは、常に替つたあなたのお詞、勝頼樣と諸共に立派に討死なされたら、末世末代名が殘り、私や嬉しうござんすわいなア。
〽死ぬを悦ぶ柵が、健氣な詞一と間にて、樣子洩れ聞く丹後は聲を振立て、

ト是にて柵よろしく内膳を諫める事。奥より丹後の聲して、

丹後　見下げ果てたる悴内膳、親が討死させてくれう。

〽留むる嫁の柵を、杖に立出る老の足、扇を取つて内膳が、衿上取つて滅多打、病苦の疲れに腰立たねば、しりへに倒れ齒がみをなし、

ト丹後奥より出來り留める、柵を振拂ひ、内膳の襟上を取つて扇にて打つ事ありて、どうと尻邊に倒れて無念の思入よろしくありて、

卑怯未練のうつけ者、嫁が健氣な今の詞、おのれが耳へははひらぬか。

〽又も扇でちやう〳〵〳〵、留むる柵内膳が、

ト丹後又内膳を打つ。柵留める事あつて、

内膳　そのお怒りは無理ならねど、是には深き仔細が。

〽言はんとせしが、せめては親の手にかゝり、不覺の言譯せんものと、思案を定め起き直り

ト内膳思入ありて起直り、

妻に心が惹かされて、戻りし拙者をそれほどまで、父のお怒りあるなれば、イザ御存分に遊ばされませう。

〽ちつとも恐るゝ氣色なし、父は猶も怒りの顔色。（ト内膳思入あつて言ふ、丹後いよ〳〵怒て、）

丹後　返す〴〵も憎き悴。ヤア〳〵又七、手槍を持て、早う〳〵。（ト奥にて、）

又七　ハアヽ。

〽はつと答へて又七が、手槍携へ漣も、共に一と間を立出でゝ、

ト又七手槍を持ち、漣も納戸口より出來り、

又七　先程よりの樣子は、納戸で承つた。

丹後　オヽ聞いたであらう。言ふには及ばぬ、不所存な兄の内膳、命を斷たんと思ひしが、此老病にて五體叶はず、川中島の戰爭には敵の死首十七まで討つたる程のそれがしが、かくまで老衰致したかと、思へば無念口惜しい。我に代つて此槍で兄内膳を突殺せ。

又七　ハヽア、仰せではござれども現在兄を弟の身で。

丹後　エヽ生かし置いては家名の恥辱。

又七　それぢやと申して。

丹後　兄に親を見返るか。

又七　全く以て。

丹後　左なくば此場で成敗するか。
又七　サアそれは。
丹後　サア。
二人　サア〳〵〳〵。
丹後　コリヤ此槍は家重代、先祖に代つて成敗致せ。
又七　ハア丶、仰せに任せ是非に及ばぬ。まツかう。
　〽言ふに柵差寄つて、(ト又七立かゝるを柵差寄つて)
柵　ア丶コレ申し又七殿、お前は現在兄樣に、手向ひしては濟みますまい。
　〽縋り留むれば又七も、しばしためらふその内も、親の丹後は氣を苛ち、
　　ト柵又七を留める。丹後は焦立つて、
丹後　エ丶何をウヂ〳〵、早く又七。
又七　ハツ。(ト立ちかゝるを、)
柵　そんなら、どうでも。
又七　親の詞にや代へられぬわい。

〽手槍をしごき胸許を突かんとせしが槍投げ捨て、
ト又七內膳を突かうとして、突きかねるこなしあつて、ト〻槍を投げ捨て、
コレ兄者人、エヽこなたはなア。(ト合方になり、)長坂鳩部が讒言にて、親子諸共御不興受け、翅もがれて鷲窪の、此の山里に佗住居、折がなあらばと思ふ內、小田と武田の戰爭に、勝賴公の御身危ふく數代の御恩を報ずるは、此時なりと兄上には、討死をなす御覺悟。あつぱれ武士の鑑ゆゑ、拙者も共にと言ひし時、汝は後に生延はり、親の養育致しくれと、主人へ忠義親へ孝行、忠孝全き兄弟を持ちし此身の仕合せゆゑ、悲しき中に悅びの門出を祝して汲かはせし、水杯も水となり、御主の御最期餘所に見て、何故我が家へ歸られしぞ。かほど未練な御所存なら、何故あの時に拙者をば、代りにやつては下さらぬ。天目山へ馳せつけて、勝賴公と諸共に、討死なして忠臣の、名を末代に遺さんもの。ちえヽ見下げ果てたこなた樣はなう。
〽胸許取つて突き放し、兄の一字に打たれもせず、拳を握りはら〳〵、口惜し淚に暮れければ、側に聞きゐる柵が、こらへかねて差添を、咽喉へがばと突立つれば、人々是はと打驚き、(ト又七思入あつて言ふ。柵は差添を咽へ突立てゐる。皆々驚きて、)
丹後　コリヤ柵、狂氣せしか。

又七　何故あつて此の自殺。

漣　早まつて事なされたなア。

〽縋り歎けば柵は、苦しき息をつきあへず、（ト皆々歎く、柵苦しき息を怺へ）

柵　わたしも武士の娘ゆゑ、早まつた死は致しませぬ。内膳殿が戰場より我が身に心惹かされて御主の御最期餘所になし、お歸りありしとあるからは、女房がなくば心殘さず、天目山に討死なし、忠義の名をば末の世に、殘さんものをと思召す、舅御樣のお心を、思ひやつての此の自殺。わが身を不便と思ふなら、此場に於て潔く、追腹切つて下さりませ、コレ内膳殿。

〽健氣な妻の一言も、よそに聞きなす内膳が、心の内の切なさも、それと白髮の父親か、

ト柵よろしく思入あつて言ふ。内膳は心苦しきこなし。丹後は感服せし思入あつて、

丹後　女に稀な柵に無慘の最期致せしも、内膳そちが卑怯ゆゑ、家の瑕瑾片時も早く。サア又七、彼めを突殺せ。

又七　スリヤ、どうあつても。

丹後　そちがならずば、身共が直に。（ト立ちかゝるを、）

漣　アヽ申し、お危うござりまする。

丹後　エヽ、そこ退きをらう。（ト又立ちかゝるを漣留める。又七思入あつて、）

又七　もう此上は、是非に及ばぬ。

〽槍押取つて突きかゝれば、こなたは心得上段下段、
ト是より篠入りの合方にて兩人よろしく立廻りある。よき程にキツトなる。此體を丹後見て、

丹後　チエヽ、かほどの手練を持ちながら、言ひ甲斐なき卑怯者、親の成敗覺悟なせ。

〽呼吸の息のはずみにて、すつくと立つて突込む脇腹、突かれて內膳どつかと坐し、
ト丹後手槍を取つて立上り、內膳の脇腹を突く。これにて內膳ドツカと坐して、

內膳　天目山にて主君を餘所に、討死なさでおめ〳〵と、立歸つたる內膳が、卑怯にあらぬ一伍一什、お聞き下され、親人樣。

丹後　ナヽ、何と。

內膳　家の瑕瑾になる事ゆゑ、親人の手にかゝらねば、明しがたき此身の不覺。

丹後　家の瑕瑾になるほどの不覺を取りしと言やるのは、天目山での事なるか。

又七　但しは途中の事なるか。

漣　樣子を聞かせて、

皆々　下さりませ。

內膳　今こそ打明け物語らん。

〽腹帶ぐつと引締めて、深手に屈せぬ內膳が、（ト內膳腹帶を引締めよろしくあつて、）既に一昨三日の朝、宙を飛んで天目山へ馳せつけ見れば情なや、鋭き小田家の軍勢に、攻立てられて武田方、笹子峠の絕所に留まり、殿なせど防ぎがたく、次第々々に味方も引上げ、三十五人の强者も、殘り少なく討死なし、天目山にて我君にお目見得なせし其折には、北の方に土屋殿、僅か人數も七八人、道案內に九郞右衞門が附添ふばかり、所詮防戰なしがたく、討死なさんと味方の一決、我もとも〲討死の御供なさんと申せしに、その心底は忝し、討死致す覺悟なら、死する命を存へて我が嫡子たる萬千代を、笹田へひそかに伴ひ行き、小蛇となつて池中に潛み、昇天の時至らば再び義兵の旗揚げなし、武田の家名を興しくれよと、再應君のお賴みに、委細承知仕ると、若君抱き參らすれば、今際の際の御悅び。

ト よろしく苦しき息をつき思入ある。

丹後　シテ〲白妙御前には、何れへ落ちさせ給ひしぞ。

內膳　ハツ、今更申すも淚の種、お痛はしや白妙樣にも、敢なく其場で御自害。是非なく君が御介錯。

時しも麓に貝鐘太鼓、寄せ來る敵は小田方へ降參なしたる鳩部大炊、望む所と土屋を始め死を極め防戰に、笹子おろしの嵐より太刀風烈しく切立て〳〵、討つ討れつ鎬を削る血汐は雨の降る如く、ばら〳〵〳〵と打落す首級の數も人塚の、立ちもやしほのから紅、早やこれまでと勝頼公鎧を脱いで御生害、涙ながらに土屋殿御介錯を致したり。此時君が御無念の面は、今以て目先に殘り忘れがたし。推量あれや親人樣。

〽天目山の討死を、今見る如く物語り、聞く人々も口惜しく、

ト内膳手負にてよろしく言ふ。皆々聞いて無念の思入。

丹後　甲斐の武田と言はれては、雷名天下に轟きて、聞き怯ぢをする武功の家柄、滅する時とは言ひながら、小田家如きに攻立てられ、御生害とは殘念至極。

又七　シテ兄上にはその時に、天目山を落ちられしか。

柵　不覺を取りしとおつしやるは、如何なる事か氣遣はしい。

漣　姉樣の息のある内は、早う聞かせて下さりませ。

丹後　シテ〳〵不覺を、

皆々　取りしといふは。

〽問はれて苦しき息をつき、（ト是にて内膳苦しき思入あつて、）

内膳　されば君の嚴命ゆゑ、若君抱きまゐらせて、間道傳ひに甲武の境をのがるゝ内、關門あつて固めの兵士に見咎められ、遁れがたなく一方を、切拔けんとあせれども、多勢に無勢敵しがたく、遂に若君奪取られ、取返さんと挑む折、小田へ隨ふ齋藤主膳關門警固の隊長ゆゑ、當の敵と切りかけて刃を交へ挑む折、足の痛手にたぢ〳〵と數丈の谷へ眞逆樣、恥辱に恥辱を取りしゆゑ、切腹なさんと思ひしかど、若君奪ひ取られたる、此身の不幸を告げし上、家の瑕瑾に親人の御手にかゝつて相果てんと、それゆゑ態と匿し包み、妻に心惹かされ歸りしと、假にも親を僞りし、不幸の罪はお許しあれ。

〽不覺を語る内膳が、詞に扨はと人々も、共に袖をぞしぼりける。

ト内膳語るを皆々聞いて、涙に暮れるこなし。

丹後　さては死すべき命を延はり、天目山を落ちたるは、君より若君預かりて、それゆゑ討死なさゞりしか。

又七　それを途中で敵方へ守護なす若君奪取られ、忠義の道も立たずして、恥辱を忍ぶ御胸中、又七推量致しまする。かゝる事とも露知らず、父の詞と言ひながら、槍を向けたる身の不孝、その言譯

は此場にて。

〽一と腰取つて又七が、死なんとなすを留むる漣、手負は聲を勵まして、

ト又七一腰を取りて切腹なさんとするを、漣留める。内膳きつとなり、

内膳　うろたへたるか　弟　又七。親人は御病氣にて歩行の自由ならざる御身、わが失ひし若君を誰が取返してくれようぞ。

又七　サア、それは。

内膳　兄へ義を立て死んだとて、此内膳が悦ばうや。死する命を存へて、兄が恥辱を雪いでくりやれ。

又七　すりや死ぬるにも死なれませぬか。ハアヽヽ。（ト泣く。）

丹後　あゝかほどの事の見極めが、出來ぬ俺でもなかつたが、老衰なして思慮うすく、老の一途に早まつて、手を負はせたるわが粗忽。

内膳　さゝ、その親人の槍先にかゝるはかねての身の覺悟。唯不便なは妻柵、われを諫めて此の自殺。

〽言へば手負ひも顏を上げ、（ト柵顏を上げ、）

柵　イエ〳〵何の不便な事。わたしが命を捨てたのも、その本心が聞きたさゆゑ、是が誠の臆病なら死んでも迷ひの種なれど、忠義ゆゑの事と聞き、是で迷はず死にますわいなア。

内膳　此身も共に冥土の道づれ、半座を分けて待つてゐよ。

柵　その一言が千僧の供養に勝る嬉しさに、思ひ置く事なけれども、心殘りは父樣の、步行がならぬ御病氣を、如在なけれど漣殿、わしに代つて御介抱、お賴み申しますわいなア。

丹後　アヽ我子の心知らずして、此の孝行の嫁にまで、あたら命を捨てさせしは、皆此親が過ちゆゑ、許してくれよ、コレ柵。

柵　アヽ勿體ない事おつしやりませ。

〽言ふ息さへも四苦八苦。（ト柵苦痛のこなし。）

漣　コレ姉さんには、お心慥かに持つて下さりませ。

柵　これが、此の世の、

〽別れぞと、側へ〳〵と這ひ寄れば、花の散り行く知死期時、嵐も待たで柵が、脆くも息は絕えにけり。はつとばかりに人々が、淚に內膳心を勵まし、

ト是にて柵よろしく落入る。皆々又淚に暮れる。內膳きつとなりて、

內膳　イヤ歎きに沈む所にあらず。主君の若君奪ひしは、齋藤主膳が家來の者、又七そちは姿を窶し、忍び入つて奪返し、兄が恥辱を雪ぎくれよ。

又七　仰せまでも候はず。一命かけて陣所へ忍び、奪ひ返して若君を、ひそかに笹田へ送り申さん。

内膳　ハア、、忝きその一言、持つべきものは兄弟なり、是にて思ひ置く事なし。イデ尋常の最期を遂げん。

〽上帯解いて差添を、逆手に弓手の脇腹へ、がばと突込む時しもあれ。

ト内膳差添を脇腹へ突立てる。此時向うに聲あつて、

主膳　ヤレその切腹、暫く待つた。

〽と聲をかけて入り來るは、齋藤主膳實行、悠々として入り來れば又七見るより突立ち上り、

ト花道より齋藤主膳實行出來り、内へはひる。又七見て突立ち上り、

又七　ヤヽ齋藤主膳、ムヽ扨は武田の殘黨を、詮議の爲に來りしよな。

〽氣早の又七拔く手も見せず、切つてかゝるを身をかはし、鋭き刃を扇にて、受けつ流しつしつかと押へ、

ト又七切つてかゝる。主膳身をかはし、ちよつと立廻つて押へ、

主膳　ヤア聊爾召されな、又七殿。それがし忍んで來りしは、殊黨餘類の詮議にあらず。

又七　何と。

主膳　一旦御家亡ぶとも、後の榮えを思ふゆゑ。
又七　いゝや主家を見限り退身なし、小田へ隨身なしたる齋藤。
主膳　いかにも、それがし讒者の爲に退身なし、春永に仕へしかど、高恩受けし武田の滅亡、わが身に取つて心よからず、それゆゑ推參致せしそれがし。
內膳　シテ〳〵御身が來りしは、いかなる仔細あつての事。
　〽尋ぬる手負を齋藤見るより、
主膳　コリヤ內膳殿には自殺、ハアヽしなしたり殘念や。家來に御身の跡つけさせ、住所を見屆け參りしが、今一と足早くんば、生害はさせまじきに、返す〴〵も殘念至極。
丹後　ナニ、悴が切腹致せしを、殘念とは何故に。
　〽言ふに齋藤表へ向ひ、(ト齋藤外へ聲をかけ、)
主膳　ヤア〳〵林藏、その品これへ。
林藏　ハアヽ。
　〽はッと答へて森林藏、若君抱き入り來れば、人々これはと打驚き、
ト下手より林藏若君を抱いて出來り、內へはひる。內膳見て、

内膳　コリヤこれ、奪取られし若君を。

主膳　貴殿へお返し申さんと、わざ〳〵是まで参つたり。コリヤ林藏、その方は出口へ参り、誰も此所へ参らぬやうに張番致せ。

林藏　ハヽ、畏つてござりまする。

〽若君渡し林藏は、眞一文字に走り行く、齋藤は座を進み、

ト林藏は若君を齋藤に渡し、花道へ走り入る。主膳は前へ進み出て、

主膳　新關守るそれがしが家來の者が御身より、奪取つたる武田の若君、此儘小田へ差送らば、恩賞にもあづからんが、高恩受けし故主の若君、何とて敵地へ送らんや。既に御身等親子が、斯く浪々召されしも、此の齋藤と同じ事。今小田家に用ゐられ、以前にまさる不興を受くれど舊恩いかで忘却せんや。さればこそ此度の天目山の戰ひに、殘黨餘黨詮議の爲め、諸所に立てたる俄かの新關、大菩薩の關門を、警固の役目願ひしも、若し北の方落ちさせ給はゞお助け申さん所存なり、故に最前兵士の者が、貴殿を捕虜になしたるも、測らず貴殿を谷底へ、落しやりしも武田の舊恩思ふゆゑ。

丹後　扨は故主の御恩を忘れず、捕虜になせし若君を、戻しに是へ來りしか。

内膳　かく信義ある御身と知らず、手向ひなせし拙者が粗忽。

主膳　それもこれも皆忠義、何はしかれ若君を、イザお受取り下されい。

内膳　血汐の汚れ、ソレ又七、息ある内に若君を拜されまじと思ひしが、是にて思ひ置く事なし。返す返すも貴殿の御芳志、死しても忘却致すまじ。

へ苦痛を忘れ喜ぶにぞ。（ト内膳喜ぶこなし。）

主膳　然し上州までは里數も餘程の旅なれば、乳母がなうては伴ひがたし。

又七　それぞ幸ひ我が女房、流產なして乳あれば、

漣　勿體ないが若君へ、私のお乳を上げませう。（ト赤子箝。）

主膳　オヽ殊の外なるおむづかり、少しも早く。

へ渡せば直ぐに漣が、乳房上ぐれば忽ちに、泣き止み給ふ萬千代君、正友默してゐたりしが、

ト是にて主膳抱子を漣に渡す。漣乳を呑ませる事。丹後思入あつて、

丹後　故主の恩義忘れざる貴殿の心底忝いが、此事が小田方へ洩れ聞えなば疑はれん。この時如何召さるゝぞ。

主膳　此事洩れて主君より、疑ひ受けなばそれがしが、切腹致すまでの事。

又七　スリヤ、齋藤殿には一命捨てゝ。

主膳　そも御父信玄公より三代の御恩を蒙りし、一方ならぬ我々兄弟。今若君の御命斷たば、新羅源氏の正統たる武田の血筋絶えぬれば、一命にはかへられませぬ。それ故切腹覺悟でござる。

丹後　ハテあつぱれなる貴殿の心底。

又七　かゝる忠義の御身を始め、數ならねども我々親子。

內膳　その外數多の忠臣も、佞人讒者の舌頭に、忠臣は皆浪々なし。

主膳　佞人輩の言ばかり、お用ゐありしが御身の誤り。

丹後　傾く運とは言ひながら。

內膳　天目山にて凍て解けぬ、

又七　殘んの雪と諸共に、

漣　消えて果敢なく御落命、

主膳　一時に亡び給ひしは、

丹後　思へば夢の、

皆々　世の中ぢやなア。

〽忠臣義臣打寄りて、故主を思ふ懐舊の、涙に咽ぶ折しもあれ、風に誘うる寄せ太鼓、共に駈け來る森の林藏。

ト皆々愁ひのこなしよろしく、ドンチヤンにて花道より、林藏駈け出來り、

林藏　御注進々々々。

主膳　森林藏、注進とは氣遣はしい、何事なるぞ。

林藏　ハッ、先刻俄かに春永公のお召しによつて參りし所、武田方の嫡子萬千代丸を手に入れながら、敵へ渡せしとは二心の齋藤なりと、小山田兵部が兵士を連れ、足並揃へて大菩薩の我々固めし持場まで、攻め來りしゆゑ、無斷に入らば味方とて容赦はせぬと支ふれば、一町ばかり列を亂して逃げ行きしが、引返さんも測りがたし。此事主人へお知らせ申さん。

〽息つぎあへず訴へれば、（ト林藏よろしくある。主膳思入あつて、）

主膳　ハヽ、高の知れたる小山田兵部、それがし參つて追ひ返さん。然しながら又七殿、若君を上州笹田へ、片時も早く御供致されよ。

又七　いかにも敵より間者の者、此邊に徘徊なせば、御身に障りのない内に、是より直ぐに御供なさん。

主膳　然しこれより上州へ行く先々に新關あれば、たやすく行く事難かるべし。

又七　やゝ、何と。

主膳　何はともあれ、餞別せん。

〽又七に投げやる包み押開き、(ト主膳友七へ包を投げる、又七開き見て、)

又七　やゝ、包の内には、二枚の切手。

主膳　それを所持なし行く時は、何方迄も通路は自在。

又七　何から何まで、お禮は詞に盡されませぬ。

内膳　齋藤殿の情にて關門通路の鑑札まで、手に入る上は片時も、早く笹田へ伴うて、義兵の旗揚頼みくれよ。

又七　いかにも〳〵、御身に代り、是より若君守護なして、行かねばならぬ仕儀なれど、今日前に兄の最期、又父上の御病氣を、見捨てゝ行くが心がゝり。

内膳　イヤ〳〵身共に心殘さずとも、若君を守護なして、妙義山の麓路指して少しも早く。

又七　然らば是より。

漣　私も共々。

主膳　此場を落ちれば若君の、御身の上に氣遣ひなし。我はこれより陣所へ參り、小山田めを追ひ返さ

ん。

又七　左様ござらば親人、兄上。

漣　お暇申しまする。

〽勇むは武士の表口、夫婦は涙の瀬戸口へ、心ごゝろに立出づれば、

ト又七漣若君を抱いて下手へ來る。

丹後　アコレ、待ちや。

又七　ハツ。

丹後　門出を祝す餞別せん。

〽言ふより早く脇腹へ、ぐつと突込む父正友。（ト丹後は脇腹へ差添を突立てる。）

又七　ヤヽ、親人には何故の御生害。

〽言ふに手負ひは苦痛を怺へ、（ト丹後苦しきこなしあつて、）

丹後　ヤア何故とは愚か〳〵。生きて詮なきこの丹後。切腹なせば兩人が、心殘さぬ旅路の餞別。

又七　ハヽア、ありがたき、此上もなき父が餞別。

主膳　これぞ誠に武士の魂。

丹後　サア門出を祝せば片時も早く。

又七　それぢやと申して。

丹後　エヽ何をウヂノ\、未練者めが。

又七　ハアヽ。

主膳　正友、内膳、早やさらば。

〽あはれを餘所に敵味方、親兄弟も恒山の、四鳥の別れ右左、道を別つて、

丹後　方々、さらば。

皆々　さらば。

〽泣くを見捨てゝ出でゝ行く。

ト皆々よろしく床の三重にて、

幕

後風土記（終）

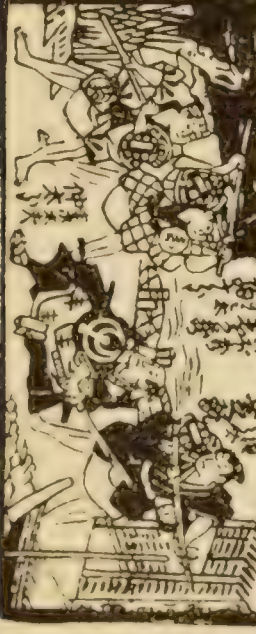
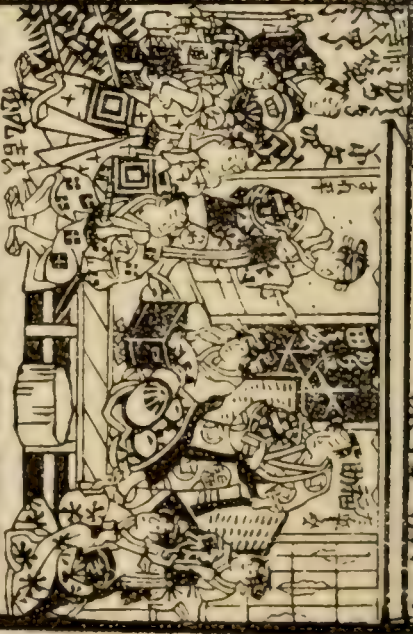
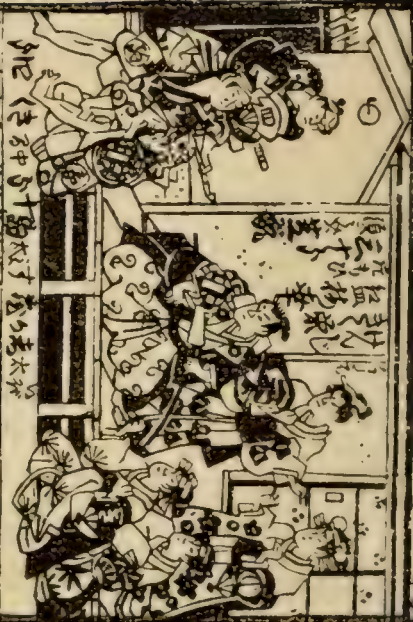
下總の押領使里見義親巡見の折柄孝女缺皿を召され
かたはらなる地藏堂に鹽を盛りて備へしが雨に打れ
鹽どみたるを取りよせ松の小枝を上にさし是れを題
に歌つかうまつれと有ければ取敢ずかつしかや皿て
に松に雪解けて鹽垂山に通ふ松風と申しければ主從
感心のなし我に宮づかへせよとのおほせ繼母かたも
ひたゞちにうけがひ天目須之助渡鳥紅皿左近太郎が
善と惡とのふたすぢ道時は寛寧九年夏秋のさかへ

月缺皿戀路宵闇

つきのかけざら こひぢのよひやみ

『紅皿缺皿』は慶應元年（元治二年）三月守田座に書きおろされた。作者五十歳のことであつた。馬琴の讀本『皿皿郷談』を脚色したもの。『月缺皿戀路宵闇』は後年作者が命名したもので、稿下當時は青砥左衛門、佐野源左衛門の安倍川出水の乘切等をも含み『魁駒松梅櫻曙徵』といふ名題であつた。紅皿缺皿の件は屢〻復演されて人に知られてゐる。

書きおろしの時の役割は三世澤村田之助（缺皿、矢矧の長者の娘淨瑠璃姫）、中村芝翫（乞目の疊六、天目須之助）、市川九藏（荏柄眞吉）、關三十郎（素太夫後妻片もひ、天目法印淨辨）、尾上梅幸（妹紅皿）、中村歌女之丞（腰元渡鳥、腰元十五夜）、市川八百藏（里見若狹之助義親）、市川小文次（下部脚平）、中村福助（正禾左近太郎、御曹子牛若丸）、中村成藏（眞里谷數馬）等であつた。

口繪にしたのは、國周筆の錦繪で、缺皿が天目須之助を討取るの場で、挿繪にしたのは、稿下當時の繪草紙の繪である。

月缺皿戀路宵闇（紅皿缺皿――六幕）

序幕

坂戸明神の場
同別當所の場

〔役名〕――小濱源吾、眞里谷數馬、虎鰒の蝶藏、繼橋素太夫、里見義親、中間兵内、暗雲利金太、大田木伴六、惡徒乞目の疊六實は天目須之助、神職、中間、諸士、小姓等。〕

（坂戸明神の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中石の鳥居、左右に石の玉垣、此の向う白地丸二匹龍の紋つきの幕を張り、上下植込み、櫻の立木、日覆より同じく釣枝、總て坂戸大明神前の體、鳥居の額に坂戸大明神と記しある事、爰に伴六關十郎の兩人麻上下にて床几にかゝり控へ居る、神主好の拵へにてたち、其後ろに菖蒲革の足輕二人並び居る、大拍子にて幕明く。

伴六　當社の神事は例年六月なれども、修覆造營成就によつて、今度遷宮の神事執行これあるに附き、疾くより我君御參籠あつて、武運長久の御祈り。

源吾　まつた御家の重寶、滿月の御太刀に小月形の御太刀二口を供へ、御祈念あるは御家の例格。

神職　當社の造營速に成就いたすも國主のいさほし、殊に遷宮も滯りなく相濟みしは、此上もなく大慶至極に存じ奉りまする。

源吾　是と申すも御用掛り正木左近太郎殿、下役には政田左文太殿。

神職　アヽ申し、其の正木左近太郎樣と政田左文太樣とは、御名前ではまぎらはしうござる故、毎度間違ひが出來まするて、ハヽヽヽ。

伴六　殊に勘定役には苗代畑之進殿、其の下調べ役には、斯く申す大田木伴六。

源吾　惣奉行には御家老正木彈正殿、御檢分も事なく相濟み今日の神事。

伴六　其の御用掛りには先年正木時綱殿推擧によつて、繼橋梁右衛門殿の遺跡を受けたる、京都の浪人にて素次郎とかいひし者なりしが、殿の妹君みさご君樣の急難を救ひし功によつて、繼橋の養子となり、當時素太夫と改め、近頃殿のお覺え目出度く神事の奉行を承りしは、かたはら痛い儀でござる、畢竟此の伴六は、素太夫が妻となつて先年死去いたせし、梁右衛門が娘あり衣には戀ひ慕はれて首ッたけ、其頃はむやくしくツて〳〵ならなんだが、死去いたしたので力が落ちましたが、執着の念は晴れましたて。

源吾　イヤこれは大田木氏には、存じもよらぬ儀を仰せらるゝな。

作六　何さまこれは粗忽千萬、うか〳〵と昔語りをいたしてござるが、あの素太夫殿は、幸運な人でござります。妻のあり衣は楓といふ娘が二歳の時死去いたした其後へ後妻の片もひといふを貰ひ受け、それが連れ子をいたしましたが則ちあの紅皿、缺皿の妹といたし育てたが、よい娘を二人までも持つたは、何といゝ子福者ではござらぬか。

源吾　イヤ、それはずつと前方のはなし、年限も十三四ヶ年經てば、子供は兩人共器量勝れし生れとの家中の取沙汰。

作六　其内にも先妻あり衣が生んだ姉娘の楓、今の名は缺皿とやら、あつぱれの美婦でござる、當時の歌舞伎役者澤村田之助丸出しで、少しも缺けた所のない子、なぜ缺皿と名をかへさしたのでござらう。

源吾　さればでござる、素太夫殿の後妻片もひ殿は、なさぬ仲の繼子ゆゑ、手前が生んだ紅皿のみを愛して、兎角楓殿をうとみ、繼子根性で志しがゆがみ居るなどゝ、あしざまに言ひなして罵り、紅皿が姉は缺皿などゝいやしめて、遂に缺皿々々と呼び習はせしとの事、したが缺皿殿は、至つて孝女だと一家中の取沙汰、世界にはまゝある繼母のためし、うとましい儀ではござらぬか。

作六　それといふも、あの素太夫殿が結構人故のことでござる。したが此の作六も、以前は缺皿の母親

あり衣には、只今も申す如く惚れて居つたが、今では兩人の內妹娘の紅皿を申受けて、宿の妻にいたしたいと、折々は素太夫殿へ謎をかけて見まするが、とんと分らぬ男、いよ〱有無の返答なきに於ては、兼て嫉しと思ふあの素太夫殿に、戀の叶はぬ遺恨は樣々の手段を以て。

源吾　イヤ、それはあまり佞奸邪智と申すものでござる。（ト伴六むつとして、）

伴六　イヤ、小濱氏、身共をとらへて、佞奸邪智とは言はしやつたなア。サア身共が佞奸邪智をいついたしたな、それ承りたい、サア言はつせえ。（トせき込んで言ふ思入。）

源吾　これはしたり大田木氏、お心にさへられたるかは知らねども、あながち貴殿を佞奸邪智と申したる儀ではござらぬが、只今貴殿の言はるゝ通り、戀の遺恨を根に持つて、繼橋殿を恨むと言はれたゆゑ、そりや小人の魂と申したが如何いたした、斯く申すも朋友のよしみでござる。

伴六　置つせえ源吾殿、此の伴六へ對し出るまゝの雜言、今一言いうてお見やれ。

源吾　ソレ、いへとあらば言ひ申さんが、私慾の爲にはおもねり諂ひ、賢をねたみ語を構へ、下を虐げ金銀をむさぼり、女色におぼるゝなど是を佞奸邪智といふ、これらは平生貴殿のお持前故、申したがよも僞りではござるまい。

伴六　おゝ重ね〱の其の雜言、其の舌の根を。（ト伴六拔きかけるを源吾とめて、）

源吾 おせきなさるな伴六殿、小濱源吾には骨がござるぞ、貴殿如きの手の内にては、めつたに切られぬ、それとも達てのぞむなら。

伴六 イデ、立上つて。

源吾 何を小しやくな。(ト双方身構へる、神主驚き、)

神主 アイヤ是は大事だ〳〵、何れも留まつてくだされ〳〵。

下部二人 御兩所樣、お腹も立ちませうが、お鎭まりなされませ。(ト下部兩人中へ割つてはひる。)

伴六 わいらが知つた事ではない、控へて居れ〳〵。

下部二人 イエ〳〵、控へては居られませぬ〳〵。

ト双方なだめる。伴六じれつたきこなしにて、

伴六 かれこれ申すとわいらを初め、片ツぱしから切りたふすぞ。

ト皆々控へる。大拍子になり立上り、ちよつと切結ぶ、ばた〳〵になり、上手より數馬麻上下、大小なりにて走り出來り、上手にある建札をとり、双方の白刃を押へとめる。

皆々 ヤヽヽヽ。

數馬 ヤア、何故あつて此の爭論、兩人共控へめされ。

伴六　ヤア、貴殿は、

共人　眞里谷數馬殿。

數馬　樣子は何か知らねども、大切なる神事の庭先、双方共に怪我あつて、血をあやしなば神への恐れ、君へ對して不忠であらう、爰の道理を辨へて、双方共に心をしづめ、白刃を納めたがよくござらう。

源吾　いかさま、一朝の怒りに其の身を忘るゝと、此の身は更に惜しからねども、造營目出度き神事の庭にて。

伴六　それがしとてもその如く、殿の上意にて非常を守る今日の役目、それに何ぞや私の口論より、事起りて斯くの仕合せ。

源吾　眞里谷殿のお出なくば、双方共に身の破滅、他聞のあざけり。

伴六　アヽ、あやまつたり〳〵。

數馬　兩人とも心とけなば、白刃を引かれよ。

源吾　なにさま。大田木氏、貴殿より。

伴六　イヤ、貴殿から。

兩人　イザ〳〵。（ト双方白刃を引き鞘へ納める。數馬思入ありて、）

數馬　まづは双方共に無事の納まり、眞里谷數馬大慶至極に存じまする。

神主　イヤモウ、どうなる事かと存じましたが、數馬樣のお出にて、丸く納まる此の場の騷動。

皆々　我々も安堵いたしました。

數馬　各々方にも如何いたした儀でござる。今日のお役目は、他より騷動の起らんも測られずとあつて、警固の役を蒙りながら今の有樣、殿の御耳に入る時は各々方の身の難儀、此の場は此まゝ何事なく、双方共に水に流して。

源吾　痛み入つたる數馬殿のお詞。

伴六　全く以て時の拍子に、出來た爭ひと申すもの。

數馬　イヤ、それも互ひに武士の意地づくと申すもの、殿の御爲にもならぬ事、内輪のよしみを忘れず以後は互ひに變心なきやう。

伴六　イヤモ數馬殿の御教訓、此末互ひに遺恨はござらぬ、なう小濱氏。

源吾　拙者に於ても、元より根も葉もござらぬ。

伴六　小兒童の物爭ひ、イヤハヤ馬鹿げて、

兩人　面目次第もござりませぬ。

數馬　何はしかれ本社にて、御祈念の其の間、我君には別當所にて、御休息御座ある上は、只今仰せ出されたれば、各々方へも此段お達し申さんと、參りかゝつて此の仕合せ、殊には奧方諸の方樣には此程より御病氣にて、今日の神事に御參詣これなく、御名代として苗代將監殿の息女、相之進殿の姉たる八重機殿參詣遂げられ、且つ御病氣平癒の御祈念もこれあるに附き、お出迎ひいたせよとの重役方のお指圖、各々にも御心得然るべう存ずる。

伴六　スリヤ苗代の息女八重機殿が、奧方の名代として、參詣あるとの儀でござるか。

源吾　然らば我々共も、是れにてお出迎ひいたすでござらう。神職初め何れも、其儀を心得られよ。

神職
下部　ハツ、畏つてござります。

數馬　やがて程なう、是へ參られるでござらう。

馬澤　然らば神職方にて、待受け申さん。

ト三味線入り大拍子にて、皆々鳥居の内へはひる。やはり大拍子にて道樂者虎ふぐの蝶藏出來り、

蝶藏　べらぼうな目にあふものだ、親分にたのまれて、伴六殿の所へ行つたら、今日明神の祭りで、出役したといふことだから、わざ／＼此の明神迄尋ねて來たが、いゝあんべいに逢ひてえものだが。

ト舞臺へ來る、此の時上手にて人音する故、思入あつて、
人に見られちや面倒だ、爰らに屈んで見て居ようか。
トちよつと下手へ小がくれする、是れにて上手より、以前の伴六出來り、
伴六　イヤモウ、何のかのとうるさい事ばかり、今日の神事は餘計な仕事といふものだ。したが今日の祭りがあればこそ、日頃から戀しい〳〵と思ふ紅皿が來るといふもの、さうして見ると此の坂戶明神は、伴六の爲には結ぶの神、よき首尾を見合せて、手短く口說き落したいものだが、又强情を言つて身共の心に從はねば、其の返報には素太夫めに、越度を見附けてみじめを見せねば。それはまア後しての事、どうぞいゝ鹽梅に、おてきに逢ひたいものだが、いゝ工夫がありさうなものだなア。
ト此時下手より、以前の蝶藏伺ひ居て、伴六を見て、
蝶藏　モシ、伴六樣。（ト大きくいふ。伴六びつくりして、）
伴六　あゝ、びつくりしたわい。
蝶藏　何もそんなにびつくりするにや及びません、わつちでござります。
伴六　おゝ其方は疊六が子分、虎鰒の蝶藏だな。

蝶藏　左樣さ、けふ親分にたのまれて、お前さんの家へ行き、是非お目にかゝつて來てくれろと、手紙を持つて參りやした。（ト煙草入より手紙を出して渡す、伴六受取り。）

伴六　何ぞいゝ事の知せかな。（トいひ乍らひらき見て。）何々、「貴殿かね〳〵私へおたのみには、繼橋の紅皿に執心ゆゑ、素太夫へ申入れても、緣談の儀聞入申さず候ゆゑ、戀の叶はぬ意趣晴しに、素太夫へ越度をこしらへ自滅させて、後々の難澁へつけ込み、無理に所望をなさんとの儀、其節は私へ加勢をいたせよとの事、付いては遠國なぞいたさぬ樣との事ゆゑ、是迄外出もいたしかね罷り居り候所、此節は至つて不運にて、出るとは取られ元手もせいきり、ひつてんと相成り候是れと申も貴殿樣のおたのみにて、外出も成り兼ね候ゆゑの事、右の次第故是非共今日此者へ金子十兩借用申し度候、モシお聞濟みなく候へば、腹癒せに貴所の惡事の一部始終を、正木殿へ訴へいたし可申候、それもこれも十兩の御返事次第に御座候、先づは御無心申入れ度、如斯に御座候、以上。大田木伴六殿へ、乞目の疊六より。」さア〳〵〳〵、とんでもない事を言つてよこしたな。

蝶藏　モシ、とんだ所かずつしりした金の無心さ、詳しくは口上でいつてくれろといつてよこしやしたよ。それもお頼みの足留だ、親分もあんな事をいつてよこしたくもなからうが、けふ此頃は間が

悪く、根こそげひつたくられて眞裸だ、わつちも頼まれて來たから、お前さんにお目にかゝつた日にや、理が非でも借りて行かにやァ、親分の前へすみやせん、然しそれも金づくのことだ、出來ねえといひなさりやあ、直に正不彈正樣へ、お前さんの惡事を言つてしまふといひやしたぜ、お前さんの身分で十兩ばかりの金は、何でもねえ、早く出しておくんなせえ、打つちやつておいちやあ大事になりやすぜ。

伴六　あゝいめえましい、大事を頼んだのが身の不運、それを見込み度々の無心、やらぬといへば訴人すると、強面にやらかすし、あゝのがれッこがない、何でも無難に濟ますが上分別だ。

蝶藏　そりやおつしやる通りに違えねえ、引くりけえりやお前さんの、首がとぶといふ仕事だ、モシ十兩ぢや易い仕事だね。

伴六　なに、安いものか、こんな首ならいくらでもあるわえ。

蝶藏　成程、澤庵の押にもならねえ面だ。

伴六　えゝこいつ何を言ふのだ、目の寄る所へ玉とやら、こいつも餘程惡黨だわえ。

蝶藏　お前さんに似てさァ。

伴六　おきやァがれ。

蝶藏　モシ、早くお返事をしておくんなせえ。

伴六　これ〳〵早くしろと言つても、石ころや瓦とは違ふ。何をいふにも十兩といふ金、お役先にて其の貯へのあらう筈がない。かやういたさう、明日此方より十兩金、調達いたして持たせて遣はさう。

蝶藏　モシお詞の鼠だが、其猫なで聲は喰ひやせん、一寸のがれの逃足は、眞平御免さ、此の虎鰒の逸物が使ひに來たのだ、よこさずア直に訴へだ。（ト行かうとするを引留めて、）

伴六　アヽコレ〳〵氣の短い男だ、やらぬとは言はぬ、持合せがない故明日と申したのだ、アヽこれ惡い尻尾をつかまへて、チウともいへねえニヤンの事だえ。

蝶藏　天井や押入のさわぎじやアあるめえし、しやれ所ぢやねえ早くしなせえ。

伴六　アヽ、絶體絶命是非に及ばぬ、苗代殿より預かつた、御祈禱料のその内を、（ト懷中よりふくさ包み封金を出し、）戀にこそ此わざはひ、（ト封を切り、）忠兵衞は梅川殿、此の伴六は紅皿殿で封金。きりきり持つて行きアがれ。（ト出すを受取つて、）

蝶藏　モシ旦那、乞食に物をやりはしめえし、さう口ぎたなく言ひなさるにや及ばねえ、それ程惜しい金なら持つて行くめえ、其の代りにやア惡事の訴へだ。（トまた行かうとするを伴六とめて、）

伴六　アヽコレ、又しても氣の短い。さういふ譯では決してない、氣を落付けて聞いてくれ、歸つて疊六に言はうには、返事はいたさぬが、手紙の通り十兩遣はす間、これを元手にやりくつて居てくれろ、繼橋が越度になるべき事、見出しさへすれば、褒美の金は望み次第沙汰をする程に、其時こそはぬからぬ樣、此手紙を宅へ歸つて火中いたさん。(ト件の手紙を懷ろへ入れる。)

蝶藏　そんなら此の金は、慥に親分へ渡しますが、モシ旦那、此の蝶藏にも使ひ賃をおくんなせえ。

伴六　手紙に賃錢先拂ひとは、書いてなかつた。

蝶藏　面白くもねえ、書いてあらうがあるめえが、義理によこした使ぢやなし、言はゞお前さんの用で來たやうなものだ、それも一本使ひの立飛脚、チリン〳〵の使ひぢやねえ、爰迄來りやあ小使もいりやす、無駄使ひをさせるものぢやねえ、澤山とは言はねえで、おくんなせえな。

伴六　アヽまた息杖を立てるのか。

蝶藏　モシわつちや雲助ぢやござりやせん、ゆすると思はれちや有難くねえ、貰はずに行きやせう、其代りには又訴へだぞ。

伴六　エヽ此の男は訴へ〳〵が口ぐせだ、仕樣がない。(トいひ乍ら紙入より額銀を二ッ紙に包み、)それ、これを取つておけ。(ト渡す。蝶藏取つて見て、)

蝶藏　たつた二歩かえ。
作六　なに、たつたもねえものだ、こつちは腹が立つ。
蝶藏　モシ旦那、とてもの事ぺロにしておくんなせえな。
作六　ぺロにしろ、こつちは赤んぺろりだ。（ト作六舌を出す。）
蝶藏　いゝわ、そんなら訴へだ。
作六　エヽ、又か、困らせる奴だなア。（ト又紙入より額銀を二つ出して、）それ、又二歩やるぞよ、アヽみぶるひがする程に、高い使ひ賃だ。（ト蝶藏に渡す。）
蝶藏　此節の相場にしちやア、お安いことでござりやす。
作六　もうよいから、早く行けといふに。
蝶藏　行かなくツてサア、こんな所にいつ迄居られるものか、旦那大きにおやかましうござりました、また此頃に參りますよ。
作六　もう眞平だ。（ト大拍子にて、蝶藏花道へはひる、後作六あきれし思入あつて、）アヽとんでもねえ奴が出て來て、ひどい目に逢はせやがつた、それといふのもあの紅皿姫をねらうて爰へ來たばつかりに、十一兩といふ大穴があいた。何でも此の穴うめには、紅皿をくどき落さねばならぬわえ。

源吾　ト唄になりはひろ。後へ手紙を落す。下手より源吾窺ひ出て。武士は恥ある者に恥を知らぬ、大田木作六殿へ、乞目の疊六より悪事をしろせし此の文面。アア油斷のならぬ、人心ぢやなア。

ト此仕組よろしく、知らせに付き、早めし大拍子にて此の道具廻る。

（同別當所の場）——本舞臺四間通し常足の屋體、蹴込み彩色繪、向う銀襖、上下木目杉板戸、欄間へ白布黑にて丸に一の字の附いたる幕を張り、平舞臺へ薄縁を敷詰め、總て別當書院の體、二重の眞中に黑見義親小性麻上下のなり、左右に子役の小姓二人刀を持ち付添ひ居る、上手に數馬下手に伴六、上下なり、諸士四人麻上下なりにて控へ居る、平舞臺下手に素太夫麻上下のなりにて控へ居る。此の見得大拍子にて道具留る。

素太　今日の御神事、御祈念滯りなく、

數馬　御家臣の面々、

伴六　一同大慶至極に、

皆々　存じ上げ奉りまする。

義親　ムヽ、これと申すも正木左近を始め、素太夫數馬等が造營並に神事の義に出精いたせし故、存じの外速に成就いたし、予も滿足に思ふぞよ。

素太　ハヽ、御懇のお詞、恐れ入りましてござりまする。

義親　殊にこれなる素太夫は、正木彈正が推擧にて、梁右衞門が遺跡を相續せしが、計らずも仁田山の亂軍に出會ひ、不思議にも予が妹、島姬の捕はれしを素肌にして軍卒を切殺し、無事に幼き者を救ひたりし、あつぱれ義勇の侍と見たゆゑ召抱へ、近習となして所行を見るに、文を飾らず武に誇らず、能ある鷹は爪をかくすと、一入賴もしく思ふぞよ。こりや伴六を始め近習の者共、素太夫を見習ひ、勤仕いたせ。

伴六　御意御尤もの樣にござれども、殿には兎角素太夫を御贔屓あつて、繼橋氏の後嗣となされ、お覺え目出度くお用ゐあつて。

一　老臣方と肩を並べる樣なる出世、此上もない御高運。

二　それも日頃の御氣性が、柔弱ゆゑに、あなたの御無理は御尤も。

三　おひげの塵をとるのが御上手、したが肝腎の武士の表の、劍術やはらはどうであらうか。

四　まだお手の內は知らねども、元はなまぬるい京家の侍、勇者とは思はれませぬて。

伴六　それも日外仁田山の、亂軍の其中で、どういふ拍子か姫君を救うたは、大方神から授かつたので
所謂怪我の功名でがなござらうて。

五人　かたはら痛い儀でござる、ハヽヽヽ。（ト皆々嘲ける事。）

義親　予が面前をも憚らず、今の雜言無禮なるぞや。

伴六　ハヽハツ、恐れ

五人　入りましてござりまする。

ト此時下手より以前の神主先に三方へ錫の御神酒徳利を載せ捧げ出て、後より侍　三方に三組の内曇りの土器をのせ持ら出來り下手へ控へる。

神主　御祈念滯りなく相濟む上は、吉例の如く神酒獻進いたしたう存じ奉ります。

義親　オヽ格別の儀ぢや、拜味いたさん。

神主　ハヽハツ、則是れへさしおきまするでござりまする。

トよき所へ三方を直し、神主、侍　引返してはひる。素太夫思入あつて、

素太　今日の神事の御用掛りの儀、恐れ乍ら拙者が鬼役を勤めまするでござりまする。

數馬　然らば貴殿御免を蒙り、拜味いたされよ。

素太　畏つてござります。

數馬　それ。

ト指圖する、是にて諸士二人にて右素太夫の前へ三方を直す、素太夫土器を取上げる、諸士一酌をする、素太夫呑んで鼻紙を出して杯を戴せて懷中する。諸士の二土器の三方を殿の前へ直す、義親土器を取上げる、諸士一酌をする、殿呑む事ありて、

義親　目出度う拜味いたした後は、皆の者勝手にいたせ。

數馬　ハツ、有難い仕合せにござりまする。御流れの神酒御家中一同へ、配當仕りまするでござりまする。

トこれにて諸士の一、二兩人は件の三方二ツを持つて下手へ控へ居る、殿思入あつて、

義親　是にて神事の執行、國家長久の祈念萬端、滯りなく濟んだ、目出度いではないか。

皆々　恐悅至極に存じ奉りまする。

ト皆々辭儀をする、里見義親思入あつて、

義親　何れも承れよ。(ト音樂三味せん入りになり、)予が家の重寶たる、二口の太刀、其内にも滿月の太刀は重代の品、なれども小月形の太刀は其昔新田安房の禪師拜領の品にして、今鎌倉殿の家に祕藏

なす、水鑄丸と一對の品なりしを聞し召し、元の如く一對に具足させんと、御懇望あるに依て、先達て佐野源左衞門殿を使者として、進獻あるべき旨、辭退いたさば寶を惜しむとさるゝも本意ならず、進獻いたすべき由決定いたせど、今日明神の神事執行にて、小月形滿月の二口を備へるが例格ゆゑ、神前へお供へ神へも告げ奉り、神事果てなばすぐ樣執權時宗殿へ、進獻せんと思ふゆゑ、小月形を鎌倉へ送る使者は誰ならん。

伴六　されば、拙者めでござりませうか。

義親　いや〳〵左樣でない。

伴六　然らば誰へ仰せ付けられまするな。

義親　予が申付くる使者は、餘人でない、素太夫ぢやわい。

伴六　また御贔屓の素太夫へ。

義親　コリヤ素太夫。

素太　ハツ。

義親　近う〳〵。

素太　ハツ。（ト前へ出る。）

義親　只今申聞けたる如く、小月形の太刀、鎌倉へ進献の使者、其方へ申付くるぞ。

素太　ハッ、畏り奉りまする。

義親　片時も早くと存ずれども、鎌倉の道路なる磯山に、金剛寺といふ古寺あり、其昔しは廣大なる伽藍と承りしが、數度の兵火に荒れ果て狐狸の住居、内に禿げたる一體の金剛神ありしが、此程其金剛神の靈夜中に現れ出で、人民を追剝ぎてなやますと、村長共の訴へあり、時綱に内意なしあし、ひそかに組子をして虚實をさぐらしむれど、未だ實否知れざれば、これらの噂の災ひにて進献の品に粗相ある時は予が恥辱、家の瑕瑾なれば、容易の使者は差立て難し、其方武勇なれども、予に仕へてさせる功もあらざれば、此使者を首尾よく仕果せ、譜代の家臣共のきもをひしがば、予が眼識も違はざると、其方も一つの功を立つる道理、申付けたる今日の使者、是より直樣發足なし、佐野源左衛門殿の邸へ參り、太刀進献の執達を願へよ。

素太　ハヽ、冥加に餘る其のお詞、身不肖なるそれがし御見出しに預かり、鎌倉殿へ御太刀進献の役目、仰付けらるゝは此身の面目家の規模、假令途中に於て、魔鬼妖怪が障碍なすとも、何程の事あらん、役目首尾よく仕果せ、やがて吉左右申上げん、御安堵あれや我君樣。

義親　流石は素太夫いさぎよし、それにて予も安堵いたしした。コリヤ數馬、申付けたる通り、進献の御

太刀是へ持參いたせよ。

數馬　畏つてござりまする。(ト下手へ向ひ、)小濱源吾殿、仰付けられたる通り、御太刀是へ持參召され。

ト下手杉戸の内にて、

源吾　畏つてござりまする。

ト以前のなりにて、杉戸の内より出來り、是につゞいて侍四人、白木の唐櫃樣の箱を荷ひ來り、平舞臺眞中に直し、

ハヽ、仰せに從ひ滿月の御太刀は、守護の者附添ひ御館へ差送り、小月形の御太刀は、是迄守護いたし持參仕つてござりまする。

義親　オヽ、源吾大儀々々。コリヤ素太夫、則是なる御太刀、其方へ預くる、是より直樣出立の用意いたせ。

素太　ハツ、委細畏つてござりまする。

源吾　繼橋氏、イザ御改め下されい。

ト源吾海老錠の鍵を渡す。

素太　承知仕つてござりまする。

ト件のかぎにて錠を明け、櫃の中より太刀の箱を出し、ちよつとぬいて改め、義親の前へ持つて行く、改め見て、

義親　いさゝかも、相違ないわ。

ト素太夫へ渡す、是にて素太夫受取り、よき所へ直す。

素太　進献の御太刀素太夫慥に、預かり奉つてござります。

ト元の通り太刀の櫃へ入れ、錠前をおろす事よろしくあつて思入。

數馬　繼橋氏此度の御使者、御苦勞に存じまする、先刻殿の上意ありし通り、磯山の邊御用心肝要でござるぞ。

伴六　左樣々々金剛神の化物が出て、御太刀はおろか身の廻り迄、引ぱられたら笑止千萬。

諸一　繼橋殿はどんな手利か知らないが、釣鐘を引きかづいた武藏坊や、鬼の腕を切つた綱ほどの、勇もあるまい。

同二　それとも韋駄天の申し子で、足が早くて逃げ果せたら、イザ知らず。

同三　大力無双の仁王が化けて、自由自在に働いたら。

同四　角力取に羽がはえ、鬼に鐵棒石に判。

伴六　障らぬ神に祟りなし、生兵法は大きずの元、どうやらあぶないお使者でござるて。

　　ト皆々あざける、數馬思入あつて、

數馬　何れも君の御前、控へめされ。

五人　いかにも、おそれ入りましてござりまする。

數馬　繼橋氏、火急の御使者、片時も早く御用意召されい。

素太　左様ござらば、我君様。

義親　發足いたせ。

素太　ハツ、是よりすぐ様。

數馬　それ、御太刀の御箱を。

侍兩人　畏つてござりまする。（ト件の箱を兩人にて手かきにし持つ事、素太夫思入あつて、）

素太　何れも、御先へ御免下されい。

　　トゆきかけるを、呼びとめ、

義親　コリヤ〳〵素太夫。

素太　ハツ。

義親　鎌倉表へ參りなば、佐野源左衛門殿へ無沙汰の詫、慇懃に申傳へてくりやれ。
素太　委細畏つてござりまする。
義親　よいか。
素太　ハツ。
義親　早く行け〳〵。
　　ト是にて素太夫よろしく思入、侍兩人櫃を荷ひ先に立ち、是に付いて下手へはひる。思入あつて、
義親　ア丶是にて鎌倉殿へ、約諾を變ぜぬ志しも屆いて、予も安堵いたしたわえ。
數馬　此儀一同に、恐悅至極に存じ奉りまする。（ト此時暮六つの時計鳴る。）
義親　アリヤモウ暮六つぢや。
數馬　御意にござりまする。
義親　春の日脚も諸用があれば、短日と思はる丶な。餘程遲刻いたしたわえ。
　　ト下手杉戶より、以前の神主出來り、手をつかへ、
神主　御供揃ひ調ひましてござりまする。
義親　ム丶、歸館いたさうわえ。

源吾
數馬 然るべく存じ奉りまする。

伴六 拙者儀は神事の後取片付け、仕るやうにござりまする。

義親 オヽ役目大儀。仕落なきやう心をつけませい。

伴六 ハッ、承知仕つてござりまする。

義親 供せい。

源吾
數馬 イザ、お立ちあられませう。

ト音樂にて正面の襖をひらき、皆々付添ひ此一件殘らずはひる、伴六後に思入あつて、

伴六 サアこれからが此方の目算、まてば甘露の日和とは、よくいつたものだ。あの素太夫が鎌倉へ、使者をいひ附かつたのが、身共へ運が向いて來たのだ、あの疊六に言付け、途中で御太刀をまき上げさすれば、素太夫は寶を失ふのみならず、殿の御恥辱にも拘はる道理。科は忽ちしばり首、所で此方へあの紅皿をせしめる魂膽、何しろ早く疊六へ、知らせてやらにやならねえ。然しうまくとん〳〵拍子に行きあいゝが、ひよつと蹟いた日にやア。

トこんな事をいひ乍ら、後じさりに二重へ上らうとして、蹟く思入、

こいつア悪い。（ト二重へ腰をかけ、）辻占だなア。

トこれを知らせに付き、此の道具廻る。

（磯山古寺の場）――本舞臺三間の間平舞臺、眞中に九尺の辻堂、扉明けたて、上手に仁王門の左りを見せ、金網を張り、中に立像の仁王、格子こはれる事、此前に切穴下手藪疊きり破り、左右杉の立木、向う一面黒幕、日覆より杉の釣枝上下植込、總て磯山古寺仁王門の體よろしく、山おろしにて道具納る。と山おろしになり、兵内半天股引、大小のなり、丸に中黒の紋付きたる弓張提灯を持ち、中間兩人を先に立て紺看板脚絆にて、以前の白木造りの唐櫃をかつぎ、息杖を持ち、後より利金太、半天股引大小なりにて出で來り花道にて、

中間　兵内殿、とう／＼得手物の近所へ、來たぢやないかい。

兵内　成程さうであらう、楢葉繩手を通りぬけると、モウ直だ、違えねえ。

中間　何だかさう聞くと、襟先からぞく／＼するやうだ。

利金　コレ／＼さう臆病風が立つと、犬がとび出してもびつくりするわ、爰で立てるなら、もう少し先へ荷をおろすがいゝ。

兵内　成程一寸きられるも、二寸切られるも同じことだ。

中間　どうなるものか、とてもの事に、宰領のいふ通り、向うへ行つて一と休みやらうぢやねえか。

利金　それに又御主人も、大層遲れたはおそい足だ。

兵内　今道祖神の前で、わらぢの紐を直してござつたから、おそうなつたのだ。

中間　あの一里塚の下で、待合はさうぢやねえか。

利金　それがい〻、來やれ〳〵。（ト皆々舞臺下手、一里塚の前へ荷をおろし、）必ず皆もびく〳〵するな、此程山へ仁王が化けて出るといふことは覺悟の前だ、御主人素太夫樣もかねてのいひ付け、モシモ仁王が化けて出たら、死に物狂ひにはたらけとのことだ、何おそれん繼橋素太夫が家の子に、さる者ありとよばれたる、闇雲利金太とは我事なるぞ、たとひ仁王でも十王でも、化けて出し持前の金剛力が出したら、又此方は持前の此足で、三十番神を誓ひに立て三十六計逃げるが上計、イヤ〳〵、それでは不忠だ、卑怯はせぬぞ、軍學兵法陣法弓術、劍術馬術は元より、柔術はいふに及ばず、ドッコイこれは口がすべつた、何でもかでも諸術に達せしそれがしが控へて居れば、氣を丈夫に持つて居ろよ。

ト無性に力む、此時さし金の梟、杉の枝にて羽叩きをする、是にて皆々ぎつくりする。

皆々　それ、出たぞ〳〵、萬歲樂々々々

ト さわぎ立てる、此時梟の笛をふく、是にて杉の枝の梟を見て、

利金 あゝ、いめえましい梟だ〳〵。

皆々 成程、こりや梟が出たのだ〳〵。

利金 コレさわぐな〳〵、兎角おじ氣が付いて、がつたりといつても出たと思ふのだ、言はねえ事か、
こはがるな〳〵、しつかりしろ〳〵。

兵内 何しろ、おそれた。

中間 モウ御主人もござらう、早く爰を出ぬけよう。

利金 さうだ〳〵それがいゝ。しつかりしろ利金太が付て居るぞ、おそるゝ事はない。サア來やれ〳〵。

ト皆々、よろしくあつて立上り、兵内由藏先に立ち、提灯を持ち上手へゆきかける、此の時道樂者の
蝶藏ほゝかぶり尻からげ、杉林のかげより窺ひ出て、いきなりに兵内を投げのける、皆々これを見て
おどろき。

そりやこそ出たぞ〳〵、兵内めは近眼だから、知らずにひどい目に逢つたぞ。

由藏 何にしても、あかりがきえて、まつくらだ〳〵。

利金 かねて覺悟のことだ、イデ利金太が手並を見せん、かゝれ〳〵。

四人　合點だ〳〵。

ト利金太由藏は刀を拔き、中間兩人は息杖にて、闇ゆゑめつた打に叩きまはる故、蝶藏息杖をさぐり取つて、利金太由藏を相手に立ち廻る、兩人も中間も叶はず下手へ逃げてはひる。是にて花道より中間留守居提灯を持ち、先に立ち、後より素太夫半天股引割羽折、大小のなり、わらぢにて急ぎ足に出來り、ちよつと花道にて、

中間　まだお荷物に追付きませぬ。

素太　さればさ、わらぢの紐を締直して居る内に、餘程おくれたと相見えるが、多分待合せて居るであらう、何にいたせ急いで參らう。

ト兩人よろしく舞臺へ來る、此時蝶藏立戻り、下手より伺ひ出來り、いきなりに提灯を打落す、これにて中間びつくりして、

中間　そりや出た〳〵。（ト下手へ逃げてはひる。素太夫身構へして）

素太　扨こそ曲者。

ト柄袋をなげすて、白刃をぬく。鳴物になり、蝶藏を相手に闇の立廻りよろしくあつて、トゞ蝶藏を切り返し、同人見事にかへる。此のとたん、正面の金剛格子を打破り・疊六廣袖、どてら、後ろ仁王

の像、裾は金剛格子、仁王門を畫きたる、色ざし模樣の着附、頰冠りにて出て、きつと見得、これを忍び三重になり、素太夫窺ひ見る心にて、有合ふ息杖を取つて立廻る、と疊六息杖にて素太夫にあてる、是にて素太夫ウンといつて呼吸止る、疊六すかし見て、

疊六　息をとめたら、ゆつくり寢やれ。（トあたりを見まはし）まづ代物は御無事で、爰においでなさる。
トいひ乍ら件んの唐櫃へ手をかけ、錠をねじ切り、中より太刀を出して、拔いて見ることありて、
元よりおれもこんな惡黨ぢやなかつたが、餘程惡事は上つたなア。生れ故鄕を出て、鎌倉谷七鄕も喰詰めて、とう〳〵惡事で落ち着けず、一本立のよるべなく、流れ渡つて上總路へ、木更津船の得手に帆を開きをのつて胴の間に、どうをするたも磯山の、仁王の所にごろ付いて、仁王がばけると見せかけて、夜は出かけて追落し、ちび〳〵仕事に夜を更し、ろくな張目も見えねえと思つた所へ里見の家中、伴六からのけふのたのみの此の仕事、櫃の太刀をまきあげりやア、褒美の金にころんでも、たゞは起きねえ、さらつた太刀は此方のかすり、勝負が付いた仕事の金、乞目と出かけて受けて來ようか、そろ〳〵賽目が立つて來たわえ。何にしろ太刀を拜見いたさうか。（トちよつと見ることあつて）成程、こいつア素敵な代物、何でも金目だ。
トさやへ納める、以前の蝶藏心づき、

蝶藏 これをやつちやア。(トかゝるを)

疊六 エヽ、何をしやあがる。

ト附廻す、蝶藏かゝるを取つて後ろへ投退ける。これにて蝶藏は正面の辻堂へぶッつかり、格子破れて内より天目法印世話のなり、好みの拵へにて、手拭をかぶり、びつくりしたる思入にて出る、これと一時に下手のやぶ疊を破り、眞吉木綿やつしなりの奴、一本ざし、十手を腰にさして出て、双方見得、これにて誂への合方へ双盤山おろしを冠せし鳴物にて、梟の啼聲する事、疊六劔を持行かうとするを、兩人引戻す。疊六うろ／＼と中へはひる、ちよつと三人立まはつてきつと見得。又竹笛入りの鳴物に替り、ダンマリもやうよろしくあつて、疊六は太刀を持ち下手へすりぬけ、此の時蝶藏兵内の兩人心附き起上り、うぬとかゝる。天目法印白刃をぬき蝶藏へあびせる、兵内眞吉にかゝるを捻ぢ上げる、疊六花道へ行き、

疊六 エイ。

トつぶてを打つ。此のつぶて兵内のからだへあたる。眞吉は蝶藏を切り返す。疊六手拭をかぶるを、木の頭。

ざまア見やがれ。

ト此仕組、山おろし、寺がねにてよろしく

幕

ト幕外、疊六思入ありて、是を一ぱいに向うへはひる。後シヤギリ。

二幕目　芝山觀音寺の場

〔役名——正木左近、政田左文太、若黨眞吉。女房片もひ、娘紅皿、同缺皿、下女等。〕

(芝山觀音寺の場)——本舞臺三間の間眞中九尺程の石段、是より上手へ續いて石垣の書割、此上めつき造りの宮、櫻の釣枝、下手櫻の林、此傍出茶屋、後ろは山の張物、櫻の盛り、床几二脚並べ、舞臺諸所に櫻の臺幹、よき所に芝山觀音寺といふ立石、爰に○△□の花見の仕出し三人腰をかけ居る。双ばんにて幕明く。

○　何と、けふ此頃の天氣ぢやあ、しつかりと儲かりませう。

亭主　仕合せとお日和が續きまして、繁昌いたします。

□　モウそろ〱と、汐干も人が出るだらう。

亭主　海邊の方は、賑やかでござります。
△　其の汐干に一日行きてえものだな。
○　汐干で蛤をとるより、ふとんの上で拾ふ方がいつちいゝ。
□　それもこちとらは蛤の番だ。
△　番で思ひ出したが、爰の寺の仁王樣が、大分はやるぢやねえか。
亭主　左樣でござります、御領主樣の御建立で、立派に御普請が出來ました。
○　元は磯山の金剛寺といふ荒寺にあつた、化け仁王の事ぢやねえか。
亭主　左樣でござります。其寺をこれへ移されましたのでござりまする。
□　慾のふけえ仁王樣ぢやねえか、元地が磯山此方が芝山、寺を住居にするとはすてきぢやねえか。
△　其はずよ、體が大きいから。しかし庇をかして母屋の譬。
○　肝腎の觀音樣へおまゐり申さず、門番の仁王樣ばかり繁昌しますの。
□　どりや、そろ〳〵と出かけませうか。
亭主　まアよろしうござりまする。
皆々　そんなら茶代をあげませう。

亭主　有難うございます。
三人　サア行かう〳〵。
　　トこれにて皆々石段の上へはひる。直に聖天三味線入になり、花道より左近、羽織袴大小、佐文太同じ拵へ、後より若黨眞吉一本差し繻子奴の拵へにて出來り、花道にて、
左近　遠山の花をのぞめばいたづらに、過る後思ひ〳〵に咲く迄も、櫻を花の王とよぶ、政田氏遠山の花は格別でござるな。
左文　我君あらたに建立ありし、芝山の觀音寺、けふ九重の花盛り。
眞吉　幸ひあれなる茶店にて、持參なしたる瓢の酒。
左近　花を肴に興を添へ。
左文　入日厭はず汲みかはし。
眞吉　木々の下風花吹雪。
左近　どりや御同伴仕らう。
眞吉　サアお越しなされませ。
　　ト右鳴物にて、三人共舞臺へ來り、床几へかける。亭主こなしあつて、

亭主　ようお出でなされました。サア、お茶一つお上りなされませ。（トよろしく、めい〳〵取つて、）

左近　何と左文太殿、かやう見晴らしました景色、吉野初瀬はいざ知らず、よい眺めではござらぬか。

左文　左樣でござる、四方の山々を見渡しました所は、一興でござりまする。

眞吉　草木心なしとは申せども、時を違へず自ら芽を生ずるに從ひ、浮立つ心は一入のお慰みに存じまする。

左文　花は櫻木人は武士、酒はけんびし酌はたぼと申して、女の交らぬは、玉に疵と申すのでござらう。

左近　酒席は格別、月を愛で花を愛するには、女の交らぬがかしましくなく、詩を吟じ歌を詠じまするには、獨歩が樂みのやうに存じまする。

左文　其許は賢者じみてござるが、凡そ世界の樂みは酒色に過ぎず、東坡すら男女の交はりは、互ひに白骨をにくむと吟じたる事もあれば、此上の樂みはござらぬ、なう御家來。

眞吉　左樣でござりますか、然し其の品を愛するには却て酒色あつては、樂みに成りませぬやうにも存じまする。

左文　拙者抔は女がないと、なか〳〵酒はのめませぬ、それに付けても今日爰へ、繼橋素太夫の內室の片もひ、娘をつれて參ると承つたが、御家中多き其中にも、あのくらゐ器量のいゝ娘はござら

ぬ、妻にいたし度くたび〳〵申入れても、酢のこんにやくのと申すが、どうかあの箱入りの二人の皿、どちらか一人口說き落し、手に入れたいものだが。
左近　スリヤ左文太殿には、繼橋の娘へお心寄せらるゝか。
左文　面目ないが首ッたけ、どうか一人は手に入れたうござる。
眞吉　そいつァ無駄なお話しだ。
左文　なに、無駄とは。
眞吉　いえなに、二人は無駄でござりますが、一人は御手に入りませう。
左文　イヤ手に入れるとはよい辻占、きつと其の方請合ふか。
眞吉　大請合、いつも繼橋の娘達が、あなたのお噂をいたして居ります。
左文　すりや娘共が、身共の噂をいたせしとか、シテそれは何と申した。

ト左文太前へのり出す。

眞吉　アノ左文太樣とおつしやるお方は、お名を聞いてもぞつとする程、
左文　なに、名を聞いてもぞつとするとは、コレ、後を聞かしてくれ〳〵。

ト左文太夢中になり、床几を叩く、是にてくさめをする。

ハックショ、おや、又娘が噂をするのか、但しは風を引くのかしらん。

ト左文太眞面目になる。皆々立上り、

眞吉 イヤ、馬鹿げたつらだ。どりや、參りませう。

ト唄入りの鳴物になり、左近先に左文太、眞吉付いて石段の上へはひる。右の鳴物をかり花道より片もひ、後家條所行の拵へ、日傘を持ち紅皿振袖衣裳にて、日傘をさし出來り、花道にて、

片も 誓尊き大悲の御利益、枯れたる木にも花咲かず、六つの花びら白妙の富士の高嶺も見えわたり。

紅皿 ゆかりの色の紫は、妹背に高き筑波山、このもに遠き八重霞。

片も 少しも早う參詣して、

紅皿 父樣の御無事を願ひ。

片も どりや行かうわいなう。(ト是にて本舞臺へ來る。)年毎見ても替らぬ花、替り果しは此の身の上。

里見の譜代繼橋の、妻子の者が物詣でに、供をもつれず見る花も、心にそまぬ眺めぢやなア。

紅皿 申し母樣、けふのお參りに、お花見は嬉しうござんすが、なぜに姉さんを御一緒に、連れてお出でなさんせぬぞいなア。

片も あの缺皿は渡鳥と一緒に、後から來るといつたゆゑ、大方いろ〳〵の用事を片附け、今に來るで

あらうが、いつそ來ぬ方が清々として、そなたと二人の方が、慰みであらうわいなう。

紅皿　イエ〳〵私は姉さんと一緒に、けふ一日遊んで樂しまうと思うたのでござんす、さうして父さんは、今では何處においでなさんすぞえ。

片も　いつぞや磯山でお命助かり、所の者に送られて、殿樣のお手討になる所、御慈悲深い殿樣、それに昔の働きを思召し、命をお助けあつて、誠は刀詮議の爲、遠い國においで遊ばすが、御家中の聞えもあれば、表向きはお手討のつもり、今におゆるしの出やう程に、必ず案じぬがよいわいなう。

紅皿　さういふ事なら猶の事、姉樣と一緒に來て、御無事を願はうもの。

片も　イヤ〳〵打つちやつておきや、缺皿は今に外へ嫁入りさせ、そなたには繼橋の家をつがせにやならぬ。然しまア御家中の多い其中でも正木左近樣、あのやうなよい男を、そなたの亭主に持たせたいものだが。

紅皿　母樣の御親切、有難うござんすが、姉さんを差しおいて、どうまア後とりに。

片も　ハテ何事もわしが胸にあるわいなう。

紅皿　それぢやと申して。

片も　ハテ、惡い樣にはせぬ程に、樂んで居や。

ト此時石段の上より左文太出來り、兩人を見てにこ〳〵しながら

左文　これは〳〵繼橋殿の御令室、又御愛女の紅皿殿、御花見でござるかの。ホヽ櫻も恥づる其の御容貌、花が花見るとは此の有樣、せめて御同座なりと、

ト紅皿のそばへ腰をかける。紅皿こちらへ來るを、袂をとらへ、

どつこいお逃げなさるには及ばぬ、知らぬ者ではなし、御同藩中の交はりは深い御緣でござる。

ト袂を引付ける、片もひこなしあつて、

片も　これは〳〵、どなたかと存じましたら、政田左文太樣、あなたも御花見の御樣子。

左文　左樣でござる、只今奧山の方を一覽いたしましたが、數多き花の中にも、景色よし野の山櫻、花も實もある此花は、又一入でござりまする。

ト紅皿へ寄らうとするを、紅皿とびのき脇へかける。

何と片もひ殿、此節は定めし肌淋しうござらう、兎角お一人は無用心なもの、拙者非番の節は、泊りがけにお話しに參りませう。

トそろ〳〵片もひのそばへよる、片もひこなしあつて、

片も　其思召しは有難うござんすが、夫に別れまして、衣類調度は親類へあづけ、貯への金子とてもござりませねば、安心いたして居りまする。
左文　そりや悪い〳〵、左様なら斯樣いたさう、お手前御祕藏のお皿二枚の内、一枚おゆづり下されい。
片も　皿とおつしやりまするは。
左文　それ、其の皿を。
片も　左文太樣何をおつしやりまする。只今も申す通り、浪人はいたしましても、道具諸式は夫のかたみ、まだ拂ひ物にはいたしませぬ。
左文　エヽ御合點の悪い、皿と申して瀨戸物ではござらぬ。
片も　何の事やら私には、一向合點がまゐりませぬ。
左文　左樣なら思ひ切つて申しませう、あの御愛女の紅皿殿を、身共が婦妻に申受けたうござりまする。
ト恥かしき思入にて顏をかくす、紅皿びつくりして、
紅皿　エヽ。
片も　何事かと存じましたら、御常談ばつかり。
左文　常談ではござらぬ、眞實ほんまの事でござりまする。（ト片もひの袂をとらへ口說きかける。）

片も　其思召しは有難うござりまするが、縁ばかりは親の儘になりませねば、娘が所存も承り。

左文　すりや何とおいひなさる、貴公が承知でも娘が不承知、そりや悪い料簡、浪人の娘でおかうより政田左文太の奥樣になさる方が、德用かと存じまする。

片も　お詞にはござりますれど、一生定る夫の事、娘の心も承りませねば。

左文　さうでもあらうがよくお聞きなされい、お手前の夫素太夫殿御手討になり、死骸取片付の時、拙者あとより麻上下をつけ、施主同樣に死骸のそばへ參り、生きたる人に申すやう、お手前の娘紅皿を、拙者の妻に申受けたいと申したれば、其時首は見えぬが、むく／＼と肥つた死骸が、手を出して承知の樣子、聟舅と思へばこそ、懇に葬むり歸りました、そりや武家の法式を御存じない公家の侍を亭主に持たれたゆゑ、さうでもあらうが、わづかな捨扶持で一生やもめでくらさにやならぬ亭主を持たぬは第一不孝、其の親不孝をわざ／＼親が教へる樣なもの、此樣な親切男、日本國々の神を祈誓にかけ、熊野で烏が死なうが、高野で鳶がくたばらうが、外の浮氣はせぬわいなう。

ト手を合せ拜む、片もひむつとしたる思入あつて、

片も　御親切有難う存じまする。

左文　スリヤ、あの御承知で。

紅皿　母樣、私やいやでござんすわいなア。

片も　わしに任しておきやいなう。

左文　サア出來た／＼、有難い／＼。

ト左文太足ずりして悦び、紅皿のそばへ來る故、紅皿びつくりして飛びのき、

紅皿　アレエ。

片も　モシ、政田樣御緣邊は。

左文　御承知かな。（ト片もひの袂へすがる。）

片も　いゝえ。（ト振拂ひ、紅皿の手をとり、）お斷り申しますわいなア。

ト片もひ紅皿の手をとり、石段の上へはひろ。左文太床几より落ち、あつけにとられて見送り思入あつて、

左文　何だか夢の樣だ。落ちさうで落ちぬは、十六七の娘に牛の睾丸、所で一首浮んだわえ。はねられた顏はまつかに紅皿を、貰ほと思つて恥を缺皿、コリヤ一思案せにやならぬわえ。

ト床几にかゝり、腕組をして思案の思入、此時花道より缺皿、振袖衣裳娘の拵へ、渡鳥好みの拵へに

て、兩人花道へ來て、

缺皿　春每に同じ色香の櫻木を、雲と見まがふみよし野に、まさりおとらぬ觀音寺。

渡鳥　木の間がくれに遠山霞、春の日脚も長々と。

缺皿　定めし妹も待ちかねて、わしの來るのを待つて居やう。

渡鳥　少しも早う、お急ぎなされませ。

缺皿　何かの願ひ。

渡鳥　お孃樣。

缺皿　サア、行かうわいなう。

ト是にて兩人舞臺へ來る、左文太は腕組して考へて居る故、缺皿渡鳥拔き足にて、前を通る途端に目を開き、兩人を見て、

左文　誰だ、いゝ思案をなくしてしまつたわえ。

渡鳥　それはお氣の毒でござりまする。（トこれにて兩人を見つけ、にこ／＼して、）

左文　これは／＼、どなたかと存じましたら、繼橋殿の姉娘缺皿姫、お供には御譜代の渡鳥、どれもこれも美しいなア。サア是れへ／＼。（ト無理に床几へこしかけさせ、）見事々々その笑をふくまれし所

は、男の命取り、毒藥變じて藥となる、身共の體には至つて良藥でござる。

トいやらしき身振りにて、缺皿に見とれる。

缺皿　左文太樣とした事が、御常談ばつかり、母樣がお待ちかね、早う行かうわいなう。

左文　まアお待ちなされませ。なにあの母樣には、先刻是れへ紅皿御同道で御參詣なされたが。

渡鳥　左樣でござりまするか、何處においでなさるゝか、あなた御存じならお聞かせなされて下さりませ。

左文　急いては事を仕損ずる、まア御ゆるりとなされませ。

缺皿　いえ〳〵私や母樣に、お目にかゝりませぬと惡うござりまする。

左文　あの母樣〳〵と、大事さうに言ひなさるが、先では何とも思はねえ、今も爰で言はれるには、あの缺皿は生れつき馬鹿だから、なか〳〵繼橋の家は嗣がされない、御家中で貰ひ手さへあれば、どんな貧乏人にでもやつてしまはうと、人が聞くとも知らずべちや〳〵しやべつて居られたが、それを知らぬとは。

缺皿　サアどの樣におつしやらうとも、幼少より御養育受けました母さま、私やどの樣なつらい事があらうとも、少しもお恨みとは存じませぬ。

左文　そのお心根が御不便だ、此間もお宅で、大丸から反物が參つて、此の縞はいゝの此の染色は似合はぬの、是も紅皿あれも紅皿、缺皿とはかけら半ぺら言はぬゆゑ、兄弟思ひの紅皿殿、姉さんのはどれに仕ようといへば、あれには今に聟をとる時拵へるから、どんななりをしてもいゝ、生れ乍ら何百石といふ高を持つて居るから、裸でも聟になる人があると、自分勝手氣儘な後家、繼母を鬼にたとへるが、よく言つたものだ、なう缺皿殿。

缺皿　假令繼しき中にもいたせ、親子となるは深い緣、それに父樣も不慮の御最期をお遂げなされし事便りすくない母樣一人、身を粉にくだいても孝行いたさにやなりませぬ、男なれば一人並、殿樣の御近習に召し出され、日々の御奉公しながらも、兩親に仕へねばなりませぬ、女の身の悲しさは、浪人いたしましても、母のたそくにはなりませぬわいなア。

左文　所で其親を養ふ工夫がござるて、拙者の女房になれば、半分孝行を手傳ひ申さう。

渡鳥　そりや出來ませぬ、お孃樣は親御樣がお果てなされてから、一生殿御は持たぬ思召し。

左文　そりや惡い料簡、人間と生れ夫を持たぬは片輪といひます、あんな根性惡のそばにいつ迄居やうより、斯くいふよい男を亭主に持つた方が、一生の德といふもの、アゝ慾のない女ぢやなア。

渡鳥　サアお孃樣、母樣がお待兼ねでござりませう、早うお出でなされませ。

缺皿　さうでござんすなア、したが母樣は何處においでなさるやら。
渡鳥　御山內を搜しましたら知れませう。
左文　搜すなら敎へてあげませう。
缺皿　どうぞ敎へて下さりませいなア。
左近　敎へたくつてなりませぬ。サア、敎へて上げませう、ちよつとかうやつて。
ト缺皿の手を取らうとするを
缺皿　アレエ。（ト立ちかゝる、此の途端に床几ひつくり返り、左文太あほむけになる。）
左文　アイタヽヽヽ。
渡鳥　サア、お出でなされませ。
ト唄になり、缺皿下女石段の上へはひる。後左文太起上り、腰の痛むこなしあつて、
左文　また投げられた、所で今度は狂歌でなし發句でなし、詩でなし語でなし六でなし、三題噺しと出かけよう。田之助に床几翫十郞と、此の三題でちよつと申上げます。まづ翫十郞がひつくり返れば、やつぱり成駒桂馬の高飛して、田の〳〵女をくどけば、とんと桂馬で飛車と尻餅をつき、せんき筋をいためたゆゑ、王手ィ〳〵腰をさすつての仕合せ、助言をして女にはじかれては、金銀

にもかへられねえ、所でお手はふく／＼／＼と笑はれて、アヽ、とんだしやうぎに逢ふものだなあ。

ト唄になり、左文太腰をさすり／＼、上手へはひる。直に左近、眞吉出來り、床几へかゝりて、

左近　今奧山で見かけたは、素太夫の後家の片もひ、娘の紅皿を連れて花見と見えるわい、姉といひ妹といひ、何れおとらぬ器量よし、其上姉の缺皿は孝女といふこと、家中一統の評判。

眞吉　其孝行をする娘を、いかに繼母とは言ひながら、邪非道に打ちちやうちやく、素太夫殿のお心よし、あの樣な者が女房になるとは、世界は分からぬものでござりまする。

左近　貞婦に惡女が出來、孝に不孝が出來るとは、所謂、紅茸のたぐひでもあらうかい。

眞吉　其上利口で、琴三味線は元より、香花茶の湯女の道は一通り、手跡は名におふ松花堂。

左近　敷島の道迄たしなんで、

眞吉　なぜ缺皿と名づけしか。

左近　下世話に申す、あれがほんの、鳶が鷹とやらであらう。

渡鳥　サア／＼、お孃樣お出でなされませ。（ト石段より缺皿と渡鳥出來り、左近を見て、）どなたさまかと存じましたら、正木左近樣、お見それ申しました。

缺皿　御免なされて下さりませ。

左近　これは〳〵繼橋殿の御愛女缺皿殿、手前も御同然に御挨拶もいたさず、失敬の段御免下されい。

ト互ひに辭儀をする。

缺皿　私はお先へ。

左近　サヽ、お構ひなく。

缺皿　左樣なら、御ゆつくりと。

渡鳥　サヽ、參りませう。

ト缺皿渡鳥花道の方へゆく、此の時左文太出來り、缺皿に見とれ居る、石段の上より片もひ紅皿出來り石段を下りにかゝる、是を見て又上より思入、紅皿左近を見てぢつと思入、片もひはあの樣な男を聟にしてやりたいと思入、左文太だん〳〵のび上り、缺皿を見る、双方を見合せ思入、此時鶯笛になる。

左近　谷の戸出づる鶯の、初音ゆかしき笹鳴の。

眞吉　入相告ぐる鐘の音に、また一入の夕櫻。

缺皿　法の御山の尊くも、ほうほけきようの口籠り。

下女　淺黃ざくらの淺ざくら。

片も　ふかき緣の物語で。

紅皿　二世の誓ひは。

左文　ちぬと笹田のそれならで、二人の娘に一人の男。

眞吉　柳さくらをこきまぜて、

左近　見れば見る程、

片も　よい殿御、

缺皿　エヽ、

ト此時左文太見とれて石段の上より、あほむけに下迄こけろ、これにて皆々びつくりする紅皿は石段を下りかける、片もひこれをとめて入れかはり、缺皿は花道にて躓き、眞吉は左近の袂を引く、左近ふり向く、缺皿しやんとなる。此のとたん双方一時に木の頭。

どりや行かうわいなア。

ト寺鐘風の音にて、此仕組よろしく、

幕

三幕目

繼橋門前の場
矢矧長者の場
缺皿部屋の場

［役名――正木左近、同若黨眞吉、繼橋の下部脚平、牛若丸、喜三太、中間、酒屋丁稚。繼橋妻片もひ、娘紅皿、同缺皿、淨瑠璃姬、侍女十五夜、せんたく姿おつめ、腰元渡島等。］

（繼橋門前の場）――本舞臺正面屋根附一間の門。三尺の出はひり、潜り附き、上の方九尺庇附きの中間部屋、板羽目、三尺の日窓、下の方九尺屋根附き腰羽目壁附きの塀、内より見越しの松、うしろ淺黃幕、總て家中長屋繼橋住居の體。爰に○△の中間二人紺看板一本ざしにて、酒屋勘太一升德利を提げ居るなどとら〈へ居る、此の見得稽古唄にて幕明く。

○　コレ小僧、その酒はどこへ持つて行くのだ。

勘太　こりや繼橋樣のお內の、脚平さんの所へ持つて行くのだ。

△　一つやしきへ持つて來ながら、なぜおれが部屋へ持つて來ねえのだ。

勘太　なぜ持つて來ねえといひなすつたとて、勘定をしなさらねえから、それで持つて行かねえのだ。

△　あれ程おれが譯を言つて、あしたわらぢを賣つて來りやあ、勘定をやると言つてやつたに。

○　手前も分らねえ奴だな。

勘太　分かつても分からなくつても、勘定しねえ其内は、見世で酒を注がないから、持つて來たくつても持つて來られねえ。

○　よく手前の所ぢや、勘定々々と小やかましく催促するが、五貫の十貫のと借りやしめえし、高が二百か三百だらうに。

勘太　二百か三百の貸しならば、後を持つて來て賣るけれど、市助さんが八百五十に、駒六さんが七百三文ざつと小一分ござりまする。

○　ハテナ、そんなに借りはねえ筈だが。

△　さうしてはしたに三文とは、そりや何のかりだ。

勘太　それ此間店へ來て、冷で二合上つた時、なめなすつたみその錢だ。

△　イヤ、あたじけねえ事を言やアがるナ、どこの國にか指へつツかけて、ちよつとなめた味噌の錢を勘定へ入れる奴があるものか。

勘太　そりヤちよいとなめなすつたのなら、勘定をとりやあしないけれど、二本指でこて〳〵と、しかも三べんなめなすつたから、一なめが一文で、三なめで三文ぢや安いもの。

△　なに安い事があるものか、胸がやけて困りきつた。
○　何でもいゝから五合ばかり、達引いて持つて來てくれ。
△　あしたはきつと勘定すらア。
勘太　きつと勘定しなさるなら、今に五合持つて來ませう。
○　後生だから、早くしてくれ。
勘太　アイ、これを脚平さんの所へ置いて、直行つて來ます。（ト勘太潜りより內へはひる。）
△　あした勘定するとだましこんだが、小僧め五合持つて來ようか。
○　イヤ番頭が因業だから、まづむづかしい方だな。（ト此時後ろへ勘太出て、）
勘太　よくあてなすつたね。
△　それぢやむづかしいか。
勘太　しれた事さ。（ト逸散に下手へはひる。兩人後を見て、）
兩人　イヤ、いめえましい奴だな。
　　ト稽古唄の合方にて、潜りより繼橋の下部脚平紺の布子一本ざし、中間なりにて竹箒を持ち出來り
脚平　どうだ市平、二三日逢はねえな。

○ ヲヽ脚平か、此頃は辛抱だな。

脚平 なに、辛抱をする氣もねえが、御新造樣がお留守だから、內を明ける事が出來ねえ。

△ 御新造樣がお留守だ、どこへお出でなすつたのだ。

脚平 それ此間から豪氣にはやる、芝山の仁王樣へ、御秘藏の紅皿樣を連れて、お參りにお出でなすつたので、外へ行くのは湯へ行くばかり、一日留守をしにやァならねえ。

○ そいつァ窮屈なはなしだが、留守番は手前一人か。

脚平 なにおれ一人ぢやねえ、繼子の缺皿と腰元の渡鳥が、後に殘つて居るけれど、飯の世話からふきさうぢ、おれ一人でしにやならねえから、好きな酒せえゆつくりと、落着いて飮む事が出來ねえ。

△ 成程それぢや出られめえか、まだお歸りにや間があるかえ。

脚平 こぞとゝひの朝お立ちなすつたが、男の足なら三日だが、女の足ぢや四五日掛らう、早くいつておすの晩だ。

○ イヤお歸りといやァ素太夫さんは、まだお歸りにならねえのか。

脚平 此間草津の湯場から、內々でお手紙が來たが、別にお變りはねえさうだが、肝腎の御詮議なさる小月形の一腰が、手掛りさへねえさうだから、めつたにお歸りにやなるめえよ。

○　あの一腰が知れねえ日には、お内へ歸るにも歸られねえわけだ。
△　イヤ、お氣の毒なことだなア。
脚平　定めて旅でも旦那樣が、案じておいでなさるだらうが、お内でも缺皿樣が、便り少ねえお身の上だから、あけくれ旦那樣の事ばかり、邪險な心のおれでせえ、三度に一度はほろりとすらア。
○　ほんにそりやあ壞れかゝつた明き部屋へ押込んで、三度の飯もろく〳〵に、喰はせねえといふ噂。
△　見るから意地の惡さうな、繼親の片もひ樣、さぞひでえ事をするだらうなア。
脚平　イヤモ、するのしねえのと、目もあてられねえやうだ。
○　手前それを見て居ずと、色にして引つぱりやあいゝに。
脚平　どうして〳〵、そりやお庭の櫻で及ばぬ事だが、せめておれも丁七が娘の渡鳥でも色にしようと付けつ廻しつくどくけれど、それせえ今に出來やアしねえ。
△　そりや出來ねえ筈だ、口說くなアむだな事だ。
脚平　なに、おれだつて男だ、むだといふがあるものか。
△　手前も高しまやにそつくりで、拔目のねえ野郞だが、女にかけちやぼんやりだな。

脚平　ぼんやりとは、何がぼんやりだ。

○　あの渡鳥は正木樣の若黨の眞吉と、いゝ仲になつてゐるぜ。

脚平　エヽ、あの九藏に似た野郎とか、いや油斷のならねえ事だなア。

△　それだから、口說くのは、むだといふのだ。

脚平　所をするのが、男の腕だ。

○　イヤ、さううまくいきやあいゝが。

トやはり右の合方にて、花道より洗濯婆おつめ、胡麻鹽かづら好みの拵へにて小風呂敷の包みを持ち出來り、

つめ　ヤレ〳〵嬉しや、日和ぐせにふり續いたも、やうやくいゝお天氣になつた、これでなくつちや洗濯やは、お酒を呑む事が出來ねえ。（と云ひ乍ら舞臺へ來て、）オヽ脚平さん、爰にお出でなすつたか。

脚平　洗濯やのおつかアか、お前の來るのを待つて居たのだ。

つめ　きのふ來ようと思つたが、俄天氣で忙がしかつたから、ツイ遲くなつたのさ。

○　おつかア、おれが袷はまだか。

△　襦袢を早く洗つてくんねえよ。

つめ　洗ふのは造作もないが、お前はモウしらみたかりだから、猪狩りに一日かゝるから、明後日でなくつちや出來ねえよ。

△　そんなにしらみは居やしめえ。

脚平　なに、居ねえ事があるものか、御家老樣の猫が煩つた時、手前しらみで買上げられたらう。

△　コレ、おれも若え者だ、色氣のねえ事をいつてくれるな。

つめ　イヤ、其の色氣で思ひ出した、脚平さん、おたのみの守宮を買つて來たよ。

ト風呂敷包から小さな德利を出す。

脚平　アコレ、しづかに言はねえか。

つめ　私しやちつとつんてきだから、これでもしづかにいつた氣だよ。

○　手前るもりを何にするのだ。

脚平　何にするとは手前達も、色をした事がねえな、こいつを酒へつぎ込んで、渡鳥にのませりや、直に向うから來るのだ。

△　そんなにゐもりは利くものか。

つめ　利く事は私が請合、亭主がじんきよで死んでから、やもめぐらしに思ひつき、洗濯物をたのみに

来る、お店の衆や坊さん達に、ゐもり酒をふるまつて、幾人色が出來たか知れない。

脚平　其話を聞いた所から、ゐもり酒をきやつにのませ、おれが色にするつもりよ。

○　成程ゐもりの力を借りざア、手前にいろはむづかしい。

△　おらア又酒ときいて、咽がぐび〳〵すらア。

脚平　のみたくば晩に來い、前祝ひにのませよう。

△　そいつア有難へ、日がくれたら出てゆくぜ。

脚平　オヽ鰯でも買つて待つてゐよう。

○　それぢやア、おつかあ洗濯物をたのむよ。

つめ　アイ、あさつてきつと持つて來ます。

○　イヤ明後日も久しいものだ。（ト右の合方にて兩人下手へはひる。おつめ殘り）

つめ　コレ脚平殿。いつぞはお前に聞かうと思つたが、あの缺皿樣のお母樣は、いゝお人だつたさうだが、惡い死にやうをなさつたさうだね。

脚平　オヽ今の片もひ樣と違つて、情深いお方だつたが、おれがほれてる渡鳥の親仁、若黨丁七と譯があると噂をされ、素太夫樣の燒餅から、身のいひわけに二人とも、思ひ切つた死にやうさ。

つめ　私は此頃お出入りをするから、詳しい事は知らないが、それぢやお其の死んだ後へ、今の御新造様がお出なすつたのだね。
脚平　さうよ、竈じめの祈禱に來る、天目法印が媒人で、妹だといつて賣り込んだが、妹だか女房だか、しつかり性根のしれねえものよ。
つめ　さう言ひなさりや、つれツ子の紅皿樣の面ざしが、法印さんに似て居るやうだね。
脚平　アコレ、めつたな事をいひなさんな、壁に耳あり、德利に口ありだ。
つめ　ほんにうつかりした事は言はれないね。
脚平　イヤ德利といやァ其るもりを、早く酒へ仕込んでくんねえ。
つめ　アイ〳〵、直にこしらへて上げようが、酒が買つてあるだらうね。
脚平　オヽ、さつき五合買つておいた。
つめ　それぢやあお前の部屋へ行つて、おあまりでも一杯呑まう。
脚平　呑むのはいゝが、利かれちや太變だ。
つめ　なに、大變とはえ。
脚平　利根川へ水が出たとよ。

つめ　なに梅干になつちや、水氣はないわね。

脚平　イヤ、つんぼう話しだ。

ト替つた唄になり、脚平先きにおつめ附いて門の潜りへはひる。此の唄なかり花道より奴眞吉、袴股立大小、若黨なりにて出來り、花道にて、

眞吉　彼岸前後は季候のせるで、兎角雨の多いものだが、今年はわけて降りがちだから、どうか水が出にやいゝが、イヤ、水の出端の若旦那が、缺皿樣へ思ひをかけ、どうか戀の叶ふやう、取持つてくれとのおたのみ、丁度幸ひ腰元の、渡鳥と疾うからして、只ならぬ中になつて居るゆゑ、それをたのみに此間から、度々お文を持つて來るが、いつでも其儘返されるが、どうかけふはこじ付て、いゝ返事を聞いて歸りたいものだ。（ト思入あつて舞臺へ來り、門の內へこなしあつて、）繼母のやかましやが、芝山の仁王樣へ、お參りに行た留守の內に、どうかお逢はせ申したいが、何にしろ渡鳥にあつて、話しをしたいものだが、合圖をして見ようか。（ト思入あつて石をひろひ、門の內へ打込む。）オヽ障子のあく音がするが、渡鳥が居たと見える。

ト合方になり、門の潜りより、渡鳥家中腰元の拵へにて出來り、

渡鳥　眞吉さん。

眞吉　渡鳥か。
渡鳥　アモシ。(ト門の内へ思入あつて、眞吉のそばへ來り、)眞吉さん、よく來て下さんしたな。
眞吉　どうだ缺皿樣は出來さうか。
渡鳥　サアいろ〳〵とお勸め申したけれど、物堅いことばかりおつしやつて、色よいお返事をなされぬわいなア。
眞吉　度々來るのも無駄だけれど、若旦那が待兼ねて、ヤレ行けそれ行けとおつしやるので、かうして毎日出て來るのも、ありやうは顏が見たいからだ。(ト渡鳥の背中を叩く。)
渡鳥　又そんなうそばかり、左近樣のお使ひがなくば、來て下さんす事はあるまいに。
眞吉　なに、來ねえ事はねえけれど、ひよつと人目にかゝつたら、おぬしの爲に惡からうと思つて、それでふだんは來てえのを、我慢して來ねえのだ。
渡鳥　どうぞ私や此戀が、いつ迄も叶はずに、お前に毎日逢ひたいわいな。
眞吉　つまらない事を言つたものだ、ちつとも早くお二人を、いゝ仲にしてこちとらも、共々一緒に樂しみてえのだ。
渡鳥　丁度似合の御緣ゆゑ、實は早くと思ふけれど、何をいふにもお堅い事ばかりおつしやるゆゑ。

眞吉　これがおぬしであつたらば、直に話が出來ようのに。

渡鳥　おや、おつな事を言はしやんすが、私やそんなおいそれぢやござんせぬ。

眞吉　なに、ねえ事があるものか、いつぞやおれがくどいた時、直にうんと言つたぢやねえか。

渡鳥　サア、そりや疾うから思うて居たお前の事ゆゑ、飛び立つ程私や嬉しうござんしたからさ。

眞吉　おらア又誰にでも、あゝかと思つてゐるからよ。

渡鳥　誰が外の者にしようぞいなア。

眞吉　するかしねえか知らねえが、噂を聞きやあ脚平が、豪氣に惚れてゐるさうだ。

渡鳥　ほんにあの脚平が、附けつ廻しつくどくけれど、誰がまアあんなものに。

眞吉　さういふのが表向きで、いゝ仲になつてゐるやアしねえか。

渡鳥　あゝも、そんな事言うて下さんすな、うそでも腹が立つわいなア。（ト眞吉の胸づくしをとる。）

眞吉　アヽコレ、今のやうに言つたのは、ありやほんの常談だ。おぬしの心の堅いのは、知りきつてゐるよ。

渡鳥　知つて居やしやんすなら、なぜそんな事を言はしやんす。サア、あやまらしやんせいナ。

ト眞吉をつき放す。

眞吉　へイ〱、眞平御免なされませ。（トちよつと辭儀をする。）

渡鳥　イエ〱、そんな事ぢや料簡ならぬわいなア。

眞吉　シテ、どうすりや料簡するのだ。

渡鳥　アイ、かうして料簡しようわいなア。（ト渡鳥眞吉に寄添ふを。）

眞吉　コレサ、誰ぞ見て居めえものでもねえ。（ト渡鳥をふりはらひ。）まづそれよりは肝腎の、お二人様をかういふ仲に、早くおさせ申したいが、どうか仕樣はあるまいか。

渡鳥　缺皿樣もまんざらに、おいやでもない御樣子なれば、いつその事直掛合に、お逢はせ申してはどうでござんせう。

眞吉　いかさま、おぬしの言ふ通り、物はあたつて砕けろだ、却つて直に出來るかも知れねえ、先づ此文をお届け申しておいてくりやれ、後方お連れ申して來よう。

ト眞吉懐ろから、文を出し渡鳥に渡す。

渡鳥　後とも言はずにもう日暮、直にお連れ申しなさんせ、切戸を明けておかうわいなア。

眞吉　それぢや萬事おぬしをたのむぞよ。

渡鳥　アイ〱、合點ぢやわいなア。

眞吉 ドレ、お連れ申して來ようか。(ト行きかけろ、)

渡烏 アモシ、眞吉さん。

眞吉 何ぞ用か。(ト後へもどろ。)

渡烏 きつと來て下さんせえ。(ト眞吉に寄添ふ、眞吉振拂つて、)

渡烏 エヽ、何をするのだ。(ト唄になり、眞吉思入あつて花道へはひろ。渡烏後を見送り、)

渡烏 惚れた慾目か知らねども、いやみがなうてさつぱりと、ほんによい男ぢやわいなア。

ト見とれてゐる、門の潜りより脚平出で、渡烏に見とれ、

脚平 ほれた慾目か知らねども、いやみがなうてさつぱりと。

渡烏 エヽ。

脚平 ほんによい女子ぢやわいなア。(ト渡烏を後から捕へろを振拂ひ、)

渡烏 エヽモ、誰かと思へば脚平さん、何をしなさんすぞいなア。

脚平 何をするものか、眞吉の眞似をするのだ。(ト渡烏びつくりして、)

渡烏 眞吉とは、誰の事でござんすえ。

脚平 エヽ、とぼけなさんな、とつ付いたりひつ付いたり、いゝことをしてゐたぢやねえか。

渡鳥　エヽ、そんなら今の樣子をば。
脚平　詳しい事はきかなんだが、眞吉と譯のあるのを、片もひ樣へ言ひ付けたら、渡鳥おぬしが身の上だぜ。
渡鳥　サア見られたからは、かくしはせぬが、どうぞお奥へ此の事を。
脚平　おゝ言つて惡けりや言ふめえから、其の代りおれがいふ事を聞いてくれるであらうな。
渡鳥　サア、事と品によつたらば、聞くまいものでもござんせぬ。
脚平　ほんに男を大事に思はゞ、おれに一晩振舞やれ、厭と言やァ口があるよ。
渡鳥　サア、それもこれも爰は門中。
脚平　今といつても、返事がなるめえ。
渡鳥　何かの事は後方迄に。
脚平　おぬしが返事を待つてゐるぞ。
渡鳥　そんなら、脚平さん。
脚平　えゝさういつても、いゝ腰付だ。（ト寄添ふを振拂ひ、）
渡鳥　アレ、人が見るわいなア。（ト早めたる唄になり、渡鳥潜りへはひる。此の時渡鳥以前の文を落す。）

脚平 いゝ尻尾を見付けたので、あれをかせにくどいたら、眞實いろにやなるめえが、一度や二度は内證でも、おれの自由になるだらう、こいつァおつになつて來たわえ。(ト件の文をひろひ取り見て、)渡鳥が落したのか、なんだ、「楓の君へ左近より、」こりや正禾の息子殿から、缺皿樣へ來た文だがこいつも種になりさうだわえ。

ト思入あつて、かます煙草入へ入れろ。門の潜より、おつめ酒に醉ひたる思入にて出來り、

つめ モシ、脚平さん。(トいやらしき思入。)

脚平 おつかァ何だ。

つめ 御新造樣のお留守を幸ひ、私や今夜泊つて行くよ。

脚平 なぜ泊つて行くのだ。

つめ お前と一緒に寢たいからさ。

脚平 エヽ、氣味の惡い事をいひなさんな。

つめ 何の氣味の惡い事があるものかね。

脚平 日頃に似合ずおつかァが、いやらしい事をいひ出したは、もしやさつきのゐもり酒を。

つめ アイ、ちよつと一ぱい毒味をしたのさ。

脚平　扨はいよ〳〵ゐもりの利き目か。

つめ　私やしみ〴〵惚れたわいなア。

脚平　さつきのかせにこいつを用ひて、あの渡鳥と今夜はしつぽり。

つめ　オヤ、うれしいねえ。(ト取り附く。)

脚平　エヽ、おきやアがれ。(トおつめをつきとばし。)　梅干はまツ平だ。

トけいこ唄になり、脚平行かうとするを、おつめ捕へる、此模様よろしく道具廻る。

(矢矧長者の場)――本舞臺三間の間常足の二重、本緣附、襷欄間、御簾上げおろし、向う銀張の畫襖、兩褄もじ張り、塗骨障子、上の方後へ下げて綺麗なる網代塀下の方淨瑠璃臺、同じく網代塀の打返し、舞臺前上下に秋草の四つ目垣、いつもの所枝折門、日覆より紅葉の釣枝、總て矢矧の長者淨瑠璃姫別間の體よろしく、ドロ〳〵にて道具留る。トさしがねの蝶二羽、御簾の內より出で、四つ目垣へ消える、ドロ〳〵打上げ、知せに附き、下手網代塀を打返し、爰に淸元連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽引きしぼる弓の名に負ふ望の月、垣根に蔦のつるまきや矢矧の長者が一構、淨瑠璃姫がう

るはしき花の姿に庭もせに、詠めます穗の糸すゝき。

ト琴唄の合方、正面の御簾をまき上げる、内に淨瑠璃姫、廣振袖、姫のこしらへにて琴を彈き居る、そばに十五夜文金島田腰元なりにて控へ、上手に誂への御簾屏風、蒔繪の鏡立へ鏡をかけ、これを月と見て花活へ芒、三方に銀の御酒どくり供へある、其外煙草盆、鼻紙臺などよろしく飾りある。

〽糸のしらべのやさしくも、琴柱に落つる雁金や。

ト花道より牛若丸、後ろ茶筅、若衆かづら振袖、袴、一本ざし、塗下駄にて、笛を持ち、喜三太、繻子奴一本ざしにて牛若の刀を持ち出で來る。

〽塒尋ねて喜三太が、案内に連れて牛若君、戀の技折に彳みて歌口しめし吹きすさむ、妻戀ふ鹿の笛の音に、思ひ通はす想夫戀。

ト此の內牛若喜三太舞臺へ來り、枝折の外へ彳み、牛若笛をふく思入、琴の合方、笛に合せ、よろしくあつて、

姫　秋の夜長のつれ〳〵に、手なれし琴を友となし、千草にすだく虫の音を、唱歌にしらぶる折も折、

十五　垣の外面に誰人か、音色やさしく吹合す、月よりさえし笛の聲。

牛若　草葉のつゆの玉だれに、くらぶる琴の糸筋も、十三弦か十五夜の、隈なき業の奥ゆるし、

喜三　物好みなるあづまやは、みやびし者の別業なるか、内はまさしく女郎花。
姫　其口なしの花ならで、言はぬ色音は都のお方か。
牛若　鄙珍らしき爪音は、よしある者の姫なるか。
十五　せめて小柴の垣間見に。
喜三　月の姿の見まほしく。
姫　心亂れて咲く萩の。
牛若　ゆかしの色のあるならば。
十五　つゆにえにしを。
喜三　結ばんものを。
姫　思ふにまかせぬ。
四人　浮世ぢやなア。
〽言ひ寄るよすが中垣に何と枝折の內と外、葉越しの月のさしのぞき。
ト双方見たき思入あつて、
十五　モシ姬君樣、ちよつと御覽遊ばしませや、表にお出でなされまするは、光る君も及びなき、よい

姫　殿御でござりますわいなア。

十五　笛の音色のやさしさに、いかなるお方と思ひしが、御樣子のよい殿御かいなう。

姫　まアだまされたと思召して、ちよつと御覽遊ばしませ。

十五　わたしや恥かしいわいの。

ト十五夜すゝめる、姫はづかしき思入、門口に喜三太思入あつて、

喜三　モシ我君樣、あれにて琴を調べ居るは、年の頃は十六七で、衣通小町も跣足といふ、美婦人でござりまする。

牛若　爪音の妙なるに、たをやめとは思ひしが、其の樣子も美しいか。

喜三　イヤ美しいの美しくないのと、まアちよつと御覽じませ。

へ牛若君も垣間見に、さしよる顏を十五夜が、月の鏡に寫しとり、

ト牛若枝折の外より内をのぞく、十五夜は鏡の蓋をとり、これへ寫る思入にて、

十五　モシ姫君樣、これを御覽遊ばしませ。

姫　なに、鏡を見よとは。（ト鏡を見て）ヤ、此お若衆は。（ト見とれる思入。）

十五　垣の外面に佇みて、笛をお吹きなされたお方。

姫　そんなら今の笛の音は、あなたのすさみであつたかいなア。
へてもよい殿御といひたさを、言はぬ色なる女郎花、くねる姿を見てとりて、氣轉者の喜三太門に立ち、
ト姫鏡に見とれ居るを、垣の間より喜三太見て思入あつて、
喜三　此家の內へ御案內申しまする。
十五　ハイ〳〵、どなた樣でござりまする。（ト枝折戸をあける。）
喜三　是はこのあたりに旅宿いたす。旅の者でござりまするが、今宵の月に浮れ歩き、ことなく道に勞れましたれば、お緣のはしを暫しの內、お借り申し度うござりまする。
十五　それは何よりお安い事、遠慮な者はござりませねば、あれへお通り遊ばしませ。
牛若　餘儀なき事を賴みしに、早速承知下されて、忝う存じまする。
十五　サア〳〵あれへ。
牛若　ゆるし召れ。
へ葉ずゑに結ぶ露ならで、會釋こぼして座につけば、淨瑠璃姫はおもはゆく、うつむきがちの澤桔梗、

ト此の内牛若喜三太内へはひる。十五夜案内して二重上手へ牛若を住はせる、姫恥かしき思入にて、下手へ控へ、うつむき居る。喜三太十五夜思入あつて、

十五　モシ姫君樣、ちよつと御あいさつを遊ばしませ。

ト姫はづかしき思入にて手をつかへ、

姫　これはあなた、ようお出で遊ばしましたな。

ト牛若も姫を見て恥かしき思入にて、

牛若　餘儀なき事をお賴み申しました。

ト此内十五夜煙草盆、高き茶臺にて茶を出す。

喜三　アヽモシ十五夜どの、必ず構うて下さるな。

十五　イエ、おかまひ申しはいたしませぬわいナ。

牛若　どうしてそちは、女中の名前を。

喜三　エヽ、これは何でござりまする。十五夜と申しましたは、オヽそれ〳〵、今宵の月でござりまする。

牛若　ほんに今宵は望月ゆゑに、思はず是へ參りしが、所目なれぬ此の住居、主人といふは何人なるぞ。

十五　これは矢矧の長者と申し、年久しう此里に、住居いたしますわいなア。

牛若　扨は噂に聞き及ぶ、矢矧が長者の住居なるか。

喜三　シテ、これなる姫君は。

姫　自らことは長者が娘、淨瑠璃と申しますわいなア。

十五　して氣高きあなた樣は。（ト牛若へ思入。）

喜三　これは源氏の嫡流にて。

牛若　アコレ、其の名をめつたに。

十五　イエ、おかくしなされまするには及びませぬ、あなたはたしかに、牛若樣でござりませうが。

牛若　スリヤ、疾より我名をば。

十五　ハイ、喜三太殿から。

牛若　ヤ。

姫　なに、喜三太殿とは。

喜三　ヘイ、下郎めでござりまする。

姫　どうして其の名を。

十五　サア、氣さんじなお方ゆゑ、大方お名も喜三太か、喜三次であらうわいなア。

喜三　イヤ、喜三次は有難い。（ト姫は十五夜にすがり、牛若へ思入あつて、）

姫　そんならあなたが、牛若樣かいの。

十五　ハイ、左樣でござりますわいなア。

姫　願うてもない、此のお出で。

〽ぢつと見交す顏と顏、目許に愛のこぼれ萩、つゆにぬれなん風情にて。

ト姫十五夜よい男だといふ、牛若喜三太よい女だといふこなし。

十五　サア何ぞお上げ申したいが、折惡う腰元衆が、母屋へ行て爰に居ねば、何を上げる事もなりませぬわいの。オヽ丁度よいものがござりました、お月樣へお供へ申した、おみきがござりましたから、あれをお上げ申しませうわいなア。

アレ十五夜、何ぞお上げ申さぬかいの。

喜三　アコレ〳〵、しばしの宿りをかりるさへ、御酒なぞを頂戴いたしては。

十五　イエ左樣ではござりますが、御酒がなければ打とけて、お話もなりませぬわいなア。

ト上手にかざりある銀の神酒德利を、土器と三方へのせ持ち來り、

只今お肴をとりよせますが、まづお一つ召上つて下さりませ。(ト牛若の前へ出す。)

牛若　まづ、これは姫御より。(ト姫の前へ出す。)

姫　イエ〱、これはあなた様より。

喜三　此の爭ひは下世話に申す亭主役なり婚禮は、女子の方から差すものなれば、とやかうなしに姫君より。

姫　そんならこれが、婚禮の。(トうれしき思入。)

十五　これでおうれしうござりませう。

ト姫土器を取上げる、十五夜酌をする。姫呑んで十五夜取りつぎ

憚りながら。(ト三方の上へ土器をのせる。)

牛若　オヽ、頂戴いたすであらう。

十五　ドレ、お酌いたしませうわいなア。

ト牛若土器をとり上げる、十五夜酌をなす、牛若呑んで十五夜へさす。

牛若　これはそなたへ。

十五　有難う存じまする。

喜三　ドレ、おれが酌をしてやらう。（ト喜三太酌をしてやる。十五夜呑んで、）
十五　喜三太樣、憚りながら。（ト喜三太へさす。）
喜三　オツト、さつきから待つて居たのだ。
　　ト喜三太土器をとり上げる、十五夜酌をする、喜三太呑んで鼻紙にて拭ひ、
喜三　恐れながら姬君樣へ。（ト姬へさす、姬とり上げる、十五夜酌をする。）
姬　アコレ、其の樣に注ぎやつて、どうしやるぞいの。
十五　も一つお過し遊ばしませいな。
姬　それぢやというて、過されぬものを。
牛若　多くば、身共が助けるわいの。
姬　デモ、自らが呑みさしを。
牛若　實はそれが、呑みたいのぢや。
　　ト姬が一トロのむを、引きとり牛若ぐつと呑む。
十五　これはお見事でござりまする。も一つ召上りませいなア。（ト十五夜つぐ。）
牛若　アコレ、モウ其樣には飮めぬわいの。

姫　召上られずば自らが、お助け申しませうわいなア。
牛若　然らば半盞助けて下され。（ト出すを姫君呑む、牛若後を呑む。）
喜三　其のお杯にあやかるやう、下郎が頂戴いたしませう。
ト喜三太土器を取る、十五夜酌をしながら、
十五　私が半分助けて上げうわいなア。
喜三　オヽ、半分すけてくりやれ。（ト出す。）
十五　まアおまへから。
喜三　それぢやあ二人一緒に呑まう。
十五　眞平御免遊ばしませ。（ト兩人寄添ひ一緒に呑む、牛若、姫これを見て思入あつて、）
姫　常に替りし十五夜が、なれ〳〵しき此の體は。
牛若　慥にそれは喜三太と、よい事をして居る樣子。
兩人　エヽ。
姫　してよい事とおつしやりまするは、どのやうな事をいたして居りまする。
牛若　サアよい事をして居るとは、男女妹背の語らひを。

兩人　アモシ、めつたな事を。
姫　こんなら二人は。
牛若　何と色であらうがの。
喜三　コリヤ、あてられましてござりまする。
姫　そりやまア、よい事をして居やるなう。
牛若　テモ、羨しいことではある。
姫　ほんに羨しうござりますわいなア。
喜三　モシ姫君樣、お羨しくばあなた樣も、よい事を遊ばしませな。
姫　サア、いたしたうても、相手がなうては、
十五　其のお相手は誰あらう、源家の若君牛若と。
姫　それぢやというて自らは。
喜三　お嫌ひでござりまするか。
姫　何のまア。（ト恥かしき思入にて顏をかくす。）
十五　お姫樣ぢやとてモウお年頃、おきらひなことがあるものかいなア。

喜三　おすきならば、少しも早く。

姫　とはいへあなたは、源家の若君。

〽日影鞍馬におはせしかど、色香勝れし兒櫻雪にもまがふうるはしき、都の花に及びなき姿をかへり三河路の鄙に育ちし自らは、木ぶりつたなきはぢもみぢ、それも時雨にぬれそめて色ます事のあるならば、嬉しいわいのとうちつけに、言はぬは言ふにまさるらん。

ト此内姫クドキの振、よき程に喜三太牛若を引出す、これにて姫牛若を相手に、よろしく振あつて納まる、喜三太十五夜前へ出て、

〽其お心を我々が推して今宵の此の逢瀬、泊りに舟をこぎよせて、矢矧の橋の末長う流れも清き源の、若君樣を川端の深き契りに取持つは、戀になれたるお杉役、これも忠義と思ひける。

ト十五夜喜三太振りあつて、此の内喜三太は牛若、十五夜は姫の手をとり、寄り添はせようとするを振り拂ひ、恥かしき思入。

十五　エヽもどかしい姫君樣、早うお寄りなされませいなア。

姫　其樣なことがならうかいの。

喜三　何のならぬ事がござりませう、出雲で結びし御縁なれば。

十五　御遠慮なされず、あなたもお早う。

牛若　それぢやというて、どうも爰では。

喜三　エヽ、そんな事ぢやいけませぬ。

十五　サア〳〵、お早う〳〵。

喜三　とんだ歯みがきうりだ。

十五　エヽも、しやれ所かいなア。お早う遊ばしませいなア。

牛若　何とそち達が言やつても。

姫　今というては恥かしうて。

十五　ならずばおよしなされませ。

喜三　こつちは我慢がなりませぬ。

〽秋の夜風にぴつたりと寄り添ふ萩の下つゆに、いつか紐とく藤ばかま、もすそあらひにおぎすゝき、抱いてぬるでのはぢもみぢ、はづかしき夜のかね言に月さへ粋を通してか、しばし雲間の戀の闇。

ト喜三太十五夜を引きよせる、十五夜寄り添ふ。これを牛若姫見て氣の惡きこなし、姫恥しき思入にて、後ろ向きにそばへ寄るを牛若引き寄せ、姫振袖にて顔をかくし、自由になる思入。

〽立てし屏風の蝶番ひ、比翼の契りぞむすびける。

ト牛若姫寄り添ひしまゝ、御簾屏風を立てまはす、喜三太十五夜ほぐれて、

十五　しかし又あの内が、樂しみでござんすな。

ヤレ〳〵初心といふものは、めつぽうに骨を折らした。

喜三　イヤ〳〵上つ方は知らねえが、やつぱり下司のこちとらには、油の乘つた方がいゝ。

十五　あんまりさうでもござんすまい。

喜三　何さ、喰ひ付けねえ會席より、

十五　おいしくなくとも私の据膳。

喜三　ドレ、御相伴と出かけようか。

〽手に手をとりて次の間へ入るや矢矧の十二段、淨るり姫が故事も、これなん楠柯の一夢にて覺めて後なく。

ト此内喜三太十五夜こなしあつて下手へはひる。三重大ドロ〳〵にて、此道具居所替りになる。

（缺皿部屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重、古びたる柱、半ばくされたるこけら葺の庇附の本緣附、向う切違ひの暖簾口、上手破れたる襖、下手大崩れのある鼠壁、上の方後へ下げて塗骨障子屋體、母屋の心、下の方一間同じく崩れかゝりし物置、いつもの所枝折戸半分壞れ、此の外横に倒れかかりし竹垣、木の切の沓ぬぎに、左近の草履あり、總て繼橋宅缺皿部屋の體、二重眞中にむしろの二枚折屛風を立て、爰に眞吉渡鳥床の内の世話をして居る模樣よろしく、時の鐘合方にて、道具留る。

と眞吉　渡鳥二重より、

眞吉　ヤレ〱御苦勞々々、おぬしのはたらきで、とう〱本物にはしたが、成程缺皿樣は、物堅いお生れではないか。

渡鳥　サアはじめのあんばいでは、こりやむだ骨と思ひの外、お前の機轉であり合せた、德利の酒をむりやりに、お勸め申すと風が替り。

眞吉　うまく話しが追付いたか、何でも女は酒をのむと、兎角みだらになるものと見える。おぬしも酒はつゝしむがいゝぜ。（ト渡鳥の背中を叩く。）

渡鳥　私や酒を飲まいでも、どこやらのお方の顏を見ると、みだらになつてならぬわいなア。

眞吉　ハヽア、脚平の顏かな。

渡鳥　又しても、よい加減にしなさんせいなア。（ト眞吉の手をつめる。）
眞吉　そろ〳〵みだらの御相伴かな。
渡鳥　知れた事ぢやわいなア。
ト眞吉あたまを押へ、渡鳥に引かれ下手へはひろ。後なまめいたる合方になり、眞中のむしろ屏風をのけろ、内にやはりうすきドロ〳〵にてさしがれの蝶、屏風の廻りを舞ひ、屏風の中へはひろ、むしろ屏風をのけろ、内にうすき蒲團をしき、左近着流し缺皿切繼の振袖にて、かいまきをかけ寢て居たろ心、黒ぬりの枕、針箱の抽斗しへ紙をあてあり、そばに桶の火鉢、五合德利に小さな茶碗あり、兩人起上り、夢を見たる思入にて。
左近　扨は今のは。
缺皿　夢でありしか。（ト本釣鐘誂への合方になり、兩人思入あつて、）
左近　今宵はからず渡鳥と、眞吉郎が手引にて、おぬしとわりなきちぎりを結び。
缺皿　枕交してまどろむ內、思はぬ夢を三河路の、矢矧の里の長者が許。
左近　琴のしらべに合せたる、竹のすさびが緣となり。
缺皿　淨瑠璃姬と御曹子が、假の契りも我上に。

左近　思へば此身は牛若にて。
缺皿　私は長者の淨瑠璃姫。
左近　中をとりもつ喜三太は。
缺皿　あなたの御家來眞吉殿。
左近　又腰元の十五夜は。
缺皿　渡鳥といふ召使ひ。
左近　夢は話しを見るものにて。
缺皿　宵に話せし十二段。
左近　小町のお通が故事を。
缺皿　二人一緒に見たるのは。
左近　思へば不思議な。
兩人　事ぢやなア。(ト兩人寄り添ひ思入。此の時下手垣の崩れより脚平出て。)
脚平　ヤア、こりやかけ皿樣のお部屋へ男が。
缺皿　コレ、めつたな事を。(ト左近をかくす。)

脚平　こいつァ捨てちやあおかれぬわえ。

ト思入、奥より眞吉渡鳥出て、眞吉脚平をとめ、合方替つて、

眞吉　コレ脚平、何を野暮なことをいふのだ。

脚平　ムヽ、扨は眞吉渡鳥が、此の取持をしたのだな。

渡鳥　お前も戀をせぬやうに、大きな聲をしなさんすな。（と脚平きつとなるを、渡鳥背中を叩く。）

脚平　イヤ、おれは戀知らず、情知らずの脚平樣が、目にかゝつたが百年目、底意地惡い片もひ樣へ、お歸りがあると言ひ付けるぞ。

渡鳥　これはしたり脚平さん、御新造樣へ知れた時には、缺皿樣のお身の上、惡いやうにはせぬ程に、内々にして下さんせいなァ。（ト渡鳥脚平の手をとりたのむ、脚平思入あつて、）

脚平　そりやおぬしの心次第で、うんといふめえものでもねえが、たゞぢやいやだ、口ふさげに、一杯呑ませるなら、口をふさいでだまつて居よう。

眞吉　そりやこなたが言はずとも、此の場をだまつてくれるなら。

脚平　呑代をもらつてくれるか。

眞吉　やらねえでどうするものか。

ト此の内眞吉左近へ思入、左近紙入より小判を三兩出し、紙に包み、

左近 これを、あの者へやつてくれ。（ト出す、眞吉とつて。）

眞吉 畏りました。それ、旦那樣から口ふさげだ。（ト平手にとり、開き見て）

脚平 ヤ、こりや小判で三兩か。

眞吉 それぢやあ言分あるめえか。

脚平 なに、あるものかゆつくりと、今夜はお泊りなせえまし。

渡鳥 お泊め申してもよからうかいなア。

脚平 よいとも〳〵おれが承知だ。御新造樣のお歸りは、早くツて明日遲ければあさつてゞなければ、お歸りはねえ、どうやら今に降りさうだから、泊つて濡れておいでなされませ。

左近 片もひどのが歸らずば、夜更は道も物騒ゆゑ。

眞吉 お泊りなさるが上分別、下郎はお次へ泊りませう。

渡鳥 お孃樣、お嬉しうござりませうな。

缺皿 私よりもそなたこそ。

渡鳥 ほんにうれしうござりますわいなア。

脚平　何にしろ崩れ壁で、お床入りが外から見える、母屋の屛風を持つて來て、立廻したらよからうに。
渡鳥　サア、さうしてもよからうかいなア。
脚平　どんな事をしようとも、今夜の內は大丈夫だ、とてものことに客夜具の、きれいなのを敷いたがいゝよ。
渡鳥　それぢやあさうしようかいなア。
脚平　おゝさうするがいゝ、今おれが持つて來てやらう。（ト脚平下手へはひる。）
眞吉　成程人は正直だ、今やつた三兩で、屛風から夜具ふとん迄。
渡鳥　人も賴まぬに持つて來るとは、惡い人だと思つたが。
眞吉　あいつもよつぽど善人だ。
ト此內下手より、脚平風呂敷包みの絹夜具を背負ひ、屛風をかつぎ來り、
脚平　サア〳〵早く立ちなさい。
トこれにて渡鳥床をとり直す、脚平屛風を立直しながら、
ときに渡鳥殿、さつきの酒をおめえ飮んだか。
渡鳥　アイ酒は戀路の取持ゆゑ、恰度幸ひあの御酒を、あなた方へあげたわいなア。

脚平　エヽ、そんならさつきのあの酒を。（ト思入。）

眞吉　イヤ、あの酒は不思議な酒で、上らぬのを無理やりに、おすゝめ申して上げたらば。

渡鳥　いやだ〳〵とおつしやつた、缺皿様が、ツイづる〳〵。

缺皿　アコレ、恥かしい、其樣な事を。

左近　ほんにあれは、銘酒であつた。

脚平　扨はいよ〳〵ゐもりの利き目で、イヤサ、妹背を結ぶも酒の德で。

渡鳥　すぐにそのまゝお床入り。

脚平　折角おれが仕込んだも、

左近
缺皿　エヽ。

脚平　イヤ、とんだお役に立つたなア。（ト唄になり、脚平思入あつて下手へはひる。）

渡鳥　サア、お早うお休みなされませ。

眞吉　私共もお次にて、

渡鳥　お夜伽をいたしませう。（ト立ちかゝるを、）

缺皿　アコレ、渡鳥、（ト缺皿囁く。）

渡鳥　エヽモ、おたしなみの惡い。
　ト懷から紙を出し、缺皿に渡し、ちよつとつく、缺皿ひよろ〳〵として左近へこけかゝり。
缺皿　アレ、あぶないわいの。（ト左近其まゝ引きよせ、）
左近　どこぞ打ちはせなんだか。（トぐつと引寄せる。缺皿顏を袖にてかくす。）
渡鳥　サア、お邪魔にならぬ其の内に、
眞吉　ドレ、此方も早く行くとしようか。
　ト渡鳥の手をとり立ちかゝる、ばた〳〵になり、下手より脚平かけて出て來る。
脚平　サア〳〵、大變だ〳〵。
眞吉　エヽびつくりした、大變とはどうしたのだ。
渡鳥　樣子を早う言はしやんせいなア。
脚平　サア大變といふは、片もひ樣が、今芝山からおかへりなされた。
四人　エヽ。（トびつくりなし、）
缺皿　なに、母樣がお歸りなされたとか。
左近　コリヤかうしては居られぬわい。

眞吉　少しも早く此場をば。

渡鳥　お歸りなされませいなア。

ト四人あわてゝ渡鳥眞吉の袴を穿かうとする。眞吉は渡鳥の帶をしめにかゝりなぞ、まご〳〵と皆々支度をなし、

脚平　サア、後はよろしうござりますから。

片もひ樣に見られぬ內。

眞吉　オヽ合點だ、これから直に裏傳ひ。

左近　垣をのり越え少しも早く。（ト左近刀をさし、立ちかゝるを）

缺皿　アモシ。（トすがり、兩人名殘りを惜しむ思入、眞吉中へわつてはひり、）

眞吉　サア、ござりませ。（ト左近をせきたて、下手の垣を越して下手へはひる。）

脚平　サア〳〵、これは事だ〳〵。

缺皿　どうしたらよからうぞいの。

渡鳥　どうというて仕方がござりませぬ、まア落着いておいでなされませいなア。

ト此時上手障子を明け、腰元手燭を持ち、片もひ屋敷女房好みのこしらへ、煙草盆を持ち出

來り。

片も　何を其様に、さわぐのぢや。

兩人　エヽ。

脚平　それ、御新造様がお出でなされた。(ト缺皿出迎ひ)

缺皿　これは〳〵母様には、お早いお歸りで。

兩人　ござりましたわいなア。

片も　オヽ、あした歸らうと思うたが、空合が惡いゆゑ、降らぬ内にと歸つて來ました。

ト上の方よき所へ住ふ、後ろに腰元控へ居る。

缺皿　大方あしたでござりませうと。

渡鳥　油斷いたして居りましたわいなア。

片も　なぜ、早く歸つては惡いかいの。

缺皿　何の惡いことがござりませう。

渡鳥　ようお歸りなされましたわいなア。

片も　あんまりよい事も、あるまいわいなう。

ト烟草を呑みながら、じろ／＼あたりを見る、缺皿渡鳥おづ／＼思入、脚平おれは知らぬといふ思入。

缺皿　コレ缺皿、芝山へ立つ時に、言ひ付け置いた私の小袖、大方出來たであらうの。

缺皿　ハイ、あしたお歸りなされますと承はりましたゆゑ、お歸り迄に仕立てませうと存じまして、まだ少し殘つて居りますわいなア。

片も　なに、まだあの小袖が出來ぬ、何をして遊んで居たのぢや。

缺皿　イエ遊んでは居りませぬわいなア。

腰○　なんぼあなたがお手利でも、夏と違うて日短ゆゑ、

腰△　思うた程はお仕事も、出來ますまいわいなア。

片も　エヽやかましい、そち達の知つた事ではない、日が短くなれば、夜が長くなるわ。寢ずに仕事を精出せば、何出來ぬ事があるものだ。（ト思入あつて、）コレ缺皿、此の屛風はどうしたのぢや。

缺皿　サア、それは。（ト脚平へ思入、脚平おれは知らぬといふ思入。）

片も　イヤサ、誰に斷つて爰へ立てたのだ。

缺皿　サア、それは。

渡鳥　アモシ、これは斯樣でござりまする。
脚平　コレ、おれは知らぬぞ〳〵。
渡鳥　お隣りのお孃樣が、お遊びにお出でなされましたゆゑ壁の破れをふせぐため、お屛風を立てまし
　てござりまする。
片も　後ぐらい言譯ながら、屛風はそれにもしておかうが、してその夜具はどうしたのぢや。
缺皿　サア、これは。
片も　コリヤ客夜具ではないか、斷りなしに此樣な、きたない所へ何で敷いた、イヤサ、誰がこれを着
　てねたのぢや。
缺皿　サア。
片も　そちが着たのか、誰ぞに着せたか。（ト缺皿うつむき居る。）エヽ、きり〳〵と言はぬかい。
　　ト持ち居る煙管で缺皿をくらはす。ばた〳〵になり、紅皿振袖なりにて出來り、片もひを留め、
紅皿　アヽモシ母樣、まア〳〵お待ち下さりませいなア。
片も　そちは紅皿、何で留めるのぢや。
紅皿　サア、其の客夜具は私が、お貸し申しましたわいなア。

腰○　スリヤ缺皿様へ此のお夜具を。

腰△　あなたがお貸しなされましたか。

片も　何でそちが貸したのぢや。

紅皿　サア、芝山の仁王様へ、立ちます其の朝姉さんが、風氣で寒いとおつしやるゆゑ、重らぬやうに客夜具を、出してお貸し申しました、母様へ申さぬは、私の不調法、おゆるしなされて下さりませいな。

片も　やゝともするとそなたが挨拶、あれが事に口出ししやるな。此の客夜具を持ち出したは。（ト渡鳥へ思入あつて、）脚平。

脚平　エヽ、私ではござりませぬ。

片も　誰もそちだといひはせぬに。

脚平　ヘエ。（ト思入、左近の草履へこなしあつて、）

片も　コレ、その履物を持つて來や。

脚平　ヘイ、これでござりまするか。（ト左近の草履をとつて出す。）

片も　ハテ、見なれぬ男の草履、コリヤ誰のはき物ぢや。

缺皿　サア、だれのはき物でござりまするか。
片も　渡鳥、そちが知つて居ようの。
渡鳥　イエ〳〵、私も存じませぬ。
片も　なに、知らぬ事があるものか、女ばかりの此の部屋に、男の草履のあつたが怪しい、サア、誰が草履だ。

ト缺皿の額を草履にてつく。

缺皿　サア、その草履は。
片も　誰の草履だか早く言はぬか。（ト草履で缺皿を打つ、紅皿とめて、）
紅皿　アモシ母様、まア〳〵お待ちなされませなア。
腰○　お腹もお立ちなされませうが。
腰△　草履のどろが落ちますわいなア。
片も　鏡山の其後で、草履で打つもしつこいが、こつちは隔てぬ心でも、かくし立する繼子根性、憎うて憎うてならぬわいなう。（ト又草履で打つを、紅皿缺皿をかばひ留めながら、）
紅皿　義理ある中の姉さんが、打たれるのを見てはゐられませぬ、打たでならぬ事ならば、私を打つて

姉さんを、お許しなされて下さりませいなア。

片も　エヽ、又しても〳〵、入らぬ留だてするなといふに。

紅皿　それぢやといふて。

缺皿　アコレ妹、打たるゝのも此身の越度、そなたは退いて居やいの。

片も　おゝ越度があるゆゑ折檻するのぢや。(ト紅皿をかきのけ、缺皿又打たうとするを、渡鳥留めて、)

渡鳥　アモシ御新造様、そりや脚平殿の草履でござりまする。

脚平　エヽめつぽふかいな、なんでおれが。

渡鳥　サア、おまへの草履で、ござんせうがな。(ト渡鳥頼む思入、脚平こなしあつて、)

脚平　イヤ知らねえ〳〵、なにおれが知るものか。日頃情があるならば、背負つてやるめえものでもねえが、情知らずに義理はねえ、何おれが知るものか。

片も　親の留守を幸ひに、男を引込むならずもの、其あいずりは渡鳥め、夜具も屏風も持ち出したは、正しくおのれが仕業ぢやな。

渡鳥　イエ〳〵私ではござりませぬ、夜具も屏風も持ち出しましたは、脚平殿でござりますわいなア。

脚平　コレ〳〵、又してもそんな言掛け、おらア知らねえ知らねえぞ。

渡鳥　何の知らぬことがあらう、お前が持つて來たくせに。
脚平　顏に似合はずまざ〳〵と、よくそんな事が言はれたものだ。
渡鳥　イエ、私よりお前こそ。
片も　エヽやかましい、靜にせぬか。
渡鳥　それぢやと申して。
片も　エヽだまつてゐぬか。（ト渡鳥を草履にて打ち、）コレ、缺皿爰へ來や。
缺皿　ハイ。
片も　エヽ、來やといふに。
缺皿　ハイ。（ト誂への合方になり、缺皿おづ〳〵と前へ出る。）
片も　コレ缺皿、ふだんから此の母が、口やかましく小言をいふは、そちが身性が惡いから、それと知らざる世間の口、ヤレ繼母の邪險のと、後ろ指をさゝれるのも、みんなおのれが心がら、たまたま二日か三日の留守に、男を引込み寢るなぞとは、言はうやうない不屆き者、サア男は何者、それを言や。
缺皿　何で母樣のお留守に、其樣な事いたしませうぞいなア。

片も　なに、せぬ事があるものか、痛いめせぬ内早う言や。

缺皿　それぢやと申して。

片も　どうあつても言はれぬか。（ト引附け、口の端をつねる。）

缺皿　アイタヽヽ。

片も　サア、痛くば早く言つてしまや。（ト又つねり上げる。）

缺皿　アイタヽヽ。（ト紅皿片もひを留めて、）

紅皿　アモシ母様、姉様に限つて其様な事のないは知れてある。モウよいかげんになされませいなア。

片も　エヽ又しても入らぬ義理立、のいて居や。

紅皿　イエ／＼、のいては居られぬわいなア。

片も　エヽ、のけといつたらのかぬかいなう。（ト紅皿をつきたふす。腰元介抱なし、）

腰元　おあぶなうござりますわいなア。（ト片もひ又缺皿を引きつけ、）

片も　サア、其の相手を言はぬか。（トつねる。）これでも言はぬか／＼、エヽきり／＼と言はぬかい。

ト缺皿此の内よろしく思入、渡鳥そばにて留めたきこなし。

脚平　コレ／＼渡鳥殿、おぬしが見て居る所ぢやあるめえ、早く行つて缺皿様を、お助け申したがいゝ

ぢやねえか。

渡鳥　アモシ、それをいつては。（ト留めて押へて、）

脚平　言つて悪いもあるものか、おぬしが、言はざアおれが言はうか。

片も　オヽ知つて居るなら、早く言やれ。

脚平　ヘイ、其の男といふは、正木の御子息、左近太郎樣でござります。

片も　エヽ、あの左近太郎殿と、ムウ。（トきつと思入。）

缺皿　ハア。（ト泣伏す。）

渡鳥　アヽ申し、そりや僞りでござりますわいなア。

脚平　常が常ゆゑ誰が聞いても、おれが嘘をつくやうだが、慥な證據があつていふのだ。

渡鳥　なに、證據とは。

脚平　これが證據でござりまする。（ト幕明きの文を出す。渡鳥ぎつくり思入、片もひ取上げて、）

片も　なに、「楓樣參る、左近より。」

脚平　なんと證據でござりませうが。

片も　ムヽ、里見の家の執權職、正木氏の子息ゆゑ、紅皿へと、イヤサ、缺皿めが不義せしからは、

こりや此まゝにはしておかれぬ。きつと仕置をせねばならぬ。

缺皿　エヽ。（トふるへ居る。）

紅皿　又かとお叱りもござりませうが、靈驗あらたな仁王樣へ、お參りに行つた歸りなれば、何も後生と思召し、けふの所は此まゝに。

腰〇　數なりませぬ、私共迄。

腰△　とも〲お詫をいたしますれば。

三人　おゆるしなされて下さりませいなァ。

片も　えゝそち達の知つたことではない、母屋に誰も居まいから、二人を連れて番をしやれ。

紅皿　ではござりませうが。

片も　エヽ、行けといふに。（トきつといふ。）

紅皿　ハイ。

　　ト合方になり、紅皿是非なく缺皿へ心を殘し、腰元付添ひ、上手屋體へはひる。渡鳥思入あつて、

渡鳥　かくなりまする上からは、包まず申上げますが、左近樣から缺皿樣へ、お文が參りましたれど、手にもおとりなされねば、缺皿樣は御存じない事、皆私が科なれば、どうなりとなされまして、

片も　お孃様の御折檻は、お許しなされて下さりませいなア。

脚平　イヤ〳〵、たとひ何と言はうとも、不義をひろいだ缺皿め、きつと仕置をせねばならぬ、覺悟して待つて居よ。（ト缺皿をきつと見ろ、缺皿ははツとふろへ居ろ。）さるにても、合點の行かぬは、どういふ緣で左近殿から。

片も　イヱ、これはかやうでござりまする、正木の若黨眞吉と、此渡鳥がちよくり合ひ、それが緣にて此の取持。

脚平　スリヤ眞吉と渡鳥めは。

片も　ヘイ、不義をいたしてをりまする。

脚平　アコレ、ようも〳〵其樣な事を。

渡鳥　言はねえでどうするものだ、可愛がられぬ意趣ばらしに、憎まれ口を思入れきくのだ。

脚平　オヽ、脚平よく言つた、それで樣子がさらりと分かつた。なんにしろ仕置をするに、爰では隣を憚るゆゑ、缺皿めを庭へつれ行き、しばり上げておいてくりやれ。

片も　畏りましてござりまする。シテ、此の渡鳥めは。

脚平　我思ふ仔細もあれば、渡鳥めは爰へおきやれ。

脚平　左様なれば缺皿様を。
片も　そちへしかと預けたぞ。
脚平　ハツ、サアお立ちなさい。
缺皿　何事も此身の罪科、どの樣にもなされまして、其代り渡鳥を、お助けなされて下さりませいなア。
渡鳥　エヽ勿體ない事おつしやりませ、私こそどの樣にも。
片も　其の義理立はするには及ばぬ、かたみうらみのないやうに、今に仕置をしてやるぞ。
缺皿　どうぞ此身を。
渡鳥　イエ私を。
片も　エヽ、やかましい、少しも早く。
脚平　心得ました。（ト缺皿を引立てる。）
缺皿　そんなら渡鳥。
渡鳥　缺皿樣。
缺皿　もしや、これが。

渡鳥　エヽ、（ト兩人顏を見合せ、よろしく思入。）
脚平　サアきり〳〵と。（ト中をへだてる。）
缺皿　ハア。（ト泣かうとして袖にて押へる。）
脚平　お立ちなされい。
　　ト三重模樣の合方にて、缺皿を脚手引立て下手へはひる、渡鳥行かうとするを、片もひ引きとめて、
片も　コレ渡鳥、そちものがれぬ同罪ながら、許してやるも此方に一つの。
渡鳥　エヽ。
片も　まア、爰へ來やいなう。（トやさしくいふ。）
渡鳥　ハアイ。（ト誂への合方になり、渡鳥そばへ來る、片もひ緣ばなへ出。）
片も　正木の若黨眞吉と、そなたがかたらひ居る事を、今日の今迄知らなんだが、さういふ中とはよい手づる、けふの罪も許してやるが、此の片もひが賴みをば、何と聞いてはくれまいか。
　　ト片もひやさしくいふ。
渡鳥　其お賴みとおつしやるは、どの樣な事か存じませぬが、此の身に叶ひし事ならば。
片も　聞いてくりやるか。

渡鳥　ハイ、お聞き申さいで、何といたしませう。
片も　早速の承知忝い、そなたへ頼みは外でもない、其眞吉と相談なし、わしが娘の紅皿へ、左近殿を取持つてくりやれ。
渡鳥　エヽ、スリヤ、左近樣を紅皿樣へ。
片も　其のおどろきは尤もぢやが、とうから娘の聟にしたく、靈驗あらたな仁王樣へ、願がけに參つたも、此緣談を結ばうため、かういふ事になつたのも、仁王尊の御利益ならん、そち達二人のはたらきで、娘の聟にしてくりやれ。
渡鳥　ハイ、畏りましてはござりまするが、左近樣のお心が。
片も　サア姉に劣りし妹ゆゑ、所詮氣には入るまいが、そこは二人が取持で、色よい返事をきかしてくりやれ。此の緣談が調はゞ、そちも眞吉と、夫婦にして、一生貢いでやらうわいの、それも叶はぬ其時は、主人の目をばかすめし罪科、事によらば命にも、イヤサ、命にかけて此の戀を、どうぞ叶へてくりやいの。
渡鳥　折角のお頼みゆゑ、命にかけて私が、お取持いたしませう、其代りには缺皿樣を。
片も　おゝ魚心ありや水心、折檻なすとも一通り、手あらい事はせぬわいの。

渡鳥　どうぞあなたのお情にて。

片も　許す氣なれど叶はぬ時は、缺皿はいふに及ばず、渡鳥そちも、

渡鳥　エヽ。

片も　まツこのやうに。

ト持つて居るきせるにて、渡鳥を打つ。

渡鳥　コリヤ私を。（ト詰よる、片もひ氣をかへて、）

片も　アコレ、ツイ手がそれて、そなたを打つたが、どこも痛みは。（ト煙管をトンとつくを、木の頭）せぬかいなう。

とやさしくいふ。此の見得よろしく、唄にて、

幕

四幕目　繼橋庭先の場

〔役名〕——繼橋下部脚平、洗濯婆おつめ、繼橋の妻片もひ、娘缺皿。〕

（繼橋庭先の場）——本舞臺三間の間上へ寄せて九尺の屋體、こけら葺の半庇、一間の臂掛窓、三尺

の戸袋、窓下共さゝらこじたみ、窓に伊豫簀をおろし、つまの方三尺の上り口、踏段石、障子あけて向う銀襖、上の方九尺十藏の前側、いつもの所技折戸、下の方崩れたる竹垣、上手よき所に丸太造りの馬つなぎ、柳の立木、日覆より同じく釣枝、霞付の月をおろし、總て繼橋庭内の體、爰に缺皿を繩にてしばり、馬つなぎへくゝり付け、下手にむしろを敷き、脚平今戸焼の火鉢へ杉の葉をくべ蚊いぶしをして居ることよろしく。時の鐘、床の三重にて幕明く。とすぐ床の上るりになる。

〽行空の月はあれども雨もちて、雲足早き秋のくせ、涙の雨のはら〳〵と、身にふりかゝる缺皿が、難儀しがらむしばり繩情しらずの脚平が、張番役にそばへより。

と此内時の鐘、缺皿うつむき居る、脚平煙草を呑みながら、

脚平 酒の氣がさめたせるか、夜風がひや〳〵身にしみる、まだかう早く今ツから、寒くなる時分ぢやねえが、今年は閏があつたので、早く寒くなりさうだ、然し蚊の引込まねえ所を見ると、ほんの時候でもねえか知らぬ。モシ缺皿樣、さぞ蚊がくつてかゆからうが、もうちつとだ辛抱しなせえ、今に爰へ片もひ樣がござれば、むごい折檻に、痛い目すると忘れます。

〽いふに缺皿泣き伏して、涙に重き顔を上げ、(ト缺皿顔を上げ思入、誂への合方、虫の音になり)

缺皿 何の蚊ぐらゐ厭はうぞいの、紛失なせしお家の重寶、小月形の一腰を、詮議の爲に父樣が、御出

立なされてより、三年此方あけくれに、繼しき仲の母樣が、やゝともすると打叩き、それも此身が足らはぬゆゑと、思へど切なさ悲しさに、これ迄死なうと思うたは、幾度なるか知れぬわいなう、此の苦しみをするよりも、いつそ此蚊に責められて、わしや死にたい、死にたいわいなう。

〽身をふるはして打ちなげけば、背をなでさすり脚平が、心に一もつ猫なで聲、

と缺皿縛られしまゝ、よろしく思入、脚平そばへより、背中をさすりながら。

脚平 オヽ御尤もだ〳〵、さう思召すは無理ではないが、死なうといふは惡いお心、辛くあたりし繼親の、片もひ樣へ面當に、なるにもいたせ大恩ある、實の親御の幸太夫樣へ、それでは不孝になりませう、たとひ一日半日でも、御孝行をなされずば、親御へ義理がすみますまい。

缺皿 サアそれ故に父樣の、目出度くおかへりなさるゝ迄と、此身にあざのたえぬのを、堪へ〳〵て今日迄は、生き長らへて居たけれど、どうで今宵責殺され、此世で逢はれぬ上からは、少しも早う死にたいわいなう。

〽死ぬる覺悟に脚平が、あたりを窺ひ小聲になり、（ト脚平あたりを窺ひて、）

脚平 サア死なうと覺悟なされたら、此家をばお逃げなされませ、繩をといて上げますから、いづれへ

なりともしばしの内、かげをばおかくしなされませ。

缺皿　そりや嬉しいがそれでは又、親を捨てしと母樣の、お腹立が猶一倍。

脚平　腹を立たうが背を立たうが、お前樣には敵同然、義理もへちまもござりませぬ、實の親御の旦那樣に、お逢ひなさるを樂しみに、妨げなき内少しも早く、此の場をお逃げなされませ。

缺皿　そんならそなたが繩をとき、わしを逃してくりやるかいの。

脚平　へイ座なりをいふが當世ゆゑ、片もひ樣に從うて、憎まれ口は利くものゝ、根が正直な此の脚平、罰があたると言はれるより、ほめられたうござりまする。

〽忠義顏をば誠と思ひ、

缺皿　アヽ何にも言はぬ忝い、善は急げといふからは、早う逃してくりやいの。

脚平　アヽお逃し申すは申しますが、あなたを逃した其後で、どんな目に逢はうも知れませぬ、それを承知でするからは、お禮が受けたうござりまする。

缺皿　オヽ、その禮はなんなりと、そなたにしたいものなれど、今というては心にまかせぬ、後できつとしようわいの。

脚平　イエ、後と言はずに只今お禮を。

缺皿　それぢやといふて今爰には。

脚平　ナニ、ない事がござりませう。

〽いひつゝずつと寄り添ふを、身をひねりて振拂ひ、（ト脚平缺皿に寄添ふを振りはらひ。）

缺皿　エヽ、何をしやるぞいなア。

脚平　何をするとは知れた事、不首尾をくふのを合點で、繩をといて逃すからは、たゞぢやいやだ、お禮次第だ。

缺皿　エヽ常に替つた親切な事をいふのは心得ずと、思ふに違はず現在の、主に向つて此てんごふ、言はうやうない人でなしめが。

脚平　主であらうが家來であらうが、戀に上下のへだてはねえ、殊にやあどうで責殺され、今に命をとられる體、後生をすりや其の功力で、來世は必らず極樂往生、念佛講に逢つたと思ひ、珠數の玉なば數とりに、たんのうさして下さりませ。

〽戀に迷ひて主從の禮儀も忘れ、ぼんなうの犬におとりし脚平に、缺皿は口惜しく。

ト脚平缺皿の袖をとらへ思入、缺皿口をしき思入にて。

缺皿　エヽ情ないおのれらに、此樣な事言はれるも、此身が孤兒同然ゆゑ。

〽別れし生みの母樣は、不義の疑ひ受けたまひ、身の言譯に果敢なくも、刃に伏して非業な御最期。

なげきの中へ二度添の片もひ樣が繼子とて楓とよびし其名さへ、いつしか事も缺皿といやしめられてあけくれに、軒端傾きかべ落ちし、いぶせき小屋に只一人。

〽心も細きともしびに、千種にすだく蟲もろ共、泣きあかせしはいく度か。

此身のたよりと渡鳥が、勸めに戀のかけはしを、わたりて今日の此の難儀。

〽親の目顏を忍びたる身の罪科といひながら、現在家來のそち迄に。

卑しめらるゝ口惜しさ、早う死にたい、死にたいわいなう。

〽操の松も照り蔦にしめからまるゝしばり繩、身もだえなして泣沈むを、脚平は抱きおこし、

ト此内缺皿よろしくあつて立上り、行かうとして繩にひかれ、行かれぬ思入よろしくあつて、ワアと泣伏すを、脚平抱きおこし、

脚平　その死ぬ／＼な上聲で、言はしてお禮が聞きたいのだ。

〽傍若無人に抱きつけば、アレエ／＼と缺皿は身をもだえて泣きさけぶ、聲にこなたの一間

より、

ト脚平缺皿に抱き付き、缺皿身をもだえて振拂ひ、逃げようとするを、脚平繩を引ばる、これにて缺皿どうとなる、脚平とらへる。此時正面いよすの内にて

片も　エヽかしましい、静かにしやいなう。

脚平　ヤ、あの聲は御新造様。

〽聲にびつくり脚平があわてふためく後の方老婆を伽に片もひがつかへし肩をもませながら

ト此内脚平下手につくばひそしらぬふりにて居る。後ろの窓のよし簾をまき上げる、内に片もひ煙管を杖につき、おつめに肩を揉ませ居る、そばに短檠をともしある。

片も　脚平、缺皿めは。

脚平　しばり上げて下郎めが、張番いたして居りまする。

〽繩のゆひめをムヽと取り、突き出すをじろりと見やり。

ト脚平缺皿が繩をとり、片もひの前へつき出す。

片も　して左近殿とちゝくり合ひしを、白状なしたか。

脚平　ヘイ、問ふに落ちず語るに落つると、我身の上の愚痴話しに、今白状いたしました。

〽いふに窓より顔さし出し、

ト片もひおつめに左りの手を揉ませ乍ら、窓へ臂をかけ顔を出し、

片も　コレ缺皿、おのれは〳〵憎い奴だ、よくも此の母の目をぬすみ、大それたことをいたしたな。

缺皿　ハア。

〽身の言譯も泣く涙、さしうつむけば、（ト缺皿ワアとうつむく。）

片も　コレ、なんでそちはうつむくのだ、顔を上げやれ。

缺皿　ハイ。

片も　エヽ、上げろといふに。

脚平　それ、上げろとおつしやるわ。（ト脚平缺皿が襟を持ち顔を上げさせる。）

片も　アレおつめ見やれ、十人並にすぐれた器量、うつくしい生れだが、母を母とも思はぬ、恐ろしい奴ではないか。

つめ　それもあなたがお心好しゆゑ、糸切齒の白いのも、かういふお子には見せられませぬ、きつとおしつけなされねば、あなたが人に笑はれまする。

片も　サアそれ故心を直さうと、仕度くもない折檻するのだ。（ト缺皿泣き居るを見て、）コレ、何もそんな

にめろ〳〵と未練らしく泣くには及ばぬ、年端も行かぬ身の上で、男をこしらへ抱寝をする、大それた根性で、なんの泣く事があるものだ、そちよりおれが泣きたいわ、明日にも夫素太夫様が旅から戻つてござつたら、三年此方育てたる、自慢をせうと思ひの外、娘は男をこしらへて、疵物になりましたと、義理ある仲にて言はれうか、よくも〳〵此やうな、大それたこといたしたな。

缺皿　ふとせし心の迷ひより、あなたのお目を掠めまして、今宵正禾の左近様と、忍び逢ひしは此身の咎。どの樣にもなされまして、お許しなされて下さりませ。

〽お慈悲々々と頼むにぞ、

片も　オヽ其身の科と知るならば、此のまゝ許してやらうから、思ひきつてしまやいなう。

缺皿　思ひ切れとおつしやりますは。

片も　忍び逢うたる左近殿を。

缺皿　エヽ。

脚平　合せ物は放れ物、ない昔とあきらめて、思ひきつてしまはつしやれ。

〽思ひきれとの一言に、是非も涙をふり拂ひ、

缺皿　親のゆるさぬ不義いたづら。
〽思ひきれとのお詞がなうても切れねばならねども、假令一夜の契りでも、二世も三世も夫ぞと思ひし正木の左近樣、どうして思ひきられませう。
〽此身を生みの母樣に別れて此方あなたのお世話、御恩も送らず濟まねども、戀し殿御に別るゝより、いつそ殺して下さりませ、それが御慈悲と缺皿が合せたい手もしばり繩、心で拜むいぢらしさ。見る片もひは倘いらだち、

ト此内缺皿しばられしまゝよろしく思入、片もひ思入あつて、

片も　オヽ思ひきられぬとはよくいつた、そんならいゝわと其まゝに、許してやつたらよからうが、それではおのれが爲にならぬ、曲つた心を直すのが、親となつたおれが役、仕置は蛇の生殺し、生さず殺さず責めさいなみ、思ひきらせにやおかぬぞよ。
缺皿　ハア。（ト缺皿なく）
片も　泣きさへすりやいゝかと思つて、其空淚の面の憎さ。それ馬つなぎへつるし上げい。
脚平　畏りました。

〽主が主なら家来迄慈悲も情もあら縄にて、しばりしまゝにさゝへある、馬つなぎへつるし上げ、

ト脚平缺皿をしばりし繩を、馬繋ぎの上へかけ、缺皿をつり上げる。

片も　サア、白状せずばぶち据い。（ト脚平下手の割竹をとつて、）

脚平　ハヽ、幸ひ爰に夜番の割竹、これで御見舞申さうか。

〽割竹携へ脚平が、立向ひしがたほやかな、姿に手ひどく打兼ねて、

一ツ二ツ三ツ。

〽一ツ二ツを呼ぶ聲より、なまるこぶしを見てとりて、（ト脚平そつと打つ。）

片も　ヤア手ぬるい〳〵、つゞけ打ちに打ちすゐい。

脚平　ハツ、主人の仰せに仕方がねえ、罰があたると言はれるは百も承知してゐるが、打たにやあならぬ役廻り、これから手ひどく打ちますから、眞平御免下さりませ。

〽三方四方へ辭儀をなし五尺あまりの割竹にて、息をもつかず廻し打ち、痛さくるしさ缺皿がみじめ綠の黑かみも亂れて顏へかゝる目に逢ふはいかなる因果ぞと、かこち淚に許してといふも霜夜のきり〴〵す、なく音はいとゞあはれなり。

ト此内脚平割竹にて缺皿を打つ、缺皿苦しき思入よろしくあつて、

缺皿　どうぞ許して下さりませいなア。

片も　あゝ許してやるから、思ひきるか。

缺皿　サア、それは。

片も　思ひきるか。

缺皿　サア、

片も　サア、

兩人　サア〳〵〳〵。

片も　思ひきる氣であらうな。

缺皿　サア、これぱかりは。

片も　オヽ、きらぬといふのか。

缺皿　ハア。（ト缺皿泣く。）

つめ　イヤ顏に似合はぬしぶといお子だ、コリャ御新造樣、あなた樣がお手をおろさにやいけませぬぜ。

片も　オヽ思ひきつたと言はぬからは、憎まれるのも合點で、折檻するも親の役、どれ手ひどくせずば

なるまいか。

〽繼子にくみの片もひが庭へおり立ち缺皿を、馬つなぎより引きおろし、たぶさつかんで顏を上げ、

ト片もひおつめ付添ひ、下手庭下駄をはき、平舞臺へ來りおろせといふ思入、脚平手得缺皿をおろす、片もひたぶさを掴み引きおこす、これより床の合方、虫の音になり、

片も　繼子憎みと言はれるが、いやさにふだん仕置もせず、甘くなせしが我があやまり、實の娘の紅皿へ手本になれば思ひきると、いふ迄は痛い目をさす程に、必ずおれを恨むなよ、みんなおのれが心柄だぞ。（トたぶさを持つたまゝ缺皿をこづき、）エヽ何だ、人が異見を言つてゐるに、空耳を走らしやがつて、よく耳を明けて聞きやアがれ、見れば見る程、面の憎い奴だなア。

〽手に持つのべの煙管にて、目鼻も分かずめつた打ち、身の苦しさに缺皿が縛られしまゝ逃げ出すを、脚平すかさず引きもどし、

ト片もひきせるで打つ、缺皿手の下をくゞりひよろ〳〵し乍ら下手へ逃げて行くを、脚平繩のはしを持つて手ひどく引く、これにて缺皿どうと倒れしまゝ、脚手に引きずられる、脚平引きおこして、

脚平　これだから言はねえことか、此のくるしみをするよりはと、さつき言つたを聞かねえから、こん

な目に逢はにやならねえ。

片も　コレ脚平、うごかぬ樣に割竹で、こじ上げて居てくりやれ。

脚平　心得ました。

〽繩の結目へ脚平が、割竹さし込みこじ上げて、

ト わり竹にて缺皿をこじあげ、

今に此手が折れてしまふぞ。

缺皿　ハア。（と缺皿くろしき思入。）

片も　ドレ、これからは此母が、繼子の折檻してくれう。

〽言ひつゝ片もひ懷ろより、束ねし針を取り出し、

ト片もひ懷より束ねし針を出す。

つめ　モシ、御新造樣、そりや何でござりまする。

片も　オヽ、こりや針の束ねたのぢや、これで體をついてやるのぢや。

つめ　成程これはよい責道具、これで突かれた事ならば、死ぬ氣づかひはござりませぬが、さぞ痛いことでござりませう。

片も　ドレ、ちく〳〵とついてやらうか。
　〽片もひそばへさしよつて、
コレ何も其樣にびく〳〵する事はない、高が針で突くばかりだ。此のうつくしい顏を以て、左近殿とちゝくり合つたか。
　ト針で顏を突く、缺皿アイタ、、、と苦しむ。脚平竹にてこじ上げ居る。
オヽ痛からう〳〵、初めの內は痛いものだ。
つめ　今にだん〳〵よくなります。
脚平　笑ひ本ぢやァあるめえし。
片も　サ、此の手でしつかり抱きしめたか。（トつく。）
缺皿　ヒイー。
片も　イヤサ、此の足でからんだか。
　〽急所もわかずめつたつき、痛さ苦しさ悲しさを、こらへ〳〵て喰ひしばる齒の根の音は車井の、きしる音にぞ異ならず、
　ト片もひ方々を突く、其度每に缺皿ヒイ〳〵と苦しき思入。

サアどうだ、思ひきるか。

缺皿　チエヽ。

片も　泣いて居ては譯が分からぬ、思ひきるか、思ひきらぬか。

〽いへど悔しく缺皿は、なんのいらへも泣くばかり、

人にばかり物言はせ、おのれは啞かつんぼうか。

〽たぶさつかんで引きたふす折から庭の草むらより、はひ出る蛇に片もひおどろき、つきたふして飛びのけば、

ト片もひ缺皿を引きたふす。此時風音になり、下手よりさしがれの誂への蛇出ろ、片もひびつくりなし、缺皿をつきたふし飛びのく。

つめ　御新造様、どうなされました。

片も　それ、そこへ蛇が出たわいの。

つめ　何へびが出ました。（ト蛇をとらへ、）成程これは大きな蛇だ。

片も　コレおつめ、こなた蛇はこはくないか。

つめ　ハイ私は蛇とは友達、若い折は盛り場へ、蛇つかひに出ましたれば、へびは何とも思ひませぬ。

脚平　それぢやあこはくねえ筈だ。
片も　丁度幸ひ、其の蛇で。
〽あごにて責めよと教ゆれば、おつめ婆は心得顔、
ト片もひおつめに思入、おつめ呑込み缺皿のそばへ行き、
つめ　モシお孃樣、思ひ切つたとおつしやらぬと、これを前へ入れますぞえ。
〽目先へつき出す靑大將、見るより缺皿たえ入るばかり、
ト おつめ蛇を缺皿の鼻の先へつき出す、缺皿びつくりなし、ふるへながら、
缺皿　アコレ、そればかりは許してくりやいの。
片も　それがこはくば左近どのを、思切つたと早く言やれ。
缺皿　そんならどうでも私に。
つめ　思ひきつたとおつしやらねば、それ〳〵、蛇がからまりますぞ。
〽さし出す蛇は缺皿が胸のあたりへ這ひかゝれば、膝もわな〳〵缺皿が、逃出すを追ひかけて顏をなでればたまりえず、うんとばかりに氣を失ひ、尻邊にどうとたふるゝを、脚平あわて抱きおこし、

ト缺皿逃げようとするを、おつめ蛇をさし付ける、いろ〳〵あつて缺皿うんと氣絶なす、脚平抱きおこし、

脚平　ヤア、こりや大變、目を廻したのだ。
片も呼び生けて、水でも呑ませろ。
脚平　合點でござります。
つめ　こりやとんだ事をいたしました、缺皿樣々々。
ト呼ばゝる、脚平手水鉢の水を柄杓にて汲み來り、
脚平　こいつア水が通りさうもねえわえ。
つめ　通らずば、口うつしにしなせえな。
脚平　なに、口うつしにしろ、そいつは有難え。（ト合方にて、脚平うれしき思入にて、水を呑ませ、）缺皿樣々々。
つめ　お孃樣々々。
〽呼べど叫べど氣が附かねば、
脚平　こいつア大變、ごねたか知らん。

片も　イヤ〳〵、たゞ驚いて引付けたのだ。どこかそこらを打つて見や。
脚平　イヤ、こいつア有卦に入つたわえ。
〽よだれ流して抱きおこし、めつたむせうに二つ三つ打てば忽ち息吹返し、
ト脚平缺皿を抱起し、二つ三つ打つ、これにて缺皿うんと心付き、
缺皿　モウこれ程になされたら、堪忍して下さりませいなア。
〽わッとばかりに泣きふせば、
つめ　ヤ、こりや責道具の蛇がどこへか。
片も　それ、逃がさぬやうに。
つめ　心得ました。
〽そこよこゝよとお爪婆、蛇を追ひかけ入りにける。
トさしがねの蛇下手へ逃げて行くを、おつめ追ひかけ下手へはひる。
〽後に片もひといきをつき、
片も　コレ缺皿、これ程に折檻しても、親の言ふ事聞かぬのぢやナ。
缺皿　サア、聞かぬではなけれども。

片も　いけ死太い女郎めだ、いつその事一思ひに。
脚平　イヤばらすは造作もねえけれど、人の口には戸は立てられず、あなたのお身に拘はりませう。
片も　いか樣そなたのいふ通り、此のまゝ雜藏の内へ入れ置き、三度の食を食はせずにおいたらすぐに死ぬであらう。
脚平　責め疲れて居りますれば、三日もおいたらごねませう。
片も　しかし渡鳥が目を忍び、食を送るに違ひない、土藏の番は其方しやれ。
脚平　畏つてござりまする。
〽しめし合する主從が、非道の詞に口惜しく、
缺皿　すりやこれ程にさいなみても、まだあきたらいで藏へ入れ、三度の食迄絶たうとは、あまりといへば情ない。
片も　ムヽ、情ないとは此母を、そちや邪險だといふのだな。
缺皿　何のさうでは、ござりませねど。
片も　イヤさうだ〳〵、誠の人にしてやらうと、折檻なすも親の慈悲、それをさうとも思はずに、おれを邪險といふからは、邪險の折檻せにやおかぬ。

缺皿　どうで此身はない命、お腹の癒るやうどうなりと。

片も　アレ親を親とも思はずに、どうともせいとはふてがつて、うぬ、どうしたら腹が癒やう。

ヘたぶさつかんで引廻す姿も鬼の片もひに、牛は牛づれ牛頭馬頭の脚平そばから打叩き、阿鼻焦熱の苛責にも、まさる繼子の非道の折檻其身の末も白雪の八寒地獄大紅連報いは廻る火の車、

ト此內片もひたぶさを持つて舞臺を引きずる、脚平後より叩き廻り、手をはなし蹴たふす、缺皿起き上り、下手へ逃げて行くを脚平繩のはしをとり引戾し、又行きかけるを引きもどしさいなむ、缺皿うつとりとなる、此時本釣鐘を打込む、これにて缺皿目をあき、ほろりと思入、片もひ脚平も思入あつて、

片も　最早夜明に程近し。

脚平　となり近所の起きぬ內、

片も　雜物藏へ

脚平　心得ました。

ヘ繩先とつて引きたつれば、聲かれぐに缺皿が、

ト誂への凄き合方、風の音にて、缺皿恨めしさうに、

缺皿　早う殺して下さりませいなァ。（ト片もひきつと見る。）

片も　何だ、おれをにらみやァがつて、コレ、親をにらむと藪にら目になるぞ。

ト缺皿の顔へ痰をはきかける。

缺皿　コリャまたあんまり。

片も　コレ、きり〱と。

脚平　うしやァがれ。

〽燈火もなき雑藏の、黒闇地獄へ獄卒に引かれ〱て。

ト脚平繩を肩へかけて、缺皿を引立てる、缺皿引かれ乍ら片もひをうらめし相に見込む、片もひはこれを見てにつたりと肩で笑ふ、此模様本釣鐘、風の音三重にて

幕

五幕目

中仙道烏川の場

同　渡船の場

〔役名――天目須之助、繼橋素太夫、駕籠舁いぼ藏、同壘太、其他。〕

（中仙道烏川の場）――本舞臺三間の小高き草土手、後ろ淺黃幕、一面の藪疊、上手に御判行、下手柳の大樹、日覆より同じく釣枝、舞臺前柵付きの浪板、總て烏川堤の模樣、在鄉唄、浪の音にて幕明く。と下手より、○△の兩人、釣竿をかつぎびくを持ち、釣師のなりにて出來り。

○　今日ぐれえい丶日並はねえぢやねえか。

△　それだから出かけて來たが、けふは一番巢をかへて、浪よけから六兵衛新田の後ろを、せぐつて見ようぢやねえか。

○　そりやい丶思ひ付だ、此間も溝際の權六が、すてきに餌づきがい丶と言つたから、漁があるに違えねえ。

△　今が丁度い丶汐時だ、出かけようぢやねえか。

○　そりやい丶が、精のつくやうに、勘六酒屋で杯一どうだ。

△　今出がけにやつたぢやねえか。

○　ありや歩いた內にさめてしまつた。

△　仕方がねえ、これもつき合だ。

○　其通り〳〵、おれがゑいさは酒でつれるのさ。

△　むだを言はずと出かけようか。

○　サア、行きやせう。

トやはり浪の音にて、○△は土手へはひる。驛路馬士唄になり、花道より駕籠やいぼ藏、墨太、駕籠舁きの拵へにて四手駕籠を擔ぎ、此の内に天目須之助、黒の着流し大小浪人のこしらへにて誂への井筒を前に置き、垂を上げ出來り、花道にて、

天目　こりや〳〵駕籠の者、爰は何と申す所ぢや。

いぼ　へい、爰が烏川の繩手でござります。

すみ　よつほど骨を折りやしたよ。

天目　左樣か、大分早い事であつた。（ト捨ゼリフにて、本舞臺へ來り駕籠を下し、いぼ藏草履を直す。）

いぼ　へイ旦那、お約束の所でござります。（ト天目駕籠より出で）

天目　オ・大儀であつた、渡し場迄はまだ餘程あるかな。

すみ　ナアニ、眞向うに見えるのが、渡し場でござります。

天目　左樣か、貴樣達も生業とは申し乍ら、なか〳〵達者なことで、思ひの外早く參つたわえ。

いぼ　そりや自慢ぢやござりませんが、此の街道ぢや二人乍ら、ひけをとらねえ人足でござりやす。
天目　左樣に見受けるわえ。(トいひ乍ら紙入より金を出し紙に包んで、)これは些少ぢやが取つておきやれ。
　ト出す、いぼ藏取つて見て、
いぼ　へイ〳〵有難うござります。棒組、駄賃を下すつたぜ。
すみ　旦那、有難うござります。(トいぼ藏紙を開き見て)
いぼ　モシ旦那え、こりや赤でござりやすね。
天目　五百文の極めなれど、其方共が骨折もあれば、殘りは酒手に遣はすわえ。
いぼ　へエ、そんなら殘りがお酒手かね。コウ棒組、五百の殘りが酒手だとよ。
すみ　茶漬やの下女ぢやァあるめえし、おつりをもらつて禮をいふとは譯が違はァ、それツぱかりどうなるものけえ。
いぼ　モシお侍さんえ、御親切は有難うござりやすが、こりやまァ頂いたも同じ事でござりやすから、お返し申しませうよ。
天目　何と申す。然らば酒手が不足ぢやと申すのか。(トきつと言ふ。)
いぼ　へイ、おつしやる通り、不足さね。

天目　何と申す。（ト合方きつぱりとなり、）

いほ　コレサ〳〵、何もそんなに目をむき出すにや及びません、お定まりのせりふだから、長口上は御忘屈だ、ぽつと出の雲助たァ代物が違ひやすから、其のつもりで後前を見て、物を言つておくんなせえ。

すみ　とんだ鈴ヶ森ぢやねえが、焚火にあたつて鳥のかゝるのを待つてゐる、皆々セリフの雲助たァ代物が違ふわえ。何ぼ目が利かねえといつて、片目ばかり出しやがつて、あんまり人を安くするなえ。

いほ　四も五もいらねえわつちらの、身分相應酒手をば、きり〳〵出して。

兩人　おくんなせえ。（トこれにて天目むつとせしが、心を取直し思入あつて、）

天目　成程、こりや其方が申す所も尤も至極ぢや、某も初めての旅の事、とんと旅體は不案内ぢや、氣にさはらば許してくりやれ、不足とあれば今二百文も、酒手のましを遣らう程に、心を直して一杯のんで歸つてくりやれ。（ト懷へ手を入れる。）

いほ　オイ〳〵〳〵常談をいつちやいけねえぜ、地切りの煙草ぢやあるめえし、あんまりこまぐ〳〵きざみやァがるねえ。

すみ　所詮話は分らねえ、こんなけちな野郎にやァ、酒手はうぬにくれてやらァ。

ト いぜんの金を天日の額へなげつける、天目きつと思入。

いほ　コリヤ九十九〆九百といふ、おしきせぜりふの酒手だが、もう言つたつてむだなはなしだ、（おらツち二人も生業づくだ、爰迄重い思ひをして、たゞ歸つちや生業冥利だ、酒手の代り存分に、それだけ腹をいにやあならねえ。

すみ　さうだ〳〵、こんな意氣地のねえ奴は、懲り〳〵する程ひツぱたいて、身ぐるみぬがせて赤恥をかゝせてやつたら此後は、ちつたア性がつくだらう。

いほ　こんな奴ア口で言つちやア分からねえ、いけ張り合のねえ二本棒め。

ト 天目の肩へ足をかけて、踏みとばす、天目口惜しき思入にて、

天目　大事の前の小事と思ひ、さあらぬ體にあしらへば、附け上つたる惡口雜言、其上ならず武士たるものを。

いほ　おゝ、土足にかけても、こちとらに、

すみ　ばちがあたつて、

兩人　つまるものかえ。（ト兩人にて天目の額へ唾をはきかける。）

天目　ムヽ、もう料簡が。（ト刀の柄へ手をかけ拔きかけて、ハツと思入。）

いぼ　何だ〳〵、刀の柄へ手をかけやがつて、おらを切る氣だな。

すみ　さうだ〳〵、面白い、切られよう。サア切れ〳〵、切りやあがれ。

いぼ　コリヤ何だな、耳ツくぢりへ手をかけて、おどして酒手をふむ氣だな、サアふまれるものならふんで見ろ、そんな甘口な雲助ぢやねえぞ。東海道が五十三次仲仙道が六十九次、どこの立場へ面出しても、こめられた事のねえ、蛸口のいぼ藏様だ、おれを切りやあ手前も本望だ。

すみ　ヤイ、さした刀は看板か、なぜ手をかけて斬らねえのだ、早く拔いて切りやあがれ。

ト土足にて刀の柄を蹴る。天目無念の思入、いぼ藏脇差の柄へ手をかけて、

いぼ　これを拔いて切らねえか。

天目　なか〳〵以てさういふ譯では。

いぼ　イヽヤ切る氣だ。

天目　どうしてこなたを。

いぼ　エヽ面倒だ、おれが拔いて切られてやるわ。

ト又いぼ藏柄へ手をかけるを、天目拔かせまいと爭ふ、無理にいぼ藏刀を引拔き見て、びつくり思入、天目面目なきこなし、

ヤ、コリヤ竹光だな。

すみ　なに、竹光だ、違えねえ竹光だ。こいつア侍のいかさまものだな。

いほ　この竹べらでおどしをかけ、わりやあ錢金をゆするのだな、見かけによらねえ太え奴だ。

すみ　こんな喰せ者にあらされちやア、こちとらが飯が食へねえ、大方此方もいかさまだらう。

ト又一ト腰へ手をかけるを、天目やるまいとするを、いぼ藏又かゝる、墨太又拔かうとする、天目はいろ／＼爭ひ居る、此の前方より上手へ、繼橋素太夫ぶつさき大小、旅なり更けたる侍のこしらへにて、一文字の管笠を持ち、割がけを肩にかけ伺ひ居て、此時中へ割つて入り、兩人を附き廻しきつとなる、兩人素太夫を見て、

いぼ　ヤ、又侍が一人ふえたぜ。

すみ　大方手前も、相ずりだらう。

いほ　二人が邪魔を、

兩人　何でするのだ。

素太　イヤ邪魔は致さぬ、扱ひにはひつたのぢや。（ト此時天目素太夫を見て、）

天目　ヤ、あなたは。（ト言ふを押へて、）

素太　イヤ、知らぬ、何にも知らぬが、侍の身は相身互ひと申す者、どうぞ身共に預けてくりやれ。
いほ　何だ預けてくれ。コレ、あんまり落着いて物をいふねえ。此の侍が騙りだから、おらッち二人が成敗するのだ。
すみ　種も知らずにうつかりと、餘計な口をきゝなさんな。
いほ　何にも言はずに、そつちの方へ引込んでだまつて見物、
兩人　するがいゝわな。
素太　サ、身共も中へはひつたからは、其方共が氣に入るか、入らぬかは知らねども、相應のあいさつは、身共がいたして遣はさう。
いほ　成程こいつァちつと話しが分りさうだ、高がかういふ筋の話さ、おらが駕籠にたゞのつて、酒手も出さずこはもてゞ。
すみ　此の竹光でおどしをかけ、素手の孫三で行く氣だから、わつちら二人もだまつちやあ。
いほ　此の引つ込みが、
兩人　つきませんのさ。
素太　成程それは尤も至極、して其酒手とやらは、何程遣はせばよいのぢやな。

いほ　そりやお前酒手だから、いくらといふ相場はねえのさ。
すみ　扱ふ氣なら、わッちらの面の立つやう見計らひねえ。
素太　いか樣、こりや何程と定めはあるまい。まづ〳〵待ちやれ。
ト素太夫思入あつて、誂への胴巻より金を出し、其の内を三兩紙に包み、後を懷中して、
コリヤ身共が心ばかり、定めて氣には入るまいけれど、これで料簡致してくりやれ。
ト渡す。天目ちよつと胴巻へ目を附ける事あつて前へ出で、
天目　あなた樣に金子をば。
素太　ハテ、御遠慮には及び申さぬ、これも時の災難。イヤサ、最前よりの樣子といひ、身共が胸にござる程に、まづ拙者にお任せなされい。
天目　それではどうも。
素太　ハテ、斟酌には及び申さぬ。
トいほ藏墨太金を改め見て、
いほ　モシ旦那え、わつちらが言分にやあ、片手とも言ひてえ所でごぜえますが、
すみ　おめえさんが挨拶だから、ちとお安いものだけれど、

いほ　これでおまけと、
兩人　いたしませうよ。
素太　然らばそれで得心と申すか。
兩人　大まけでござりやす。
素太　ヤ、それにて身共中へはひつた甲斐があると申すものぢや、得心とあらば其方共は、早う歸つたがよい。
いほ　歸りやすとも〳〵、えてこんな時の引つ込みにや、ひどい目にあふものだ。
すみ　なアに、今時はそんな立役は、はやらねえやな。
いほ　大きに世間も開けて來たの。
素太　無駄を申さず、早く行きやれ。
いほ　モシ旦那、渡し場迄載せやせうかね。
すみ　えゝ、ごまをするねえ。
いほ　べら棒め、すり込むのが、今のはやりだ。
ト兩人よろしく思入あつて、駕籠をかつぎ下手へはひる。後合方になり、天目面目なき思入あつて、

竹光を納め前へ出て、

天目　素太夫殿、面目次第もございませぬ。

素太　イヤ〳〵其御斟酌には及び申さぬ、其許樣とは草津に於て、ふと知る人に相成つて、湯治いたす間は元より、好める圍碁を打ちかこみ、國許の朋友より、親くいたし居りたる所、貴殿には御所用とあつて、草津の驛を御發足なされしを、たゞなつかしう思ひをつたる所、拙者事も長の湯治、出立いたして歸る途中、計らず貴殿の危難をばお救ひ申すも、これも盡きせぬ御緣でがなござりませう。

天目　武士たる者にあるまじき、匹夫下郎に恥しめられ、手出しのならぬ拙者が帶刀、無念は肝にこたゆれど、貯へつきし拙者が薄命、御推量なされて下さりませ。

素太　その悔みはさる事乍ら、いまだ血氣の貴殿なれば、やがて仕官のいたされなば、其時飾る錦の袖、これが所謂世の盛衰でござるて。（ト此時天目の持ちし竹筒へ目をつけ、）イヤ何須之助殿、貴殿の御所持なされたる、其の竹筒は何らの器でござるな。

天目　イヤモお尋ねに預かりお恥しき儀にはござれども、尾羽打枯らせし浪々の、なりはひとてもござらぬゆゑ、次第に細る囊中錢なし、魂迄もかくの仕合せ、此の竹筒へ米をたくはへ、木賃の旅

篭に餓ゑを凌ぐ、拙者が命の器でござる。

ト出して見せる、此の竹筒の口より米少しこぼれること、

素太　左様でござるか、それは少しも恥辱にはござらぬ、なか／＼風流なる事でござる、何とやら申す俳人が、瓢を用ひし例もあれば、こりや一段の器でござるて。（ト此の時時の鐘、思入あつて、）アリヤもう入相と相見ゆる、天目氏には、これより何れへ。

天目　拙者はこれより、ちと仕官の望みもござれば、東の方へ志しまする。

素太　然らば丁度よい折から、今宵は御同宿の仕り、夜と共草津の圍碁の敵を。

天目　おゝ、久々にてお相手仕るでござりませう。

素太　尋る敵に逢うたる心地、樂みな事でござる。サア參らうではござらぬか。

天目　御同伴いたすでござりませう。

ト浪の音在郷唄の合方になり、上手二重より下りて、東のあゆみへかゝり、兩人いろ／＼捨ゼリフにて大あゆみより花道へかゝる、此の内舞臺は知らせなしに道具廻る。

（同　渡しの場）――本舞臺後ろ一面在體流れのある遠見の書割上手に菰張りの渡り守の小屋、むし

ろ下げてあり、此そばに烏川渡し場と記したる榜示杭下手に柳の立木、日覆より同じく釣枝、ずつと上手は蘆原、總て烏川渡し場の模樣、やはり右の鳴物にて、道具留る、と天目、素太夫は花道より捨ゼリフの内、天目素太夫の後ろより切りかけようとする事二三度あつて、よろしく本舞臺へ來る、此の時雨車になり、

天目　コリヤ、またばらついて參りました。

素太　秋の空とは申し乍ら、定まらぬ日よりで、困つたものでござる。

天目　最早渡し場でござるが、雨具の御用意はいかゞでござるな。

素太　雨具は用意いたしてまゐつたが、貴殿はいかゞでござる。

天目　拙者はかゝる仕合せなれば、雨具の貯へもござらぬが、きつい降りもござりますまい、此の渡し小屋で少々雨止みをなされては如何でござる。

素太　なにさま、暫時雨止みを致して參らう。

ト素太夫小屋の軒下へはひる。此の時後ろより竹槍出て、素太夫の肩先を貫く。これにて素太夫はツと苦しみ、たぢ〳〵となる、此の時小屋の内より、以前のいぼ藏、墨太、竹槍を持ち出で、又素太夫に切り附ける、素太夫苦しみながら一腰をぬき、めつた切りに立廻る、此内天目は後ろに居て、素太

夫のたじろぐ所を、足にて蹴とばしどうとなる所を、刀を肩先へつき通し、にっこり思入、素太夫苦痛の思入にて、

素太　何奴なれば物をも言はず、だまし討とは卑怯な奴。

いほ　オヽ尋常ぢやあ武士と雲助、どうして相手になるものか、物どりだから卑怯なはずよ。

すみ　金が敵だ、仕方がねえ、文句を言はずと往生しろえ。

素太　そんなら、おのれは、物どりよな。

いほ　其の物どりの先達は爰にゐる。

兩人　親玉だわ。（トこれにて素太夫天目を見て、）

素太　ヤヽ、其方は天目須之助、そんならおのれら三人は。

いほ　いひ合せて、

兩人　した仕事よ。

素太　ムヽ。（ト口惜しき思入。天目悠々と捨石へ腰をかけ、煙草を呑みながら。）

天目　もういくらもがいても、其深手ぢやあお暇乞ひだ、然し此のまゝ息の根を、留てしまふも曲がねえ、ゆつくり話を聞せてやらうよ。手前達も一服やれ。

いほ　おいらも爰で先生の。

すみ　讀みきりでも。

兩人　聞きやせうよ。

ト誂への合方、蟲笛をあしらひ、素太夫苦痛の思入、天目も思入あつて、

天目　オイ素太夫お前に恨みはちつともねえ、恨みどころか湯治場で、世話になつたが遺恨はねえ、所が慾の出來心、お前が草津を立つ時に、ちらりとにらんだ胴卷の、重みを引いた駕籠かきの、二人をたのんだ御器量で、酒手の金の五十兩、しめるつもりで竹光の、さやを拂つたいき杖も肩を入れたる棒鼻の、其の入口の四苦八苦、何にも白けの竹筒も、割つて話しやあ此中へ、どめておくのは小月形、息があつたらほしからうが、しやりかしやれかは知らねえが、ままにならぬは浮世だから、おれが末期の水加減で、地獄の釜で往生しやれさ。

ト刀を引きぬく、素太夫苦しきこなしにて、

素太　ヤヽ、スリヤ竹筒の其中へ、かくしおきしは小月形とな。

天目　エヽ、三年後に鎌倉へ、われがあづかり持つて行く、途中に待受け盗んだは、其頃乞目の璺六とて仁王の姿で人をおどし、盗みをしたも此須之助、廻り〳〵て又われに、殺されるとは因果な奴だ。

素太　扨は小月形を奪ひしも、須之助おのれであつたよな、現在たづぬる一腰が、目さきにあるも取る事ならず、其盗人に殺さるゝとは、よく〳〵武運に盡きたる素太夫、チエヽ口惜しい。

天目　愚癡を言はずとくたばつてしまへ。（天目素太夫を切り倒す。）

いぼ　たゞくるしませるも殺生だ、爰らで暇をやりやせうか。

天目　さうよ、あんまりあくどいのも、色氣がねえな。

すみ　ずる分これでも澤山だ。

いぼ　そりやお暇が出た、勝手な所へ。（ト素太夫へまたがり止めをさして、）うしやあがれ。

ト これにて素太夫はツと苦しみて落入る。

すみ　いぼ藏、爰らの所は先生の、やる仕事だぜ。

いぼ　爰らがおれの儲けものだ。

ト 此内天目素太夫の懷中より、胴卷を引出し、懷へ入れる。いぼ藏は素太夫の死骸を川へ蹴込み、

なか〳〵人を殺すのは、餘程骨の折れたものだ。

すみ　先生、二人の手際は、

いぼ　どんなもので、

兩人　ござりやすえ。

天目　イヤ、御苦勞々々、然しこれッぱかりの木ッ葉仕事で、かう骨を折つちやあ割に合はねえ。

いぼ　へエ、あんまり損も行きやすめえぜ。

すみ　わつちらの目にやあ大仕事だ。

いぼ　骨折代は、ねえモシ旦那え。

天目　エヽ、駕籠かきの口調はあやまるぜ。

いぼ　ツイ、口ぐせになるやつだ。

天目　サア、分前だ、二人共に手を出さッし。

ト懐の中にて小判を十枚程出して、ずらり並べろ、兩人はこれを見て、にこ〳〵して手を出す。

そりや、手前よ。(トいぼ藏の手のひらへ一枚打ちつけてやる。)

いぼ　オツト、よし〳〵。

天目　そりや、きさまだ。(ト又一枚墨太に打ちつけてやる。)

すみ　來たり〳〵。

ト兩人にこ〳〵して、やはり手を出して居る、天目殘りの小判を懐へ入れる、兩人顔を見合せて、

兩人　後はどうだえ。

天目　まだ手前達はしめる氣か。

兩人　あんまり是ぢや。

天目　釣でも來るのか。

兩人　エヽ。

ト兩人手を引く、天目へゝと肩で笑ふを、木の頭。

天目　堅え人だの。

トにつたり思入、兩人はあきれしこなし、此の仕組よろしくキザミに就き、四つ竹の合方、浪の音にて、

幕

大詰

繼橋住居の場

同　雜藏の場

眞間在洪水の場

〔役名｜｜天日須之助、天日法印、若黨眞吉、下部脚平、駕舁いぼ藏、同すみ太、中間市八、同駒六、眞里谷數馬、正木左近。素太夫妻片もひ、娘紅皿、同缺皿、腰元渡鳥、其他。〕

（繼橋住居の場）｜｜本舞臺三間の間中足の二重、向う中形の襖、上手一間の付屋體、櫛形の欄間、いつもの所屋根付きもじ張り兩扉の門、總て繼橋屋敷の體、二重に腰元○△留袖腰元の拵へにて、○は煙草盆を布巾にて拭うてゐる。△は火入れへ櫻炭をいけてゐる。此模樣よろしく、合方にて幕明く。

△もウしおきく殿、お上の噂はせぬものなれど、缺皿樣はおいとしいことではないかいなア。

○サイなア、今を盛りの缺皿樣、いかにお腹が違ふとて、御新造樣の無理非道、お連れなされた紅皿樣は、蝶よ花よとお手車、缺皿樣を責めさいなみ、仕置の爲と物置の、雜藏へ押込めて、よるの物は勿論の事、三度の御ぜんも上げぬとの事。

△さればいなア、もしも內證で御ぜんでも、運ぶ者もあらうかとあの意地惡の脚平殿を、藏の番につけておき、晝夜分かたぬ寢ずの番。

○それぢやによつて私ら迄、おいとしう思ふ故、にぎり飯なと上げたいと、心で思へど張番が、附けてあるゆゑそれもならず。

△ それにつけても大旦那、素太夫樣が御歸國あらば。

○ 此の樣にはあるまいけれど、何をいふにもあの通り、意地くね惡い片もひ樣が、はびこつてござるゆゑ、たゞ御不便なは缺皿樣ばかり。

△ どうぞ早う御新造樣が、お目出度くなつたらば、此の御苦勞はなさるまいもの。

○ 自由にならぬもので、

兩人 ござんすなア。

ト兩人よろしく思入、やはり合方にて、奥より渡鳥腰元なりにて出來り。

渡鳥 アモシお二人さん、聲高でござんすぞえ、又御新造樣に聞えたら、大ていな事ぢやござんせぬ、もう〳〵けしてお上の事、よしあし共に言はぬものでござんすわいなア。

○ 渡鳥殿言つて惡いは合點なれど、あまりといへば缺皿樣が。

渡鳥 おいとしい段ぢやござんせぬ、お前方が思ふのも、お主を大事と思ふゆゑの事でござんす、然し御新造樣の御氣質ゆゑ、ひよつとお耳へはひる時は、どの樣なお怒りかも知れぬ、つまる所は缺皿樣のお身の上、必ず〳〵陰言は、言はぬものでござんすわいなア。

○ ほんにさうでござんす、これからは愼しんで。

△　心をつけようわいなア。

○　心を付けるといへば、紅皿樣の御秘藏の、小鳥の餌をやらねばならぬわいなア。

△　又御新造樣に呼ばれぬ內、意地惡樣の御きげんでも、取りませうわいなア。

渡鳥　あれ又、其樣な事を。

△　ほんにうつかり申しました。

渡鳥　氣を付けたがよいわいなア。

兩人　そんなら後ほど。（ト煙草盆を持ち立上る。）

渡鳥　御苦勞でござんすわいなア。

トやはり合方にて腰元○△奥へはひる、後渡鳥殘り、思入あつて、

今二人の衆の噂の通り、あの心弱い缺皿樣を、いかに胤腹分けぬとて、片もひ樣のせめ折檻、其上をとゝひから、雜藏へ入れたまゝ、脚平殿を張番させ、食事も運ばず晝夜とも、寢る事ならぬうつゝぜめ、どうまアそれでお命が續かうぞ、どうぞして別狀のないやうと、神佛へお願ひ申して居るけれど、只さへかよわい缺皿樣、けふ一日お食をあげねば、どうして生きてゐられうぞ、これにつけても兼てより、眞吉樣といひ合せ、かう〱して缺皿樣を、お助け申す手立があると

約束してはあるけれど、どうぞ早う來て下さんすりやよいが、けふで三日のあの責苦、もう半時も心許ない、早う逢ひたいものぢやなア。

トよろしく思入、誂への合方になり、花道より天目須之助、旅なり大小、草履にて出來り、後よりやはり前幕のいぼ藏すみ太、四手駕籠をかつぎ、此上へ割かけの荷物をつけて出來り、花道にて、

いぼ　モシ旦那、お前の行く所はまだ先かね。

すみ　造作もねえと思つたが、べら棒に遠いぢやねえか。

天目　今道にて聞いた通り、向うに見ゆるあの屋敷と申せば、直にひまを明けてやるわい。

いぼ　もう少しの辛抱だ。

すみ　サア早く行きやせうぞ。

天目　イヤ、せはしない奴等ぢやわえ。

トやはり右の合方にて、本舞臺へ來り、門口にて思入あつて兩人に囁く、いぼ藏すみ太不承々々に門口へ駕籠を下す、天目は駕籠につけたる割かけを取つて。

チト案内が頼みたい。（トこれにて渡鳥平舞臺へおりて、）

渡鳥　ハイ〳〵、御案内とは、どなた樣でござりまする。（ト門口をあける。）

天目　當屋敷は繼橋素太夫殿の御住宅かな。

渡鳥　ハイ、左樣でござります。

天目　然らばちと御内室に、御面談いたしたい儀があつて、わざ〳〵尋ね參つた者、御在宿ならば取次いでくりやれ。

渡鳥　畏りましてござりまする。（ト渡鳥二重へ向ひ、）御新造樣、お客樣でござりまする。（トよぶ。奥にて）

片も　なに、お客人のお出でとな、それへ行てお目にかゝるでござりませう。

ト合方になり、奥より片もひ好みのかつら、屋敷風の女房の拵へにて出來り、渡鳥辭儀をして居る。

コレ渡鳥、紅皿がたづねて居る、早う行て相手をしや。

渡鳥　畏りましてござりまする。（ト立ちかけるを、）

片も　アコレ、又うかりとして粗相をしまいぞ、そして千草や小笹にも言ひつけて、蠶のさうぢしまうたら、爐の炭もつがせておきや。

渡鳥　かしこまりました。

片も　手ばしこくしやといふたがよいぞや、サ、早う行きや〳〵。

渡鳥　ハイ〳〵。（ト奥へはひる。）

片も　世話のやけた女子共ぢやわいなう。（トいひ乍ら平舞臺へ下りて、門口へ來り、）お客人とおつしやりまするは。

天目　然らば其許が素太夫殿の、御內室でござるかな。

片も　いかにも、妻の片もひでござりまする。してあなた樣は。

天目　拙者は乞目の疊六と申す者。ちと素太夫殿の儀に付いて、御面談が申し度く、わざ〳〵是へ參つてござる。

片も　何か樣子は存じませねど、御用とあればそこは端近、まづ〳〵これへ。

天目　左樣なれば、御免下され。（ト門口へ向ひ、）其方共は暫時それにて、休息のいたしてくりやれ。

いほ　どうか早くしておくんなせえ。（トそつけなくいふ。）

天目　然らばお許し下され。

ト合方きつぱりとなり、上手へ通る。片もひも思入あつて、よろしく住ひ、

片も　して、私へ、御用とはな。

天目　サ申すも便なきことながら、お內證お聞き下され。（ト合方になり、）拙者事は武術修行の身の上でござれば、信濃路より下る折から、身の養生に草津にて湯治をいたす其席にて、素太夫殿と御懇意

を結び、長らく彼の地に逗留いたし、最早日數も重ねたれば、出立いたし同道にて、烏川へかゝりし所、いさゝかの茶店にて、中食いたせし折からに、素太夫殿には好める酒、數杯かたむけ餘程の酩酊、拙者は元より下戸でござれば、素太夫殿を介抱なし、渡し舟にのりたる所、熟醉の素太夫殿、烏川のたゞ中にて、よろめく足をふみとめず、早瀨の川へ眞逆樣。

片もヤ、何とおつしやりまする。あの素太夫殿が。

天目サヽ、そのおどろきは御尤も、拙者は元より同船なしたる者迄も、それ助けよ引上げよ、あれよあれよと氣はあせれど、名におふ早瀨の烏川、逆まく水にいたはしや、素太夫殿には行方を失ひ、其内船も岸につけば、直樣それより川筋をそこよ爰よと尋ねれども、最早何れに流れ行きしか、死骸とても見えざる故、本意なくも立ちかへり、後に殘りし此品こそ、お見覺えもござらうが、素太夫殿のこれぞ形見、其儘に打捨てんは、武士たる者の本意ならねば、事の仔細を申さん爲、わざ／＼參りし一部始終、其許樣の御愁傷、さぞかしの事にあらんと、推察いたしてござりまする。

ト思入あつて言ふ、片もひ愁ひの思入あつて、

片も約束事とは申しながら、此やうな災難に、逢うた事とは存じませず、今日は戻るか、あすはたよ

りのある事かと、指折りかぞへた甲斐もなう、荷物が形見にならうとは、夢いさゝかも存じませぬ、親子の者が心の內、御推量なされて下さりませ。（トほろりと思入。）

天日　御尤もなる御なげき、然し過ぎ行かれたる素太夫殿は悔んで返らず、此上は其許にも、佛事を營み、御回向なさるが肝要でござるぞ。

片も　有難う存じまする。（ト此內門口にて、いぼ藏、くろ太よろしく囁く事あつて、）

いぼ　モシ〳〵旦那え、かういつ迄もべん〳〵と、待つちやゐられません。

すみ　わつちらはお先へお暇をいたしやすが、お約束の酒手がお貰ひ申したうござりまする。

天日　コレ〳〵駕籠屋、今しばらく待つて居れ、もう手間はとりは致さぬわえ。

いぼ　面白くもねえ、たゞなら待つてもゐられやすが、ごまかし話しの長談義を、だまつて聞いてゐられるものか。

すみ　いくら醉つてもお駕籠ぢや、川へおちる氣づかひなしだぜ。

いぼ　ちげえねえ。

トいぼ藏すみ太明き駕籠をかつぎ、金を見乍ら捨ゼリフにて四つ竹の合方にて花道へはひる、天日後を見送つて居る、此內片もひ思入あつて、床の間の小さ刀をとつて、

片も　夫の敵、覺悟しや。

ト切つてかゝる、天目身を躱し、肩にてあしらひ、片もひの刀を押へつけて、

天目　ヤア敵呼ばゝり失敬至極、血迷うたるか御内證。

片も　ヤア血迷うたかとは横道者、今其方が懐中より、ちらりと出し胴卷は、素太夫殿へわらはが縫うて、道中持に渡せし胴卷。

天目　や。

片も　サア、切は覺えの高砂染、それのみならず駕籠かき共が、そちをなやます今の詞、かれといひこれといひ、夫を殺した其方が、金子を奪ひあまつさへ、まだ惡だくみが仕たらいで、わらはをたばかり夫の死去を知らせる大膽、何とこれにも言譯あるや。

天目　いゝや身共は覺えない。

片も　そんなら今の胴卷を、爰へ出して改めさせるか。

天目　サア、それは。

片も　敵と名のるか。

天目　サアそれは。

片も　サア。
天目　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
片も　サア尋常に勝負しや。（ト片もひ詰掛る、天目ムヽと思入あつて、どつかりと座して、）
天目　や、成程するどい眼力だ、女と思つてやりかけたが、どうして〳〵目が高い、いかにも繼橋素太夫はおれが殺して金を取つた、あいつら二人も其時の、おさきにつかつた提灯持よ。
片も　ムヽさう聞く上は生けてはおかぬ、覺悟しや。（ト片もひきつと詰めよる。）
天目　これさ〳〵そんなに急くにや及ばねえ、敵と知つちや此まゝに、うつちやつてもおかれめえ、今殺されてやらうから、靜かにしなせえ。（ト天日悠々と片肌をぬぎ、）サアお内儀、手出しはしねえ御勝手次第、腕からでも首からでも、お前の都合のいゝ所から、そろ〳〵とやらかしねえ、あんまりあせると、血の道が起つて來るよ。

ト煙草を引きよせ、たばこを吞み居る、片もひいらつて、

片も　オヽよい覺悟、女でこそあれ武士の妻、手並の程を。

ト立廻つて一ト太刀切付ける、天日、其まゝやはり煙草をのんで居る、片もひびつくりなし、よく〳〵

見て切れぬゆゑ不審の思入。

やゝ、心覺えの此の一腰、力をこめて切附けしに。

天目　どうだ切れたか。

片も　や。

天目　何でおれが切れるものか。刃物の立たねえ、おりやァ不死身だ。

片も　ヤヽヽヽ。（トびつくりなす、天目居直りて、）

天目　どうだびつくりしたであらう。もう白ばけにぶちまけたら、おのれもいけておく時は、枕を高く夜が寢られぬ、返り討だ覺悟なせ。

ト天目肌をぬいだ儘一腰を引きぬき、片もひに差しつける、片もびびつくりして飛のき、兩人きつと見得、此時天目の二の腕に三ツ鱗の痣あるを、片もひきつと見て、

片も　こりや待つた、早まるまいぞ。

天目　エヽ、未練なことを。

ト又刀を振上げ切り込まうとするを、片もひ身をかはし、

片も　ヤレ待て悴、いふ事あり。

天目　何と。
片も　そちが腕の其あざこそ、まがふ方なき悴の證據。
天目　なに、此あざを悴とは。
片も　守りの内に臍の緒書と、一寸あまりの獨鈷の目ぬきを、入れておいたが知つてゐやるか。
天目　ム、其の獨鈷は今以て、守りへ入れて持つてゐるが、實の親仁は修驗者と、話に聞いたが、こなたが親とは。
片も　いかにも以前は修驗者にて、今かくなりし物語り、一通り聞いてくりやれ。（ト誂への合方になり、）元我々の産れといふは、武州の熊谷在にて、夫は天目淨海とて、旅を挊ぎの修驗者なりしが、晦日々々の釜じめも、わづかな得意に暮しかね、身貧の中へまうけたる、悴といふはそなたにて、生れ立より三ッ鱗の、形に似たる腕のあざ、一人の子にも困る所へ、房州浦の漁師にて、岩六といふ夫の弟が、鱗のあざは漁師には、よい吉瑞ゆゑ貰ひたいと、言ふを幸ひ三つの年、養子にやつても遠路ゆゑ、其後絶えて音信不通、それより月日も五年立ち、再びもうけた娘紅皿、生むと間もなく夫に捨てられ、足手まとひの子を連れて、花も咲かざるやもめぐらし、あるとあらゆる事をして、やう／＼娘の足手をのばし、夫の行方をたづねしに、此の下總に居ると聞き、はる

ばる尋ねて來た所、やはり身貧な一人ぐらし、二人三人口がふえ、困る折から幸ひにも、此の繼橋の素太夫殿が、妻をなくして不自由ゆゑ雇ひがほしいとたのまれて、妹のつもりでおさすり雇ひ、二月三月居る内に、とう〳〵後目に居直つて、娘を連れ子に此家の後添、先妻の子の缺皿を、なきものとなし紅皿を、後目として此家を、繼がせるといふ夫婦の企み、そなたも人を殺す樣な、よい魂になつたのも、天目殿の胤ゆゑぞ、不思議に名のりあうたのは、親子つきせぬこれ奇緣、これからそちも共々に、力になつてたもいの。

天目　初めて聞いた我素性、實の親は上州にて、天目といふ修驗者と、聞いたばかりに便りもなければ、今日の今迄知らざりしが、扨は天目法印殿も、今は當所にござりますとか。

片も　國分寺の裏手にござるが、天目殿も日々に、此家へ入り込み何かの相談、今にも爰へ見える筈、そちが計らず素太夫を、害せし事を話したら、さぞかしの悅びならん。

天目　そんなら今にも、法印殿が。

片も　ござつたならば、親子の對面。

天目　ゆつくりと話しませう。(ト思入あつて、)イヤ、初めて逢ひし母人へ、お目にかける物がござる。

ト刀をぬき、片もひの前へ出す。

片も　刃金するどき此の刀は。
天目　三年後に素太夫から、盗み取つたる小月形。
片も　そんならこれが、里見の重寶。
天目　小月形の則ち一腰、（ト鞘へ納める。下手へ腰元出で、）
腰○　ハツ御新造樣へ申し上げます、天目樣がお出でなされました。
片も　それぞ幸ひ、
天目　親子の對面。
片も　アコレ、（ト天目押へるを、道具替りの知らせ、）これへと申しや。
腰○　ハツ。

ト辭儀をする。天目片もひ顏見合せる、よろしく唄にて、道具廻る。

（同雜藏の場）――本舞臺眞中二間の雜藏、これにて一間の本庇、戸前に破れたる網戸、錠おろしあり。上下あとへ下げて黒塀、うしろ松の見越の枝、黒幕、下手に破れる藪疊、總て繼橋庭内雜藏の體、藏の前へ一間の大床几をおき、爰に脚平菖蒲革、肩入れの木綿やつし、中間のなりにて、そばへ

割竹をおき、くろみ足の膳の上へ酒肴を並べ、酒をのみ乍ら張番をして居る、此見得よろしく時の鐘、合方にて道具留る。

脚平　まだ秋口とはいひ乍ら、こんな廣ツぱにたゞ一人、つくねんとして居ると、ぞく〳〵して風を引きさうだ。ハックショイ。（ト くさめをして肩を叩き乍ら、）畜生め誰が噂をしてゐやがるが、あの腰元の渡鳥か知らん。へエさううまくいきやいゝが、ろくな噂ぢやあるめえ。寒さしのぎに德利と首引をして居るが、酒といふ奴は相手がなくちや、うまくねえものだ。其内にも酌はたぼに限るぜ。たぼと言やア此の藏の内には、缺皿樣がぶちこんであれど、戸口に大きな錠を下し、鍵が奥へ上つて居るから、手を付ける事も出來ねえ、まゝにならぬとおはちをなげて、あたり近所がまだらけ、サツサ、ハツクショ、又噂をしやがる。

ト酒に醉ひたる思入、四つ竹の合方になり、上手より以前のいぼ藏、墨太、明き駕籠を擔ぎ出來り、脚平の前を行きすぎるを、脚平見て、

オイ〳〵そこへ行くのは、いぼ藏にすみ太ぢやねえか。

トこれにて兩人脚平を見て、

いぼ　オヽ誰かと思つたら、脚平殿か。

すみ　アヽお前の屋敷は、爰かえ。

脚平　八幡の市で別れたぎりだな、まア爰へ上らツし。（ト兩人薄縁の上へ腰を掛ける。）手前達も久しく逢はねえが、どうだもうけ口はねえかの。

いぼ　ねえ事もねえが、ひまだの、今いふ八幡の市の晩に、行徳の者と喧嘩をして、仲仙道へ行つて居たが、旅の方が仕事があるよ。

すみ　呑むにぶつに買ふといふ、三拍子揃つた手前が、よく爰に辛抱して居るな。

脚平　たゞの家ぢや居られねえが、爰の下齒といふものは、ずゐ分話せる代物に、今出てもつまらねえから、一ト仕事したら出て行かう。

すみ　ちつと遊びに出て來ねえ、いゝ仕事がいくらもあらア。ときに一杯やりてえの。

脚平　きまりで附込みやアがるぜ。

すみ　いゝやア、友達仲だ。（トすみ太茶わんを取る、脚平注いでやる。）おつとゝ、あり山〱。

脚平　そりやさうと手前達は、けふはどこへ行つたのだ。

いぼ　どこといつて、此の屋敷へ來たのだが、こちとらはもう老込みだぜ。

脚平　なぜ〱。

いほ　けふおれが爰へのせて來た侍だがな、種は知らねえがまだなま若へ浪人者よ、きのふ仲仙道の烏川で、まぶな仕事があるから、半口乘れと提灯持にたのまれて、金を持つた侍を、ばらしてしまつて五十兩といふ仕事をしてよ、おらッちの渡りが少ねえから、ぐづついてやつたらば、もう一と仕事あるから、おれが懷へのつていけといふもんだから、仕方がねえとあきらめて、ばらした奴の雜物を、種にして此の屋敷へ持込んだが、殺したさぶは素太夫といつて、爰の内の大將よ。

脚平　さうか、素太夫をばらしたのか。

すみ　そいつを種に浪人者が、いゝしらをきつてゐやがるから、あんまり癪にさはつたから、ちくり〳〵と種わりを用ゐたのよ。

いほ　いやな事を持ちかけたもんだから、仕方なしに五ッぴら出して鼻藥よ。

脚平　うめえ仕事をしやがつたな。

いほ　コウ脚平、さういふ世界になつたから、なか〳〵世渡りやあむつかしいぜ。

ト此内脚平德利を振つて見て、

脚平　コウ〳〵すみ太、とう〳〵手前みんな呑んでしまやがつたな。

くろ　いゝぢやねえか、どうで四五日此方にゐるから、此頃につぎ足さァな。

脚平　あんまり注ぐ風でもねえぜ。

いぼ　そりやいゝが、もういまに日が暮れる。酒がねえなら、そろ〳〵出かけようぢやねえか。

脚平　あんまり正直すぎるぜ、コウ五ッぴらしめたら、ちつと別れを置いてゆけ。

くろ　面白くもねえ、今夜のぶち棒だ。

いぼ　オイ又此頃につき合ふぜ、ちつとおらが方へも出て來ねえ。

脚平　此頃に出て行かうよ。

いぼ　それぢやァ脚平、又逢ふぜ。

くろ　イヤ御馳走になりやした。（ト、やはり右の合方にて、兩人は花道へはひる。）

脚平　イヤとんだ奴が來やあがつて、五んつく丸で引つくり返して行きやあがつた、こいつァ伊勢屋でもう五んべい、わたりをしにやあならねえ。

ト合方になり、上手より以前の渡鳥、一升徳利と小さき風呂敷包みを持ち出來り、脚平のそばへ來て、

渡鳥　モシ脚平さん。

脚平　イヨウ渡鳥さん、よく來なすつた、まァ〳〵爰へかけなせえな。

渡鳥　ハイ、有難うござんす。
脚平　お前さうして何しに爰へ來なすつたのだ。
渡鳥　申し脚平さん。
脚平　何だ〳〵。
渡鳥　お前が爰に一人でゐやしやんすによつて、さぞ淋しい事であらうと思うて。
脚平　淋しいとも〳〵。
渡鳥　お酒を持つて來たわいなア。(ト德利を脚平の前へ置く。)
脚平　何だ酒をもつて來た、そいつァ有難え、こりやまァ夢ぢやねえか、まさか此中は水ぢやねえか。
渡鳥　えゝも憎らしい、そんな物を持つて來るものかいなア、其樣に疑はしやんすなら、私がお酌をする程に、一つ呑んで見やしやんせいなア。(ト脚平のそばへよる、脚平嬉しき思入にて、)
脚平　何だお前が酌をする、そりやあんまり勿體ねえ、お前の酌なら、水でもがぶ〳〵のんでしまふよ。
渡鳥　又そんな常談ばつかり、サァ一つのましやんせいなア。(ト脚平茶碗を取つて、)
脚平　呑まなくツてどうするものか。(ト渡鳥德利にて酌をする、脚平のんで、)これぢやさつきのクシヤミも本物だわえ。

渡鳥　さつきのクシヤミとはえ。

脚平　お前が噂をしてゐたといふことよ。

渡鳥　私が噂をしたわいなア。

脚平　ほんまに噂をしたか〳〵。（トだん〳〵渡鳥のそばへよろ、渡鳥又德利を取つて、）

渡鳥　サア、も一つどうでござんすえ。

脚平　なに、もう一つ、お前の酌なら一つどころか、十杯でも二十杯でも、續け吞みにやりてえのよ。

　　ト又酌をして脚平に吞ませて、

渡鳥　モシ脚平さん、私やちとお前に、お賴みがあるわいなア。

脚平　何だ賴みがある、何なりと言つたり〳〵。

渡鳥　外の事ぢやござんせぬが、此のお藏にゐやしやんす、缺皿樣に御飯が上げたうござんすが、どうぞ大目に見ては下さんせぬかえ。

脚平　何だ、缺皿樣に飯がやりてえ。

渡鳥　アイなア。

脚平　そりやいけねえ、缺皿樣は越度があつて、此の雜藏へ獄屋同然、めしも喰はせず寢かしもせず、

きつと張番してゐろと、奥樣からのきびしい言付け、これぱつかりはどうも出來ねえ。

渡鳥　それはさうでもござんせうが、此食籠を一つ入れるばかり、情と思うて見ぬ顏して下さんせいなア。

脚平　それ程に言ふのなら、見ねえ顏もしてやらうが、そこが物は相談だ、魚心あれば水心と、お前に日頃いふ通り、おれがいふ事を、うんといつて聞くならば、あの缺皿をひぼしにせうと又助けてやらうとも、此脚平が料簡次第、爰は一番考へものだぜ。

渡鳥　そんなら私が自由になれば。

脚平　お前の頼みも聞いてやるわ。

渡鳥　あのほんまでござんすかえ。

脚平　おいらは嘘はきつい嫌ひだ。

渡鳥　私もうそは嫌ひぢやわいなア。

脚平　それぢやあいよ〳〵、あのおれに。

渡鳥　私が自由になりたいわいなアっ（ト脚平により添ふ。）

脚平　お前がさういふ心なら、往來も稀な此の藏前、爰で手付にこつそりと。

ト渡鳥の手を取るをふり放して、

渡鳥　イヤ〳〵待つて下さんせ、さう急かいでもよいわいなア、此の食籠をあそこへ入れて、後で二人でしつぽりと、枕ならべて寢るわいなア。

脚平　そんならきつと、間違ひなしか。

渡鳥　うそは嫌ひでござんすわいなア。

ト これにて渡鳥思入あつて、食籠と包みを持ち、藏の戸の破れより內へ入れて、

もウし缺皿樣、嘸御空腹でござりませう、今暫くの其間、どうぞこれでお凌ぎなされて下さりませ、今宵の內にあなたをば、イヤサ、獄屋より尙せつない責苦、今宵の饑に食籠を。

ト ホロリと思入、脚平つか〳〵と傍へ寄り、

脚平　コレサ、いつ迄ぐづ〳〵いつて居るのだ、そつちのめしがすんだらば、是からおれが食傷するのだ。

ト 又渡鳥の手を取る。

渡鳥　そりや合點してゐるけれど、何ぼ淋しい所でも、往來中で恥かしい。

脚平　なに、かまふことがあるものか。

渡鳥　モシ脚平さん、よい事がござんす、幸ひ奥の廊下の端、缺皿樣の明き部屋で、積る話しをゆつくりと。

脚平　それぢやあ是から、部屋へ行て。

渡鳥　勝手覺えた庭口から、そつと忍んで二人一緒に。

脚平　そんなら直に。

渡鳥　サア、ござんせいなア。

　ト早き唄になり、渡鳥脚平の手をとり、上手へはひる。時の鐘凄き合方になり、下手の藪を押分け、眞吉頰冠り尻端折り、一本ざしにて出來り、あたりを伺ひ、

眞吉　渡鳥が手引にて、裏手から忍んで來たが、色仕かけで張番の脚平めを釣出した、此間に早く土藏をあけ、缺皿樣をお助け申さん。どうぞ人目にかゝらにやいゝが。

　ト時の鐘、眞吉土藏の戶口へ寄り、懷ろから合鍵を出し、錠をあけ、石の上へ置き、そつと戶をあけて內を窺ひ、

　缺皿樣々々。（ト內にて、）

缺皿　さういふ聲は、誰ぢや〳〵。

眞吉　ヘイ、正木の若黨眞吉でござりまする。

缺皿　ナニ、眞吉殿か。（ト土藏の口より缺皿、やつれたる拵へにて顏を出す。）

眞吉　アモシ。（ト押へる、時の鐘、合方。）お靜かになされませ。

缺皿　よう尋ねて來てくりやつたぞいの。

眞吉　さぞ御難儀でござりましたらう。まづ〳〵、これへお出でなされませ。

ト合方きつぱりとなり、眞吉缺皿の手をとり、介抱し乍ら莚の上へ連れて來る、缺皿つかれたる思入、眞吉見て、

缺皿　着物どころか身の內は、此通りぢやわいの。（ト手をまくり見せる。眞吉手の疵を見て、）

オヽ髮も亂れ、お召物も破れ、ひどい目にお逢ひなされましたな。

眞吉　どこもかしこも疵だらけ、お藥もおつけなさらず、さぞお痛うござりましたらう。

缺皿　をとゝひの夜母樣や、脚平に打叩かれ、疵を受けて其のまゝに、此の雜藏へ入れられて、三度の食はいふに及ばず、水を一口呑むことならず、打たれし疵の痛みにて、夜の目も合はぬ身の苦しみ、推量して下されいの。

眞吉　アヽおいとしいことでござりました、かほどの事とは存じませず、けふ渡鳥からの便りに聞き、

びつくりなして參りましたが、何をいふにも土藏の内、どうしたものと思ふ所へ、天の助けは紅皿殿が、あなたをお助け申してくれと、母御がかくしておかれたる、土藏の鍵を渡鳥へ、お渡しなされて下されたゆゑ、張番の脚平を色仕掛でつり出させ、首尾よくお助け申しました、これから正木の御別莊へ、お伴ひ申しまする。

缺皿　アヽ、それ聞いて落着いたわいの。

眞吉　モウ御難儀はおさせ申しませぬ、必ず御案じなされまするな。

缺皿　鰐の口を遁るゝも、義理ある中の紅皿が、土藏の鍵を渡せしゆゑ、繼子にくみの母樣に、打つて變りし志し、實の親子でありながら、あゝも違ふものかいなう。

眞吉　其の志しを無にせぬやう、これから直に御別莊へ、お連れ申せば大丈夫、もしやお出なさるのが知れた所で上と下、御家老樣へ對しまして、とやかう言つても齒はたちませぬ。何にいたせ少しも早くお伴ひ申しませう。

缺皿　最前聞いた父樣の、お身の上の事につき、正木樣のお力を、おかり申さにやならぬゆゑ、母樣の目にかゝらぬ内。（ト立上らうとして、體の痛む思入。）アイタヽヽヽ。

眞吉　アモシ、どうぞなされましたか。

缺皿　今の今迄氣が張つて、痛みもこらへて居たけれど、ヤレ嬉しやと思つたら、一度に身ふしが痛うなり、歩かれさうもないわいの。

眞吉　御尤もではございますが、此の構へを出ます內、御辛抱なされませ、外へ參らばお駕籠を雇ひ、お乘せ申して參りませう。

缺皿　どうぞさうしてくりやいの。

眞吉　サア、お手を取つてあげますから、そろ〳〵とおいでなされませ。

ト眞吉缺皿の手をとり、介抱なし、下手へ行きかける、此の時上手へ以前の天目出て、

天目　盜人待て。

缺皿　エヽ。（トびつくりなし、どうとなる。）

眞吉　なに、盜人とは。

天目　しまりの附きし土藏から、盜み出した其女、見咎められたがそつちの不運、命と共に置いて行け。

缺皿　扨は此場の、樣子をば。

ト誂への合方になり、

天目　殘らず後ろで聞いて居た。
眞吉　さういふおのれは、何者なるか、此家の内に見なれぬ顏。
天目　けふ初めて來たゆゑに、おれが顏は見知らぬ筈、此家の二度添片もひが、實の悴で三つの時、伯父の所へ養子に來た、須之助といふ横着者だ。
缺皿　扨はおのれが、須之助よな。（トきつといふ。）
天目　何だ義理あるお兄いさんを、須之助よなもねえものだ、三拜なして挨拶しろ。
缺皿　何でおのれを三拜しやう、兄といふのも汚らはしい、我が父上の仇敵。
天目　ヤ。（トきつと思入あつて、）此の須之助を、かたきとは。
缺皿　中仙道の烏川で、駕籠かきどもを語らうて、素太夫樣を討つたであらうが。
天目　ヤ、どうしてそれを。（トびつくりなす。）
缺皿　最前爰で駕籠かきが、おのれの仕業を脚平へ、話すを土藏の其内で、殘らず聞いて居たわいの。
天目　ヤ、ヤ、扨はきやつらがさがなき口に、我が事をしやべつたか、いめえましい。
ト此内眞吉思入あつて、
眞吉　スリヤ、これなる須之助とやらが、中仙道の烏川で、素太夫樣を打つたとか。

天日　駕籠かきめらがしやべつたを、聞かれたからは隱しやしねえ、いかにも繼橋素太夫を、烏川でおれが殺した。

缺皿　何の遺恨で父上を。

眞吉　非道の刃にかけたるぞ。

天日　草津の湯治で懇意になり、ちらりと見たる胴卷の、金に心もくらまぎれ、其身の運も月代に、泊り遲れた烏川、流れも早き渡し場で、水もたまらずぶつ放し、ぬれ手で泡の五十兩、せしめうるしやはぢもみぢ、血まぶれ仕事の水葬禮、慾の深みに罪科も、重荷小付の荷を持つて、金にしようと來て見りやあ、別れ程經た生みの親、企みの邪魔と聞いたゆゑ、敵の片割れ缺皿を、返り討に殺してやるから往生しろ。

ト此内眞吉差添を缺皿に渡す。

缺皿　かよわき女の事ゆゑに、返り討に討たるゝとも、親の敵の須之助め、一と太刀でも討たいでおかうか。

眞吉　折よく爰へ來合せし、此眞吉もかゝる緣、及ばずながら、助太刀なし、

缺皿　倶に天を戴かぬ。

眞吉　素太夫樣の仇敵。

缺皿　サア、尋常に、

兩人　勝負なせ。

ト兩人きつとなる。天目及ばぬことだといふ思入にて、

天目　ム、ハ、、、、しやらくせへ敵呼ばゝり、拳もにぶきやせ腕で、此の須之助を殺さうとは、天道樣へ石なげ同然、たゞ一刀に二人共、殺すは造作もねえけれど、憎まれるのがいやだから、手向ひせずに討たれてやらう、サア腕からでも足からでも、望み次第の所から切りやれ。

ト天目片肌ぬいで、兩人の前へ手を出し、せゝら笑ふ。

缺皿　ヤア、人もなげなる其の廣言。

眞吉　にぶき腕でも、一生懸命。

缺皿　やはか討たいで。

兩人　おくべきか。

天目　何を小しやくな。

ト白はやしのやうな誂への合方になり、缺皿眞吉ぬきつれて切つてかゝる、天目は無刀にて、立廻り

缺皿つかれし思入にてへたるを、眞吉介抱なし、天目へ切付れど切れぬゆゑ、心得ぬ思入にて、

缺皿　ヤ、正しく切りしと思ひしに、

眞吉　毛筋程も疵の付かぬは、

天目　切つても切れぬ不死身だわ。

兩人　ヤ、ヽヽ、(トびつくりなす。)

天目　世にも稀なる銘刀で、なくつちや切れぬ不死身の體、うぬが親仁が失つた、小月形の一腰をたづね出しておれを討て、高の知れたる生くら刃金で切れるものか。

缺皿　ちえゝ現在敵に出會ひ乍ら、

眞吉　討つことならぬか。

缺皿　口惜しやなア。(ト兩人口惜しき思入、天目缺皿が手をとり、)

天目　サア缺皿、親の敵を討たねえか、イヤサ、此の刃で切らねえか。

　ト刃で我腕を引かせる、缺皿口惜しき思入、天目缺皿を突き放し、眞吉の襟上をとり、引きつけ、

コリヤ助太刀すると言つたぢやねえか、サア、切れ〳〵、エヽ切らねえのか。

　ト眞吉をこづき、つき倒す、兩人チエヽと思入。

うぬらが切れぬ其の替り、おれが二人を切つてやるから、言ひ置く事でもあるならば、息のある内ほざいておけ。

缺皿　エヽ、切つても切れぬ不死身ゆゑ、討つ事ならぬのみならず。

眞吉　おのれに命をとらるゝか、思へば〳〵口惜しや。

天目　モウいふ事はそれぎりか、毒食はゞ皿、憎まれついでに、生かさず殺さずさいなんで、嬲り殺しにいたしてくれう。

ト天目きつと思入、ドン〳〵ばた〳〵になり、上手より天目法印慈姑かづら、輪袈裟を掛け、異形の怪刀をさし、衣をかゝへ出來り、

法印　コレ悴、二人はおれが殺すから、手前は早く爰をにげろ。

天目　なに、にげろとは。

法印　さつき手前を載せて來た駕籠舁きが、夜廻りに捕へられて詮議に逢ひ、手前の惡事をしやべつたので、捕手が爰へ來るとの噂、來ねえ内早くにげろ。

天目　スリヤ、あいつらが捕へられ、おれの惡事をしやべつたか、そりやかうしちや居られねえ。

ト天目衣を着始めて、

法印　出口を圍んで居ようから、法印姿に樣をかへ、利根を渡らず山越しに。
天目　成田道から鹿島へ拔けよう。
法印　夜明けぬ内に、ちつとも早う。
天目　そんなら父さん。
眞吉　われをやつては。（ト支へるを）
天目　何をこしやくな。

ト早き合方になり立廻り、法印は缺皿を引付ける、天目眞吉へ切つてかゝる、眞吉拔き合せちよつと立廻つて天目に切立てられ、たぢ／＼となり、土藏の口へ行當り、あやまつて内へ倒れる、天目直に戸を立て、あり合ふ錠をおろす、法印は此の内缺皿と立廻り居て、

缺皿　ヤ、賴みに思ふ眞吉殿を。
法印　土藏へ入れたは、悴出かした。
天目　これで奴は袋の鼠。
法印　手前も落しにかゝらぬ内。
天目　そんなら父さん。

法印　ちつとも早く。
天目　オヽ、合點だ。
ト早き合方、時の鐘の送りにて、天目逸散に花道へはひる。缺皿追かけ行かうとするを、法印留め、
法印　ヤア。(ト法印びつくりなす。)
缺皿　常日頃から兄弟とは、合點行かぬと思ひしが、それで樣子が知れたわいなア。
法印　イヤ實の兄弟といつた所が承知もしめえ、お先狐は使はぬが、是迄化した我企み、尻尾を見られた上からは、包みかくさずいつて聞かせる、冥土の土產に聞いておけ。
缺皿　何と。(ト誂への凄き合方、虫の音になり、)
法印　いかにもうぬが察しの通り、あの片もひはおれが女房、いぜんは武州熊谷で、田舍あるきの旅修驗、晦日々々の釜じめに、二合三合もらつても、五合酒をくらふので、一升袋は一升と、年中足らぬ貧乏ぐらし、がきさへ邪魔に三つの時、捨子同樣着の儘で、此の房州の弟へ、養子にくれたあの須之助、二度目に出來た紅皿が、生れて間もなく置ざりに、四五年後から爰へ來て、かくれて居たもかぎ附けられ、娘を連れてわざ〳〵と、尋ねて來られて仕方なく、どうしたものと思ふつぼ、うまい話に蓋をして、妹の積りで素太夫へ、おさすりやとひにはめこんだも、元が宿場

の飯盛に、うまく食して御新造樣、亭主が死んだら表向き、兄のつもりでしけこんで、内證は夫婦で暮す積り、かねての企みを知られたゆゑ、包みかくさず打ちまけたは、天目が身のさんげさんげ六根性根の惡黨に、其の店おろしか神おろし、取るに足りねえ十二銅、ひねり殺すぞ、覺悟しろ。

トきつと思入、一つ鉦になり、

缺皿　かゝる企みのある上に、敵の片割れ天目法印、おのれも恨みはあるけれど、かよわき女の其の上に打ちたゝかれし此の疲れ、やみ〳〵爰で殺されうか、チエ、口惜しやなア。

法印　やみ〳〵殺すは惜しいものだが、腹の企みを聞かした上は、生しておいちやあ後日の妨げ、モウ十年も若けりや、なぐさんでやるのだが、そんな事をするのも面倒、近所に佛があるかして、鉦もあはれな枕念佛、丁度あの世の導きに、どれ、一ト思ひに殺してくれう。

缺皿　叶はぬ迄も此まゝに、非道の刃にかゝらうか。

トさしぞへを杖に立上らうとして、どうとなる。

法印　エヽ秋の末のひよろ〳〵蚊、足手もろくに利かねえくせに。（ト土藏の内にて、）

眞吉　エヽ、出るに出られぬ土藏の內、助けにやならぬ缺皿を、見殺しにするか、情なや。

法印　オヽ、今にわれも殺してやるから、そこで見物してゐやれ。

缺皿　所をかうして。

法印　ほててんがうをしやあがるな。

ト法印缺皿を蹴る、又きつてかゝるを身をかはしてちよつと立廻り、きつと見得。これより誂への鳴物になり、缺皿切つてかゝりてはどうとなり、からだの利かぬ立廻り、法印一腰をぬき立廻つて、缺皿の刀を打落す、これにてどうとなるをのつかゝり殺さうとする、ドロ〳〵になり、土藏の戸口に張つてある仁王の御影さしがれにて、法印の目先へ飛來り、支へる思入、法印これにて殺しかれ、後へ下り又立掛り、たぢ〳〵となる、これにて缺皿起上り、刀を取上げ又立廻る、此内知らせなしに、此の道具半分廻り、畫心に土藏の横手を見せ、ドロ〳〵になる。

何だか目先へちら付て、取るにも足りねえめそツ子を、殺す事がならねえか。

ト始終法印支へられる思入の立廻り、缺皿に足をきられ、たぢ〳〵として、横手の藏の壁へとんとあたる、此時内より白刃出て、法印を貫く、法印あつといつて前へ倒るゝ、後ゝ藏のかべをばら〳〵と切破り、眞吉拔身にて出て、きつと見得、缺皿見て、

缺皿　ヤヽ、眞吉殿か。

眞吉　缺皿樣、御無事でござりましたか。
缺皿　オヽ、淺手一ツ負はぬわいの。
眞吉　チエヽ忝い。（ト眞吉舞臺へ出る、法印血糊になり、立上り。）
法印　ムヽ、うぬ突きやがつたな。
眞吉　オヽ、外で打合ふ刃音を聞き、一生懸命木舞をきり、突き出す途端におのれをば、突いたは則ち天の助け。
缺皿　最早叶はぬ天目法印、企みし惡事の報いと思ひ。
眞吉　覺悟きはめて、
兩人　往生なせ。
法印　深手を負うても天目法印、うぬらにやみ〳〵殺されうか。
兩人　何を小しやくな。

トドン〳〵早き合方になり、法印眞吉はげしき立廻りの內、此內缺皿ひよろ〳〵と入り、法印を切らうとするを、眞吉支へる立廻りの內、道具元へ戻る。眞吉法印の刀を打落し、取らうとするを肩先を切付ける、法印たぢ〳〵となる、缺皿咽元へつッ込む、法印苦しみ、

法印　エヽ、手にも足らぬと侮つて、不覺を取つたか、いめえましい。
　　トきつと見得、缺皿白刃を突込みしまゝどうとなり、後ろへ倒れる。法印突かれしまゝ缺皿の上へ立ちかゝろ、缺皿ぞッとせし思入、眞吉の突き込みし刃に手をかけ、法印たぢ〳〵と後へ下り刃物を拔く、法印よろしく苦しみ、ばつたり倒れる、眞吉件の刃物を缺皿に持たせ。

缺皿　天命思ひ知つたるか。
　　ト止めをさす。ばた〳〵になり、下手より前幕の紅皿走り出來り、

紅皿　ヤ、姉樣情ない事になりましたわいなア。（トハツと泣き伏す。）

缺皿　そなたは紅皿、どうしやつた。（ト紅皿涙をぬぐひ、合方になり、）

紅皿　今更いふも情ない、最前來たる侍が三ツの時に別れたる、私が實の兄さんにて、母樣との話をば聞いてびつくり父樣が、三年後に失ひし小月形を盜みし上、又もや草津の湯治場で、お出合ひ申して父樣を、烏川で殺害なし、路用の金を取りしとやら、いかなる因果な事なるかと、一間で泣いて居る中に、其の兄さんもどこへやら、行方の知れぬ其の後へ、殿樣の御上意にて、捕手の衆がお出でなされ、母樣へ繩をうち、お引きなされてござりますわいなア。

缺皿　ヤヤ、母樣には繩目に逢ひ。

眞吉　お上へ引かれてござりましたか。

紅皿　此事お知らせ申さんと、爰へ來かゝり、最前からの樣子を聞いて又びつくり、これ迄伯父と思つたが、私の實の父さんにて、母樣との惡企み、揃ひも揃ふ親子の者、私も一つと姉さんに思はるるのが口惜しい、私や一つでござんせぬわいなア。（ト泣き伏す。）

缺皿　オヽ其言譯には及ばぬ事、そなたが一つでないことは知つて居るわいなう。

紅皿　アヽ嬉しうござんす、其のお詞を聞く上は、心に掛る事もない、少しも早う。

ト紅皿立ちかゝるを缺皿とめて、

缺皿　アヽコレ妹、きつさうかへてどこへ行くのぢや。

紅皿　生きながらへて人樣に、後ろ指をさゝれうより。

缺皿　何と言やる。

紅皿　姉さん、さらばでござりまする。

ト ふり拂ひ、寺鐘ばた〳〵にて、紅皿逸散に花道へはひる。

眞吉　ヤ、こりや紅皿殿には。

缺皿　まさしく入水なす樣子。（ト缺皿追かけようとして、行かれぬ思入。）妹が後を追かけて留めて下さ

れ、眞吉殿。

眞吉　とはいへあなたを、爰へ置いて。

缺皿　後氣遣はずと、少しも早う。

眞吉　オヽ合點だ。

ト時の鐘の送りにて、直吉逸散に花道へはひる。缺皿後を見送り、どうとなる、時の鐘を打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽後見送りて缺皿が、頼む小影も泣く涙晴れぬ思ひの雨空に、亂るゝ雁のとつおいつ、

ト缺皿向うへ思入あつて、

缺皿　どうぞ恙なければよいが。(ト床の合方になり、)是に付けても父様を、殺せし上に大切な、小月形を盜みし須之助、恨みに恨み重なれば、落行く後を追ひかけて、小月形を取戻し、敵を討たねばならぬけれど、何をいふにもかよわき女子。

〽殊には繼しき母様に、打ち叩かれて身節の痛み、歩くことさへ人なみに、ならぬ此の身に是非もなし。

男であらば後追ひかけ、假令不死身であらうとも、小月形さへ手に入らば、世にも稀なる銘作ゆ

る。

〽親の敵が討たるゝに、討つことならぬか情なや。

此身に力がほしいわいの。

〽我身をかこつ折からに、目先へ散り來る仁王の御影。

ト風の音になり、さしがねにて以前の仁王の御影缺皿の前へ落ちる。

〽缺皿きつと打見やり、

ト缺皿とり上げ見て、

ヤヽ、こりや芝山の仁王の御影、どうして爰へ落散りありしか。（ト思入あつて）

思へば最前天目に、殺さるゝのを助かりしも、此の御影のお助けなりしか。

〽あら有難やと押頂き、

此の御影に祈誓をかけ、力を添へてたまはらば、たとひ敵が鬼にもせよ、討てざることのあるべきぞ。

〽さうぢや〳〵と打ちうなづき、（トこれより誂へ祝詞樣な合方になり。）

なむ芝山の仁王尊、靈驗あらたにましまさば、金剛力を授けたまへ。

〽奪ひ取られし里見の重寶、小月形を取戾し、父の敵の討たるゝやう。
守らせたまへ〳〵。

〽一心籠めてふし拜み〳〵、御影を丸め吞まんとせしが、

ト缺皿件の御影を丸め、吞まんとせしが、

此の願ひが叶はずば、生きて甲斐なき此の缺皿、一命取らしたまはるやう。

〽願ひ叶はゞ力を添へ、本望とげさせたびたまへと、吞めばのんどにつかへる御影、扨は願ひの叶はぬかと悶え苦しみそのまゝに、うんとばかりにたふれ伏す。

ト此內缺皿よろしく御影を吞み、苦しみばつたり倒れふす。

〽折から爰へ脚平が、のみとり眼で出來り、

脚平　渡烏め、どこへ行つたか、おれをうまく擔ぎやあがつたか、もう手みじかにふんじばり、日頃の思ひを晴らさにやおかぬ。

〽言ひつゝ躓きすかし見て、（ト脚平缺皿に躓きすかし見て、）

ヤア、爰に寢てるは缺皿樣、誰が藏から引出したか、何にしろ後烏に、氣をもまされた其代り器量もすぐれた缺皿樣、とりかへものにはよつほど德、こいつは天の助けだわえ。

〽舌打ちなして野良猫が鼠をとりし如くにて、抱き起してじやれかゝれば、其手をねぢ上げねぢかへし、缺皿すつくと立上り、

ト脚平缺皿を抱きおこし、戯れかゝるを、缺皿つきのけ立上り、

缺皿 主をとらへててんがうなす、あの、こゝな慮外者めが。

〽常に替りし缺皿が、様子に脚平びつくりなし、(ト脚平びつくりなし、)

脚平 ヤ、こりや、缺皿様には、どうしたのだ、最前迄は打たれたる、疲れに手足もきかざりしが。

〽いふに扨はと心付き、

缺皿 今迄心附かざりしが、打ち叩かれし痛みもなく、五體に力の付きたるは、まさしく祈りし芝山の仁王尊の御利益なるか。

〽あら有難やうれしやと、天地を拜し悦ぶにぞ。

脚平 たとひ仁王の利益にせよ、高の知れたる女のやせ腕、何程の事あらう。

〽又も組付く脚平が小腕取つてずでんどう折から來る中間ども、これを見るより抱きおこし

ト脚平組附くをふりほどき、ちよつと立廻つて投げのける、下手より前幕の中間○△出來り、

○△ コレ脚平、どうしたのだ。

脚平　オヽいゝ所へ中間の奴等、此の缺皿をなぐさむのだ、手前にも振舞ふから、ひつ擔いで行つてくれ。

○　そいつァ何より耳よりだ。

△　助でつぱうをしてやらう。

〽羽がひじめに後ろよりしめに掛れば身をひねり、足をすくつて投げのければ、前からさうはと組付くを小手を拂つて目つぶしに、しりへにどうとたふれ伏す。

トこれより誂への鳴物になり、缺皿中間二人を相手に立廻りよろしくあつて、

〽どつこいさうはと兩人が、一度にかゝるを缺皿が、右と左りに犬ころ投げ脚平見るよりあきれ果て、

ト此内○△缺皿の手を捕へるを振拂ひ、見事になげのける。脚平あきれし思入。

脚平　どうでもこりやあたゞぢやあねえ、仁王尊がのりうつッたか。

兩人　女に稀な馬鹿力。

〽手並におそれて兩人が、尻込みなせば缺皿悦び、（ト缺皿嬉しき思入にて、）

缺皿　仁王尊よりお力を、授かりし上からは、須之助が後追かけ、小月形を取戻し、父の敵を討ちとら

ん。

〽勇み立つたる折しもあれ、四方に響く螺の音に、

ト此内兩人掛るを投げ附け、きつと見得、兩人は下手へ逃げてはひる。此の時下手揚幕にて、竹ぼらを吹く、缺皿思入あつて、

ヤ、合點行かざる、あの螺の音。

脚平　殊にはあまたの人聲は。

缺皿　コリヤたゞ事ではあらざるわえ。

〽ふしぎを立つる此方より、渡鳥あわて走り出で、（トばた〳〵になり下手より渡鳥出來り、）

渡鳥　缺皿様、これにお出でなされましたか、一大事でござりまする。

缺皿　ナニ、一大事とは、何事なるぞ。

渡鳥　此程よりの長じけに、

〽秩父山を始めとして、武州上州兩國の、山より落來る水溢れ、一丈あまりの洪水にて、

樹木家屋も押流し、

用意の堤も皆きれて。

〽坂東太郎へ押來り、お內もあやふくなる程に、

鴻の臺へ落ちたまへ。

〽いふに人々打おどろき、（ト此內渡鳥注進模樣にてよろしくあつて）

缺皿　ヤ、スリヤ、此程より噂の如く、早洪水となつたるか。

脚平　イヤ、人の話は大がい半分、左程の事でもあるまいよ。

〽缺皿きつと身がまへなし、

缺皿　此の洪水では須之助も、よもや遠くへ走るまじ、後追かけて、此の身の本望。

〽行くをやらじと止むる脚平、振り拂つてかけ出せば、渡鳥すかさずねぢふせて、

ト缺皿行きかけるを、脚平留めるを振拂ひ、つかつかと花道へ行き、渡鳥脚平を引附ける。

渡鳥　ア、モシ、後氣遣はずと。

缺皿　オヽ、合點ぢや。

〽忠孝二つを身一つに、勇み進んで、

ト三重ばたばた、螺の音にて、缺皿向うへはひる。

〽後に渡鳥脚平が、行くをやらじと留めるにぞ、

脚平　モウ此上は渡鳥め、可愛さあまつて憎さが百倍、うぬが命は貰つたぞ。

渡鳥　さういふおのれも惡事の荷擔人、生けてはおかれぬ覺悟しや。

〽切つてかゝれば渡鳥も、落ちりありし刃を拾ひ、受けつ流しつてう／＼女乍らも一心に、負けず劣らず、

ト脚平切つてかゝる、渡鳥落ちゐる法印の一腰を拾ひ立廻り、淨瑠璃の切れ、早鐘、竹ぼら、浪の音合方にて、兩人立廻り、脚平肩先を切られ、存分立廻りあつて、よき見得にて、知らせに付き、誂への浪幕をふり冠せ、浪の音にて百姓多勢蓑笠にて竹螺を吹き、土俵を擔ぎ、洪水の捨ゼリフにて上手へはひる。道具出來次第、浪幕を切つて落す。

（眞間在洪水の場）――本舞臺花道へかけ、一面誂への浪布をしき、雨落より浪手摺を出し、眞中に莫大なる茅葺屋根、破風造り、誂へあり、向ふ奥深に鴻の臺の遠見、一面に洪水の書割、所々に樹木の梢屋根を見せ、總て洪水の體よろしく、浪の音、竹螺、三重にて道具納まる。

〽おし寄する水追ふ聲のかまびすしく、堤々に鉦太鼓、打ちつどひたる百姓が、ふせぐ土俵を打ちこして、一丈あまりの洪水に、多く家居も押流され、いと物凄き利根川縁、逆卷く水

を須之助が拔手を切つて泳げども、水勢早く流されて、やう〳〵目ざす茅屋根へ這ひ上りて溜息つき、

ト此内かすめて右の鳴物、よき程に上手より、舞臺前浪手摺の內へ以前の天目須之助、刀を下緒にて背中へはすに背負ひ、泳ぎながら出來り、水に流されるこなしよろしくあつて、茅屋根へ泳ぎつき、上へのぼり、家の棟にてほつと思入あつて、

天目　思ひがけねえ洪水に、行く先々が一圓の、湖水になり行くことならず、鴻の臺へと志し、かねて覺えし水練にて、道から取つて返せしが、水勢早き坂東太郞、拔手を切つても押流され、既にもくづとなる所、此家の棟へ泳ぎつき、危ふき命を助かりしは、正しく所持なす小月形、此の銘刀の奇特なるか、まだ武運にも盡きぬと見える。

へ衣類の水を押ししぼり、しばらく休む其所へいかゐの墨太が盥にのり、浮きつ沈みつ流れ付き、

ト下手より墨太盥にのり、よろしく屋根へ流れつき、直に這ひ上り、天目に心づかず、

すみ　ヤレ〳〵ひどい目に逢つた、然し水のお蔭で繩目を許され、盥にのつてやう〳〵と、此の屋根へ流れ付いたが、夜が明けたら御領主から、助舟が出るだらう、まづ爰で一息つかうか。

〽いふ聲聞いて須之助が家の棟よりすかし見て、(ト天目すみ太を見て、)

天日 さういふわれは、すみ太ぢやねえか。

〽思ひがけなき聲にびつくり、

すみ ヤ誰かと思つたら須之助樣か、お前に逢つちやあ面目ねえが、何事も此の大水、さつきの事は許して下せえ。

天目 して、いぼ藏は、どこへ行つた。

すみ わつちと一緒に許されたが水心が少しもねえから、慥に水に流されて、土左衛門になつたらう。

天目 聞きやあ手前達ア里見の廻りにつかまつて、行つたさうだがどういふ事でくれえ込んだ。

すみ お前の所から五兩とり、懐のいゝ所から、立場酒屋で一升明け、いぼ藏野郎が喰え醉ひ、うぬが惡事をべら〳〵しやべり、所の番太に見付けられ、里見樣へ引かれたが間もなく後へ來た女、ハテ見たやうだと思つたら、さつきお前と一緒に行つた繼橋樣の御新造ゆゑ、どうした譯と聞いたらばお前ゆゑだといふことだ。

天目 スリヤお母あが縛られしとか、扨は惡事が露顯したな。

すみ ありやお前のお袋で、親仁といふのは修驗者の天目法印だといふ事だが、其の法印殿も缺皿にさ

つき殺されたといふ話し、まだお前聞きやしめえの。

天目　オヽ親仁が殺されたは、今聞くが初めてだが、きやつが親仁の素太夫を、おれが手にかけ殺したから、それで敵も五分々々だ、何しろ此刀を何處ぞへはめて金になし、高ふけりをしてえものだ。

すみ　賣るとあるなら其の一腰、わつちが世話をしてやらう。

〽取りに掛るを須之助が、拔く手も見せず切付くれば、

トすみ太取りに掛るを天目拔打ちに切る。

ヤ、こりや、何でおれを。

天目　何でとは知れた事、さつきの遺恨がある故に、命を取らにやあ腹が癒ねえ。

すみ　こいつアたまらぬ。

〽逃出せしが屋根の上、あたりは出水にせん方なく、ぬけつくゞりつ逃げ行くを、水もたまらず切倒せば、もんどり打つて死してんげり。

ト此立廻りの内ぐる／＼と屋根廻り、正面へ屋根の破風を見せる、此の屋根の棟にて天目すみ太を切る、すみ太見事に下へ返り込む、天目棟の鼻にて見得。

〽折しも破風の煙出しより、つき出す白刃に切破り、窺ひ出たる缺皿が見上げるとたん雲晴

れて、月の光りに見合す顏。
ト煙出しを切りやぶり、缺皿拔身を持ち出て見上げる、此時灯入り誂への月出て、兩人顏見合せ、誂への合方になり、
天目　ヤ、わりや缺皿か。
缺皿　さういふおのれは、須之助よな。
天目　思ひがけねえどうして爰へ。
缺皿　親の恨みを晴らさんと汝が後を追ひかけて來かゝる道を遮ぎる出水、行くに行かれず仕方なく水の引くのを此家にて待つに甲斐ある家の棟へ、計らず汝が來りしは、此身に力を添へたまふ仁王尊の引合せ、退れぬ所と覺悟して、三年後に盜みたる、小月形を我に返し、尋常に勝負しや。
〽以前に變る缺皿が、樣子に須之助打ちおどろき、
天目　ヤ、最前迄も打たれたる疵に五體の利かざる缺皿、打つて變りし此の體は。
缺皿　仔細あつて打たれたる身節の痛みもどこへやら、常に勝りし我體
天目　さう聞く上は尋常に、此の場で勝負をしてくれう。
缺皿　まづ差當る小月形、其の一腰をこちへ渡しや。

天目　ほしくば遣らう、取つて見ろ。

缺皿　やはか取らいでおくべきか。

天目　こしやくな事を。

〽刀小脇に立上る、仁王と仇名の天目須之助、此方も仁王の力を借り、男勝りの缺皿に、渡せやらじと爭ふも、阿吽の息のいどみ合ひ、

ト天目缺皿小月形の刀をかせに立廻り、文句の切、やはり螺の音、鐘太鼓の入りし誂への鳴物になり、兩人茅屋根をすべり落ちては這上り、屋根の立廻りあつて、此内家を廻し、以前缺皿が出たる破風の穴へ天目逃げ込む、缺皿穴より白刃をさし付けきつと見得、これにて道具畫心になり、天目茅屋根を切破り、半身出しきつと見得、缺皿うら手より廻り覺悟と切付ける、天目飛上り、立廻りとなる。

〽果は互ひに切結び、てう〳〵はつしと二打三打、四の五の言はずとくたばれと、切り込む拍子に茅屋根の穴へ片足ふみ込む須之助、直に付け入る缺皿が、刀をてうと打落し、手早く取上げ打見やり。

ト此内立廻りあつて、天目以前の穴へ片足落す、缺皿附入り、天目の刀を打落し、取上げ見て、

缺皿　これぞ正しく、小月形。

天目　南無三、それを。

〽穴より上る須之助が、肩先てうと切附くれば、名に負ふ名譽の小月形、不死身も切れて流る〻血汐、

ト天目とび出す所を缺皿小月形にて切附ける、天目糊紅になり、竹笛の合方。

天目　かよわい女にやみ〳〵と、小月形を奪ひかへされ、賴みに思ひし不死身さへ、銘作ゆゑに深手を負ひ、爰で命を捨つるのもがきの折から此の年迄、つもる惡事の皆報い人は恨まぬ此身の罪科、天道樣の御成敗だ、最早叶はぬ天目須之助、手向ひはせぬ缺皿殿、此首きつて此方の親御、素太夫殿へ手向けて下せえ。

〽どつかと座して須之助が、首さしのべて覺悟の體、

缺皿　オヽ、惡につよきは善にもつよしと、流石は須之助よい覺悟、そちが首は貰うたぞ。

〽後へ廻り振り上ぐる刀の光り見るよりも、（ト缺皿後ろへ廻る。）

天目　所をおれが、

〽落ちる刀を取るより早く、切つてかゝればてうと受け、

ト天目隙を窺ひ、缺皿の刀をとり、きつとなるを缺皿受けとめ、

缺皿　大方さうであらうと思うた。

天目　何を。

〽手負乍らも强氣の須之助、又もするどく打合ひしが、金剛神の守護といひ、名に負ふ孝女の缺皿が直なる刃に敵し難く、數ケ所の手を負ひ骨も通れと突き貫かれ、虛空をつかんで七轉八倒、呼吸の息も絶々に、刀を拔けばがつくりと、死骸はうづ卷く水の中、落ちてはかなくなりにけり。

ト此内立廻りあつて、天目だん／＼切られよろめく所を、脇腹へつッ込みゑぐる、是にて天目のり紅になり、立身にて苦しみ、缺皿刀を拔く、天目屋根の上より後ろへ倒れ、水の中へ落入り、どんと水音、水の花ぱつと立つ。

〽缺皿ほつと息をつき、（トこれより床二挺の合方にて、缺皿思入あつて）

缺皿　エヽ忝けなや嬉しやなア、三年此方尋ねたる、小月形の一腰が、思ひがけなく手に入りしも、仁王樣の皆御蔭、少しも早く御上へ差上げ、亡き父樣の汚名を雪ぎ、又母樣も御無事にて、お歸りある樣お願ひ申さん。

〽とはいふものゝ此樣に、右も左りも皆水にて、

わづか五丁か六丁でも。
〽翼があらば知らぬこと、行くことならぬ此の洪水、
首尾よく寶は手に入りながら。
〽みくづとなすか情なやと、途方に暮るあなたより、丸太にすがり眞吉が、水を横ぎり泳ぎ
來て、
ト花道揚幕より三間程切落し、波手摺の蔭へ眞吉、丸裸鉢卷、腹帶をしめ背中へ一腰をさし、誂へ
の丸太を抱へ、泳ぎ出て顏を上げ、

眞吉 缺皿様か。

缺皿 オヽ、眞吉殿か。(ト眞吉流される思入あつて、)

眞吉 紅皿様はお助け申し、渡鳥諸共鴻の臺へ、お逃し申してござりまする。
ト浪の音はげしく、流される思入、缺皿ものび上り、

缺皿 よう助けてくれた忝ない、それに付いて頼みがある、早う爰へ來て下されいの。

眞吉 參ります氣でござりますが、何分にも此の水勢。
〽拔手を切つて泳げども、はげしき水に流さるれば、

ト眞吉だん〳〵揚幕の方へ流され行く。

缺皿　アコレ〳〵眞吉殿、そなたに賴みは外ならず、今此所で父樣の、敵須之助を討取つて、紛失なせしお家の重寶、小月形の一腰が、首尾よく我手に入つたる故、これをお上へ差上げたい、どうぞ助けて下されいなう。（ト小月形の刀を出して見せる。）

眞吉　オヽ、そりやお出來しなされました、只今お助け申しまする。

〽いふ間に早くも押流され、氣も惑亂に眞吉があせれど早き水勢に浮きつ沈みつ流されて、あはひはるかにへだゝれば、

ト波の音はげしく、眞吉流される思入にて、揚幕へはひる。

〽缺皿はのび上り、

缺皿　眞吉殿いなう。

〽呼べど答へもあらしふく、秋のならひに照る月も、雲間へいりて見え分ねば、

ト月かくれ、缺皿向うの見えぬ思入にてどうとなり、

よき力ぞと思うたが、眞吉殿が流されては、賴みの綱も切れ果てしか。

〽ハアとばかりに泣きふして、かこち涙にくれたりしが、氣を取り直し起上り、

ト欠皿思入あつて、

オヽ、此の身は愛で死するとも、

〽父樣の敵を討つ小月形の一腰を、取得し上は身の本望、何れいづくへ流されて、底のみくづとなるとても、悔む所はなけれども。

北條家より御懇望にて、なくてならざる此の一腰、恙なく屆くやう。

〽願ふは芝山仁王尊、力を添へてたびたまへ。

南無仁王尊々々々々。

〽一心こめてふし拜めば、

トこれを浪の音になり、下手より數馬、左近太郎、兩人野袴ぶつさきにて、紅皿振袖、渡鳥腰元にて、眞吉好みのなりにて擢をつかひて船にのり出來り、

紅皿 あれ〳〵、向うに姉樣が、

渡鳥 眞吉殿、早うお舟を。

眞吉 心得た。(トだん〳〵に漕ぎつき)

數馬 欠皿これにおはするか。

缺皿　おゝ數馬樣、御家の寶小月形の劒、やうく手に入りましたわいなァ。
數馬　それ、左近太郎。
左近　ハァ。（ト劍を受取り、數馬に渡す。これを見て、）
數馬　これこそ尋ぬる小月形の劒、取戻したる功により、孝心深き缺皿殿には、かねて聞入る仔細もあれば、左近太郎に嫁ぎいたし、御家大事を忘れぬやう。
左近　そりやそれがしに、缺皿殿を。
數馬　數馬媒介いたしましたぞ。
缺皿　かねての願ひ左近樣、有難うござりまする。
紅皿　さうぢや。（ト懷劍を拔き、自害仕ようとする、渡鳥眞吉とめて、）
眞吉　こりや何ゆゑの、
渡鳥　御生害で、
兩人　ござりまする。
紅皿　何ゆゑとはお情ない、惡心深き親々が、お家に仇を爲したる罪、私や生きてはゐられませぬ、それぢやによつて。（ト又突かうとするを兩人とめて、）

數馬　イヤ死ぬには及ばぬ、たとひ親々惡人なりとも、汝の孝心上聞に達したれば、此の數馬が刀にかけ、繼橋の家名相續いたさせん。まつた眞吉渡鳥は某媒介いたすにより、尚も忠義を勵まれよ。

左近　殘る方なき數馬樣の御計ひ。

缺皿　私の家名の立ちますも。

紅皿　あなた樣の皆お蔭。

眞吉　御恩は、

渡鳥　必らず、

五人　忘れませぬ。

數馬　寶手に入る上からは、君へ差上げ、お家の納まり、皆々忠義を、

ト持ちかへるを、木の頭。

盡されよ。

ト此仕組よろしく、あつらへの鳴物にて、よろしく

幕

紅皿缺皿（終り）

（附錄）主なる興行年表

桶狹間

年時	明治三年八月	明治十五年九月	明治十七年六月	明治三十四年七月
座名	守田座	春木座	新富座	歌舞伎座
名題／役割	狹間軍記鳴海錄	桶狹間鳴海軍談	桶狹間鳴海軍談	桶狹間鳴海軍談
義元	中村芝翫	市川權十郎	市川左團次	中村芝翫
幸內	尾上菊五郎	市川權十郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎
おさみ	澤村田之助	澤村田之助	澤村源之助	尾上榮三郎
犬淸	澤村訥升	助高屋高助	坂東家橘	市村家橘
藤吉	中村芝翫	市川小團次	尾上松助	市川八百藏
吉野	岩井紫若	澤村田之助	澤村田之助	尾上榮三郎
左近	中村仲藏	市川壽美藏	ナシ	片岡市藏
朝務	岩井紫若	中村かほる	坂東秀調	市川女寅
葛山	市川左團次	市川壽美藏	尾上松助	片岡市藏

島の徳藏

年時	明治三年二月	明治十年十月
座名	市村座	喜昇座
名題／役割	寶萊曾我島物語	當寶萊島譚
徳藏	河原崎權之助	坂東鶴藏
渦丸	市川九藏	市川團升
おなぎ	尾上菊次郎	中村十藏
嘉平次	關三十郎	中村時若
角左衞門	中村福助	中村時藏
小十郎	中村福助	坂東橘藏
三木之進	嵐璃鶴	坂東橘藏
徳太夫	坂東太郎	坂東橘十郎

後風土記（鳥井强右衛門、小宮内膳）

年時	明治四年一月	明治十七年二月
座名	守田座 市村座	新富座
名題	碁風土記魁升形	碁風土記劇本讀
常右衛門	中村芝翫	尾上菊五郎
内膳	河原崎權之助	市川團十郎
小八郎	坂東家橘	市川團十郎
丹後	中村仲藏	中村仲藏
又七郎	市川左團次	尾上菊五郎
柵	中村芝雀	助高屋高助
勝頼	澤村訥升	助高屋高助
白妙	坂東三津五郎	岩井紫若
小笹	澤村其答	坂東秀調

紅皿缺皿

年時	慶應元年三月	明治四年八月	明治六年六月	明治八年四月	明治二十七年四月
座名	守田座	大阪中座	守田座	中島座	春木座
名題	魁駒松梅櫻曙微	成田山本札由來	隅田川乘切講談	隅田河乘切講談	月缺皿戀路宵闇
缺皿	澤村田之助	嵐璃寛	澤村訥升	山崎國三郎	中村福助
紅皿	尾上梅幸	市川筆之助	中村いてう	嵐德之丞	中村芝雀
須之助	中村芝翫	大谷友右衛門	市川左團次	中村重藏	中村駒之助
眞吉	市川九藏	嵐橘三郎	中村翫雀	尾上幸藏	市川右田作
渡鳥	中村歌女之丞	中村紫若	澤村千鳥	澤村巴枝	岩井松之助
片もひ	關三十郎	尾上松緑	坂東彦三郎	坂東太郎	中村雀右衛門
法印	關三十郎	市川團二郎	坂東彦三郎	坂東太郎	市川宗三郎
脚平	市川小文次	市川團二郎	中村仲太郎	吉川路鳥	中村勘五郎
左近	中村福助	嵐橘三郎	市川子團次	中村重藏	尾上菊之助

『左近太郎』及び『竹中問答』には再演なし。

大正十五年七月三日印刷
大正十五年七月六日發行

著作權者印

上演轉載の場合は藏版者の許諾を得られ度候

「默阿彌全集第二十二卷」
非賣品

補修　河竹糸女
校訂編纂者　河竹繁俊
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦
東京市小石川區久堅町百八番地
印刷者　大橋光吉
東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　共同印刷株式會社
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂